福岡市埋蔵文化財調査報告書第614集

MURO MI GA OKA

室見が丘

――金武・西入部地区開発に伴う埋蔵文化財の調査――

URAEDANI
浦江谷遺跡群　第１次

URAE
浦江遺跡群　第４次

NISHIYAMA
西山古墳群Ａ群　第１次

KUROTOU
黒塔Ａ遺跡　第１次

KUROTOU
黒塔Ａ遺跡　第２次

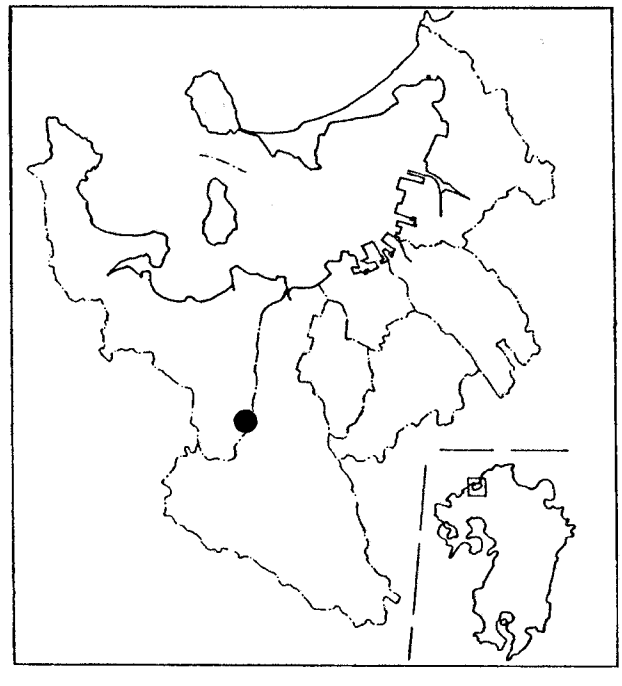
1999

福岡市教育委員会

福 岡 市

MURO MI GA OKA
室 見 が 丘

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第614集



浦江谷遺跡群	第１次	調査番号9543	遺跡略号ＵＴＮ－１
浦江遺跡群	第４次	調査番号9542	遺跡略号ＵＲＥ－４
西山古墳群Ａ群	第１次	調査番号9703	遺跡略号ＮＳＫ－１
黒塔Ａ遺跡	第１次	調査番号9651	遺跡略号ＫＴＡ－１
黒塔Ａ遺跡	第２次	調査番号9666	遺跡略号ＫＴＡ－２

１９９９

福岡市教育委員会

序

現在、九州の中枢都市として発展をつづける福岡都市圏人口は、増加の一途をたどっています。そして、これにともなう開発事業等によって消滅していく遺跡も数多くにのぼっています。

本市では文化財の保護につとめ、これら開発によってやむなく失われる遺跡の発掘調査をおこなっています。

本書もそうしたなかのひとつで、西区金武・早良区西入部地区にまたがっておこなわれた、民間の住宅団地造成事業に伴って、発掘調査を実施した浦江谷遺跡群他の調査報告を収録したものであります。

調査の結果、おもに縄文時代から鎌倉時代にかけての重要な遺跡であることが確認され、殊に弥生時代と中世の墓制を研究するうえで貴重な資料を得ることができました。

調査に際し費用負担等多くのご協力をいただいた西室見開発㈱、また地元をはじめ調査を支えられた多くの方々に深く感謝する次第であります。

平成11年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 町 田 英 俊

例　言

1．本書は株式会社西室見開発が実施した西区大字金武40番地３他・早良区大字西入部 261番地他の住宅団地造成事業にともなう事前調査として、福岡市教育委員会埋蔵文化財課が平成７年11月～９年１月・４月～５月に実施した浦江谷遺跡群・浦江谷古墳Ａ群・Ｂ群・Ｃ群・浦江遺跡群第４次・西山古墳群Ａ群第１次・西山古墳群Ｃ群・黒塔Ａ遺跡第１次・２次調査の調査報告書である。

2．本書で用いる方位は国土地理院座標第２系による座標北で、磁北はこれに６°２′西偏する。

3．調査区内のグリッド名称は５ｍ方眼線の西北交点とした。

4．遺構の呼称は記号化し、竪穴住居址→SC・掘立柱建物→SB・土壙→SK・溝→SD・土壙・木棺墓→SR・甕棺墓→ST・柱穴→SP・その他→SXとし、遺構番号は記号のあとに順次続けた。

5．本書に使用した遺構実測図は後藤直・横山邦継・山崎龍雄・小林義彦・米倉秀紀・加藤良彦・荒牧宏行・菅波正人・池田祐司・長家伸・大塚紀宜・屋山博・星野恵美・辻節子・倉光京子・吉岡員代・平田政子・永井大志・大塚拓史・伊藤ミドリ・山田ヤス子・土生喜代子・黒田和生・福本美智子・野口未幾・今塩屋毅行・川原愛・青木倫子・青木美香による。

6．本書に使用した遺物実測図は加藤・荒牧・菅波・大塚・櫛山範一・撫養久美子・中園聡・鐘ヶ江賢二・吉留秀敏・平川敬治・山崎賀代子・名取さつきによる。

7．製図は加藤・荒牧・菅波・大塚・藤村佳久恵・門嶋知二・山崎賀代子・池田美紀・井上加代子・田中克子による。

8．本書に使用した写真は加藤・荒牧・菅波・大塚による。

9．本書の執筆編集はⅠ・Ⅱ・Ⅲ－１・７・９・11を加藤が、Ⅲ－２・４・６・10を大塚が、Ⅲ－２中世篇・Ⅲ－３・８を菅波が、Ⅲ－５を荒牧が行った。

10．本書にかかわる記録類・遺物は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵管理されるので活用されたい。

本　文　目　次

Ⅰ．はじめに……1
　1．調査に至る経緯……1
　2．調査の組織……1
Ⅱ．遺跡の立地と環境……3
Ⅲ．調査の記録……7
　1．浦江谷遺跡群第1次調査　1区……7
　2．浦江谷遺跡群第1次調査　2区……17
　3．浦江谷遺跡群第1次調査　3区……113
　4．浦江谷遺跡群第1次調査　4区……125
　5．浦江谷遺跡群第1次調査　5区……137
　6．浦江谷遺跡群第1次調査　6区……149
　7．浦江谷遺跡群第1次調査　7区……175
　8．西山A古墳群第1次調査……181
　9．浦江遺跡群第4次調査……191
　10．黒塔A遺跡第1次調査……205
　11．黒塔A遺跡第2次調査……235

挿　図　目　次

Ⅱ．
　Fig. 1　周辺遺跡分布図（1／50000）……4
　Fig. 2　調査区位置図（1／8000）……5
Ⅲ－1
　Fig. 1　1区遺構全体図（1／300）……8
　Fig. 2　SR03・SK14・SD25・SB37（1／40・1／60）……10
　Fig. 3　縄文・弥生の遺物（1／4・1／3・2／3）……11
　Fig. 4　SK01・02・SC24・SD34（1／40・1／60）……12
　Fig. 5　SK05・SR35・SK36（1／40）……13
　Fig. 6　古墳・古代の遺物（1／4）……14
　Fig. 7　SX16・SD30・31（1／40）……15
　Fig. 8　中世の遺物（1／4）……15
Ⅲ－2
　Fig. 1　甕棺墓出土状況実測図1（1／30）……20
　Fig. 2　甕棺墓出土状況実測図2（1／30）……21
　Fig. 3　甕棺墓出土状況実測図3（1／30）……22
　Fig. 4　甕棺墓出土状況実測図4（1／30）……23
　Fig. 5　甕棺墓出土状況実測図5（1／30）……24
　Fig. 6　甕棺墓出土状況実測図6（1／30）……25
　Fig. 7　甕棺墓出土状況実測図7（1／30）……26
　Fig. 8　甕棺墓出土状況実測図8（1／30）……27
　Fig. 9　甕棺墓出土状況実測図9（1／30）……28
　Fig. 10　甕棺墓出土状況実測図10（1／30）……29
　Fig. 11　甕棺墓出土状況実測図11（1／30）……30
　Fig. 12　甕棺墓出土状況実測図12（1／30）……31
　Fig. 13　甕棺墓出土状況実測図13（1／30）……32
　Fig. 14　甕棺墓出土状況実測図14（1／30）……33
　Fig. 15　甕棺墓出土状況実測図15（1／30）……34
　Fig. 16　出土甕棺（大型棺）実測図1（1／12）……38
　Fig. 17　出土甕棺（大型棺）実測図2（1／12）……39
　Fig. 18　出土甕棺（大型棺）実測図3（1／12）……40
　Fig. 19　出土甕棺（大型棺）実測図4（1／12）……41
　Fig. 20　出土甕棺（大型棺）実測図5（1／12）……42

Fig. 21　出土甕棺（大型棺）実測図６（１／12）……43
Fig. 22　出土甕棺（大型棺）実測図７（１／12）……44
Fig. 23　出土甕棺（大型棺）実測図８（１／12）……45
Fig. 24　出土甕棺（小型棺）実測図１（１／６）……46
Fig. 25　出土甕棺（小型棺）実測図２（１／６）……47
Fig. 26　出土甕棺（小型棺）実測図３（１／６）……48
Fig. 27　出土甕棺（小型棺）実測図４（１／６）……49
Fig. 28　出土甕棺（小型棺）実測図５（１／６）……50
Fig. 29　出土甕棺（小型棺）実測図６（１／６）……51
Fig. 30　出土甕棺（小型棺）実測図７（１／６）……52
Fig. 31　出土甕棺（小型棺）実測図８（１／６）……53
Fig. 32　出土甕棺（小型棺）実測図９（１／６）……54
Fig. 33　出土甕棺（小型棺）実測図10（１／６）……55
Fig. 34　ST012出土副葬小壷実測図（１／４）……56
Fig. 35　落とし穴状土壙実測図（１／40）……57
Fig. 36　焼土壙実測図（１／40）……58
Fig. 37　SK196実測図（１／40）……59
Fig. 38　SK202実測図（１／40）……59
Fig. 39　SK057遺構・出土遺物実測図（１／40・１／４）……59
Fig. 40　２区出土遺物１（１／４）……60
Fig. 41　２区出土遺物２（２／３・１／２・１／３）……60
Fig. 42　Ⅱ区上段中世遺構配置図（１／ 600）……67
Fig. 43　Ⅱ区下段中世遺構配置図（１／ 200）……68
Fig. 44　SR24・133・SK135・SR179遺構実測図（１／30）……71
Fig. 45　SR180・182・SR186・SK187遺構実測図（１／30）……72
Fig. 46　SR002・SK197遺構実測図（１／30）……73
Fig. 47　SR024・133・SK135出土遺物実測図（１／３・１／２）……75
Fig. 48　SR179・180・186・187出土遺物実測図（１／３・１／２）……76
Fig. 49　SR002・SK197出土遺物実測図（１／３・１／２）……77
Fig. 50　SR159・160・161・168遺構実測図（１／30）……79
Fig. 51　SR154・158・159出土遺物実測図（１／３・１／２）……80
Fig. 52　SR161・168出土遺物実測図（１／３）……81
Fig. 53　SR026・033・034・035・100・103・105遺構実測図（１／30）……83
Fig. 54　SR106・110・111・121・129遺構実測図（１／30）……84
Fig. 55　SR149・170遺構実測図（１／30）……85
Fig. 56　SR026・033・034・035・100・103出土遺物実測図（１／３・１／２）……87
Fig. 57　SR105・108・111出土遺物実測図（１／３・１／２）……88
Fig. 58　SR121・129・149・170出土遺物実測図（１／３・１／２）……89
Fig. 59　SR150・165・151・162・163遺構実測図（１／30）……91
Fig. 60　SR164・169遺構実測図（１／30）……92
Fig. 61　SR151出土遺物実測図（１／３・１／２）……94
Fig. 62　SR150・165・162・163出土遺物実測図（１／３・１／２）……95
Fig. 63　SR164・169出土遺物実測図（１／３・１／２）……96
Fig. 64　Ⅱ区中世遺構変遷図（１／600）……98
Ⅲ－３
Fig. 1　Ⅲ区遺構配置図（１／200）……114
Fig. 2　SK011・012・013・014・017遺構実測図（１／40）……115
Fig. 3　土壙出土土器実測図（１／３）……115
Fig. 4　土壙出土石器実測図１（１／１・２／３）……116
Fig. 5　土壙出土石器実測図２（１／２・１／３）……117
Fig. 6　SC018・019遺構実測図（１／60）……119
Fig. 7　竪穴住居跡出土遺物実測図（１／３・１／２）……119
Fig. 8　SK002～010遺構実測図及び遺物実測図（１／40・１／３）……120
Fig. 9　SX001遺構実測図（１／30）……121

Ⅲ－4

Fig. 1　4区遺構配置図（1／400）……126
Fig. 2　SO001地山整形図（1／200）……127
Fig. 3　SO001墳丘測量図（1／200）……128
Fig. 4　SO001墳丘土層断面図（1／80）……129
Fig. 5　SO001石室実測図（1／60）……130
Fig. 6　SO001石室伏観図（1／40）……131
Fig. 7　SO001閉塞石実測図（1／40）……131
Fig. 8　SO001出土遺物（1／4）……132
Fig. 9　SR002主体部（1／40）……132
Fig. 10　SR002実測図（1／40）……133
Fig. 11　焼土壙実測図1（1／40）……134
Fig. 12　焼土壙実測図2（1／40）……135
Fig. 13　SR－002出土遺物実測図（1／4・1／2）……135
Fig. 14　4区出土石器実測図（2／3）……135

Ⅲ－5

Fig. 1　C－1号墳現況測量図（1／200）……138
Fig. 2　C－1号墳墳丘測量図（1／200）……138
Fig. 3　C－1号墳地山成形図（1／200）……139
Fig. 4　C－1号墳石室と列石俯瞰・見通し図（1／60）……140
Fig. 5　C－1号墳墳丘土層断面図（1／60）……141
Fig. 6　C－1号墳石室実測図（1／40）……143
Fig. 7　C－1号墳閉塞石実測図（1／60）……145
Fig. 8　C－1号墳出土遺物実測図（1／4）……147
Fig. 9　C－1号墳鉄刀実測図（1／4）……148

Ⅲ－6

Fig. 1　6区遺構配置図（1／400）……150
Fig. 2　SO001・002現況図（1／200）……151
Fig. 3　SO001地山整形図（1／200）……152
Fig. 4　SO001墳丘実測図（1／200）……152
Fig. 5　SO001石室実測図（1／40）……152
Fig. 6　SO001石室外護列石伏観図（1／40）……153
Fig. 7　SO001墳丘土層断面図（1／80）……153
Fig. 8　SO001閉塞石実測図（1／40）……154
Fig. 9　SO001出土遺物実測図（1／4）……154
Fig. 10　SO002地山整形図（1／200）……155
Fig. 11　SO002墳丘実測図（1／200）……155
Fig. 12　SO002墳丘土層断面図（1／80）……156
Fig. 13　SO002石室実測図（1／40）……157
Fig. 14　SO002石室外護列石伏観図（1／40）……158
Fig. 15　SO002閉塞石実測図（1／40）……159
Fig. 16　SO002出土遺物実測図1（1／4）……159
Fig. 17　SO002出土遺物実測図2（1／4）……160
Fig. 18　SB016実測図（1／80）……160
Fig. 19　SK025実測図（1／50）……161
Fig. 20　6区遺構実測図1（1／40）……162
Fig. 21　6区遺構実測図2（1／40）……163
Fig. 22　縄文土器実測図1（1／4）……165
Fig. 23　縄文土器実測図2（1／4）……166
Fig. 24　石器実測図1（2／3）……167
Fig. 25　石器実測図2（2／3）……168
Fig. 26　石器実測図3（2／3）……169
Fig. 27　石器実測図4（2／3・1／3）……170
Fig. 28　石器実測図5（2／3・1／2）……171

Ⅲ－７

Fig. 1　近世の遺物（1／4）……175
Fig. 2　7区遺構全体図（1／300）……176
Fig. 3　SK03・04（1／60）……177
Fig. 4　SX08・SK09・SD10（1／60）……178
Fig. 5　SX05・07（1／60）……179
Fig. 6　縄文時代の遺物（2／3・1／3・1／2）……180

Ⅲ－８

Fig. 1　西山A－1号墳墳丘測量図（1／200）……182
Fig. 2　墳丘土層実測図（1／100）……183
Fig. 3　外護列石及び閉塞石実測図（1／60）……183
Fig. 4　石室実測図（1／40）……185
Fig. 5　出土遺物実測図1（1／3・1／4）……186
Fig. 6　出土遺物実測図2（1／3・1／4）……187

Ⅲ－９

Fig. 1　SK01・SD01（1／40）……192
Fig. 2　遺構出土遺物（1／4）……193
Fig. 3　その他の出土遺物（1／4）……193
Fig. 4　西壁土層（1／80）……194
Fig. 5　SK01・09（1／40）……194
Fig. 6　出土石器（1／2）……195
Fig. 7　出土遺物（1／4・1／8）……196
Fig. 8　SB14・18（1／80）……196
Fig. 9　SK04（1／40）……197
Fig. 10　1号墳石室（1／60）……198
Fig. 11　1号墳出土遺物（1／2・1／4・1／6）……200
Fig. 12　SK10・11・26（1／40）……201
Fig. 13　SB36（1／80）……202
Fig. 14　SR13（1／40）……202
Fig. 15　SB03・SR13他出土遺物（1／2・1／3・1／4）……203
Fig. 16　出土遺物（1／4）……203

Ⅲ－10

Fig. 1　A区出土遺物実測図（1／4）……205
Fig. 2　A区全体図（1／200）……206
Fig. 3　B区全体図（1／200）……207
Fig. 4　甕棺墓出土状況実測図1（1／30）……208
Fig. 5　甕棺墓出土状況実測図2（1／30）……209
Fig. 6　甕棺墓出土状況実測図3（1／30）……210
Fig. 7　甕棺墓出土状況実測図4（1／30）……211
Fig. 8　甕棺墓出土状況実測図5（1／30）……212
Fig. 9　甕棺墓出土状況実測図6（1／30）……213
Fig. 10　甕棺墓出土状況実測図7（1／30）……214
Fig. 11　出土甕棺実測図1（1／12）……216
Fig. 12　出土甕棺実測図2（1／12）……217
Fig. 13　出土甕棺実測図3（1／6）……218
Fig. 14　出土甕棺実測図4（1／6）……219
Fig. 15　出土甕棺実測図5（1／12）……220
Fig. 16　出土甕棺実測図6（1／12・1／4）……221
Fig. 17　出土甕棺実測図7（1／6）……222
Fig. 18　出土甕棺実測図8（1／6）……223
Fig. 19　出土甕棺実測図9（1／12）……224
Fig. 20　出土甕棺実測図10（1／12）……225
Fig. 21　出土甕棺実測図11（1／6）……226

Fig. 22　出土甕棺実測図12（1／6）…… 227
Fig. 23　土壙実測図（1／40）…… 228
Fig. 24　出土遺物実測図（1／4）…… 229
Fig. 25　ST33副葬管玉実測図（1／1）……229
Ⅲ－11
Fig. 1　遺構全体図（1／300）……235
Fig. 2　SK20・ST22（1／30）SK23（1／40）……236
Fig. 3　2区出土遺物（1／4・1／5）……238
Fig. 4　甕棺分布図（1／150）……239
Fig. 5　ST01・02・03・04・05・06（1／30）……240
Fig. 6　ST01・02・03・05甕実測図（1／12）……241
Fig. 7　ST07・08・09・10・12・13・14・15（1／30）……243
Fig. 8　ST06・07・09・14・15甕実測図（1／12）……244
Fig. 9　ST04・08・10・12・甕実測図（1／6）……246
Fig. 10　ST16・32・33・37・38・39（1／30）……248
Fig. 11　ST16・32・38甕実測図（1／12）……249
Fig. 12　ST37・39・40・41甕実測図（1／6）……250
Fig. 13　ST40・41・42・43（1／30）……252
Fig. 14　ST42・43甕実測図（1／12）……253
Fig. 15　甕棺埋土遺物（1／4）……255
Fig. 16　SC17（1／60）……256
Fig. 17　SK18・30・36・SP02（1／30）……257
Fig. 18　SC17・SK18・SK30・FO104　SP02出土遺物（1／4）……258
Fig. 19　SB24・25・26（1／100）……258
Fig. 20　SB24・25・26出土遺物（1／4）……259
Fig. 21　その他の出土遺物（1／4）……259
Fig. 22　出土石器（1／2・2／3）……260
Fig. 23　SR29・他（1／30）……260
Fig. 24　SB27・28（1／ 100）……261
Fig. 25　歴史時代の遺物（1／4）……262

写　真　目　次

Ⅱ
Ph. 1　遺跡遠景（北から）…… 6
Ⅲ－1
Ph. 1　1区全景（東から）…… 7
Ph. 2　SK14（西から）…… 9
Ph. 3　SK14土器出土状況（北から）…… 9
Ph. 4　SD25土層断面（北から）…… 9
Ph. 5　SB37（東から）……11
Ph. 6　SK03（南から）……11
Ph. 7　SK01土層断面（南から）……13
Ph. 8　SK01（西から）……13
Ph. 9　SK02（東から）……13
Ph. 10　SC24（南から）……13
Ph. 11　SC24カマド断面（東から）……14
Ph. 12　SK05（東から）……14
Ph. 13　SR35土器出土状況（東から）……15
Ph. 14　SD30・31（南から）……15
Ⅲ－2
図版1
Ph. 1　2区全景（北東から）……62
Ph. 2　2区東半全景（南から）……62

図版 2
Ph. 3　2区西半全景（南から）……63
Ph. 4　ST005（北から）……63
Ph. 5　ST008（西から）……63
Ph. 6　ST011（西から）……63
Ph. 7　ST012（西から）……63
図版 3
Ph. 8　ST013（西から）……64
Ph. 9　ST019（南から）……64
Ph. 10　ST023（東から）……64
Ph. 11　ST039（南から）……64
Ph. 12　ST050（南から）……64
Ph. 13　ST080（北から）……64
Ph. 14　ST086（南から）……64
Ph. 15　ST140（南から）……64
図版 4
Ph. 16　ST016（西から）……65
Ph. 17　ST018（東から）……65
Ph. 18　ST034（南から）……65
Ph. 19　ST039（北から）……65
Ph. 20　ST042（南から）……65
Ph. 21　ST076（東から）……65
Ph. 22　ST077（東から）……65
Ph. 23　ST079（北から）……65
Ph. 24　ST088（北西から）……65
Ph. 25　ST136（東から）……65
Ph. 26　ST147（南西から）……65
Ph. 27　ST184（西から）……65
Ph. 28　SK186（西から）……65
Ph. 29　SK187•188（西から）……65
Ph. 30　SK196（西から）……65
Ph. 31　SK198（北から）……65
Ph. 32　SK200（南から）……65
Ph. 33　SK201（南から）……65
図版 5
Ph. 34　出土大型棺……66
Ph. 35　出土小型棺……66
Ph. 36　Ⅱ区下段全景（南から）……100
Ph. 37　SR024遺物出土状況（南から）……100
Ph. 38　SR024遺物出土状況（西から）……100
Ph. 39　SK135遺物出土状況（北から）……101
Ph. 40　SR179遺物出土状況（北から）……101
Ph. 41　SR180遺物出土状況（南から）……101
Ph. 42　SR182遺物出土状況（南から）……102
Ph. 43　SR002石積検出状況（南から）……102
Ph. 44　SR002石組検出状況（南から）……102
Ph. 45　SR002石組内土壙検出状況（西から）……103
Ph. 46　SR002完掘（北から）……103
Ph. 47　SK197検出状況（西から）……103
Ph. 48　SK197石組検出状況（北から）……104
Ph. 49　Ⅱ区下段北東隅近世墓（南から）……104
Ph. 50　SR159遺物出土状況（南から）……104
Ph. 51　SR161石組検出状況（南から）……105

Ph. 52　SR026遺物出土状況（東から）……105
Ph. 53　SR033遺物出土状況（北から）……105
Ph. 54　SR034遺物出土状況（東から）……106
Ph. 55　SR035遺物出土状況（西から）……106
Ph. 56　SR100検出状況（北から）……106
Ph. 57　SR100遺物出土状況（南から）……107
Ph. 58　SR103遺物出土状況（北から）……107
Ph. 59　SR105遺物出土状況（西から）……107
Ph. 60　SR106遺物出土状況（南から）……108
Ph. 61　SR108遺物出土状況（北から）……108
Ph. 62　SR110遺物出土状況（西から）……108
Ph. 63　SR111遺物出土状況（西から）……109
Ph. 64　SR121遺物出土状況（西から）……109
Ph. 65　SR149遺物出土状況（南から）……109
Ph. 66　SR170遺物出土状況（南から）……110
Ph. 67　SR150遺物出土状況（南から）……110
Ph. 68　SR151遺物出土状況（南から）……110
Ph. 69　SR151石室検出状況（北から）……111
Ph. 70　SR151湖州鏡出土状況（南から）……111
Ph. 71　SR162遺物出土状況（南から）……111
Ph. 72　SR163遺物出土状況（南から）……112
Ph. 73　SR164遺物出土状況（南から）……112
Ph. 74　SR169遺物出土状況（南から）……112

Ⅲ－3

Ph. 1　SX001出土鉄滓……121
Ph. 2　Ⅲ区全景（北から）……122
Ph. 3　Ⅲ区全景（東から）……122
Ph. 4　SK013（南から）……122
Ph. 5　SK011～014（東から）……122
Ph. 6　SK015・016（北から）……122
Ph. 7　SK017（南から）……122
Ph. 8　SC018（南から）……123
Ph. 9　SC019（南から）……123
Ph. 10　SK002（西から）……123
Ph. 11　SK003（北から）……123
Ph. 12　SK004（南から）……123
Ph. 13　SK005（東から）……123
Ph. 14　SK006（南から）……124
Ph. 15　SK007（西から）……124
Ph. 16　SK009（南から）……124
Ph. 17　SK010（東から）……124
Ph. 18　SX001検出状況（東から）……124
Ph. 19　SX001完掘（東から）……124

Ⅲ－4

Ph. 1　4区全景（南から）……125
Ph. 2　SO001墳丘現況（南から）……136
Ph. 3　SO001墳丘全景（西から）……136
Ph. 4　SO001墳丘全景（南から）……136
Ph. 5　SO001石室全景（南から）……136
Ph. 6　SO001石室奥壁（南から）……136
Ph. 7　SO001石室全景（西から）……136
Ph. 8　SR002列石（南から）……136
Ph. 9　SR002全景（西から）……136

Ⅲ－5

Ph. 1　C－1号墳現況（北から）……137
Ph. 2　C－1号墳墳丘遺存状況（北から）……137
Ph. 3　C－1号墳墳丘遺存状況（東から）……139
Ph. 4　C－1号墳列石検出状況（東から）……140
Ph. 5　C－1号墳Ⅰ区列石検出状況（南から）……142
Ph. 6　C－1号墳Ⅰ区列石検出状況（東から）……142
Ph. 7　C－1号墳Ⅳ区列石検出状況（西から）……142
Ph. 8　C－1号墳石室と列石の腰石露呈（南から）……142
Ph. 9　C－1号墳石室奥壁（東から）……144
Ph. 10　C－1号墳石室左側壁（北から）……144
Ph. 11　C－1号墳前庭部塊石検出状況（東から）……146
Ph. 12　C－1号墳閉塞石検出状況（東から）……146
Ph. 13　C－1号墳出土鉄刀……148

Ⅲ－6

Ph. 1　調査区全景（北東から）……174
Ph. 2　SO001・002（西から）……174
Ph. 3　SO001墳丘（南から）……174
Ph. 4　SO002墳丘（南から）……174
Ph. 5　SK024（北西から）……174
Ph. 6　SK023（北から）……174

Ⅲ－7

Ph. 1　7区全景（南東から）……175
Ph. 2　炭窯（北から）……175
Ph. 3　炭窯1（北から）……175
Ph. 4　炭窯2（北から）……175
Ph. 5　SK09（北から）……177
Ph. 6　SD10（北西から）……177

Ⅲ－8

Ph. 1　墓道出土鉄滓……187
Ph. 2　西山A－1号墳石室調査前（北から）……188
Ph. 3　墳丘調査前（西から）……188
Ph. 4　墳丘遺存状況（南から）……188
Ph. 5　墳丘土層（南から）……189
Ph. 6　閉塞石遺存状況（南から）……189
Ph. 7　閉塞石遺存状況（北から）……189
Ph. 8　石室完掘（北から）……190
Ph. 9　墳丘西側遺物出土状況（北から）……190
Ph. 10　墳丘除去後（南から）……190

Ⅲ－9

Ph. 1　1区全景（北から）……192
Ph. 2　SK02（西から）……192
Ph. 3　SD01上層（東から）……192
Ph. 4　2区全景（西から）……194
Ph. 5　SK01（西から）……194
Ph. 6　SK09（北東から）……195
Ph. 7　SB14（西から）……195
Ph. 8　SB18（南から）……195
Ph. 9　3区全景（南から）……197
Ph. 10　SK04（北から）……197
Ph. 11　1号墳全景（上空から）……199
Ph. 12　石室上面（南から）……199
Ph. 13　石室下面（西から）……199

Ph. 14　周溝遺物出土状況（南から）……199
Ph. 15　SK10検出状況（南から）……201
Ph. 16　SK11土層断面（東から）……201
Ph. 17　SB36（上空から）……201
Ph. 18　SR13（南から）……202
Ph. 19　北トレンチ（東から）……203
Ⅲ－10
Ph. 1　A区全景（南から）……231
Ph. 2　B区全景（南から）……231
Ph. 3　B区甕棺墓群（南から）……231
Ph. 4　ST001（西から）……232
Ph. 5　ST002（北から）……232
Ph. 6　ST005（左）・ST006（右）（北から）……232
Ph. 7　ST010（南から）……232
Ph. 8　ST016（北から）……232
Ph. 9　ST016・017・018（東から）……232
Ph. 10　ST023（下）・024（上）（東から）……232
Ph. 11　ST027（東から）……232
Ph. 12　ST031（西から）……233
Ph. 13　ST035接合部（北から）……233
Ph. 14　ST038（東から）……233
Ph. 15　ST042（東から）……233
Ph. 16　ST043（東から）……233
Ph. 17　ST045（東から）……233
Ph. 18　ST056（北から）……233
Ph. 19　ST033管玉出土状況（西から）……233
Ph. 20　出土甕棺……234
Ⅲ－11
Ph. 1　1区全景（南から）……236
Ph. 2　ST22（西から）……237
Ph. 3　SK20（北から）……237
Ph. 4　SK23（北から）……237
Ph. 5　2区遠景（南から）……239
Ph. 6　甕棺群（東から）……239
Ph. 7　ST01・05（西から）……242
Ph. 8　ST02（南東から）……242
Ph. 9　ST04・06（西から）……245
Ph. 10　ST07（東から）……245
Ph. 11　ST14（南から）……245
Ph. 12　ST32（東から）……247
Ph. 13　ST38（東から）……247
Ph. 14　ST39（東から）……247
Ph. 15　ST40（北から）……251
Ph. 16　ST41・42（西から）……251
Ph. 17　ST42（北西から）……251
Ph. 18　SC17（東から）……256
Ph. 19　SB26（北から）……256
Ph. 20　SB26　SP05断面（東から）……257
Ph. 21　SB25　SP13（東から）……257
Ph. 22　SR29（東から）……261
Ph. 23　ST37上面集石（北から）……261
Ph. 24　建物集中部（東から）……262
Ph. 25　SB27　SP06断面（北から）……262

付　図　目　次

付図.　1　調査区地形図（1／ 2,500）
付図.　2　浦江谷遺跡群1次2区遺構全体図（1／ 300）
付図.　3　浦江谷遺跡群1次2区甕棺分布図（1／ 150）
付図.　4　浦江遺跡群4次調査遺構全体図（1／ 300）

Ⅰ．はじめに

1．調査に至る経緯

今回の調査は西室見開発株式会社が計画・実施した、930区画約46haにわたる住宅団地造成事業にともなって実施された緊急発掘調査である。事業は平成6年計画され本課に当該地の遺跡の有無が照会された（教埋6－2－112)。申請者と協議を重ね平成7年9月21日～10月9日にかけ遺跡確認の現地踏査と水田・山林の伐開終了域で試掘調査を実施した。結果、6箇所で古墳を含む遺跡の埋蔵が確認された。現状での保存が望まれたが計画変更は困難であり、更に協議を重ねた結果、申請者側が調査費全額を負担し、本課が緊急発掘調査を行うこととなった。調査は当初、平成7年11月20日から平成8年9月31日までの予定で11,600㎡を対象として開始され、未伐開地については、再度伐開の完了を待って踏査・試掘を実施し、最終的な調査対象範囲を確定していく事と協議された。

調査は進入道路部の浦江地区から開始したが、調査開始早々12月1日、浦江谷主丘陵先端部の調整池築造予定地での試掘で甕棺墓群と中世墓群の埋蔵が確認された。梅雨に入るまでに洪水対策として完工しなければならない地点であるため、浦江地区の調査を中断し、調整池部分（浦江谷2区）を最優先で実施する事となり、当時の文化財部長までも実測要員に狩り出す程の調査となった。他にも伐開が進行するとともに、踏査・試掘を重ね、事業者側の設計変更等も重なり、最終的には5箇所追加・対象面積22,000㎡とほぼ当初予定を倍増し、途中中断をはさんで平成9年5月9日をもって全調査区の調査を終了した。各調査地点の実施内容は別表の通りである。

2．調査の組織

調査委託：西室見開発株式会社

調査主体：福岡市教育委員会　教育長　町田英俊

調査総括：埋蔵文化財課長　荒巻輝勝　埋蔵文化財第1係長　横山邦継（当時）

調査庶務：埋蔵文化財課第1係　西田結香（当時）

調査担当：埋蔵文化財課第1係　加藤良彦（当時）　荒牧宏行（当時）　菅波正人（当時）　大塚紀宜

調査協力：加島定次郎　栗木和子　辻節子　徳永洋二郎　鳥居原良治　原美晴　船越恒夫　掘本歳四郎　松本みつ子　三谷朗子　横尾泰広　吉川順岳　井上紀世子　井上ムツ子　井上ヒデ子　因ヨシ子　倉光アヤ子　倉光京子　小柳和子　杉村文子　松本文子　吉岡アヤ子　吉岡員代　和田裕見子　林チセ子　林末孝　平野義光　阿比留治　坂本隆二　中山竹雄　吉岡清巳　伊藤美知子　石橋マサ子　井上八郎　川岡涼子　菊地栄子　橘良平　平野義雄　青木秀雄　伊藤ミドリ　牛尾秋子　牛尾二三子　鬼塚友子　金子ヨシ子　惣慶トミ子　岳美保子　鍋山千鶴子　平野ミサヲ　山西人美　結城信子　結城千賀子　鍋山巌　網田美代野　井上トミコ　川口シゲノ　清末シズエ　田中栄　西嶋ムラ子　西嶋マツ子　西嶋洋子　原ハナエ　平田照子　平田政子　西畑盛行　森山早苗　山下アヤ子　結城千代子　脇坂ミサヲ　脇坂信重　脇坂チカ　平田千鶴子　永井大志　大塚拓史　永江かず子　平田信吉　吉岡竹子　橘知子　太田孝房　山田ヤス子　土生喜代子　脇坂レイ子　黒田和生　福本美智子　野口未幾（早稲田大学学生）　井上隆明　井上祐一郎　今塩屋毅行　宮崎智祥　村下邦昭　池田美紀（福岡大学学生）　川原愛（九州大学学生）

青木倫子　青木美香（別府大学学生）

整理協力：山田順子　柳田扶美代　田中安恵　櫛山範一　撫養久美子　中園聡　鐘ヶ江賢二　藤村佳久恵　門嶋知二　平川敬治　山崎賀代子　能美須賀子　木村厚子　国武真理子　窪田慧　芦馬恵美子　黨早苗　伊賀弘美　野上奈津子　安田直子　井上美穂　永井和子　小御門千晴　高橋健治　品川伊津子　安川三千代

Ph. 1　調査区遠景（北から）

Ⅱ．　調査区の立地と環境

本調査区は福岡市の都心部より西へ９km・博多湾岸より南へ９kmの地点、室見川が貫流する早良平野の奥部に位置し、平野の西を画する、脊振山系から飯盛山・叶岳・長垂山へとつらなる山塊から東へいくつも延びる標高60～65ｍ程の小支丘及び裾の中位段丘上に展開している。行政的には福岡市西区大字金武・早良区大字西入部に所在する。

周辺の歴史環境を概観してみると、旧石器・縄文早期の遺跡は山麓部と洪積台地に点在しており、羽根戸原・吉武・有田・広石・笠間谷遺跡でナイフ形石器・細石器が、松木田・東入部・栗尾Ｂ・羽根戸・広石・笠間谷遺跡で条痕文・押型文・撚糸文土器が検出されている。前期は沖積地の微高地上まで進出し、四箇・湯納・田村遺跡で轟Ｂ式・曽畑式土器・竪穴・ドングリピット等が検出されている。中・後期では吉武遺跡群でドングリピット50数基・有田遺跡で貯蔵穴様ピット60数基・四箇遺跡群で埋甕・竪穴・竪穴住居址・特殊泥炭層（堅果類果皮の多量堆積－ヒョウタン・リョクトウ出土）が出土、東入部でも住居址と思われる落ち込みから良好な土器のセットが出土している。晩期では重留・東入部・田村遺跡などで住居址・貯蔵穴・埋甕など、有田七田前・十郎川・拾六町ツイジ・四箇・田村などで大陸系磨製石器・木製農具未成品・矢板列等が検出されている。

弥生時代前期前半は前代と重なって海岸部の中・低位段丘上に多く分布している。有田遺跡には300×200ｍの大規模な環濠が出現し、藤崎遺跡では土壙墓群が見られる。前期後半からは内陸平野部にも集落が展開し、吉武・東入部遺跡では木棺・甕棺墓群とともに大型掘立柱建物が検出されている。中期はさらに面的な広がりを見せ、四箇・長峰・岩本遺跡などの内陸奥部まで広がり、岩本遺跡では水田も検出されている。吉武・東入部遺跡群は拠点として更に発展し、多数の副葬品を有する墳丘墓を出現させている。吉武遺跡群以南の平野奥部の都地・浦江・当該地の浦江谷・黒塔甕棺・黒塔Ａ・長峰遺跡などでは高位の段丘先端部に甕棺墓群を形成しており、これら扇状微高地上の遺跡群と異なった遺跡のあり方を示している。

弥生終末から古墳時代前期にかけては野方中原・野方塚原・野方勧進原・野方柳原・飯盛谷・宮ノ前Ｃ地点・重留・五島山・藤崎・西新町・有田遺跡などで石棺墓・方形周溝墓・墳丘墓・住居などが検出され、後漢鏡・三角縁鏡などが出土している。また最近の羽根戸南古墳群の調査で４世紀中頃～後半の約30ｍ（Ｇ－２号）・約20ｍ（Ｇ－３号）の２基の小さな前方後円墳が確認され、内行花文鏡片・鉄剣などが検出されている。中期では吉武で円墳20数基・帆立貝式墳（樋渡古墳）・方墳（樋渡２号墳）・掘立柱建物・住居址多数が検出され、重留では75ｍ程の前方後円墳（灰塚－重留１号墳）・方墳（重留２号墳）がある。後期になると山麓部の丘陵上に古墳群は移り、６世紀前半～中頃にかけ羽根戸・羽根戸南古墳群で群集墳の形成が始まり、このうち羽根戸南古墳群では盟主としての全長15ｍ程の極めて小さな前方後円墳（Ｆ－２号）が確認された。６世紀後半以降金武古墳群（147基）・羽根戸南古墳群（20基）・羽根戸古墳群（146基）・野方古墳群（18基）・広石古墳群（19基）など金武～長垂山麓にかけ、にわかに増大する。鉄滓供献が見受けられるのも共通する。本調査区の西山古墳群も該期に相当するが、羽根戸・金武古墳群のように密集せず、丘陵毎に１～２基ずつ散慢に分布する。

７世紀～律令時代にかけては城ノ原廃寺・有田・吉武・広石・石丸古川・下山門敷町遺跡で掘立柱建物群が検出され、殊に有田遺跡群はその規模の大きさから「那津官家」に比定され、奈良時代には早良郡衙がおかれ、189次調査区では郡庁の正殿が確認された。室見川西岸では下山門・吉武・牟多田・都地・内野遺跡などで製鉄遺跡が確認され、本調査区もこの一連の中に位置している。また、都

1．事業域　2．羽根戸遺跡　3．吉武遺跡群　4．有田遺跡
5．四箇遺跡群　6．湯納遺跡　7．田村遺跡群　8．拾六町ツイジ遺跡
9．藤崎遺跡群　10．野方中原遺跡　11．野方塚原遺跡　12．野方勧進原遺跡
13．野方柳原遺跡　14．飯盛谷遺跡　15．宮の前C地点　16．重留遺跡群
17．拝(灰)塚古墳　18．五島山古墳　19．西新町遺跡　20．羽根戸南古墳群
21．羽根戸古墳群　22．金武古墳群　23．野方古墳群　24．広石古墳群
25．城の原廃寺　26．石丸・古川遺跡　27．下山門敷町遺跡　28．牟多田遺跡
29．都地遺跡　30．浦江遺跡群　31．清末遺跡群　32．東入部遺跡群
33．長峰遺跡　34．松木田遺跡

Fig. 1　周辺遺跡分布図（1／50,000）

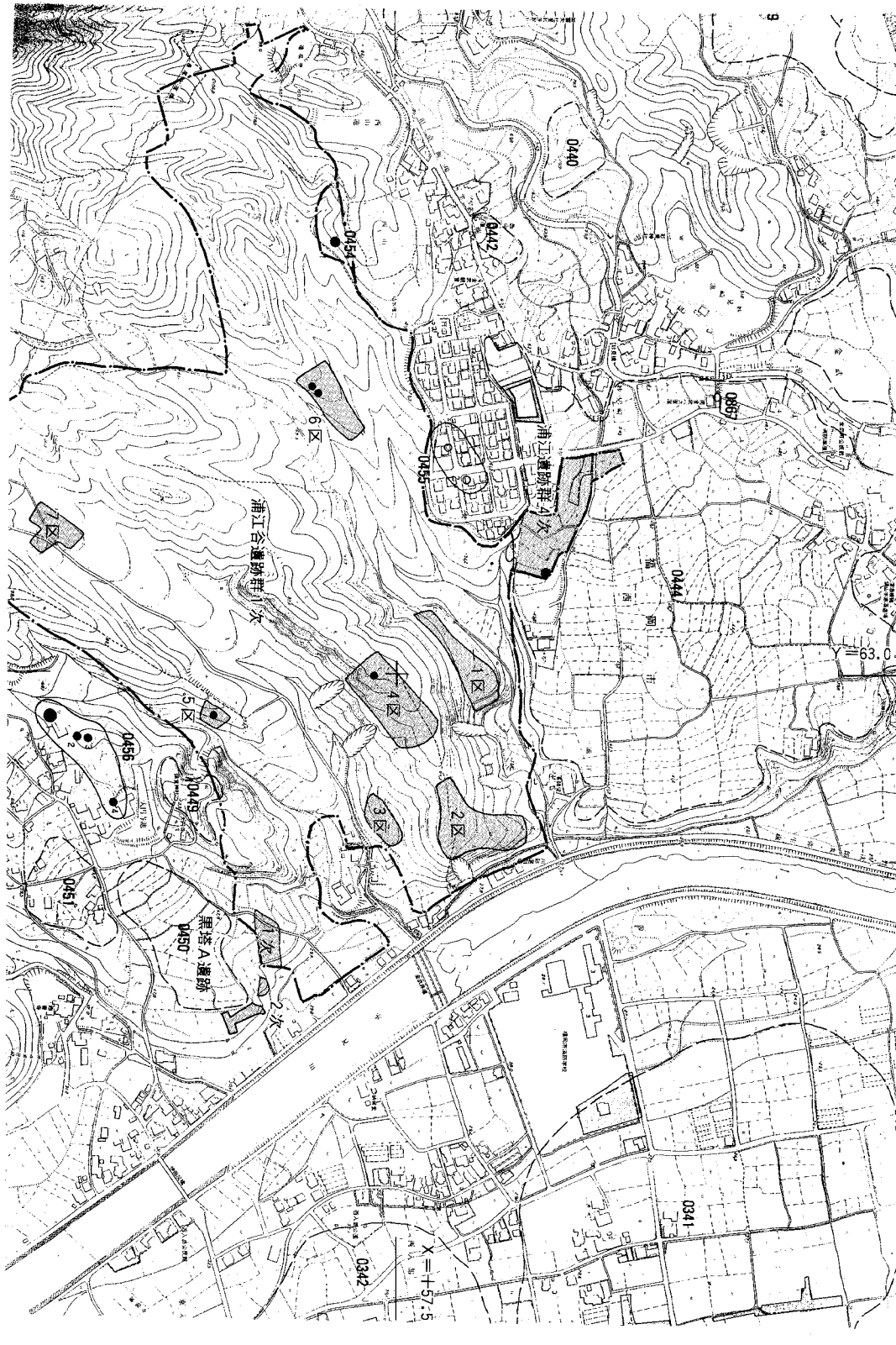


Fig. 2　調査区位置図（1／8,000）

地遺跡では奈良時代の瓦の他銅銙・「大殿」と書かれた墨書土器、対岸の東入部遺跡では円面硯に越卅窯系青磁・刑窯系白磁・長沙窯系黄釉磁・唐三彩・石帯、清末遺跡でも石帯が出土しており、周辺一帯は官衙的な色彩が強い。

今回、市域内で始めて中世の大規模な集団墓地が検出された。前面に広がる浦江遺跡群の全容が明確でないため、どの集落に関連する墓地であるか明確にできないが、対岸の清末遺跡では12世紀代の大型建物群と14世紀代の濠をめぐらした居館が検出されている。

Tab. 1　各調査一覧

浦江谷遺跡群第１次					
調査番号	９５４３	事前審査番号	６－２－１１２	遺跡略号	ＵＴＮ－１
調査地地籍	西区大字金武字浦江谷他			分布地図番号	金武（９４）
開発面積	４６２，０００㎡			調査実施面積	１４，０８０㎡
調査期間	1区　95. 11. 20～12. 20・96. 05. 01～06. 14 2区　95. 12. 18～96. 01. 26 3区　96. 03 4区　96. 04～07. 02 5区　96. 07. 02～08. 10 6区　96. 06. 11～10. 03 7区　96. 09. 03～96. 10. 05			調査担当者	1区　加藤良彦 2区　加藤・菅波正人・大塚紀宜 3区　菅波 4区　大塚 5区　荒牧宏行 6区　大塚 7区　加藤
浦江遺跡群第４次					
調査番号	９５４２	事前審査番号	６－２－１１２	遺跡略号	ＵＲＥ－４
調査地地籍	西区大字金武字浦江他			分布地図番号	金武（９４）０４４４
開発面積	４６２，０００㎡			調査実施面積	３，５３０㎡
調査期間	1区　95. 11. 20～12. 18 2区　96. 10. 14～11. 14 3区　95. 12. 11～12. 21・96. 06. 18～09. 0 4区　95. 11. 28～12. 08			調査担当者	1区　大塚 2区　加藤 3区　大塚・加藤 4区大塚
西山古墳群Ａ群第１次					
調査番号	９７０３	事前審査番号	６－２－１１２	遺跡略号	ＮＳＫ－１
調査地地籍	西区大字金武浦江谷４０－３			分布地図番号	金武（９４）０４５４
開発面積	４６２，０００㎡			調査実施面積	４００㎡
調査期間	97. 04. 10～05. 09			調査担当者	菅波
黒塔Ａ遺跡第１次					
調査番号	９６５１	事前審査番号	６－２－１１２	遺跡略号	ＫＴＡ－１
調査地地籍	早良区大字西入部			分布地図番号	金武（９４）０４５０
開発面積	４６１２，０００㎡			調査実施面積	１，３５０㎡
調査期間	96. 09. 11～11. 05			調査担当者	米倉秀紀・大塚・星野恵美
黒塔Ａ遺跡第２次					
調査番号	９６６６	事前審査番号	６－２－１１２	遺跡略号	ＫＴＡ－２
調査地地籍	早良区大字西入部			分布地図番号	金武（９４）０４５０
開発面積	４６２，０００㎡			調査実施面積	８００㎡
調査期間	96. 11. 18～97. 01. 17			調査担当者	米倉・加藤

Ⅲ.　調査の記録

1．浦江谷遺跡群第１次調査１区

1）調査の概要

本調査区は東西方向に延びる主丘陵の北側に接する中位段丘上に位置し、小河川の開折によって同一面の浦江遺跡群と分断される。標高は44～47ｍである。東側の２区中世墓群とは小谷をはさんで同一段丘上に立地している。幅35ｍ長さ75ｍ程の東西に細長いテラス状を呈しており、旧状は水田である。開墾によって西から東へ６面の棚田が開かれており、遺構面の削平は著しい。検出面は耕土直下から、一部40～50㎝程の灰褐色包含層をはさんで、明黄褐色～淡緑灰色の30㎝前後までの亜角礫を多く含む粘質土である。

検出した遺構は縄文時代の土壙１基・自然流路２条・晩期の土壙１基、弥生時代の溝状遺構１基・掘立柱建物１棟・土壙墓１基、古墳時代の竪穴住居址２軒、奈良時代の土壙１基、古代の土壙３基・製鉄炉１基・溝２条、平安時代の土壙墓１基、平安末の土壙４基・溝８条、室町時代の溝１条・柱穴多数で、幅の広い調査区中央部に遺構が集中する。

中心となるのは11世紀後半～12世紀代で、全体の５割以上を占めている。柱穴の大部分もこの時期に属しており、検斗が不充分で抽出にまで到らなかったが、かなりの数の掘立柱建物が重複していると思われる。同一平面にある２区の中世墓群の開始時期とも重なっており、関連が考えられる。

他に製鉄関連の遺構・遺物が目立つ。SK02は遺物の検出はなかったが、壁面に炭の吸着と酸化焼成が認められ、製鉄炉の可能性を持つ。周辺の浦江４次３区・浦江谷１次６区でも奈良時代の同様の遺構が検出され、６区では炭窯をともなっている。付近の奈良時代の土壙SK05からは吹子の羽口が検出され、その他鉄滓も多く検出されており、同期の可能性が高い。

Ph.　1　　１区全景（北から）

Fig. 1　1区遺構全体図（1／300）

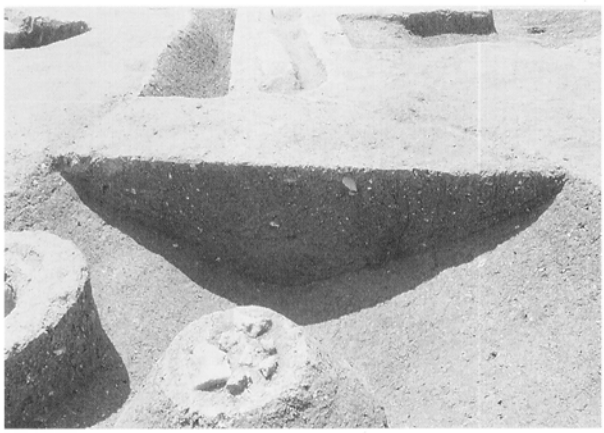
2）縄文時代の調査

縄文時代の遺構は、調査区の中央部を南北方向に、調査区を横切る様に、SK14～SK22まで４基の溝状遺構・土壙が直線状に連なって分布している。それぞれから少量の縄文土器片、黒耀石片が検出されている。

SK14（Fig. 2 Ph. 1・2） 調査区のほぼ中央北側、CF34グリッドに位置する不整形の土壙で南側が突出し、長さ236・幅170・深さ60㎝を測る。断面は中央部が稜をなす擂鉢状の二重土壙で、覆土は暗褐色のシルト質土である。南側突出部の中央部に、床面にほぼ接して、幅30㎝程の範囲に焼土粒が南西側から流入し、これに接した位置から上方10㎝程の範囲に粗製深鉢の破片が10片弱散布している。

Ph. 2 SK14（西から）

Ph. 3 SK14 土器出土状況（北から）



Ph. 4 SD25 土層断面（北から）

出土遺物（Fig. 3） 全て粗製深鉢の小片で、１は内外にヨコ方向のケズリ後ケンマ様のゆるいナデを施し、外面には右下方から斜上方に２～３本単位の貝殻条線を施す。胎土は有機質の粒子を多く含んだ様で多数の気泡を持つ。一部に条線状の圧痕が見られ、木炭粒を混入した可能性が考えられる。色調は明褐～赤褐色を呈し器壁は薄い。２は下位の小片で同様の調整を施し、内面に炭化物が付着する。３は内外にケズリ様のヨコ条痕調整を施しゆるくナデる。外面には同様に４本単位の貝殻条線を施す。胎土も気泡が多く明黄褐色を呈する。後期後半～晩期前半と思われる。７はSD27出土の扁平打製石斧で玄武岩製。長さ12.4㎝を測る。横長剥片に裏面から刃部調整のみを行ったもので、使用のため先端部は磨滅している。

3）弥生時代の調査

弥生時代の遺構は少なく、明確な遺物を伴ったものはSD25のみである。

SD25（Fig. 2 Ph. 4） 中央北端部近くのCH34に位置し、長さ380・幅170・深さ46㎝を測る。幅40㎝深さ20㎝程の溝の先端が溜桝状に広がる。断面は船底形で、中央の１層下面部分に支脚３個体分が破砕された状態で検出された。

出土遺物（Fig. 3） ４～５は支脚で３点ともほぼ完形に復原される。外面調整は指頭の押圧後ハケ・ヨコナデ調整を施す。４は底径９㎝・器高15.6㎝を測る。５・６は口唇内面が段になるもので、５は底径10.5・器高16.2㎝を測る。６は底径11.2・器高15.3㎝で大きくひずむ。胎土は金雲母と茶褐色粒・４㎜前後の石英粒をやや

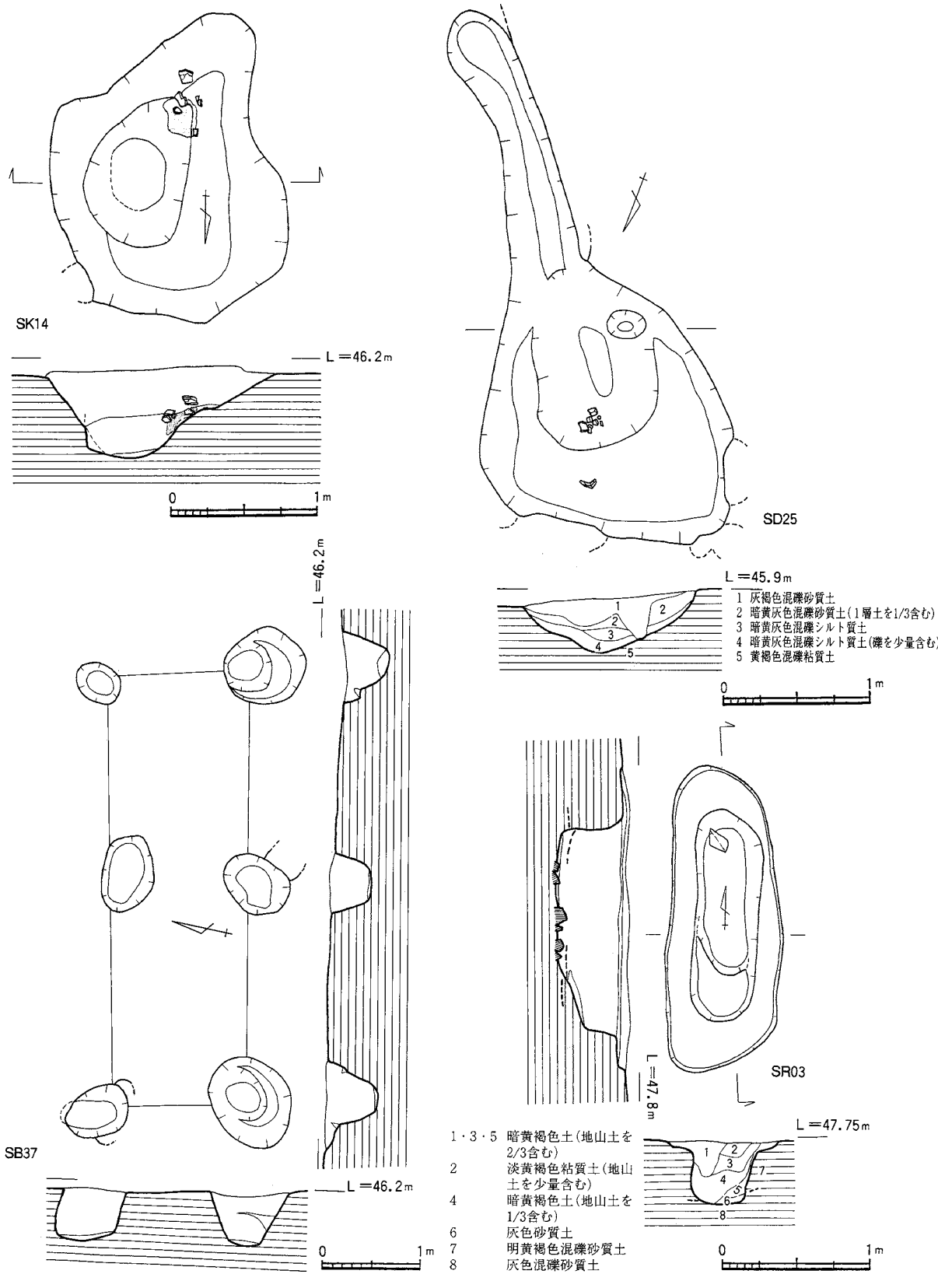


Fig. 2 SR03、SK14、SD25、SB37 (1／40、1／60)

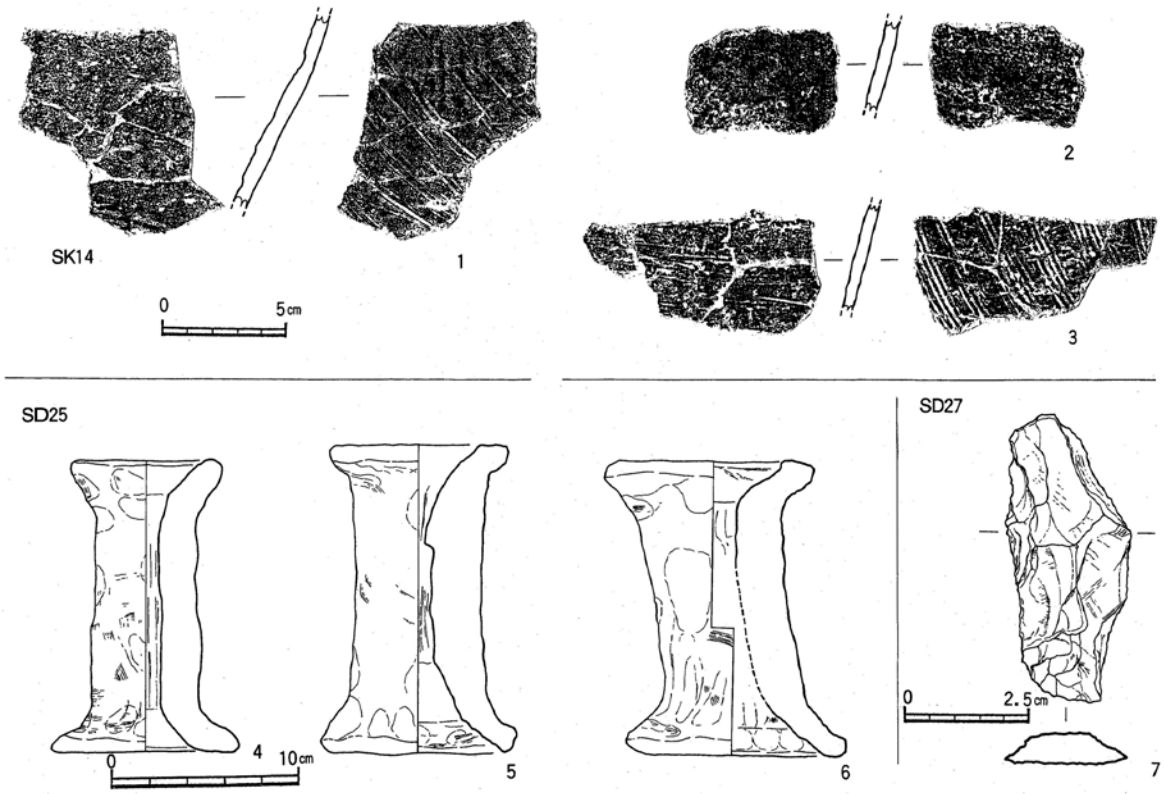


Fig. 3　縄文・弥生時代の遺物（1／4、1／3、2／3）

Ph. 5　SB37（東から）

Ph. 6　SR03（南から）

多く含む。

SB37（Fig. 2　Ph. 5）　中央北寄りのCG35に位置し、長軸をほぼ東西のN－80°－Eにとる。1×2間の建物で梁間0.95m・桁行2.90mを測り、梁間が狭い。掘方は径60cm程の円形で柱痕跡は確認できない。穴底は地山の傾斜と平行する。

SR03（Fig. 2　Ph. 6）　調査区西部のCC41に位置し、主軸を南北方向のN－178°－Eにとる二重墓壙の土壙墓で、形態から後期と思われる。掘方は長さ210cm幅78cm墓壙は長さ145cm幅45cm深さ38cmで南が浅く頭位と思われる。

4）古墳時代の調査

古墳時代で明確な時期を示す遺構はSC24のみである。

SC24（Fig. 4　Ph. 10）　SC24は調査区南西部のCJ37に位置し、長軸を等高線と平行するN－

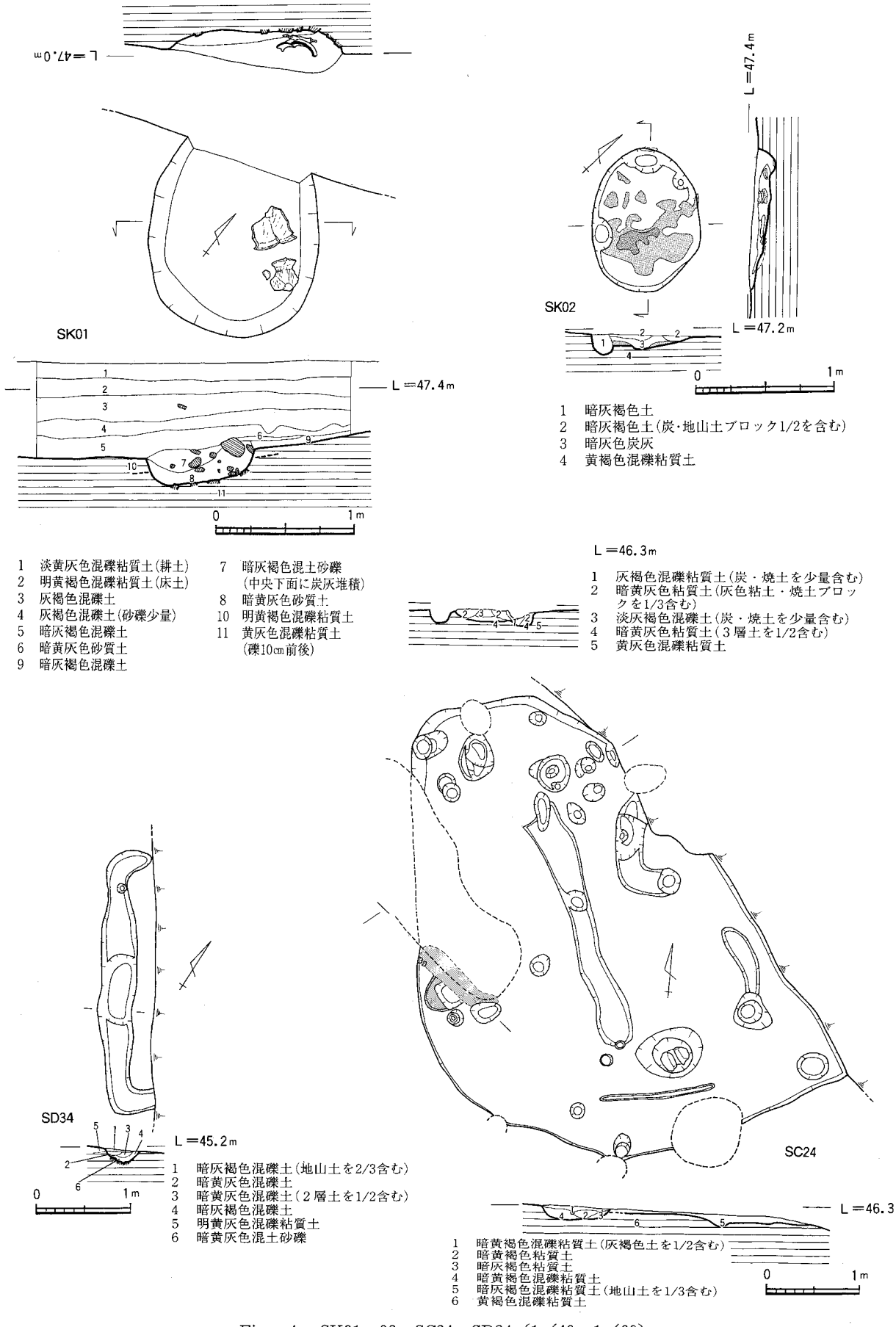


Fig. 4 SK01、02、SC24、SD34 (1／40、1／60)

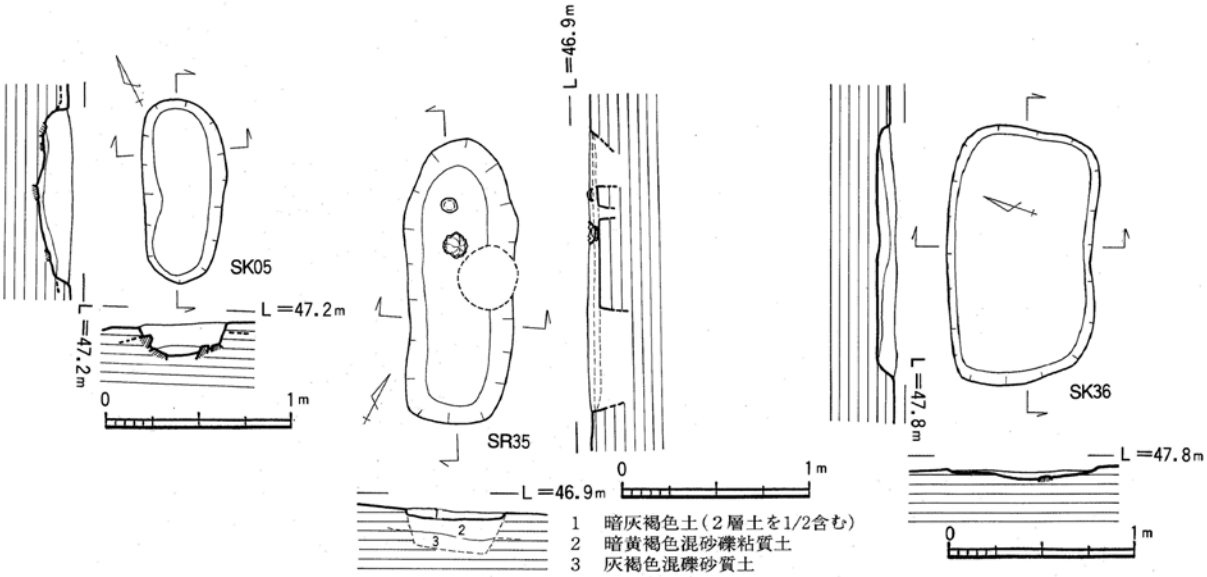
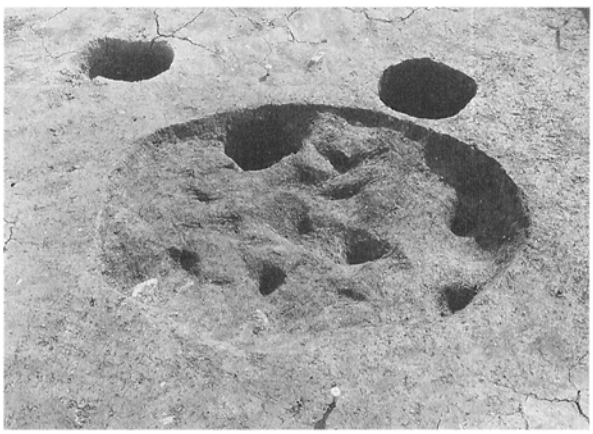


Fig. 5 SK05、SR35、SK36 (1／40)

Ph. 7 SK01 土層断面（南から）

Ph. 8 SK01（西から）



Ph. 9 SK02（東から）

Ph. 10 SC24（南から）

10°－Wにとる。長軸で520・短軸で東が削られるが、北辺200・南辺370㎝の不整形気味の台形プランを呈する。西部を奈良から平安初期の須恵器を伴うSX15に切られる。深さは5～10㎝で中央の溝から西が一段高く、著しい削平を受けている。覆土は暗灰褐色の混礫粘質土で、地山土のブロックを多く含み、貼床の可能性が考えられる。西壁中央付近に竈を設け、暗黄灰色粘土でつくられている。出

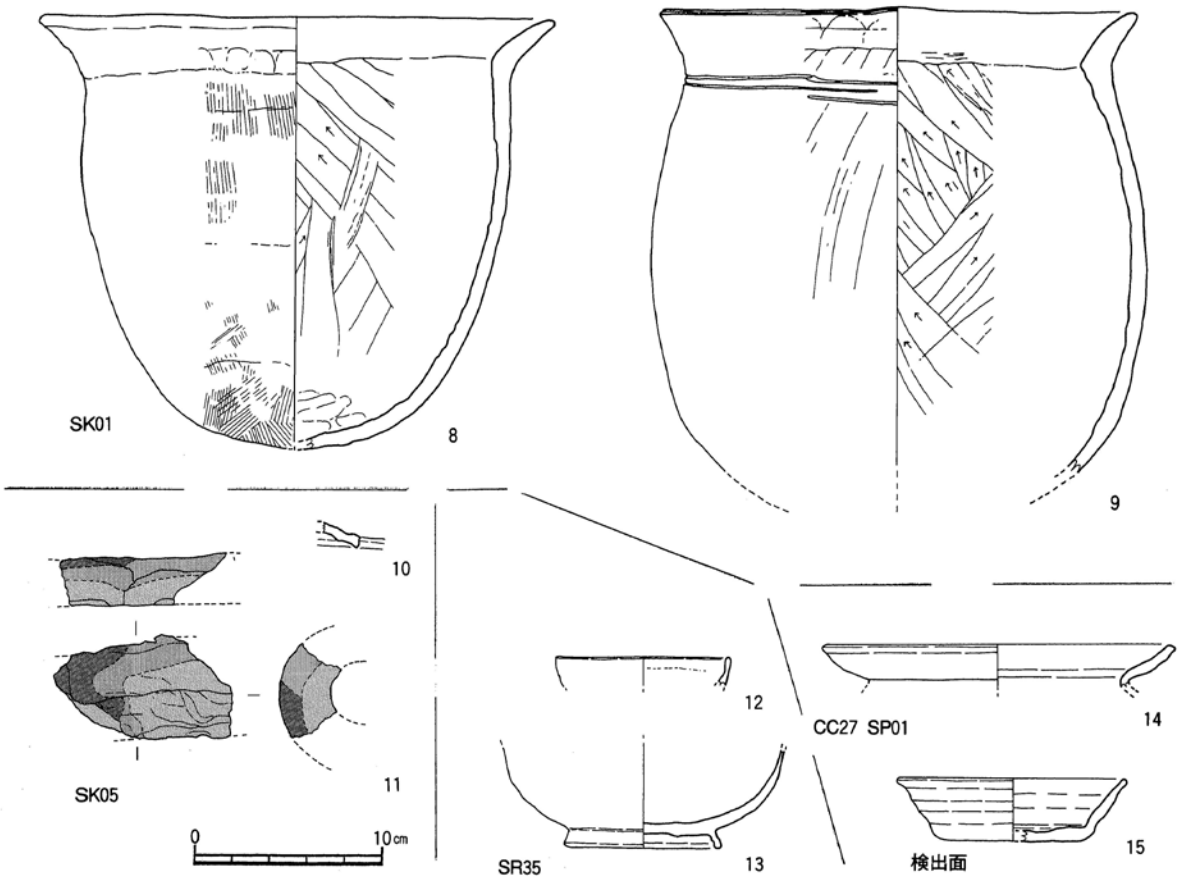
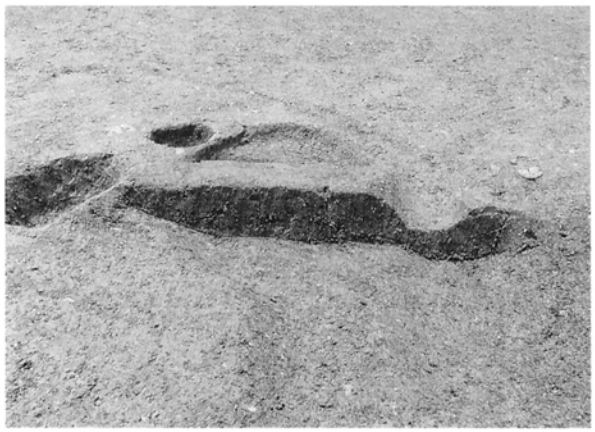


Fig. 6　古墳・古代の遺物（1／4）



Ph. 11　SC24 カマド断面（東から）

Ph. 12　SK05（東から）

土遺物は木目直交の平行叩を施す土師器甕と、坩の小片のみで、6世紀末から7世紀前半頃と思われる。

SD34（Fig. 2）　調査区東部に位置し、SC24の10m程東で長軸を同方向にとる。長軸233、幅38cmで両端が東方に直角に折れる。竪穴住居の壁溝と思われるが、ほとんどを削平される。出土遺物は土師器坏小片のみで、規模・方向からSC24と近い時期と思われる。

5）古代の調査

古代の遺構は調査区中央の東西方向の線上に分布し、奈良時代遺構も同様の傾向を示す。

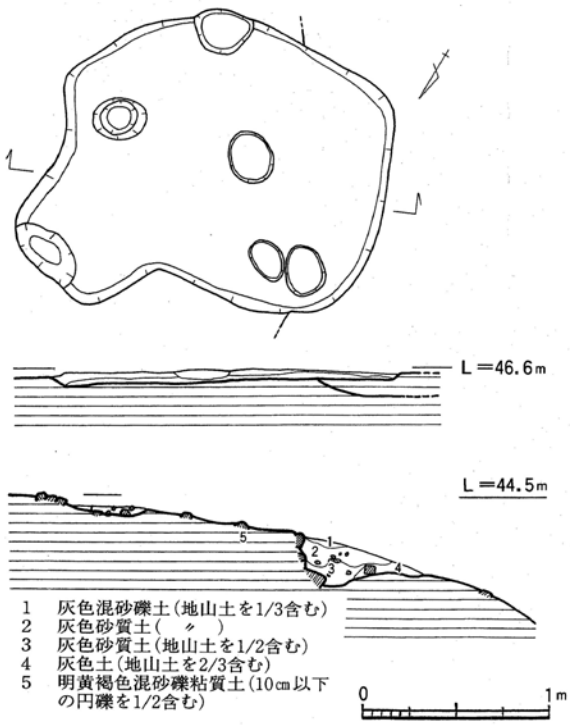


Fig. 7　SX16、SD30、31（1／40）

Ph. 14　SD30、31（南から）

Ph. 13　SR35 土器出土状況（東から）

SK01（Fig.　4　Ph.　7・8）　西部のCA39グリッドに位置し、現況で長軸125・幅120cmを測る楕円形プランで、上面を覆う包含層からは10世紀代の土師器を検出している。床面近くの8層中より土師器甕2点を検出した。

出土遺物（Fig.　6）　8はほぼ垂直にのびる胴に外反する口縁がつづく土師器甕で、外面はタテハケ後ヨコナデ。内面は頸部下をナナメ上にケズリ。9は頸部のしまる古相の甕で外面はタテ板ナデ後ヨコナデ。頸部に沈線を2条施す。内面は頸部下をナナメ上方ケズリ後ゆるくナデる。

SK02（Fig.　4、Ph.　2）　SK02は西端近くのBZ40グリッドに位置する長径105、短径77cmの楕円形の土壙で、床上に5cm程の炭灰層がある。床面は1cm程が還元焼成・外側3cm程が酸化焼成される。

SK05（Fig.　5）　CC38グリッドに位置する

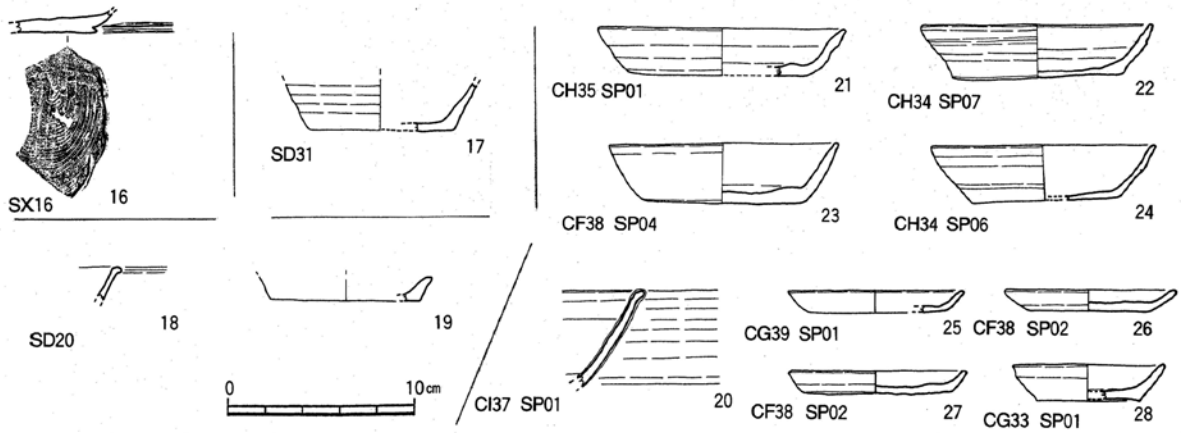


Fig.　8　中世の遺物（1／4）

100×47cmの長方形土壙で、内部より須恵器坏蓋（Fig. 6）10と吹子羽口11を検出した。10は口唇を凹線気味に、かえりを丸くつくる。11は先端部が一部熔解しスラグが付着する。8世紀後半。

SR35（Fig. 5 Ph. 13） CF38に位置する土壙墓で、主軸をN－156°－Eにとる。長軸154、幅55cm・北辺が円形で、著しい削平を受ける。床面の大部分を掘り過ぎているが、北側中央床上に土師器椀（Fig. 6）12と黒色土器B類椀を副葬する。12は高台径9.2、13は8.3cmを測る。11世紀前後。

6）中世の調査

中世の遺構は調査区中央から東部に12世紀代を中心に不整形土壙6基・等高線と平行する溝8条を検出した。柱穴の大半も該期に属する。溝は東部に集中し、屋敷地の東を区画している。

SX16（Fig. 7） CH37に位置し、平安期の溝SD13を切る。不整形の土壙で186×173×7cmを測る。出土遺物は土師器坏（Fig. 8）16で、外底は右回転の糸切り。

SD30・31（Fig. 7 Ph. 14） 東端部に位置し、2m程の間隔をおいて等高線と平行して弧状に、二重に掘削している。土師器坏（Fig. 8）17が出土し、底径8cmを測る。外底は右回転の糸切りで板圧痕が残る。13世紀前半。

18・19はSD20出土。18は白磁碗Ⅵ類の小片。19は土師器坏で底径8cm。12世紀後半。

20～28は柱穴内出土で、20はⅥ類白磁碗、21～24は土師器坏で、21は外底回転ヘラ切り、他は糸切りである。25～28は土師器皿で、全て回転糸切り。26・27は板圧痕が残る。11世紀末～13世紀前半を中心に15世紀代までの時期を示している。

7）小結

① 縄文時代晩期前半の土壙と自然流路を検出した。3区・7区でも検出されており、遺跡内に散慢に分布しているが、住居址の検出はない。

② 弥生時代は後半前後の溝状遺構1基・後期の土壙墓1基・1×2間の掘立柱建物を検出した。今回の調査では、生活遺構は黒塔A2次調査区に集中し、適地と思われる浦江4次調査でも少ない。

③ 古墳時代後期の竪穴住居2軒を検出した。

④ 奈良時代を中心に土壙4基・製鉄炉1基・溝2条・11世紀前後の土壙墓1基を検出した。

⑤ 中世は12～13世紀が中心をなし、中央部に屋敷を、東を溝で区画している。2区の中世墓の時期とも一致している。

Tab. 1－1区 調査区一覧表

遺構No.	地点	種別	時期	規模(cm)	主な出土遺物	遺構No.	地点	種別	時期	規模(cm)	主な出土遺物
SK01	CA-39	土壙	奈良	125＋α×120×30	土師器甕	SD20	CH-34	自然流路	15C	650×80×14	白磁碗・土師器(坏・皿・甕・鍋)
SK02	BZ-40	製鉄炉	古代	105×77×12	土師器甕	SD21	CH-33	自然流路	11～12C	290＋α×184×13	土師器坏・Ⅲ
SR03	CC-41	土壙墓	弥生後期	210×78×40		SK22	CI-38	土壙	縄文後晩期	100×80×22	Ob核
SD04	CB-39	溝	古代	327＋α×133×39	土師器坏・甕	SK23	CG-40	土壙		120×120×9	
SK05	CC-38	土壙	奈良	100×47×14	土師器坏蓋・吹子羽口	SC24	CJ-37	竪穴住居	5～6C	520×370×6	土師器甘・甕
SX06	CB-38	不整形土壙	古代	280×35＋α×19	土師器坏・甕	SD25	CH-34	溝伏土壙	弥生中期末～後初	380×170×46	支脚
SD07	CC-37	自然流路	古代	175＋α×125×8	土師器甕	SD26	CH-33～CH-34	自然流路	11～12C前半	290＋α×70×30	白磁碗・土師器皿
SX08	CE-38	不整形土壙	11～12C前半	190×135×45	白磁碗	SD27	CI-33	自然流路	12C後半	430＋α×180×2×40	同安窯系青磁碗
SK09	CG-34	土壙	古代	280×100×31	土師器坏	SD28	CJ-33～CK-33	溝	古代	450＋α×65×19	土師器甕
SX10	CG-36	不整形土壙	13C	187×155×8	土師器坏	SD29	CK-33	溝	11～12C	512＋α×160×14	土師器坏・甕
SX11	CE-34	不整形土壙	古代	257×102×42	鉄滓	SD30	CL-35～CM36	溝	11～12C	960＋α×40×5	土師器坏
SX12	CH-37	不整形土壙	11～12C	275＋α×340×14	土師器坏	SD31	CL-35～CM-36	溝	11～12C	860＋α×70×24	土師器坏
SD13	CG-37～CH-38	溝	10C	570＋α×110×9	土師器坏	SX32	CM-36	溝	11～12C		土師器坏
SK14	CF-34	土壙	縄文晩期前半	236×170×60	粗製深鉢	SX33	CL-35	不整形土壙	11～12C		土師器坏・Ⅲ
SX15	CI-37	不整形土壙	古代	295×95×18	須恵器(坏)・土師器甕	SD34	CK-36	溝(竪穴住居)	古墳後期	233×38×15	土師器坏
SX16	CH-37	不整形土壙	13C	186×173×7	須恵器(甕)・土師器(椀・坏・皿・甕)	SR35	CF-38	土壙墓	10C	154×55×23	黒色土器(A類椀・B類椀)・土師器皿
SD17	CH-36	溝	11～12C	580×81×15	土師器坏	SK36	CD-40	土壙	弥生？	138×78×10	
SD18	CI-35	自然流路	縄文	430×69×3	Obufl	SB37		掘立柱建物	弥生？	95×290(1×2間)	
SD19	CG-34	自然流路	縄文	560×70×37	縄文土器・Obfl						

2．浦江谷遺跡１次調査　２区

（１）概要

２区は開発地区の東端にあたり、西山から北東に延びる舌状の細長い丘陵の先端部に位置する。調査区内尾根線上を西区と早良区の行政境界線が通る。調査区東側は断崖となっており、河岸段丘の様相を呈するが、調査区北側、南側の斜面も急になっている。丘陵東側で室見川に面しており、川面との比高差は40ｍに達する。調査区の標高は下段の中世墓地群で40ｍ前後、上段の甕棺墓地群で約60ｍとなる。現況では尾根線上に幅30ｍ程の平坦面が残り、甕棺墓他の遺構はこの平坦面上に限定された形で遺存する。下段の中世墓は斜面途中の狭い平坦面を利用して若干の造成を加えた後に造墓されている。

遺構の確認はすでに浦江地区の本調査が開始された以後に行われ、その結果甕棺墓、焼土壙等を確認したが、すでに工事の着工が迫っており、緊急を要するということで、平成８年12月18日より調査を開始し、東側の調査を優先して進め、調査終了次第工事に引き渡すことで進められた。調査は明けて平成９年３月９日に調査区東側が終了、３月16日に下段中世墓の調査が終了、４月30日に調査区西側を終了している。

調査面積は丘陵上段部分で4140㎡、下段中世墓群920㎡、合計5060㎡にのぼる。２区で検出された遺構は、甕棺墓87基、中世墓21基、近世墓８基、焼土壙９基、落穴状遺構８基、その他多数の土壙を検出している。ただ今回の報告は紙幅制限があり、全ての遺構を取り上げることはできない。

調査は、丘陵上段の遺構群と下段の中世墓群を全く同時に進め、遺構番号等は両地点で通している。そのため、距離的には若干離れており、遺跡の性格も異なるものの、同一の調査区としてみなす。以下、甕棺墓、落穴状遺構、焼土壙、中世墓の順に述べていく。また、調査工程上、上段で東半分と西半分の境界が若干ずれている。

（２）遺構・遺物

１）甕棺墓

２区では合計87基の甕棺墓を検出した。内訳は、大型棺46基、小型棺41基となる。３連棺およびそれに類するものが６基検出されている。時期的には弥生時代前期に属する甕棺墓が２基検出され、その他は全て中期後半～中期末に属するものである。甕棺墓が検出された位置は２区の東半分に集中しており、調査区西側では全く検出されていない。周囲が崖で隔絶されている地形から考えて、今回の調査で墓域全域をほぼ完全に捉えきったといえる。

遺存状況は、上層に埋葬される小児棺に削平を受けたものが多かったものの、１ｍ内外の深さに埋葬された甕棺墓はほぼ原形に近い形で遺存していた。ただしいずれも酸性土壌による風化が進み、ST－054のように土壌と一体化し、取り上げ不可能だった甕棺もある。したがって上記の残存基数は、小児棺に関しては本来これよりも多かった可能性が高い。

紙幅の都合により、以下トピック的に遺構、遺物（甕棺個体）について述べ、個々の甕棺についての記述は控える。なお以下の認識として、甕棺専用としての形態をとる甕棺を大型棺、日常土器を転用したものや、その系統を引く形態をとるものを小型棺とする。大型、小型は単にサイズの問題ではないことを明記する。

遺構（Fig. 1～Fig. 15）

検出された甕棺遺構は、弥生時代前期の甕棺２基を除き、ほぼ尾根線上の限られた範囲で検出された。墓域構成から見て列埋葬とみるのは難しく、群埋葬としても一定の区画は見えてこない、極めてランダムな配置となっている。ただ傾向として、大型棺の周囲に複数の小型棺が近い位置で埋葬されていることも伺えるが、はっきりしない。

甕棺の埋葬形態は合口式56基、単棺18基の他、３連棺4基、そのほか特殊な埋葬形態を持つもの２基、形態不明７基となる。弥生中期後半の時期は埋葬形態が安定する時期であるがその時期にこのように変異に富む埋葬形態をとることは注目される。合口形態も、弥生時代前期に属するST－012のように完全に上甕・下甕が双方を覆うものではないが、上下の甕棺の口径に大きな差が見られる甕棺が多いことも同時期の他の甕棺墓とは異なる。これと関連して、ST－077、079、080、091、092、093、136、137、141、147のように上甕が小型棺、下甕が大型棺を使用する甕棺墓が多いこともあげられる。ST－136、137は上甕が下甕内部に完全に入り込み、中期の標準的甕棺埋葬形態からは離れている。

甕棺墓の墓壙ラインは、不整形のものが多いが、これは撹乱や他の甕棺との切りあいによるところが大きい。墓壙としての掘り方がほとんど判別できなかった甕棺もある。（ST－003、045、051、074、082、086）特に小児棺は削平が著しく、墓壙がはっきりしないものが多い。

大型棺で墓壙掘り方が深く、竪穴を掘った後に横穴を掘り、甕棺を埋置するもの（ST－006、008、009、010、018、019、023、044、049、076、077、079、081、088、130、136、147）はその多くが竪穴の底面から一段下がった横穴を掘り、傾斜のついた甕棺埋葬をしている。上甕上方には一段のステップが形成される。同様の床面をもっている甕棺（ST－021、029、085、091）も本来横穴状墓壙を為していたものが、横穴天井部が落盤したために竪穴状になっている可能性がある。

そのほか、特記すべき埋葬形態をとる甕棺墓を数基取り上げる。

ST－008は墓壙内に副葬と思われる甕形土器を含む。これは小型棺が同一墓壙内に重複して埋葬された可能性もある。甕形土器は風化が激しく、復元不可能。

ST－011、012は隣接する２基の弥生前期甕棺墓である。ST－012は副葬小壺をもつ。いずれも弥生時代前期の甕棺墓に特徴的な、傾斜角度の小さな、単棺あるいは覆口式埋置を行う。調査区内には同時期の他の遺構は存在せず、関連する遺物も検出されていない。中期の甕棺墓群が形成される以前の、散発的に甕棺墓が埋葬された状況を示すものである。

ST－016は下甕を上甕のなかに内包するように埋置する。上甕と下甕の口縁部は同一方向を向く。現況では上甕の遺存状況が悪く、詳細は不明。

ST－019は３連棺と思われる。横穴を掘った後に下甕を埋置し、上、中甕を埋置する。現況では中甕の遺存状況が悪い。

ST－037は小型棺単棺と思われるが、墓壙が長方形で整うため、土壙墓内に頭部のみ覆った墓葬との見方もできる。

ST－055は上下甕の接合部付近に鉢形土器を半裁したものをかぶせている。左右両側の鉢形土器は１個体に接合可能である。

ST－077は埋葬形態は３連棺であるが、上、中甕は同一個体を半裁してそれぞれ上から被せたもので、整理段階で完全に接合する。埋葬形態から、３連棺の一種とみなす。

ST－080は上甕を倒立して埋置し、下甕との接合部付近を縦に打ち欠いて合口している。上下甕の接合部付近を調整して、すき間のないようにしている。

ST－140は上甕を半裁して、対向方向に上から被せている。

Tab 1　甕棺遺構一覧表

遺構番号	方　位	合口形態	墓壙形態	埋置形態	備　考	掲載 Fig.No.	遺構番号	方　位	合口形態	墓壙形態	埋置形態	備　考	掲載 Fig.No.
001	N－6°－E	接口式	不明	水平		Fig. 1	056	N－54°－E	不明	不明	不明	遺存状況不良	Fig. 8
003	N－45°－E	呑口式	不明	傾斜		Fig. 1	060	N－37°－W	単棺	竪穴	水平		Fig. 8
004	N－34°－E	接口式	不明	水平		Fig. 1	062	N－29°－E	覆口式	不明	水平		Fig. 8
005	N－28°－E	接口式	竪穴	水平		Fig. 1	063	N－69°－E	単棺	不明	不明	遺存状況不良	Fig. 8
006	N－51°－E	呑口式	横穴	水平		Fig. 1	064	N－14°－E	単棺	不明	不明	遺存状況不良	Fig. 8
007	N－51°－E	接口式	不明	水平	遺存状況不良	Fig. 1	065	N－21°－W	接口式	竪穴	傾斜		Fig. 8
008	N－7°－W	接口式	横穴	傾斜	副葬甕あり	Fig. 2	066	N－22°－E	単棺	竪穴	水平		Fig. 9
009	N－60°－E	接口式	横穴	傾斜		Fig. 2	067	N－14°－E	接口式	竪穴	水平		Fig. 9
010	N－42°－E	覆口式	横穴	傾斜		Fig. 2	068	N－48°－E	単棺	不明	不明	遺存状況不良	Fig. 9
011	N－10°－W	単棺	竪穴	正置		Fig. 2	069	N－37°－E	不明	不明	水平		Fig. 9
012	N－2°－W	覆口式	竪穴	傾斜	副葬小壺あり	Fig. 2	070	N－8°－W	接口式	不明	水平		Fig. 9
013	N－10°－W	三連棺	竪穴	水平		Fig. 3	074	N－69°－W	単棺	不明	不明	遺存状況不良	Fig. 9
014	N－8°－W	単棺	不明	傾斜	遺存状況不良	Fig. 7	076	N－9°－E	単棺	横穴	傾斜		Fig.10
015	N－63°－E	単棺	不明	水平		Fig. 3	077	N－16°－E	三連棺	横穴	水平	上中甕は同一個体	Fig.10
016	N－40°－E	不明	竪穴	水平	上甕は半裁される	Fig. 3	078	N－80°－E	接口式	不明	水平		Fig. 9
017	N－14°－E	接口式	竪穴	水平		Fig. 3	079	N－45°－E	接口式	横穴	傾斜		Fig.11
018	N－27°－W	接口式	横穴	水平		Fig. 4	080	N－55°－E		竪穴	傾斜	合口形態は特殊	Fig. 9
019	N－38°－E	三連棺	横穴	水平		Fig. 4	081	N－81°－E	接口式	横穴	傾斜		Fig.12
020	N－10°－E	接口式	竪穴	水平		Fig. 4	082	N－14°－E	覆口式	竪穴	水平		Fig.12
021	N－82°－W	単棺	竪穴	水平		Fig. 5	083	N－48°－E	接口式	竪穴	水平		Fig.11
022	N－52°－W	接口式	竪穴	傾斜		Fig. 5	084	N－25°－E	接口式	竪穴	傾斜		Fig.12
023	N－11°－E	呑口式	横穴	傾斜	上甕は高杯形	Fig. 5	085	N－32°－E	単棺	竪穴	水平		Fig.12
025	N－7°－E	接口式	不明	水平		Fig. 6	086	N－25°－E	覆口式	竪穴	水平		Fig.12
029	N－21°－E	単棺	竪穴	水平		Fig. 6	087	N－15°－E	接口式	不明	水平		Fig.12
032	N－15°－E	単棺	不明	水平		Fig. 6	088	N－33°－E	接口式	横穴	水平		Fig.13
036	N－7°－W	接口式	不明	傾斜		Fig. 6	091	N－41°－E	不明	竪穴	水平		Fig.13
037	N－61°－E	単棺	不明	水平		Fig. 6	092	N－90°－E	呑口式	竪穴	水平		Fig.13
038	N－53°－W	単棺	不明	傾斜	遺存状況不良	Fig. 7	093	N－27°－E	接口式	竪穴	傾斜		Fig.13
039	N－61°－E	三連棺	竪穴	水平		Fig. 7	113	N－22°－W	単棺	竪穴	水平		Fig.14
040	N－36°－E	接口式	不明	水平		Fig. 7	115	N－32°－W	呑口式	竪穴	水平		Fig.14
041	N－27°－E	接口式	不明	水平		Fig. 7	130	N－19°－E	接口式	横穴	水平		Fig.14
042	N－89°－E	接口式	不明	水平	遺存状況不良	Fig. 7	131	N－12°－E	不明	不明	不明	遺存状況不良	Fig.14
043	N－16°－E	接口式	不明	水平		Fig. 8	136	N－31°－W	呑口式	横穴	水平		Fig.14
044	N－44°－E	接口式	竪穴	水平		Fig. 7	137	N－46°－E	呑口式	竪穴	水平		Fig.14
045	N－79°－E	接口式	横穴	水平		Fig. 8	138	N－34°－W	接口式	竪穴	傾斜		Fig.14
046	N－5°－E	接口式	不明	水平		Fig. 7	140	N－53°－E		竪穴	水平	合口形態は特殊	Fig.15
048	N－10°－E	接口式	不明	傾斜	遺存状況不良	Fig. 7	141	N－35°－W	接口式	竪穴	水平		Fig.15
049	N－30°－W	接口式	横穴	傾斜		Fig. 7	142	N－33°－E	接口式	竪穴	傾斜		Fig.15
050	N－52°－W	呑口式	不明	水平		Fig. 8	143	N－85°－E	覆口式	竪穴	傾斜		Fig.15
051	N－39°－E	単棺	竪穴	傾斜		Fig. 7	144	N－65°－W	接口式	不明	水平		Fig.15
052	N－47°－W	覆口式	竪穴	水平		Fig. 8	145	N－45°－W	不明	不明	不明	遺存状況不良	Fig.15
053	N－2°－E	覆口式	不明	傾斜		Fig. 8	146	N－22°－W	呑口式	不明	不明	遺存状況不良	Fig.15
054	N－72°－W	不明	不明	水平	遺存状況不良	Fig. 8	147	N－75°－E	接口式	横穴	傾斜		Fig.15
055	N－19°－E	呑口式	不明	水平		Fig. 8							

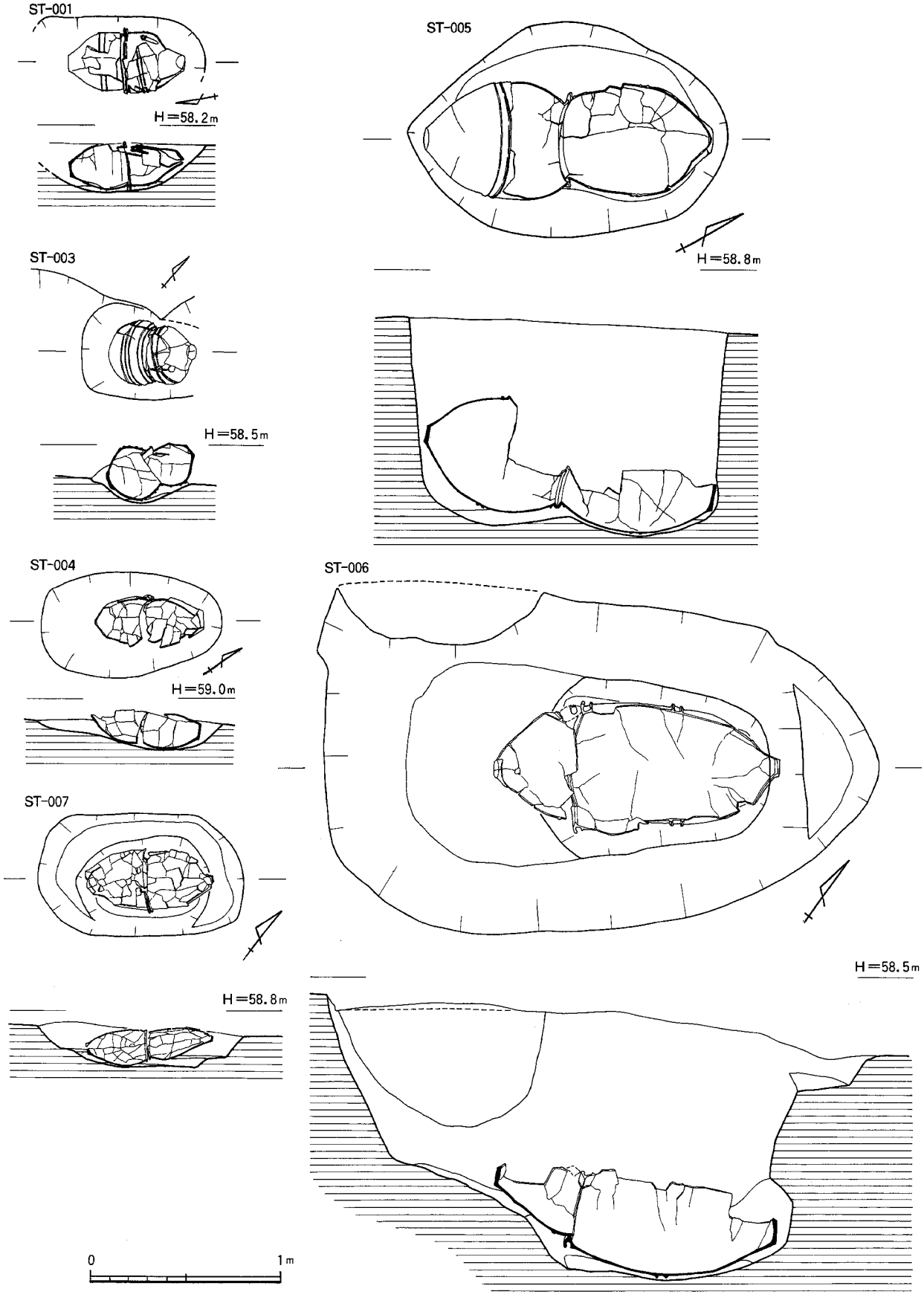


Fig. 1　甕棺墓出土状況実測図1（1／30）

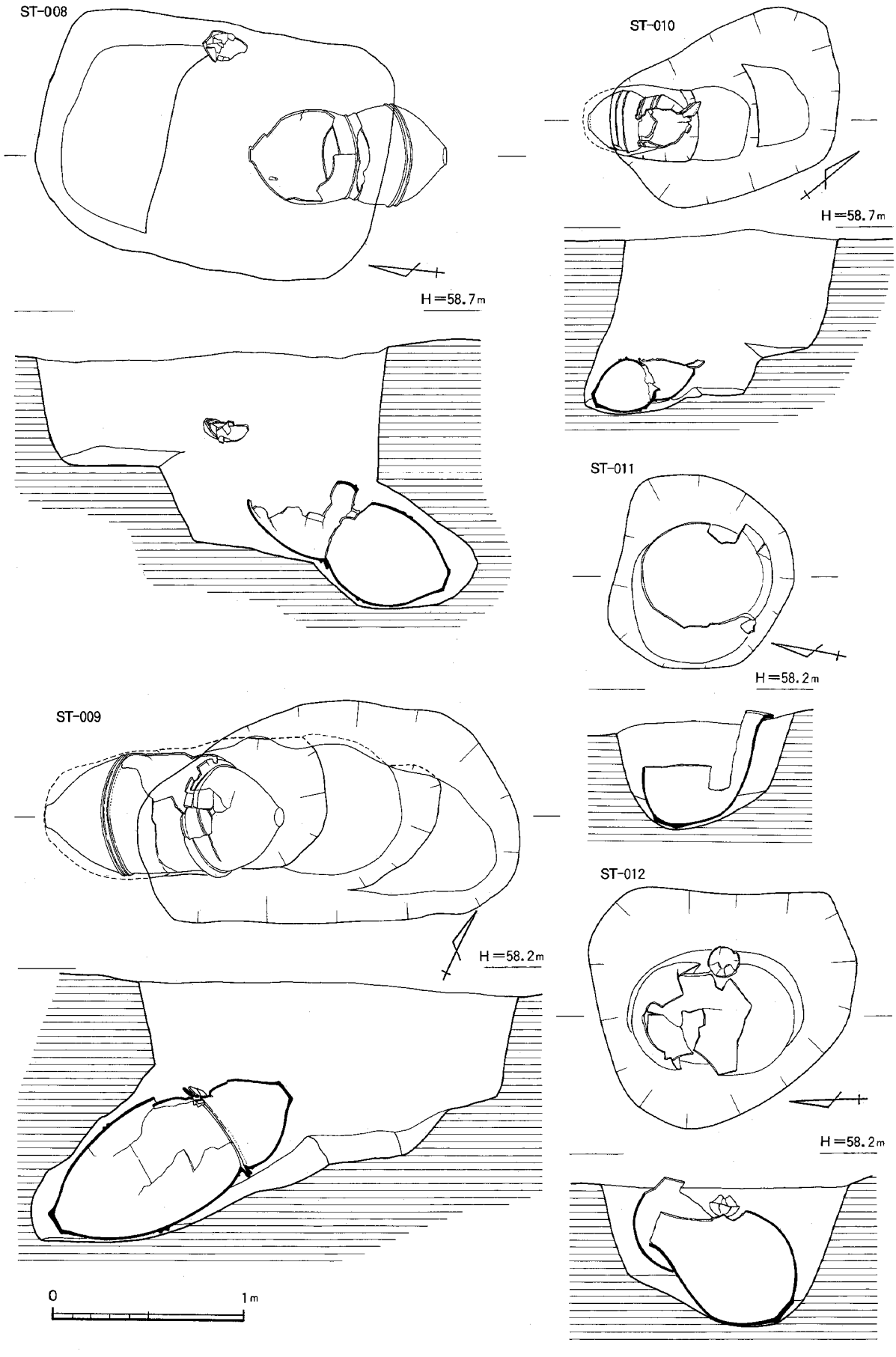


Fig. 2　甕棺墓出土状況実測図２（1／30）

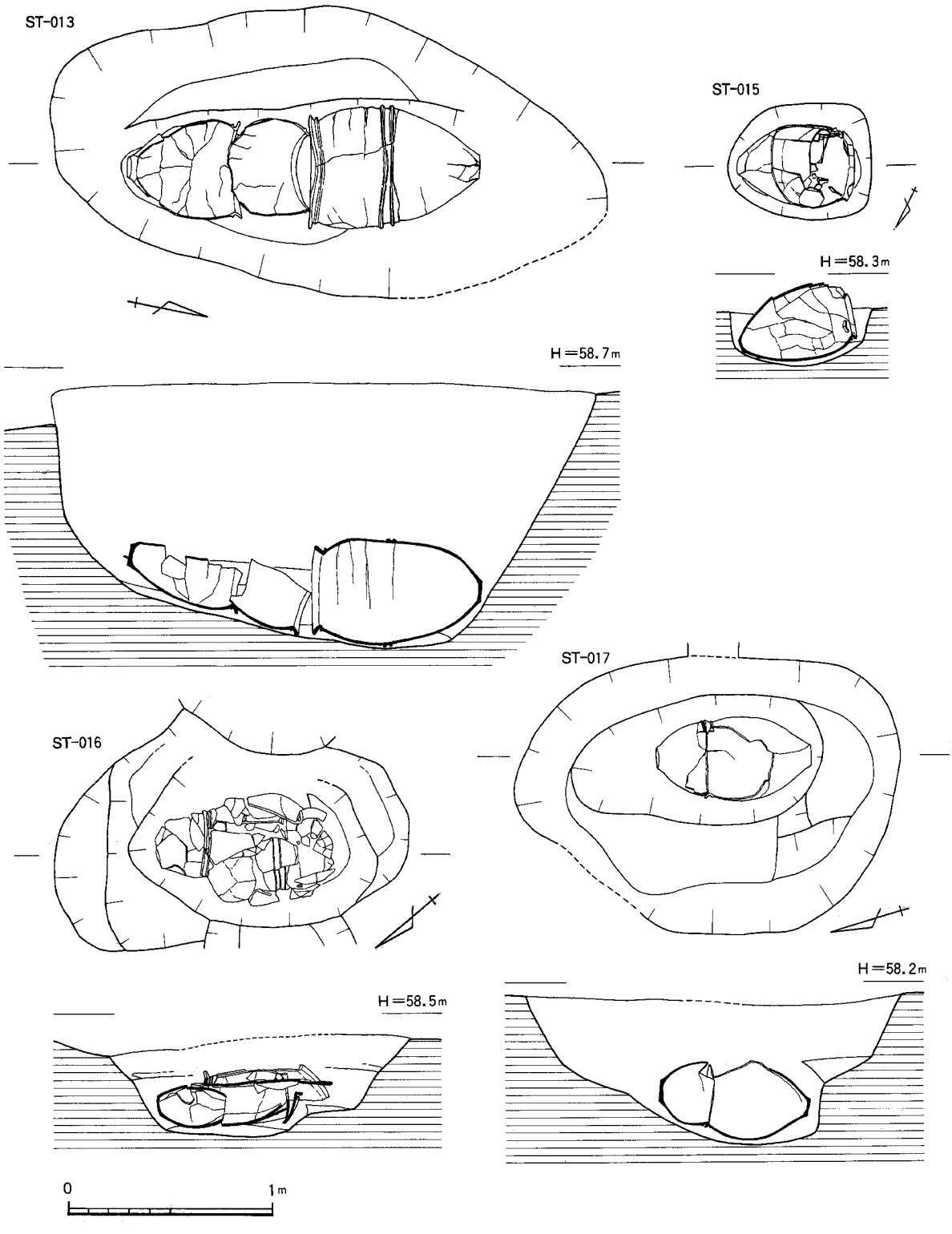


Fig. 3　甕棺墓出土状況実測図３（1／30）

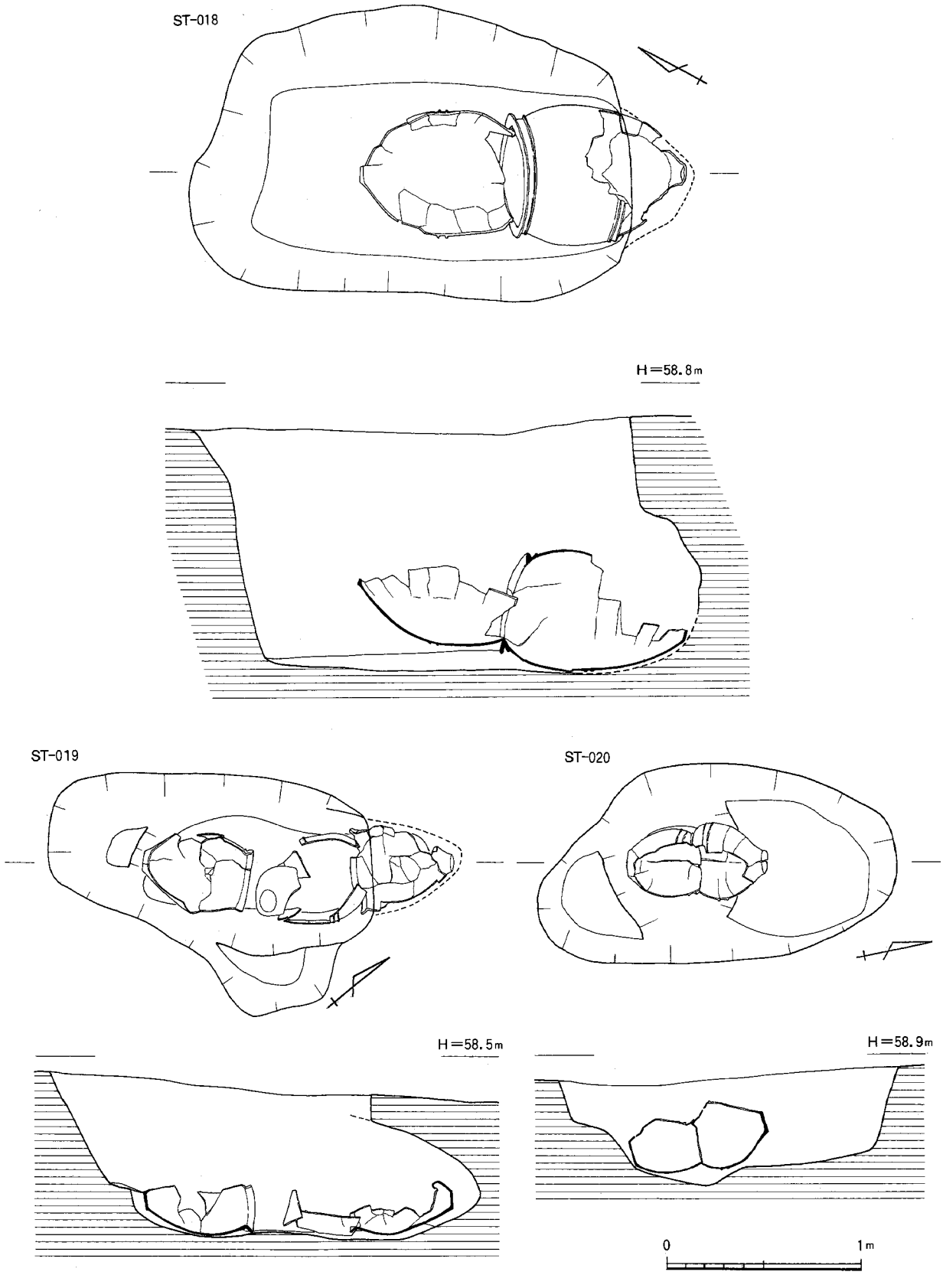


Fig. 4　甕棺墓出土状況実測図４（1／30）

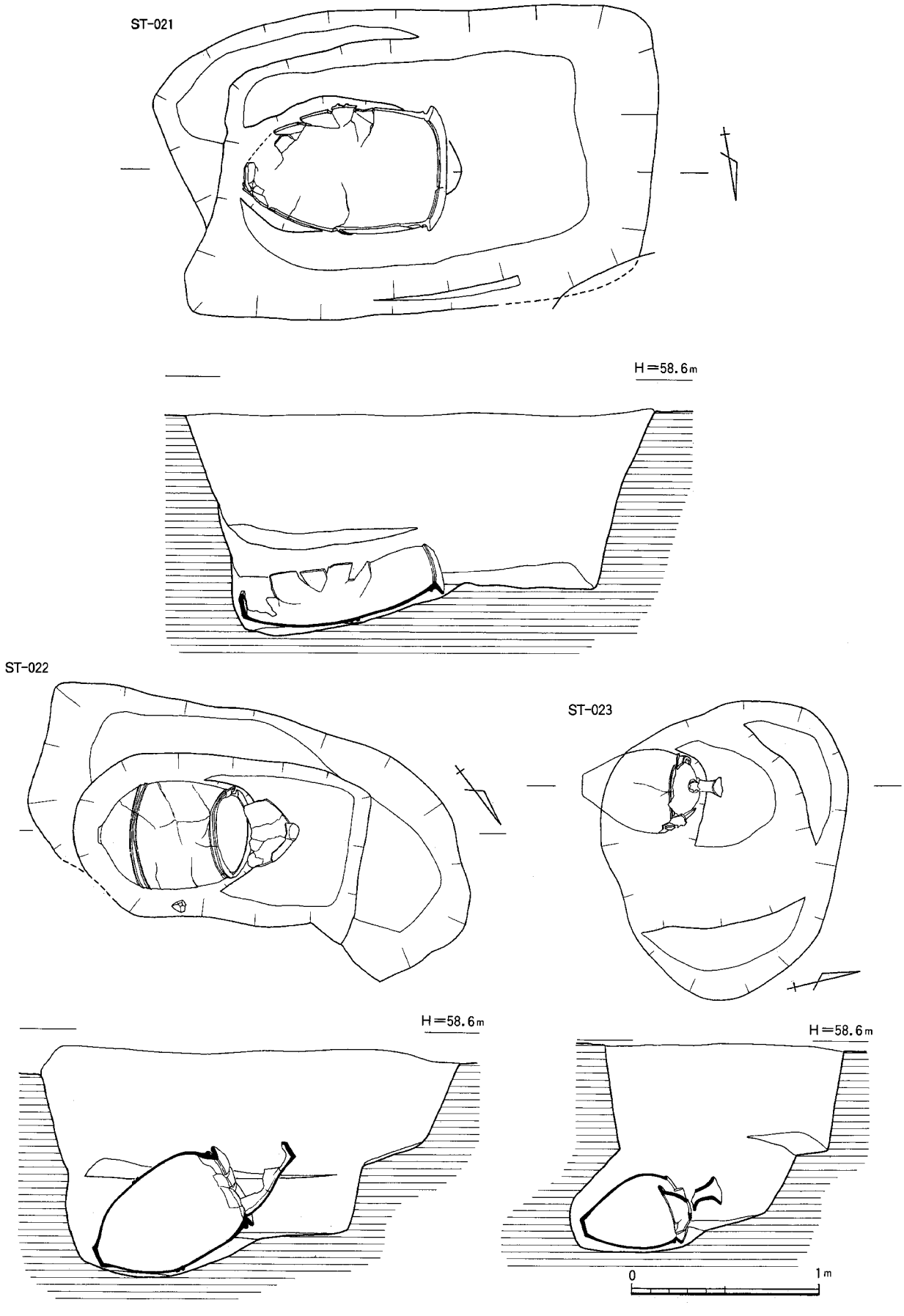


Fig. 5 甕棺墓出土状況実測図５（1／30）

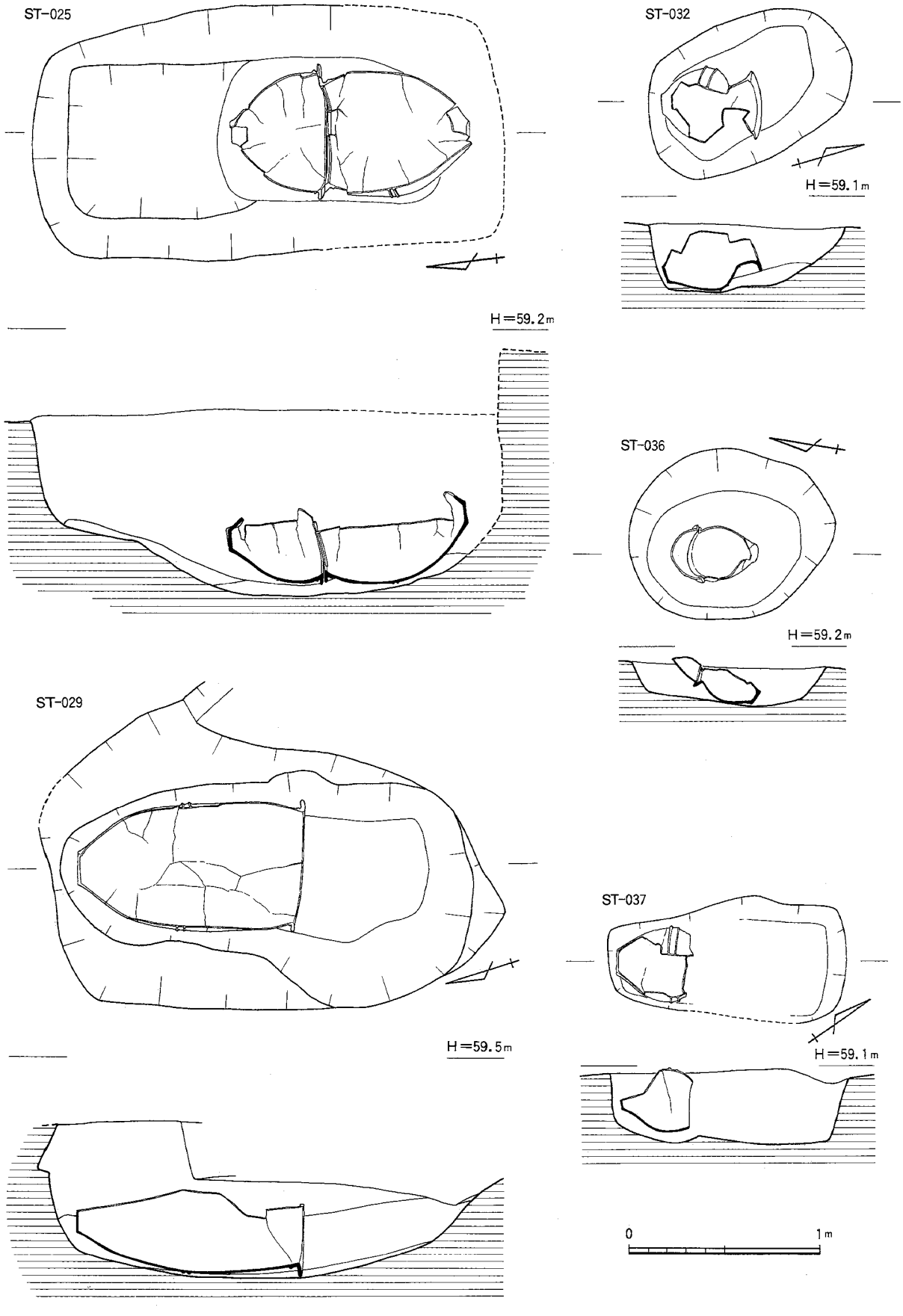


Fig. 6　甕棺墓出土状況実測図６（1／30）

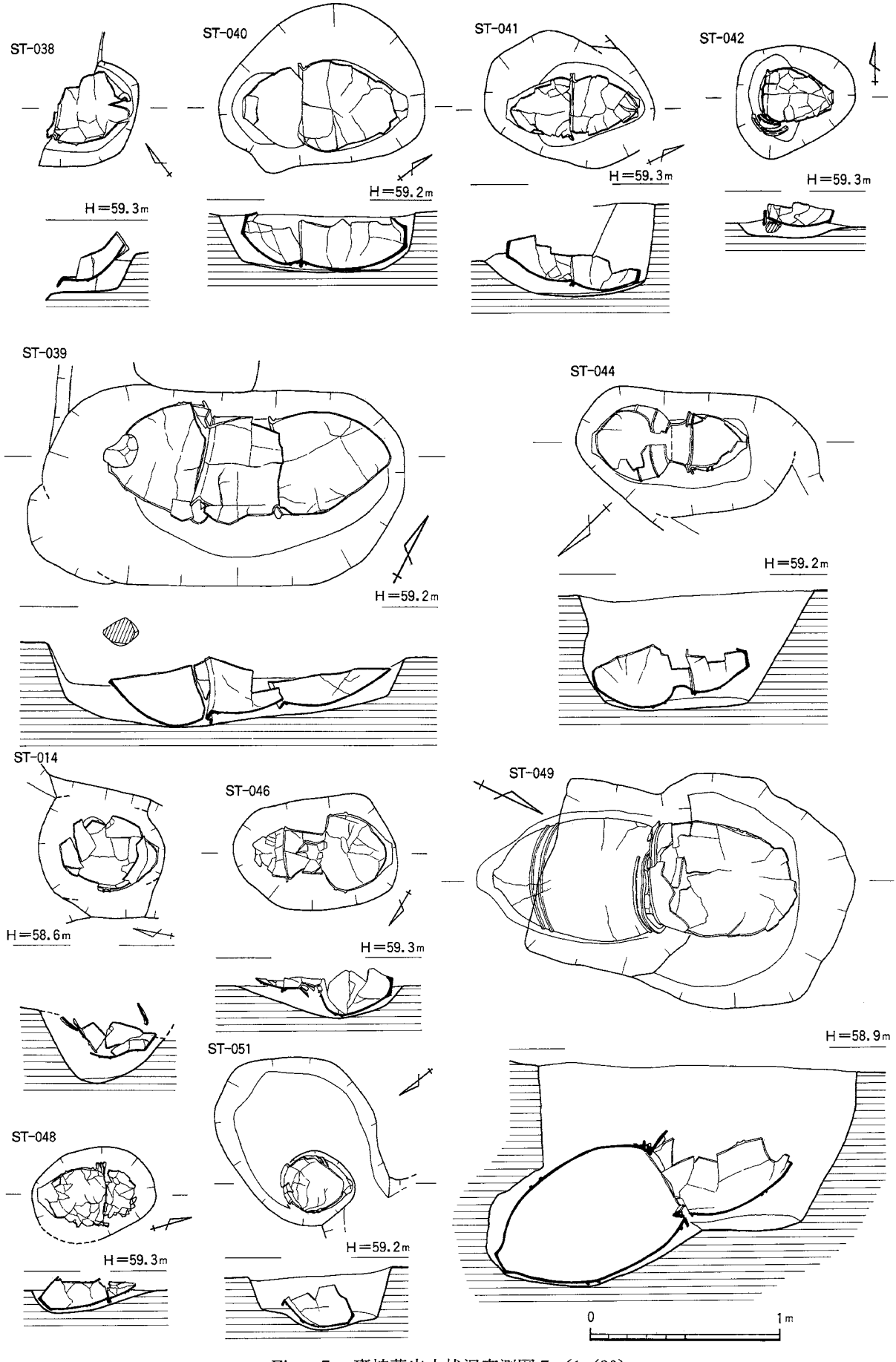


Fig. 7　甕棺墓出土状況実測図７（1／30）

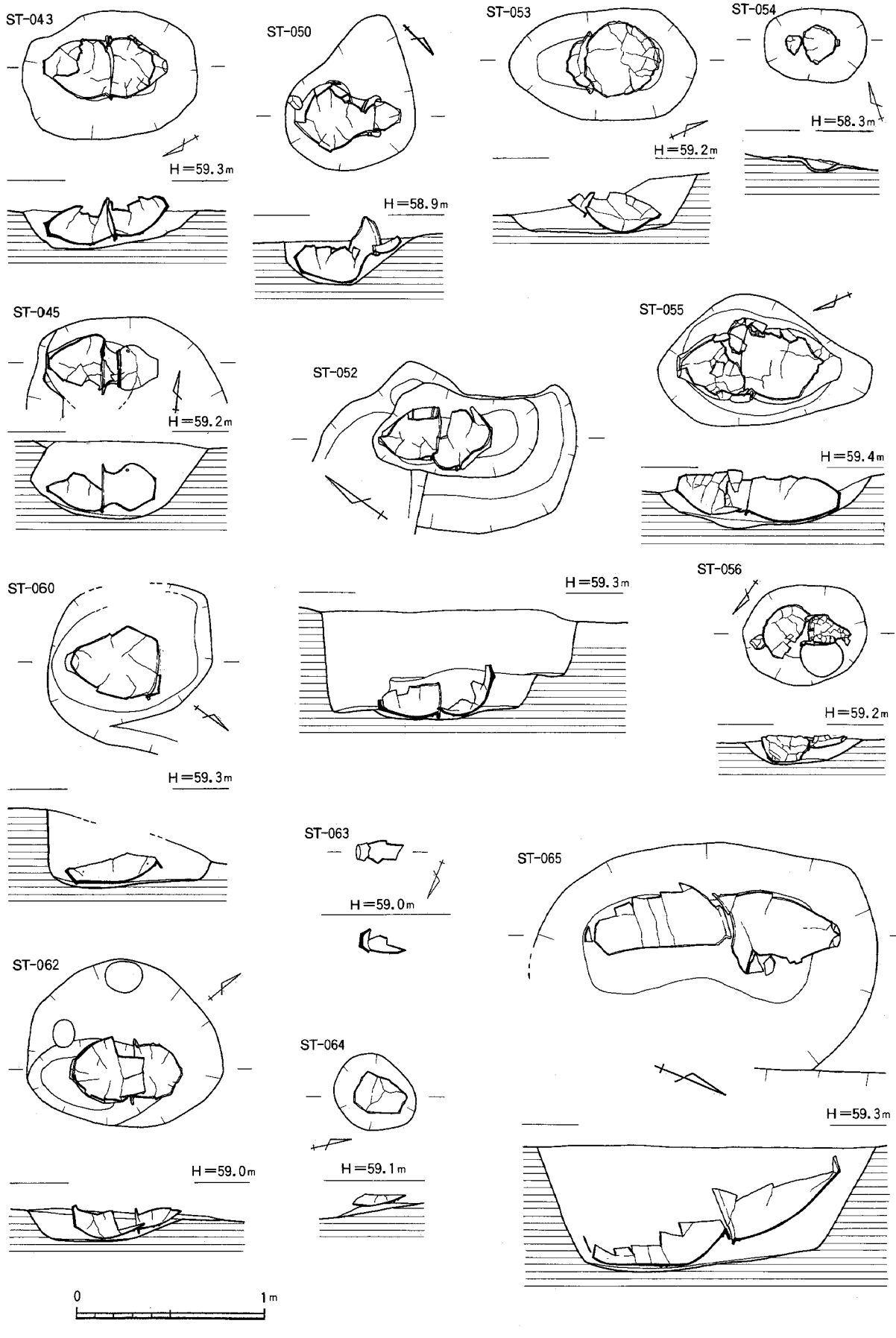


Fig. 8 甕棺墓出土状況実測図 8 (1／30)

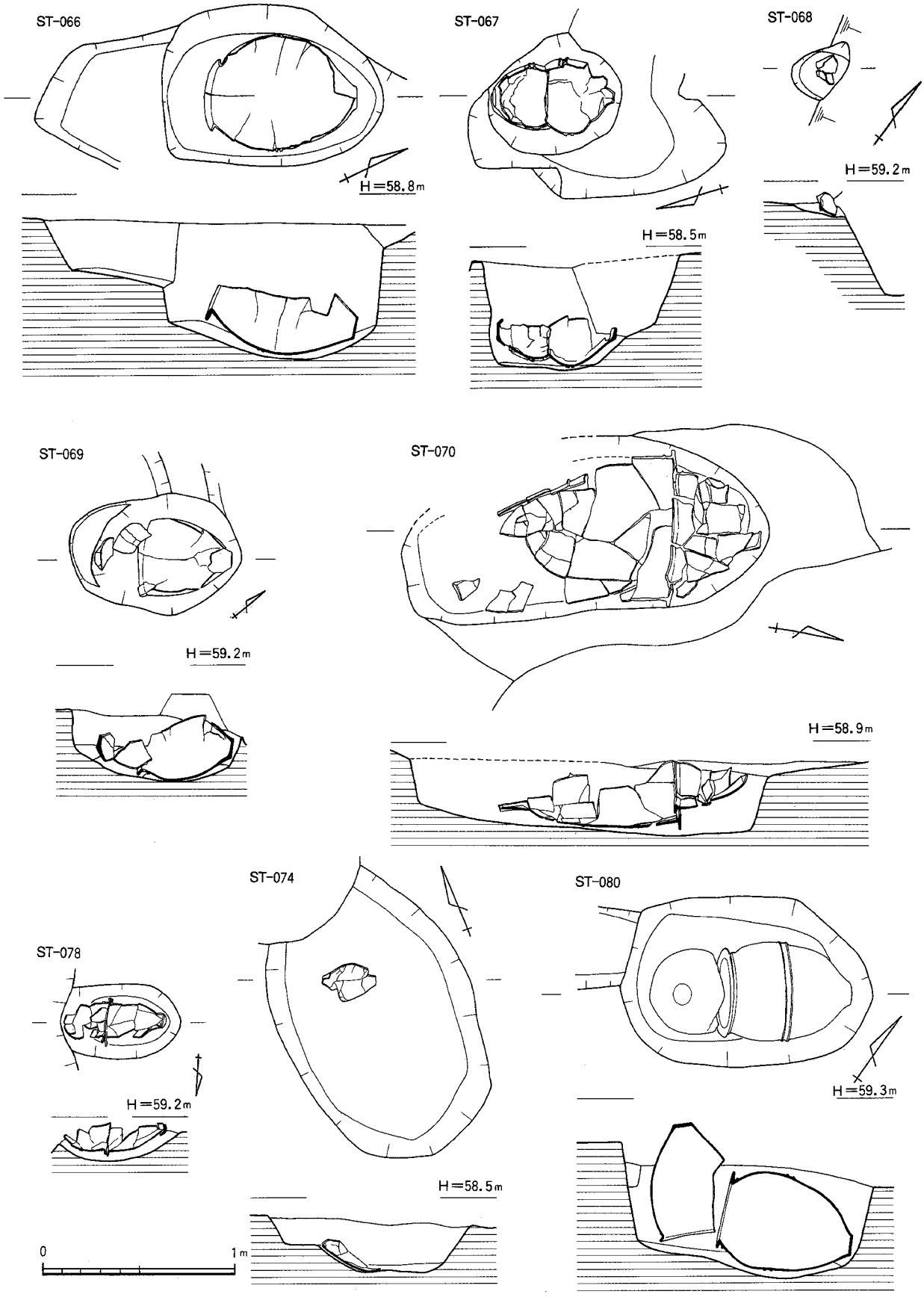


Fig. 9 甕棺墓出土状況実測図 9 (1／30)

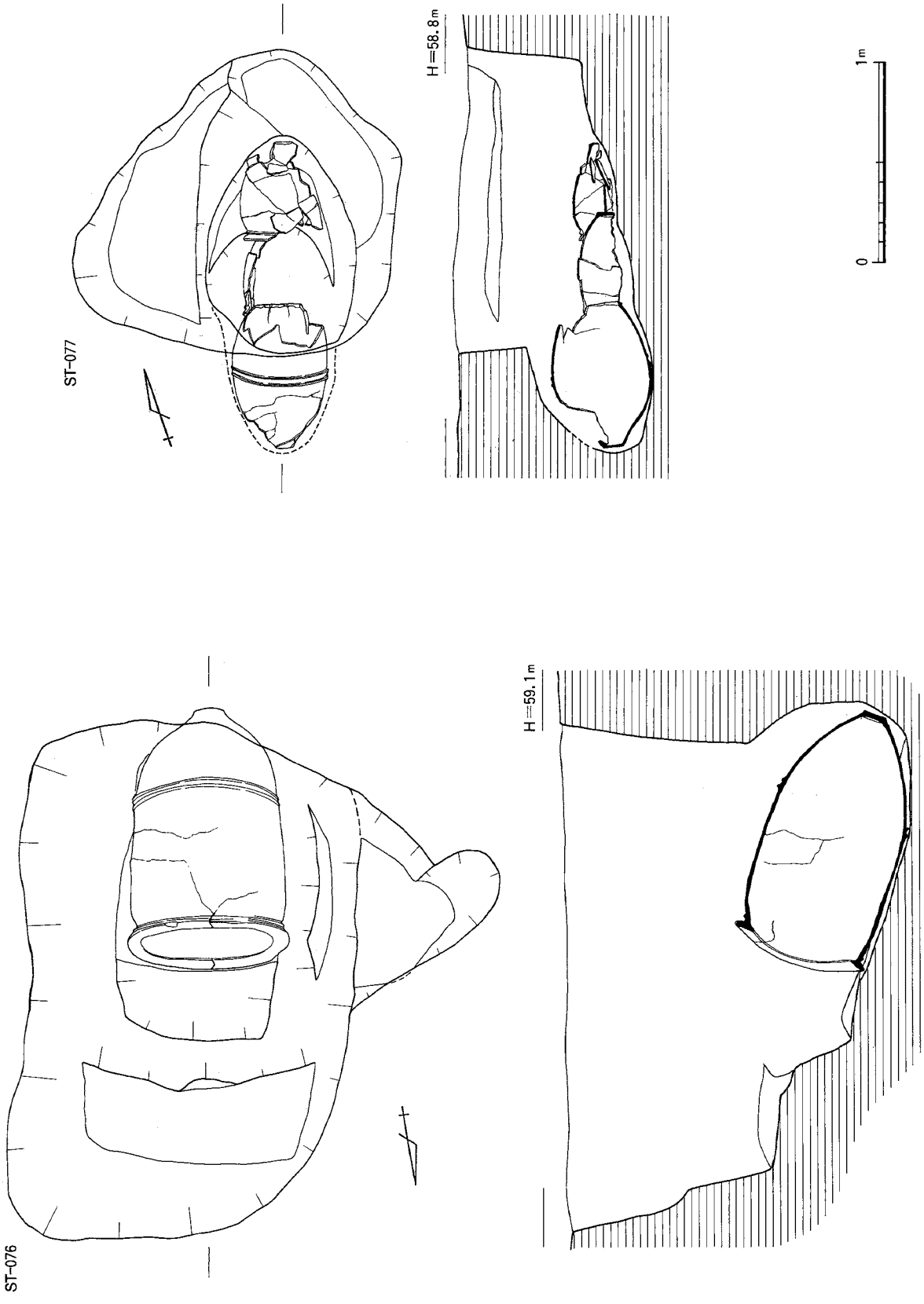


Fig. 10　甕棺墓出土状況実測図10（1／30）

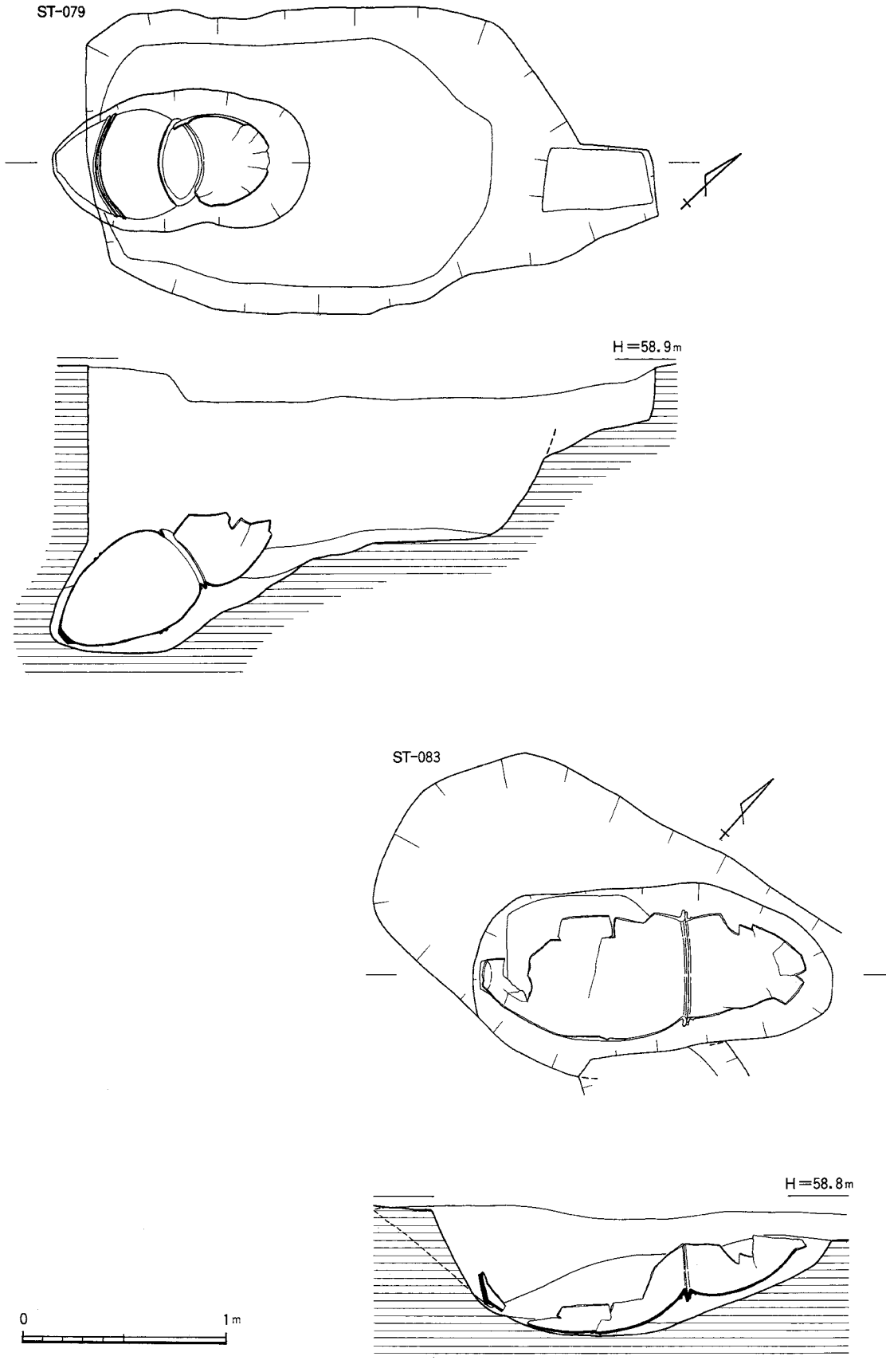


Fig. 11　甕棺墓出土状況実測図11（1／30）

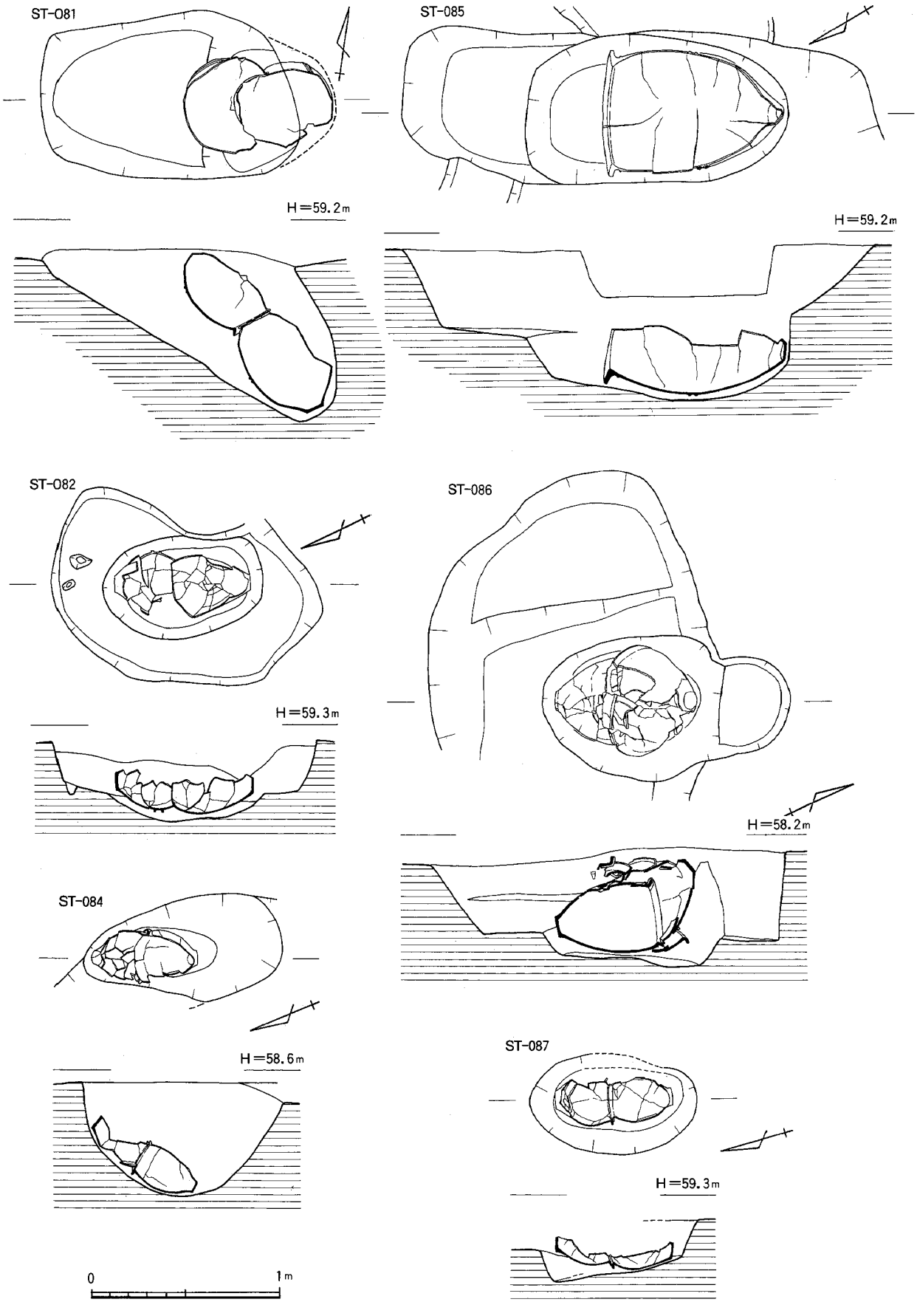


Fig. 12　甕棺墓出土状況実測図12（1／30）

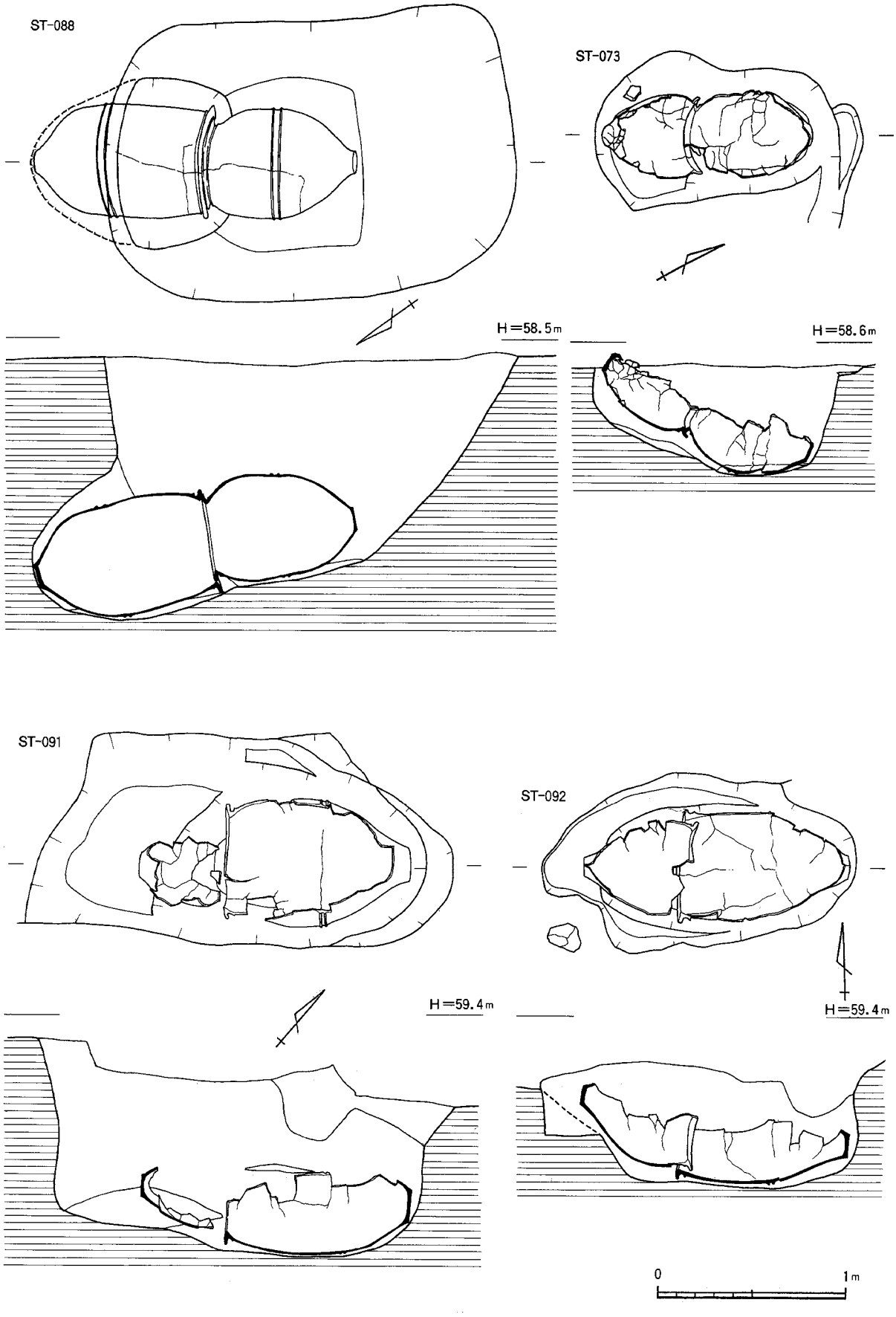


Fig. 13　甕棺墓出土状況実測図13（1／30）

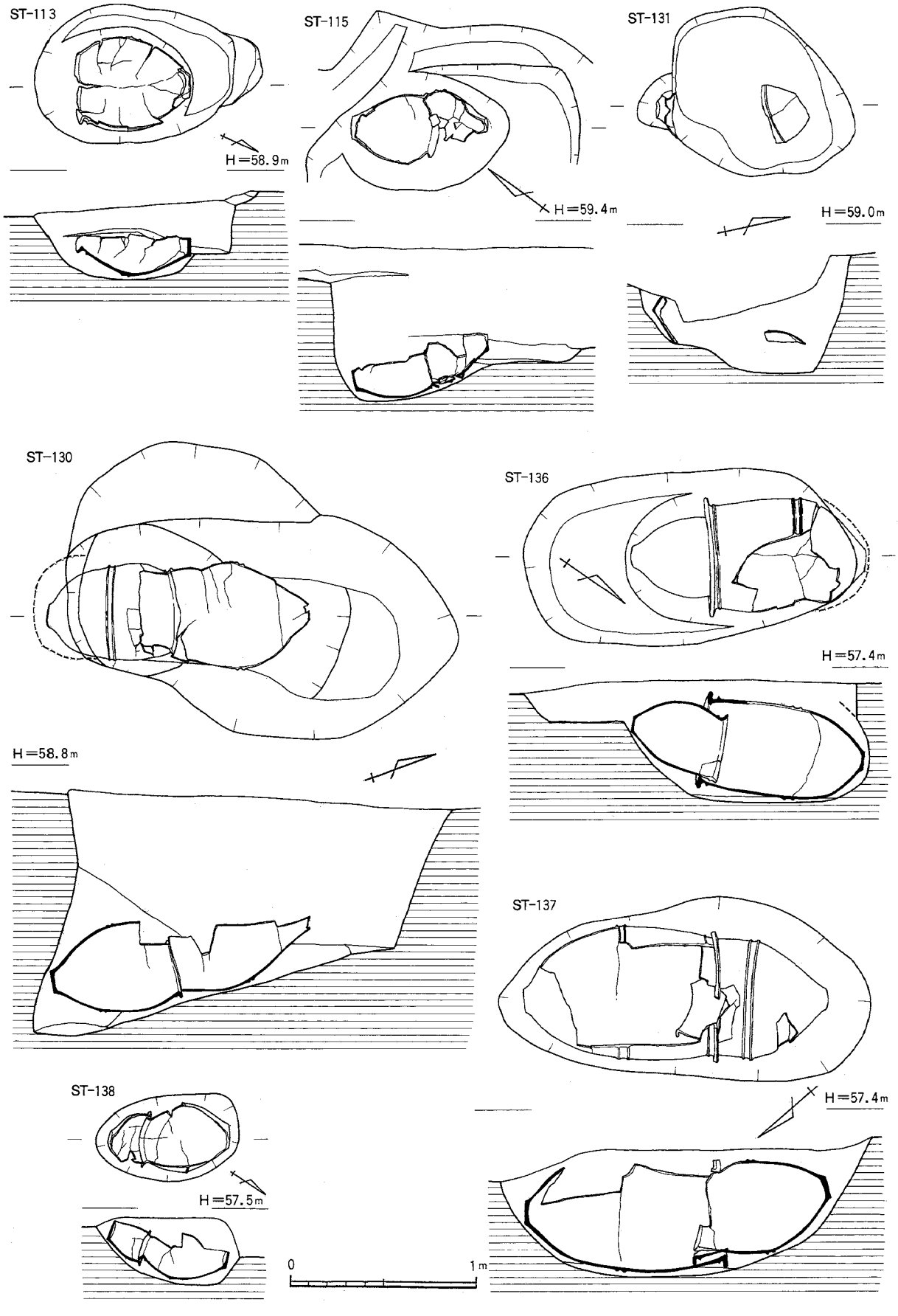


Fig. 14　甕棺墓出土状況実測図14（1／30）

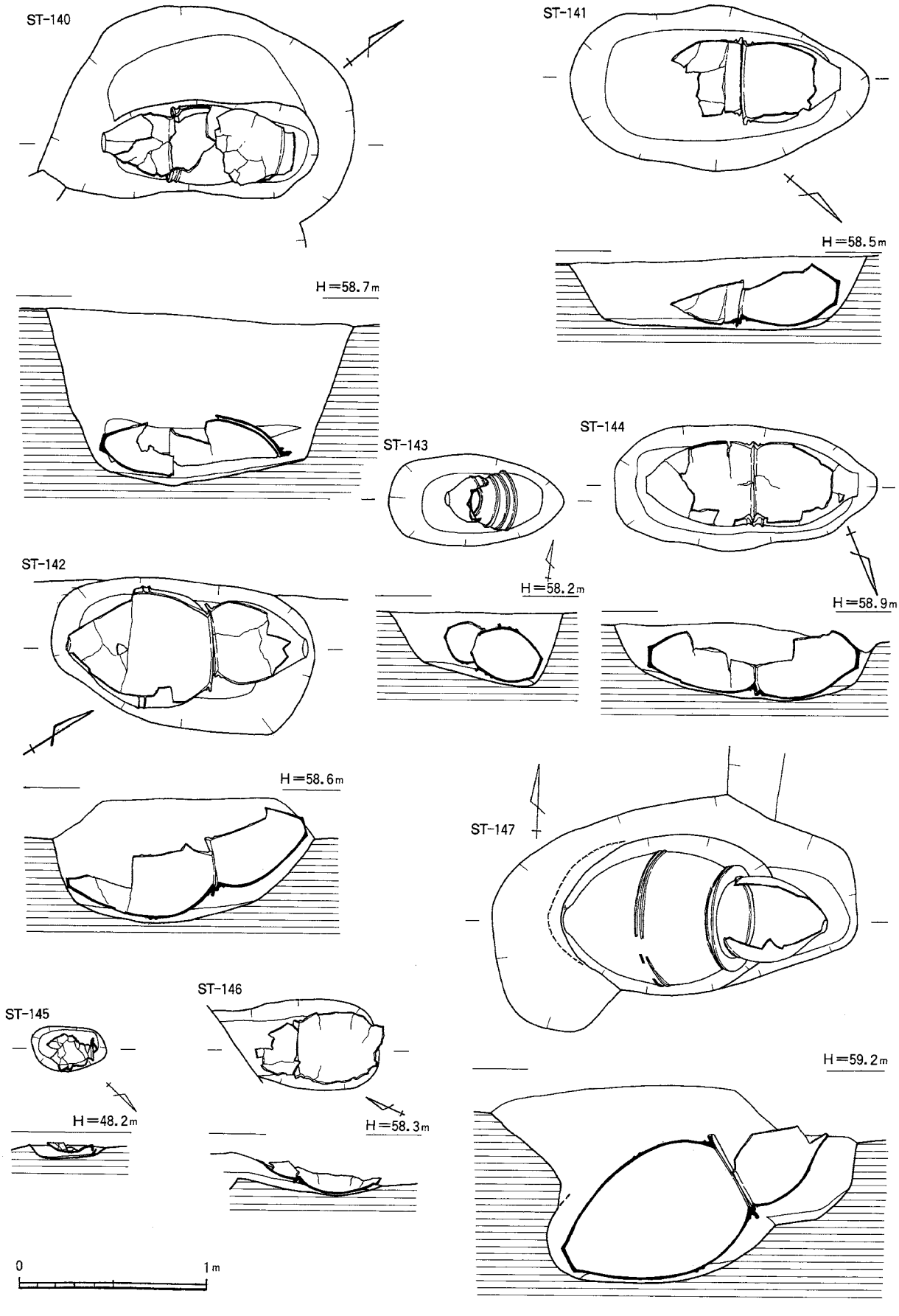


Fig. 15　甕棺墓出土状況実測図15（1／30）

遺物（Fig. 16～Fig. 34）

出土した甕棺の個数は157個体に上るが、紙幅の制限からその全てについて詳しくコメントできない。したがって以下では出土甕棺の土器としての特徴について以下若干気付いたことを記し、法量など詳細なデータは一覧表で提示する。

出土した甕棺はいずれも酸化土壌のため風化が著しく、接合の困難なものや内外面の調整痕が剥落しているものが多く、情報の欠落が生じていることを確認しておきたい。

甕棺の形態から見て、出土した甕棺は大型棺については弥生時代前期の伯玄式２基（ST－011、012)、弥生中期の須玖式（ST－070)、弥生中期末の立岩式に大別でき、大半が立岩式に該当する。ST－070は須玖式の中でも立岩式に近い特徴をもち、大部分の甕棺墓がほぼ同時期であることになる。小型棺は須玖Ⅱ式に相当するものが多く、弥生時代中期末の形態を呈するものも多く見られる。

弥生前期の甕棺のうち、ST－011は胴部が張り、口縁部は如意状に外側に大きく開き、内側に粘土帯を張り付けて比厚させる。口唇部下段に刻目を入れ、外面口縁下に沈線を巡らす。伯玄式でもやや古手の様相である。ST－012は上甕、下甕とも口縁部を打ち欠いておりいるが、上甕は胴部の形状からやや古い可能性がある。下甕は胴部が丸く張り、頸部はやや細く絞る。外面調整は横ミガキ、内面は横ハケ。頸部と胴部の境界に沈線を4条巡らす。胴部形態から見てST－011よりもわずかに新しいと考えられるが、明確ではない。ST－012副葬土器（Fig. 34　1）は、板付Ⅱa式段階のものと考えられる。頸部と胴部の境界に段をもち、口縁部は外に緩く屈曲する。外面は風化のため調整不明。

立岩式の大型棺は大別して、次の３通りに分類できる。

1．口縁部は逆L字状。胴部上半は直立し、いわゆる砲弾形を呈する。胴部にはコ字形突帯を２条張り付け、口縁下に三角突帯を１条張り付けるものが多い。(ST－029、076)

2．口縁部は逆L字状。胴部は口縁直下でわずかに細くなり、胴部上半はほぼ直立する。胴部にはコ字形突帯を２条張り付け、口縁下に三角突帯を１条張り付ける。(ST－006下、009下、022下、076下、088下等)

3．胴部は丸く張り、口縁部は逆Ｌ字状。胴部にはコ字形突帯を２条張り付け、口縁下に三角突帯を１条張り付ける。１、２に比べ、小型のものが多い。(ST－005上下、ST－018上下など、多数）この分類中でさらに細分可能と思われる。口縁形態の変化の方向性や上下甕の組合せから見て、１は２より先行するものと考えられる。３は１、２とほぼ併行するとみられる。

甕棺の大型棺、小型棺の別については、出土した甕棺161個体中で大型棺および大型の鉢形土器は50個体しか存在しない。他は日常土器を転用したもの、およびその系統をひく形態をもつものである。また上甕が小型棺、下甕が大型棺を使用する甕棺墓も多く、弥生中期に一般的に見られるような、上下甕ともに大型の甕棺を使用するものは比較的少ない。上下とも大型棺を使用する甕棺墓はST－005、009、018、025、049、070、088、130、137の９基である。

また３連棺に使用している甕棺はいずれも小型棺、あるいは大型棺でも小ぶりなものを使用している例が多い。ST－013は３連棺３個体のうち上、中甕の２個体が小型棺。ST－019は上、下の２個体が小型棺で、中甕も専用棺としては小型の部類であるST－039は上甕が小型棺で、ST－077は前述の通り、上下甕が小型棺で同一個体である。このことから、３連棺であっても、決して棺内の占有空間は広いものではなかったことがいえる。むしろ、小型棺を使用して一定の大きさを確保するために３連棺にしなければならない状況があったともとれる。

またST－050は袋状口縁壺を下甕として使用している。上甕には小型の鉢形土器を使用して合口式としている珍しい例である。類例が少ないため、ここで特記する。

Tab. 2 出土甕棺一覧表

遺構番号	上下	形態	外口径	内口径	器高	底径	胴最大径	備考	掲載Fig.No.
001	上	甕形土器	33.0	25.0	29.6	7.0	30.6		Fig. 24
001	下	甕形土器				7.0	32.6		Fig. 24
003	上	壺形土器			25.3	8.2	29.5	口縁部打ち欠き	Fig. 24
003	下	壺形土器		25.0		12.0	33.8	口縁部打ち欠き	Fig. 24
004	上	甕形土器	49.0		32.4	9.0	30.0		Fig. 24
004	下	甕形土器	28.3						Fig. 24
005	上	大型棺	46.8-47.6	35.4-37.0	79.0	12.4	57.6		Fig. 16
005	下	大型棺	44.0-47.8	39.2-41.2	79.0	10.8	62.8		Fig. 16
006	上	鉢形土器			47.2	10.0	50.8	口縁部打ち欠き	Fig. 16
006	下	大型棺	64.8		96.2	12.2	69.2		Fig. 16
007	上	甕形土器	29.6		27.7		29.8		Fig. 24
007	下	甕形土器						風化のため接合できず	
008	上	甕形土器	42.6		62.0	10.0	48.6		Fig. 16
008	下	大型棺	55.3				63.4	口縁部打ち欠き	Fig. 16
009	上	鉢形土器	65.8		40.0	9.4			Fig. 16
009	下	大型棺	62.6-63.2	47.5-50.5	101.4	12.0	66.4		Fig. 16
010	上	甕形土器	27.4		28.0	7.4	25.0		Fig. 24
010	下	壺形土器			28.5	9.2	28.8		Fig. 24
011		大型棺	59.6		72.3	6.6	65.6	弥生前期	Fig. 17
012	上	大型棺	57.0		43.2	15.2	62.0	弥生前期・口縁部打ち欠き	Fig. 17
012	下	大型棺	47.5-48.5		78.8	17.0	62.5	弥生前期・口縁部打ち欠き	Fig. 17
013	上	甕形土器	38.1-39		56.0	10.0	66.0		Fig. 17
013	中	甕形土器	39.6		38.3		46.0	底部打ち欠き	Fig. 17
013	下	大型棺	47.6-48.6	36.9-37.4	76.0	11.2	55.0		Fig. 17
014		大型棺	26-28.5	19.8-27.6	55.6	10.0	45.2		Fig. 17
015		甕形土器	40.8	34.4	55.2	9.6	44.0		Fig. 24
016	上	大型棺	37.2						Fig. 17
016	下	壺形土器	25.4	13.0		13.0	31.2		Fig. 17
017	上	壺形土器			26.9	9.6	33.2	口縁部打ち欠き	Fig. 25
017	下	甕形土器	35.7	52.9		10.4	42.4		Fig. 25
018	上	大型棺	48.0	37.7	91.4	10.4	63.0		Fig. 17
018	下	大型棺	59.0	48.0	71.0	12.5	71.6		Fig. 17
019	上	甕形土器	36-36.5		52.7	10.0			Fig. 18
019	中	甕形土器			59.5	9.0	43.4		Fig. 18
019	下	甕形土器	40.0		52.6	8.4	44.4		Fig. 18
020	上	壺形土器	22.5		36.7	11.6	33.0	口縁部打ち欠き	Fig. 25
020	下	壺形土器	26.3		38.0	9.6	38.3	口縁部打ち欠き	Fig. 25
021		大型棺	69.0		103.8	12.8	69.0		Fig. 18
022	上	甕形土器	34.8-37.5		43.4	10.0	42.2		Fig. 18
022	下	大型棺	47.8-48.4	38-39	80.0	12.0	57.2		Fig. 18
023	上	高杯	35.5						Fig. 25
023	下	甕形土器	36.6		50.8	10.2	47.1		Fig. 25
025	上	鉢形土器	65.0	52.3	38.6	12.0	59.8		Fig. 18
025	下	大型棺	50-53.2	39.2-42.3	80.0	11.6	63.8		Fig. 18
029		大型棺	73.2	58.8	121.5	14.0	68.4		Fig. 18
032		壺形土器	33.6	23.5	48.5	10.0			Fig. 26
036	上	甕形土器	29.4	23.2	14.6				Fig. 25
036	下	甕形土器	27.6-28.2		32.3	9.0	27.2		Fig. 25
037		壺形土器	30.8-31		37.1	10.0	29.2	口縁部打ち欠き	Fig. 26
038		壺形土器			45.1	10.2	40.0	口縁部打ち欠き	Fig. 26
039	上	甕形土器	53.2		21.5				Fig. 19
039	中	甕形土器	45.6				47.0		Fig. 19
039	下	大型棺	33.4	24.8	10.4		56.6		Fig. 19
040	上	壺形土器	34.5		34.4	9.6		穿孔あり・口縁部打ち欠き	Fig. 26
040	下	甕形土器	40.4-42		58.9	12	45.1		Fig. 26
041	上	甕形土器	28.8-31.8	23.5-26.3	34.6	8.6	29.5		Fig. 27
041	下	甕形土器	29.1		33.9	8.6	29.5		Fig. 27
042	上	甕形土器	22	16.8	33.8	8.4	28.4		Fig. 27
042	下	甕形土器	44.6		33.6	10	29		Fig. 27
043	上	甕形土器	29-29.4	22.4-22.6	31.2	5	27.1		Fig. 27
043	下	甕形土器	30.4-32	23.6-25.2	34.2	6.2	29.2		Fig. 27
044	上	甕形土器	33	25.6	31.5	7	27.9		Fig. 27
044	下	壺形土器	30.8-32.2	23.6-23.7	51.4	9.6	40.8		Fig. 27
045	上	壺形土器	30.7	24	51.9	6.4	28.6		Fig. 28
045	下	甕形土器	27.8-28.5	20.2-20.5	30	8.4	25.7		Fig. 28
046	上	甕形土器	31.2	24.2	20.9		30		Fig. 28
046	下	壺形土器	31.8	29.4	53.4	11.6	42.4		Fig. 28
048	上							風化のため接合不能	
048	下	甕形土器	36	28.2	31.5	7.4	31.4		Fig. 28
049	上	大型棺	50.2-52.6	38.8-41.4	83.5	12.4	62.2		Fig. 19
049	下	大型棺	64.6		95.5	12	77		Fig. 19
050	上	樽形土器	16.2		15.3	4.8	15.1		Fig. 28
050	下	壺形土器	18.8		45.4	10	34.6	袋状口縁壺	Fig. 28
051	上	鉢形土器	43.8	23					Fig. 19
051	下	大型棺	41.4		72.8	10.6	56.2		Fig. 19
052	上	甕形土器	28		30	6			Fig. 28
052	下	壺形土器			33	9.8	36.8	口縁部打ち欠き	Fig. 28
053	上	甕形土器	30.2	24.8	13.4				Fig. 29
053	下	壺形土器			36	7.8	38.2		Fig. 29

遺構番号	上下	形態	外口径	内口径	器高	底径	胴最大径	備考	掲載Fig.No.
055	上	壺形土器			88.3	10.8	84.8		Fig. 29
055	下	甕形土器	34.8		49.1	10.6	38.8		Fig. 29
056	上	甕形土器	31.2		6.9				Fig. 29
056	下	壺形土器			22.2	9.4	26		Fig. 29
060		甕形土器	37.7	29.1	43.7	9.6	37.6		Fig. 29
062	上	甕形土器	33.6	26.4	28.5		30.6		Fig. 30
062	下	壺形土器	22.5		35.8	11		口縁部打ち欠き	Fig. 30
063		甕形土器	32.4	25.8		8			Fig. 30
064		壺形土器			26.8		29.2		Fig. 29
065	上	甕形土器	44.4		67.7	9.8	46.6		Fig. 19
065	下	大型棺	43.6		57		57.2		Fig. 19
066		大型棺	71.6		82	10.7	64.4		Fig. 19
067	上	壺形土器			29	9.6	31.4	口縁部打ち欠き	Fig. 30
067	下	壺形土器			31.9	10	38	口縁部打ち欠き	Fig. 30
068		甕形土器			10.6	8.2			Fig. 30
069	上	壺形土器	30.4		30	11.2	34.7		Fig. 30
069	下	甕形土器			17.6	10			Fig. 30
070	上	鉢形土器	59.2		46.8	12.2			Fig. 20
070	下	大型棺	75.2			8.8	72.8		Fig. 20
074		甕形土器	32.6		29.2	7	29		Fig. 30
076		大型棺	75		121.4	13.4	74.6		Fig. 20
077	上	甕形土器	36.8	51		10.4	41.8		Fig. 20
077	下	大型棺				5.4	50.2	口縁部打ち欠き	Fig. 20
078	上	甕形土器	34.2	28		7.6			Fig. 30
078	下	甕形土器	30.4	23.6	30.4	6.4	26		Fig. 30
079	上	甕形土器	38.6-39.2		52.6	9.4			Fig. 20
079	下	大型棺	43.8-44.6	33-34.3	71.2	11.2	57		Fig. 20
080	上	甕形土器	41-41.8		61.5	10.8	45.4		Fig. 20
080	下	大型棺	41.6		68	6.2	50.4		Fig. 20
081	上	大型棺	35.7-35.9		64.6	6	52		Fig. 21
081	下	大型棺	35.2		62.5	10.4	52.4		Fig. 21
082	上	壺形土器			32.1	9.2	37.7	口縁部打ち欠き	Fig. 31
082	下	壺形土器			42	9	34.7	口縁部打ち欠き	Fig. 31
083	上	甕形土器	43.6-44.8		59.3				Fig. 21
083	下	大型棺	50.4-50.7	36.8-37.2	97.2	14	68.6		Fig. 21
084	上	甕形土器	26-26.4		33.7	9.4	27.1		Fig. 31
084	下	甕形土器	27.6-28	22.2-22.4	32.4	8.8	27.6		Fig. 31
085		大型棺	62-63.4		90.6	12	60.8		Fig. 21
086	上	鉢形土器	56.2		36.7	8.8			Fig. 21
086	下	甕形土器	38.1		56.6	10.4	42.7		Fig. 21
087	上	甕形土器	26.2			8.4	27		Fig. 31
087	下	甕形土器	27.4		30.8	8.4	26.4		Fig. 31
088	上	大型棺	47-48.5	37-37.9	79.9	11.2	58.8		Fig. 21
088	下	大型棺	57.6	44.8-47	96	11.6			Fig. 21
091	上	甕形土器	39-41.2		53.7	10.2	44.6		Fig. 22
091	下	大型棺	58.8		94.3	12.6	65.8		Fig. 22
092	上	甕形土器	42.4-44.2	36.2-37	61.4	9.6	45.2		Fig. 22
092	下	大型棺	55.6-56	45-45.2	87.8	10.4	54.5		Fig. 22
093	上	甕形土器	38-39		56.3	10.2	45.2		Fig. 22
093	下	大型棺	38.4		41.4		46		Fig. 22
113		大型棺	30		47.6	10.4	40.4		Fig. 22
115	上	壺形土器			34	11.6	40.8	口縁部打ち欠き	Fig. 31
115	下	甕形土器	34.8-37	28.8-30.6	40.6	10.9	35.1		Fig. 31
130	上	大型棺			73.9		61.2	口縁部打ち欠き	Fig. 22
130	下	大型棺	45.6		64.2	10	50.4		Fig. 22
131		壺形土器			26.7	8.6	38.4		Fig. 22
136	上	甕形土器	39.2-40.3		52.3	9.6	73		Fig. 22
136	下	大型棺	57.5-58.8	44.4-45.2	88.6	10.4	56.4		Fig. 22
137	上	大型棺	42.6-43.6	33.6-34.6	73.6	10.4	53.4		Fig. 23
137	下	大型棺	59.8		104.2	13.2	67.8		Fig. 23
138	上	鉢形土器	29.8-30.4		20.4	9.4	27		Fig. 32
138	下	甕形土器	26.6		44.7	10.8	38.2		Fig. 32
140	上	甕形土器	32.3-33.3	27-27.8	36.7	8	33		Fig. 32
140	下	甕形土器	35		59.3	6	39		Fig. 32
141	上	甕形土器	43-43.8	34.6-35	57.7	10	43.7		Fig. 33
141	下	甕形土器	41.8-42.2	34.5-34.8	52	9.6	39.7		Fig. 33
142	上	甕形土器	38.4-39.4		55.2	10.2	43.4		Fig. 23
142	下	大型棺	40.3-41.6	31-32.4	76.4	10.4	55.6		Fig. 23
143	上	壺形土器			20.1	7.3	26	穿孔あり・口縁部打ち欠き	Fig. 32
143	下	壺形土器	14.6		36	13		口縁部打ち欠き	Fig. 32
144	上	甕形土器	40.6-41.2	32.5-32.9	55.6	5.2	43.6		Fig. 33
144	下	甕形土器	28.2-34.4	30.8-31.8	58	9.8	41.9		Fig. 33
145	上	甕形土器	33.2		28.9	6.7			Fig. 33
145	下	甕形土器	31.4		29.3	7		穿孔あり	Fig. 33
146	上	壺形土器	30.2	28.5		10		口縁部打ち欠き	Fig. 23
146	下	甕形土器	37		118.6		97		Fig. 23
147	上	甕形土器	40.4-40.6		56.5	10.8	46		Fig. 23
147	下	大型棺	55.2	40	102.6	12.8	70.4		Fig. 23

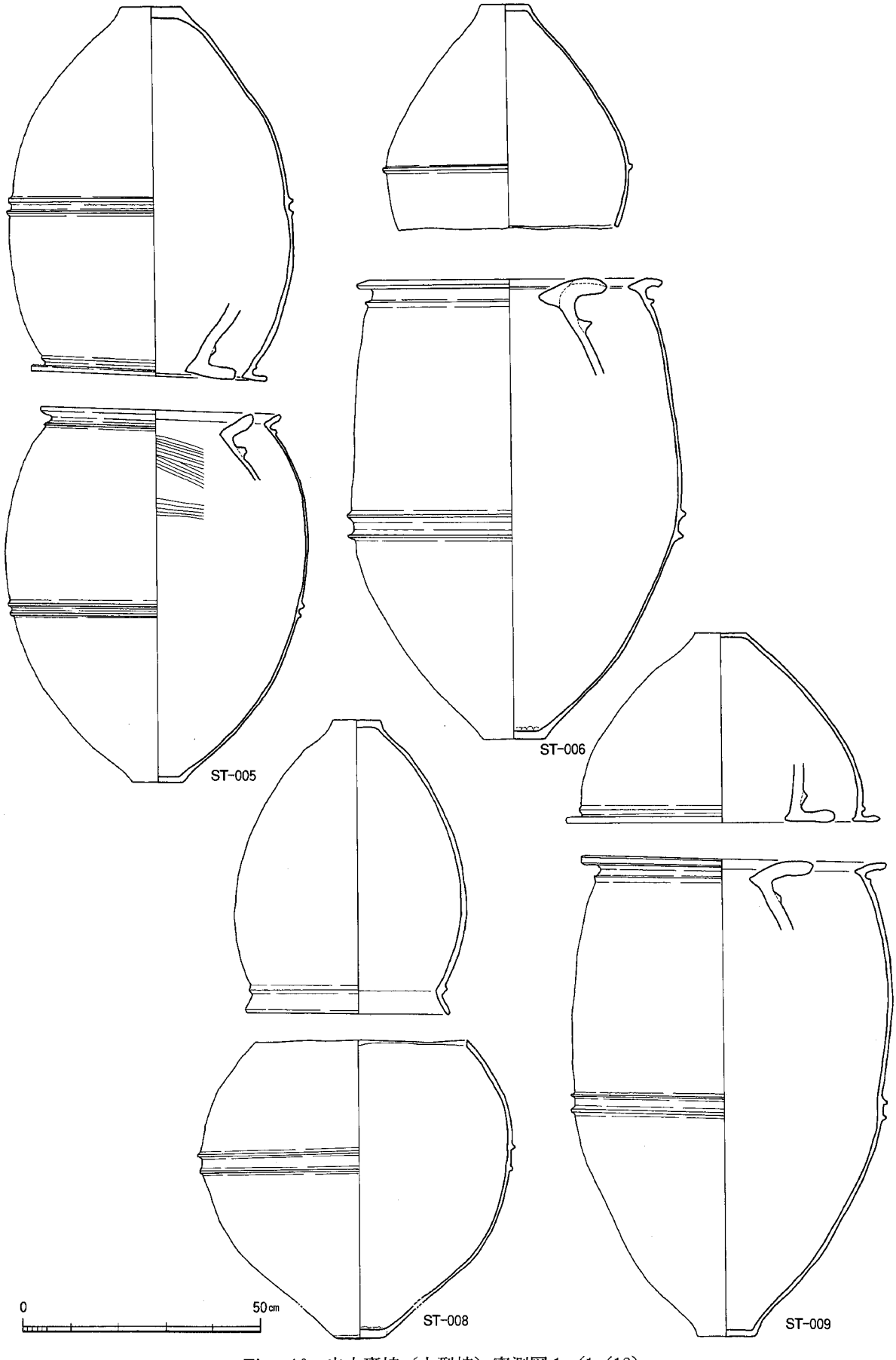


Fig. 16　出土甕棺（大型棺）実測図１（1／12）

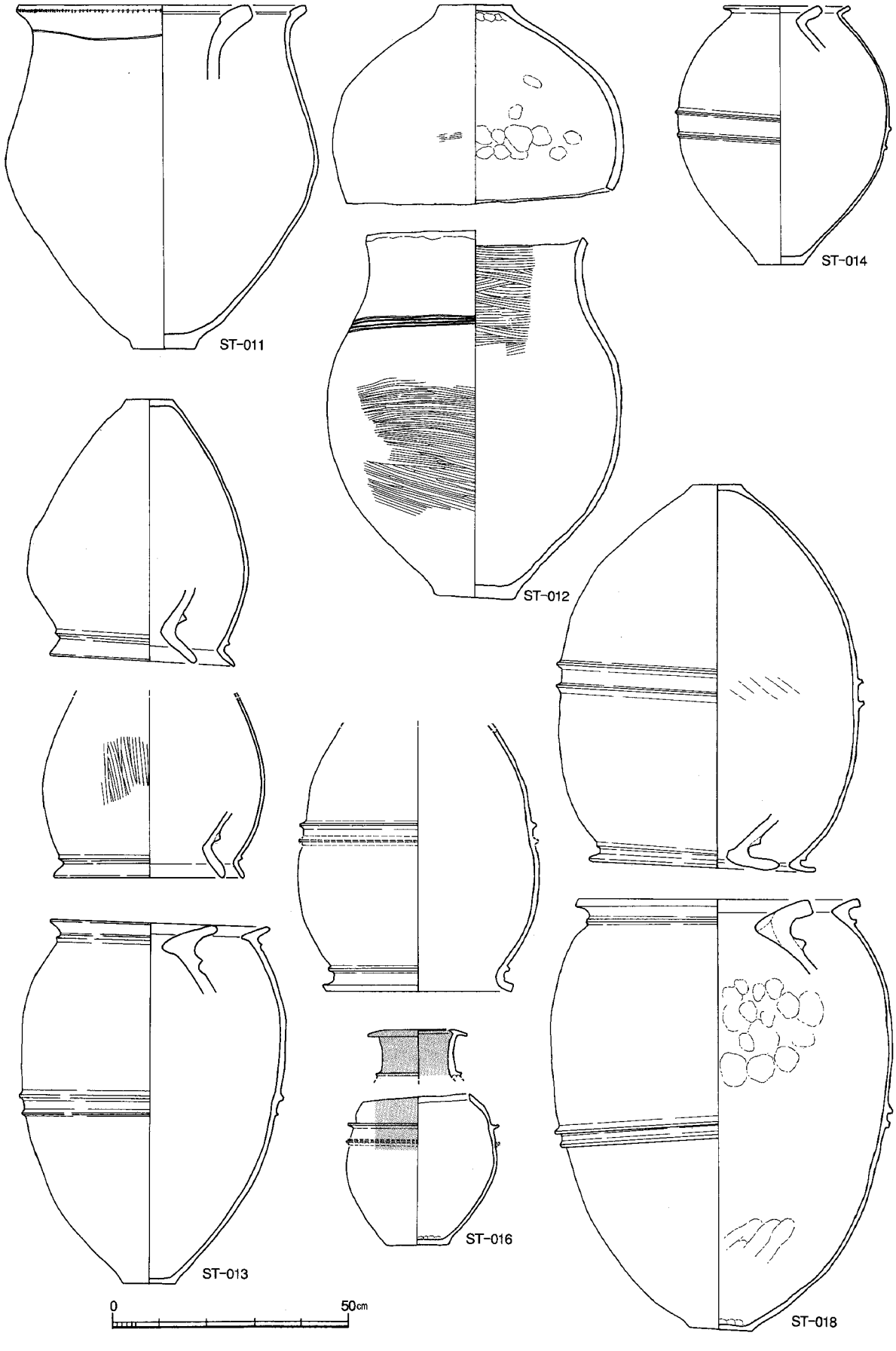


Fig. 17　出土甕棺（大型棺）実測図２（1／12）

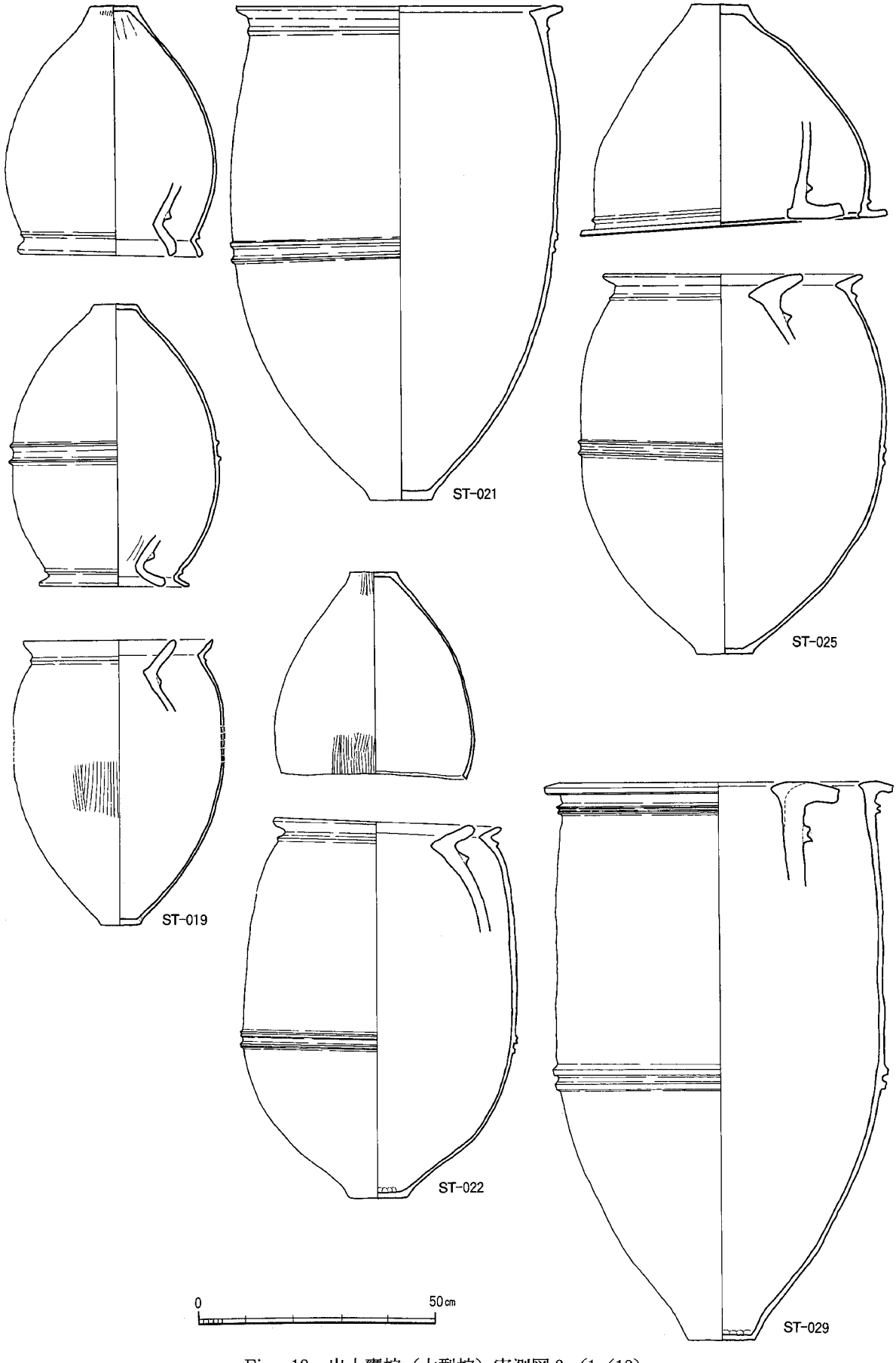


Fig. 18　出土甕棺（大型棺）実測図３（1／12）

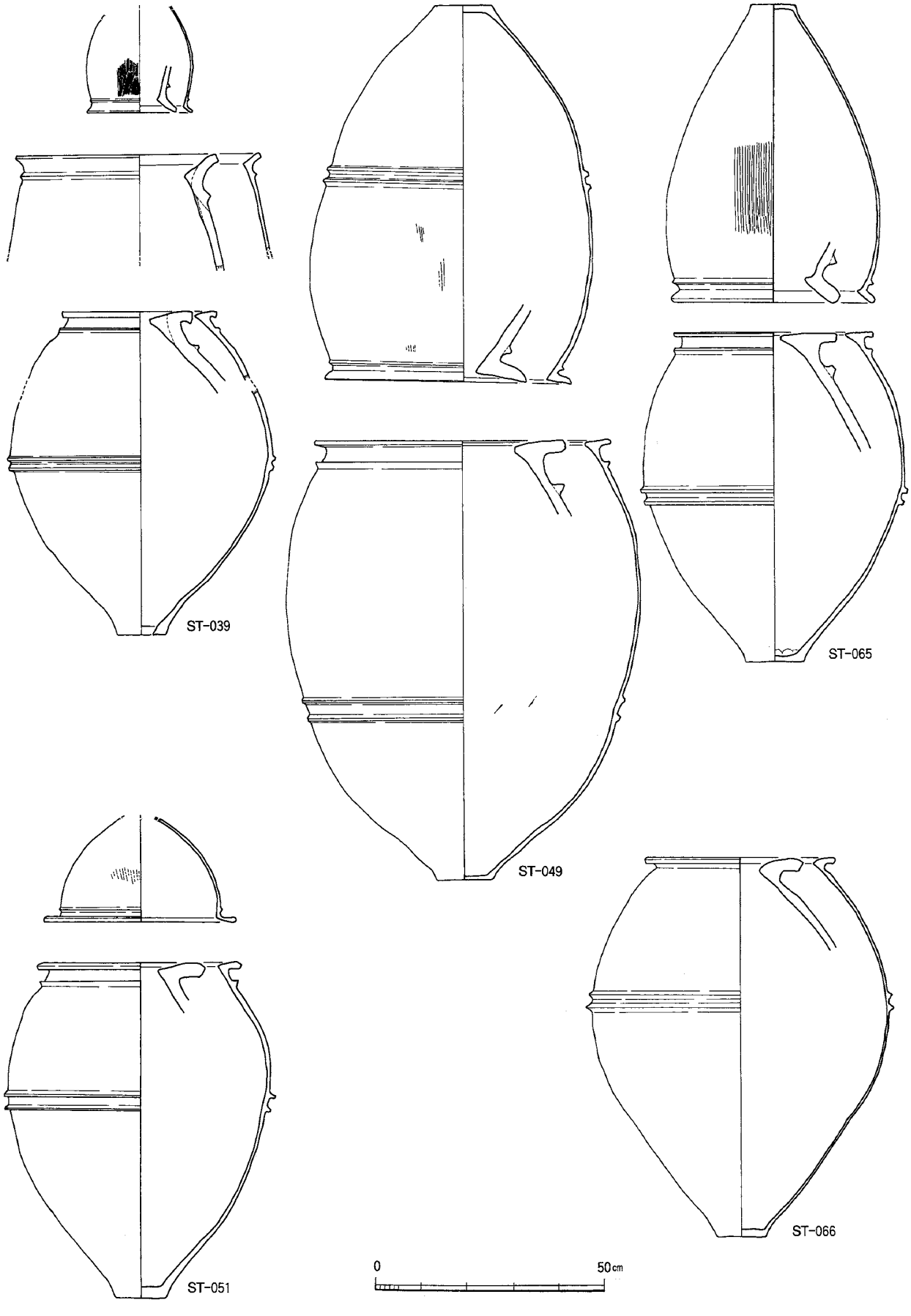


Fig. 19　出土甕棺（大型棺）実測図４（1／12）

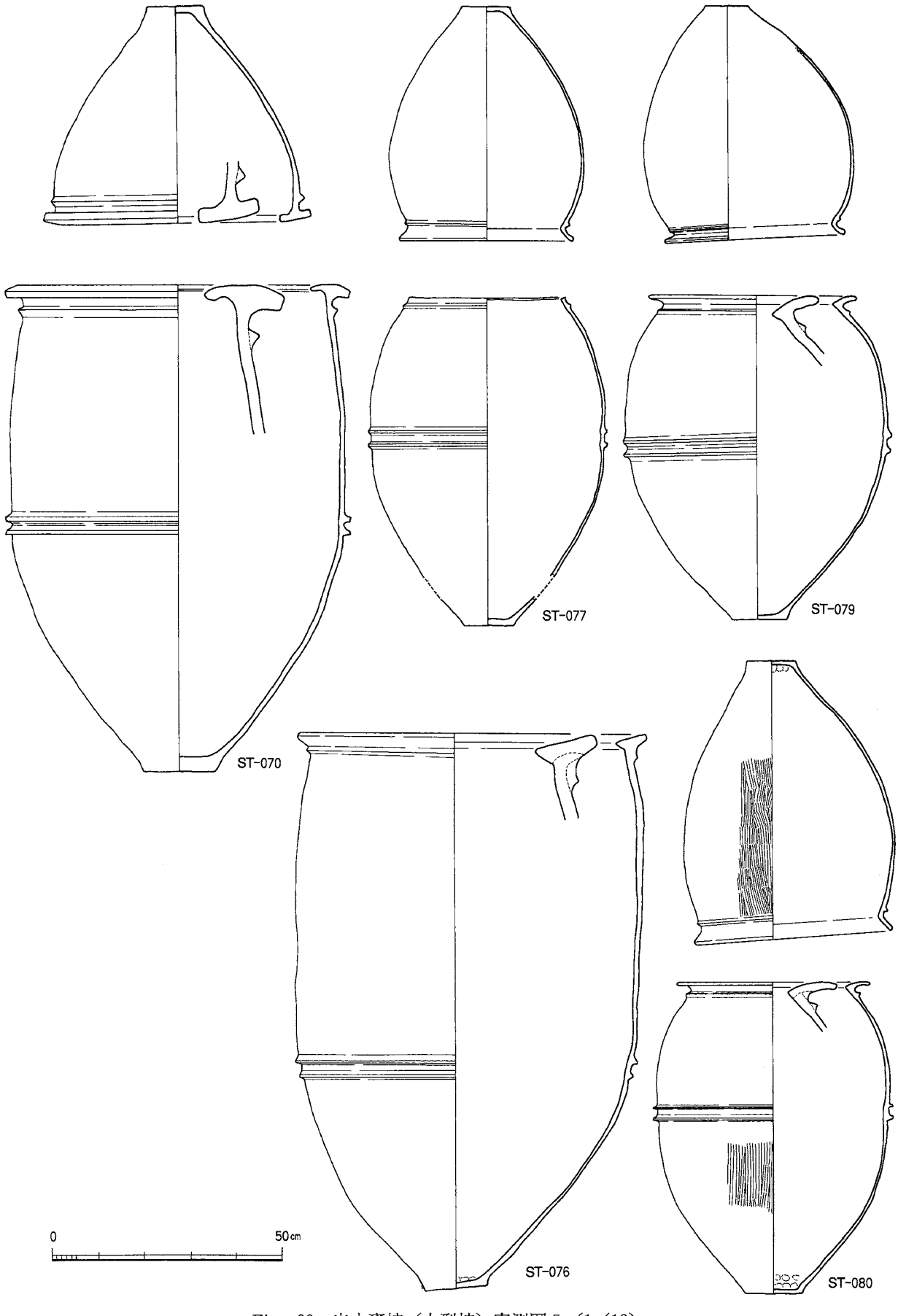


Fig. 20　出土甕棺（大型棺）実測図５（1／12）

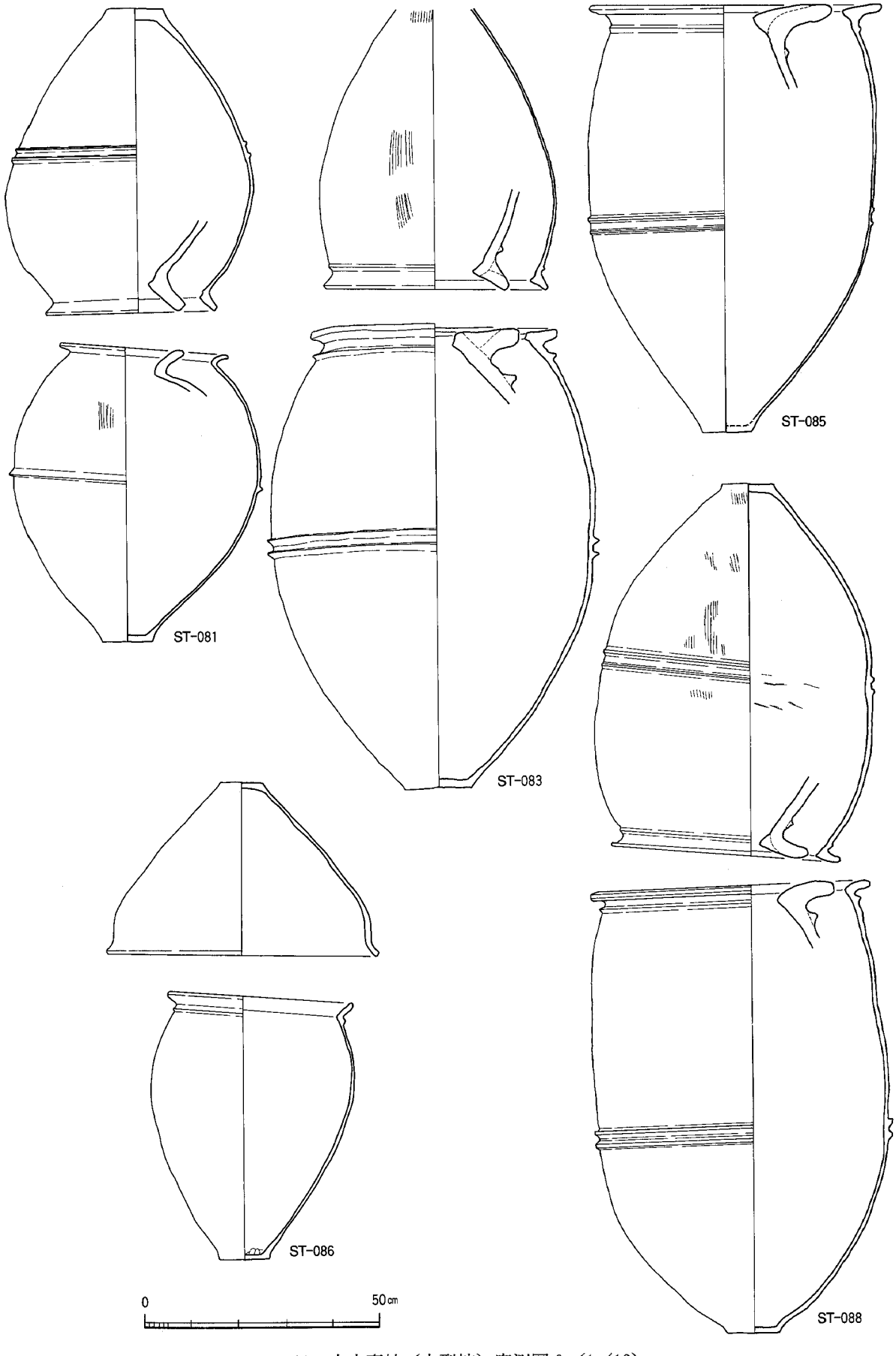


Fig. 21　出土甕棺（大型棺）実測図６（1／12）

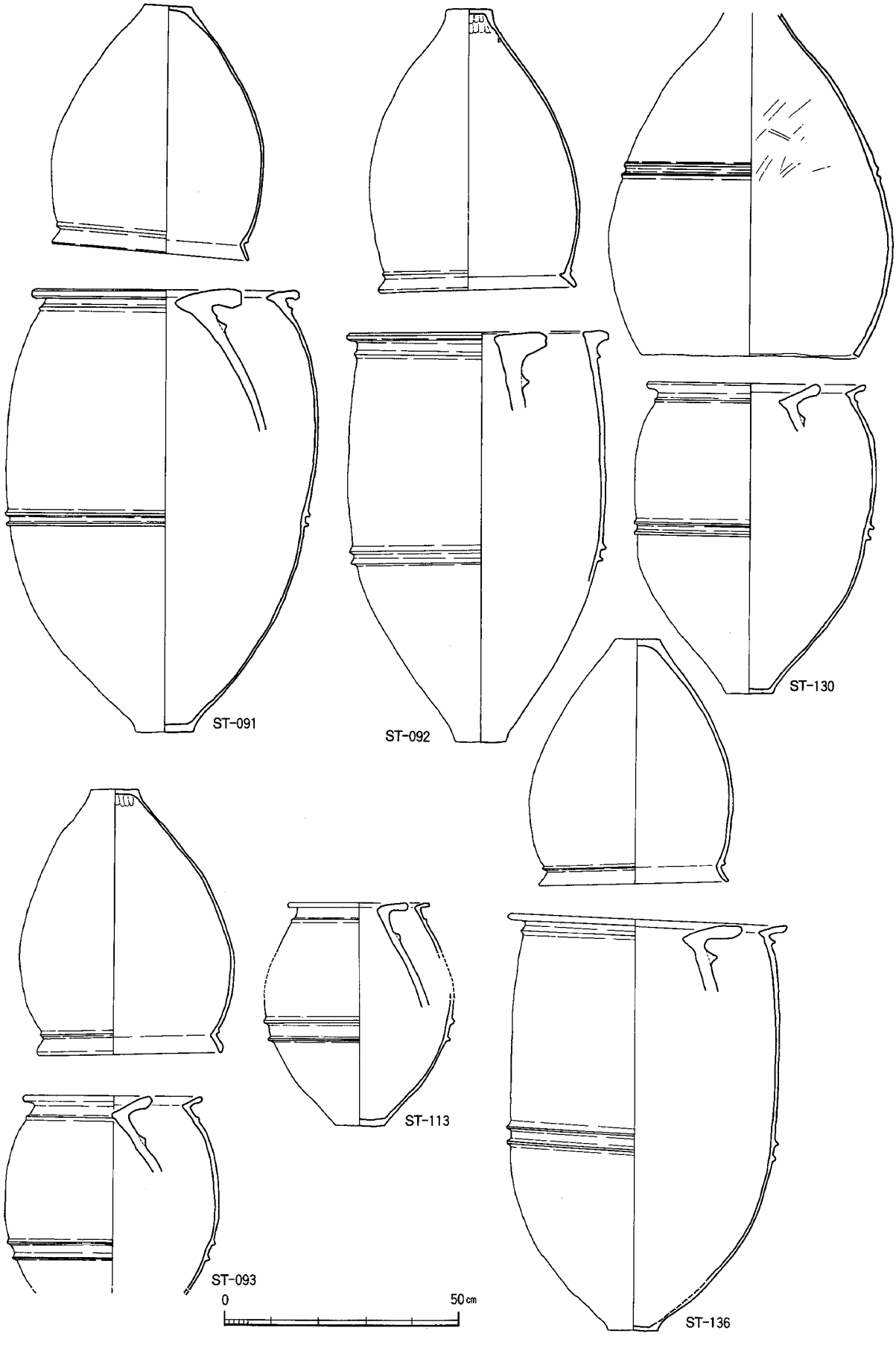


Fig. 22　出土甕棺（大型棺）実測図７（1／12）

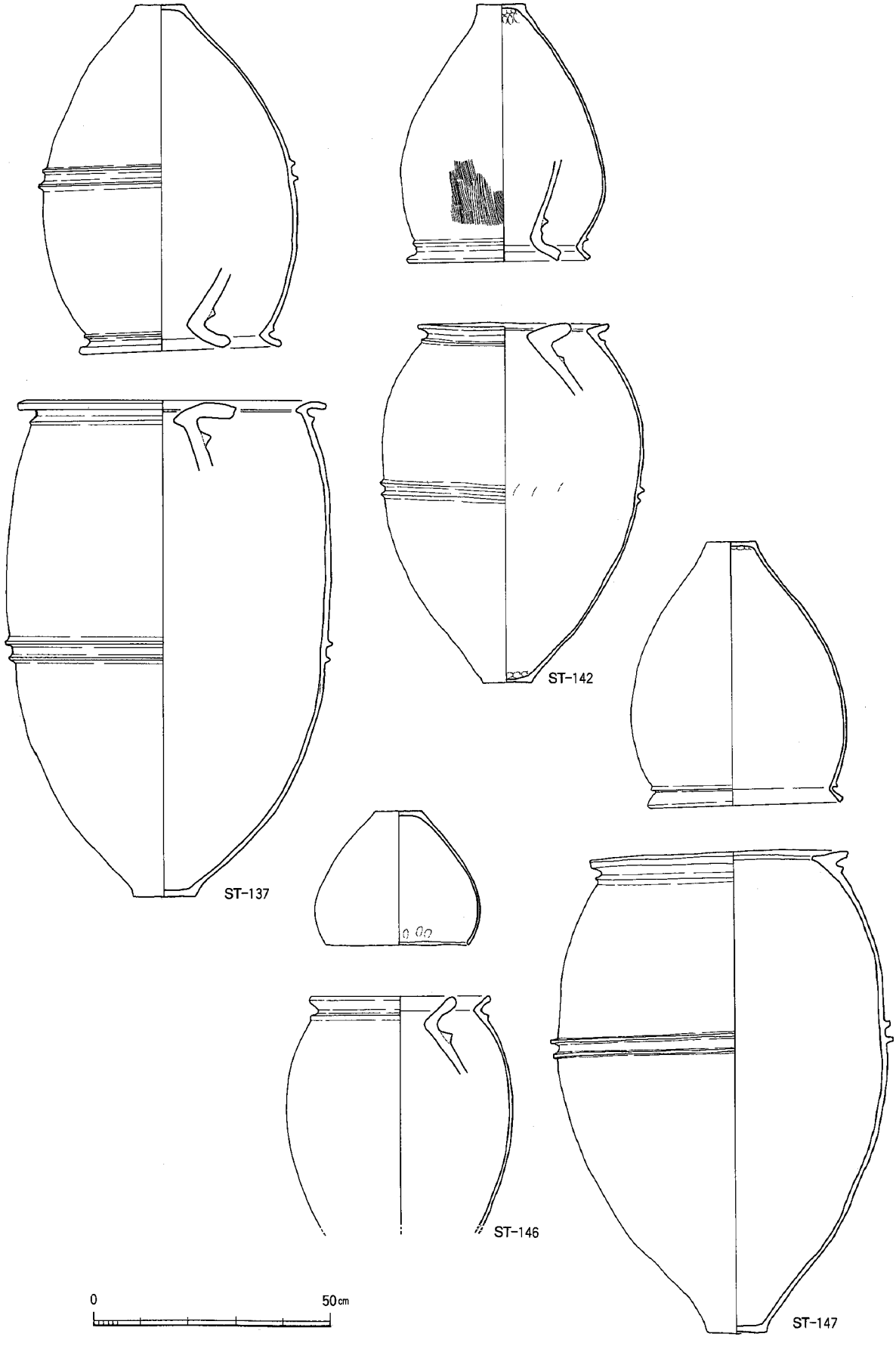


Fig. 23　出土甕棺（大型棺）実測図８（1／12）

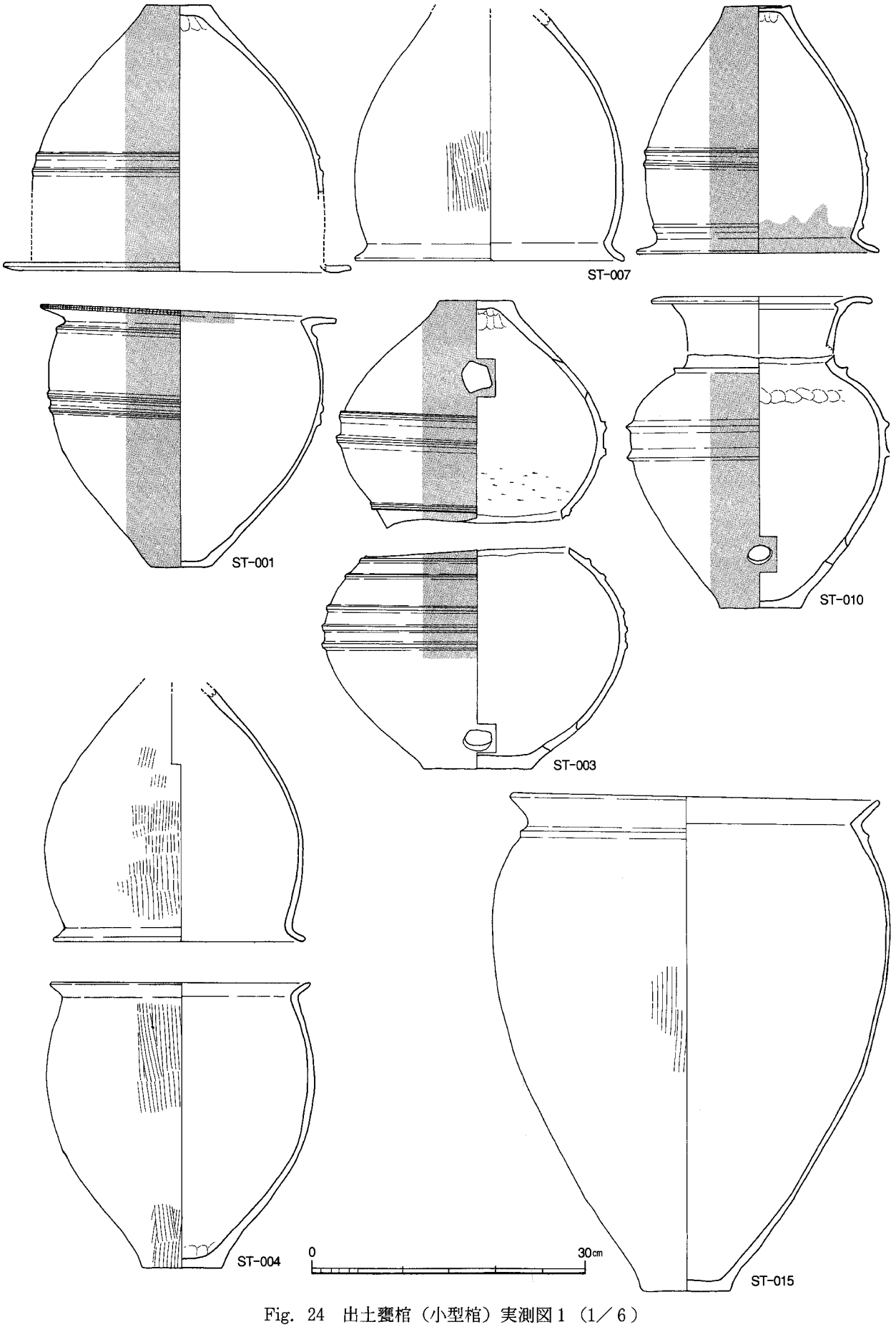


Fig. 24　出土甕棺（小型棺）実測図１（1／６）

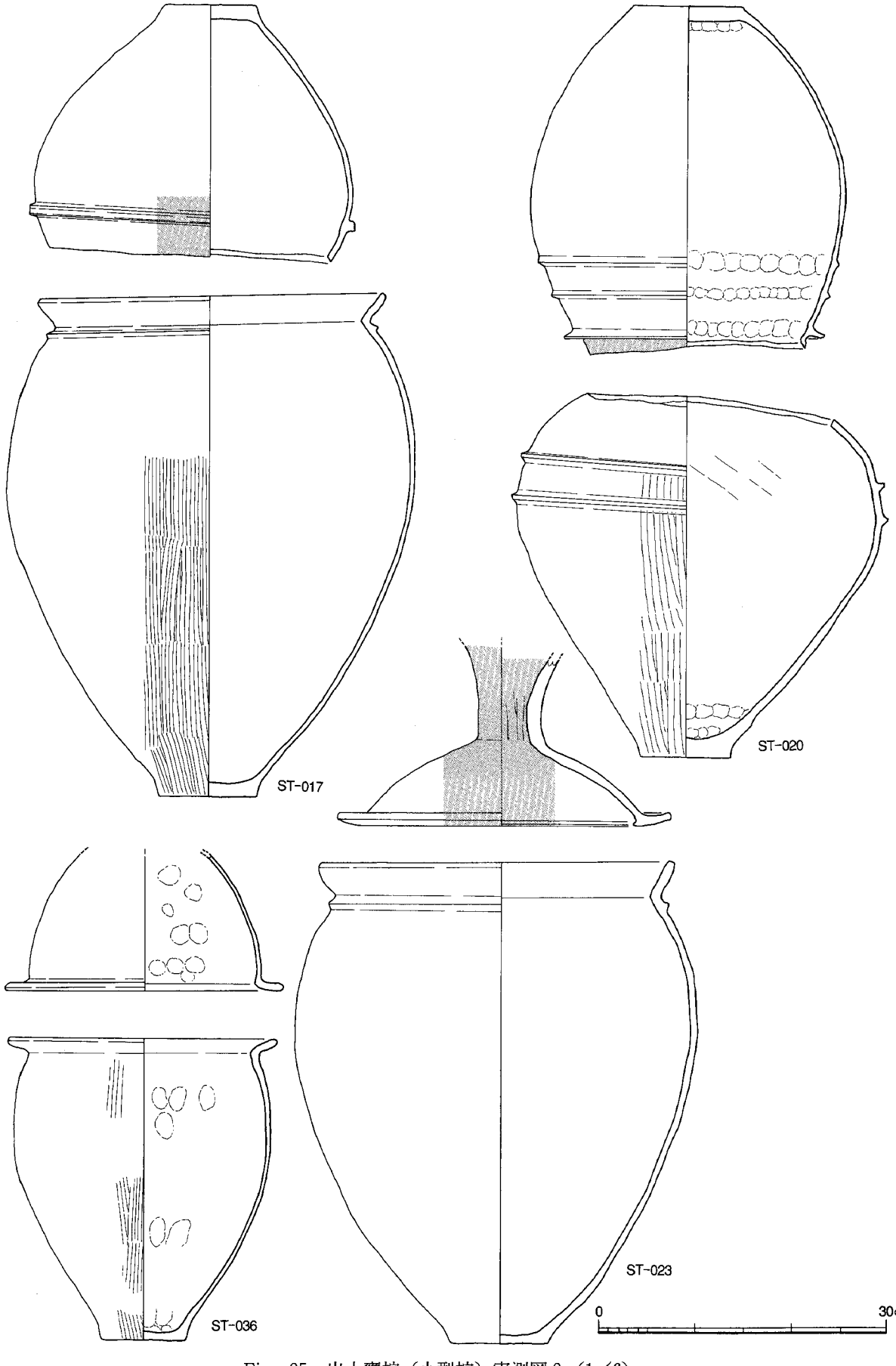


Fig. 25　出土甕棺（小型棺）実測図２（1／6）

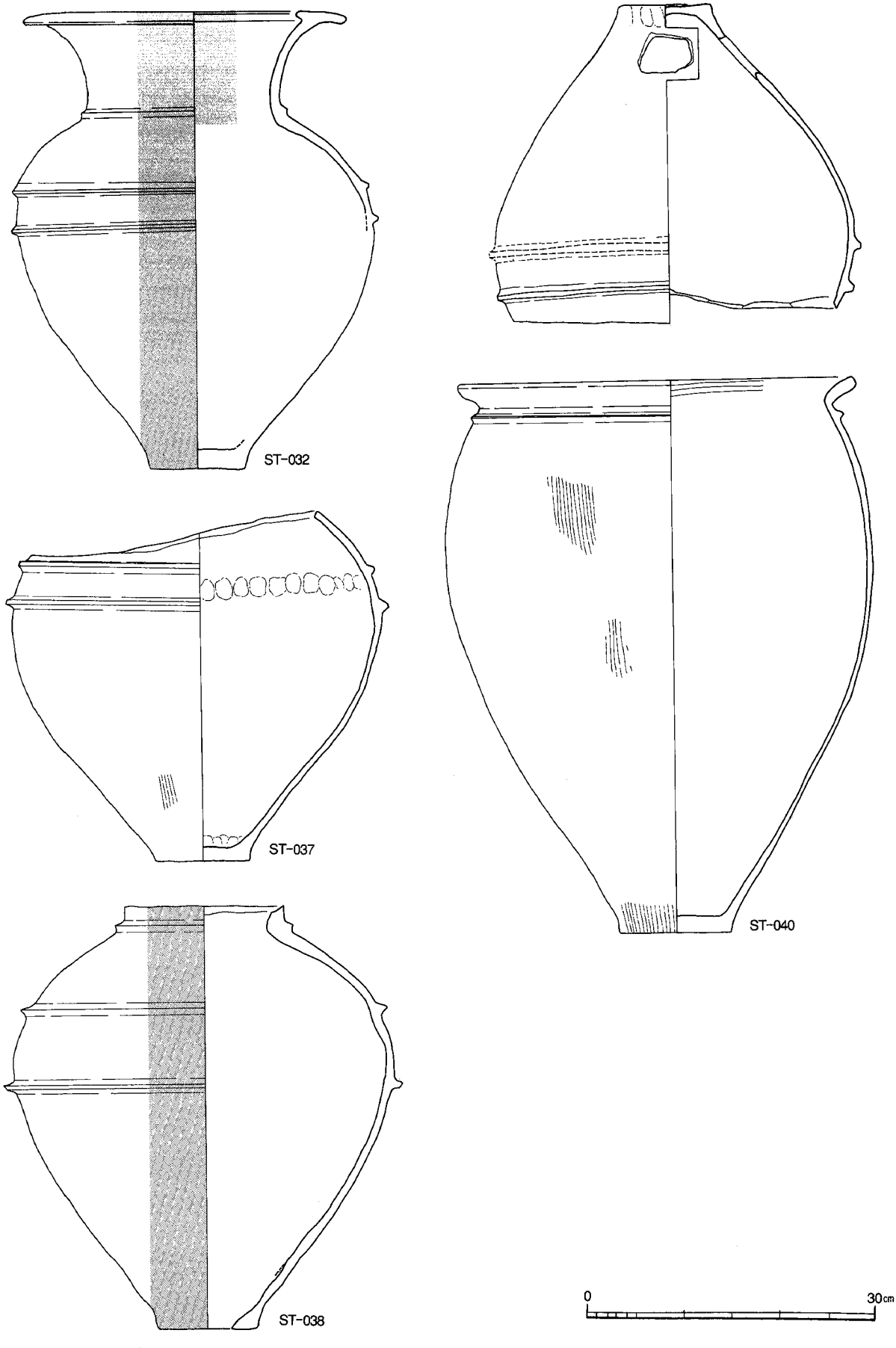


Fig. 26　出土甕棺（小型棺）実測図３（1／6）

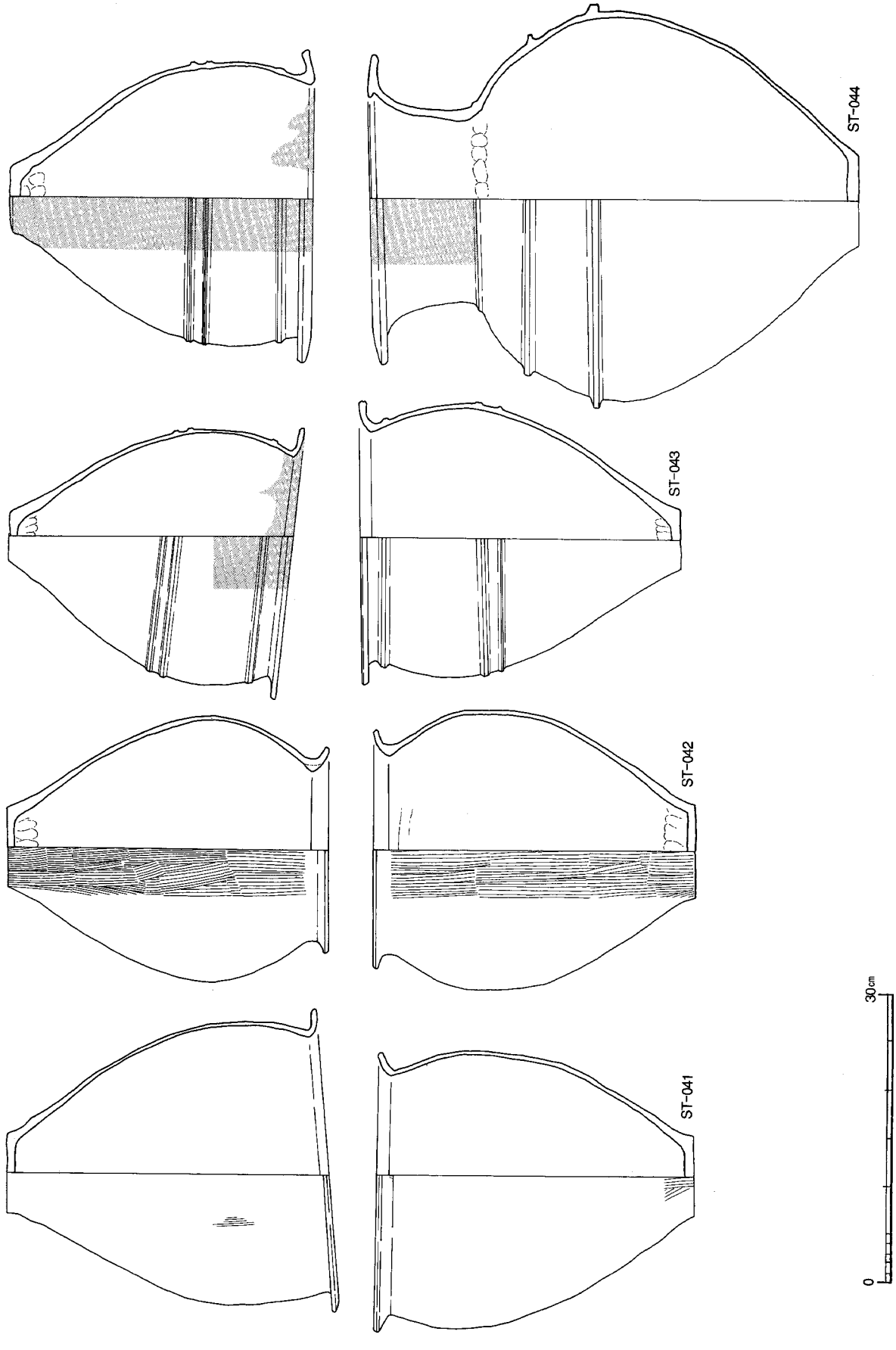


Fig. 27　出土甕棺（小型棺）実測図４（1／6）

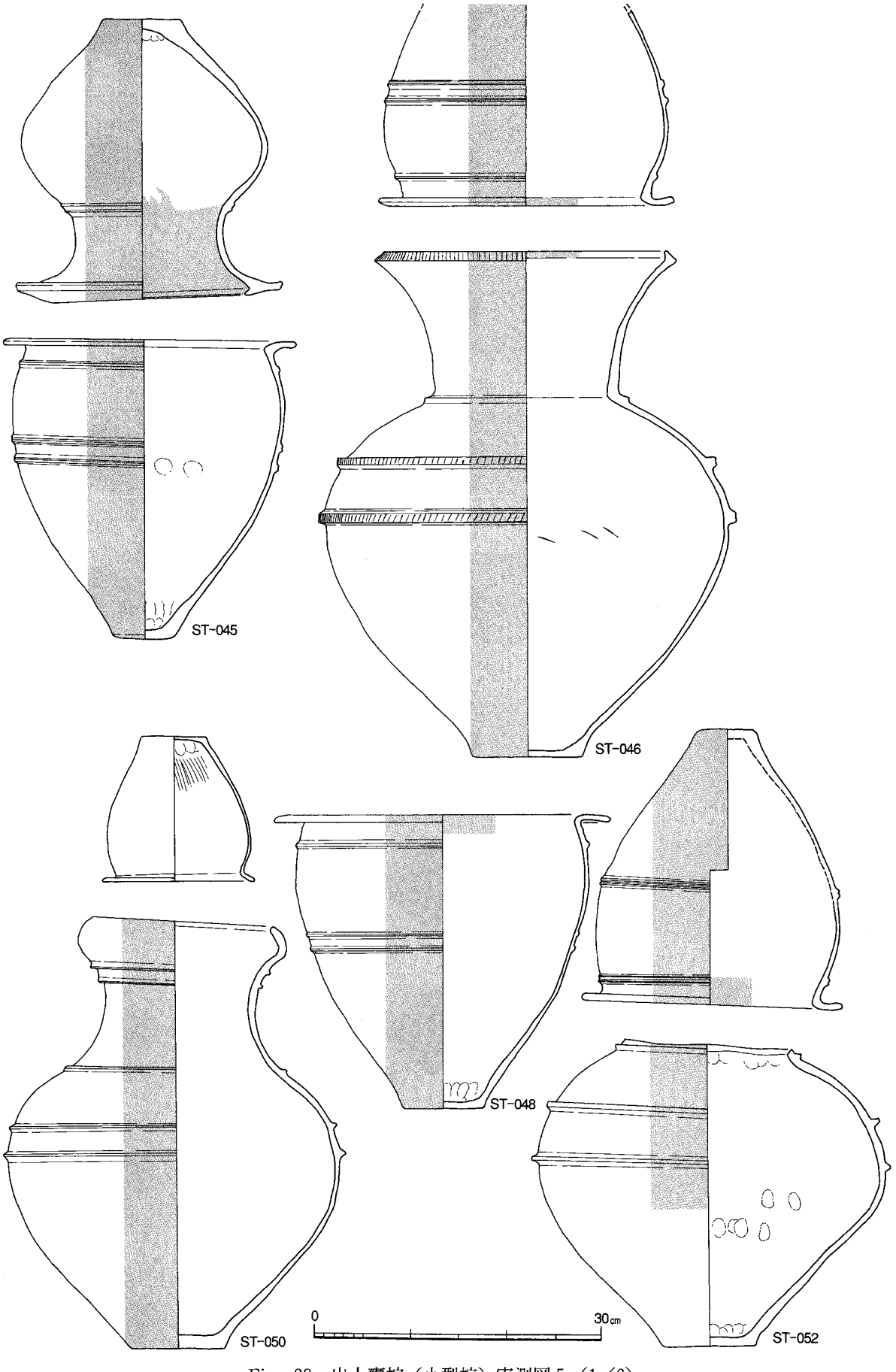


Fig. 28　出土甕棺（小型棺）実測図５（1／6）

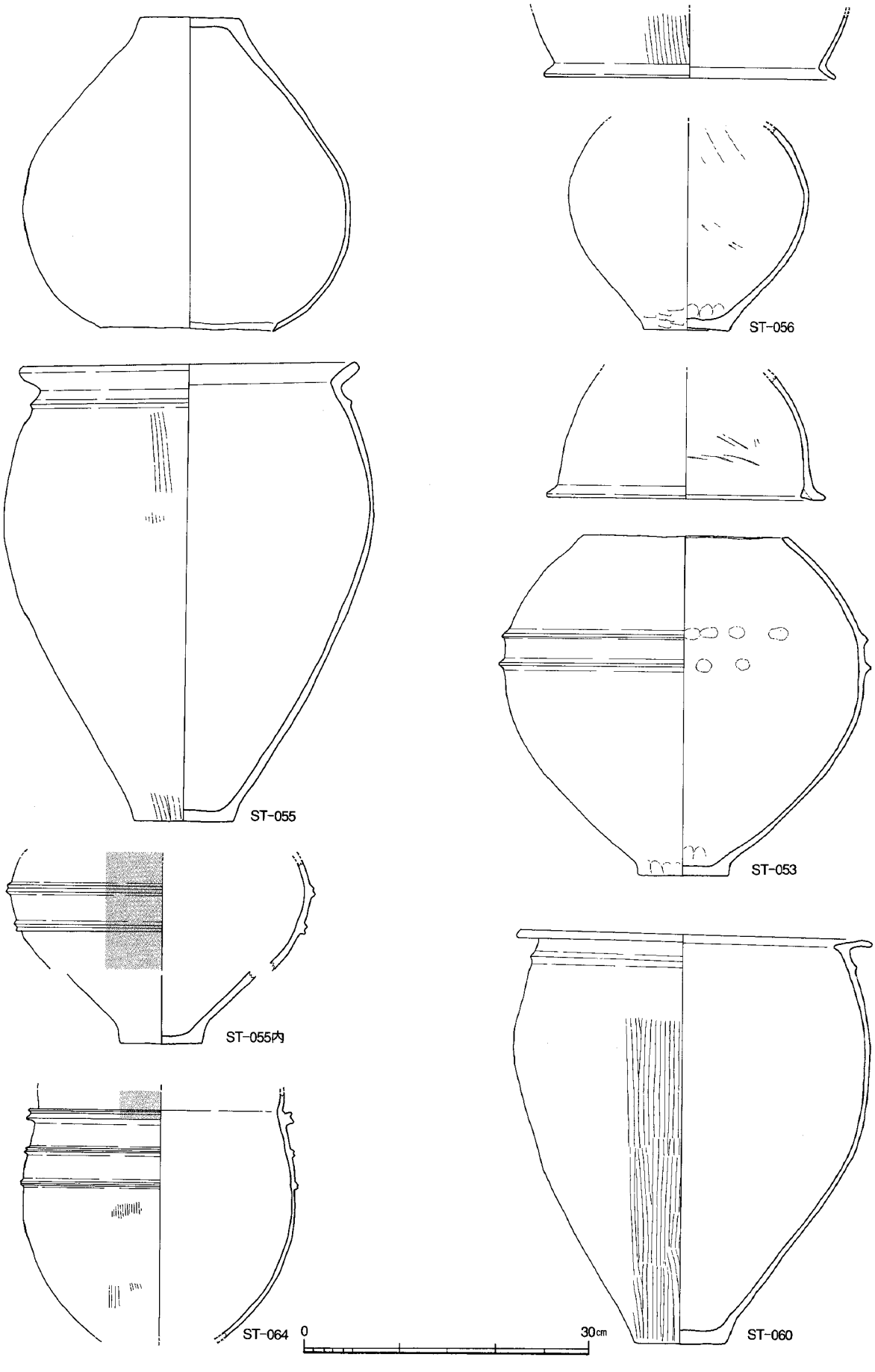


Fig. 29　出土甕棺（小型棺）実測図６（1／6）

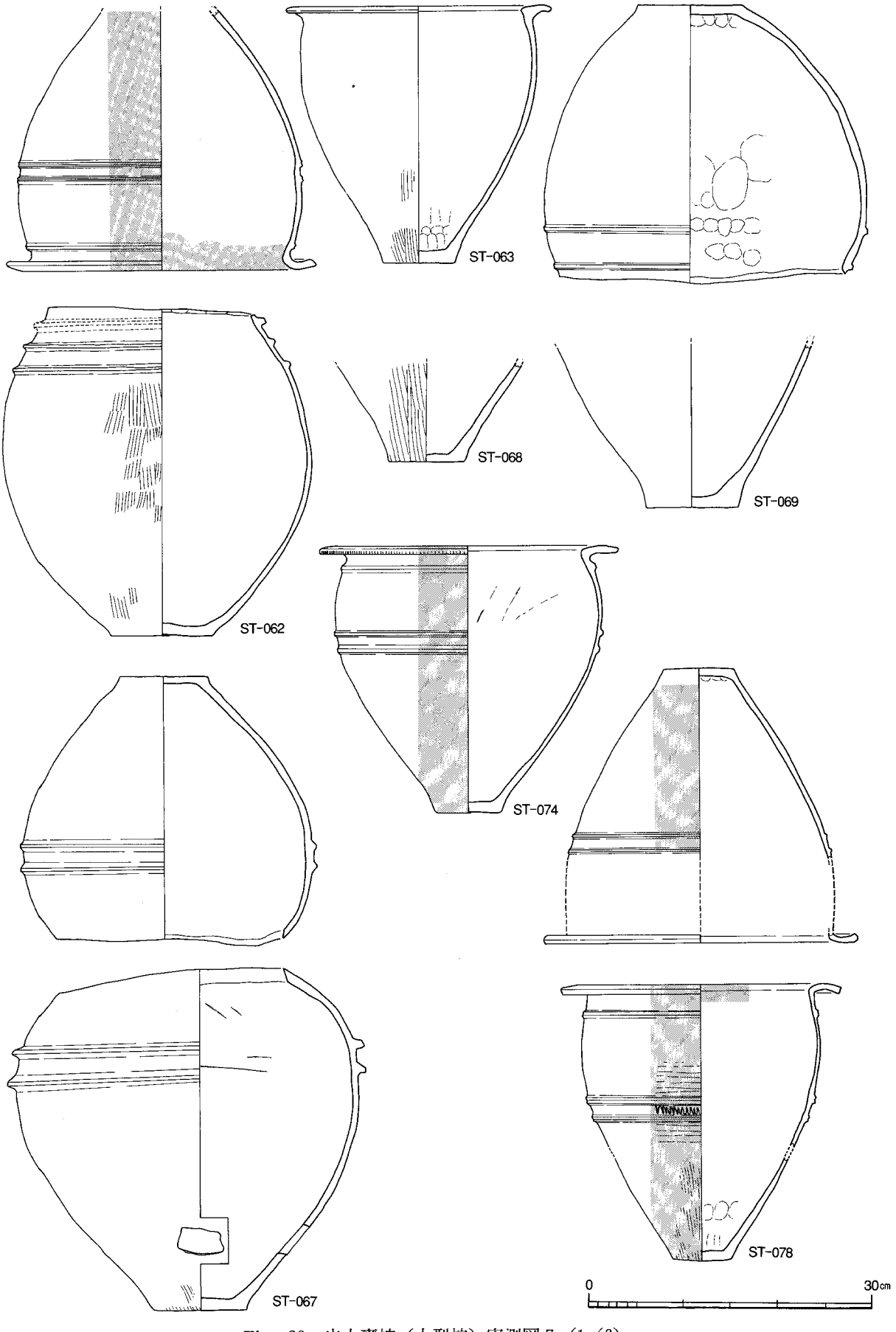


Fig. 30　出土甕棺（小型棺）実測図７（1／6）

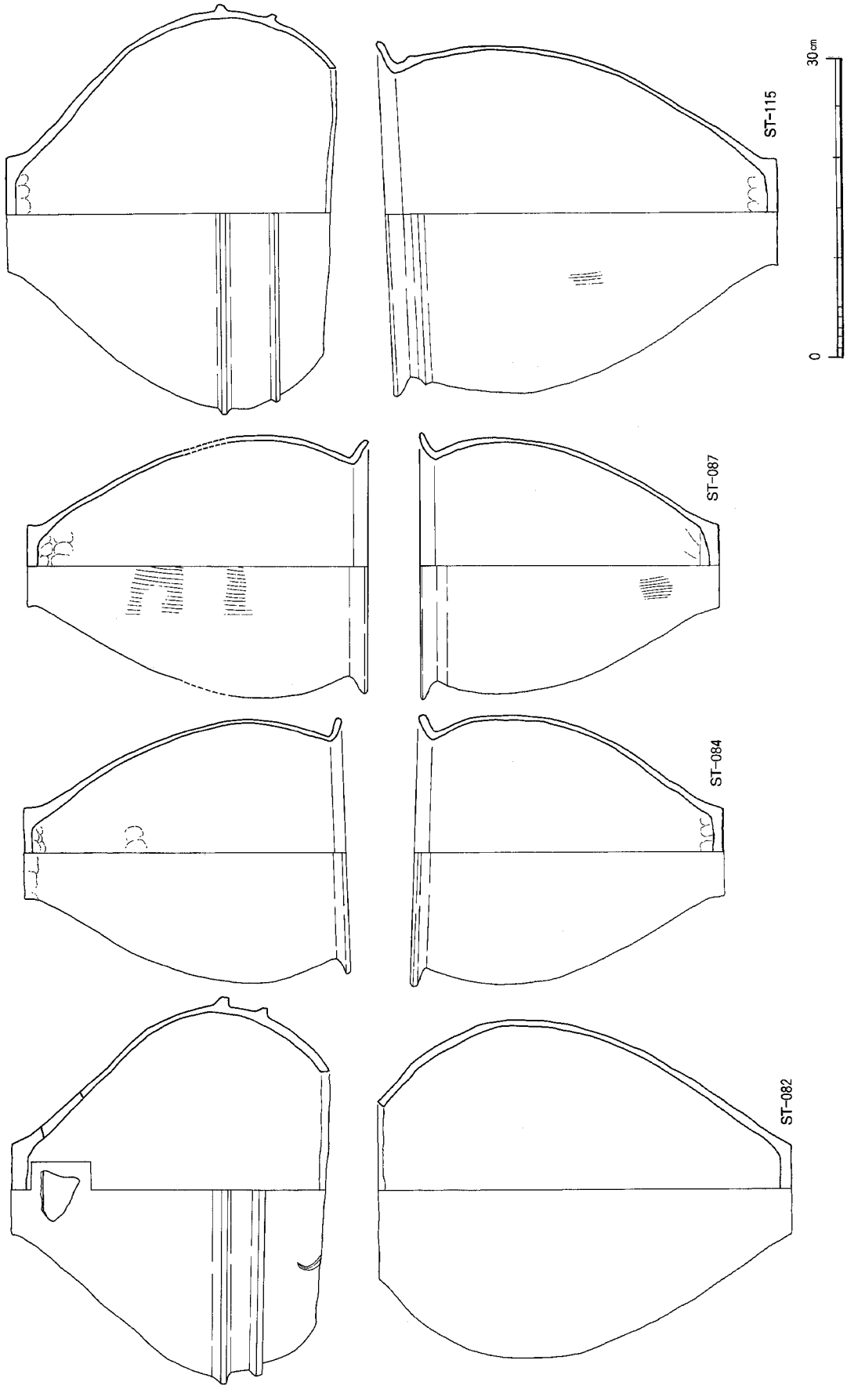


Fig. 31　出土甕棺（小型棺）実測図８（1／6）

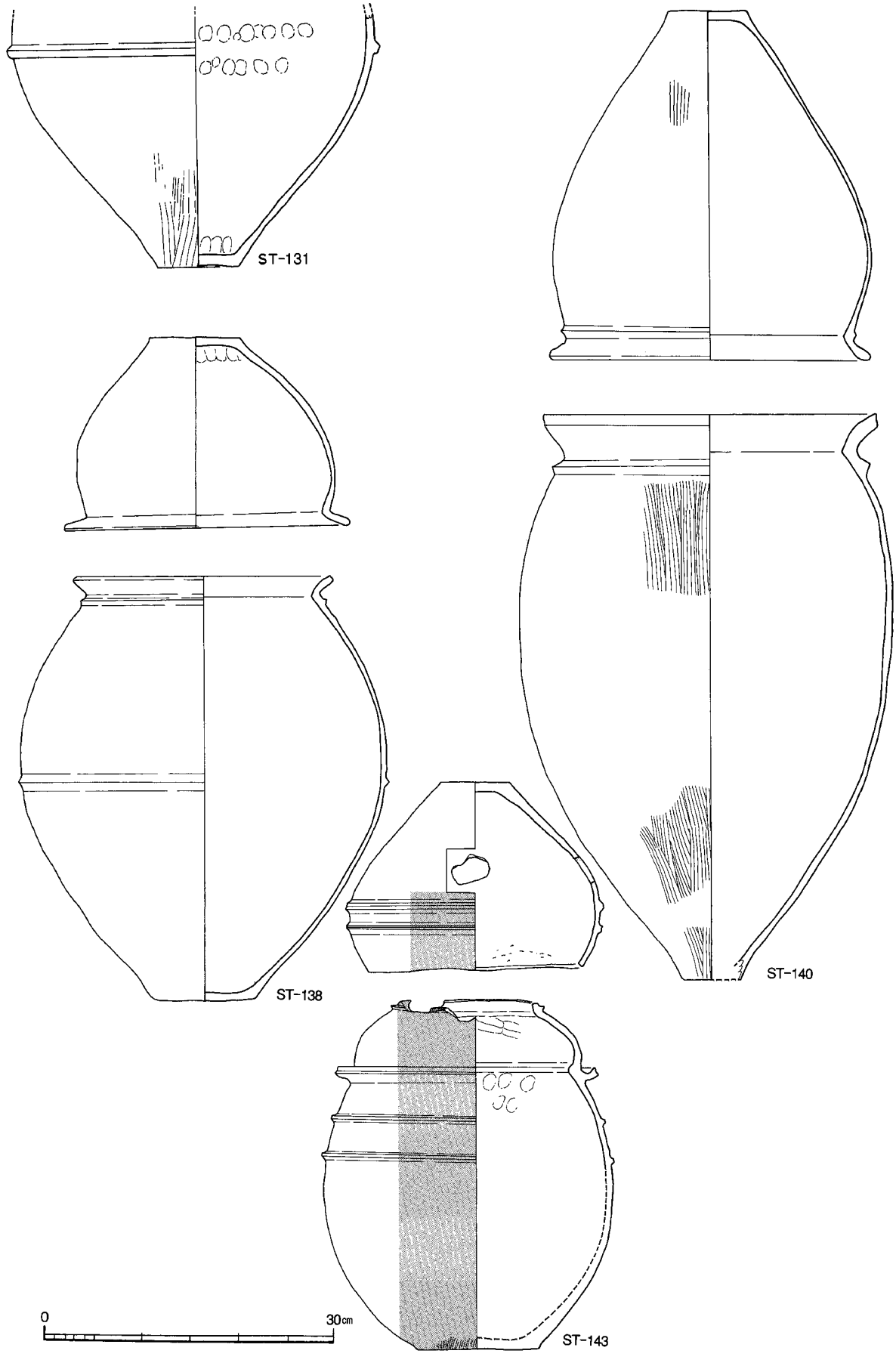


Fig. 32　出土甕棺（小型棺）実測図９（1／6）

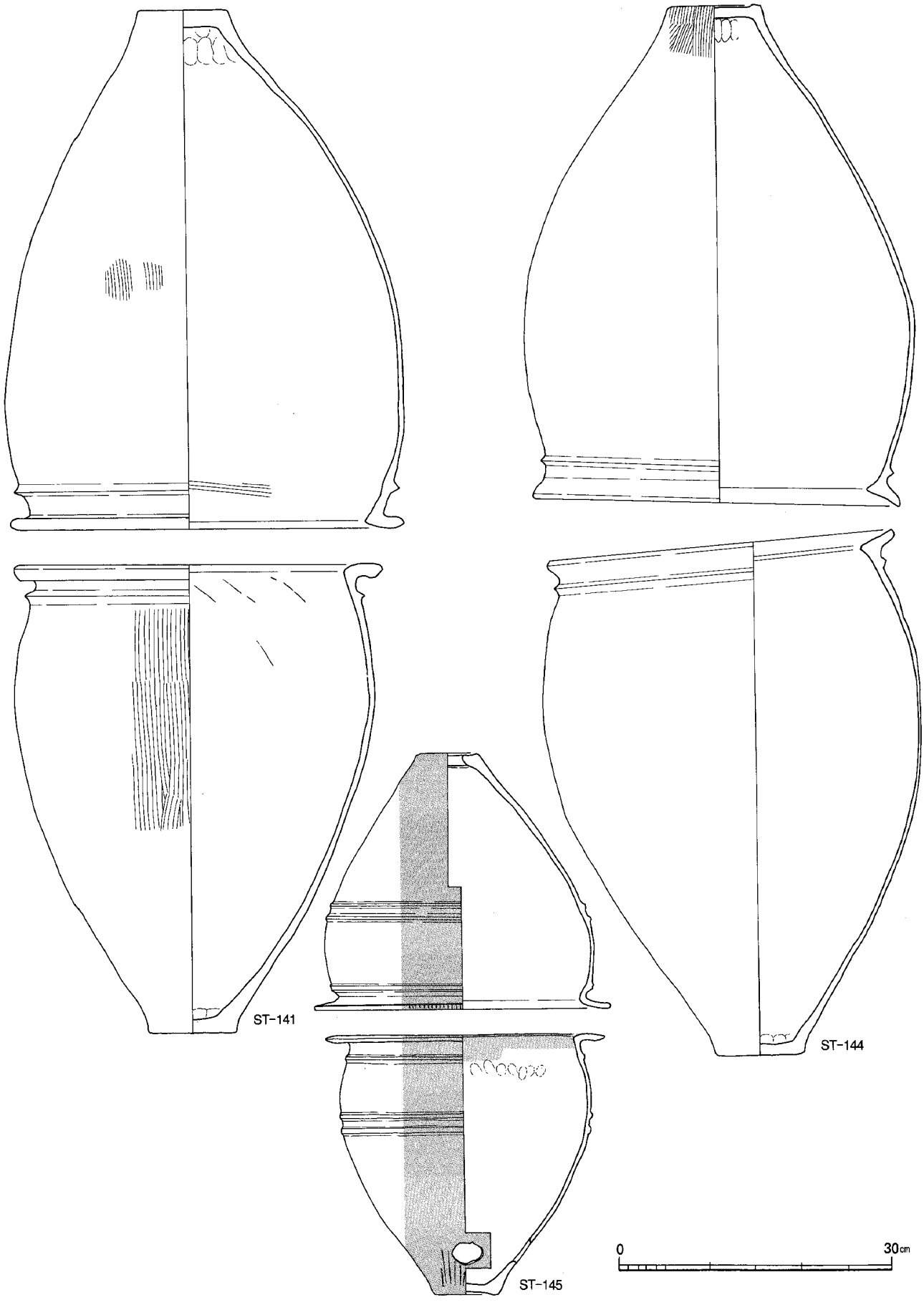


Fig. 33　出土甕棺（小型棺）実測図10（1／6）

2）落とし穴状土壙（SK）（Fig. 35）

2区全体で、8基の落とし穴状土壙を検出している。全て、上段の尾根上平坦面に位置する。どれからも遺構に直接関連する遺物は出土していない。時期は縄文時代以降と見られ、形態は2種類に分類可能である。

SK－184　平面形は長楕円形を呈する。全長1.75m、幅77cm。床面はやや窪み、壁面は急傾斜で立つ。東側が若干崩れるが、埋没時の雨水の流れ込みによるものとみられる。

SK－188　平面形は長楕円形を呈する。全長194cm、幅60cm、深さ1mを測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がるが、壁面上方は崩れている。床面は北側が若干深くなるが、ほぼ平坦である。

SK－189　平面形は長方形とみられる。北側はSK－189に切られており、正確な形は不明。全長1.15m、幅は推定で90cm前後。深さは50cmで、壁面はほぼ直に立つ。床面中央に直径20cmのピットが掘られる。ピットの深さ60cm。

SK－192　平面形は長楕円形を呈する。全長2.26m、幅90cm。大きく削られていると見られ、残存する深さは52cmである。土壙墓の可能性もある。

SK－194　平面形は長方形を呈していたと見られる。現況は北東側が大きく崩れる。現況で全長1.15m、幅82cmで、床面までの深さ1.2mを測る。床面中央に径40cmのピットがある。周壁は垂直に立ち、床面は平坦で全体の形は箱状になる。

SK－195　平面形は長方形を呈する。現況では上端周囲が崩れている。全長90cm、幅68cm、深さ91cm。床面は平坦で、壁は垂直に立ち上がる。床面に直径20cmのピットが掘られるが、深さは5cm未満と浅い。

SK－198　平面形は長方形を呈する。全長1.27m、幅96cm、深さ77cm。土壙西側が二段掘り状になるが、埋没時の崩落によるものであろう。壁面は東側でほぼ垂直に立ち、西側で緩くなる。床面は平坦で中央やや東寄りに直径30cmのピットが掘られる。ピットの深さは55cmを測り、ピット断面は下方で細くなる。

SK－199　平面形態は長方形で、上端部分の崩落が著しい。全長1.05m、幅80cmで、深さ98cm。床面はほぼ平坦で、中央に径30cmのピットを掘込む。ピットは深さ40cmで、断面は円筒状になる。

3）焼土壙（SK）（Fig. 36）

2区全体で8基の焼土壙を検出する。SK－200、SK－201からは遺物が出土している。遺構の性格は製炭用とみられ、内野、脇山地区等で出土するものと構造は基本的に同じである。SK－176は横穴をもち、他とは構造が異なるものとみられる。

SK－175　調査区上段面に位置する。全長1.88m、幅1.3m。深さ48cm。平面形は隅丸台形とみられ、西側がやや狭くなる。全長床面はほぼ水平で、壁は床面から緩く開いて立ち上がる。周壁は一様に強く被熱して硬化する。

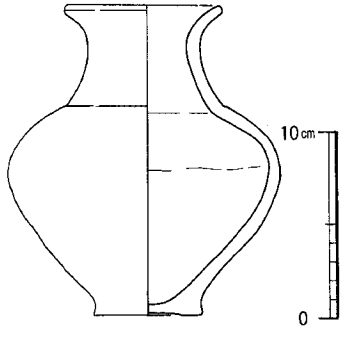


Fig. 34　ST－012 出土副葬小壺
実測図（1／4）

SK－176　調査区上段面南側に位置する。周囲が撹乱で破壊され、遺構の全体は不明で、遺存するのは周壁と横穴部分のみである。横穴は全体が強く被熱を受けて硬化している。横穴付近の焼土幅は50cm、高さ30cmで、横穴付近を中心にえぐれた形になるが、本来の遺構の形状をとどめたものかどうか不明。

SK－177　平面形は不整三角形を呈する。全長1.38m、幅1.07m、幅22cm。床面は南側がやや下がるが平坦で、周壁は床から

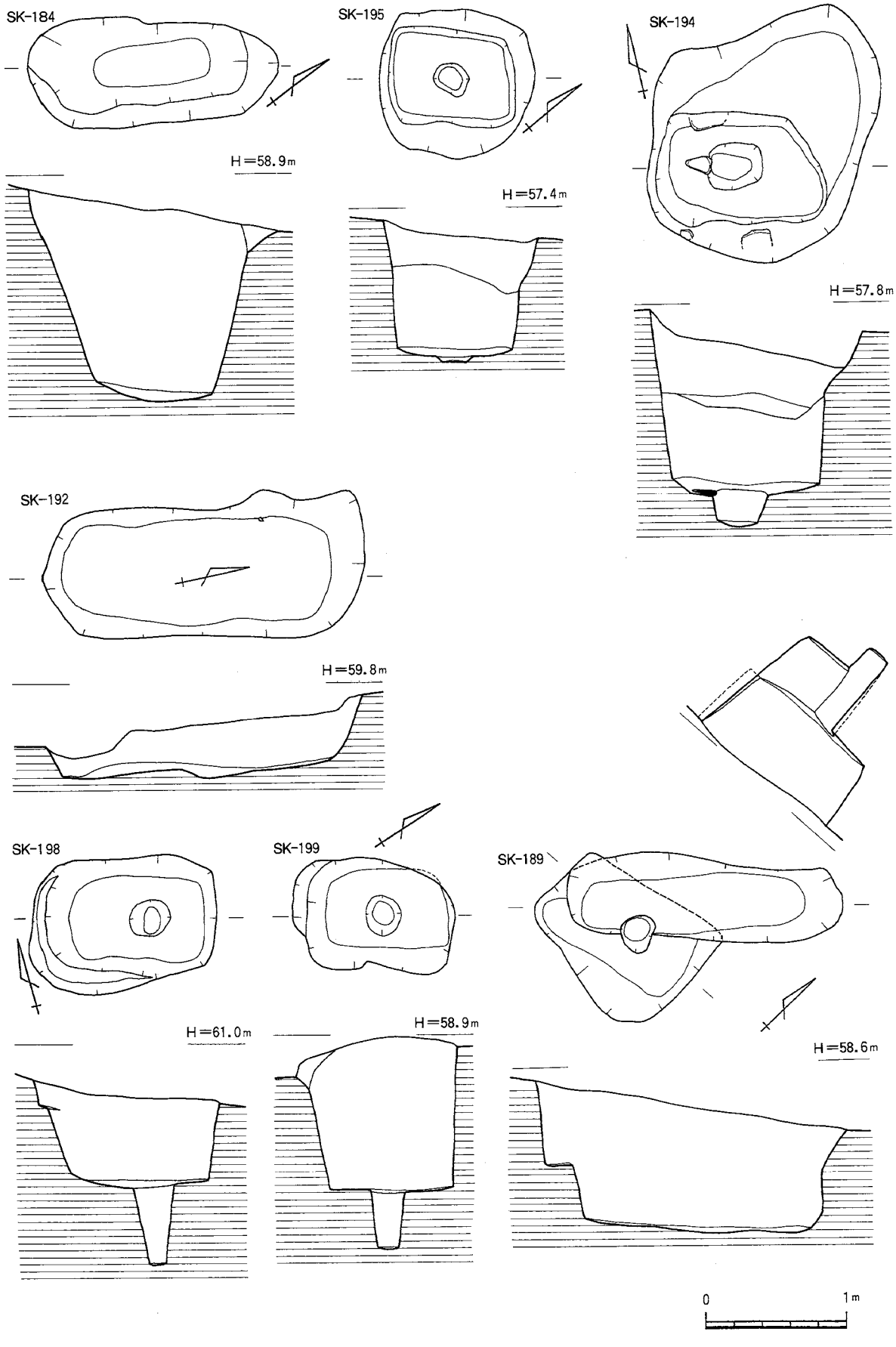


Fig. 35　落とし穴状土壙実測図（1／40）

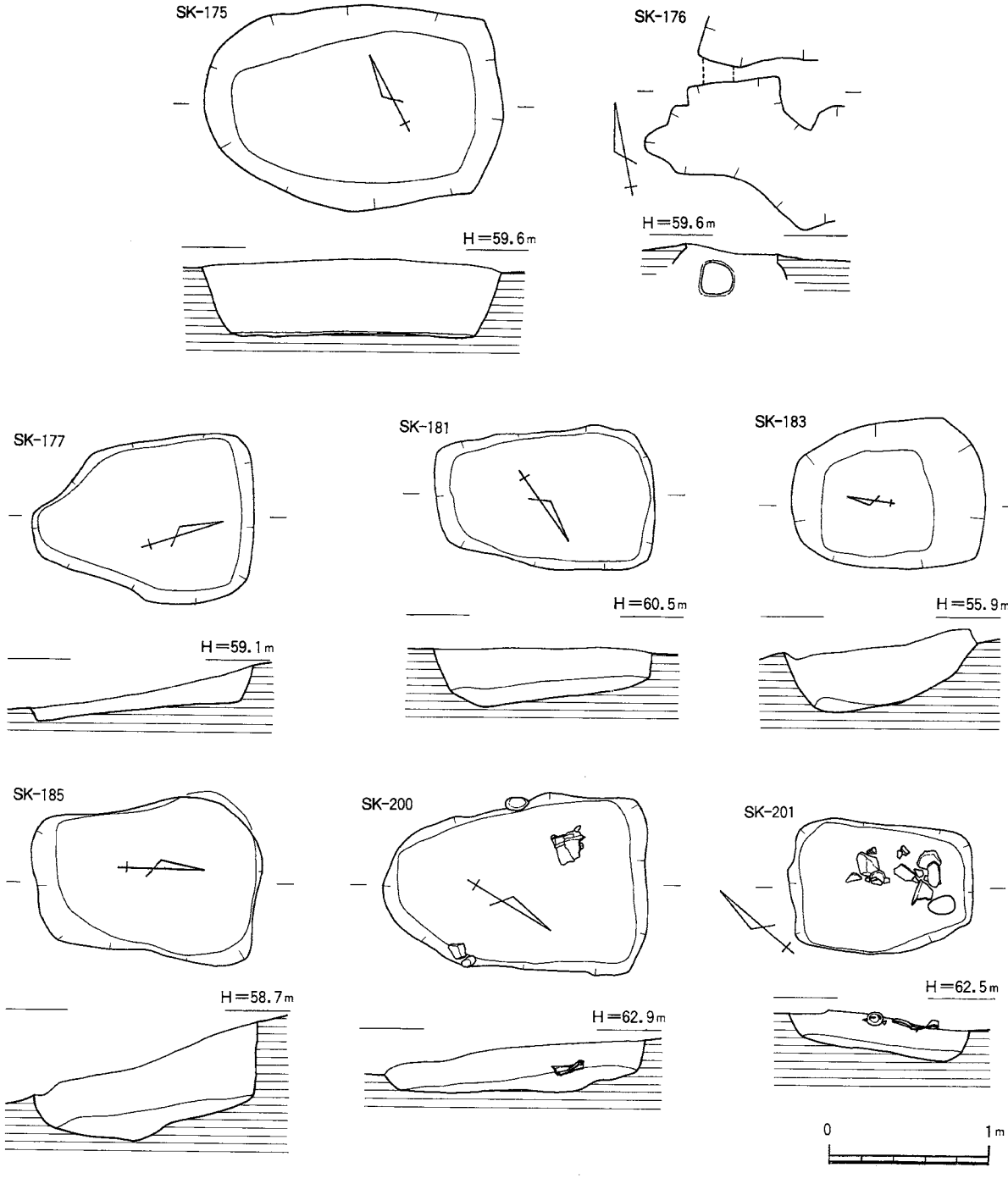


Fig. 36　焼土壙実測図（1／40）

緩く開いて立ち上がる。周壁の被熱は強くなく、北側壁面で赤変が認められる程度である。

SK－181　調査区上段に位置する。平面形は台形状を呈する。全長1.38m、幅9.1m、深さ3.6m。床面は南側が低く落ち、浅い摺鉢状になる。壁面は床からわずかに開いて立ち上がり、北側壁はやや直に立ち上がる。周壁は南側で特に強く被熱し、赤変する。

SK－183　調査区上段に位置する。平面形は台形を呈するが、床面は隅丸方形を呈し、全体に形が崩れる。全長1.22m、幅95cm、深さ43cm。床面は歪んで凹凸があり、床と壁との境界もはっきりしない。南側の壁は緩く開き、北側の壁はやや直に立ち上がる。被熱は弱く、南東側のコーナー部分でわずかに赤変するだけである。

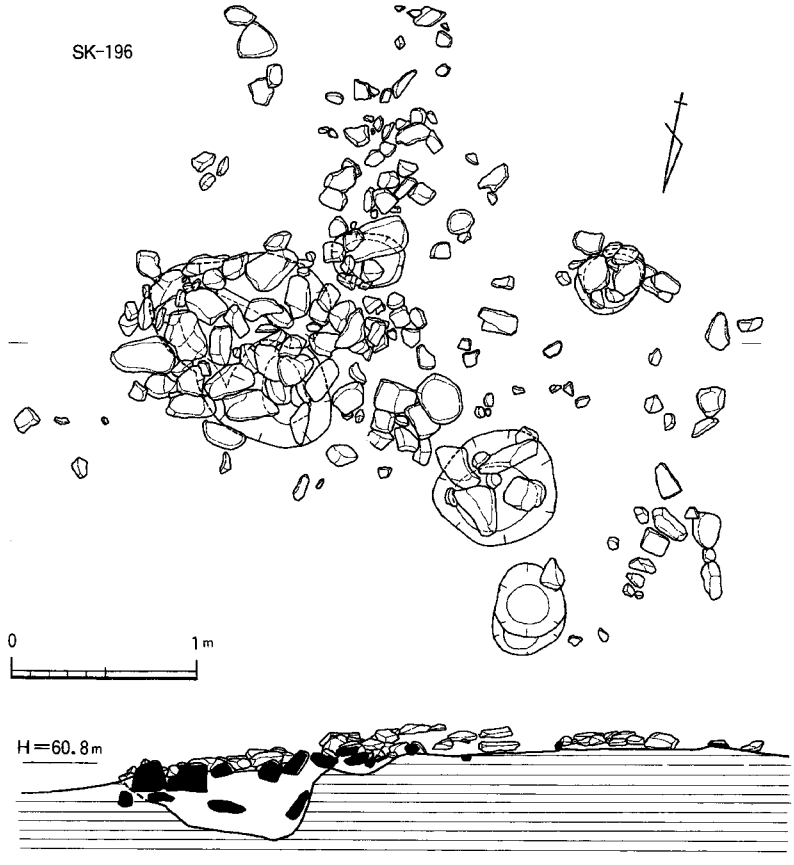


Fig. 37　SK－196 実測図（1／40）

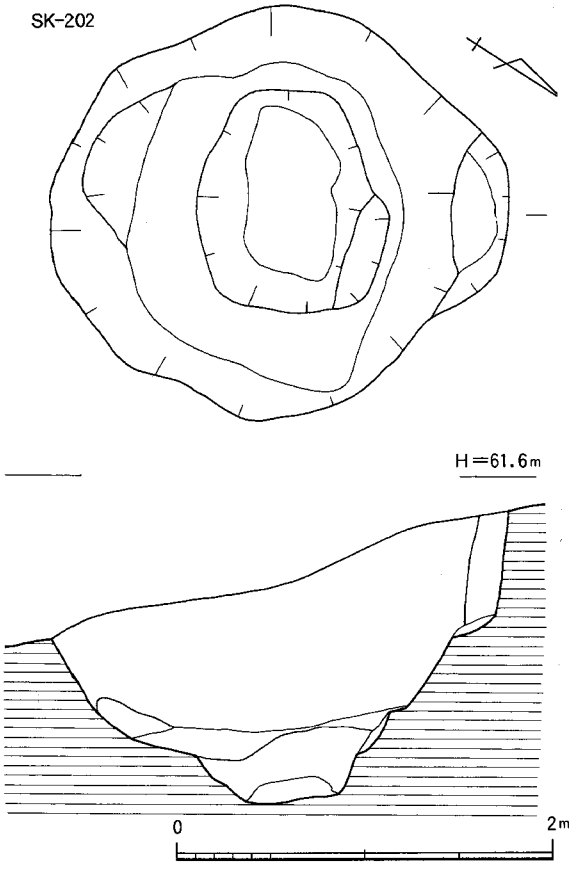


Fig. 38　SK－202 実測図（1／40）

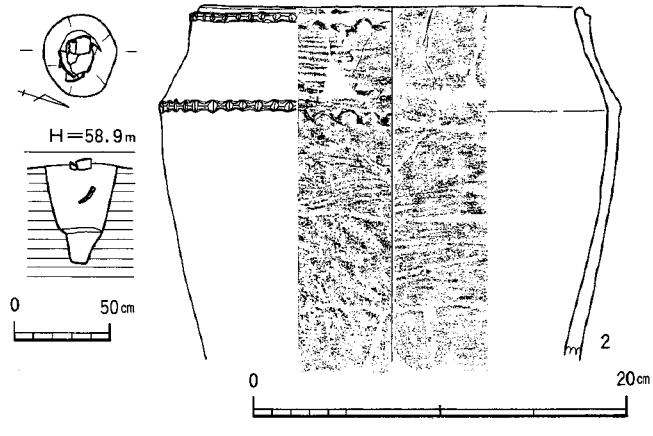


Fig. 39　SK－057 遺構・出土遺物実測図(1／40、1／4)

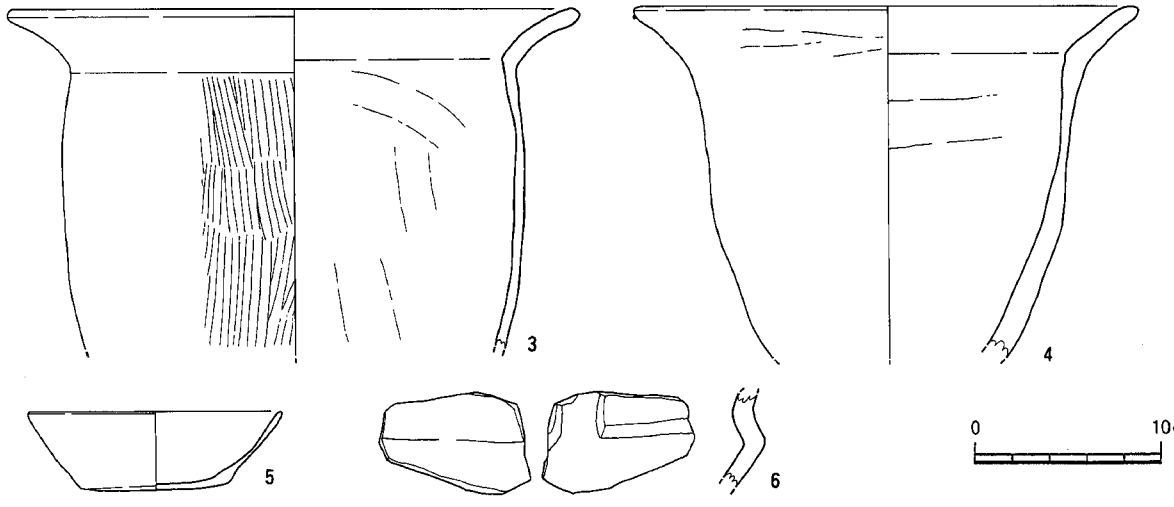


Fig. 40　2区出土遺物1（1／4）

SK－185　調査区状断面のうち、斜面部分に位置する。平面形は隅丸台形で、北東側周壁が内側にえぐり込む。全長1.4m、幅1.04m、深さ45cmを測る。 床面は歪んで凹凸が多く、南側の壁面は床面との境界が不明瞭で緩く立ち上がる。北側の壁はほぼ垂直に立ち上がる。周壁は全体に被熱を受け、東壁の赤変が著しい。

SK－200　調査区上段南西隅で検出される。平面形は隅丸三角形を呈する。全長1.65m、幅1.12m、深さ32cm。床面は凹凸が目立ち、壁はやや開きぎみに立ち上がる。周壁に数ヵ所被熱した箇所があり、赤変する。焼土塊が床面にも散布し、壁が落盤して堆積したと見ることができる。遺構覆土内から土器が出土している。

出土遺物（Fig. 40　3）3は土師器。甕形土器で底部を欠く。口径30.4cm、器高18.2cm、胎土は砂多く粗い。外面は粗いハケ目、内面は縦方向のケズリ。

SK－201　平面形は長方形で、南側が狭まる。全長1.15m、幅87cm、深さ20cm。床面はほぼ平坦で、転石を含む。壁はほぼ直に立ち上がる。周壁は全体に強く被熱し、赤変する。覆土上層付近で遺物を出土している。

出土遺物（Fig. 40　4・5）4は土師器甕形土器で、底部を欠く。口径25.4cm、器高18.8cm、胎土は砂粒多く、粗い。外面ナデ、内面横方向ヘラケズリ。5は土師器碗とみられる。口径13.2cm、器高

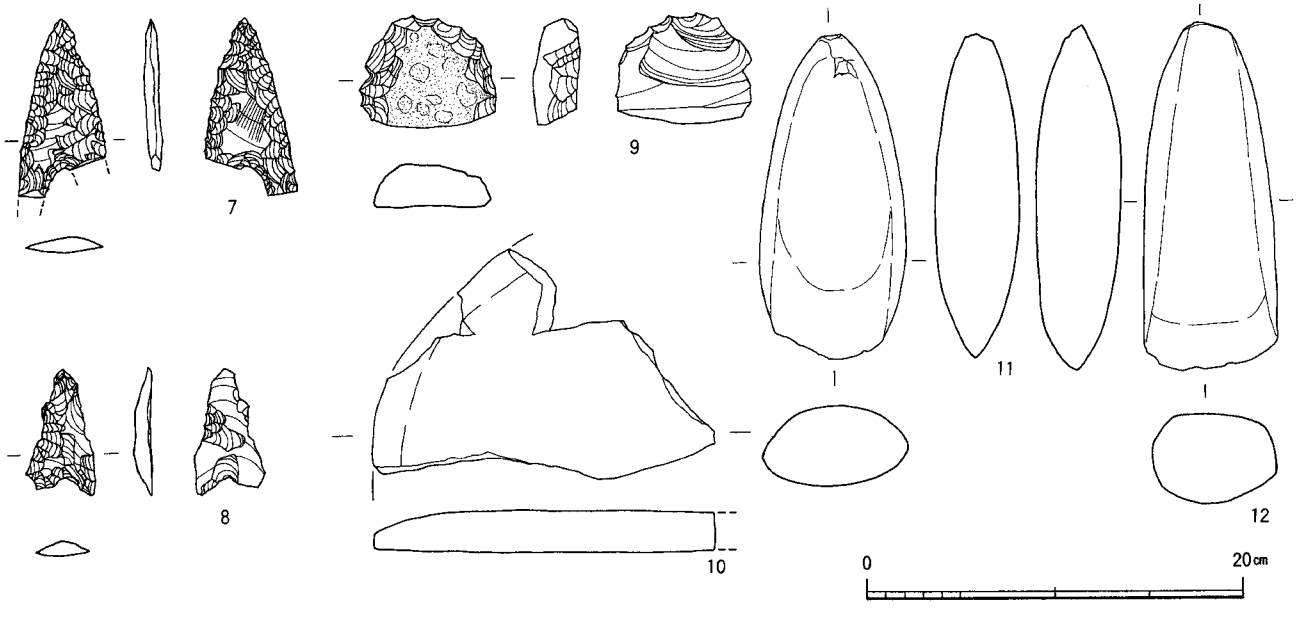


Fig. 41　2区出土遺物2（2／3、10は1／2、11・12は1／3）

4.2cm、底径7.7cm。胎土は細かく、明赤褐色を呈する。

4）その他の土壙

SK－057（Fig. 39）調査区ほぼ中央に位置するピット状の遺構である。南北径40cm、東西径43cmと小型で、深さ53cmを測り、断面は2段掘り状になる。覆土上層に縄文晩期の深鉢が原形をとどめない形で検出され、本来埋甕だった可能性もある。

出土遺物（Fig. 39　2）出土遺物は図示した1点のみである。2は縄文晩期深鉢で、底部は検出されていない。口縁部付近で2／3の遺存状況である。口径20.2cm、残存高18.6cm、最大径24.6cm。口縁端部よりわずか下方と胴部屈曲部に刻目突帯を施す。外面は横方向条痕文、内面は口縁部付近がナデ、胴部が横方向条痕文を施文する。胎土は砂粒を多く含み粗く、内外面とも暗褐色を呈する。

SK－196（Fig. 37）調査区西端で検出された敷石を伴う土壙群。敷石はほぼ平坦な地山面の上に東西4.2m、南北3.6mの範囲で広がり、特に土壙周辺には2、3段に積み上げられる。石の配置は規則的ではなく、崩壊した石材が散乱した様相を示す。土壙は4基検出され、最大のものは全長1.0m、深さ30cmを測る。遺構覆土は黄灰褐色シルト質層で、黒褐色土を含む。その他の周囲の各土壙（柱穴）も深さ40～50cmになる。出土遺物はない。

SK－202（Fig. 38）調査区西端で検出された土壙である。長径2.4m、短径2.2mで、ほぼ円形とみてよい。断面形は大きく摺鉢形をなし、壁面には2、3段の段差を作る。覆土は暗黄褐色のシルト質層。底面は幅50cm、長さ95cmの不整形で、ほぼ平坦となり、壁面は段を生じながら大きく開く。遺構の性格は不明で、貯蔵穴の可能性も考えられる。出土遺物は弥生土器を数片含むが、細片のため、実測不可能。

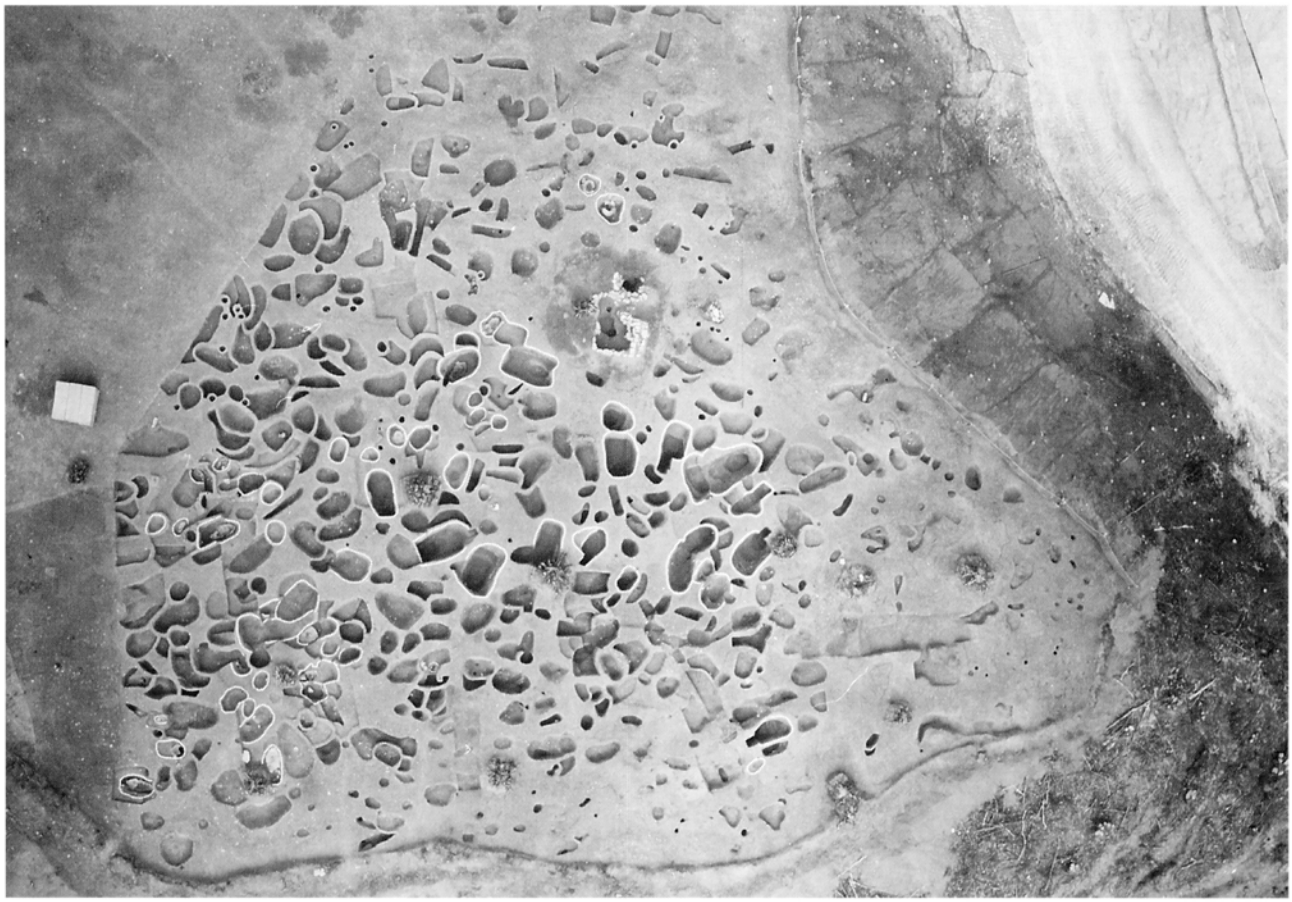
5）縄文～弥生時代のその他の遺物（Fig. 40、41）

6は縄文晩期の浅鉢の胴部破片。SR－105覆土中に混入する。胴部屈曲部上にはリボン状の貼り付け突帯をつける。胎土は粗砂を多く含み、内外面ともに明褐色を呈する。

7～12は石器。7は調査区表土より出土。打製石鏃で、残存長3.6cm。両脚部を欠くが、鍬形鏃とみられる。両面に調整を施すが、主要剥離面を両面に残す。黒曜石製。8は長身開脚鏃で、全長2.5cm。片脚先端を欠損する。裏面に主要剥離面を残し、断面は三角計を呈する。黒曜石製。9は掻器で、基部を欠損する。残存長2.2cm、幅2.7cm。裏面は主要はく裏面を残し、全周に調整を施す。表面には自然面を残す。黒曜石製。10は砥石。本来は楕円形であったと考えられ、厚さ1.1cmの円板形になる。両面を砥石として使用している。砂岩製。

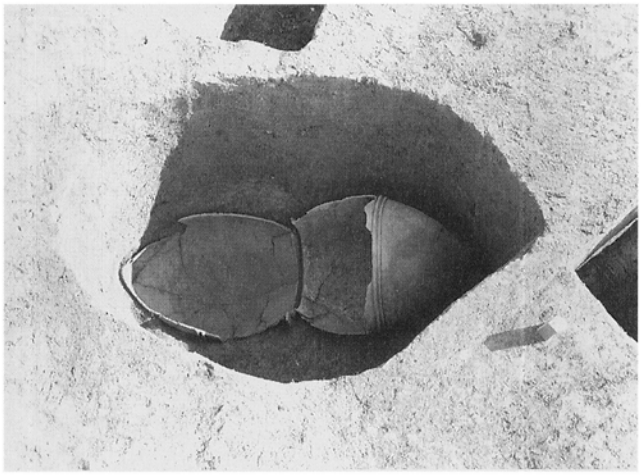
11、12は磨製石器で、同一地点から出土する。11は全長12.9cm、幅5.8cm、厚3.3cm。全面を研磨し、片側に刃部を研ぎ出す。刃部は一部欠損するが刃部幅は4.0cm前後とみられる。刃部は鋭利さを保ち、工具柄を取り付けた痕跡は見られない。滑石製。12は全長13.8cm、幅5.3cm、厚さ4.6cmで、全面を研磨して、片側に刃部を研ぎ出す。刃部は鋭利で、工具を取り付けた痕跡は見られない。片岩系のきめ細かい石を使用する。

Ph. 1　2区全景（北東から）

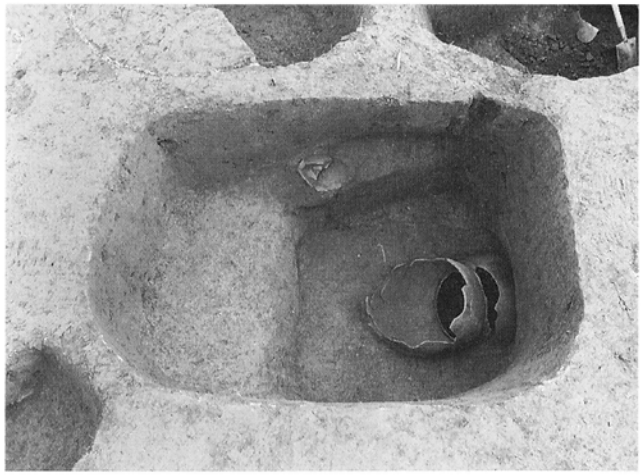


Ph. 2　2区東半全景（南から）

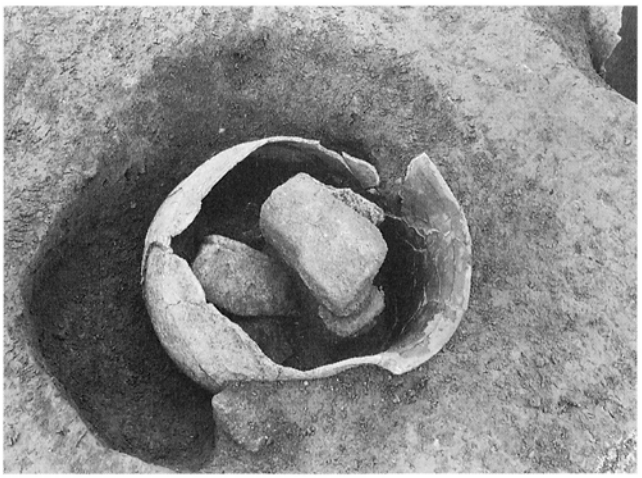
Ph. 3　2区西半全景（南から）



Ph. 4　ST－005（北から）

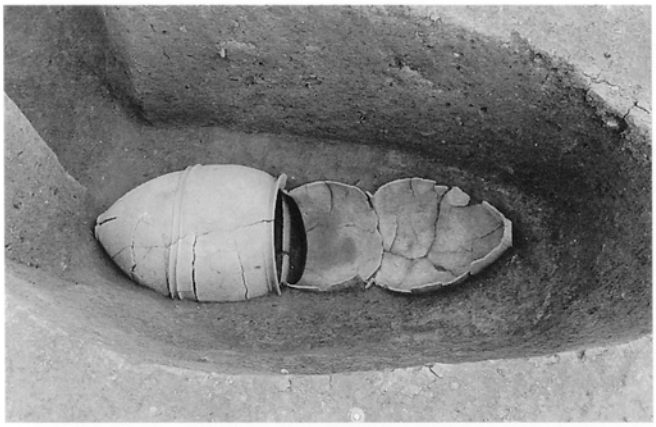


Ph. 5　ST－008（西から）



Ph. 6　ST－011（西から）

Ph. 7　ST－012（西から）



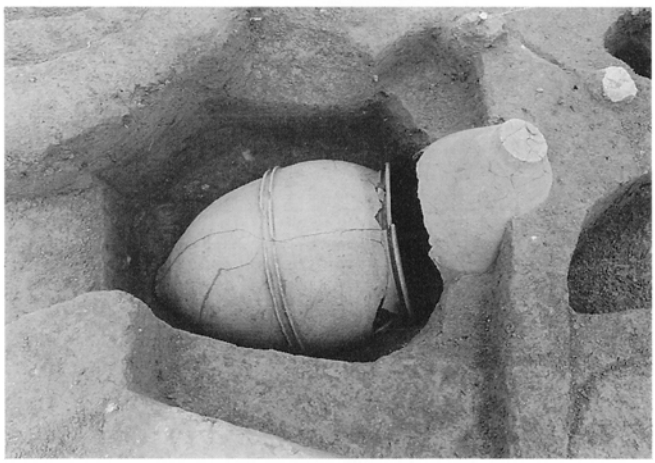
Ph. 8　ST－013（西から）

Ph. 9　ST－019（南から）

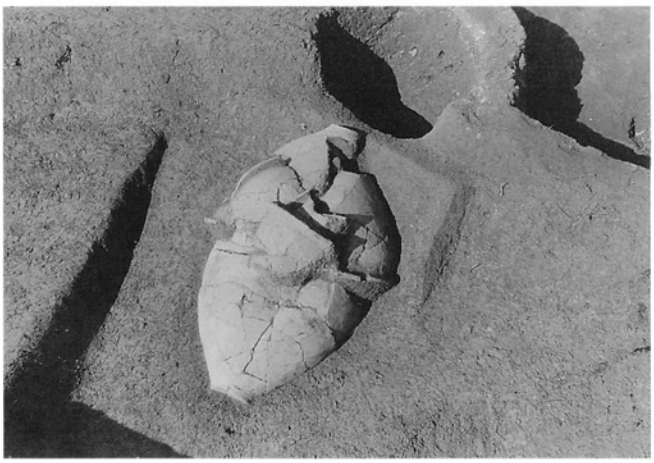
Ph. 10　ST－023（東から）

Ph. 11　ST－039（南から）

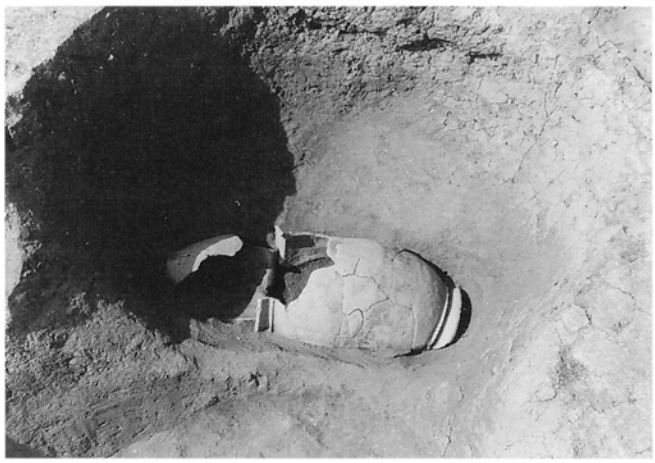
Ph. 12　ST－050（南から）



Ph. 13　ST－080（北から）

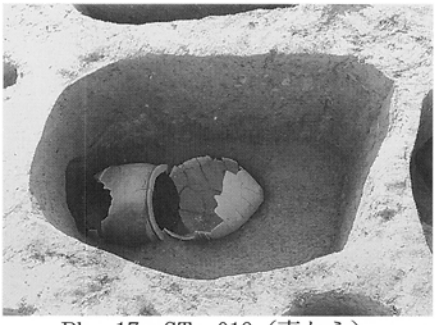


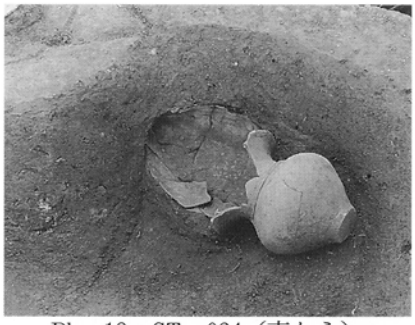
Ph. 14　ST－086（南から）

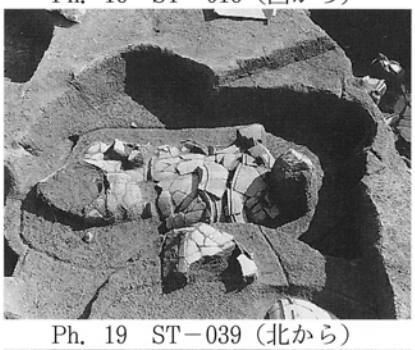


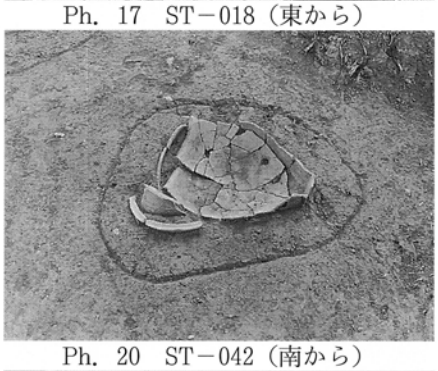
Ph. 15　ST－140（南から）

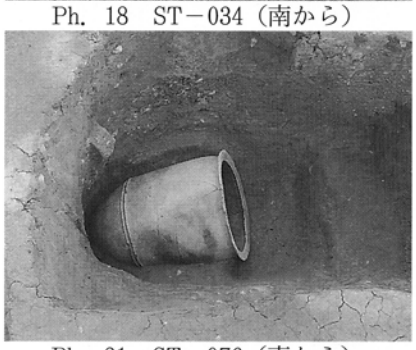
Ph. 16　ST－016（西から）

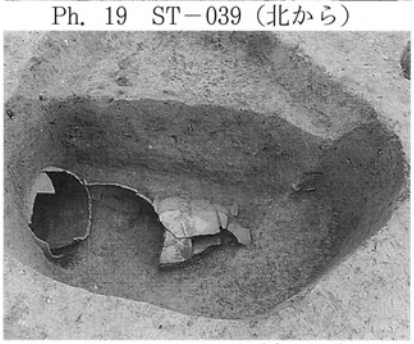

Ph. 17　ST－018（東から）

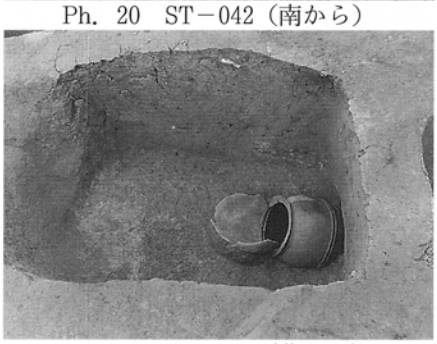

Ph. 18　ST－034（南から）

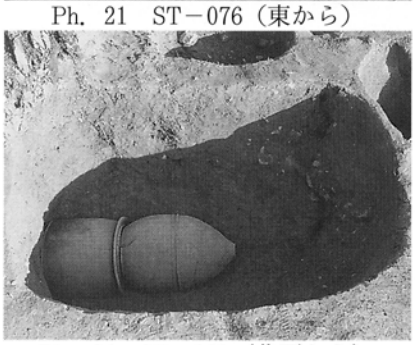

Ph. 19　ST－039（北から）

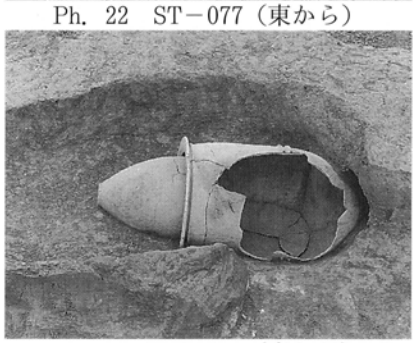

Ph. 20　ST－042（南から）

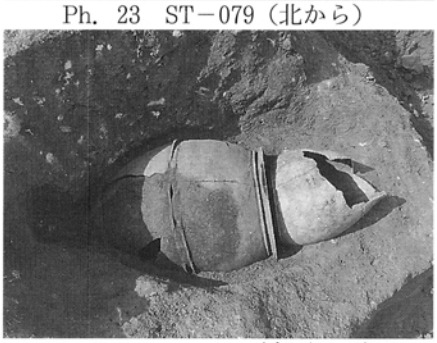

Ph. 21　ST－076（東から）

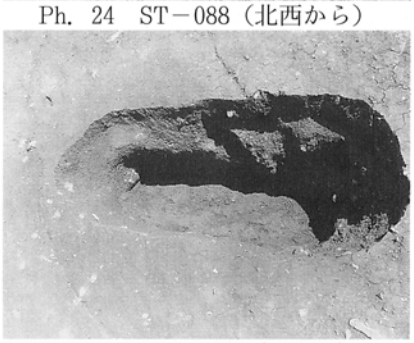

Ph. 22　ST－077（東から）

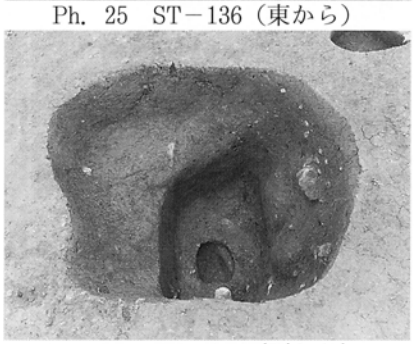

Ph. 23　ST－079（北から）

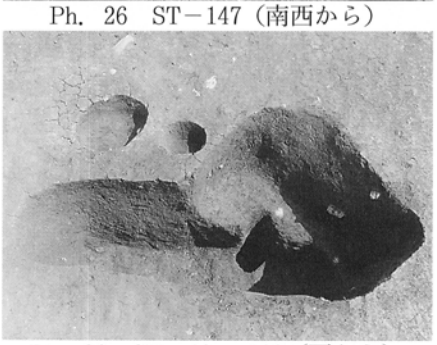

Ph. 24　ST－088（北西から）

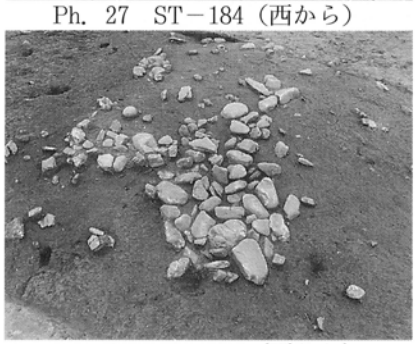

Ph. 25　ST－136（東から）

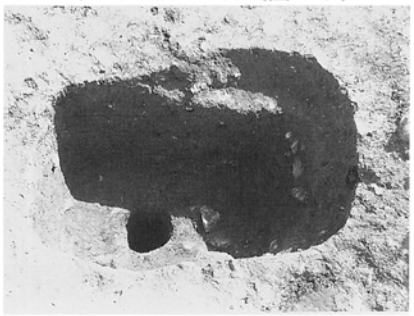

Ph. 26　ST－147（南西から）

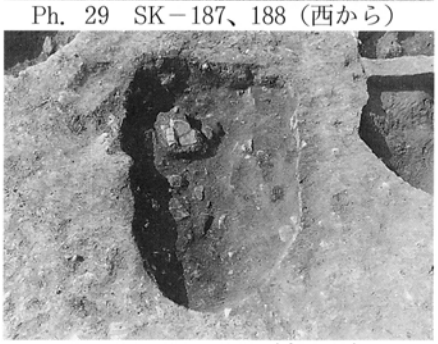

Ph. 27　ST－184（西から）

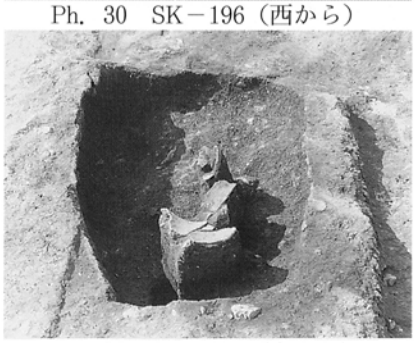

Ph. 28　SK－186（西から）


Ph. 29　SK－187、188（西から）


Ph. 30　SK－196（西から）


Ph. 31　SK－198（北から）


Ph. 32　SK－200（南から）


Ph. 33　SK－201（南から）

ST－011

ST－088

ST－018

ST－142

ST－012

Ph. 34　出土大型棺

ST－044

ST－003

ST－040

ST－050

ST－032

ST－023

ST－143

Ph. 35　出土小型棺

6）中世の調査

①調査の概要

中世の遺構はⅡ区の上段の北側と下段で主に検出した。遺構の時期は12世紀前半から14世紀前半に及ぶ。上段の遺構は調査区の北側に散漫に分布する。遺構は木棺墓、土壙、石積み基壇等がある。下段の遺構は標高42m～47mのテラス状の斜面に密集する。遺構は木棺墓、石組基壇等が有る。木棺墓、土壙墓は21基を検出した。調査区には人頭大の礫が多数分布しており、墓には地上施設があった可能性があるが、明確なものは少ない。副葬品には土師器、中国製陶磁器、銅銭、銅鏡等がある。また、調査区北西隅には近世墓が群集する。近世墓は甕棺を使用したもので、円形の墓壙で、上面には人頭大の礫を積み上げている。礫中から輸入陶磁器等が多数出土しており、近世墓の造営時にそれ以前の遺構は破壊された可能性がある。

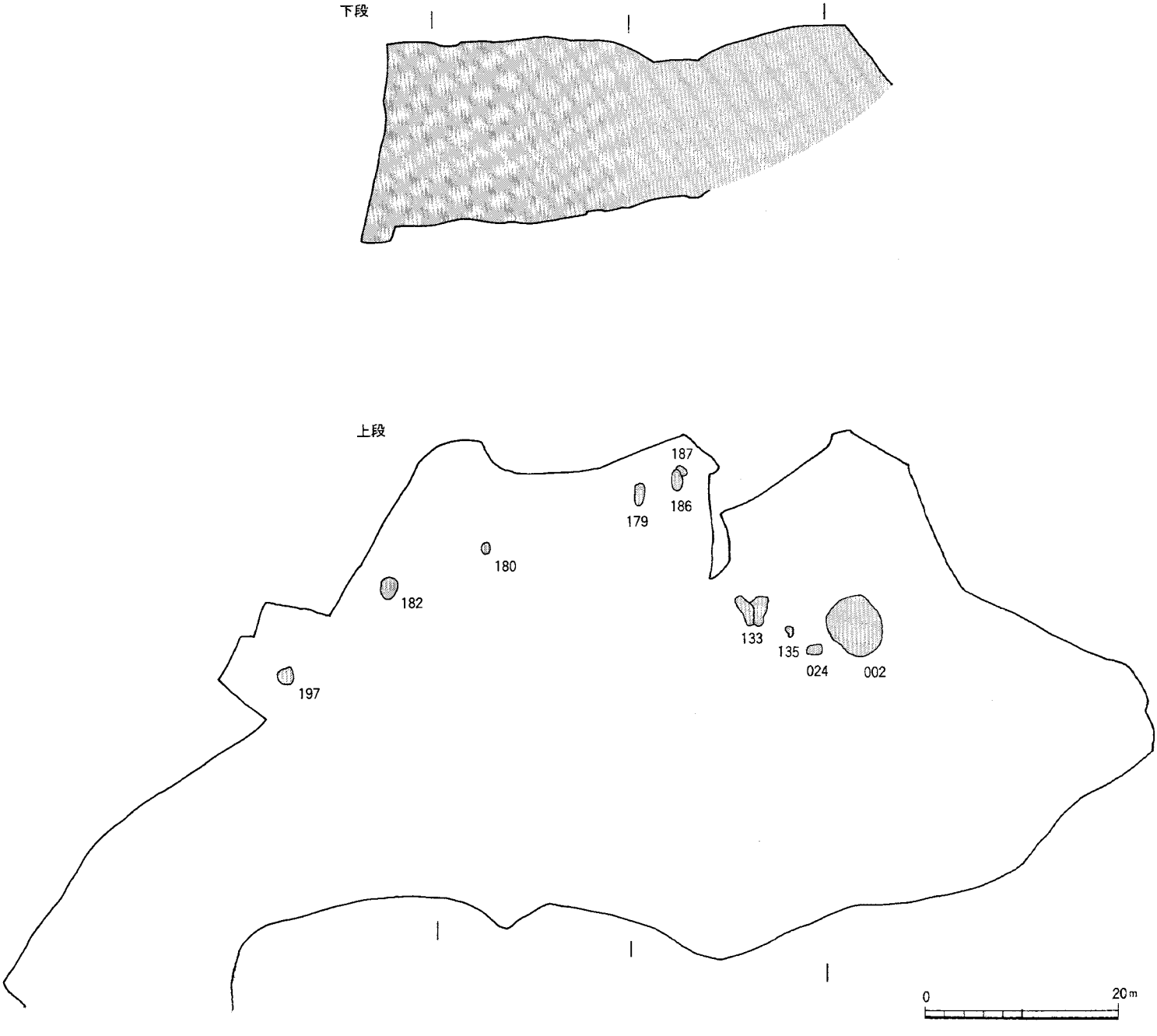


Fig. 42　Ⅱ区上段中世遺構配置図（1／600）

Fig 43. Ⅱ区下段中世遺構配置図（1／200）

II区中世墓一覧

地区	遺構（SR）	遺構の平面形	遺構の規模（長さ×幅×深さcm）	棺の規模（長さ×幅×深さcm）	主軸方位	出土遺物	備考
上段	2	不整楕円形	500×350(基壇)		−	土師器皿、龍泉窯系青磁碗、同安窯系青磁皿、銅銭	
上段	24	隅丸長方形	167×110×40		N−100°−E	龍泉窯系青磁碗、同安窯系青磁皿、鉄刀、銅銭	
上段	133	長方形	(160)×(145)×(35)		−	龍泉窯系青磁碗	
上段	179	隅丸長方形	223×153×(75)		N−6°−E	鉄刀	
上段	180	隅丸長方形	162×90×(60)		N−26°−E	龍泉窯系青磁碗	
上段	186	隅丸長方形	(265)×150×(115)		N−5°−E	土師器皿、白磁皿、鉄釘	
上段	187	楕円形	(130)×(160)×(60)		−	鉄釘	
下段	26	円形	50×54×(10)		N−14°−W	龍泉窯系青磁碗	
下段	33	楕円形	(65)×(90)×(20)		N−5°−W	土師器皿、白磁碗	
下段	34	隅丸長方形	(128)×85×(15)		N−18°−E	土師器皿、龍泉窯系青磁碗	
下段	35	楕円形	77×55×(10)		N−14°−E	龍泉窯系青磁碗、白磁皿	
下段	100	隅丸長方形	237×130×60		N−10°−E	土師器皿、鉄釘	
下段	103	隅丸長方形	(135)×95×(10)		N−32°−E	土師器皿、鉄刀	
下段	105	隅丸長方形	(235)×(170)×(50)		N−5°−E	土師器皿、坏、鉄釘	
下段	106	隅丸長方形	248×104×(55)	140×50	N−5°−W	土師器皿、坏、龍泉窯系青磁碗、鉄釘	
下段	108	不整楕円形			−	土師器皿、白磁	
下段	110	隅丸長方形	205×128×(50)		N−5°−E	龍泉窯系青磁碗	
下段	111	隅丸長方形	160×80×(25)		N−2°−E	土師器皿、龍泉窯系青磁器碗	
下段	121	隅丸長方形	175×90×(35)		N−14°−W	土師器皿	
下段	129	隅丸長方形	(200)×(110)×(35)		N−0°−E	土師器皿、龍泉窯系青磁器碗	
下段	149	隅丸長方形	305×131×50	195×65	N−7°−E	土師器皿、坏、龍泉窯系青磁碗、鉄釘	
下段	150	隅丸長方形	116×(80)×(20)		N−0°−E	龍泉窯系青磁碗	
下段	151	隅丸長方形	295×200×55		N−2°−E	土師器皿、坏、龍泉窯系青磁碗、皿、同安窯系青磁碗、湖州鏡	石室
下段	154	−			−	白磁碗、青白磁合子、褐釉陶器壷	遺物たまり
下段	158	−			−	土師器皿、白磁皿	遺物たまり
下段	159	長方形	170×180(基壇)		−	土師器皿、白磁碗、皿、龍泉窯系青磁碗、褐釉陶器壷	石組
下段	160	長方形	200×250(基壇)		−	−	石組
下段	161	長方形	170×180(基壇)		−	白磁合子、褐釉陶器壷	石組
下段	162	隅丸長方形	(150)×115×(30)	110×40	N−4°−E	土師器皿、鉄釘	
下段	163	隅丸長方形	185×110×(40)	110×40	N−17°−E	土師器皿、龍泉窯系青磁碗、鉄釘	
下段	164	隅丸長方形	203×110×(70)	150×35	N−3°−W	土師器皿、龍泉窯系青磁碗、皿、同安窯系青磁碗	
下段	165	隅丸長方形	200×125×(40)		N−90°−W	土師器皿、龍泉窯系青磁碗	
下段	168	長方形	180×180(基壇)		−	龍泉窯系青磁碗	石組
下段	169	不整形	(225)×300×(65)	(150)×(60)	N−2°−W	釘	
下段	170	円形	85×85×35		−	土師器皿、白磁合子、銅銭	

②調査の記録

SR024（Fig. 44）調査区の上段、東側で検出した。墓壙の平面形は隅丸長方形を呈し、長さ167㎝、幅110㎝、深さ40㎝を測る。主軸方位はN－100°－Eを測る。墓壙内から釘は出土していない。また、人骨は遺存していない。土壙墓と考えられる。遺物は墓壙の北東隅で、龍泉窯系青磁碗２点、同安窯系青磁皿１点、銅銭（崇寧重寶）１点、鉄刀１点が出土した。

出土遺物（Fig. 47－１～５）１、２は龍泉窯系青磁碗である。体部内面を２本もしくは３本の沈線で５分割し、その中に飛雲文、内底見込みにキノコ状の文様を施す。釉色は淡灰緑色、淡い空色を呈し、高台畳付及び内側は露胎となる。器高6.0㎝、6.8㎝、口径16.6㎝、16.2㎝を測る。３は同安窯系青磁皿で、内面に櫛描きの沈線とジグザグ文様を施す。体部下半は露胎となる。底部の外面に墨書が見られる。「十一」か。釉色は淡灰緑色を呈する。器高2.2㎝、口径10.5㎝を測る。４は鉄刀である。茎部は欠損しているが、木質が付着している。現存長14.1㎝、幅2.4㎝を測る。５は当十銭の銅銭で、銭名は「崇寧重寶」（初鋳年1103年）である。径3.3㎝を測る。

SR133（Fig. 44）調査区の上段、東側で検出した。墓壙の平面形は撹乱をうけており、明確ではない。現存長160㎝、幅145㎝、深さ35㎝を測る。墓壙内から釘は出土していない。また、人骨は遺存していない。土壙墓と考えられる。遺物は墓壙の東側で、龍泉窯系青磁碗１点が出土した。

出土遺物（Fig. 47－６）６は龍泉窯系青磁碗である。２次焼成をうけたのか、遺存状況は悪い。体部内面を２～４本の沈線で５分割し、その中に飛雲文を施す。口縁は輪花となる。釉色は黄緑色を呈する。器高7.0㎝、口径17.2㎝を測る。

SK135（Fig. 44）調査区の上段、東側で検出した。不整形の土壙で、長さ110㎝、幅42㎝、深さ20㎝を測る。遺物は埋土から白磁碗、小壷、土師器坏、小皿、滑石製製品、鉄刀等が出土した。

出土遺物（Fig. 47－７～12）７、８は土師器小皿で、底部の切り離しは回転糸切りである。器高1.1㎝、1.2㎝、口径8.6㎝、9.2㎝を測る。９は土師器坏で、底部の切り離しは回転糸切りである。器高2.4㎝、口径14.8㎝である。10は玉縁の白磁碗である。器高2.7㎝、口径14.8㎝を測る。11は滑石製製品である。平面形は隅丸方形を呈し、一方に円形の孔が有る。法量は8.6㎝×9.0㎝、厚さ1.9㎝を測る。12は鉄刀で、刀身の大半は欠損している。

SR179（Fig. 44）調査区の上段、中央で検出した。墓壙の平面形は隅丸長方形を呈し、長さ223㎝、幅153㎝、深さ75㎝を測る。主軸方位はN－６°－Eを測る。墓壙底から約45㎝浮いたところで人頭大の礫を検出した。墓壙内から釘は出土していない。また、人骨は遺存していない。土壙墓と考えられる。遺物は墓壙の北東隅で、鉄刀１点が出土した。

出土遺物（Fig. 48）１は鉄刀である。先端は欠損している。茎部には目釘孔が見られる。現存長29.4㎝、幅3.3㎝を測る。

SR180（Fig. 45）調査区の上段、中央で検出した。墓壙の平面形は隅丸長方形を呈し、長さ162㎝、幅90㎝、深さ60㎝を測る。主軸方位はN－26°－Eを測る。墓壙底から約45㎝浮いたところで人頭大の礫を検出した。墓壙内から釘は出土していない。また、人骨は遺存していない。土壙墓と考えられる。遺物は墓壙の北側で、龍泉窯系青磁碗１点が出土した。

出土遺物（Fig. 48）２は龍泉窯系青磁碗である。体部内面には３単位の草花文を、内底見込みには花文を施す。釉色は淡いオリーブ色を呈する。器高6.8㎝、口径17.1㎝を測る。

SK182（Fig. 45）調査区の上段、中央で検出した。不整楕円形の土壙で、長さ150㎝、幅125㎝、深さ25㎝を測る。土壙底から約20㎝浮いたところで人頭大の礫を検出した。遺物は礫の上面での龍泉窯系青磁碗１点が出土した。

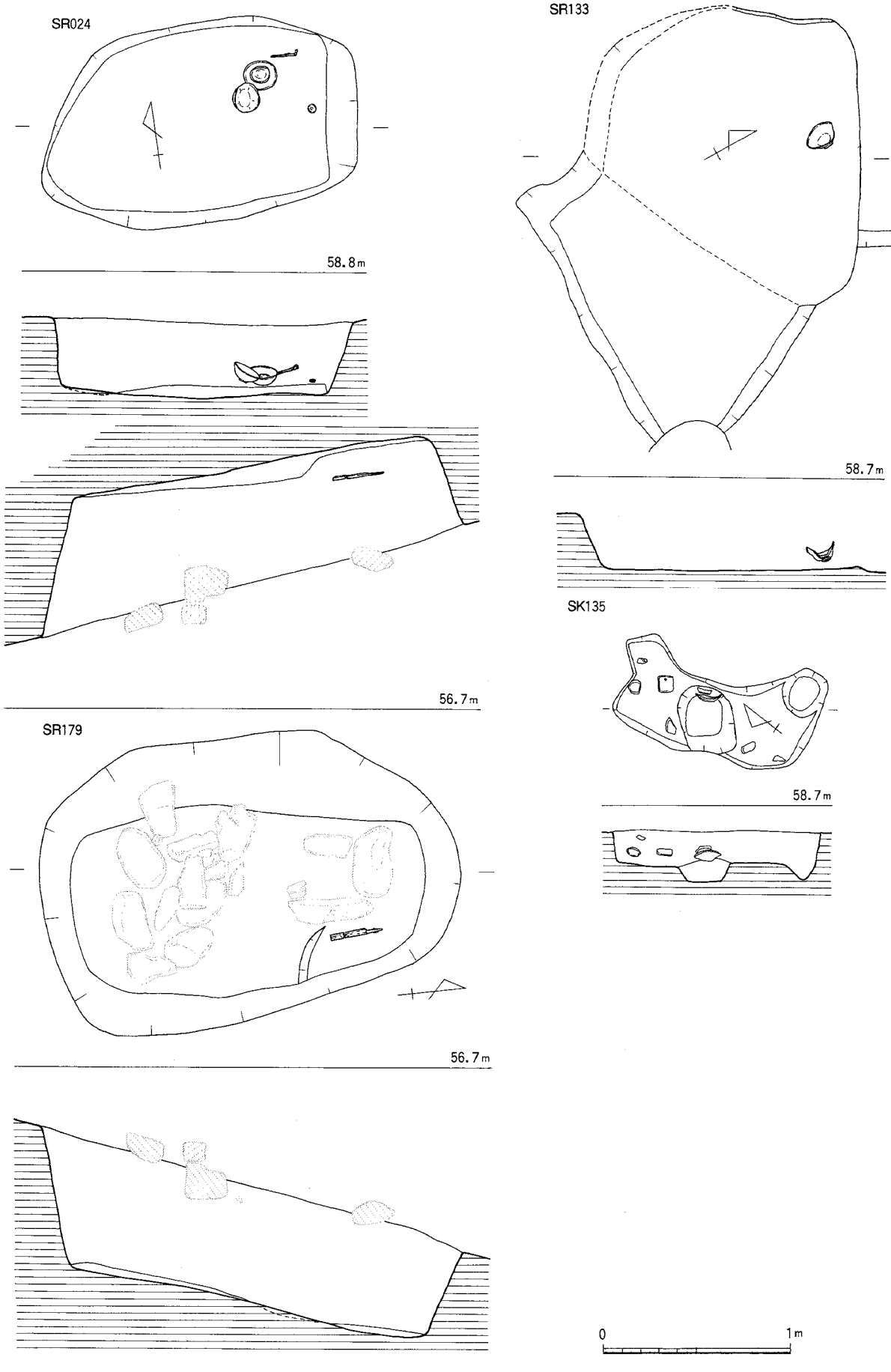


Fig. 44　SR024、133、SK135、SR179 遺構実測図（1／30）

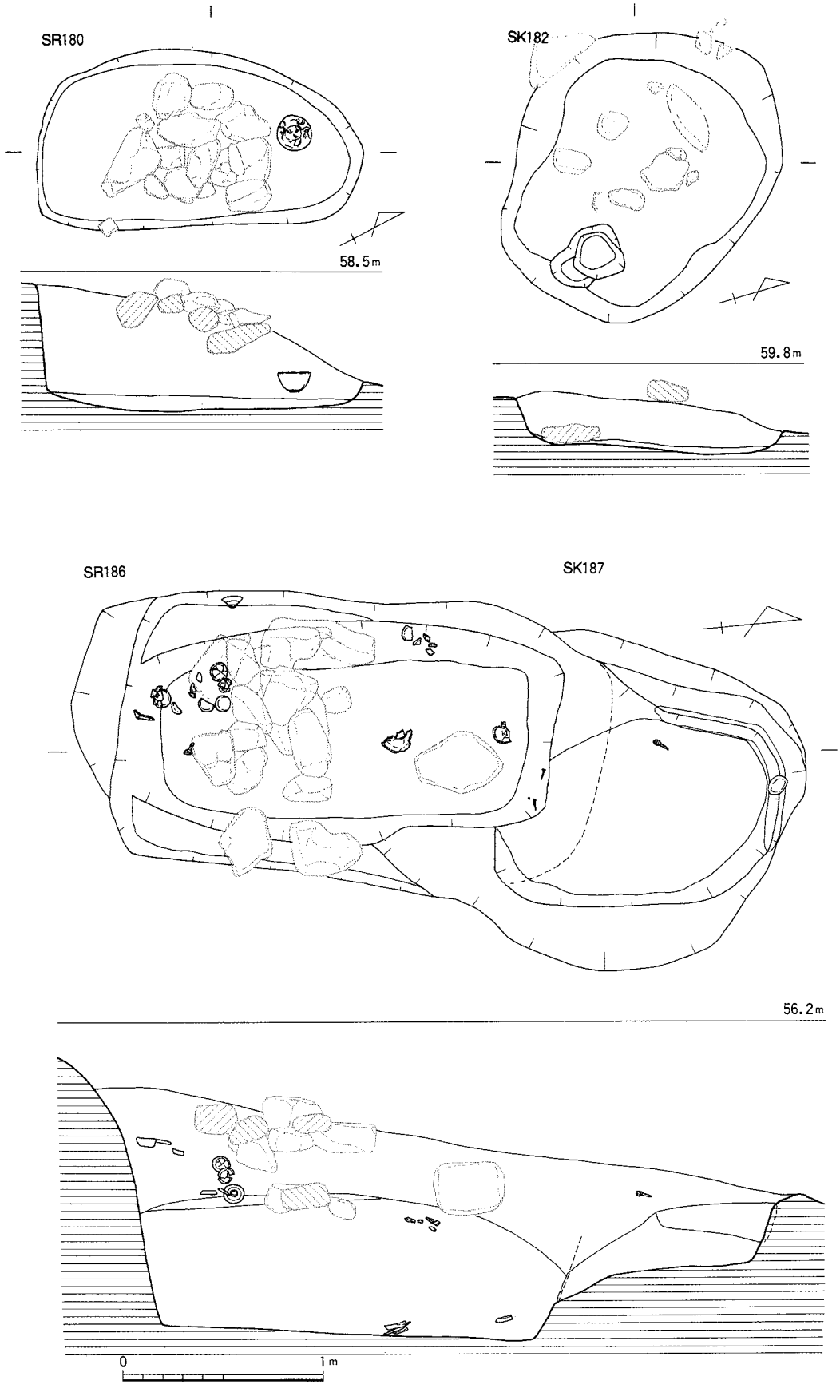


Fig. 45　SR180、SK182、SR186、SK187 遺構実測図（1／30）

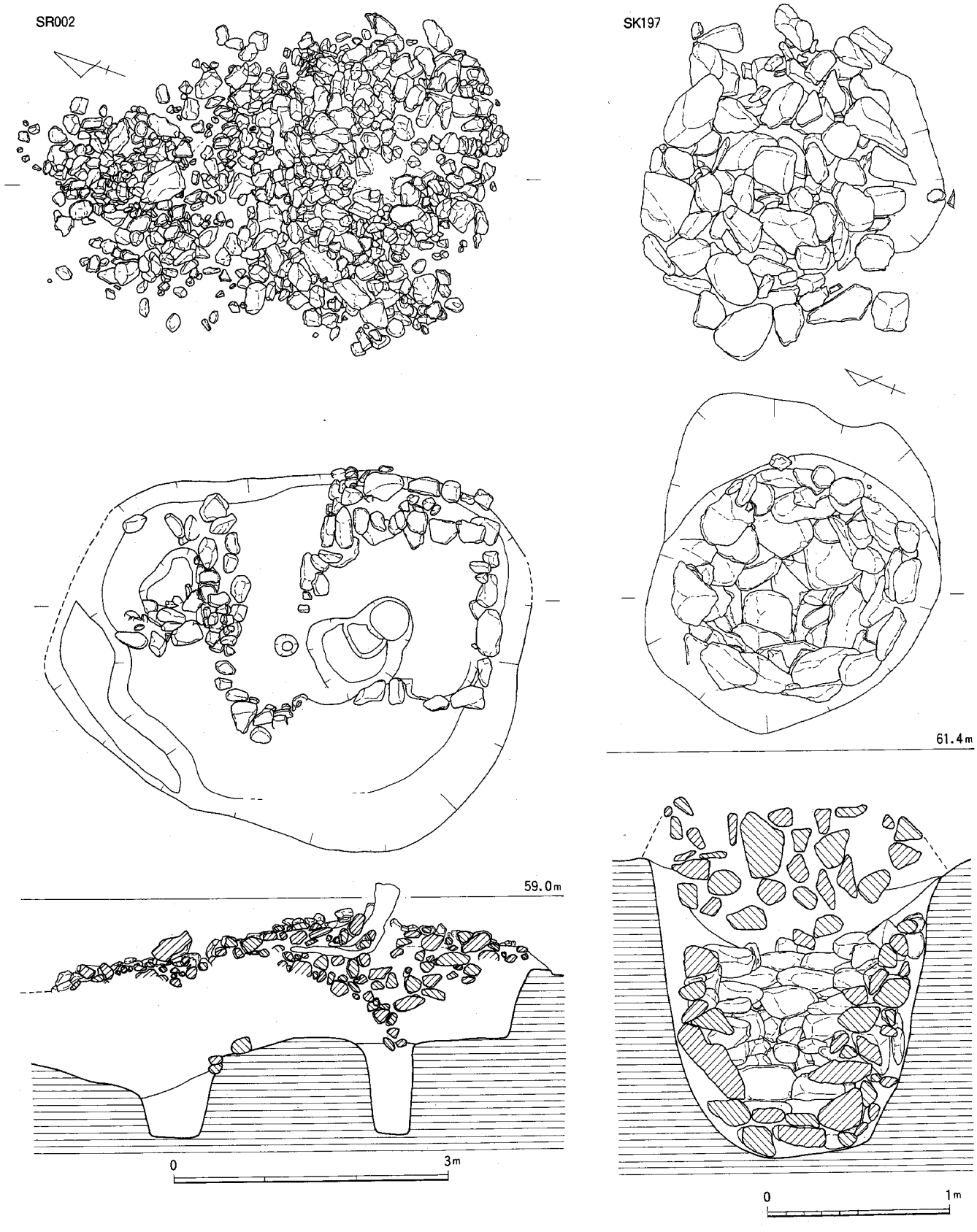


Fig. 46　SR002、SK197 遺構実測図（1／60、1／30）

出土遺物（Fig. 48－３）３は龍泉窯系青磁碗である。底部は欠損している。外面には蓮弁文が施される。釉色は茶緑色を呈する。口径17.5cmを測る。

SR186（Fig. 45）調査区の上段、東側で検出した。SR186はSK187を切る。墓壙の平面形は隅丸長方形を呈し、長さ265cm、幅150cm、深さ115cmを測る。主軸方位はＮ－５°－Ｅを測る。墓壙底から約80cm浮いたところで人頭大の礫を検出した。墓壙内の両小口側で釘が出土しており、釘を使用した棺と判断される。釘の出土状態から棺の規模は長さ約170cm程と推測できる。人骨は遺存していない。遺物は墓壙の南側の底から50cm～60cmで、白磁皿１点、土師器小皿、北側の底で土師器坏が出土した。出土状況から棺外に副葬されたものと考えられる。

出土遺物（Fig. 48－４～24）４～19は土師器小皿である。底部の切り離しは回転糸切りである。器高0.9cm～1.3cm、口径8.5cm～9.9cmを測る。20は土師器坏である。底部の切り離しは回転糸切りである。器高2.6cm、口径14.8cmを測る。21は高台付の白磁皿である。体部外面下半は露胎となる。器高2.6cm、口径9.9cmを測る。22～24は鉄釘である。脚の断面は長方形を呈し、頭部は脚の幅より大きい。23は完存品で、長さ6.8cmを測る。釘には木質が遺存するが、木質は頭部から２cm程が横方向、それ以下は縦方向の木目が観察される。

SK187（Fig. 45）調査区の上段、東側で検出した。SR186に切られる。平面形は不整楕円形を呈する。土壙の北側は熱をうけて硬化している。埋土には炭化物を多量に含む。長さ160cm、幅130cm、深さ60cmを測る。遺物は埋土中から土師器小皿、鉄釘が出土した。

出土遺物（Fig. 48－25、26）25、26は鉄釘で、脚は断面長方形を呈する。木質は遺存していない。

SR002（Fig. 46）調査区の上段、東側で検出した。不整楕円形の土壙の上面に拳大から人頭大の礫を不整方形に組んだもので、南北長約500cm、東西長約350cm、高さ50cmを測る。土壙は長さ260cm、幅190cm、深さ80cm～100cmを測る。石組は大小の２基からなり、それぞれに対応するように北側は長さ70cm、幅70cm、深さ50cm、南側は長さ110cm、幅70cm、深さ50cmの小土壙が存在する。北側の土壙には炭化物が多量に見られた。遺物は南側の石組の下層で、白磁小壷、土師器小皿、銅銭２点（天禧□寶、１点は不明）が、基壇の上面で龍泉窯系青磁碗、同安窯系青磁皿が出土した。

出土遺物（Fig. 49－１～７）１、２は土師器小皿である。底部の切り離しは回転糸切りである。器高1.3cm、1.1cm、口径9.4cm、9.0cmを測る。３は白磁の小壷である。体部下半は露胎となる。釉色は緑がかった空色を呈する。器高2.9cm、口径2.4cmを測る。４、５は龍泉窯系青磁碗である。４は２次焼成をうけたのか、遺存状態が良くない。体部内面を２本の沈線で５分割し、５はその中に飛雲文を施す。内底見込みにはキノコ状の文様を施す。口縁は輪花となる。釉色はオリーブ色、淡茶緑色を呈する。器高7.0cm、6.6cm、口径16.3cm、16.5cmを測る。６は同安窯系青磁皿で、内面に櫛描きの沈線とジグザグ文様を施す。体部下半は露胎となる。釉色は緑がかった空色を呈する。器高2.5cm、口径11.6cmを測る。７は銅銭で、銭名は「天禧□寶」である。

SK197（Fig. 46）調査区の上段、西側で検出した。平面形は円形を呈し、坑底と壁に沿って石積みが施される。径150cm～160cm、深さ160cmを測る。土壙の上面には礫が詰められる。水溜用の土壙か。遺物は石積みの内側で、白磁碗、小壷、蓋、鉄鏃、鉄刀、銅鈴、ガラス小玉が出土した。

出土遺物（Fig. 49－８～29）８、９は玉縁の白磁碗である。10～11は高台付の白磁皿である。12は平底の白磁皿である。13、14は白磁小壷の蓋である。15～22は白磁小壷で、18～22の体部外面は割瓜状を呈する。体部下半は露胎である。23は鉄鏃で、鏃身は菱形を呈する。現存長19.1cm、身幅2.6cmを測る。24、25は鉄刀で、25は完形品で、長さ26.4cm、幅2.3cmを測る。26は銅鈴で、鈕と体部の半分は欠損している。27～29はガラス小玉で、径0.6cm～1.0cm、厚さ0.25cm～0.3cmを測る。

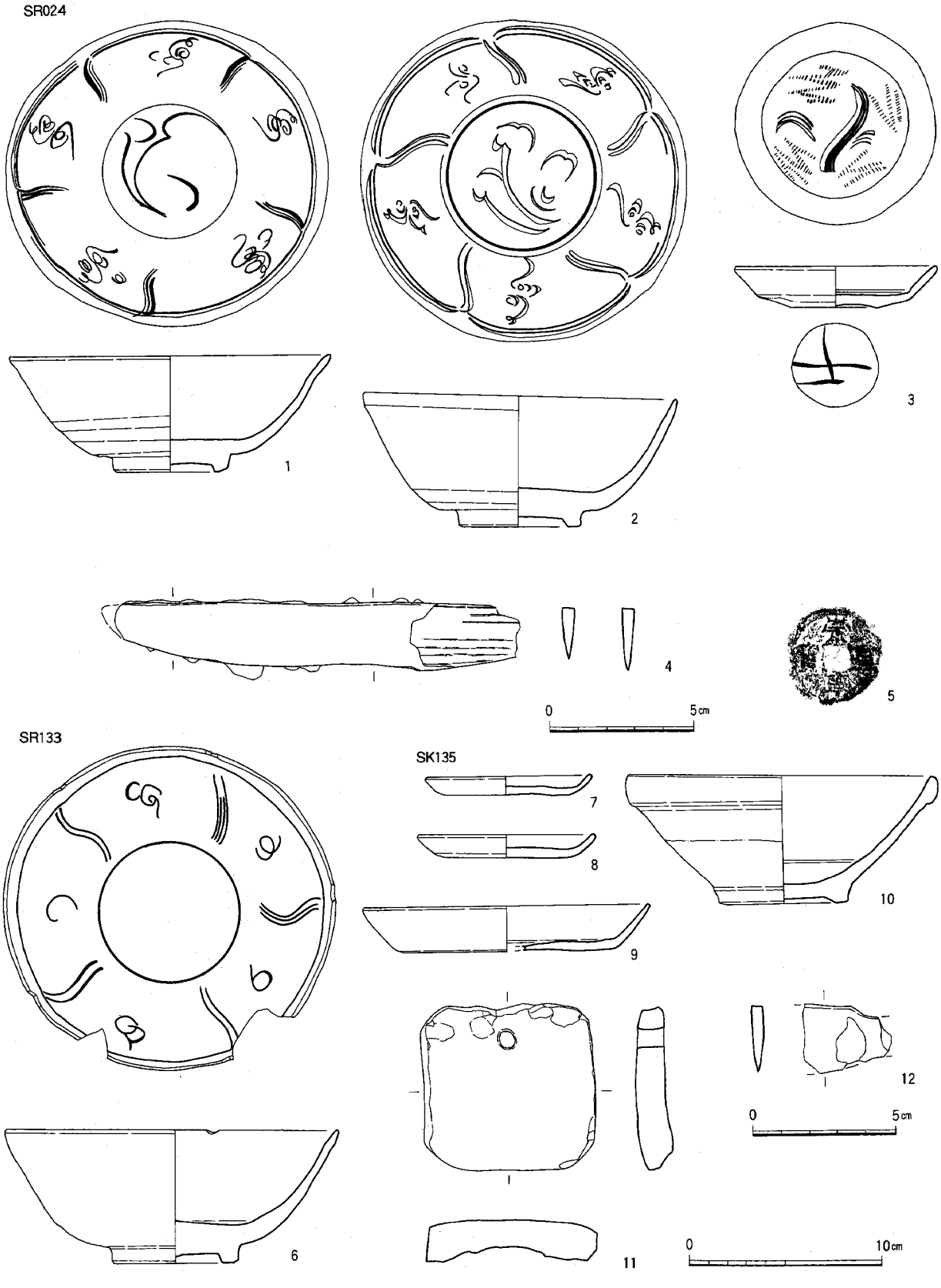


Fig. 47　SR024、133、SK135 出土遺物実測図（1／3、1／2）

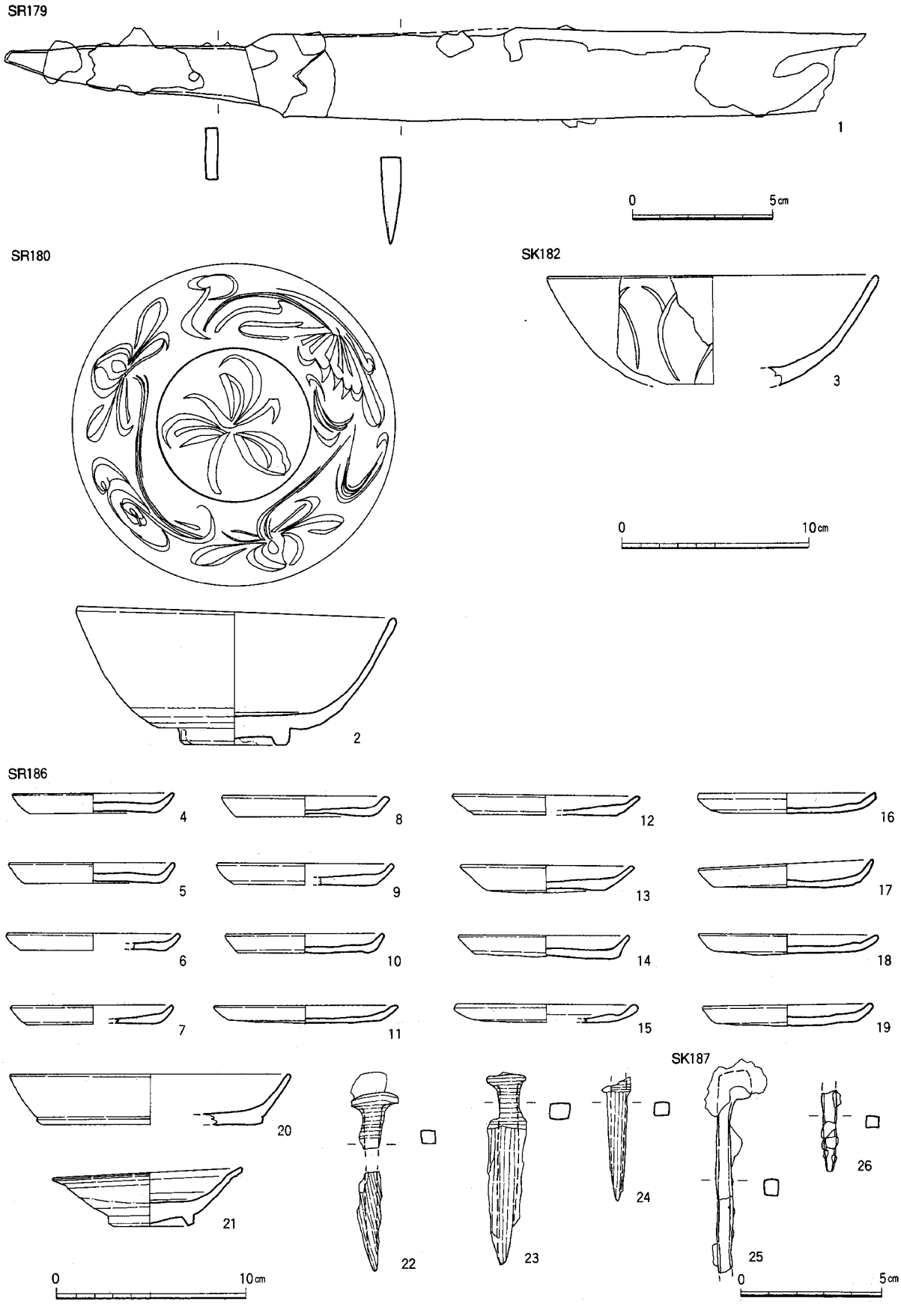


Fig. 48　SR179、180、186、187 出土遺物実測図（1／3、1／2）

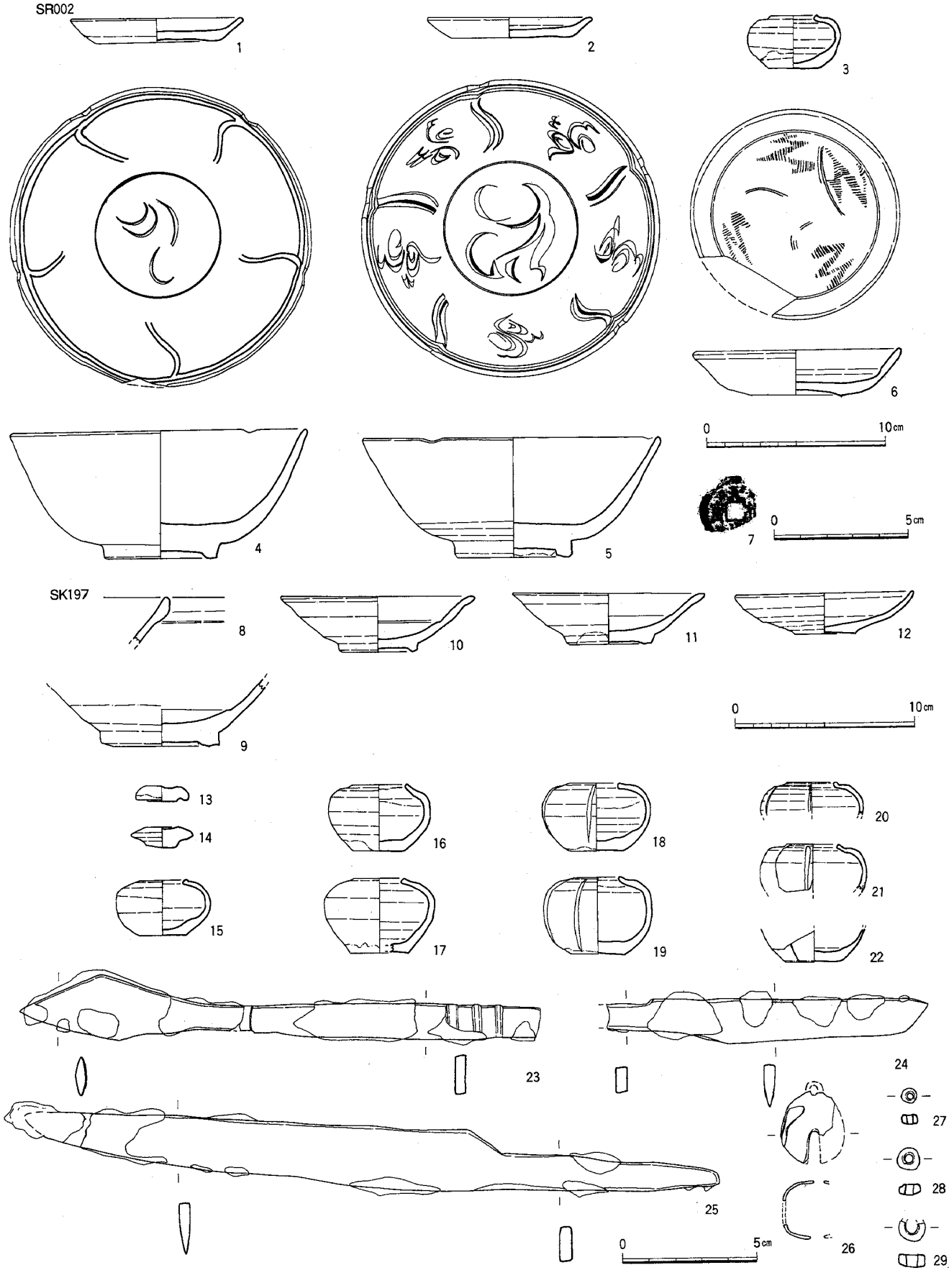


Fig. 49　SR002、SK197 出土遺物実測図（1／3、1／2）

SR154（Fig. 43）調査区下段の北東隅で検出した。人頭大の礫が散漫に分布し、その礫中から白磁碗、青白磁合子、施釉陶器壷が出土した。周囲には近世墓が多数あり、その造営時に遺構の大半は破壊されたものと考えられる。人骨は出土していない。

出土遺物（Fig. 51－1～4）1は玉縁の白磁碗である。底部は欠損している。2、3は青白磁合子の蓋、身である。2は天井部に菊花文を施す。器高1.4cm、口径6.4cmを測る。4は施釉陶器の壷である。体部上半は欠損している。釉色は灰緑色を呈する。

SR158（Fig. 43）調査区下段の北東隅で検出した。人頭大の礫が散漫に分布し、その礫中から土師器小皿、白磁皿が出土した。周囲には近世墓が多数あり、SR154同様、その造営時に遺構は破壊されたものと考えられる。

出土遺物（Fig. 51－5、6）5は土師器小皿である。底部の切り離しは回転糸切りである。器高0.9cm、口径8.5cmを測る。6は高台付の白磁皿である。見込みの釉は輪状に掻き取る。外面下半は露胎である。器高2.9cm、口径10.0cmを測る。

SR159（Fig. 50）調査区の下段、北東隅で検出した。SR160、SR168に切られる。地表施設は人頭大の礫を使用した方形の石組が検出された。石組の西側は崩れているが、170cm×180cmの規模を測る。石組を除去すると、長さ100cm、幅60cmの範囲で炭化物層が検出され、その中から土師器小皿、白磁碗、皿、鉄刀が出土した。人骨は出土していない。

出土遺物（Fig. 51－7～34）24、25、27、28、31、32、33は石組の上面から、それ以外はその下から出土した。7～22は土師器小皿で、底部の切り離しは回転ヘラ切りである。器高0.7cm～1.1cm、口径8.8cm～10.0cmを測る。23は土師器坏で、底部の切り離しは回転ヘラ切りである。器高2.2cm、口径15.6cmを測る。24は玉縁の白磁碗である。底部下半は欠損している。25、26は白磁碗で、26は内外面に櫛描文を施す。27、28は白磁碗の底部で、細い高台の内側は露胎となる。27は内外面に櫛描文を施す。30、31は高台付の白磁皿で、30は見込みの釉を輪状に掻き取る。31は見込みに圏線が巡る。32は龍泉窯系青磁碗で、口縁が輪花となる。文様は持たない。底部は欠損している。33は施釉陶器の壷で、体部上半は欠損している。釉色は淡い灰緑色を呈する。34は鉄刀である。完形品で、茎部には目釘孔が見られる。長さ11.8cm、幅1.7cmを測る。

SR160（Fig. 50）調査区の下段、北東隅で検出した。SR168に切られる。地表施設は人頭大の礫を使用した長方形の石組が検出された。規模200cm×250cmを測る。石組を除去すると、長さ210cm、幅180cm、深さ30cmの土壙を検出した。土壙内から土師器坏の細片等が出土した。人骨は出土していない。

SR168（Fig. 50）調査区の下段、北東隅で検出した。SR161に切られる。地表施設は人頭大の礫を使用した方形の石組が検出された。規模180cm×180cmを測る。石組を除去すると、長さ180cm、幅150cm、深さ45cmの土壙を検出した。土壙の壁面は熱を受けて硬化している。遺物は石組の西側で龍泉窯系青磁碗が出土した。この土器はSR168に直接伴わない可能性がある。人骨は出土していないが、火葬施設の可能性がある。

出土遺物（Fig. 52－1）1は龍泉窯系青磁碗である。体部内面を4本の沈線で5分割し、その中に飛雲文、内底見込みに花文を施す。釉色は深緑色を呈し、高台畳付及び内側は露胎となる。器高7.6cm、口径17.0cmを測る。

SR161（Fig. 50）調査区の下段、北東隅で検出した。SR168を切る。地表施設は人頭大の礫を使用した方形の石組が検出された。石組は長さ120cm、幅90cm、深さ50cmの土壙の壁際に礫を積み上げて構築される。石組の規模は170cm×180cmを測る。石組の中央には施釉陶器の壷が埋置されていた。

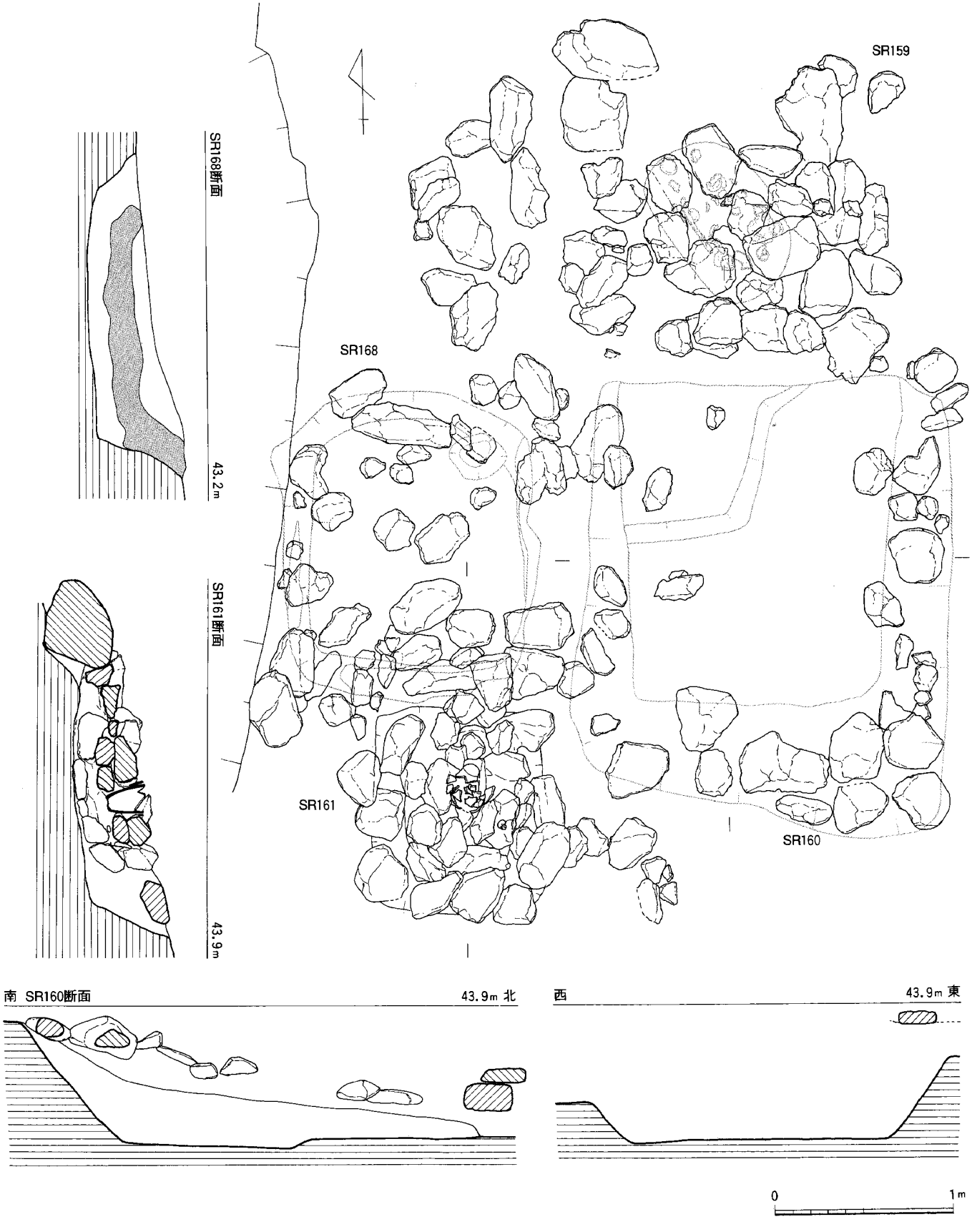


Fig. 50 SR159、160、161、168 遺構実測図（1／30）

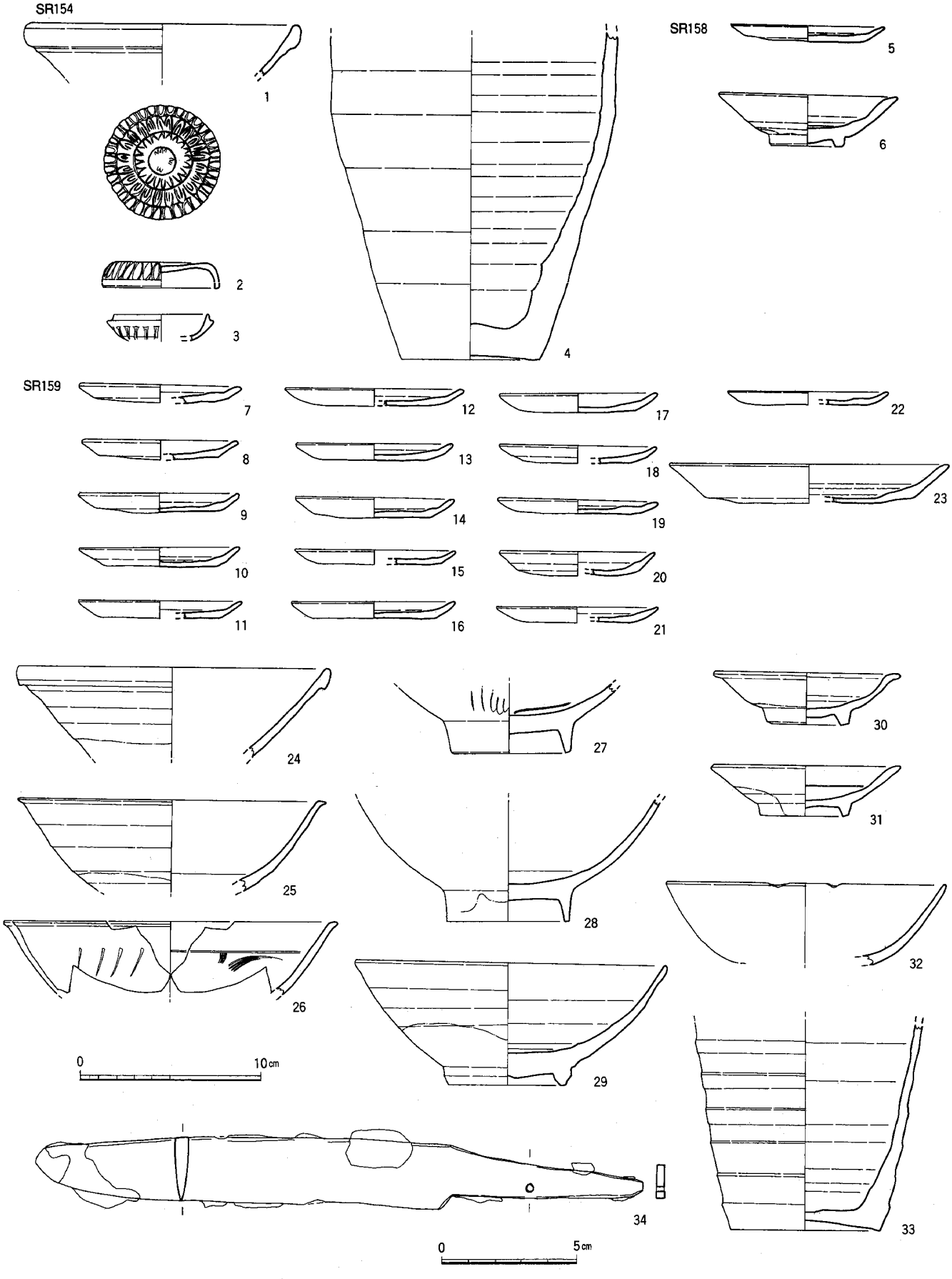


Fig. 51　SR154、158、159 出土遺物実測図（1／3、1／2）

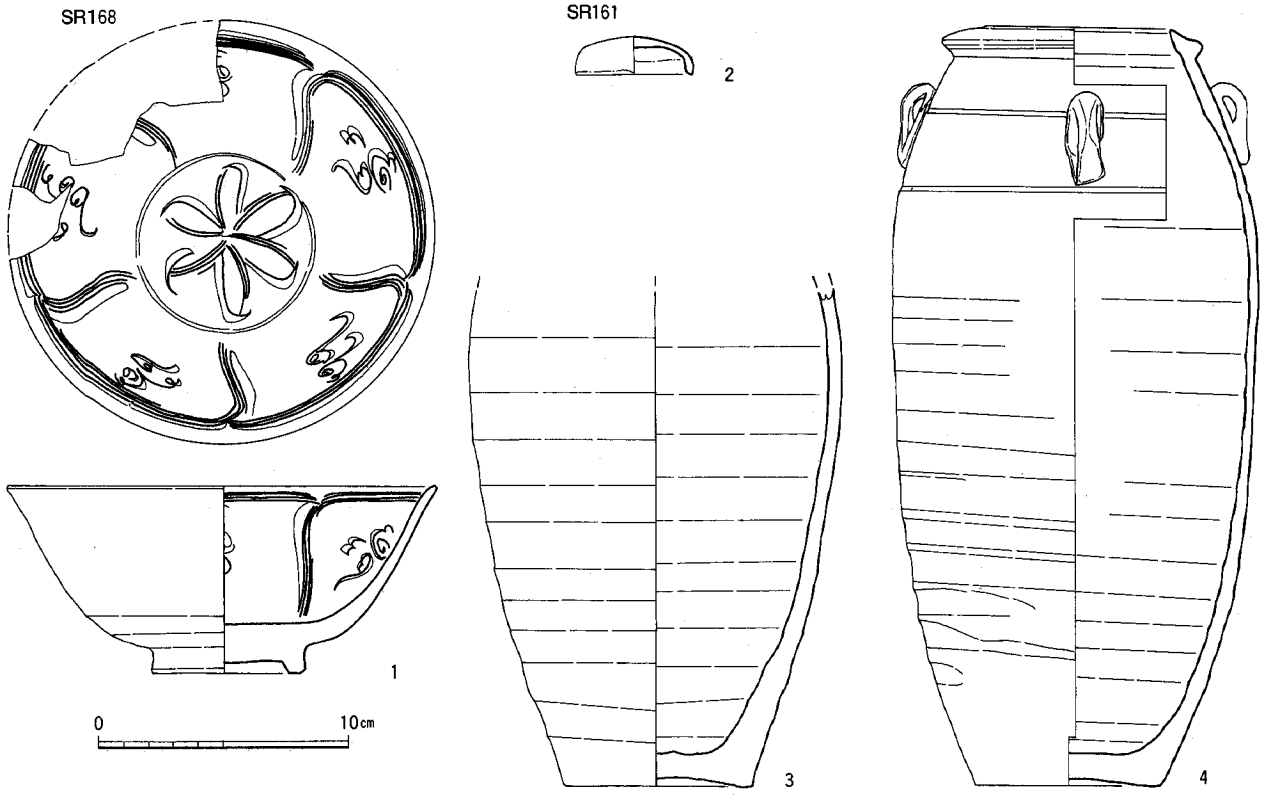


Fig. 52　SR161、168 出土遺物実測図（1／3）

壷は欠損していたが、出土状況から同種の壷で蓋をされていたと考えられる。壷の内部から人骨等は検出されなかった。

出土遺物（Fig. 52－2～4）2は石組中から出土した白磁の合子の蓋である。器高1.6cm、口径4.6cmを測る。3は蓋にされた施釉陶器の壷である。体部上半は欠損している。釉色は灰緑色を呈する。4は埋置されていた施釉陶器の四耳壷である。口縁は玉縁状を呈する。釉色は灰緑色を呈する。器高30.2cm、口径7.4cmを測る。

SR026（Fig. 53）調査区の下段、東側で検出した。墓壙の平面形は楕円形を呈し、長さ50cm、幅54cm、深さ10cmを測る。主軸方位はN－14°－Wを測る。遺構の大半は削平されたと考えられる。墓壙内から釘は出土していない。また、人骨は遺存していない。土壙墓と考えられる。遺物は墓壙の北側で、龍泉窯系青磁碗2点が出土した。

出土遺物（Fig. 56－1、2）1、2は龍泉窯系青磁碗である。外面には鎬蓮弁を施す。高台畳付と内側は露胎となる。釉色はオリーブ色、オリーブ色を呈する。器高6.5cm、6.5cm、口径16.4cm、16.0cmを測る。

SR033（Fig. 53）調査区の下段、東側で検出した。遺構は調査区南側に広がる。墓壙の平面形は楕円形を呈し、長さ65cm、幅90cm、深さ20cmを測る。主軸方位はN－5°－Wを測る。墓壙内から釘は出土していない。また、人骨は遺存していない。土壙墓と考えられる。遺物は墓壙の北側で、土師器小皿4点、白磁碗2点が出土した。

出土遺物（Fig. 56－3～8）3～6は土師器小皿である。底部の切り離しは回転糸切りである。器高0.8cm～1.3cm、口径8.6cm～9.4cmを測る。7、8は口禿の白磁碗である。高台畳付と内側は露胎となる。見込みには圏線が巡る。器高5.6cm、5.9cm、口径14.7cm、15.4cmを測る。

SR034（Fig. 53）調査区の中央、南側で検出した。北側の一部は撹乱をうけている。墓壙の平面形は隅丸長方形を呈し、長さ128㎝、幅85㎝、深さ15㎝を測る。主軸方位はN－18°－Eを測る。墓壙底で人頭大の礫を検出した。墓壙内から釘は出土していない。また、人骨は遺存していない。土壙墓と考えられる。遺物は墓壙の北側で、土師器小皿４点、龍泉窯系青磁碗１点が出土した。

出土遺物（Fig. 56－９～13）９～12は土師器小皿である。底部の切り離しは回転糸切りである。器高1.1㎝～1.35㎝、口径8.4㎝～8.8㎝を測る。13は龍泉窯系青磁碗である。外面には鎬蓮弁を施す。高台畳付は露胎となる。釉色は明るい緑色を呈する。器高6.7㎝、口径14.8㎝を測る。

SR035（Fig. 53）調査区の下段、東側で検出した。墓壙の平面形は楕円形を呈し、長さ77㎝、幅55㎝、深さ10㎝を測る。主軸方位はN－14°－Eを測る。遺構の大半は削平されたと考えられる。墓壙内から釘は出土していない。また、人骨は遺存していない。土壙墓と考えられる。遺物は墓壙の北側で、白磁皿２点、龍泉窯系青磁碗１点が出土した。

出土遺物（Fig. 56－14～16）14、15は口禿の白磁皿である。釉は全面に施釉される。見込みには圏線が巡る。16は龍泉窯系青磁碗である。外面には鎬蓮弁を施す。高台畳付と内側は露胎となる。釉色は明るい緑色を呈する。器高6.9㎝、口径16.9㎝を測る。

SR100（Fig. 53）調査区の下段、東側で検出した。墓壙の平面形は隅丸長方形を呈し、長さ237㎝、幅130㎝、深さ60㎝を測る。主軸方位はN－10°－Eを測る。墓壙底から45㎝浮いたところで人頭大の礫を検出した。墓壙内からは釘が出土しており、釘を使用した棺と判断される。釘の出土状態から棺の規模は幅40㎝、長さ110㎝程と推測できる。人骨は遺存していない。遺物は墓壙の北側で、土師器小皿４点、龍泉窯系青磁碗１点が出土した。出土状況から棺外に副葬されたものと考えられる。

出土遺物（Fig. 56－17～23）17～20は土師器小皿である。底部の切り離しは回転糸切りである。器高1.2㎝～1.4㎝、口径7.6㎝～8.2㎝を測る。21は龍泉窯系青磁碗である。外面には鎬蓮弁を施す。高台畳付と内側は露胎となる。釉色は明るい緑色を呈する。器高6.8㎝、口径16.6㎝を測る。22、23は鉄釘である。釘には木質が遺存する。木質は横方向の木目が観察される。

SR103（Fig. 53）調査区の下段、中央で検出した。遺構は南側に広がる。墓壙の平面形は隅丸長方形を呈し、長さ135㎝、幅95㎝、深さ10㎝を測る。主軸方位はN－32°－Eを測る。遺物は墓壙の北側で、土師器小皿４点、坏１点、鉄刀１点が出土した。

出土遺物（Fig. 56－24～29）24～27は土師器小皿である。底部の切り離しは回転糸切りである。器高1.1㎝～1.2㎝、口径8.6㎝～9.0㎝を測る。28は土師器坏である。底部の切り離しは回転糸切りである。器高2.6㎝、口径12.6㎝を測る。29は鉄刀で、茎部の一部は欠損する。茎部には目釘孔が見られる。現存長28.2㎝、幅2.4㎝を測る。

SR105（Fig. 53）調査区の下段、中央で検出した。墓壙の西側と南側は撹乱をうけている。墓壙の平面形は隅丸長方形を呈し、長さ235㎝、幅170㎝、深さ50㎝を測る。主軸方位はN－５°－Eを測る。墓壙内から釘は出土していない。また、人骨は遺存していない。土壙墓と考えられる。遺物は墓壙の北側で、土師器小皿４点、坏１点が出土した。

出土遺物（Fig. 57－１～５）１～４は土師器小皿である。底部の切り離しは回転糸切りである。器高1.0㎝～1.3㎝、口径9.0㎝～9.4㎝を測る。５は土師器坏である。底部の切り離しは回転糸切りである。器高2.9㎝、口径14.4㎝を測る。

SR106（Fig. 54）調査区の下段、北西で検出した。墓壙の平面形は長方形を呈し、長さ248㎝、幅104㎝、深さ55㎝を測る。主軸方位はN－５°－Wを測る。墓壙内からは釘が出土しており、釘を使用した棺と判断される。釘の出土状態から棺の規模は幅50㎝、長さ140㎝程と推測できる。人骨は遺存

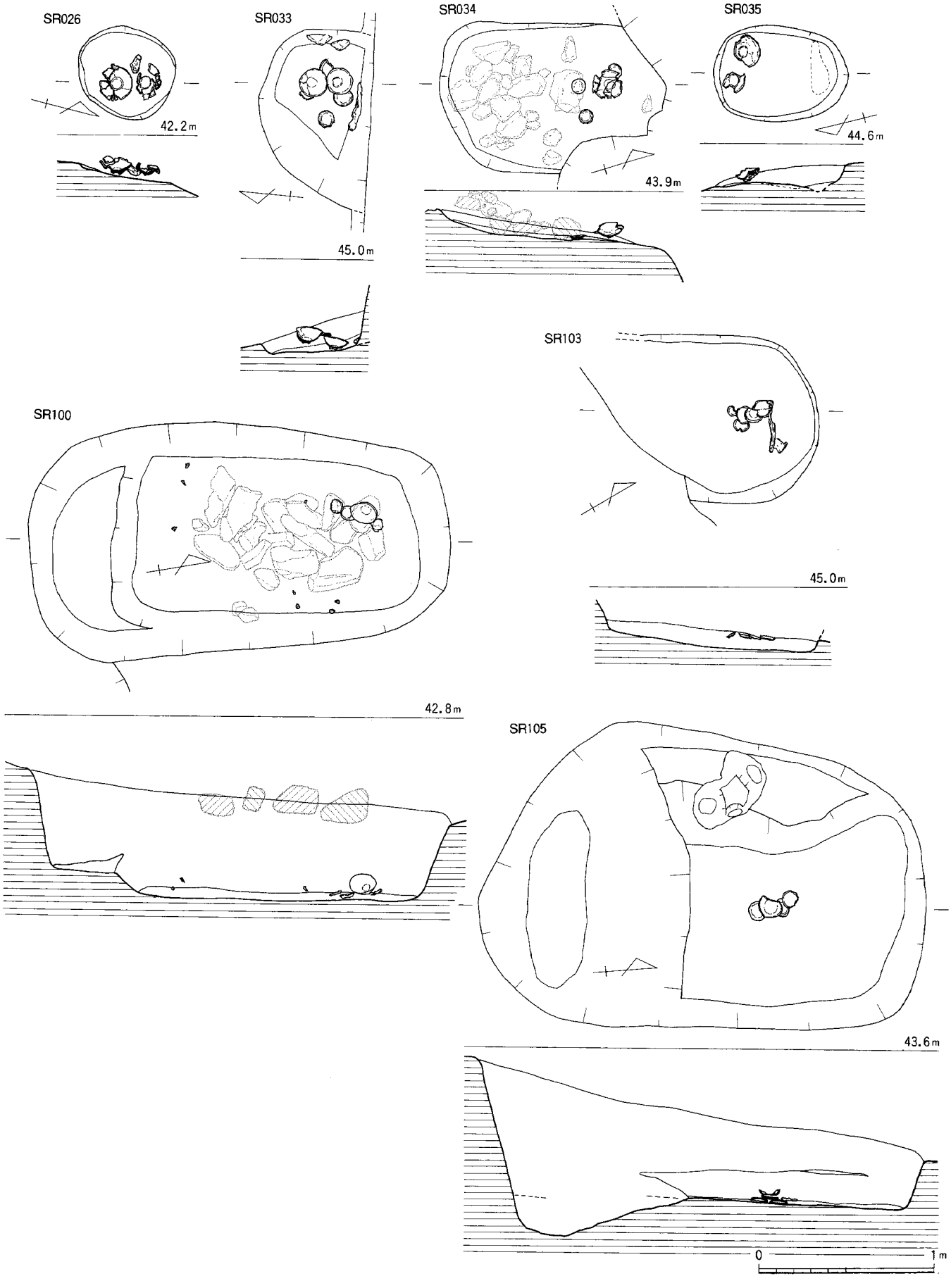


Fig. 53　SR026、033、034、035、100、103、105 遺構実測図（1／30）

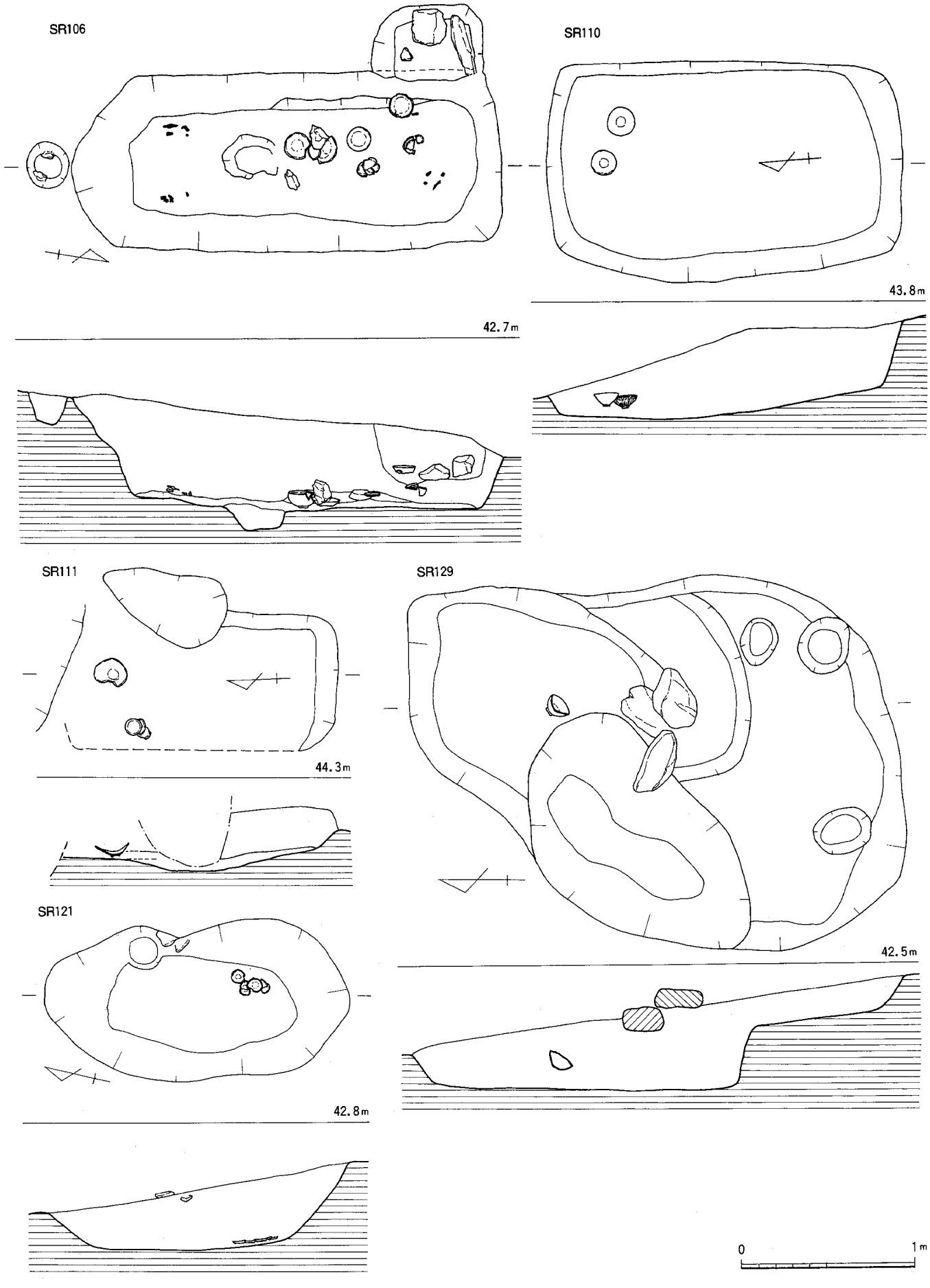


Fig. 54　SR106、110、111、121、129 遺構実測図（1／30）

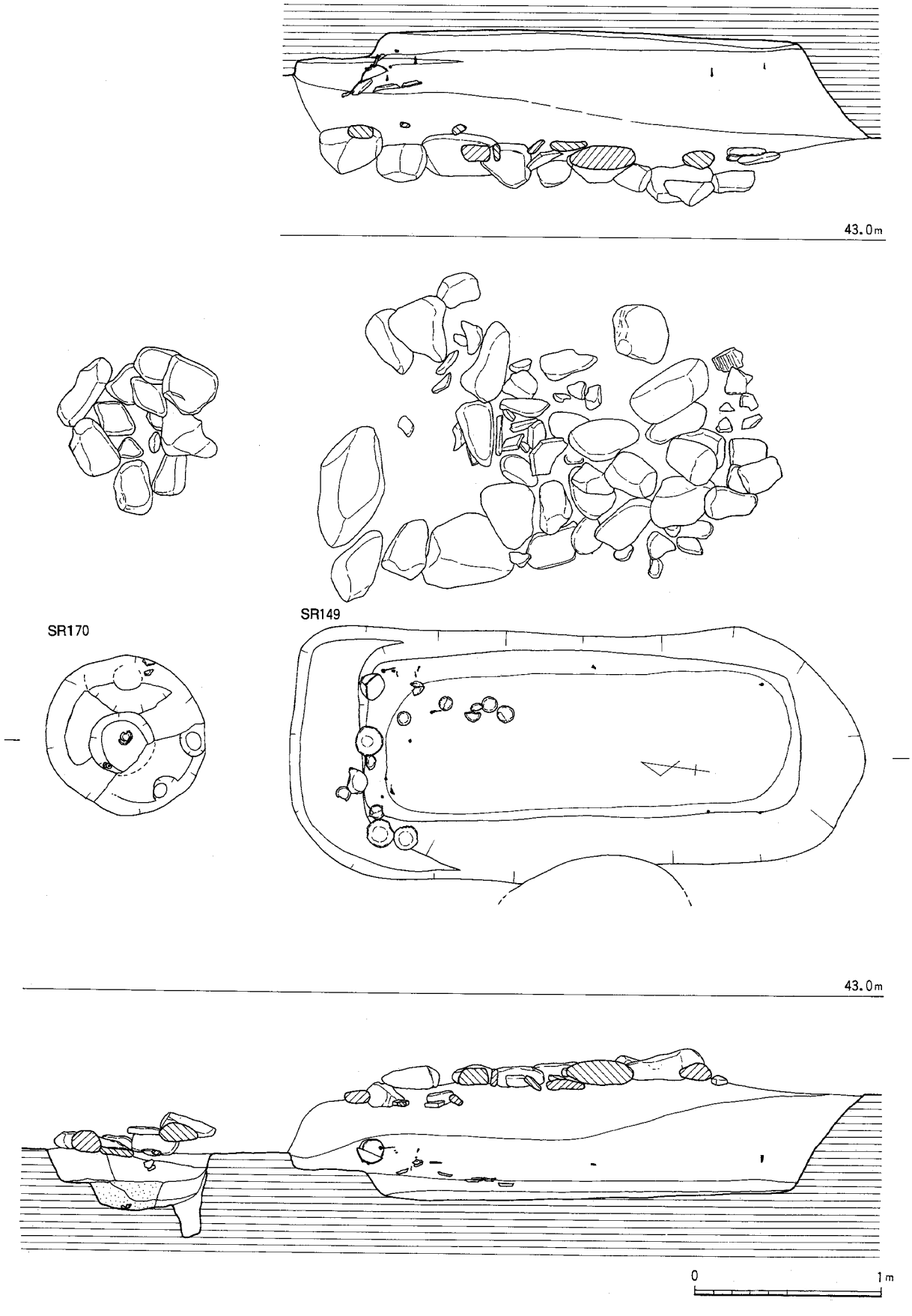


Fig. 55　SR149、170 遺構実測図（1／30）

していない。遺物は墓壙の西側と棺の下で、土師器小皿４点、坏３点、龍泉窯系青磁碗１点が出土した。出土状況から棺外に副葬されたものと考えられる。

出土遺物（Fig. 57－６～25）６～10は土師器小皿である。底部の切り離しは回転糸切りである。器高0.8cm～1.0cm、口径8.0cm～9.4cmを測る。11～13は土師器坏である。底部の切り離しは回転糸切りである。器高2.7cm～3.1cm、口径15.0cm～15.6cmを測る。14は龍泉窯系青磁碗である。体部内面には２単位の草花文と見込みに花文を施す。釉色は灰緑色を呈する。器高8.1cm、口径16.3cmを測る。15～25は鉄釘である。断面形は長方形を呈する。15～18は頭部から２cm程は横方向の木目が、それ以下は縦方向の木目が観察される。25は全体に横方向の木目が見られる。

SR108（Fig. 43）調査区の下段、中央で検出した。墓壙の平面形は隅丸長方形を呈し、長さ140cm、幅110cm、深さ20cmを測る。墓壙底から10cm浮いたところで人頭大の礫を検出した。墓壙内から釘は出土していない。また、人骨は遺存していない。土壙墓と考えられる。遺物は墓壙の礫内から白磁皿１点が出土した。

出土遺物（Fig. 57－26）26は口禿の白磁皿である。底部は露胎となる。器高1.7cm、口径8.1cmを測る。

SR110（Fig. 54）調査区の下段、中央で検出した。墓壙の平面形は長方形を呈し、長さ205cm、幅128cm、深さ50cmを測る。主軸方位はＮ－５°－Ｅを測る。墓壙内から釘は出土していない。また、人骨は遺存していない。土壙墓と考えられる。遺物は墓壙の北側で、土師器小皿３点、龍泉窯系青磁碗１点が出土した。

出土遺物（Fig. 57－27、28）27、28は龍泉窯系青磁碗である。外面には鎬蓮弁を施す。高台畳付と内側は露胎となる。28は見込みに花文を施す。釉色はオリーブ色、灰緑色を呈する。器高7.8cm、7.0cm、口径16.2cm、15.8cmを測る。

SR111（Fig. 54）調査区の下段、中央で検出した。墓壙の平面形は長方形を呈し、長さ160cm、幅80cm、深さ25cmを測る。主軸方位はＮ－２°－Ｅを測る。墓壙内から釘は出土していない。また、人骨は遺存していない。土壙墓と考えられる。遺物は墓壙の北側で、土師器小皿３点、龍泉窯系青磁碗１点が出土した。

出土遺物（Fig. 57－29～32）29～31は土師器小皿である。底部の切り離しは回転糸切りである。器高0.9cm～1.2cm、口径9.0cm～9.8cmを測る。32は龍泉窯系青磁碗である。外面には鎬蓮弁を施す。高台畳付と内側は露胎となる。釉色はオリーブ色を呈する。器高7.4cm、口径17.2cmを測る。

SR121（Fig. 54）調査区の下段、東側で検出した。墓壙の平面形は楕円形を呈し、長さ175cm、幅90cm、深さ35cmを測る。主軸方位はＮ－14°－Ｗを測る。墓壙内から釘は出土していない。また、人骨は遺存していない。土壙墓と考えられる。遺物は墓壙の南側で、土師器小皿４点が出土した。

出土遺物（Fig. 58－１～５）１～５は土師器小皿である。底部の切り離しは回転糸切りである。器高1.3cm～1.9cm、口径8.6cm～9.6cmを測る。

SR129（Fig. 54）調査区の下段、中央で検出した。墓壙の平面形は撹乱のため、形状が乱れているが、本来は隅丸長方形を呈するものと考えられる。長さ200cm、幅110cm、深さ35cmを測る。主軸方位はＮ－０°－Ｅを測る。墓壙底から30cm浮いたところで人頭大の礫を検出した。墓壙内から釘が出土していない。また、人骨は遺存していない。土壙墓と考えられる。遺物は墓壙の中央で、龍泉窯系青磁碗１点が出土した。

出土遺物（Fig. 58－６）６は龍泉窯系青磁碗である。外面には鎬蓮弁を施す。高台畳付と内側は露胎となる。釉色は灰緑色を呈する。器高7.0cm、口径16.0cmを測る。

SR149（Fig. 55）調査区の下段、北西側で検出した。地表施設は人頭大の礫を使用した長方形の

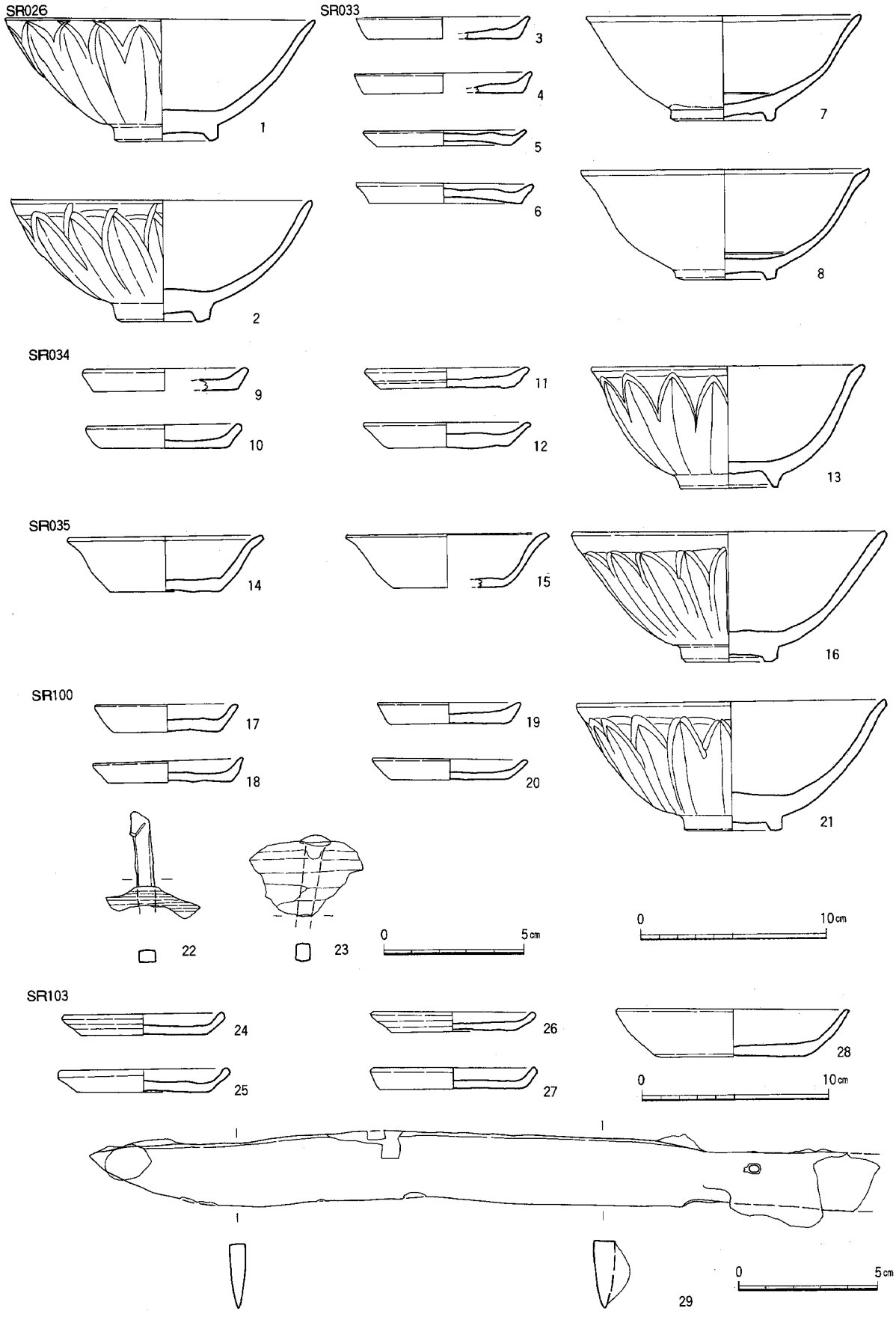


Fig. 56　SR026、033、034、035、100、103 出土遺物実測図（1／3、1／2）

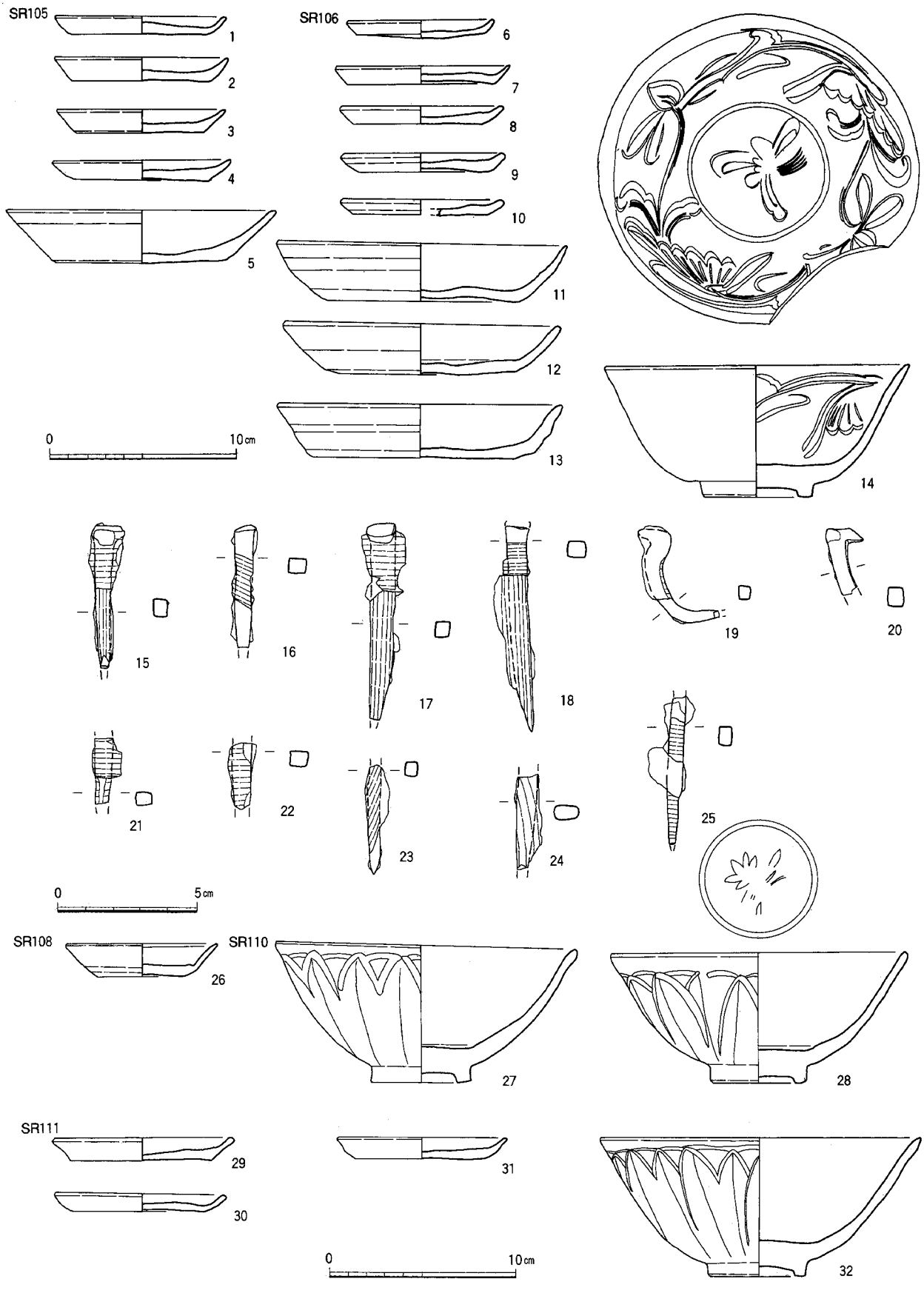


Fig. 57　SR105、106、108、110、111 出土遺物実測図（1／3、1／2）

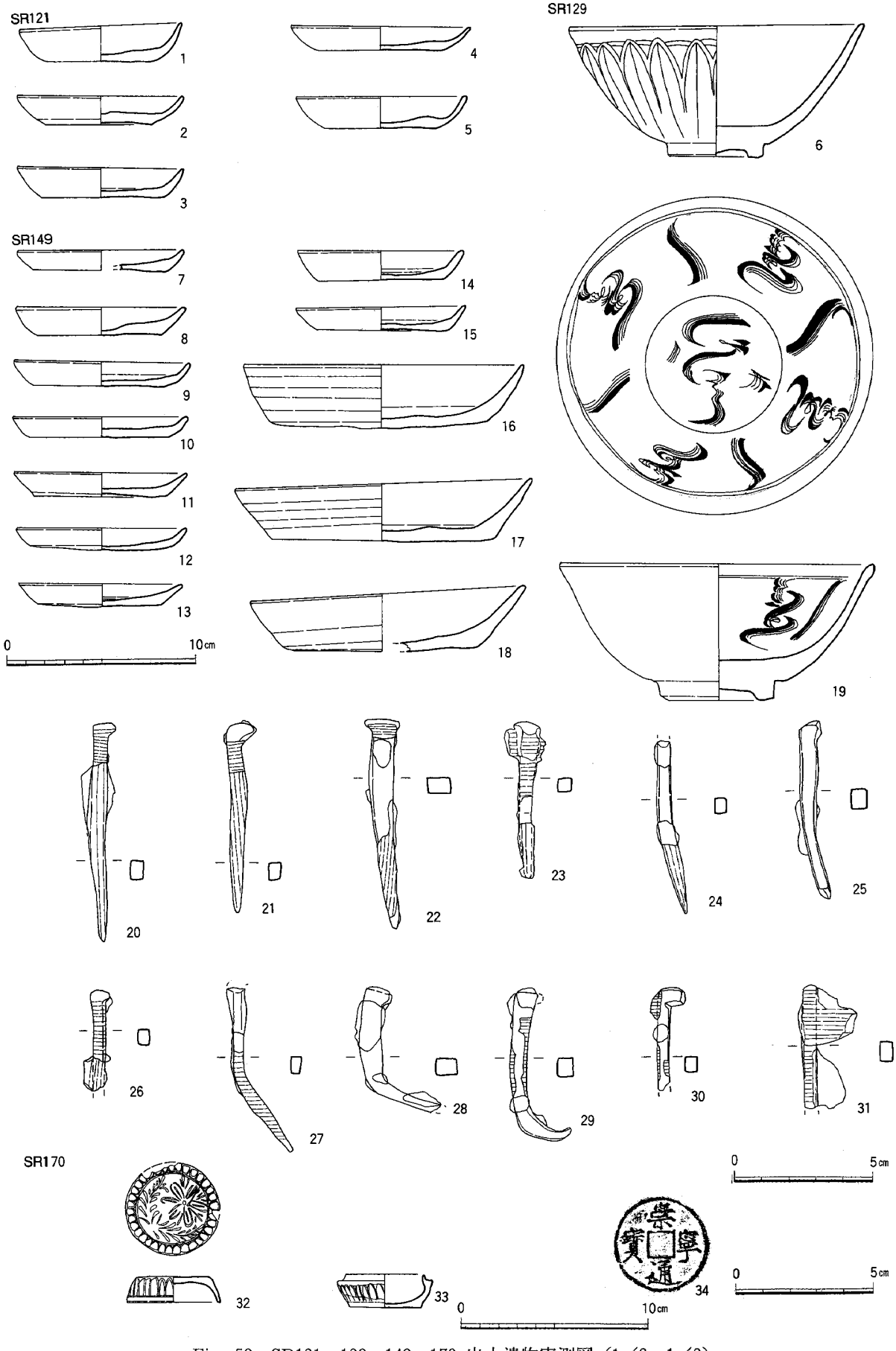


Fig. 58　SR121、129、149、170 出土遺物実測図（1／3、1／2）

石組を検出した。石組の中央には瓦による小区画が認められ、ここに卒塔婆等が立てられた可能性がある。石組の長さ250cm、幅170cm、高さ20cmを測る。墓壙の平面形は隅丸長方形を呈し、長さ305cm、幅131cm、深さ50cmを測る。主軸方位はN－7°－Eを測る。墓壙内からは釘が出土しており、釘を使用した棺と判断される。釘の出土状態から棺の規模は幅65cm、長さ195cm程と推測できる。人骨は遺存していない。棺の下位には厚さ約10cmの炭化物の層が認められた。遺物は墓壙の北側と棺の下で、土師器小皿9点、坏3点、龍泉窯系青磁碗1点が出土した。出土状況から棺外に副葬されたものと考えられる。

出土遺物（Fig. 58－7～31）7～15は土師器小皿である。底部の切り離しは回転糸切りである。器高1.1cm～1.6cm、口径8.6cm～9.3cmを測る。16～18は土師器坏である。底部の切り離しは回転糸切りである。器高3.1cm～3.3cm、口径14.6cm～15.8cmを測る。19は龍泉窯系青磁である。体部内面を4本の沈線で5分割し、その中と内底見込みに飛雲文を施す。高台畳付と内側は露胎となる。釉色はオリーブ色を呈する。器高7.4cm、口径17.0cmを測る。20～31は鉄釘である。断面形は長方形を呈する。長さは3.7cm～7.9cmを測る。20～23は頭部から2cm程は横方向の木目が、それ以下は縦方向の木目が観察される。26、27、29～31は全体に横方向の木目が見られる。

SR170（Fig. 55）調査区の下段、北西側で検出した。上面には人頭大の礫を円形に配列する。規模は85cm×85cm、高さ35cmを測る。礫の下には二段に掘りくぼめられた円形の土壙を検出した。上端の径約30cm、深さ15cmを測る。下段の土壙には炭化物が充填されていた。炭化物の中から青白磁合子（蓋、身）、銅銭（崇寧通寶）1点が出土した。SR149の北側に位置し、遺構の中軸線が一致することや炭化物を充填すること等から関連の遺構と考えられる。

出土遺物（Fig. 58－32～34）32、33は青白磁の合子である。32は天井部に草花文を施す。器高1.4cm、1.75cm～1.8cm、口径5.0cm、4.1cmを測る。34は当十銭の「崇寧通寶」（初鋳年1103年）で、径3.3cmを測る。

SR150（Fig. 59）調査区の下段、西側で検出した。SR165に切られる。墓壙の平面形は楕円形を呈し、長さ116cm、幅80cm、深さ20cmを測る。主軸方位はN－0°－Eを測る。墓壙内から釘は出土していない。また、人骨は遺存していない。土壙墓と考えられる。遺物は墓壙の西側で、龍泉窯系青磁碗2点が出土した。

出土遺物（Fig. 62－1、2）1、2は龍泉窯系青磁碗である。1は無文で、釉色はオリーブ色を呈する。器高7.0cm、口径16.1cmを測る。2は体部内面を4本の沈線で5分割し、その中に飛雲文を、内底見込みにキノコ状の文様を施す。高台畳付と内側は露胎となる。釉色はオリーブ色を呈する。器高7.6cm、口径16.6cmを測る。

SR165（Fig. 59）調査区の下段、西側で検出した。SR150を切る。墓壙の平面形は隅丸長方形を呈し、長さ200cm、幅125cm、深さ40cmを測る。主軸方位はN－90°－Wを測る。墓壙内から釘は出土していない。また、人骨は遺存していない。土壙墓と考えられる。遺物は墓壙の西側で、土師器小皿2点、龍泉窯系青磁碗1点が出土した。

出土遺物（Fig. 62－3～5）3、4は土師器小皿である。底部の切り離しは回転糸切りである。器高1.0cm、1.0cm、口径9.0cm、9.0cmを測る。5は龍泉窯系青磁碗である。体部内面には2単位の草花文を、内底見込みには花文を施す。高台畳付と内側は露胎となる。釉色は淡い緑色を呈する。器高6.6cm、口径15.8cmを測る。

SR151（Fig. 59）調査区の下段、南西隅で検出した。人頭大の礫を積み重ねて石室を構築する。北側は崩落している。現状で2段の石積みが遺存する。石室内には床面の状態から木棺が設置されて

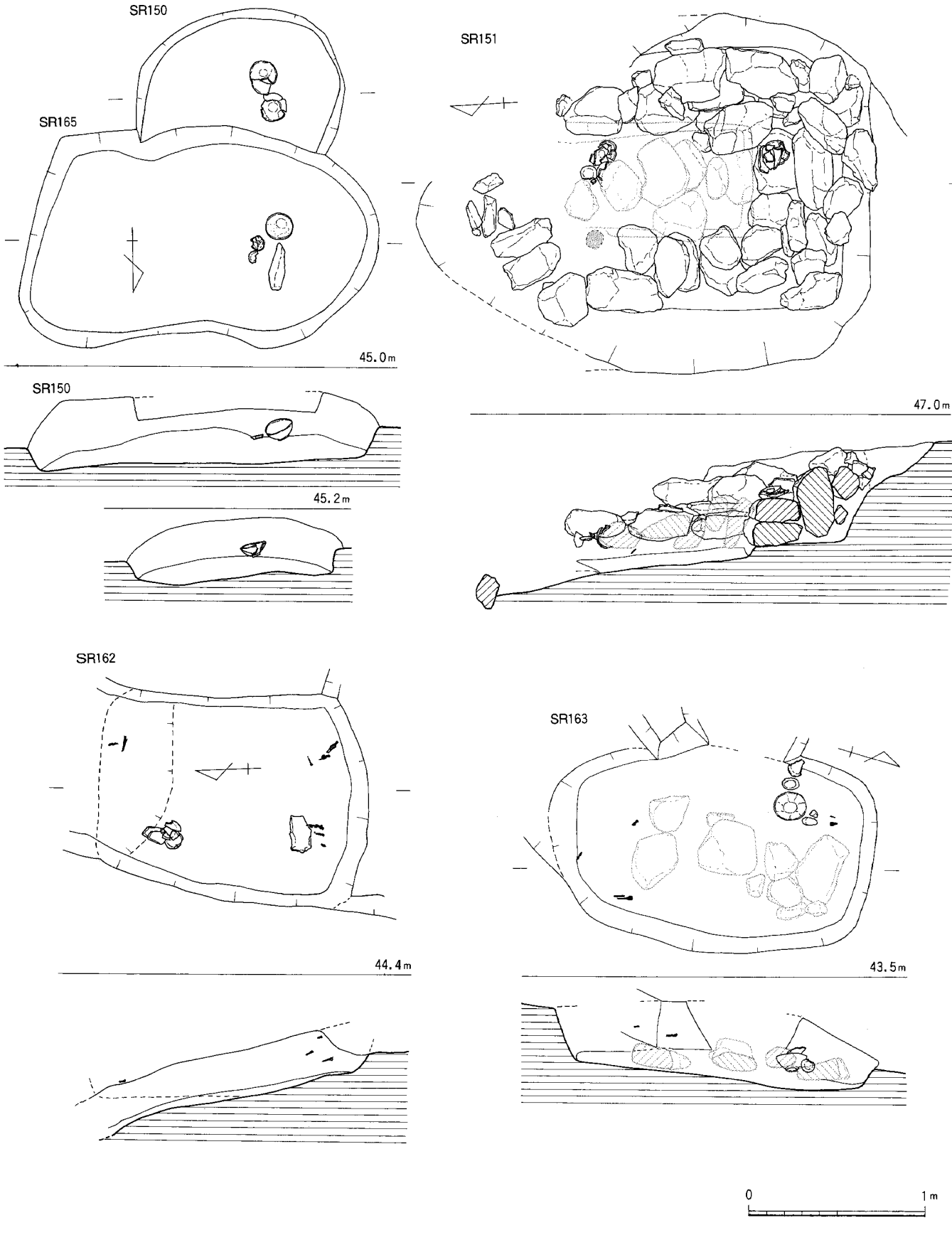


Fig. 59　SR150、165、151、162、163 遺構実測図（1／30）

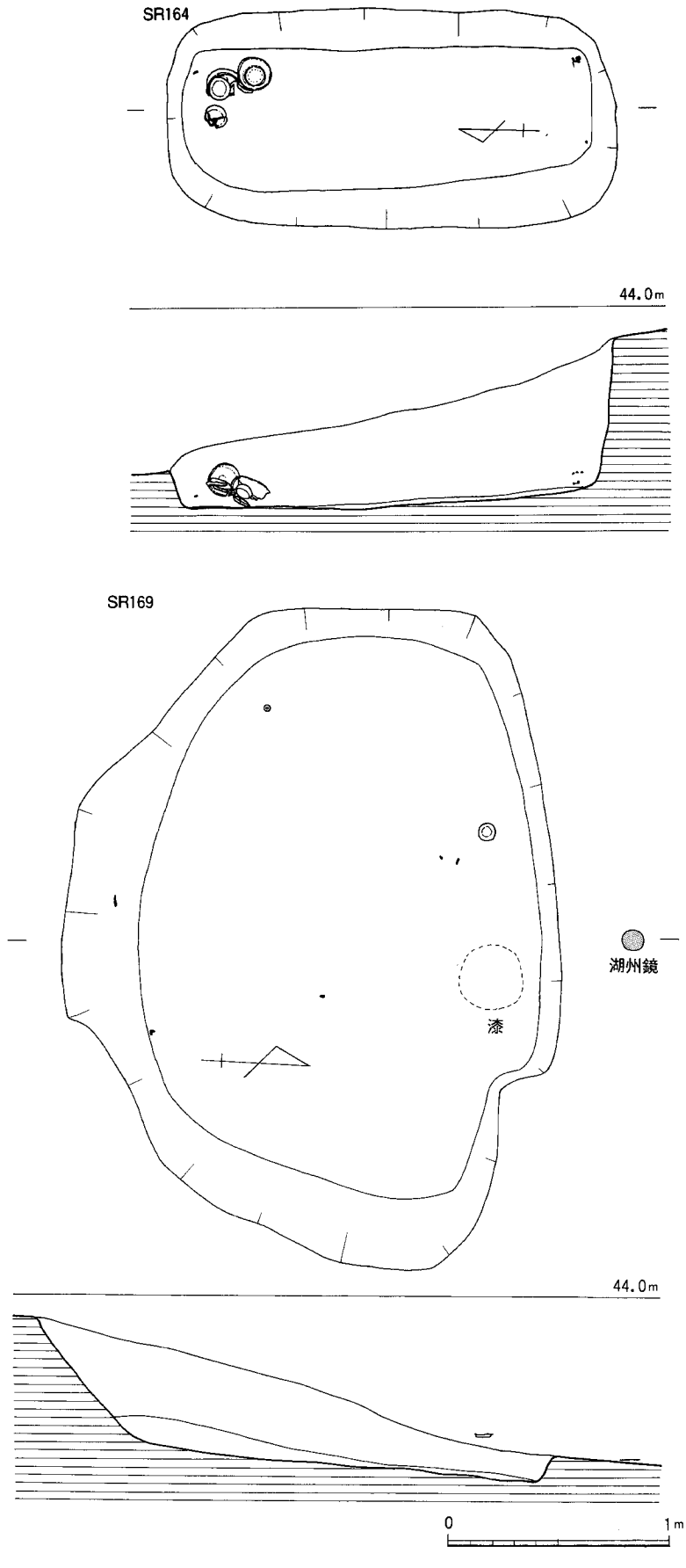


Fig. 60　SR164、169 遺構実測図（1／30）

いたと推測される。棺内には蓋の腐食によって崩落したと考えられる人頭礫が多数出土した。内法長さ295cm以上、幅200cm、深さ55cmを測る。主軸方位はN－2°－Eを測る。遺物は石室の外側で、土師器坏、龍泉窯系青磁碗、湖州鏡1面が出土した。また、石室内から龍泉窯系青磁碗、皿、同安窯系青磁碗が出土した。後者は出土状況から棺の上に副葬されたが転落したと考えられる。

出土遺物（Fig. 61－1～9）1は土師器坏である。底部の切り離しは回転糸切りである。器高2.7cm、口径14.8cmを測る。2～4は龍泉窯系青磁皿である。体部中位で屈曲し、底部は平底である。2は見込みに魚文と水草を片彫りする。3、4は櫛描きの花文を施す。底部は露胎となる。釉色は暗橙褐色、淡緑色、淡緑色を呈する。器高2.8cm～3.0cm、3.8cm、2.0cm～2.3cm、口径10.2cm、9.9cm、9.6cmを測る。5～7は龍泉窯系青磁碗である。5、6は体部内面には3単位の草花文を、内底見込みには花文を施す。高台畳付と内側は露胎となる。釉色は淡緑色、淡緑色を呈する。器高6.7cm、6.8cm～7.0cm、口径16.4cm、16.2cmを測る。7は外面に鎬連弁を施す。高台畳付と内側は露胎となる。釉色は暗緑白色を呈する。器高6.2cm～6.3cm、口径15.8cmを測る。8は同安窯系青磁碗で、体部上位で内側に屈曲する。外面は無文で、内側には櫛描文を施す。底部下半は露胎となる。釉色は灰白色を呈する。器高6.1cm、口径15.0cm～15.6cmを測る。9は湖州鏡で、面形は葵花形を呈する。鏡背には「[湖][州]石十五郎、[真][煉] 銅照子」の銘文が見られる。最大径9.9cm、厚さ0.4cmを測る。

SR162（Fig. 59）調査区の下段、西側で検出した。墓壙の北側は撹乱されている。平面形は隅丸長方形を呈し、長さ150cm、幅115cm、深さ30cmを測る。主軸方位はN－4°－Eを測る。墓壙内からは釘が出土しており、釘を使用した棺と判断される。釘の出土状態から棺の規模は幅40cm、長さ110cm程と推測できる。人骨は遺存していない。遺物は墓壙の北西側で、土師器小皿2点が出土した。出土状況から棺外に副葬されたものと考えられる。

出土遺物（Fig. 62－6～14）6、7は土師器小皿である。底部の切り離しは回転糸切りである。器高1.05cm、1.2cm～1.4cm、口径9.1cm、9.8cmを測る。8～14は鉄釘で、断面形は長方形を呈する。長さは3.3cm～9.8cmを測る。8～11は頭部から2cm程は横方向の木目が、それ以下は縦方向の木目が観察される。

SR163（Fig. 59）調査区の下段、西側で検出した。地表施設は検出されなかった。墓壙の平面形は隅丸長方形を呈し、長さ185cm、幅110cm、深さ40cmを測る。主軸方位はN－17°－Eを測る。墓壙底に人頭大の礫を検出した。墓壙内からは釘が出土しており、釘を使用した棺と判断される。礫は棺の下に敷いたものと考えられる。釘の出土状態から棺の規模は幅40cm、長さ110cm程と推測できる。人骨は遺存していない。遺物は墓壙の北西側で、土師器小皿4点、龍泉窯系青磁碗1点が出土した。出土状況から棺外に副葬されたものと考えられる。

出土遺物（Fig. 62－15～27）15～18は土師器小皿である。底部の切り離しは回転糸切りである。器高0.9cm、1.15cm、口径9.3cm、10.0cmを測る。19は龍泉窯系青磁碗である。体部内面には2単位の草花文を、内底見込みには花文を施す。高台畳付と内側は露胎となる。釉色は淡青緑色を呈する。器高6.6cm、口径16.0cmを測る。20～27は鉄釘で、断面形は長方形を呈する。長さは3.2cm～7.9cmを測る。21～23は頭部から2cm程は横方向の木目が、それ以下は縦方向の木目が観察される。

SR164（Fig. 60）調査区の下段、西側で検出した。墓壙の平面形は隅丸長方形を呈し、長さ203cm、幅110cm、深さ70cmを測る。主軸方位はN－3°－Wを測る。墓壙内からは釘が出土しており、釘を使用した棺と判断される。釘の出土状態から棺の規模は幅35cm、長さ150cm程と推測できる。人骨は遺存していない。遺物は墓壙の北側で、土師器小皿4点、龍泉窯系青磁碗2点、皿1点、同安窯系青磁碗1点、皿1点が出土した。出土状況から棺内に副葬されたものと考えられる。

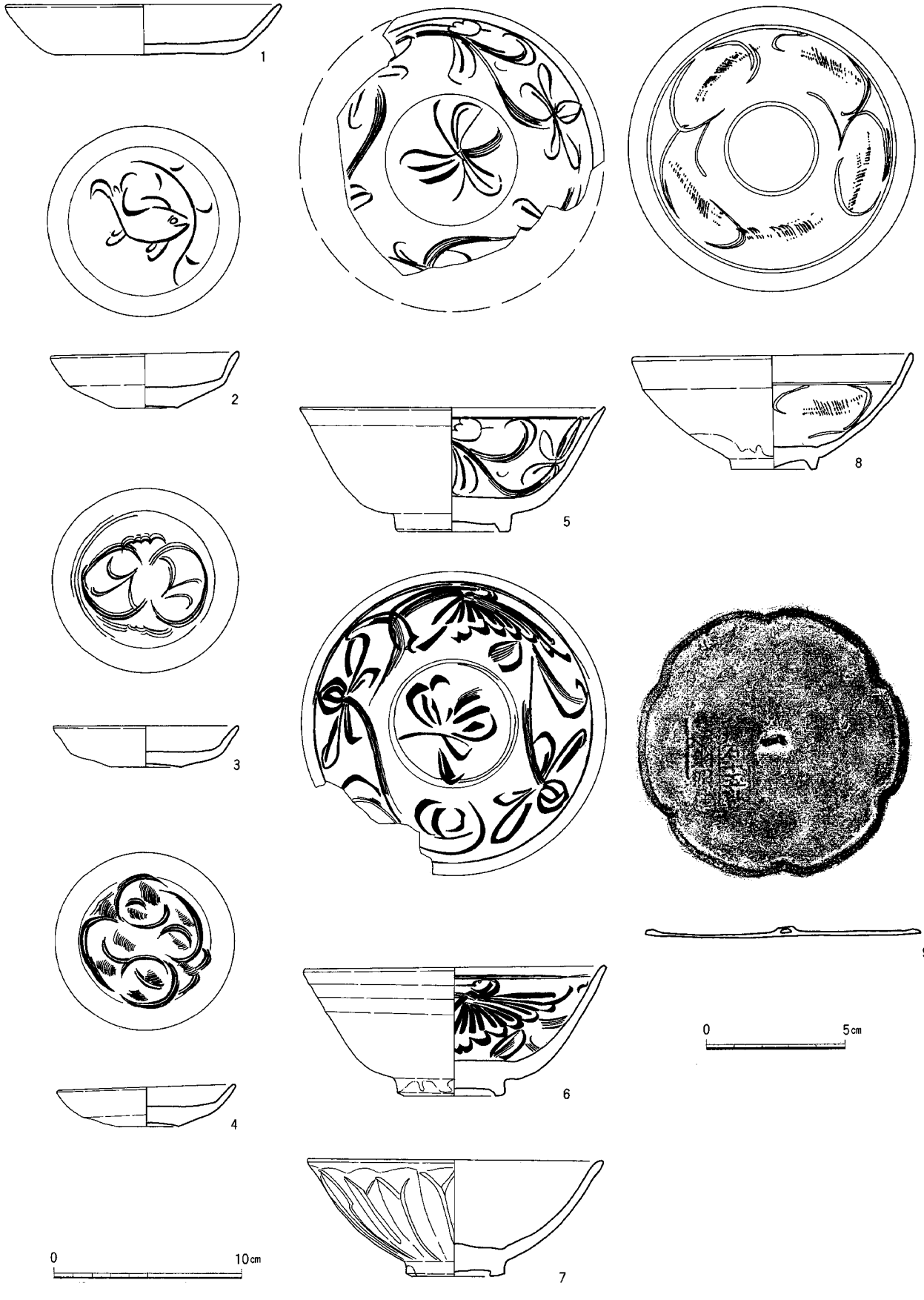


Fig. 61　SR151 出土遺物実測図（1／3、1／2）

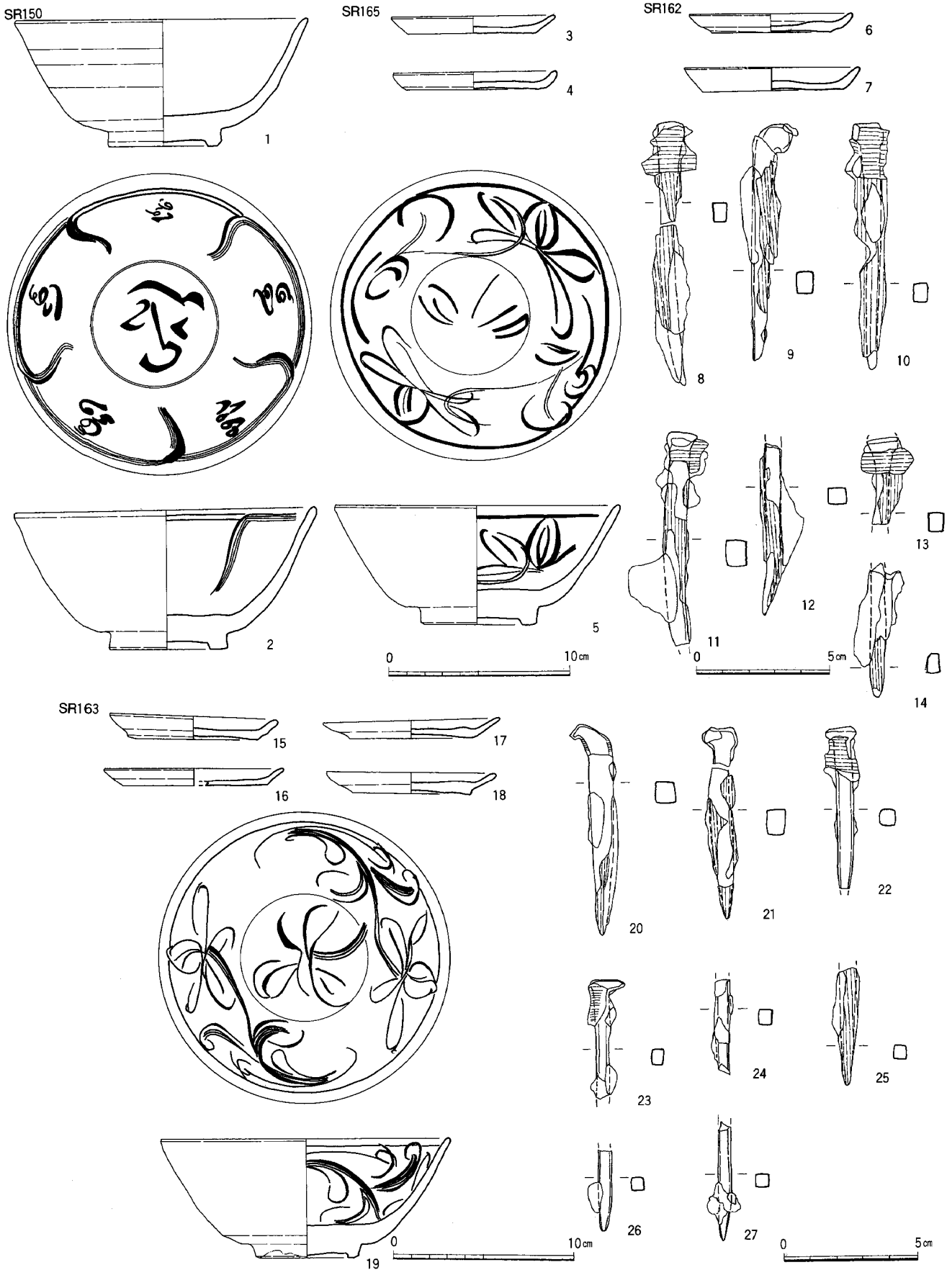


Fig. 62　SR150、165、162、163 出土遺物実測図（1／3、1／2）

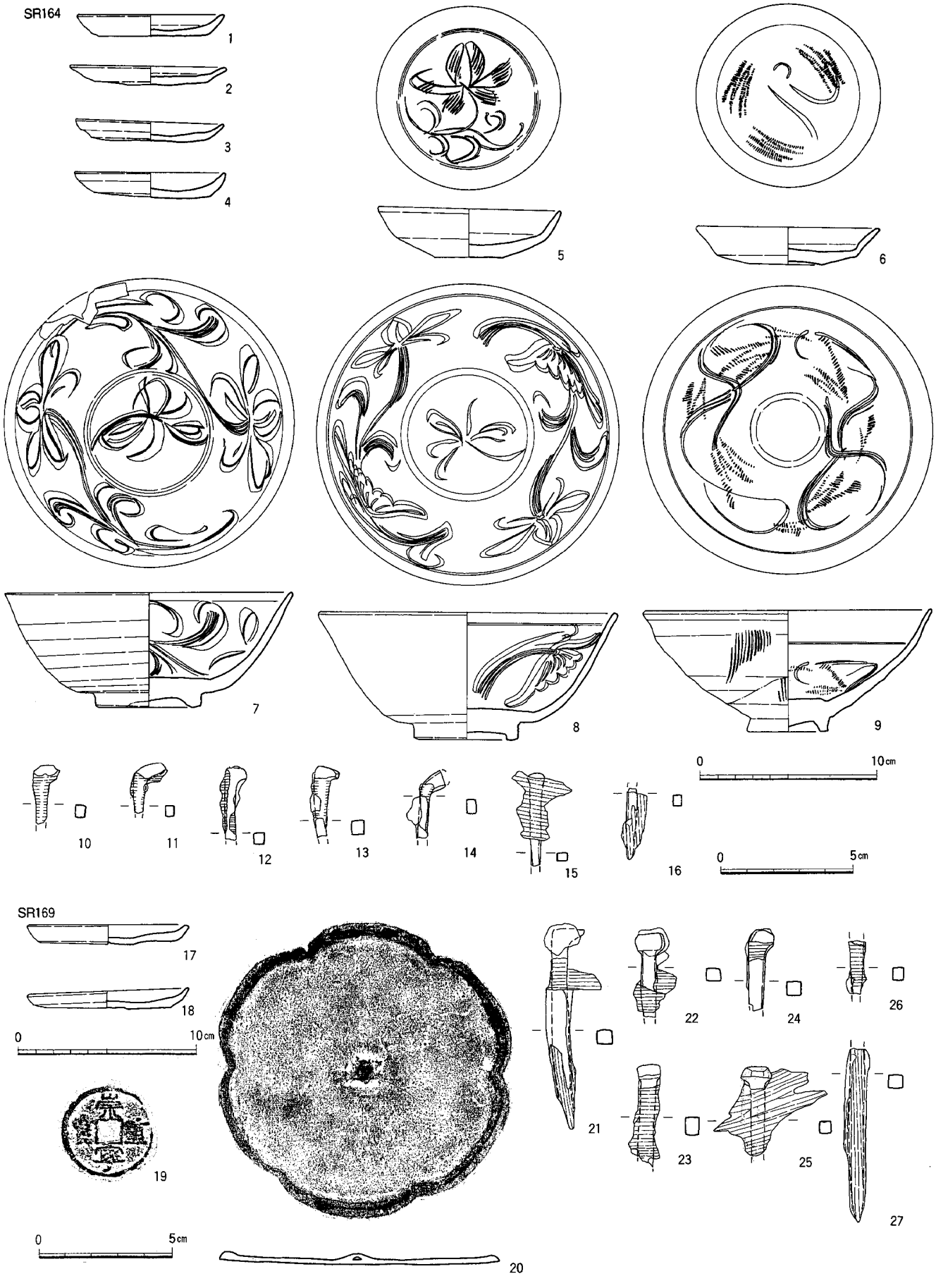


Fig. 63　SR164、169 出土遺物実測図（1／3、1／2）

出土遺物（Fig. 63－1～16）1～4は土師器小皿である。底部の切り離しは回転糸切りである。器高1.1cm、1.4cm、口径8.3cm、8.8cmを測る。5は龍泉窯系青磁皿である。体部中位で屈曲し、底部は平底である。見込みに花文を施す。底部は露胎となる。釉色は青みがかった白色を呈する。器高2.8cm、口径10.3cmを測る。6は同安窯系青磁皿である。体部中位で屈曲し、底部は平底である。見込みに櫛描文を施す。底部は露胎となる。釉色は青緑色を呈する。器高2.1cm、口径10.3cmを測る。7～8は龍泉窯系青磁碗である。体部内面には2単位の草花文を、内底見込みには花文を施す。高台畳付と内側は露胎となる。釉色は淡青緑色、淡灰緑色を呈する。器高6.5cm、7.2cm、口径16.2cm、16.8cmを測る。9は同安窯系青磁碗で、体部上位で内側に屈曲する。内、外面に櫛描文を施す。底部下半は露胎となる。釉色は淡灰緑色を呈する。器高6.8cm、口径16.2cmを測る。10～16は鉄釘で、断面形は長方形を呈する。10～15は頭部から2cm程は横方向の木目が観察される。

SR169（Fig. 60）調査区の下段、中央で検出した。墓壙は撹乱をうけており、平面形は不整形である。長さ225cm、幅300cm、深さ65cmを測る。主軸方位はN－2°－Wを測る。墓壙内からは釘が出土しており、釘を使用した棺と判断される。釘の出土状態から棺の規模は幅60cm、長さ150cm程と推測できる。人骨は遺存していない。遺物は墓壙の北側で、湖州鏡1面、西側で土師器小皿2点、銅銭（崇寧重寶）1点が出土した。これらは出土状況から棺外に副葬されたものと考えられる。これ以外に棺内と考えられる位置で漆の皮膜を検出した。

出土遺物（Fig. 63－17～27）17～18は土師器小皿である。底部の切り離しは回転糸切りである。器高1.0cm、1.0cm、口径9.2cm、9.0cmを測る。19は当十銭の「崇寧重寶」で、径3.3cmを測る。20は湖州鏡で、面形は葵花形を呈する。鏡背には銘文が見られない。最大径3.3cm、厚さ0.4cmを測る。21～27は鉄釘で、断面形は長方形を呈する。21～26は頭部から2cm程は横方向の木目、それ以下は縦方向の木目が観察される。

③ 小結

今回の調査では30基余りの中世墓を検出した。調査期間や調査体制の関係で充分な成果が得られたとは言えないが、ここではこれらの遺構の時期的変遷や特徴について見ていきたい。

時期的変遷　中世墓はほとんどが副葬品を持っており、これらの遺物から時期的に大きく3時期に分けることが出来る。Ⅰ期は12世紀前半（土師器坏、小皿の切り離しは回転ヘラ切り、輸入陶磁器は白磁の段階）、Ⅱ期は12世紀後半から13世紀前半（土師器坏、小皿の切り離しは回転糸切り（口径平均15.0cm、9.0cm）、輸入陶磁器は草花文や飛雲文の龍泉窯系青磁碗、同安窯系青磁の段階）、Ⅲ期は13世紀後半から14世紀（土師器坏、小皿は回転糸切りで前段階より法量が小さくなる（小皿の口径平均8.8cm）、輸入陶磁器は鎬連弁の龍泉窯青磁碗、口禿の白磁碗、皿の段階）となる。

Ⅰ期の遺構は下段の北西隅に集中し、SR159、160、161、168があたる。遺構はSR159、160、168、161の順で構築されている。これらは上部に石組を持ち、SR159は下部に多量の土師器小皿を含んだ炭化物層を検出した。SR168は下部に焼壁土壙を検出した。SR161は石組の中央で上下に組み合わせた壷を検出した。いずれの遺構も明確に人骨等は検出できなかった。しかし、これらの遺構を一連のものとすると、SR168、SR159は火葬施設もしくは火葬に伴うもの、SR161は蔵骨施設と捉えることができるのではないかと考える。これらの遺構の周辺には近世墓があり、その上面の石組や掘り方等からヘラ切りの土師器や白磁碗、施釉陶器壷などが多く出土している。それらの状況を見ると、周囲にこれ以外に蔵骨施設等が存在したと推測できる。今回の調査では該期の土壙墓、木棺墓は検出されておらず、この墓域の造営はこれらの火葬墓に始まると推測される。

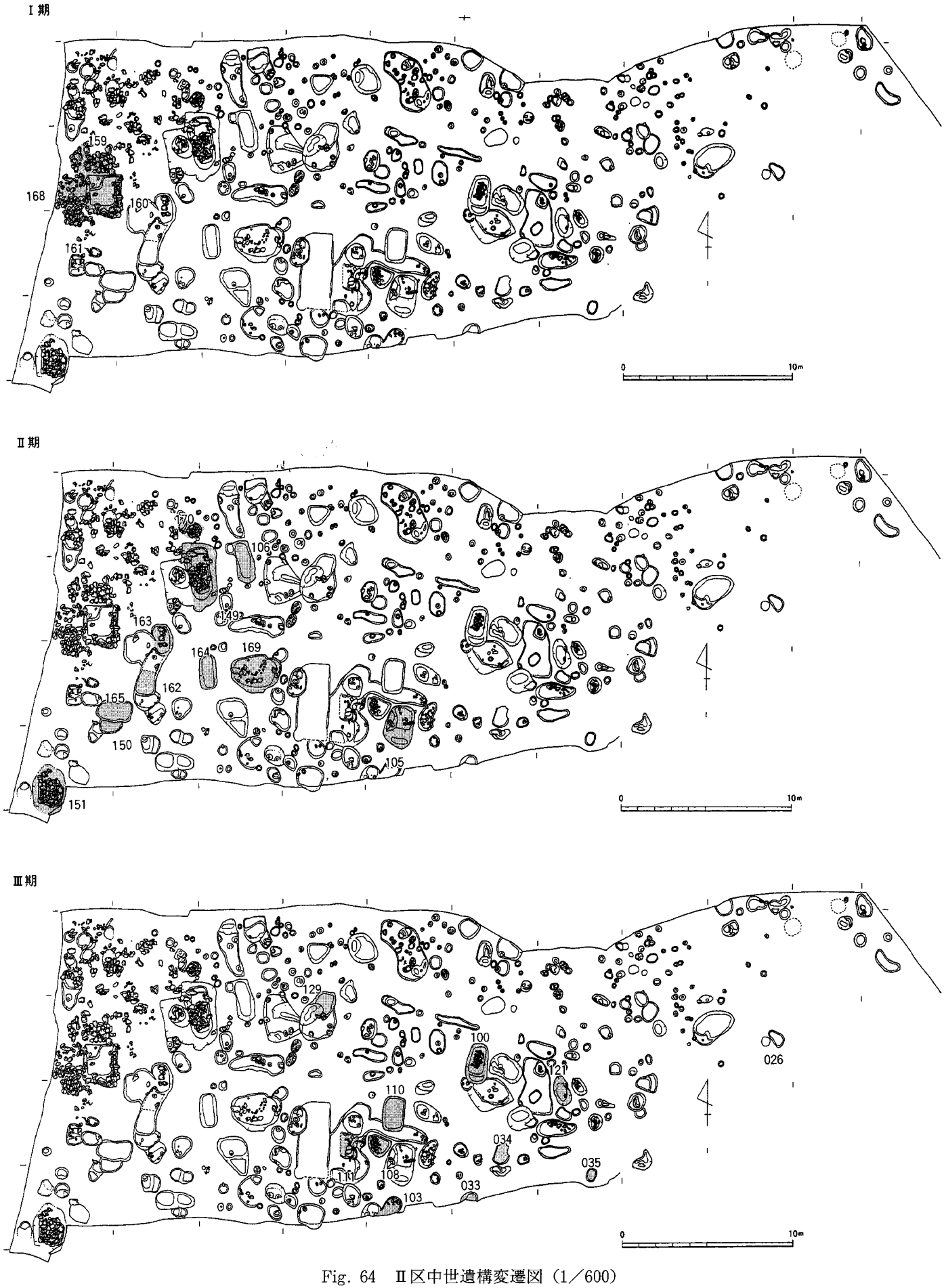


Fig. 64　Ⅱ区中世遺構変遷図（1／600）

II期の遺構は上段のSR002、024、133、180、186、下段のSR105、106、149、150、151、162、163、164、169、170があたる。II期の遺構の大半は主軸が磁北から若干東西にふれた方位をとる。地形の傾斜の関係で北側が低いものが大半である。副葬品は土師器坏、小皿、龍泉窯系青磁碗、皿、同安窯系青磁碗、皿、銅鏡、銅銭等がある。副葬品の位置は墓壙の北側に置かれるのが大半で、埋葬頭位が北側であったことを示している。木棺の位置が推定できるものでみていくと、棺外に副葬されたものが多い。副葬品は土師器坏、小皿と青磁碗の組み合わせが大半で、墓壙の長さが200㎝を超える大型はその点数が多くなる傾向が見られる。

上段のSR002は上面に石組を持ち、楕円形の土壙の床面に2基の小土壙を検出した。小土壙には炭化物が多量に詰まっていた。人骨や蔵骨器等は出土しなかったが、火葬墓の可能性が考えられる。

下段のSR149は遺存状態が良好で、床面に炭化物を充填し、木棺を埋置している。墓壙の上面には長方形に石が組まれ、さらにその中央に瓦による小区画が認められる。その形状から卒塔婆等が立てられていた可能性が推測される。また、北側に接して位置するSR170は炭化物を充填した小土壙に合子と銅銭を埋納している。この遺構はSR149に伴う供養施設とも考えられる。ところで、出土した銅銭は当十銭の崇寧通寶で、今回の調査ではこれ以外にSR024、169で当十銭の崇寧通寶、崇寧重寶が見られた。当十銭の崇寧通寶の副葬例は大宰府史跡38次で、12世紀後半の木棺墓SX863で見られるが、類例は少なく、銅銭の副葬を考える上で貴重な資料と言えよう。

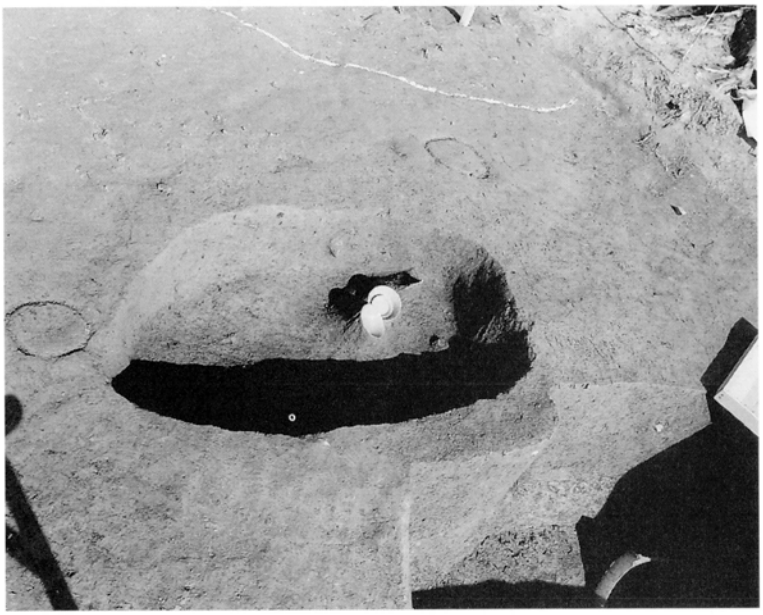
SR151は北側が崩落しているが、竪穴式石室に組み合わせ式の木棺を配置したものと推測される。棺内には人頭大の礫が陥没しており、棺蓋の腐食によるものと考えられる。遺物は龍泉窯系青磁碗、皿、同安窯系青磁碗、湖州鏡等が出土した。該期の竪穴式石室の例は管見では知り得ないが、平安時代前半期の例では太宰府市原遺跡で竪穴式石室に釘使用の木棺を埋置したものが検出されている。

III期の遺構はSR026、033、034、035、100、103、108、110、111、121、129があたる。これらの遺構は墓域の中央から南東に集中する。主軸方位や副葬品の位置は前段階同様と北向きをとる。また、副葬品も土師器坏、小皿と青磁もしくは白磁碗の組み合わせで、前段階の様相と大きな変化はない。ただ、200㎝を超える大型の墓壙のものや多量の土師器、青磁を副葬するものは見られなくなる。

次に墓域の変遷を見ていくと、12世紀前半に北東隅の石組基壇の造営以後、それらを基点として南東方向に拡大していくことが分かる。その際、前段階の遺構を意識して、切り合うことないよう造墓されている。しかし、これらの墓域は14世紀を前後する時期に終焉を迎え、それ以後は近世に至るまで造墓活動は行われていない。

最後にこの墓域の造営主体について考えてみたい。今回検出した墓域は丘陵の北側斜面にあり、周辺には該期の建物や溝等は検出できなかった。これらの墓は建物や屋敷地に付随する「屋敷墓」とは異なり、ある特定集団の共同墓地と考えられる。室見川左岸の本調査区周辺では該期の集落や屋敷地等の様相は不明確で、この墓域の造営主体の特定は困難である。しかし、墓の形態や副葬品の様相等、上位の階層であったと推測される。本調査地点の東側約700mにある清末遺跡では12世紀中頃のコの字形に配列する大型建物が検出され、その後、そこには堀で囲まれた居館跡と考えられる遺構営まれ、14世紀前半まで継続していくことが判明している。これらの存続時期は今回検出した墓域の時期と一致しており、何らかの関連を伺うことができる。該期のこのような共同墓地の類例は少なく、今後、周辺での調査例とあわせて、その性格が明らかにしていきたい。

Ph. 36　Ⅱ区下段全景（南から）

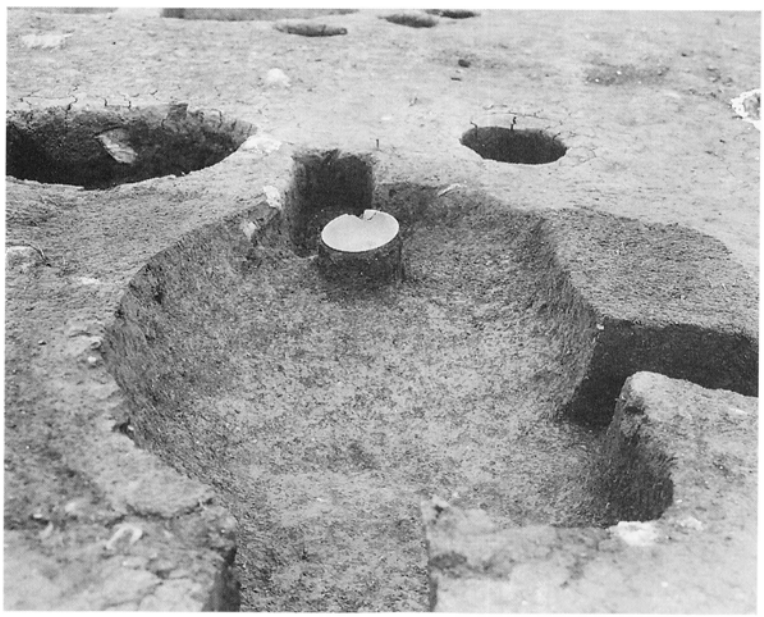


Ph. 37　SR024 遺物出土状況(南から)

Ph. 38　SR024 遺物出土状況(西から)

Ph. 39　SK135 遺物出土状況(北から)

Ph. 40　SR179 遺物出土状況(北から)

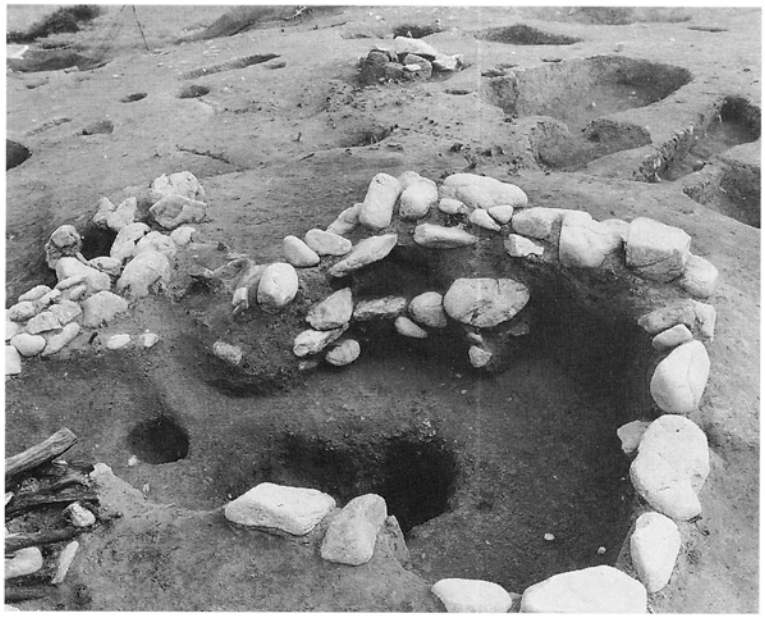


Ph. 41　SR180 遺物出土状況(南から)

Ph. 42　SK182 遺物出土状況(南から)

Ph. 43　SR002 石積検出状況(南から)

Ph. 44　SR002 石組検出状況(南から)



Ph. 45　SR002 石組内土坑検出状況（西から）

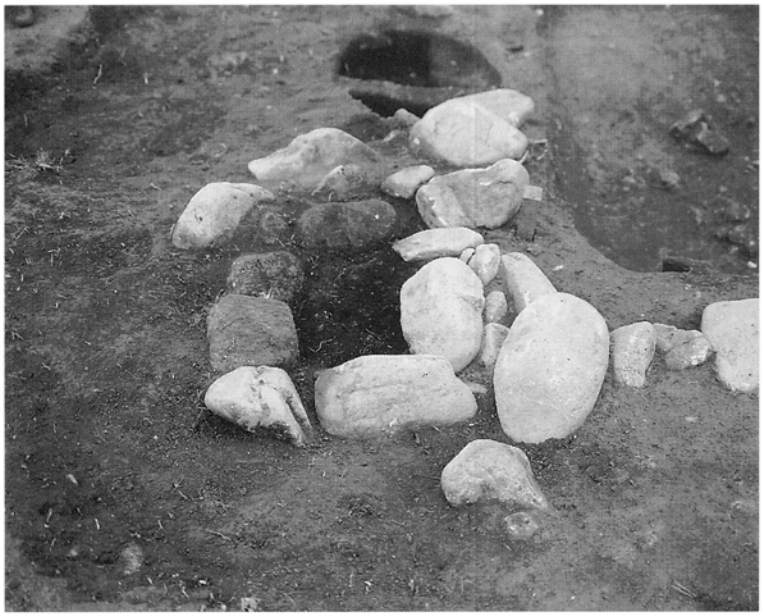
Ph. 46　SR002 完掘（北から）

Ph. 47　SK197 検出状況（西から）

Ph. 48　SK197 石組検出状況(北から)

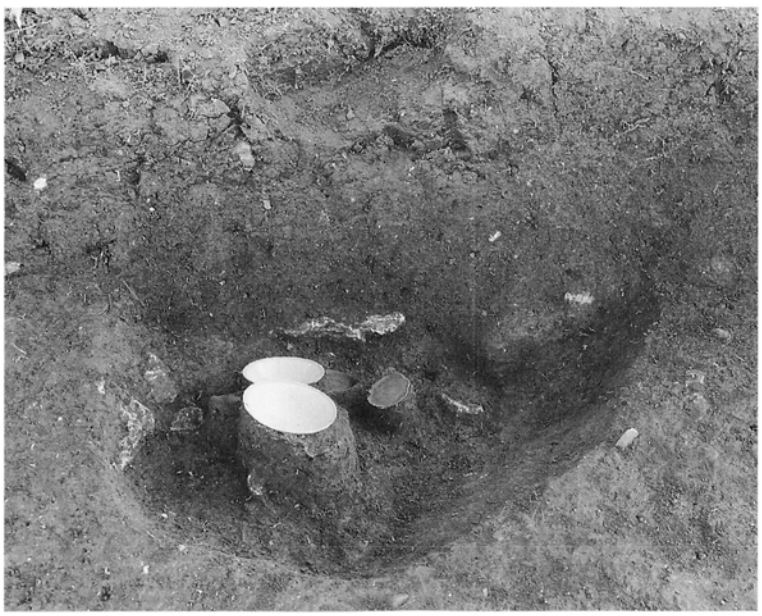
Ph. 49　Ⅱ区下段北東隅近世墓
(南から)

Ph. 50　SR159 遺物出土状況(南から)



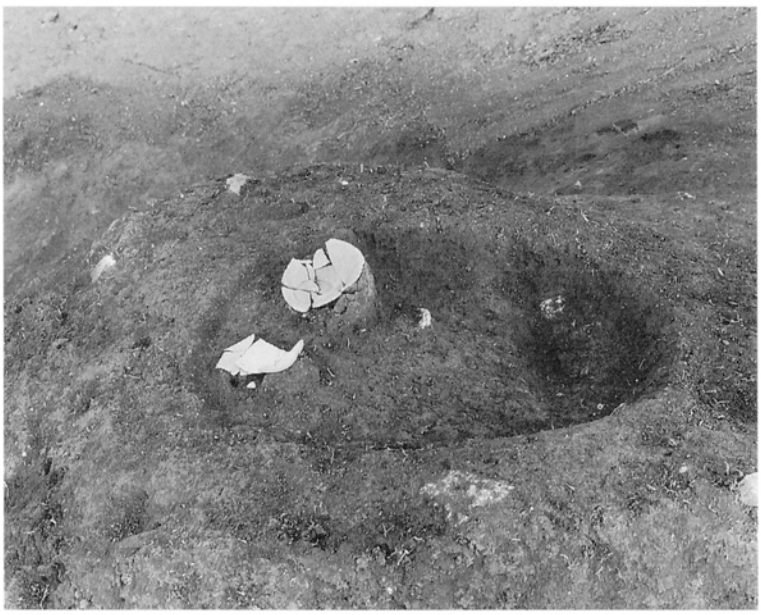
Ph. 51　SR161 石組検出状況(南から)

Ph. 52　SR026 遺物出土状況(東から)



Ph. 53　SR033 遺物出土状況(北から)

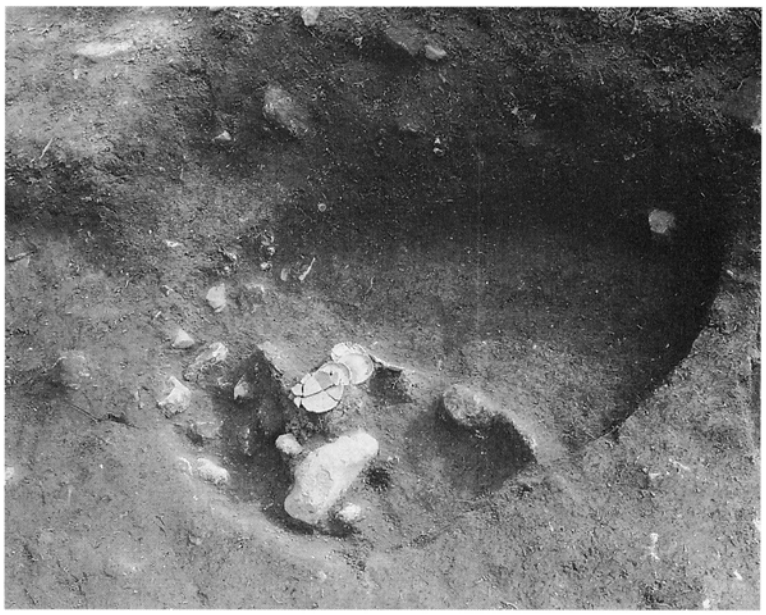
Ph. 54　SR034 遺物出土状況(東から)



Ph. 55　SR035 遺物出土状況(西から)

Ph. 56　SR100 検出状況（北から）

Ph. 57　SR100 遺物出土状況(南から)



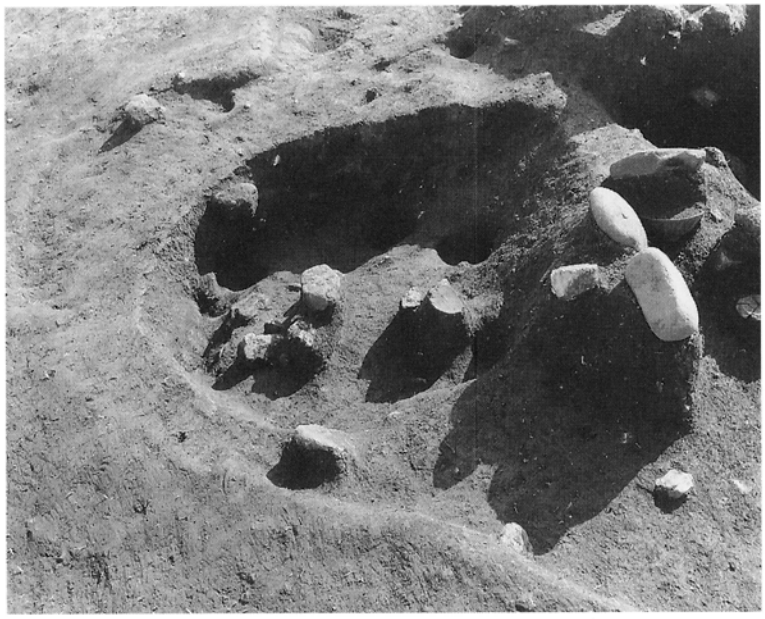
Ph. 58　SR103 遺物出土状況(北から)

Ph. 59　SR105 遺物出土状況(西から)

Ph. 60　SR106 遺物出土状況(南から)

Ph. 61　SR108 遺物出土状況(北から)

Ph. 62　SR110 遺物出土状況(西から)



Ph. 63　SR111 遺物出土状況(西から)

Ph. 64　SR121 遺物出土状況(西から)

Ph. 65　SR149 遺物出土状況(南から)

Ph. 66　SR170 遺物出土状況(南から)

Ph. 67　SR150 遺物出土状況(南から)

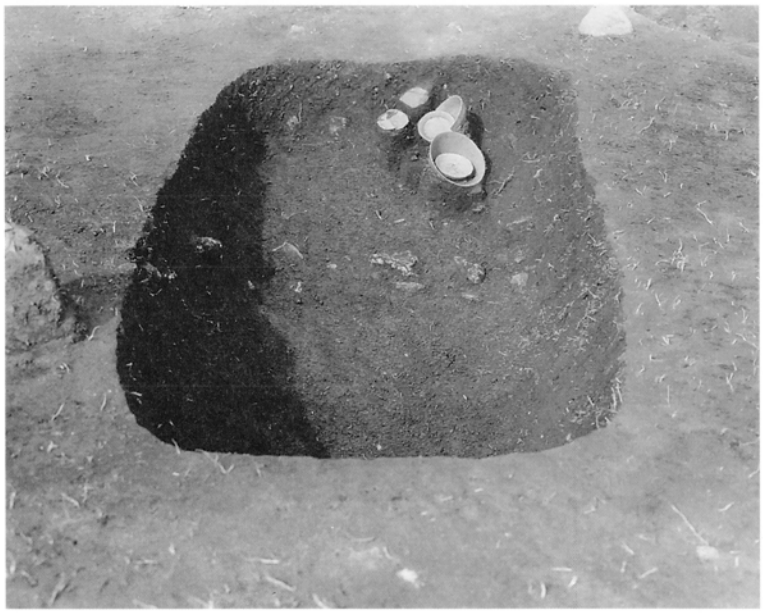
Ph. 68　SR151 遺物出土状況(南から)

Ph. 69　SR151 石室検出状況(北から)

Ph. 70　SR151 湖州鏡出土状況
(南から)

Ph. 71　SR162 遺物出土状況(南から)

Ph. 72　SR163 遺物出土状況(南から)



Ph. 73　SR164 遺物出土状況(南から)

Ph. 74　SR169 遺物出土状況(南から)

3．浦江谷遺跡第2次調査3区

1）調査の概要

Ⅲ区はⅡ区の谷を挟んだ南側に位置する。東西に延びる狭い丘陵の先端に立地する。標高は43m～45mを測る。調査は厚さ30cm～60cmの表土を除去した淡黄灰色粘質土を遺構面として行った。遺構は縄文時代後晩期の土壙8基、奈良時代の竪穴住居跡2軒、古代～中世の焼壁土壙8基、柱穴等を検出した。遺物は縄文土器、須恵器、土師器、石器（磨製石斧、磨石、石鏃等）等が出土した。

2）土壙

土壙は8基検出した。土壙はここでは縄文時代の土壙について述べていく。

SK－011（Fig. 2）調査区北東に位置する。平面形は円形を呈し、断面形はすり鉢状を呈する。径75cm、深さ25cmを測る。埋土は暗褐色粘質土で、遺物は埋土から縄文土器が出土した。

SK－012（Fig. 2）調査区北東に位置する。平面形は不整円形を呈し、断面形は袋状を呈する。径75cm、深さ35cmを測る。埋土は1．淡茶褐色粘質土、2．暗灰色粘質土、3．茶褐色粘質土である。遺物は2、3層から縄文土器、磨石、叩き石が出土した。

SK－013（Fig. 2）調査区北東に位置する。平面形は楕円形を呈し、断面形は袋状を呈する。長さ95cm、幅75cm、深さ35cmを測る。埋土は1．淡茶褐色粘質土、2．暗灰色粘質土、3．茶褐色粘質土である。遺物は2、3層から縄文土器、石槍が出土した。

SK－014（Fig. 2）調査区北東に位置する。平面形は不整円形を呈し、断面形は逆台形を呈する。長さ110cm、幅95cm、深さ25cmを測る。埋土は暗褐色粘質土で、遺物は縄文土器、石鏃、使用痕のある剥片等が出土した。

SK－017（Fig. 2）調査区中央に位置する。平面形は不整円形を呈し、断面形は逆台形を呈する。長さ95cm、幅80cm、深さ30cmを測る。埋土は暗褐色粘質土で、遺物は縄文土器が出土した。

土壙出土土器（Fig. 3－1～18）1はSK11から出土した。外面に斜め方向の条痕を施す。2～8はSK14から出土した。2、3は精製の浅鉢で、2は黒色研磨で、口縁内外面に凹線が巡る。4～6は深鉢で、横方向の擦痕を施す。7、8は底部で、7は裾が広がる。9～16はSK15から出土した。9～14は浅鉢で、10は口縁にリボン状の突起がつく。11は波状口縁を呈する。12～14は横方向の条痕を施す。15、16は底部で、16は内面に条痕を施す。17はSK16から出土した精製の浅鉢である。18はSK18から出土した深鉢で、横方向の条痕を施す。

土壙出土石器（Fig. 4、5）Fig. 4－1はSK06から出土した。黒曜石製のUFで、側縁に使用痕が有る。2はSK13から出土した。古銅輝石安山岩製のポイントの基部で、先端は欠損している。3～9はSK14から出土した。3は古銅輝石安山岩製の石鏃で、先端は欠損している。4～8は黒曜石製のUFで、縦長剥片、不定形の剥片を素材として、側縁に使用痕が見られる。9は古銅輝石安山岩製のUFである。10、11はSK15から出土した。10は黒曜石製のポイント基部で、先端は欠損している。11は黒曜石製の石錐で、不定形の剥片の先端を調整して、錐部を作り出す。12はSK24から出土した。黒曜石製の縦長剥片である。13～16は遺構面から出土した。13は黒曜石製のスクレーパー、14は黒曜石製のUFである。15、16は黒曜石製の細石刃核である。15は船底型、16は野岳・休場型の細石刃核である。Fig. 5－1～4はSK12から出土した。1～3は花崗岩製の磨石である。4は結晶片岩製の叩き石である。5はSK15から出土した。蛇紋岩製の磨製石斧で、平面形は撥形を呈する。基部と刃部の一部が欠損している。6は花崗岩製の石皿である。

Fig. 1　Ⅲ区遺構配置図（1／200）

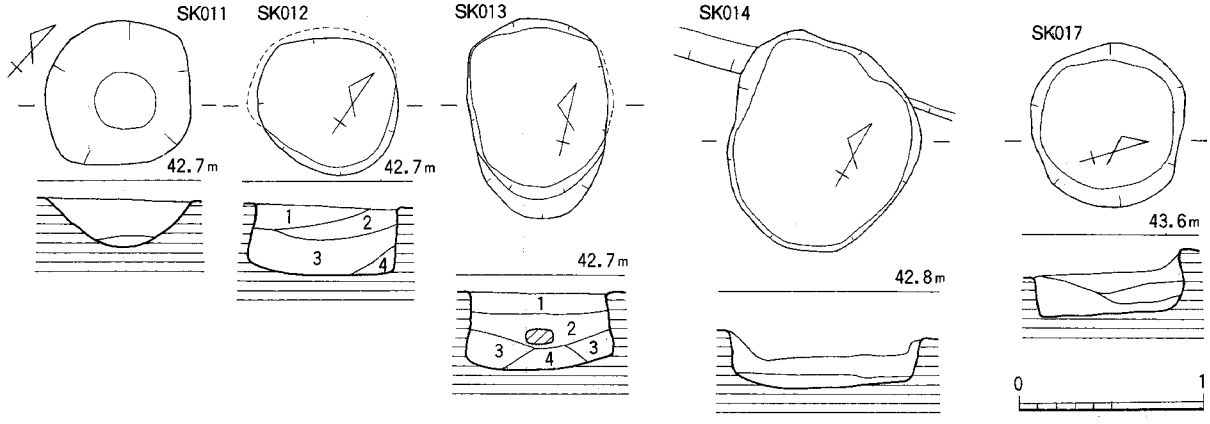


Fig. 2　SK011、012、013、014、017 遺構実測図（1／40）

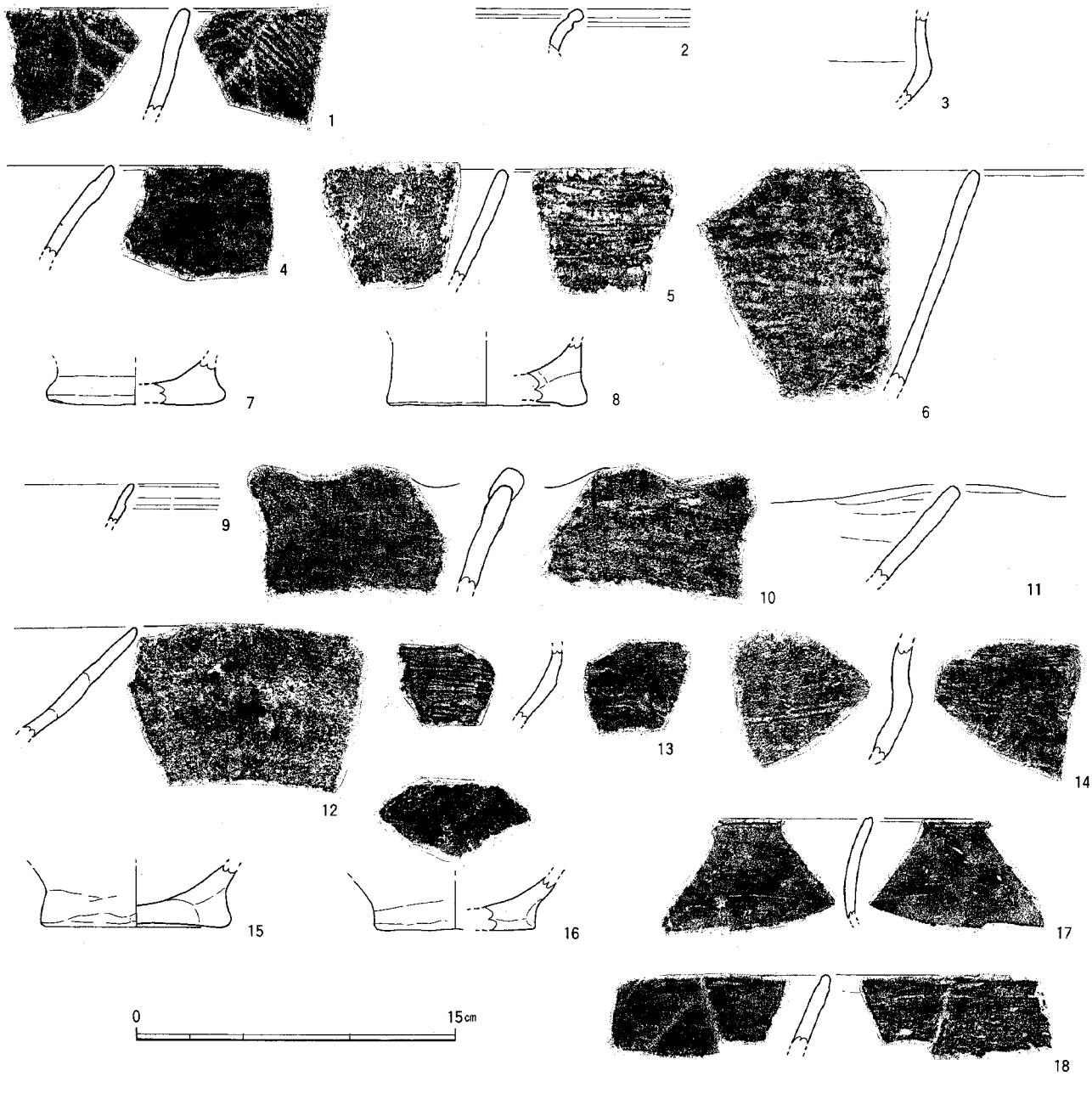


Fig. 3　土壙出土土器実測図（1／3）

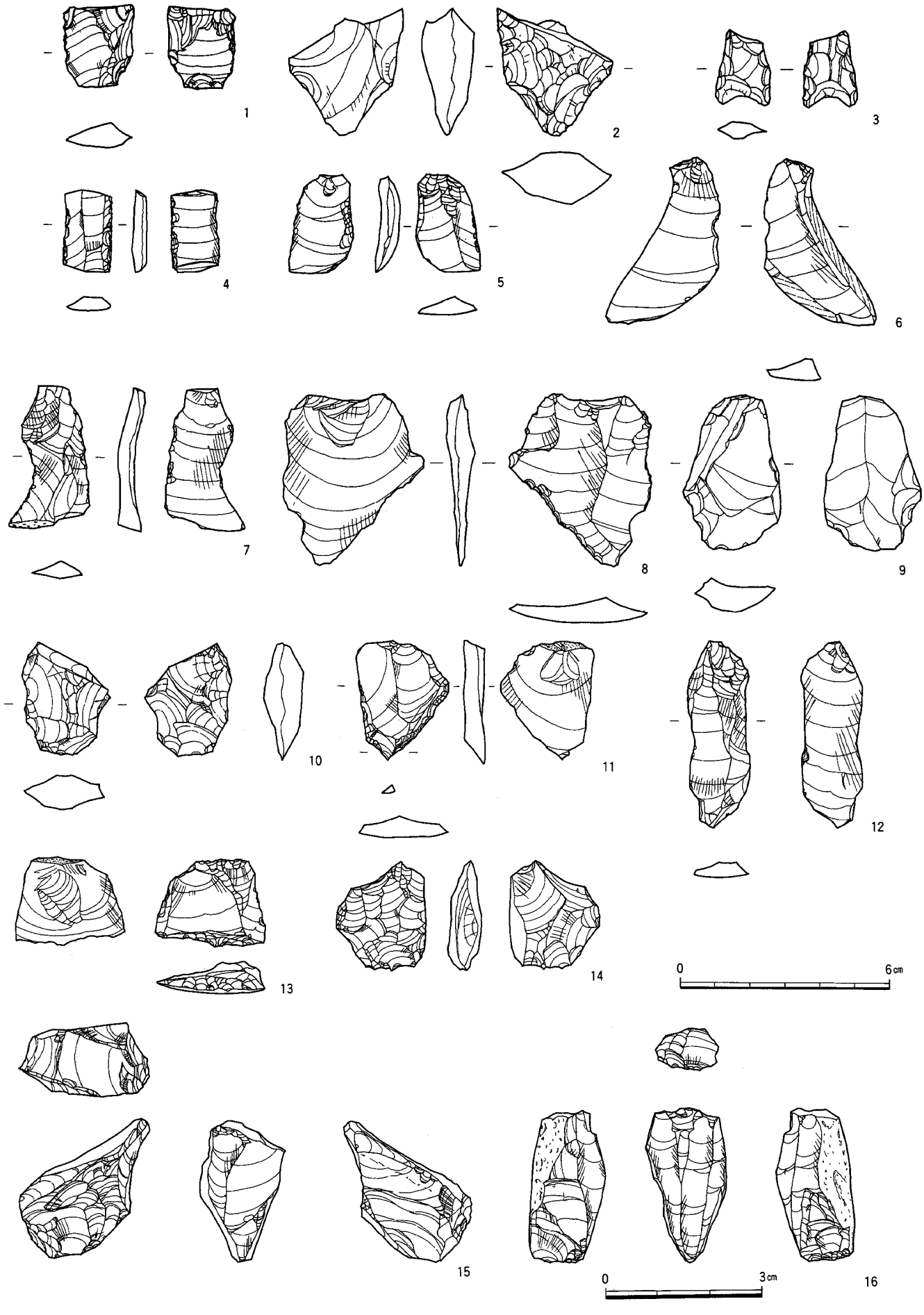


Fig. 4　土壙出土石器実測図１（1／1、2／3）

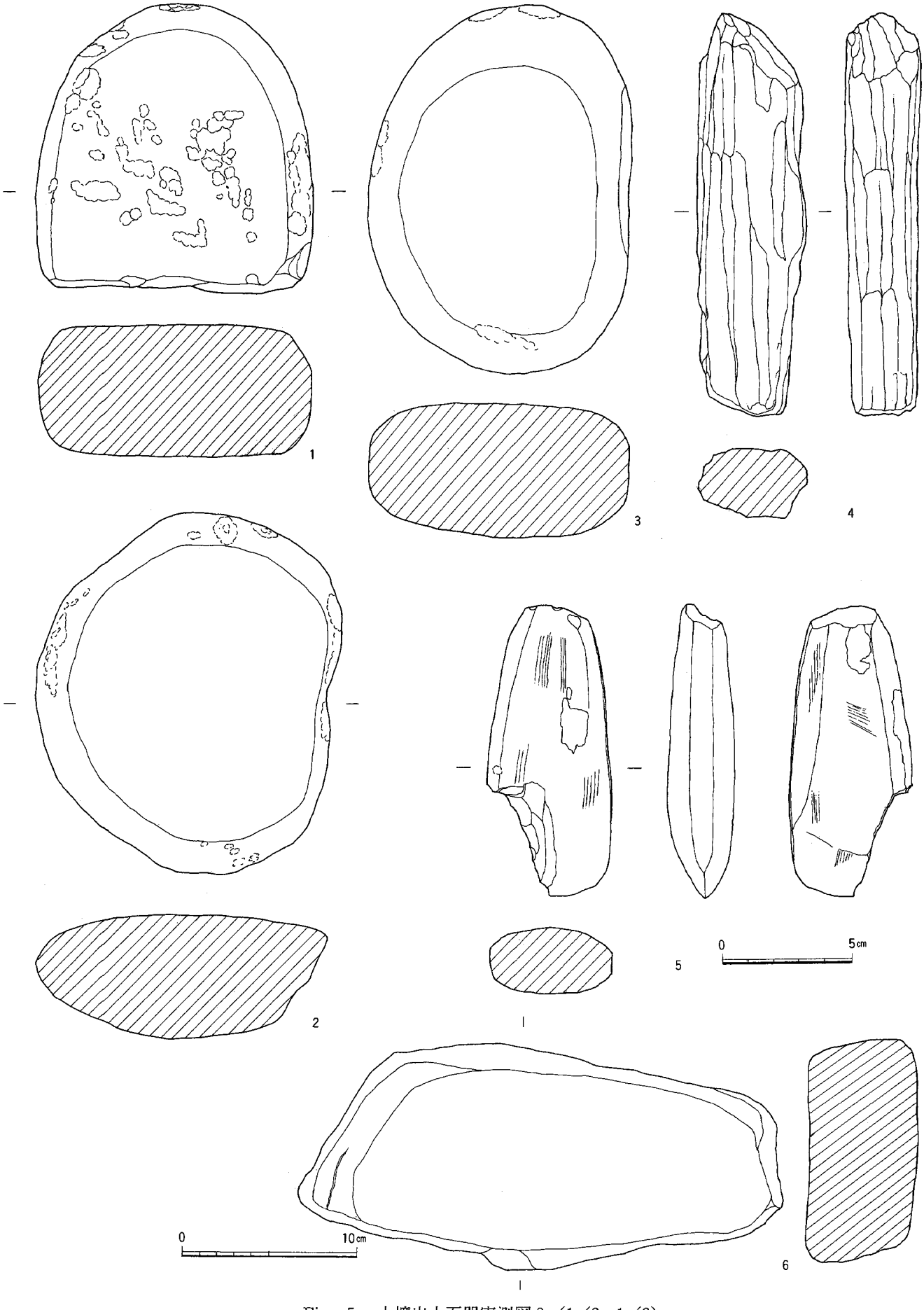


Fig. 5　土壙出土石器実測図２（1／2、1／3）

3）竪穴住居跡

今回の調査では2基の竪穴住居跡を検出した。住居跡は調査区中央から東側に分布する。

SC－018（Fig. 6）平面形は方形形を呈し、南北長3.6m、東西長3.5m、深さ15cmを測る。住居の北側には長さ100cm、幅60cmの竈が取り付く。白色の粘土で構築された竈は破壊されている。主柱穴は4本である。径30cm～50cm、深さ30cmを測る。遺物は埋土から須恵器、土師器、滑石製の紡錘車等が出土した。時期は奈良時代に位置づけられると考える。

出土遺物（Fig. 7－1～3、5、6）1は須恵器坏身である。2は甕の底部で、外面は2次焼成をうけている。3は滑石製の紡錘車である。表面に三角文を施す。径3.5cm、厚さ1.5cmを測る。5、6は混入の縄文土器である。黒色研磨の浅鉢で、口縁の内外面に凹線が巡る。

SC－019（Fig. 6）平面形は方形形を呈し、南北長3.3m、東西長3.4m、深さ10cmを測る。住居の北側には長さ90cm、幅80cmの竈が取り付く。白色の粘土で構築された竈は破壊されている。主柱穴は明確でない。遺物は埋土から須恵器等が出土した。時期は奈良時代に位置づけられると考える。

出土遺物（Fig. 7－4、7、8）4は土師器の甑である。接合しないが、同一個体と考える。外面はハケメ、内面はヘラケズリを施す。7、8は混入の縄文土器である。深鉢の底部である。

4）焼壁土壙

今回の調査では9基の焼壁土壙を検出した。出土遺物はほとんどないが、平安時代に位置づけられるものと考える。

SK002（Fig. 8）調査区の北東に位置する。平面形は楕円形を呈する。壁の全周が熱をうけて硬化する。長さ108cm、幅60cm、深さ15cmを測る。

SK003（Fig. 8）調査区の南側に位置する。平面形は長方形を呈する。壁の全周が熱をうけて硬化する。長さ130cm、幅66cm、深さ16cmを測る。

SK004（Fig. 8）調査区の北東に位置する。平面形は隅丸長方形を呈する。壁の全周が熱をうけて硬化する。長さ80cm、幅54cm、深さ25cmを測る。

SK005（Fig. 8）調査区の西側に位置する。平面形は隅丸長方形を呈する。西側にのみ硬化面が残る。長さ100cm、幅85cm、深さ20cmを測る。

SK006（Fig. 8）調査区の中央に位置する。SC018を切る。平面形は長方形を呈する。壁の全周が熱をうけて硬化する。長さ118cm、幅75cm、深さ50cmを測る。

SK007（Fig. 8）調査区の南側に位置する。平面形は隅丸長方形を呈する。調査区の南側に遺構は広がる。長さ112cm、幅48cm以上、深さ50cmを測る。

出土遺物（Fig. 8－1）1は高台付の土師器碗である。ハの字に開く高い高台がつく。体部は直線的に開く。底部に墨書が見られる。文字は判読できない。。

SK008（Fig. 8）調査区の西側に位置する。平面形は楕円形を呈する。北側は削平されている。長さ60cm、幅90cm、深さ15cmを測る。

SK009（Fig. 8）調査区の南側に位置する。平面形は長方形を呈する。壁の東側のみ硬化面が残る。長さ135cm、幅90cm、深さ23cmを測る。

SK010（Fig. 8）調査区の西側に位置する。平面形は長方形を呈する。壁の全周が熱をうけて硬化する。長さ182cm、幅140cm、深さ65cmを測る。

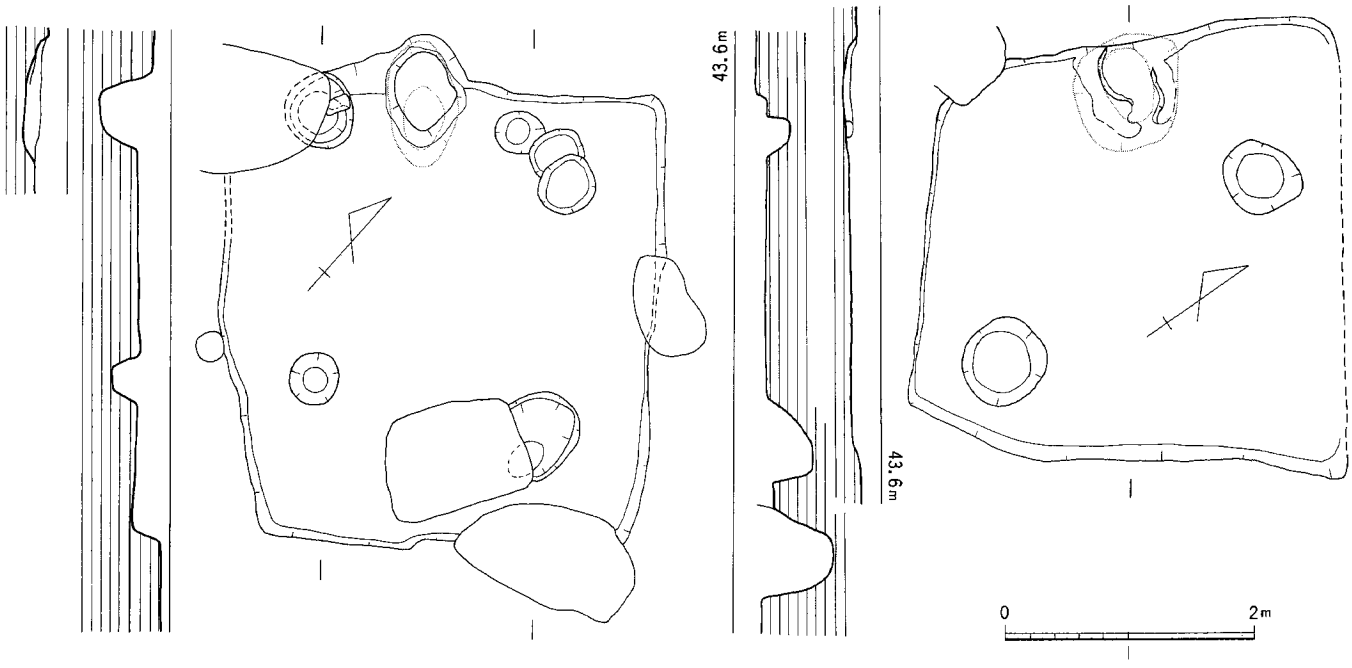


Fig. 6　S C018、019 遺構実測図（1／60）

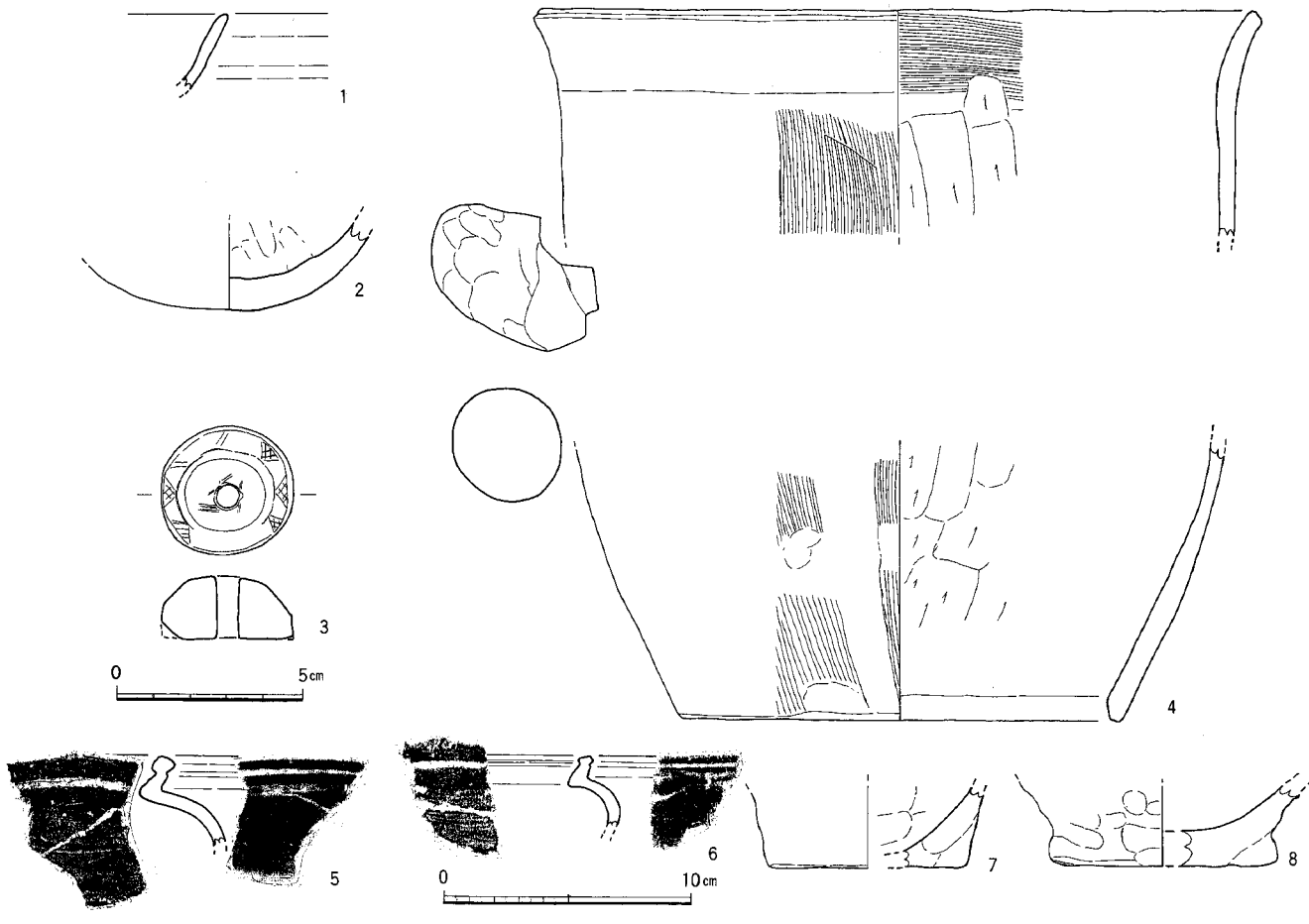


Fig. 7　竪穴住居跡出土遺物実測図（1／3、1／2）

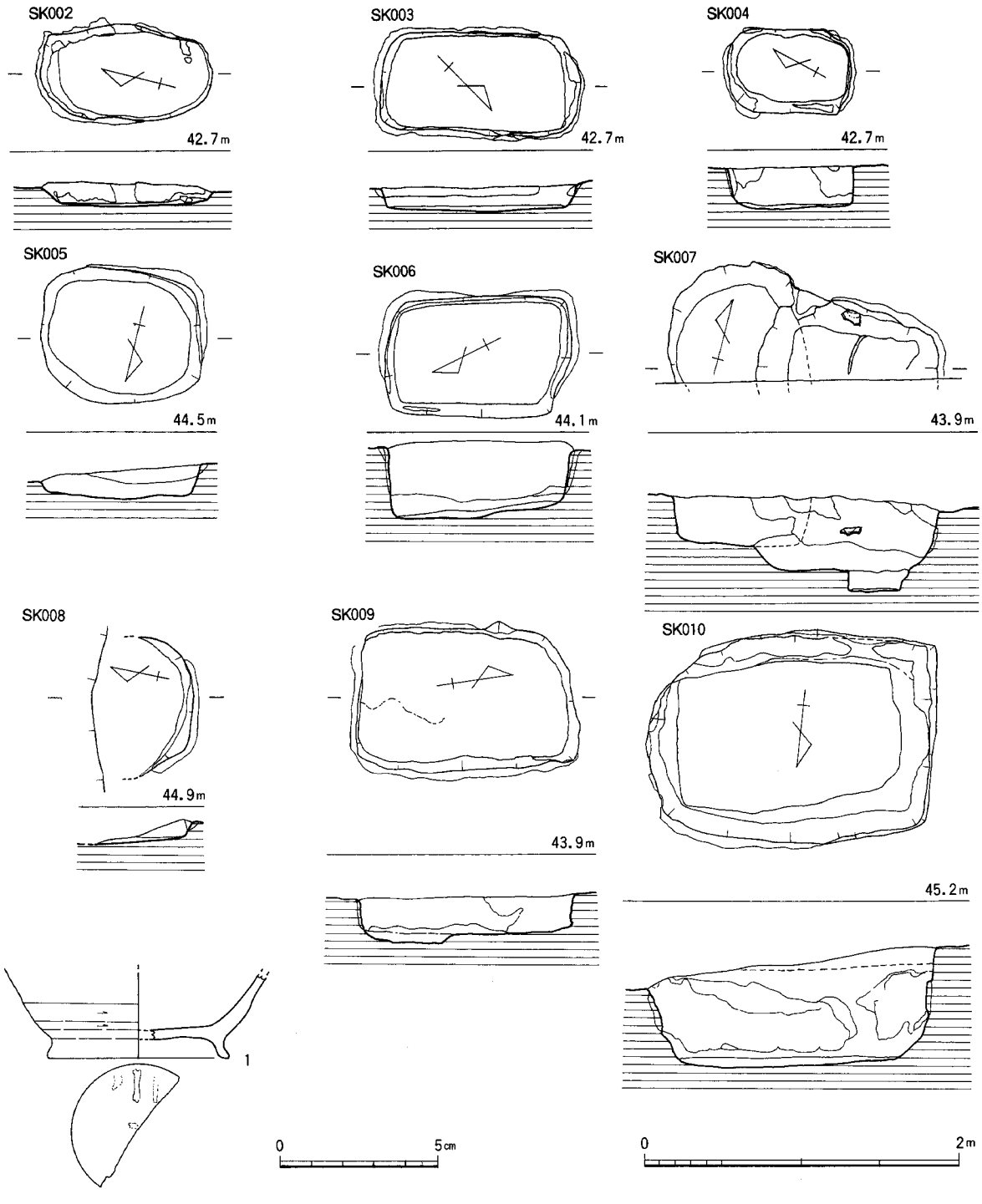


Fig. 8　ＳＫ002～010 遺構実測図及び遺物実測図（1／40、1／3）

5）鍛冶炉

SX001（Fig. 9）調査区の西側で検出した。中央とその西側に径10㎝、35㎝の赤変した部分が有り、鍛冶炉と考えられる。その東側と西側に径30㎝、深さ15㎝の小土壙が分布する。土壙中からは鉄滓（精練鍛冶滓）が出土しており、廃滓土壙と考えられる。鉄滓は1.38㎏出土した。炉の周辺で２㎜～３㎜程の鍛造剥片が検出された。遺物が少ないため、時期は決め難いが、焼壁土壙との関連から平安時代に位置づけられるものと考える。

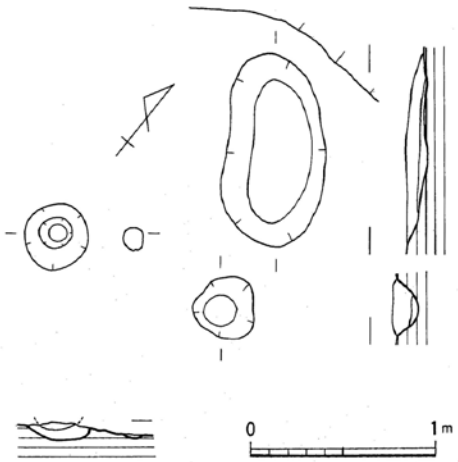


Fig. 9　SX001 遺構実測図（1／30）

6）小結

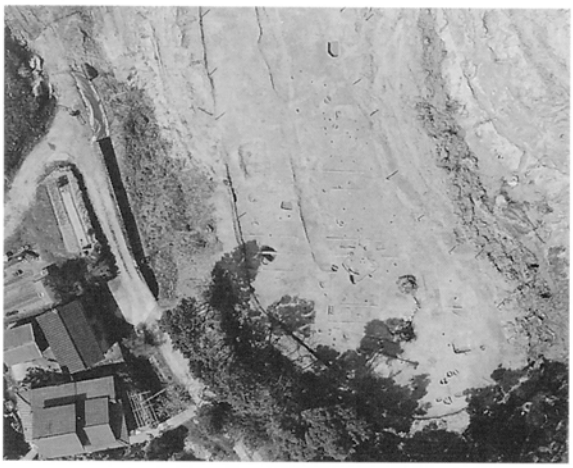
今回の調査では縄文時代後晩期の土壙、奈良時代の竪穴住居跡、平安時代の鍛冶炉、焼壁土壙等を検出した。縄文時代の土壙は断面が袋状になるものもあり、貯蔵穴と考えられる。当該期の住居等は検出できなかった。平安時代の遺構では鍛冶炉、焼壁土壙がある。後者は炭焼用の土壙と考えられ、これらは製鉄に関わる一連の遺構と推測される。

Ph. 1　SX001 出土鉄滓

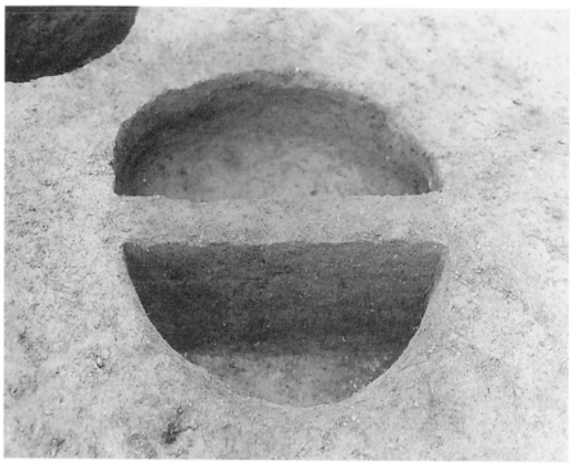
浦江谷遺跡１次３区出土石器遺構別一覧

	黒曜石							古銅輝石安山岩						
遺構	原石	石核	剥片	砕片	尖頭器	石鏃	ＵＦ	石核	剥片	砕片	尖頭器	石鏃	ＵＦ	その他
ＳＫ002									1					
ＳＫ004									1	1				
ＳＫ005			1											
ＳＫ006		1	3	2			1							
ＳＫ012			2	4					4	4				磨石３、敲石１
ＳＫ013			2	3						1	1			石皿１
ＳＫ014		1	3	8			5		6	7		1	1	
ＳＫ015	1	1	5	15	1	1			4				1	石斧１
ＳＫ016				1										
ＳＫ017		2	11	8						1				
ＳＣ018		1	9	10						1				礫５
ＳＣ019		2	5	8					1	1				
ＳＫ021									1					
ＳＫ022		1		1						2				
ＳＫ024		1	1	1										
Ｄｔ60									2					
Ｄｒ65				1										
Ｄｓ60		1												
Ｄｅ63~65		1	3	7										
Ｄｓ64			2											
Ｄｔ63•64							1							
その他							1							

Ph. 2　Ⅲ区全景（北から）



Ph. 3　Ⅲ区全景（東から）



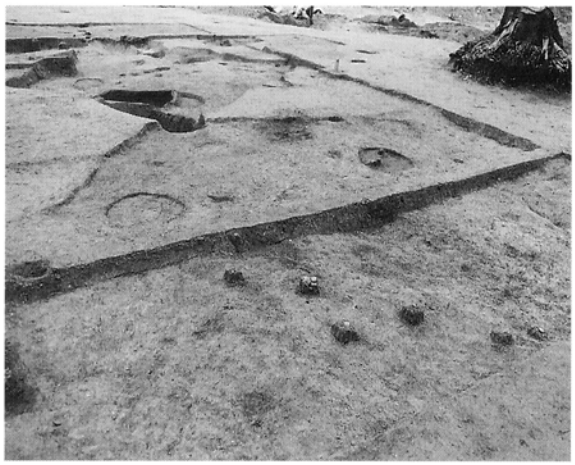
Ph. 4　SK013（南から）

Ph. 5　SK011～014（東から）

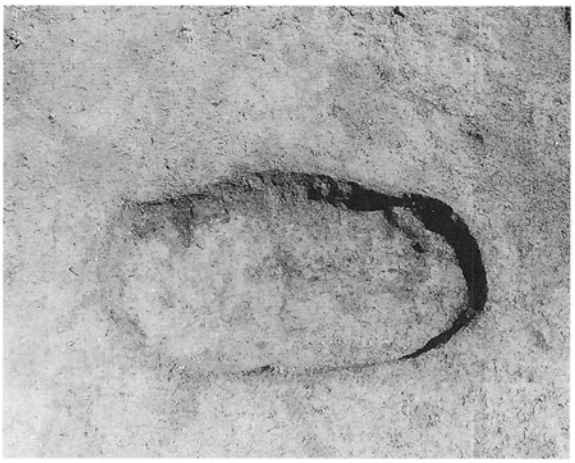
Ph. 6　SK015、016（北から）

Ph. 7　SK017（南から）

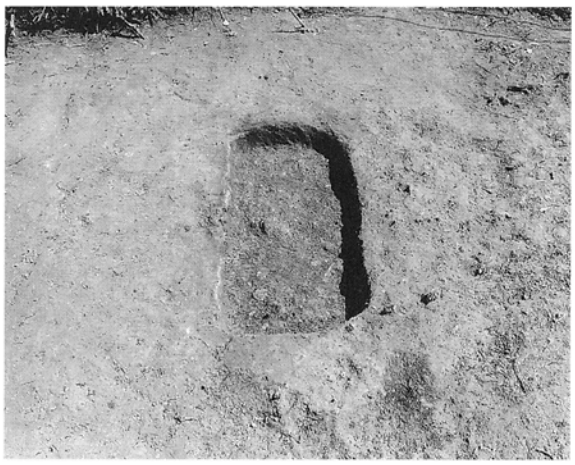
Ph. 8　SC018（南から）



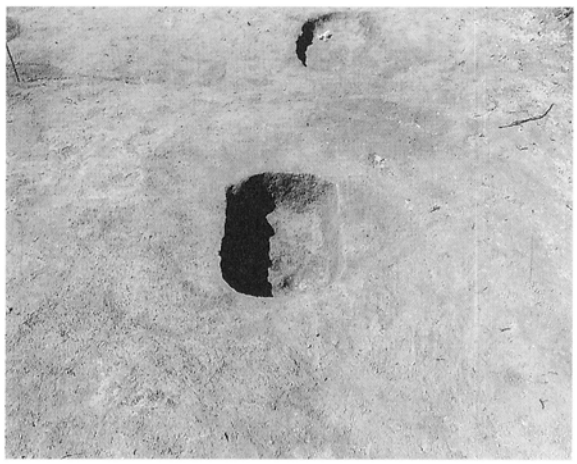
Ph. 9　SC019（南から）



Ph. 10　SK002（西から）

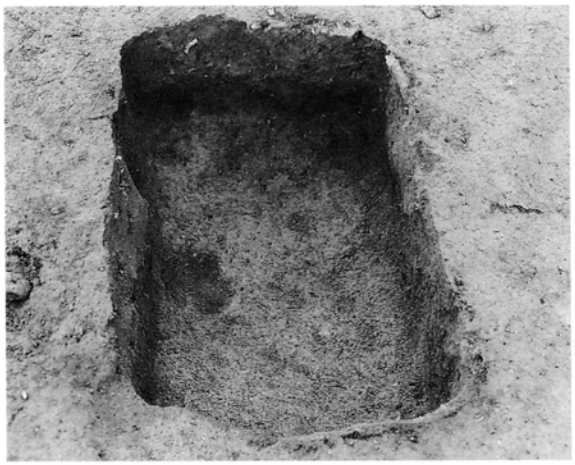


Ph. 11　SK003（北から）



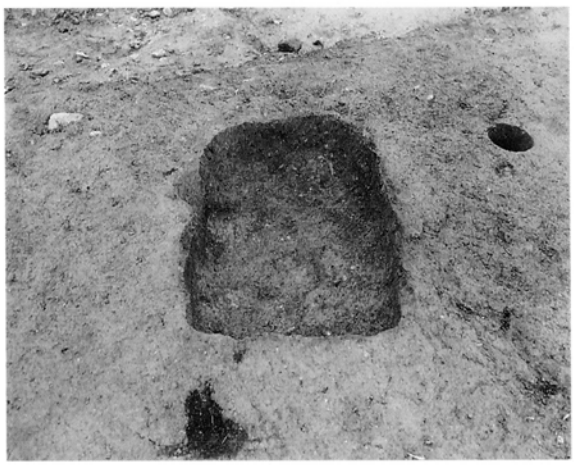
Ph. 12　SK004（南から）

Ph. 13　SK005（東から）

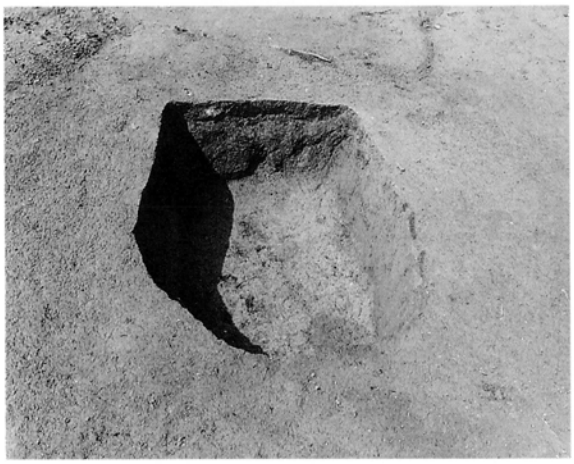


Ph. 14　SC006（南から）

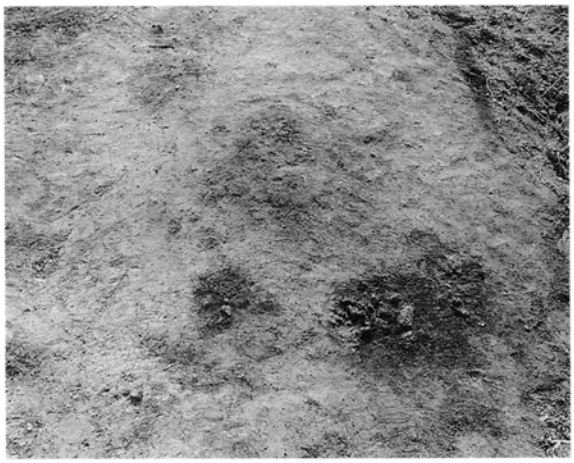
Ph. 15　SC007（西から）



Ph. 16　SK009（南から）



Ph. 17　SK010（東から）



Ph. 18　SX001 検出状況（東から）

Ph. 19　SX001 完掘（東から）

4．浦江谷遺跡群第１次調査　４区

（１）概要

４区は２区の南西側に位置し、２区が立地する舌状丘陵の延長上に立地する。調査区の南北両側は傾斜のきつい斜面で区切られ、東西の尾根方向は段差のない連続した斜面となって、北東方向に緩く下る。遺構が存在する範囲は長さ90ｍ、幅30ｍの丘陵尾根線上の狭い平坦面に沿った細長い範囲で、標高は65ｍ前後である。調査区内の比高差は10ｍである。

調査期間は４月12日～６月30日まで行われた。調査面積は2800㎡で、遺構面は表土下30～50㎝で検出され、遺構は明褐色バイラン土上で認められた。遺構は古墳1基、中世墓１基、焼土壙15基にのぼる。調査区内は木根による撹乱が著しく、遺構の他に撹乱に伴う落ち込みが多数見られたが、そのほかの要因による削平その他は見られず、遺構は比較的良好に遺存していた。出土遺物は古墳、中世墓関連の遺物が少量認められたが、そのほかには遺物は少ない。

（２）遺構・遺物

１）古墳

SO－001　位置・環境　調査区内の南西側に位置し、尾根線上の調査区内最高所からわずかに南に下がった地点に立地する。立地面はわずかに南に下がる斜面である。現況では墳丘は良好に遺存するが、天井の一部が陥没して天井石が見える状態で、石室はすでに開口しており、石室内に土砂が流れ込む。周溝部分も現況では埋没するが、その痕跡が現況でも伺える。

地山成形　地山成形は、周溝部分の開削と墳丘基底部の平坦面造成が行なわれる。周溝部分は墳丘西側の尾根方向に馬蹄形状に掘削している。墳丘東側は周溝外側端部が明瞭でなく、墳丘周囲に平坦面が見られるが、これが周溝の痕跡であると考えられ、築造時は東側にも周溝が存在したと考えられる。検出時で周溝幅3.5～4.5ｍ、深さ50㎝。地形にあわせ、周溝底部は西側で高くなる。

墳丘基底面は斜面全体を削って造成し、基段面内で最大75㎝の比高差をもって斜面方向に緩く傾斜する。周溝、基段面内は旧表土は遺存せず、全面を削平したとみられる。

墳丘　墳丘盛土は、墳丘頂部が流れていること以外は比較的良好に遺存する。遺存状況の詳細は、墳丘北側と東側で墳丘斜面がやや急になり、墳丘が流出しているとみられるが、概して１区から４区まで遺存状況は大差ない。盛土の高さは地山成形面から80㎝ほど遺存している。土層観察では石室積

Ph.　1　４区全景（南から）

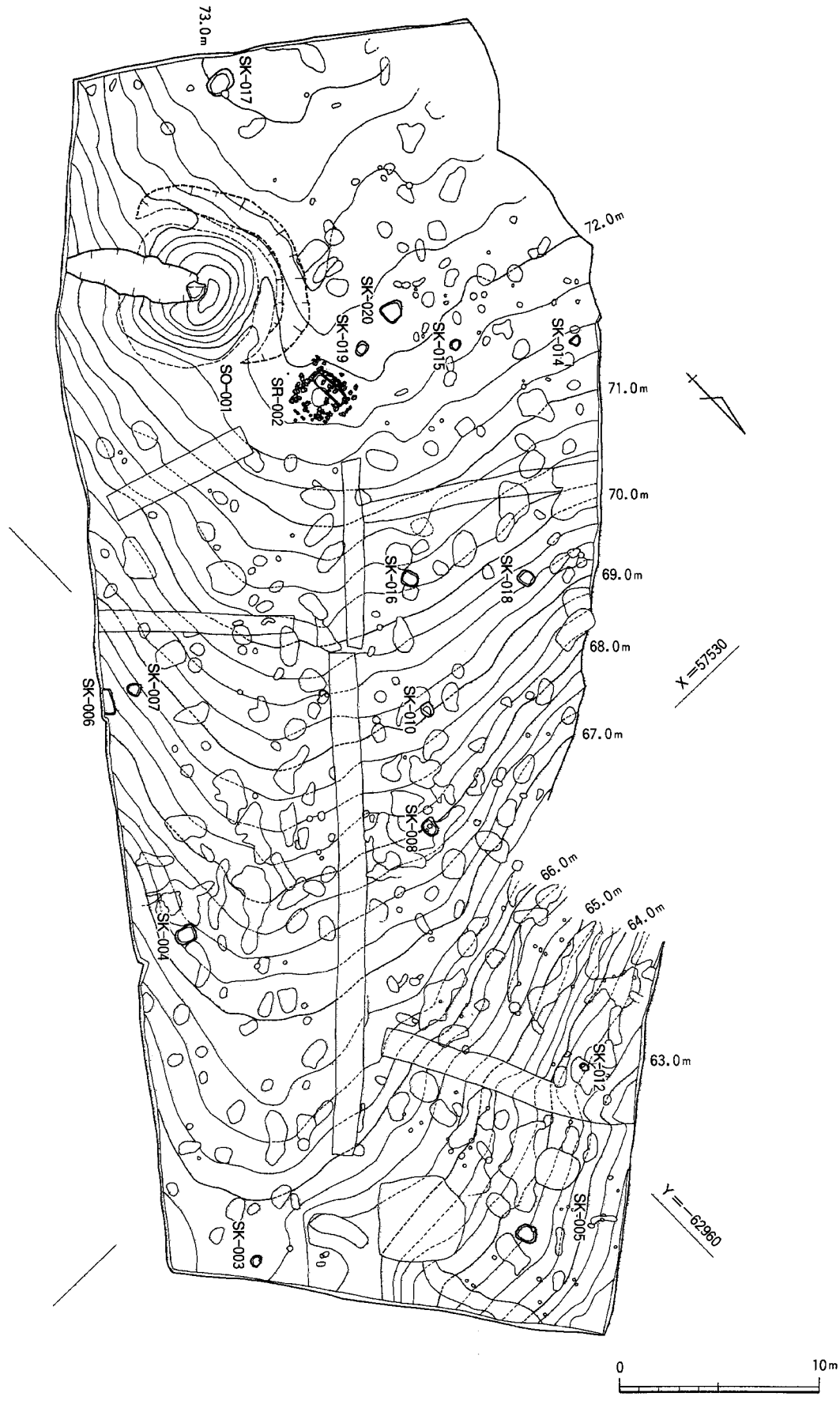


Fig. 1　4区遺構配置図（1／400）

石裏側に密に盛土が積まれ、墳丘盛土下部で細かい単位の盛土を積み、墳丘上部で単位の大きな盛土を積む状況がみられる。

遺存する墳丘から見て、墳端部はAトレンチで石室中心から4.4m、Bトレンチで4.1m、Cトレンチで4.5mとなり、径9m前後の小型の円墳に復元できる。

埋葬施設　石室は玄室側の天井石の一部が失われて玄室内がすでに開口していたものの、奥壁・両側壁とも完全に遺存していた。墓道・羨道部分は現況では完全に埋没していたが、調査の結果羨道は3段目以下は完全に遺存し、閉塞石も羨道部分で積み重ねられた状態で出土した。

石室掘り方　石室部分は全長6.3m、幅4.0mの隅丸長方形に掘削され、内部に石室を構築する。掘り方の上段は腰石の上端やや下位にあたり、石室基部を支えるに十分な深さをとる。掘り方前面は墓道掘り方に直接つながり、両者が一体で掘削されている。

玄室　石室プランは長方形を呈する。奥壁幅2.15m、前幅2.05m、左壁幅2.60m、右壁幅2.45mを測る。床面は水平で敷石は現状ではなく古墳周辺からも該当する石材が検出されていないことから本来存在しないものとみられる。床面上に散乱する石は天井開口部からの転石であると考えられる。

壁面の積み石は腰石に高さ80cm～1mのやや大きな石を据え、その上部に横長の石を3～4段積み、天井石を積む。天井石は持ち送りで積み上げられた側壁の上部に大石を1個配置している。石室内部の断面形はドーム形を呈する。内部壁石の目路は奥壁および奥壁に近い部分は通るが、羨道側では積みが乱れる。袖石は左袖石が右袖石よりも若干長く張り出し、羨道中軸は右に寄っている。また玄室と羨道で両側壁の積み石の目は通らず、袖石部分で明瞭な石積みの境界が生じており、玄室側の側壁を積んだ後に羨道側の石を積んだ様子が看取できる。羨道との境界には梱石をおいて境界としており、閉塞施設は玄室境界付近に設けられている。

羨道　羨道部は両側壁とも1段目に腰石を積み、その上に栗石を積んで構築する。腰石は石材の大きさにより羨道右側壁で1、左側壁で2となるが、基本的な構造は同じである。1段目の腰石上端は平坦だが、その上の積み石は横方向の目路が通らず、積み方は粗い。プランは羨門付近から直線的に外に延び、端部でハの字に広がる。

墓道　墓道掘り方は、羨道部分の幅で羨道方向に直線的に延びる。断面形は浅いU字形で、墓道基底面の傾斜はほとんどなく、墓道入り口と玄室床面とのレベル差もわずかである。掘り方は、したがって入り口ほど浅く、玄室側ほど斜面を深く掘込んでいる。

閉塞施設　閉塞石は梱石付

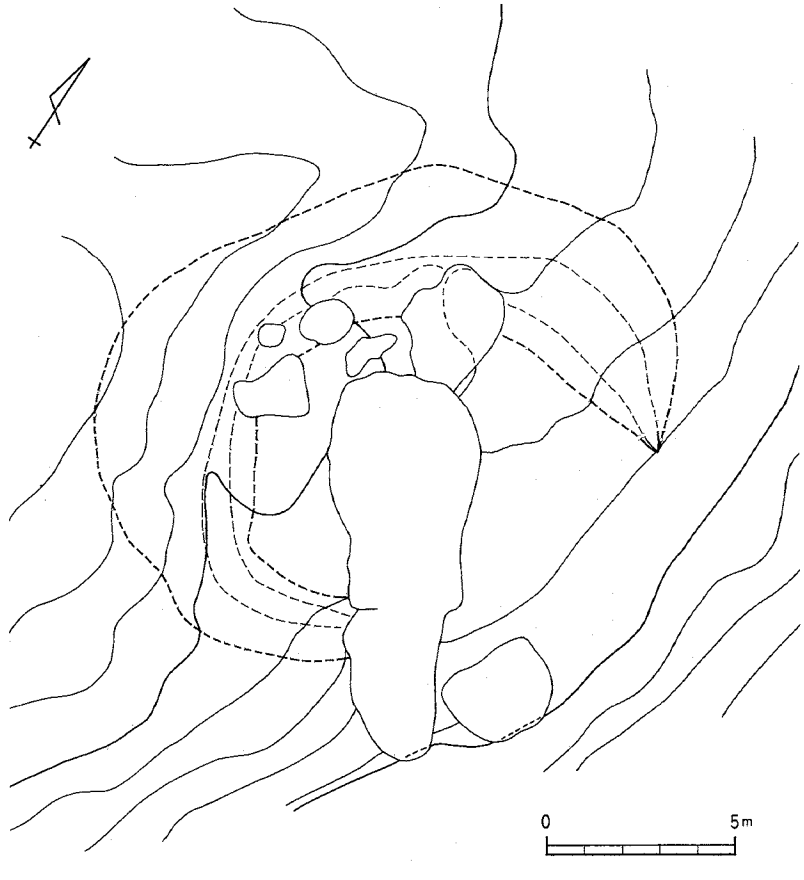


Fig. 2　SO－001 地山整形図（1／200）

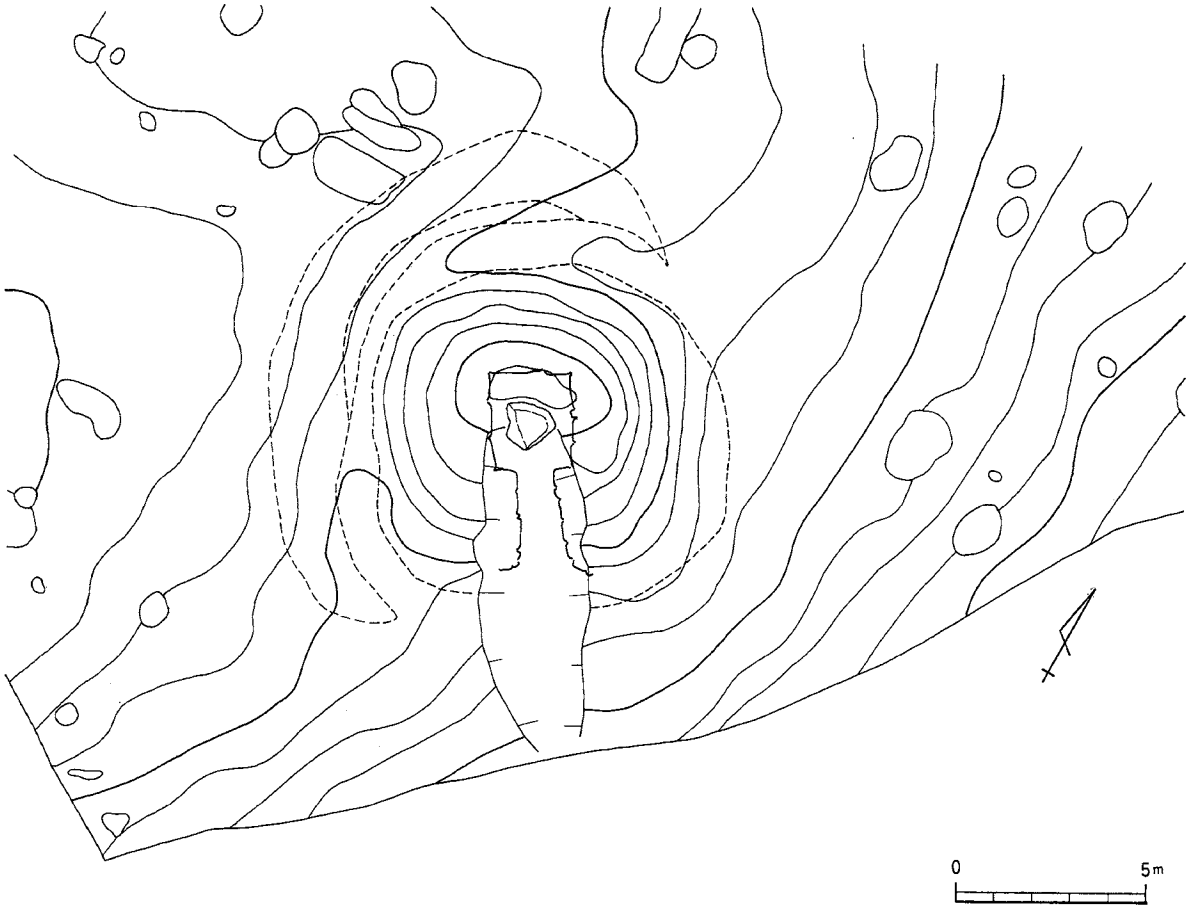


Fig. 3　SO－001 墳丘測量図（1／200）

近に1.2mの範囲で検出されており、玄室入り口付近を閉塞している。積み方は栗石を粗く積みあげ、外側は面をそろえて整える。積み石基段部は大きめの石を据えて相互に組み合わせており、外れにくくなる。断面では閉塞上面が玄室側に下っているが、これは後世に石室への出入りのために崩されたものとみられる。

出土遺物（Fig. 8）　墓道下層で、須恵器・土師器小片、鉄滓を検出する。1、2は玄室内出土遺物。1は須恵器蓋で、宝珠形の摘みをもち、口縁端部は下方に屈曲する。2は須恵器杯身で、高台をもち、小型。1と2がセットになるとは見られず、他の土器の存在が想定される。3、4は羨道下層部分からの出土。4は受け部立ち上がりが高く、出土遺物中で最も古相の様相を示す。5は墳丘上面で出土した須恵器杯身。図示したものの他にまた須恵器大甕破片が羨道部から出土するが、口縁部破片を欠き、接合も不可。鉄滓は羨道・墓道部分で総量で2.94kg出土し、その内訳は炉壁18点1.251kg、炉底滓4点945g、炉内滓6点486g、鉄塊系遺物5点264gとなる。また羨道上層で中世の青磁碗、青磁皿、土師皿をはじめとする遺物を検出する。6は羨道上層で出土した青磁碗。見込みを欠き、文様などは不明。これらは後世の祭祀に伴うものと思われ、またSR－002との関連も伺われる。鉄滓、中世遺物をはじめ遺物の詳細な説明は紙幅の都合で割愛したものが多いが、御了承頂きたい。

2）中世墓

SR－002　SO－001の北側に位置し、尾根線上に立地する中世墓で、列石で区画される。

列石は南北3m、東西3.5mの長方形に組まれ、一部で2段の石積みがのこるほかは現状では1段の列石が遺存する。列石は東側で遺存状況が悪く、また区画外に石材が散乱しており、積まれていた列石が崩壊したものと考えられる。遺存している列石部分、特に南側については、列石外端線を合わ

せ、外側の石面もある程度合わせている。列石の他の側も同様であったと見られる。

区画内には現況で高さ30cm程の盛土が積まれる。盛土は地山土を用いて築かれ、炭化物等は含まれず、柔らかく締まらない。盛土も列石と同様東側で大きく流出する。列石を2段と仮定すると、全体に30cmの盛土があったと推定される。また土層断面の観察から、盛土は主体部埋め戻し後に構築されていることが判る。

主体部は区画内の西側に位置し、全長2.63m、幅86cmを測る長楕円形を呈する。断面形はU字形で、床面は平坦面となる。主体部西側横に一段下がった面があるが、この面で炭化物粒を検出し、主体部に伴って一連のものである可能性が高い。主体部の範囲は列石の下に及び、このことから墳墓の構築順序としてまず主体部の掘削・埋葬、盛土構築、列石配置の順であったと考えられる。

主体部内から土師皿を中心とする遺物が出土し、いずれも主体部北側から検出されている。また出土遺物に釘が検出されたことから、木棺葬であったと考えられる。

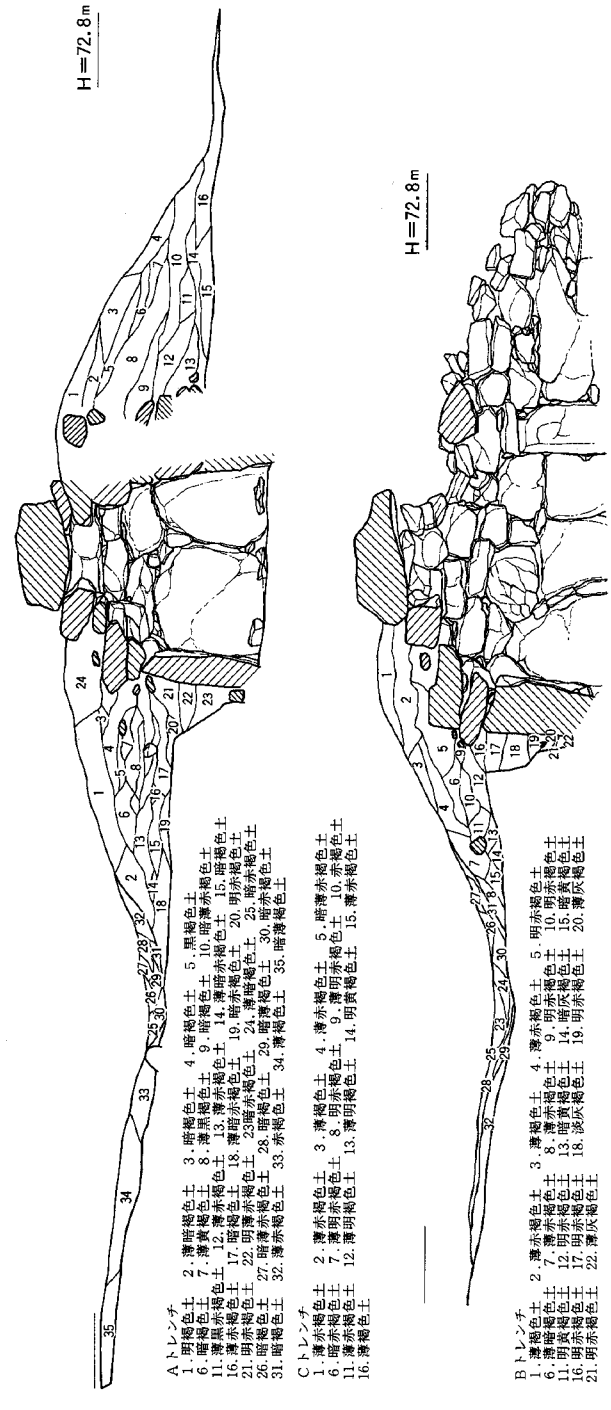


Fig. 4 SO－001 墳丘土層断面図（1／80）

出土遺物（Fig. 13）

副葬品として土師皿、土師碗などが出土した。7～13は土師皿。7は口径8.4cm、器高1.1cm。8は口径9.2cm、器高1.3cm。9は口径9.0cm、器高1.1cm。10は口径9.0cm、器高1.0cm。11は口径9.2cm、器高1.0cm。12は器高10.0cm、器高1.2cm。13は口径10.0cm、器高1.2cm。いずれも薄褐色の軟質の胎土である。14は土師器碗。口径7.8cm、器高3.1cm、底径5.2cm。薄褐色の軟質の胎土を用いる。15は釘。棺釘とみられ、板厚は3cm前後の可能性がある。

3）焼土壙・土壙

4区全体で15基の焼土壙を検出した。規模、形状などは多様で、近隣の内野・脇山地区で多く見られる焼土壙とは様相が異なる。2区下段の中世墓群中の焼土壙のように火葬墓の可能性のあるものもみられるが、個々の遺構について断定は難しいと思われる。またここでは周壁に被熱の痕跡がないものも、覆土の状況で焼土壙と思われるものは列挙した。

SK－003 調査区東端で検出された小型の焼土壙。遺存状況が極めて悪く、床面部分のみ遺存す

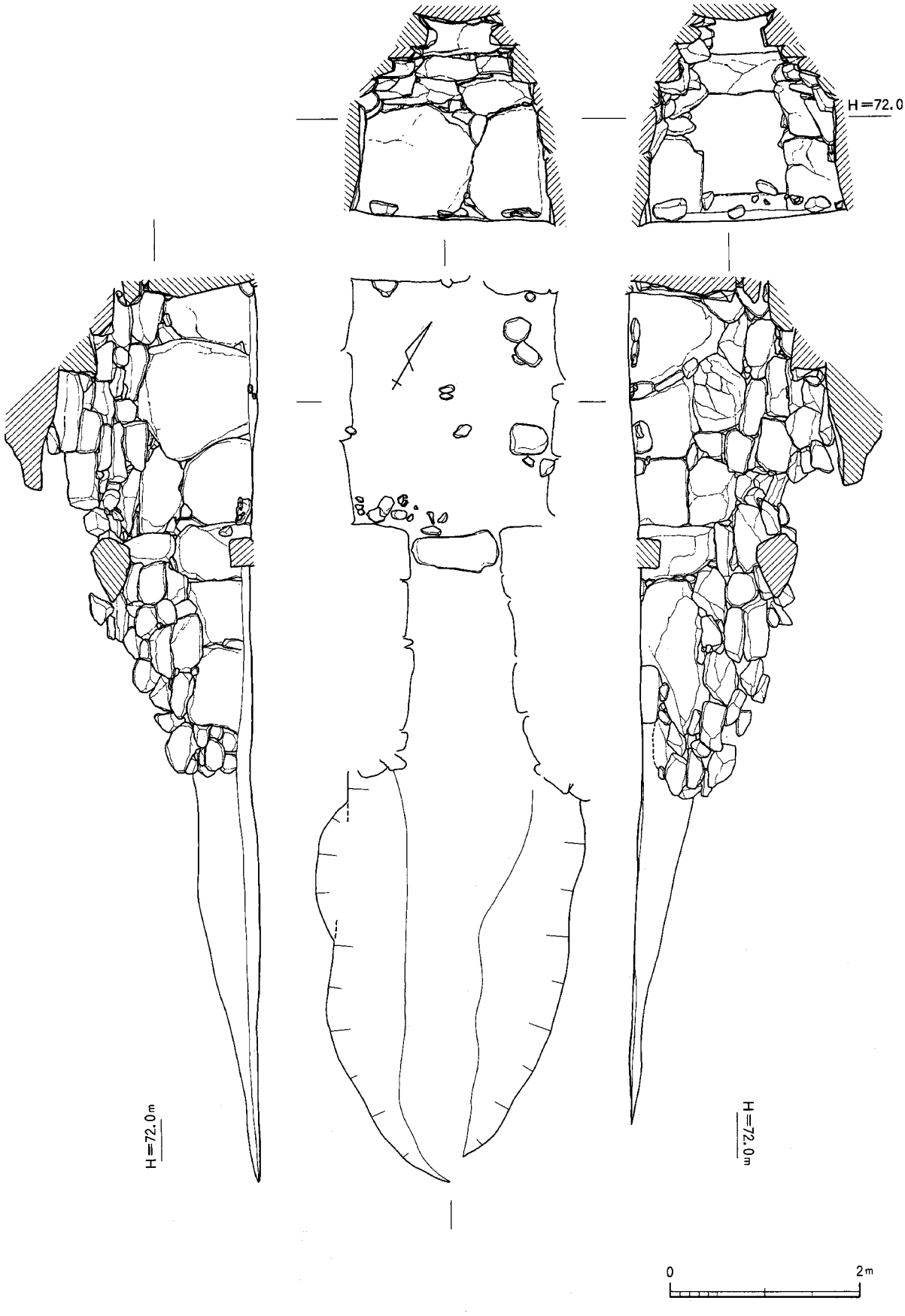


Fig. 5　SO－001 石室実測図（1／60）

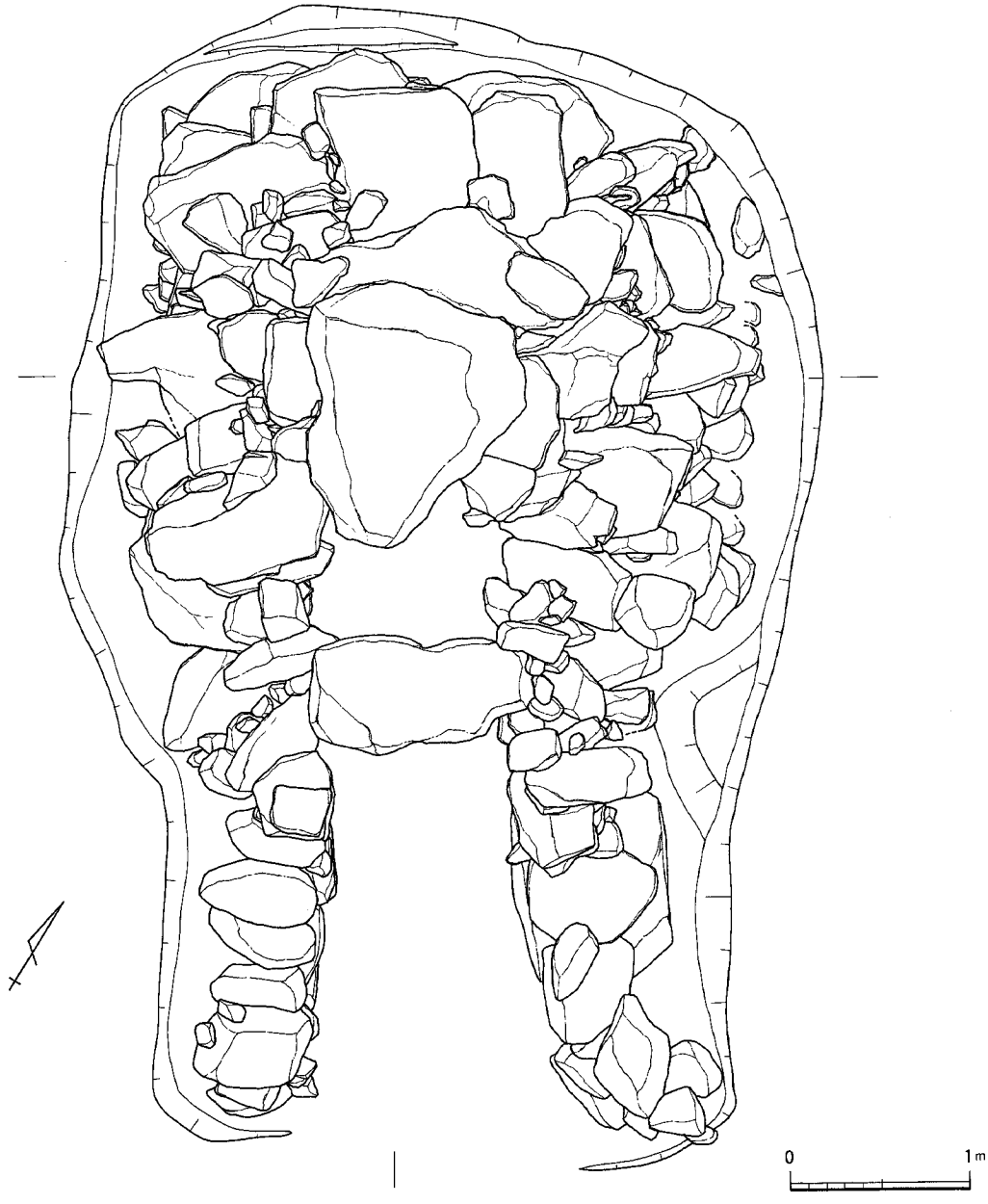


Fig. 6　SO－001 石室伏観図（1／40）

る。平面形は不整楕円形を呈し、現況で全長76cm、幅63cmをはかる。覆土は炭化物を主とした黒色土で、周壁の被熱は弱い。

SK－004　調査区東側で検出された焼土壙で、平面形は隅丸長方形を呈する。全長1.36m、幅99cm、深さ40cm前後を測る。床面は平坦で、周壁は角度をもって立ち上がる。周壁の被熱は強く、南側短辺を中心に硬化しており、一部還元炎焼成をうける。

SK－005　調査区北端で検出された焼土壙で、平面形は不整台形を呈し、西側でピットと切りあう。全長1.25cm、最大幅1.05m、深さ20cm前後をはかる。覆土は炭化物を中心とした黒色土で、自然堆積の様相を見せ、土質は粘質土で柔らかい。周壁の一部に被熱が見られるが、全体に弱い。

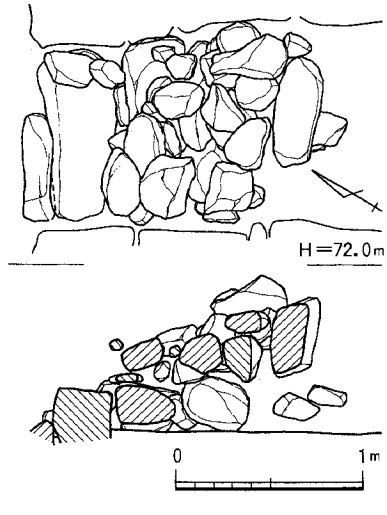


Fig. 7　SO－001 閉塞石実測図（1／40）

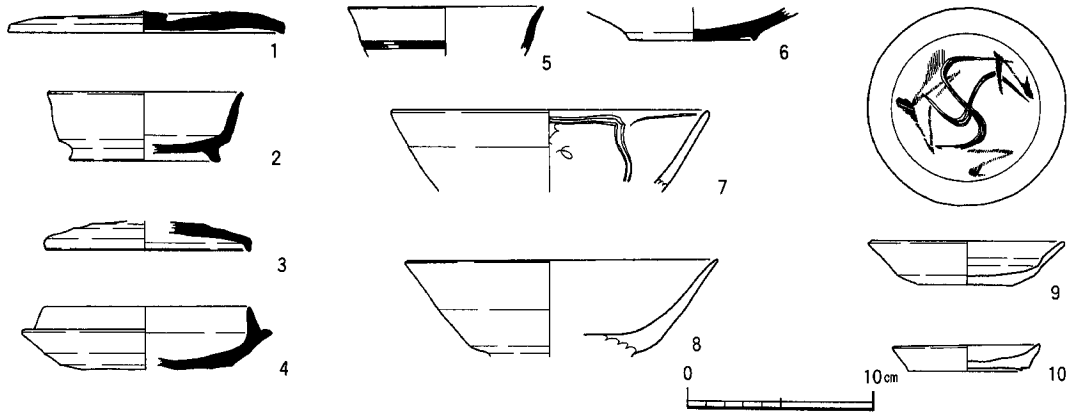


Fig. 8　SO－001 出土遺物（1／4）

SK－006　調査区東側壁際で検出した焼土壙。半分のみの検出だが、全体は台形を呈すると考えられる。全長1.6m、深さ25cmで、大きく削平される。床面は平坦で、壁面は直に立ち上がる。南側壁面を中心に強く被熱しており、硬化した壁体が上方に突出して遺存する。

SK－007　調査区東側、SK－006に近接して位置する。平面形は不整形でまとまった形をし、全長90cm、幅70cm、深さ21cmをはかる。床面はほぼ水平で、壁面は緩く開きぎみに立ち上がる。西側壁面に自然石があり、石表面が強く被熱する。壁面自体に被熱の痕跡はなく、崩落したと考えられる。

SK－008　調査区北西側で検出された焼土壙で、平面形は隅丸台形を呈する。全長1.14m、幅96cm、深さ22cmをはかる。床面は北に緩く傾斜し、床面上にピットが2基存在する。壁は上方に開いて立ち上がり、北側を中心に強く被熱する。

SK－010　調査区西側で検出された焼土壙で、SK－008に近接する。平面形は台形に近い形で、全長90cm、幅7.4cm、深さ20cmをはかる。床面は地形にそってゆるく北に落ち、遺構内に転石を抱える。壁面に被熱した痕跡が見られる。

SK－012　調査区北西側で検出した焼土壙で、周囲を撹乱によって壊され、ごく一部のみ遺存する。遺存部分は焼土壙の南西側コーナーと見られ、全体は長方形に近い形と考えられる。床面、南壁に被熱した痕跡がみられる。

SK－014　調査区西側端で検出した焼土壙。全長72cm、幅63cm、深さ40cm。平面形は隅丸三角形状の不整形で、床面も凹凸が見られる。覆土中に焼土塊が多量に落ち込み、壁面も強く被熱している。

SK－015　調査区西側で検出された焼土壙で、削平が著しく、床面のみ遺存する。全長68cm、幅64cmの略円形を呈し、断面は皿状になる。遺構上端にそって被熱した痕跡が見られる。

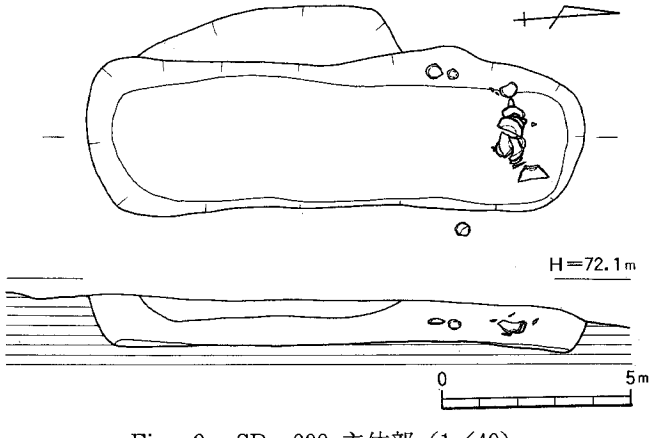


Fig. 9　SR－002 主体部（1／40）

SK－016　調査区調査区西側で検出された焼土壙で、平面形は台形を呈する。全長1.17cm、幅90cm、深さ32cmを測る。床面はほぼ平坦で、壁は上方に緩く開いて立ち上がる。壁面全体に強く被熱しており、東壁で特に被熱が強い。覆土は炭化物を多く含む。

SK－017　調査区南端で検出した焼土壙で、北側をピットで切られる。平面形は隅丸長方形で、胴部が張る形状になる。床面

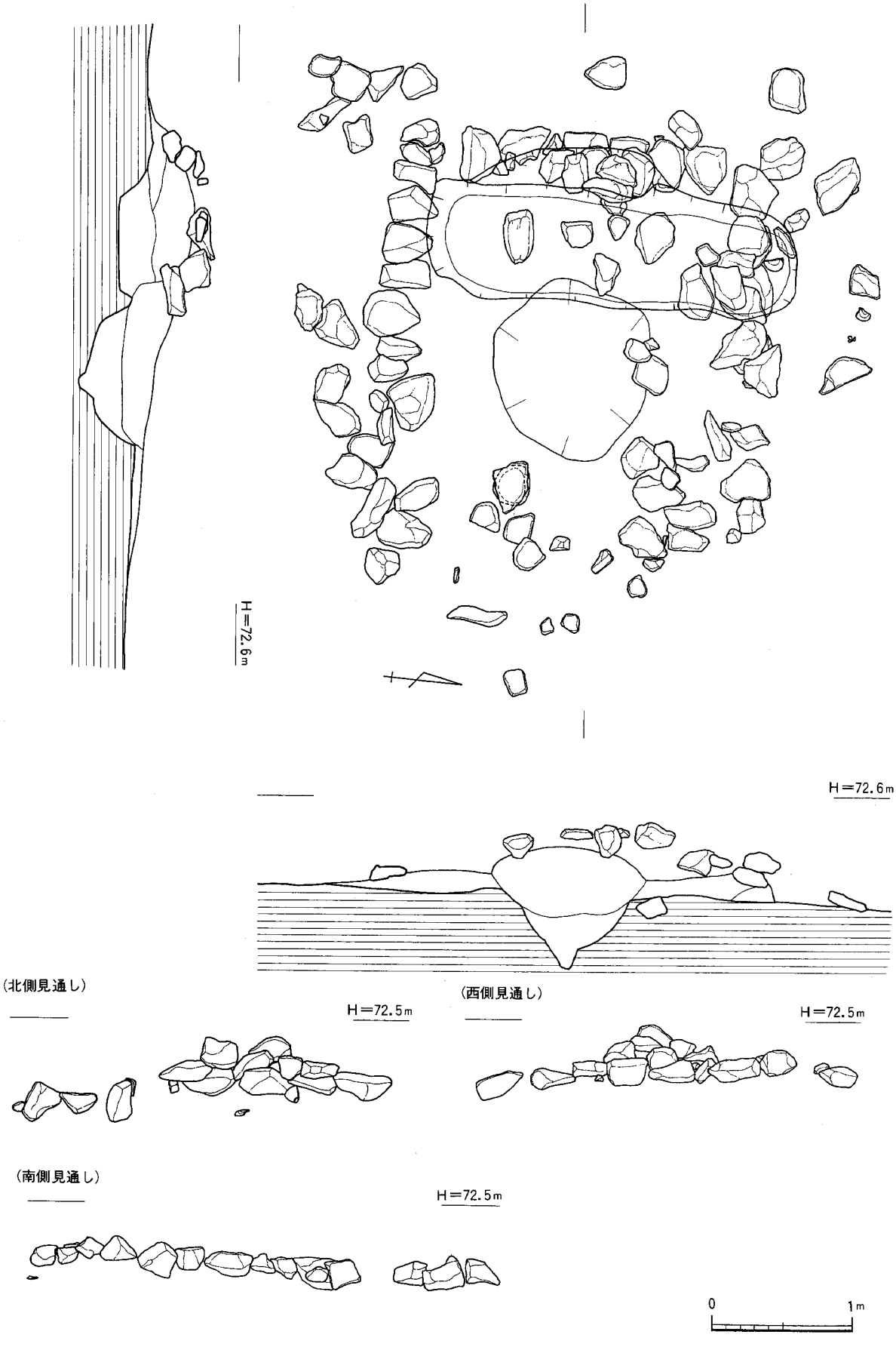


Fig. 10　SR－002 実測図（1／40）

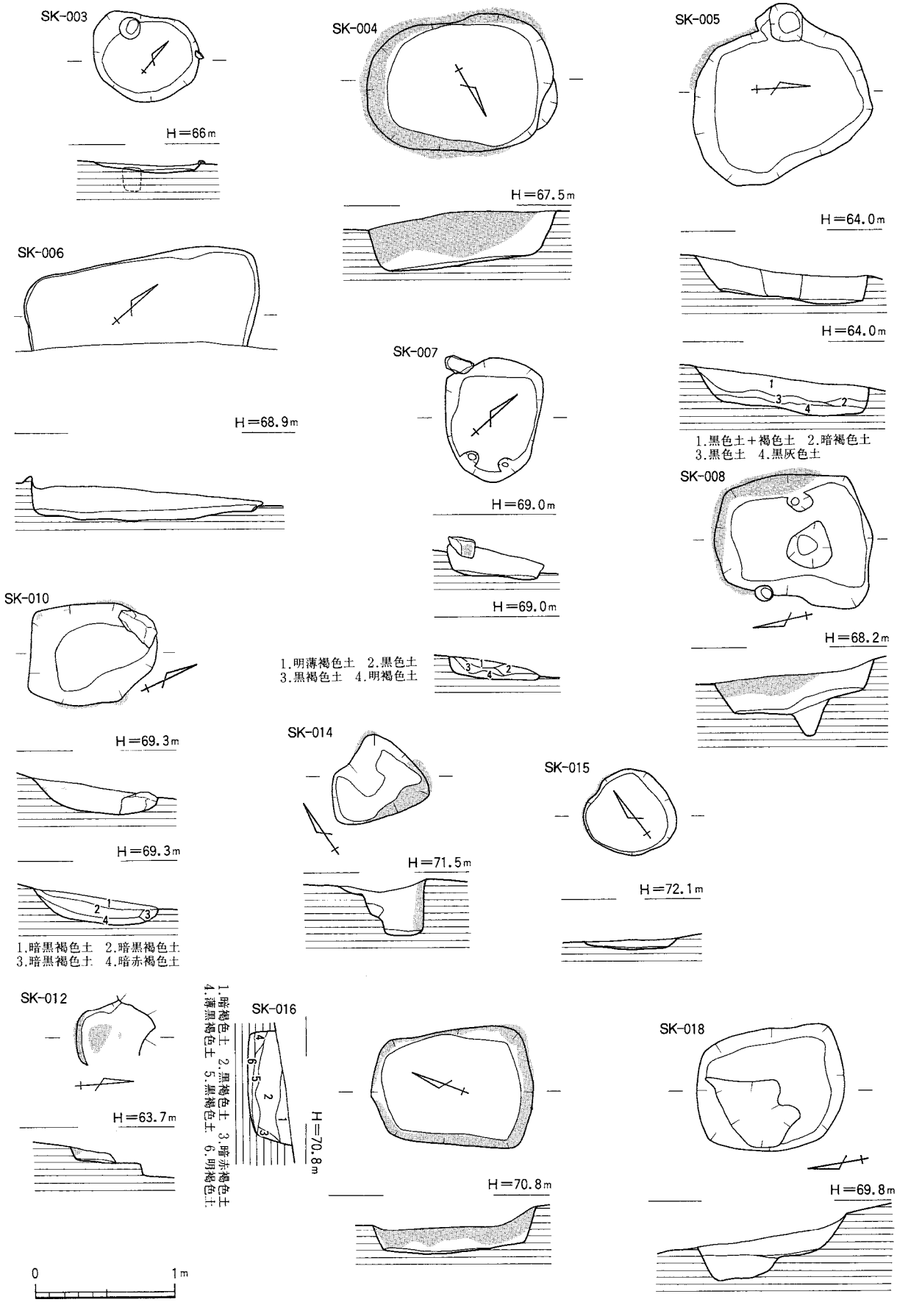


Fig. 11 焼土壙実測図1 (1／40)

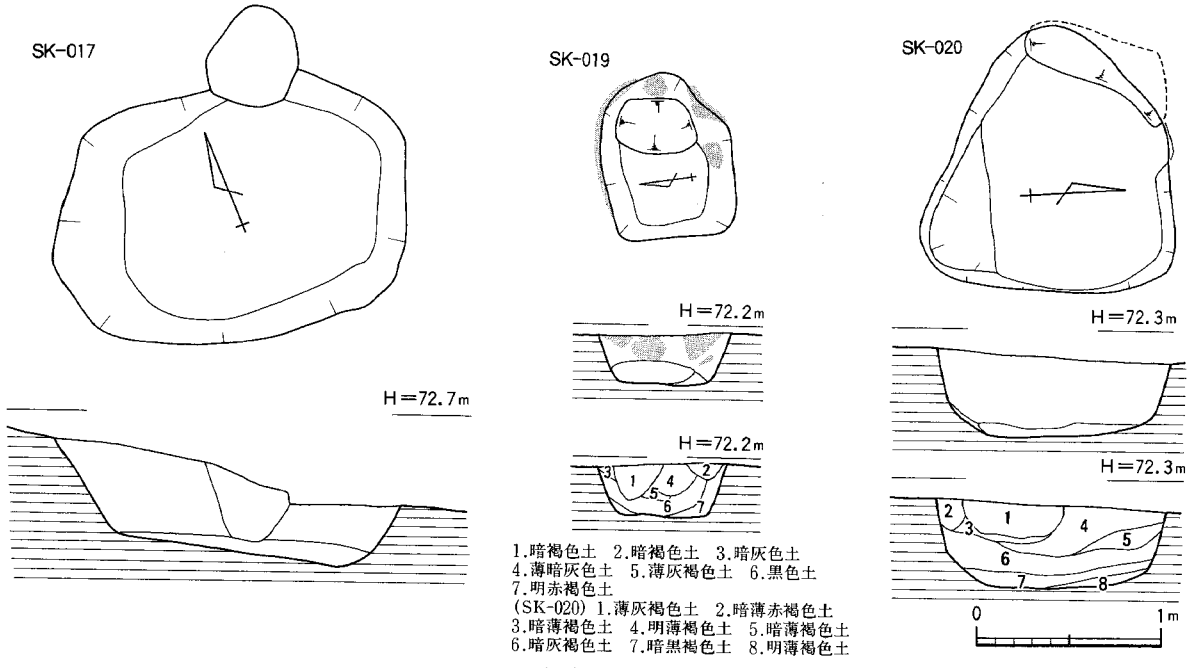


Fig. 12 焼土壙実測図2 (1／40)

は平坦で、壁は緩く立ち上がる。壁面に強い被熱は見られないが、覆土中に炭化物を多く含む。

SK－018 調査区西側で検出された焼土壙で、平面形は台形上を呈するが整わない。西側床面に撹乱が入り、遺存状況は良くない。全長1.08m、幅90cmで、床面までの深さ30cmを測る。床面は水平で、壁面はゆるく開いて立ち上がる。南東側の遺構上端に被熱の痕跡が残る。

SK－019 SR－002の西側に近接する。床面東側に撹乱が入り、遺存状況は悪い。平面形は不整形で、全長89cm、幅70cm、深さ27cm。断面形は箱形で、壁は上方に開く。周壁に被熱した痕跡が見られ、覆土中に炭化物、焼土を多く含む。SR－002との関連が推察される。

SK－020 SR－002の西側に位置する。平面形は不整形で、全長1.4m、最大幅1.4mを測る。深さは46cmで、床面西側は木根が入り一部破壊される。覆土は炭化物を多く含む。周壁に強い被熱の痕跡は見られない。

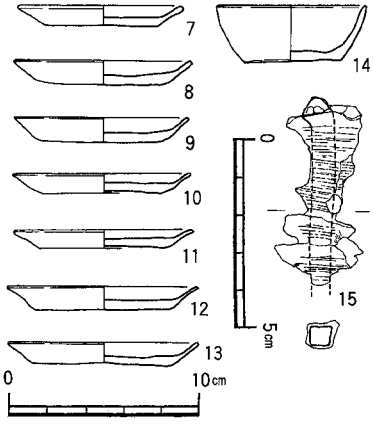


Fig. 13 SR－002 出土遺物実測図 (1／4、1／2)

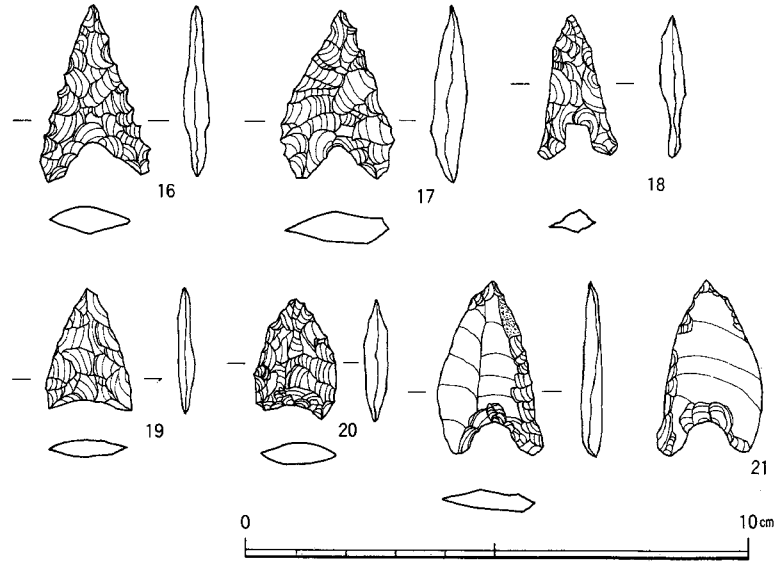
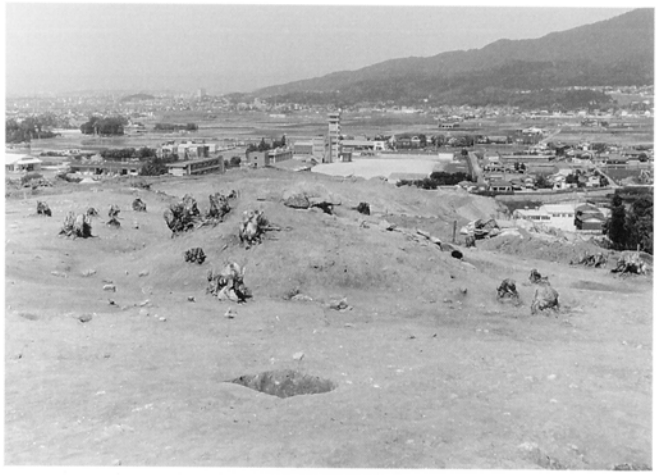


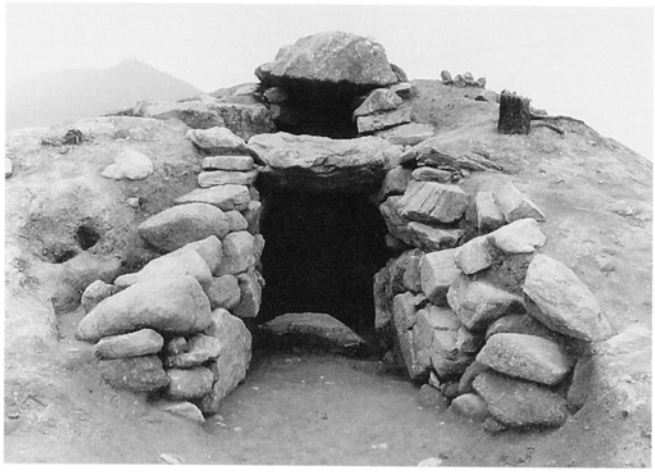
Fig. 14 4区出土石器実測図 (2／3)

Ph. 2　SO－001 墳丘現況（南から）



Ph. 3　SO－001 墳丘全景（西から）

Ph. 4　SO－001 墳丘全景（南から）

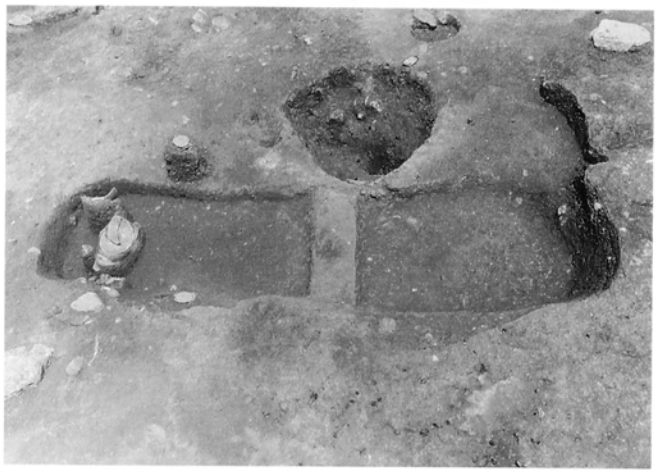


Ph. 5　SO－001 石室全景（南から）

Ph. 6　SO－001 石室奥壁（南から）

Ph. 7　SO－001 石室全景（西から）

Ph. 8　SR－002 列石（南から）



Ph. 9　SR－002 全景（西から）

5．浦江谷遺跡１次調査　５区（浦江谷古墳群Ｃ－１）

立地

東へ下降する丘陵斜面に築造されている。標高54ｍから50.5ｍの比高差が3.5ｍの範囲の急斜面に立地するが、古墳のほぼ中央を横切る52ｍのコンターを境に東側へ緩斜面に変わっていく。

Ph.　1　Ｃ－１号墳現況（北から）

Ph.　2　Ｃ－１号墳墳丘遺存状況（北から）

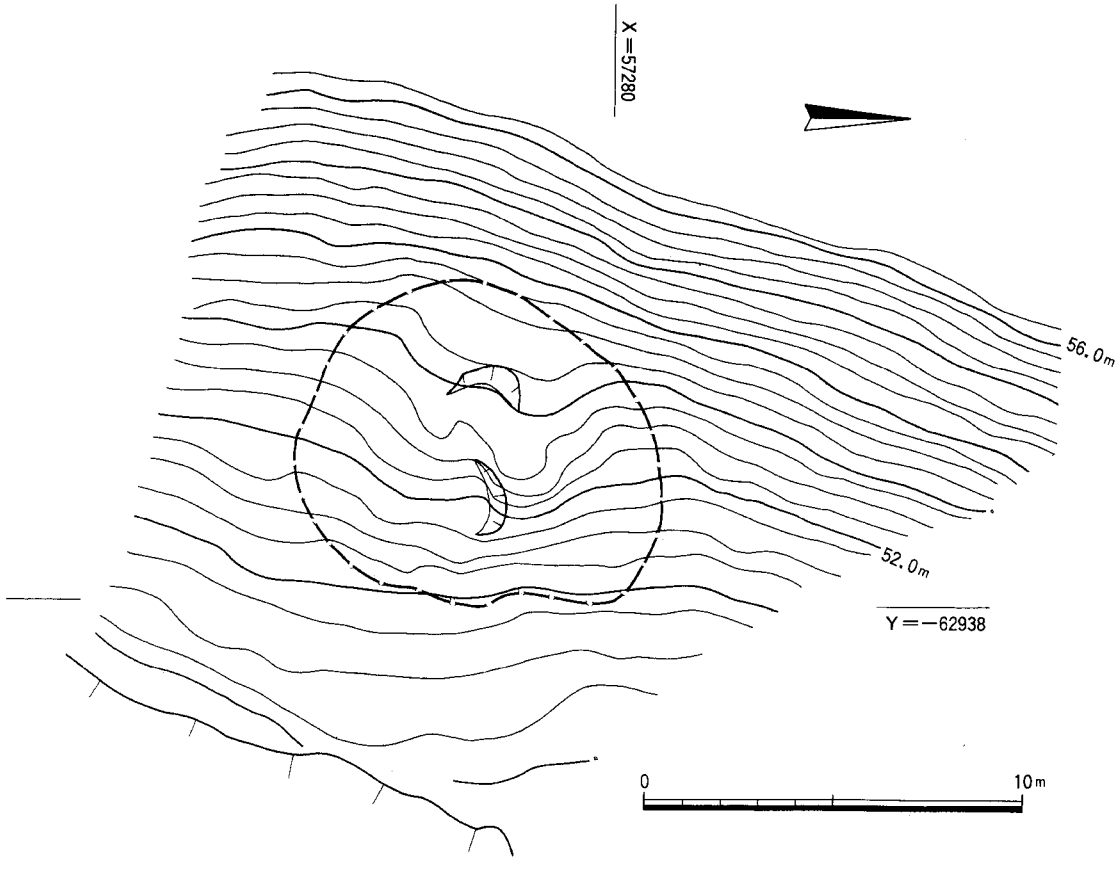


Fig. 1　C－1号墳現況測量図（1／200）

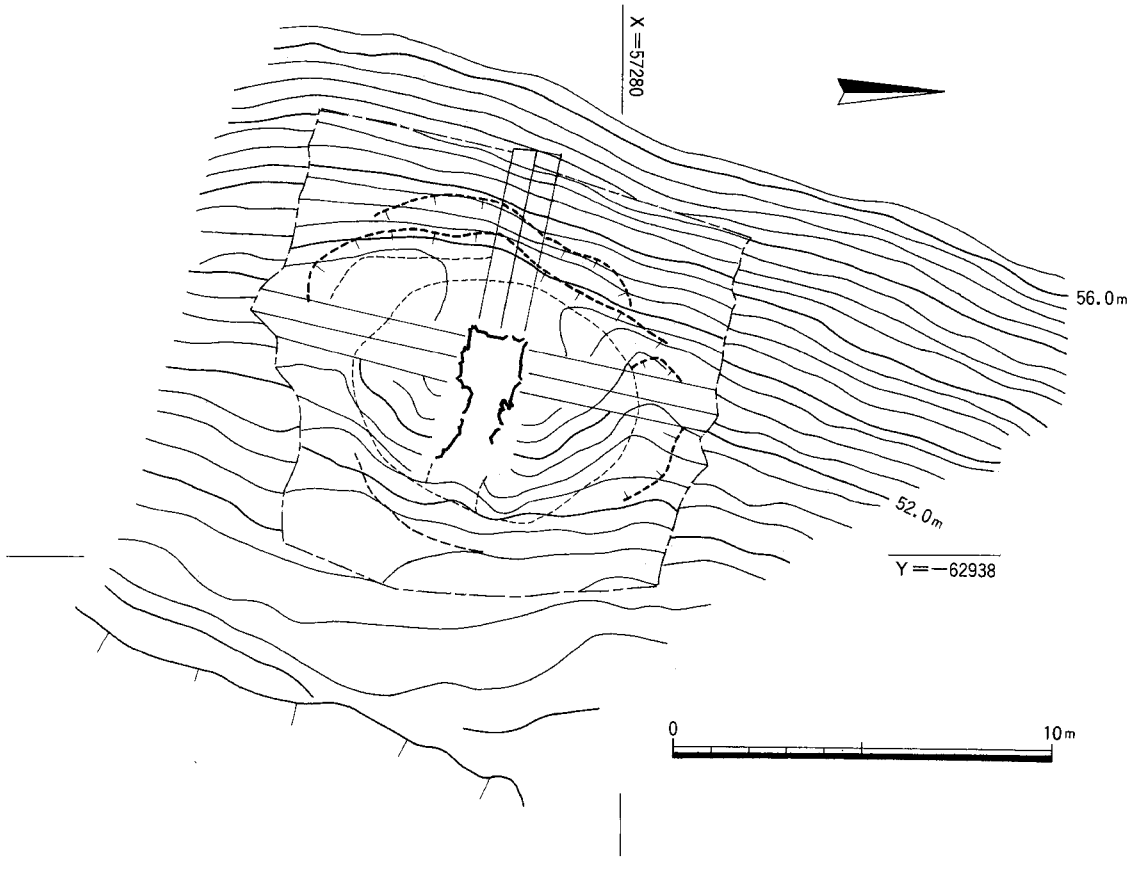


Fig. 2　C－1号墳墳丘測量図（1／200）

地山成形

高所の西半部に最大幅2.2mの馬蹄形状の溝を掘削するとともに、径7.5mの墳丘基底面の整地を施す。墳丘基底面は急斜面に位置し、造成も浅いため東西の比高差が2.5mの斜面となる。

列石と石室掘り方

列石は羨門から折れて巡るもの（列石１、列石２）、前庭部まで延長し、前面は粗く２～３段積み重なり、さらに墳端に沿って湾曲しながら延びていくが（列石３、４）、Ⅰ区では中途から直線的なラインでⅡ区に向けて墳丘内に築き上げる列石と墳端を巡る列石５に分かれる。後者はほとんど積み重なりが見られず、まばらである。背後のⅢ区には列石がみられない。

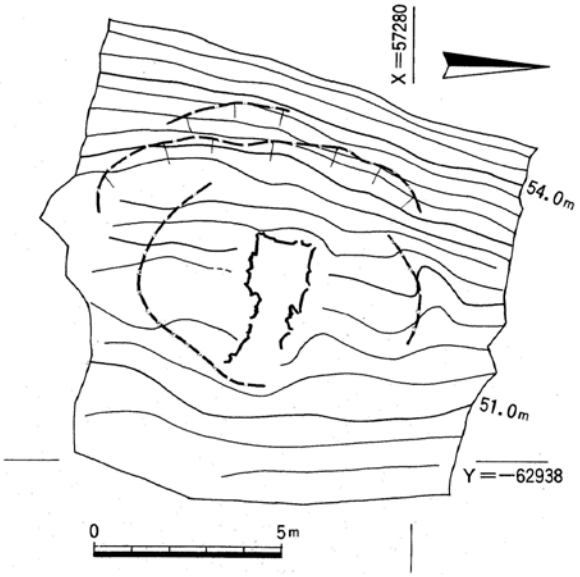


Fig. 3　C－１号墳地山成形図（1／200）

Ph. 3　C－１号墳墳丘遺存状況（東から）

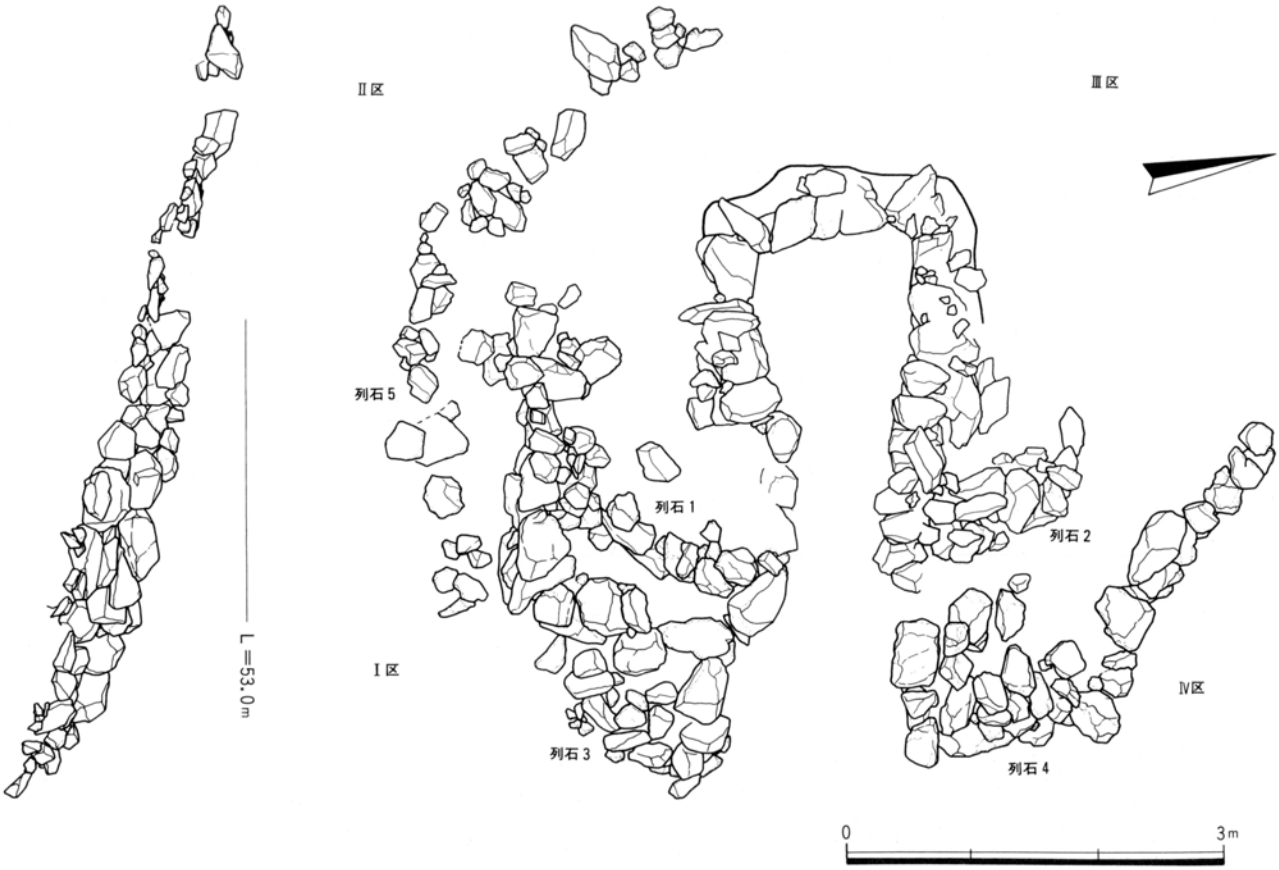
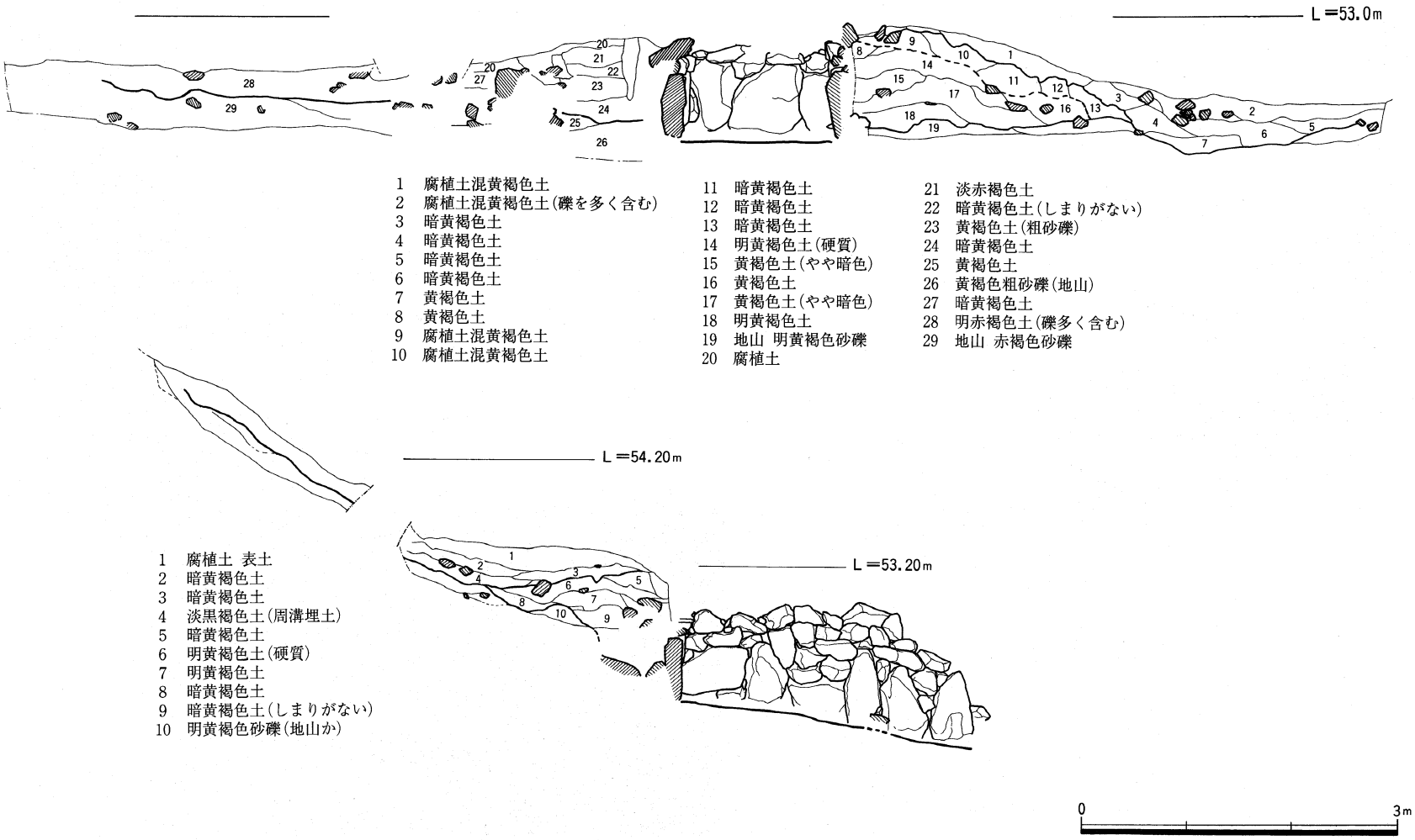


Fig. 4　C－1号墳石室と列石俯瞰、見通し図（1／60）

Ph. 4　C－1号墳列石検出状況（東から）



1　腐植土混黄褐色土
2　腐植土混黄褐色土(礫を多く含む)
3　暗黄褐色土
4　暗黄褐色土
5　暗黄褐色土
6　暗黄褐色土
7　黄褐色土
8　黄褐色土
9　腐植土混黄褐色土
10　腐植土混黄褐色土
11　暗黄褐色土
12　暗黄褐色土
13　暗黄褐色土
14　明黄褐色土(硬質)
15　黄褐色土(やや暗色)
16　黄褐色土
17　黄褐色土(やや暗色)
18　明黄褐色土
19　地山 明黄褐色砂礫
20　腐植土
21　淡赤褐色土
22　暗黄褐色土(しまりがない)
23　黄褐色土(粗砂礫)
24　暗黄褐色土
25　黄褐色土
26　黄褐色粗砂礫(地山)
27　暗黄褐色土
28　明赤褐色土(礫多く含む)
29　地山 赤褐色砂礫

1　腐植土 表土
2　暗黄褐色土
3　暗黄褐色土
4　淡黒褐色土(周溝埋土)
5　暗黄褐色土
6　明黄褐色土(硬質)
7　明黄褐色土
8　暗黄褐色土
9　暗黄褐色土(しまりがない)
10　明黄褐色砂礫(地山か)

Fig. 5　C－1号墳墳丘土層断面図 (1／60)

Ph. 5　C－1号墳Ⅰ区列石検出状況（南から）

Ph. 7　C－1号墳Ⅳ区列石検出状況（西から）

Ph. 6　C－1号墳Ⅰ区列石検出状況（東から）

Ph. 8　C－1号墳石室と列石の腰石露呈（南から）

石室掘り方は方形プランを呈し、奥壁側では深さ70cm掘削し、腰石との隙間の基底に塊石を充填し安定させている。掘削の深さは東側にしたがい、地形の傾斜から浅くなり、B、Cトレンチでは墳丘基底面から20cm位となる。

墳丘

墳丘は径7mの円墳の形態を呈し、90cm程の高さが遺存する。Aトレンチの墳端付近では地形変換した緩斜面に礫が自然落下、流出し集積していた為に墳端、周溝ともに不明瞭となっているが石室中心より3.4m位に墳端が位置するものと考えられる。対面するCトレンチではほぼ対称である石室中心より3.5mの位置に墳端が確認できる。さらに、幅2.2mの周溝が外側に設けられている。盛土は下部に硬質の明黄褐色土を主に固められている。高所のBトレンチでは石室中心より3.6mの位置に墳端を設けて盛土を施す。盛土は傾斜面に築かれるために墳端より10cm程の高さのみ遺存する。

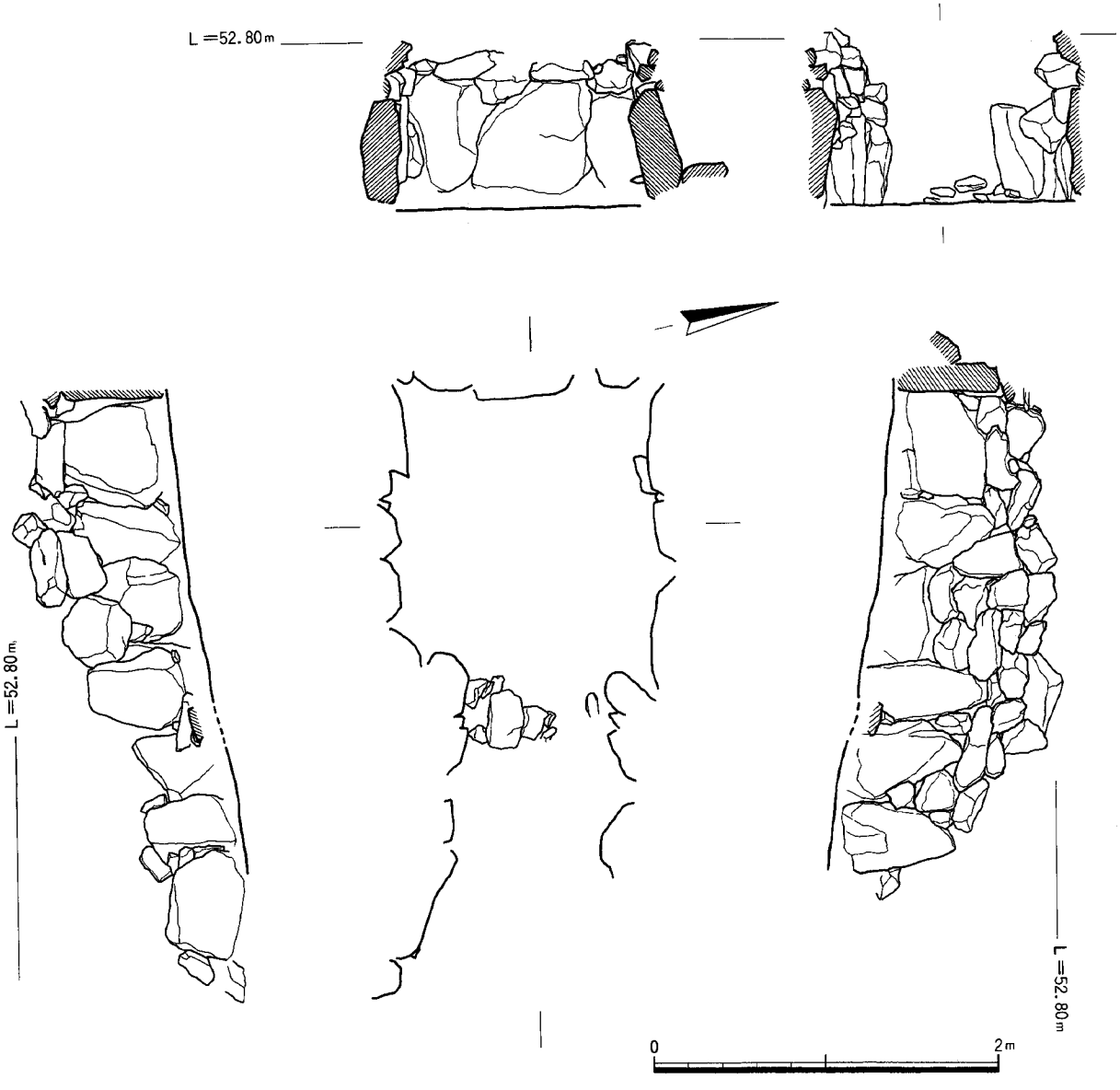


Fig. 6　C－1号墳石室実測図（1／40）

石室

石室の形態は単室両袖横穴式石室である。主軸方位はN－78°－W（開口方向）をとる。玄室は主軸長150cmを測るが、右側壁が10cm程長い。奥幅と前幅はほぼ変わらず、各146cm、136cmを測る。奥壁の腰石は3石で両側壁に挟まれている。右側壁は高さが不揃いの腰石3石の上に塊石を粗く積み上げる。左側壁は袖石と接した隅角に1石を充填した4石の腰石からなる。袖石は両側ともに縦長で高さが玄室側壁の腰石とほぼ揃う石材を用いる。羨道部は右側の前面は欠落しているが、左側壁は主軸長で193cmの延長が確認された。幅は玄門側で80cmを測り、前面にかけて広がる。仕切り石は袖石に接して1個所、塊石を組み合わせた一部が検出された。整地面は玄室内ではほぼ平坦であるが、羨道部では前面にかけて下降していく。

Ph. 9　C－1号墳石室奥壁（東から）

Ph. 10　C－1号墳石室左側壁（北から）

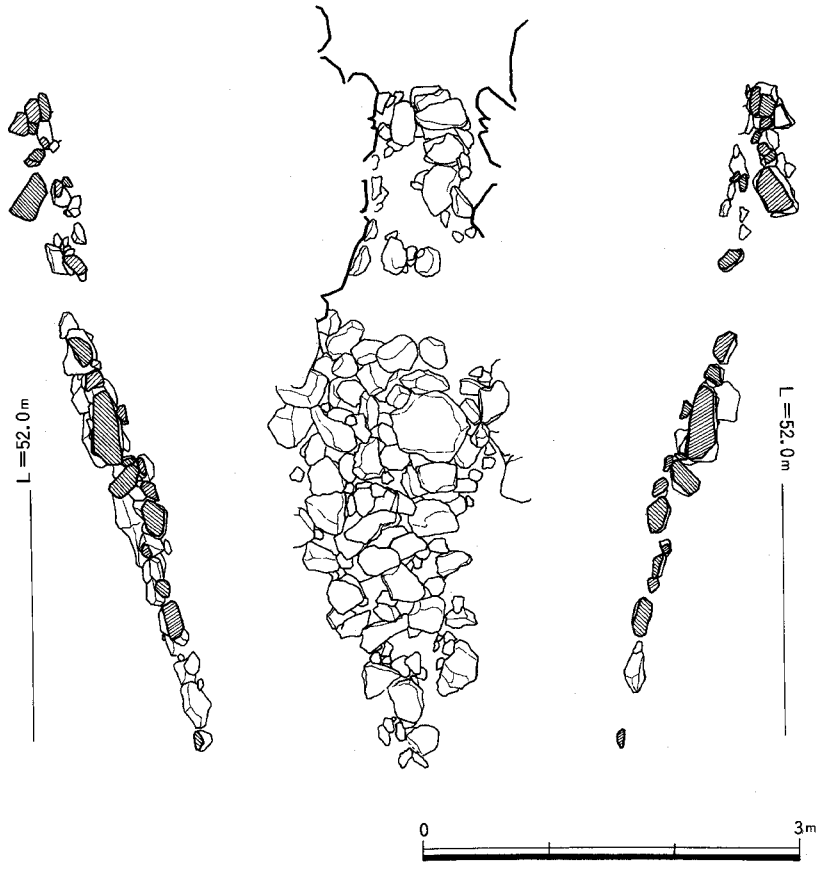


Fig. 7　C－1号墳閉塞石実測図（1／60）

閉塞石

閉塞石と考えられる塊石が前庭部周辺に集中していた。周辺には自然に洗い出された20㎝大の塊石が多く分布し、識別が困難であったが、前庭部およびその前面（墓道）に集中するものはやや大きめの石材が混入していた。閉塞石は掻き出されたように前面にむけて流れ落ちている。仕切り石周辺にみられる塊石は整地面に接しているが、羨道部の側壁が崩落したものが多いと思われる。

Ph. 11　C－1号墳前庭部塊石検出状況（東から）

Ph. 12　C－1号墳閉塞石検出状況（東から）

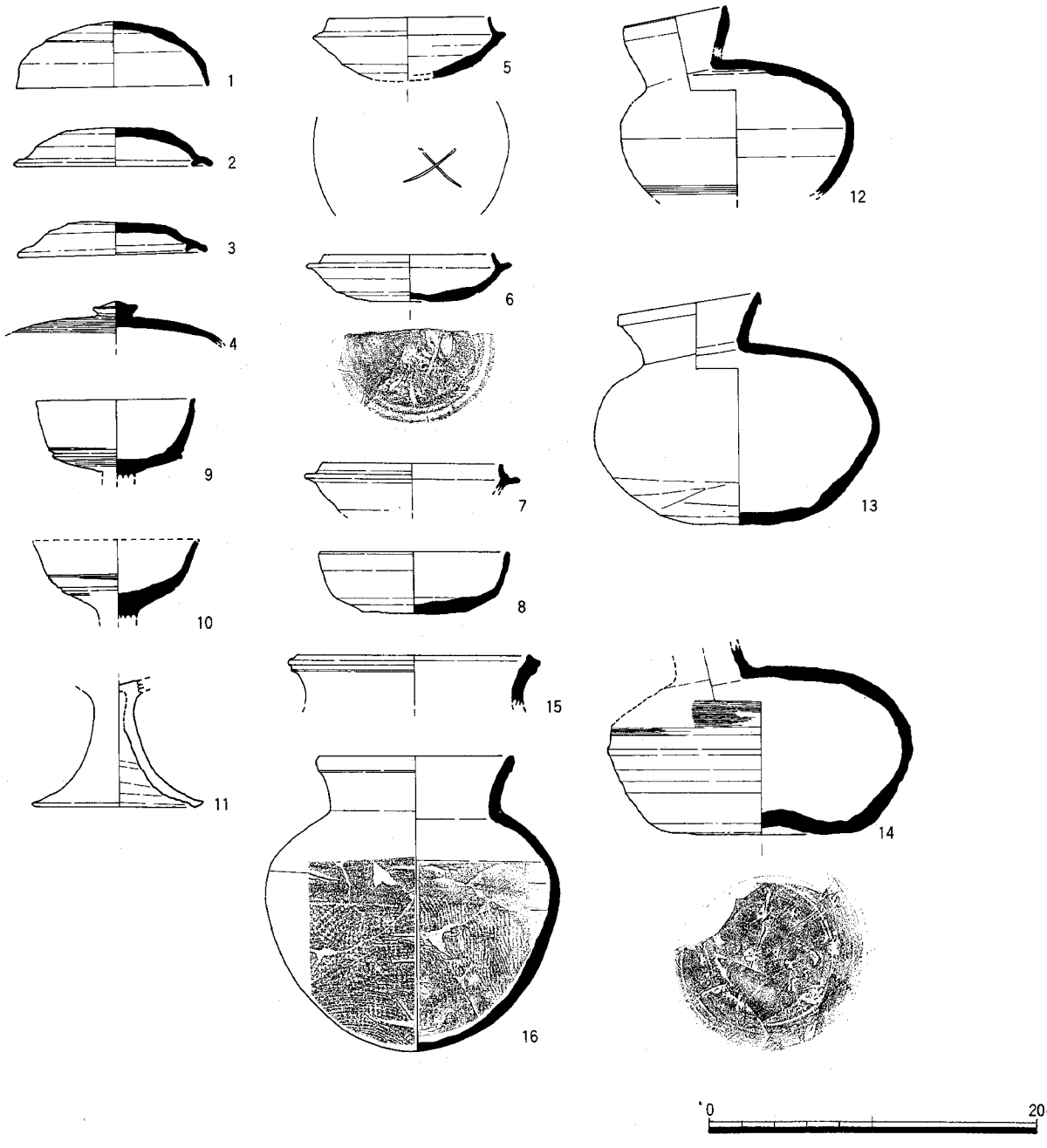


Fig. 8　C－1号墳出土遺物実測図（1／4）

出土遺物

Ⅰ区、Ⅳ区の墳端表土から大半が出土した。時期的にはⅣ期～Ⅵ期のものまで含む。1は口径10.6cm、天井部1／2以上にヘラケズリが施されている。出土遺物のなかで最も古いタイプである。4は出土遺物の中で最も新しい形態を呈している。宝珠つまみが付き、遺存する天井部にカキメが施される。13は外面の体部下位に木目直交の平行タタキ後カキメ、内面に細かい湾曲がほとんどみられない平行文が残る。16の平瓶は体部中位に強いヨコナデが施され、底部は円形の接合面から上げ底状になる。外面体部の2個所以上に縦方向の直線、底部に×のヘラ記号が描かれている。

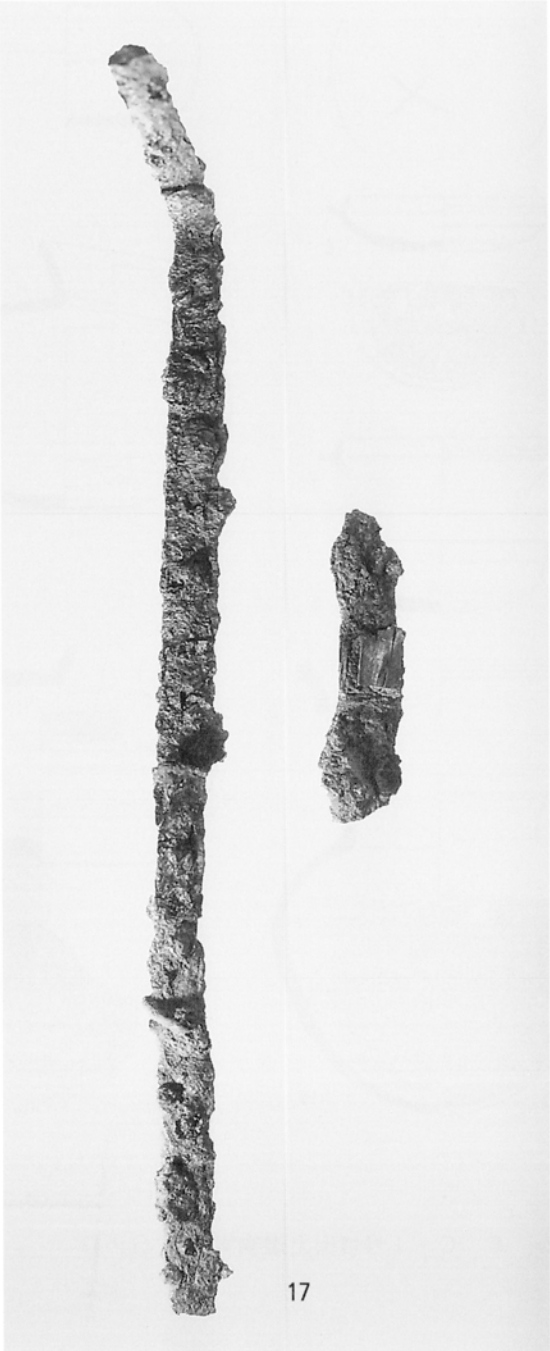
出土地点

1　Ⅳ区前面列石中、2、3　Ⅳ区墳端表土、4　Ⅰ区墳端表土、5　Ⅰ区墳丘表土、Ⅳ区墳端前面表土、6～12　Ⅳ区墳端表土、13　Ⅳ区墳端表土、Ⅳ区前面列石中、14、15　Ⅳ区墳端表土、16

Ⅰ区墳端表土、Ⅰ区墳端表土～墳丘、Ⅳ区墳端前面

鉄刀

17はⅠ区墳端表土の塊石中から出土した。折れ曲がり、鋒、柄は欠損している。遺存する部分は全長約70㎝、身幅2.2㎝を測る。１個所に銅製の責金具が銹着し、茎近くに銅製の脛巾金具が鞘の木質部分とともに捲り上がって遺存する。刀身部の断面形は不明瞭であるが、切刀造をなすものと思われる。



Ph. 13　C－１号墳出土鉄刀

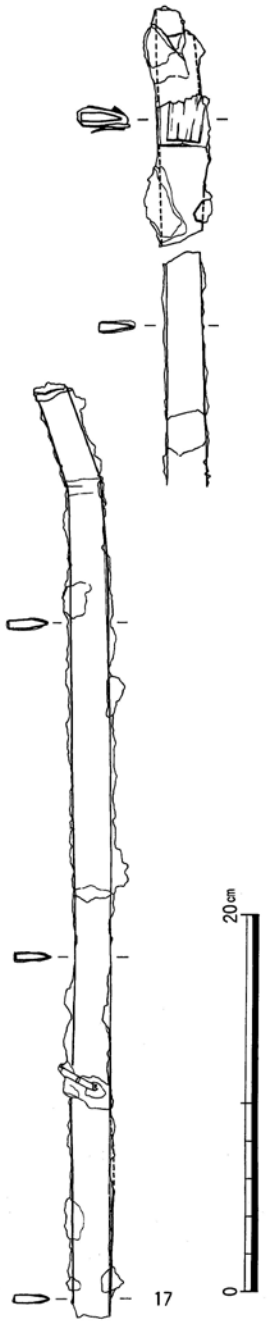


Fig. 9　C－１号墳鉄刀実測図（1／4）

6．浦江谷遺跡群第１次調査　６区

（１）概要

６区は２・４区が立地する舌状尾根の北側に走る谷に沿った位置にあり、南側で谷に面した平坦面とその西側の斜面部分に設定した。斜面の傾斜は急で、東側緩斜面とは明瞭に区別される。

調査期間は７月４日から重機による表土はぎを開始し、10月１日まで調査を行なった。調査面積は2560㎡で、遺構は斜面部分では表土直下で検出される。平坦面部分では上流からの土砂の堆積が一部で見られ、地山土との判別が困難な状況であった。検出された遺構は、古墳２基、掘立柱建物１棟、溝状遺構９、土壙・土壙墓６、焼土壙２のほか、製鉄炉１基、横穴式炭窯１基を検出している。出土遺物は古墳関連の遺物が出土し、土壙墓から副葬土器が出土したほか、調査区東側平坦面に堆積した包含層中から縄文早期～前期の遺物が出土している。

（２）遺構・遺物

１）古墳

SO－001

位置・現況　調査区西側の突出する尾根の南側に築造される。尾根南側斜面は傾斜が急になっているがSO－001はその傾斜面と平坦面との地形変換点を基底としており、古墳自体は平坦面に位置する。現況では墳丘上部が流出して天井石も失われ、側壁も腰石部分を残して崩落する。古墳前部も谷の開削によって削られ、また中世の溝が切り込むなど、遺存状況は極めて悪い。

地山整形　SO－001は墳丘後背部の尾根南側の斜面に整形を行ない、また墳丘基底面の整地も含めて大規模に地山を整形している。墳丘後背部の馬蹄形の周溝は高さ３ｍ、幅８ｍにわたって掘削され、急な傾斜に仕立てている。現況では幅15ｍ以上の切り崩しが見られるが、東側は古墳築造に直接伴うものではないと考えられる。周溝東側はSO－002の周溝を切って古墳前方へ続くと考えられるが、古墳前方部分が崩れているために不明である。馬蹄形溝西側は古墳墳丘南側に延び、後背部斜面と区画するように延びる。いずれも古墳前方部の削平が著しいため、本来の形状は不明である。古墳基段面の整形は検出した基段面に傾斜が残ることから斜面に沿って表土を剝ぎ取るのみとみられ、基底面は周溝で区画された円形の台状を呈する。基底面内の比高差は80㎝である。

盛土　墳丘高は現況で80㎝～１ｍを測る。墳丘規模は主軸方向で7.0ｍ、主軸直行方向で7.3ｍ遺存する。墳丘形態は主軸直行方向に長い楕円形を呈するが、現況で墳頂が石室背部に位置することから本来の形状をとどめていない。

墳丘の土層観察によると、墳丘の構築はまず基底面付近に大きな単位の土を積んで固く締めて１段目を形成、その上にやや細かい単位の土を積んで締めて２段目とし、その上層で大きな単位の土を積み上げて墳丘を整形する。１、２段目は固く締まり、３段目は締まりが弱い。石室側壁石積みとの対応は１段目が腰石上端、２段目が側壁上部、３段目が天井石及び古墳上部と見られる。盛土土質は褐色土を基本とし、粘質土を主とするが、いずれの層も周辺の地山土を用いたものと考えられる。

外護列石　墳丘東側と石室前面に１段の外護列石が認められた。墳丘東側の外護列石は２重に構築され、外側の列石ははＣトレンチ付近から墳丘外側線に沿って古墳前面に延びるが、東側端部は本来の石積みが崩れ、石材が散乱している。内側の列石は前面から直線上に中軸方向にのび、石室奥壁東側付近まで巡る。使用する石材は内側の石材と全面の石材がほぼ同じ大きさで、外側の列石石材はやや小さめの石になる。前列・内側の列石と外側との列石の区別が明瞭なことから、まず前列・内側の

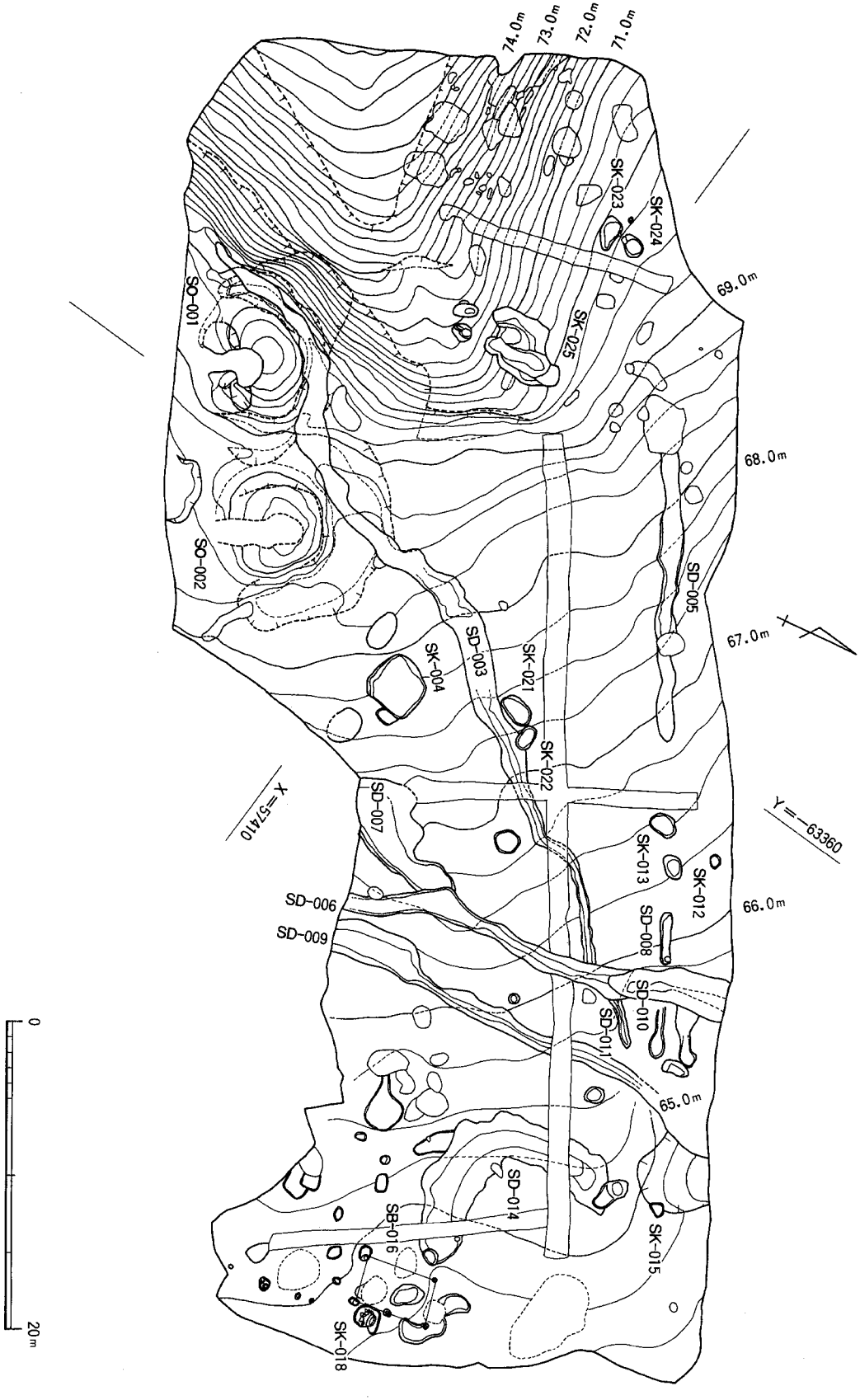


Fig. 1　6区遺構配置図（1／400）

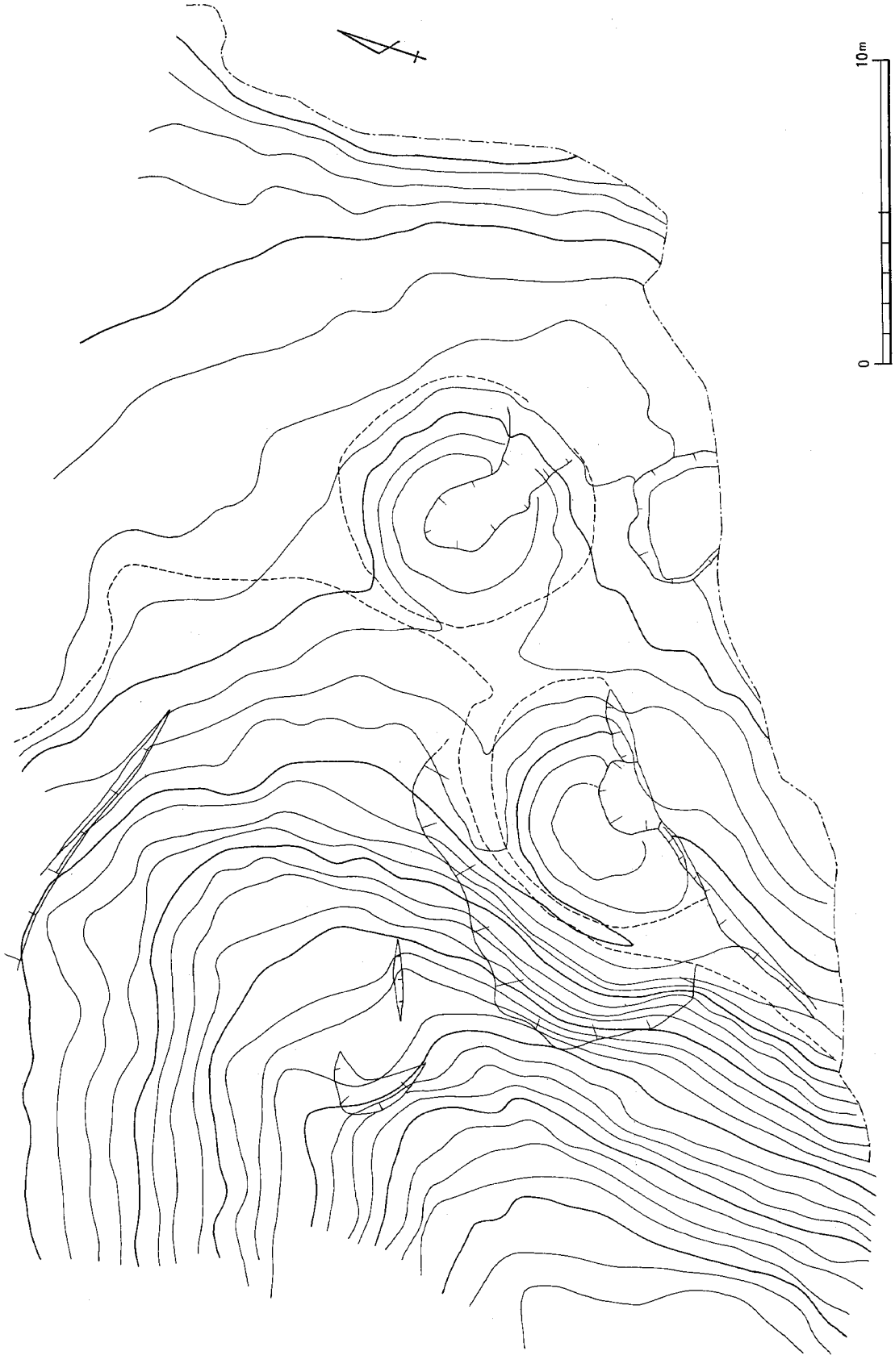


Fig. 2　SO－001、002 現況図（1／200）

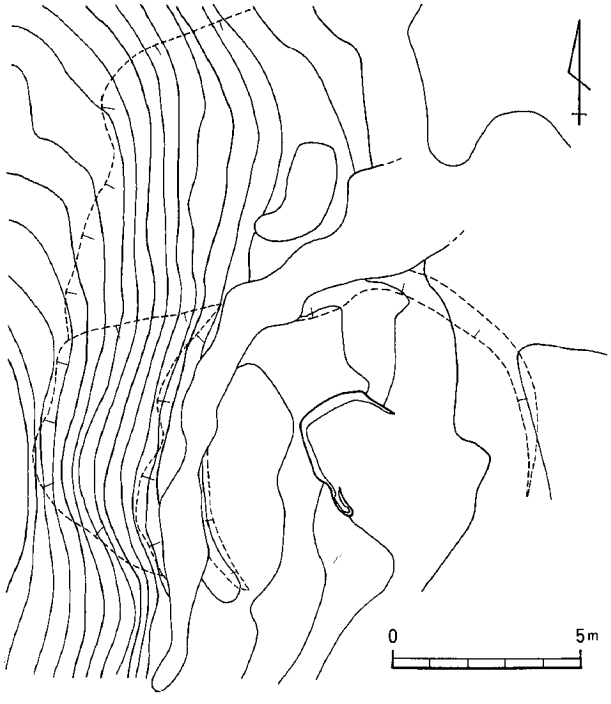


Fig. 3　SO－001 地山整形図（1／200）

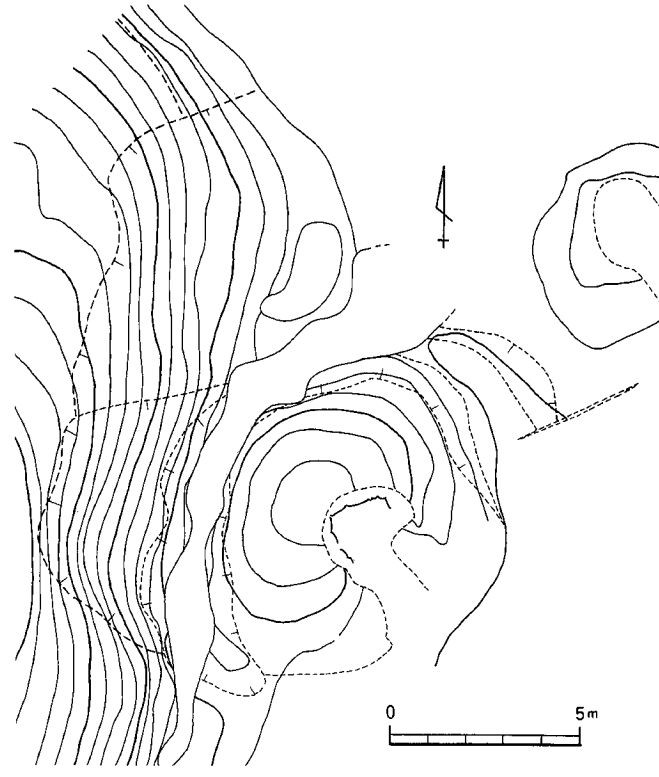


Fig. 4　SO－001 墳丘実測図（1／200）

列石を配して土止めとして墳丘内側を構築し、その後外側の列石を配して墳丘外側を構築したと推定される。墳丘西側の外護列石は、前面の列石はすでに失われ、側面に2列の列石が残る。これらはいずれも残存長2m以下で遺存状況が悪いが、列石の方向から見て、東側内側の列石と同じ様相だった

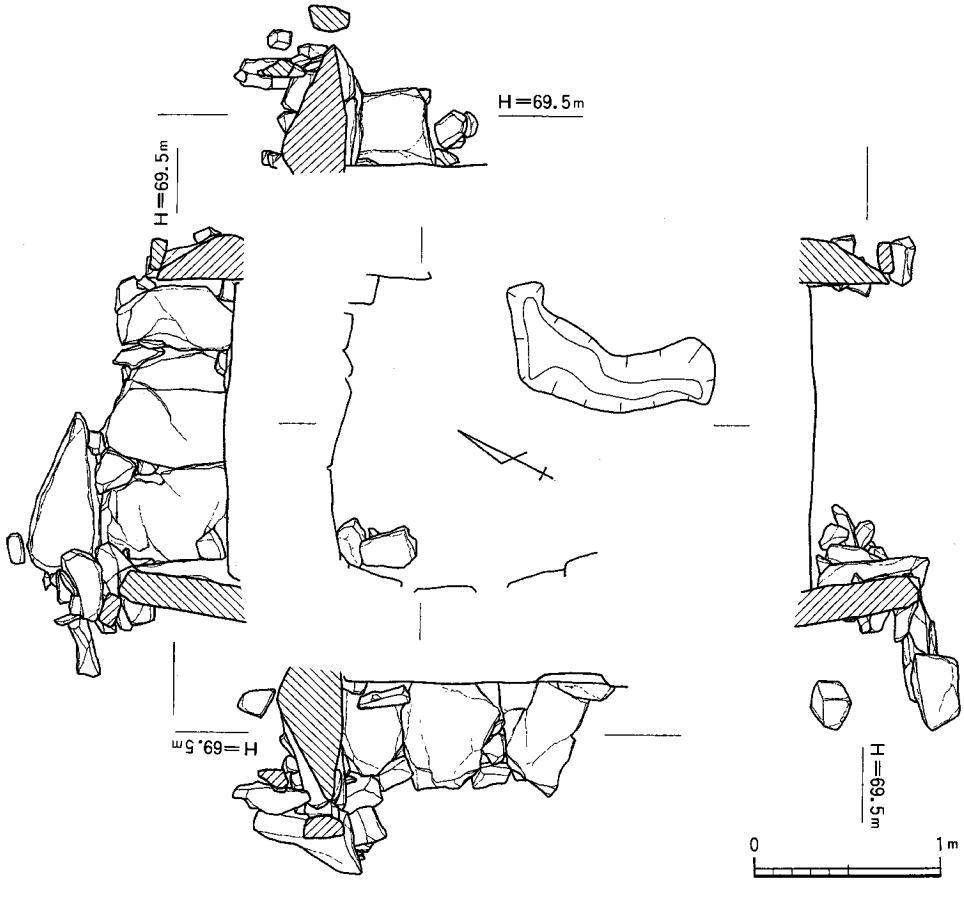


Fig. 5　SO－001 石室実測図（1／40）

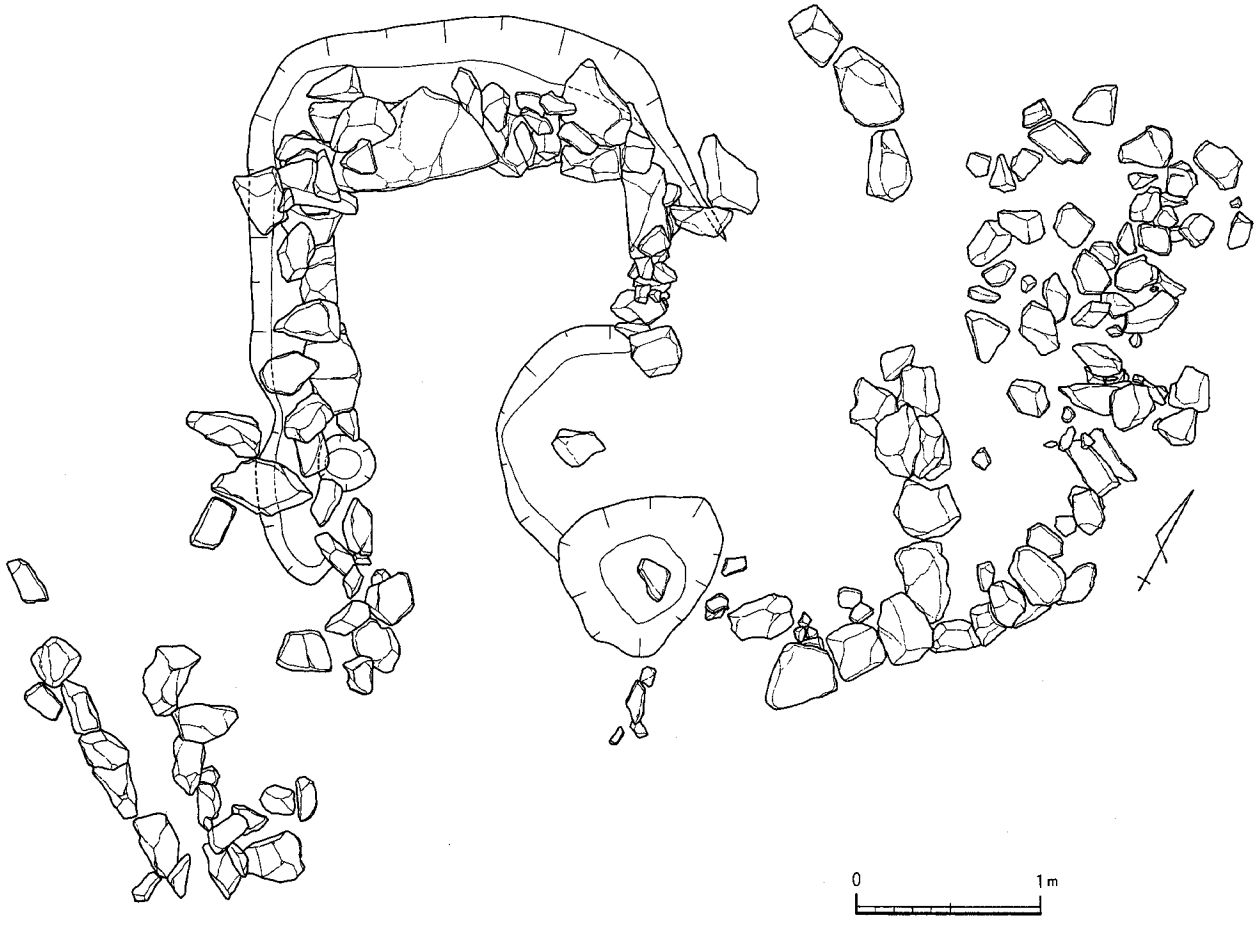


Fig. 6　SO－001 石室外護列石伏観図（1／40）

と推定される。東西の列石が石室中軸に対して左右対象でないのは地形の影響によるものと見られ、旧地形にあった墳丘構築にあわせた石列の配置になっている。

埋葬施設　墳丘と同様、埋葬施設も遺存状況は良くない。石室主軸はN－27°－Wで、内部主体は横穴式石室である。片袖と考えられるが、はっきりしない。

石室掘り方　墳丘基段面が斜面であることから、石室掘り方も墳丘のⅡ区部分で深く、Ⅳ区部分で

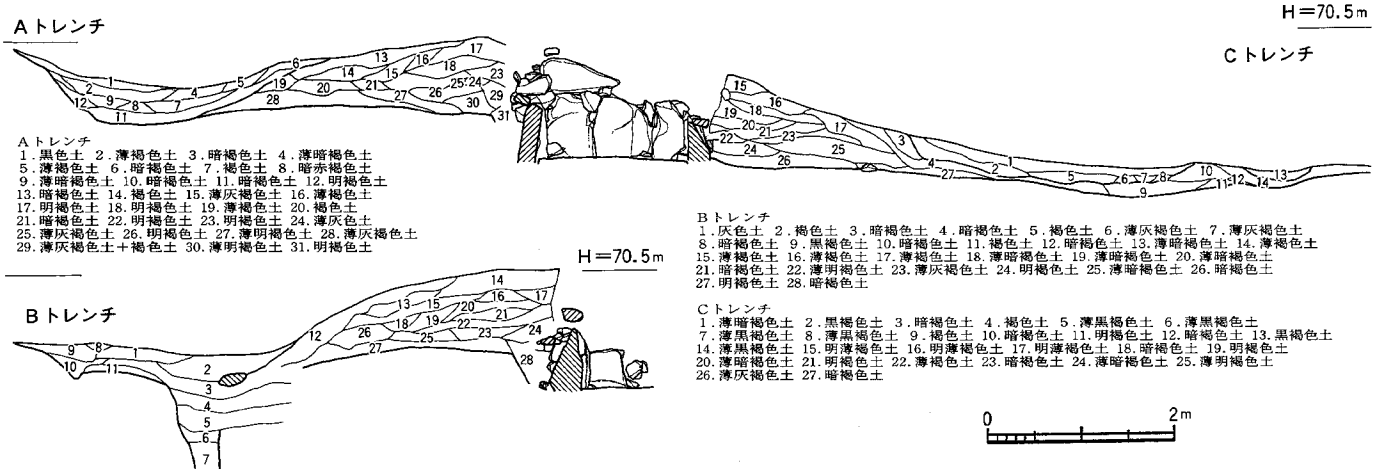


Fig. 7　SO－001 墳丘土層断面図（1／80）

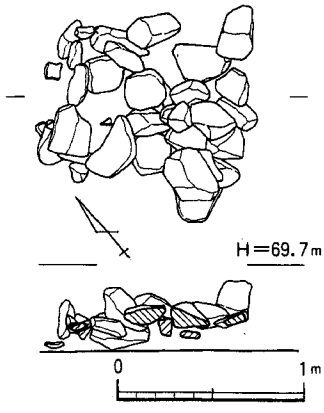


Fig. 8　SO－001 閉塞石実測図（1／40）

は浅くなる。掘り方は幅2.4m、深さ50cmを測る。Ⅳ区での掘り方が浅いことから、掘り方全体の形態はテラス状になる。

玄室　石室左前側壁を欠き、正確なプランは不明である。ただ前側壁があったと推定される箇所に浅い落ち込みがあり、この部分を本来腰石があった地点と想定して、以下説明する。玄室全長1.0m、幅1.6mを測り、横に広い小型のプランを呈する。側壁は各方向とも腰石のみ遺存し、奥壁左側から左側壁にかけて2段目以上が遺存する。敷石はない。奥壁は3枚の石材を並べて腰石とする。腰石上端レベルは床面から60cmの高さで目路を揃え、石材の間隙は小石を用いて上端が平坦になるようにする。左奥壁の2段目の積み石は高さ40cm、幅80cmで、他の側壁の2段目もこれに準じると考えられる。左側壁は腰石を3枚使用して構築し、奥壁の腰石上端とほぼ同じレベル高である。右側壁は腰石1枚のみが遺存する。腰石上端レベルは40cmで他の側壁よりも若干低い。

羨道　玄室と羨道のあいだに梱石の様な明確な区画はなく、また羨道両側壁が崩れているので正確なプランはつかめないが、1.5～1.8mの長さで存在したとみられる。幅は推定で約80cmとみられる。床面はほぼ平坦で、羨道部分と玄室床面とのレベル差はほとんどない。

閉塞施設　羨道部に、閉塞石の石積みの痕跡と思われる集石を検出した。検出時で幅80cm、長さ1.2mの範囲で20～40cm大の石が1、2段で散乱しており、閉塞石の基段部分とみられる。

出土遺物　1～3は羨道部出土。1は口径12.2cm、口縁部で軽く屈曲する。2は口径9.0cm、器高2.3cm。受け部の立ち上がりが短い。3は杯身で口径16.7cm、器高3.5cm。4～7はⅢ区周溝出土。4は口径9.4cm、最大径11.4cm。5は杯身で口径10.0cm。6は杯蓋で口径8.9cm、器高2.6cm、最大径11.4cm。7は杯身で口径10.0cm、器高4.6cm。5、7は胴部に沈線を施文する。8は杯蓋で、口径8.8cm、器高2.3cm、最大径11.3cm。9はCトレンチ出土で、口径10.0cm、胴部に2本の沈線を入れる。10、11は土師器。10は杯とみられ、口径16.8cm。外面は丹塗。11は甕底部と考えられる。底径16.5cm。

SO－002

位置・現況　SO－002はSO－001の西側に近接して位置し、尾根南側斜面から少し下った緩斜面上に位置する。墳丘基底面、周溝部分で尾根部分にかかる箇所はなく、築造にあたって大規模な地山整

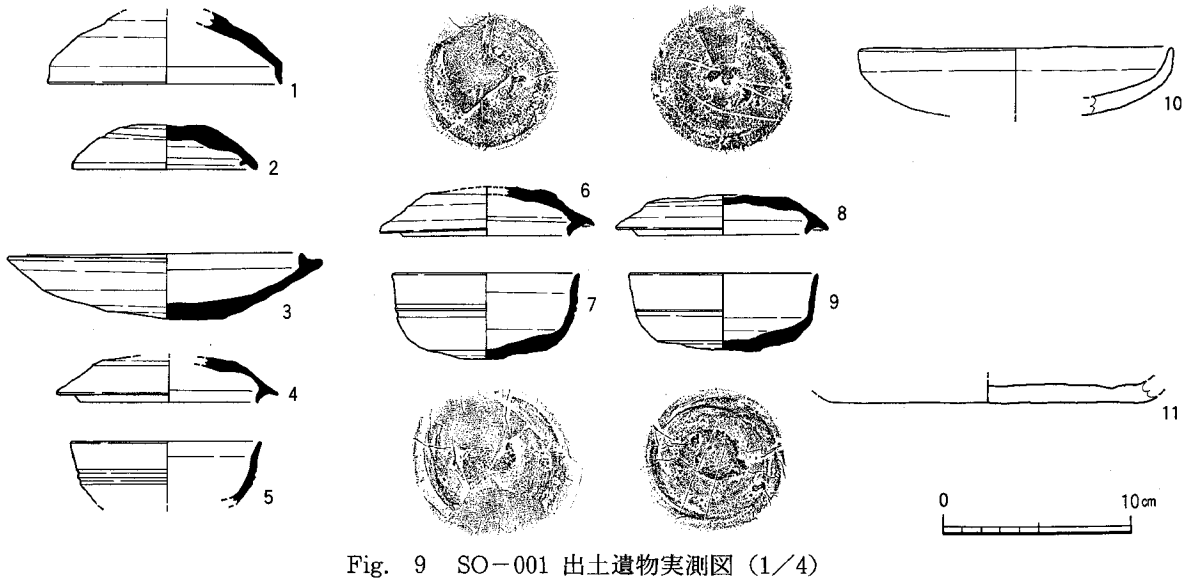


Fig. 9　SO－001 出土遺物実測図（1／4）

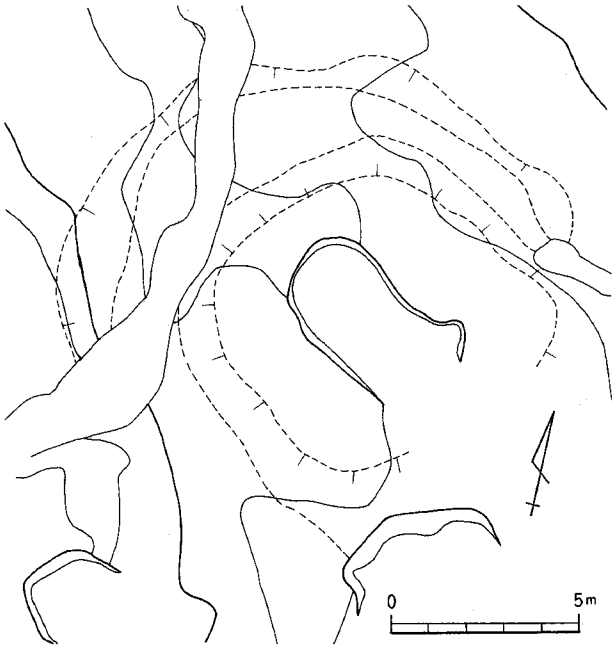


Fig. 10　SO－002 地山整形図（1／200）

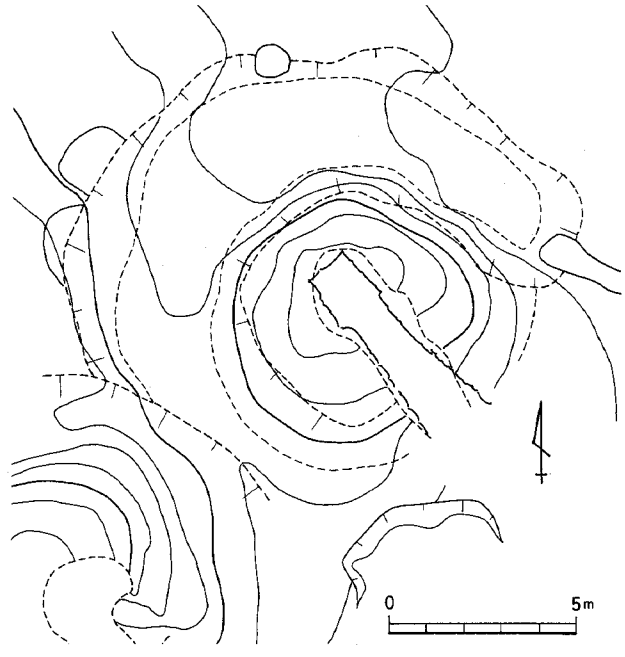


Fig. 11　SO－002 墳丘実測図（1／200）

形の必要ない地点を選地したと考えられる。また周溝西側をSO－001に切られており、前後関係でSO－002がSO－001より古いことが判っている。墳丘は上部を流出しているが、平面形は完全に遺存していると考えられる。周溝は西側と南側で破壊され、旧状をとどめない。石室も天井部を失い、側壁も完全ではないなど遺存状況は悪い。

地山整形　SO－002の墳丘築造に伴う地山整形は、周溝の掘削と、墳丘基底面の整地に大別できる。周溝は、古墳周囲の幅直径13mの範囲で掘削され、検出時で東側で幅2.5m、西側で幅4.0mと比較的広い。溝断面形は浅い皿状になり、床面は平坦面を呈する。周溝は東側はCトレンチ南側で止まり、西側はSO－001に切られて不明である。

墳丘基段面は長さ7.5m、幅7.2mの範囲の略円形の台状を呈して整地されるが、整地面内の比高差が60cmと傾斜をもち、周辺の斜面の傾斜と斜度、傾斜方向がほぼ一致することから、整地は斜面に沿って表土を剝ぎ取るにとどまるものと考えられる。

盛土　墳丘高は現状で基底面から60cmを測るが、本来はさらに高いと見られる。墳丘規模はAトレンチで墳丘端部まで4m、Bトレンチで2.3m、Cトレンチで3.2mを測り、墳丘直径は7.5mとみられる。主軸方向と主軸直行方向はほぼ同径であり、平面プランは築造時の様相を大きくかえていないと考えられる。

墳丘の土層観察では、墳丘の構築はまず1段目として大きな単位の土を積んで固く締めた層を形成し、墳丘中位に細かい単位の土を積み上げて締めていく。その後墳丘上部に大きな単位の土を積み上げる工法をとっており、墳丘中位の盛土は石室側壁の構築に沿って石の安定を測ったことがBトレンチの土層観察から伺える。盛土土質は褐色土～暗褐色土を主とし、周辺地山土を用いている。

外護列石　石室前面と墳丘東側で外護列石を検出した。墳丘東側の外護列石は3列並び、最も外側の列石は墳丘基底面付近のレベルで組まれ、古墳前面からCトレンチ付近まで延びる。石の組み方は粗く、使用する石材も揃わない。2列目の列石は1列目の列石の上位約30cmに位置し、平面プランでは2つの列石はほぼ重複するが、接することはない。2列目の列石は石室前面から石室右奥壁裏まで延びる。石の組み方も3列のなかで最も整っており、石の面を揃えて配する。最も内側の列石は石室

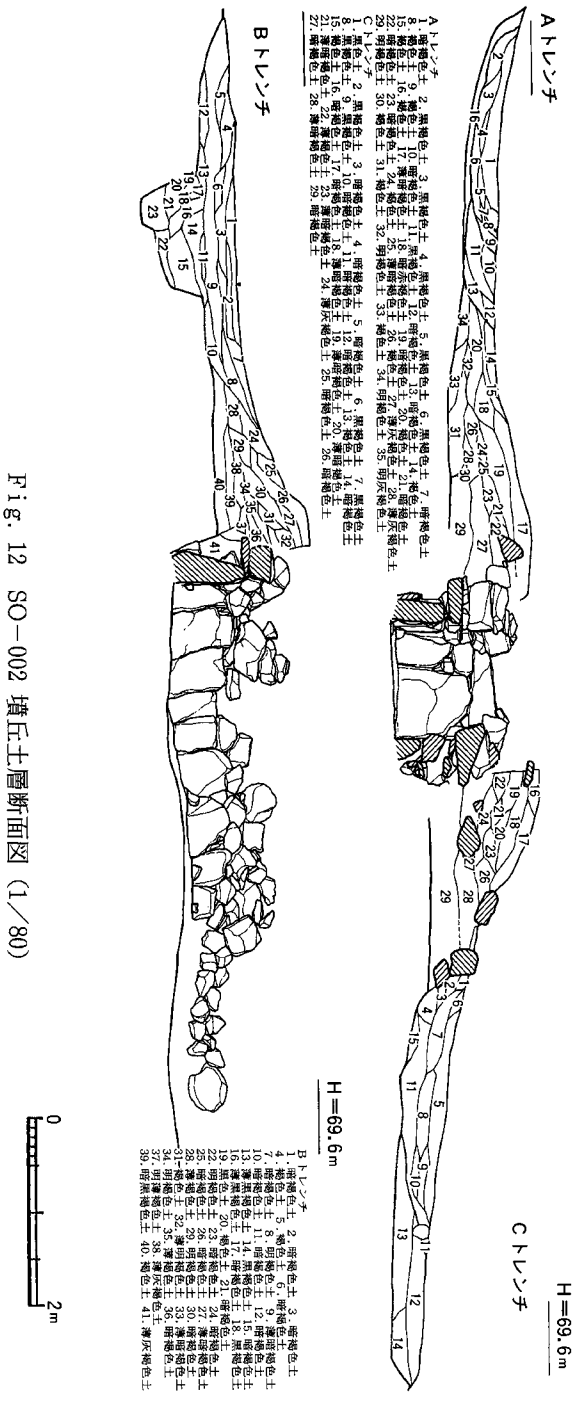


Fig. 12 SO－002 墳丘土層断面図（1／80）

右側壁裏付近で、石列自体は崩れ、集石状になって延びる。3列のなかではもっともレベル高が高く、基断面から60cm上方である。

古墳前面の列石は羨道部の中途から左右に広がり、側壁と同様に3～4段の石積みで構成されるが、積み方は粗く、目路も通らない。

埋葬施設　埋葬施設は、玄室の天井部が完全に失われ、側壁も上半分が欠けるなど、遺存状態は良くない。石室主軸はN－43°－Wで、内部主体は横穴式石室である。

石室掘り方　墳丘基底部が西から東に落ちる斜面になっており、石室掘り方も西が深く、東では浅くなっている。掘り方は石室部分で幅2.6m、墓道まで含めた長さ8.4m、深さは西側で60cm、東側で40cmを測る。掘り方全体は溝上になり、南側墓道入り口付近で斜面に自然につながる。

玄室　平面プランは両袖と思われるが、袖石の張り出しが非常に小さく、無袖の感がある。玄室長1.7m、玄室幅1.38mで、やや縦長の長方形プランで羨道側がわずかに広がる。敷石は見られない。奥壁は2枚の石材を腰石とし、栗石を用いて上端を揃えている。腰石の上端レベルは石室床面から80cmである。左側壁は4枚の石材を用いて腰石としており、2段目に小さめの栗石を据えているが、2段目以上は積みが乱れる。右側壁もほぼ同様で、4枚の石材を使用して腰石とし、2段目以上は小石を積み上げている。各壁とも上半部分は崩落しており、詳細は不明である。

羨道部　上述のように袖石の張り出しが小さく、梱石なども存在しないため羨道部分の区画が明瞭ではない。羨道長3.7m、幅は玄室側で1.1m、墓道側で1.6mで墓道側に直線的に緩く開く。床面は奥壁から3.8mの地点までは緩く上がり、そこから墓道側に緩く落ちる。羨道部分の比高差は20cmである。羨道左側壁は奥壁から3.6mの地点までは袖石を含めて5個の石材で腰石を構成し、構造は玄室側壁と連続している。腰石上端も玄室側壁とほぼ同レベルで揃え、そのうえに栗石を積み上げる。羨道側壁の墓道側は腰石を設けず、栗石を直接積み上げるが、積み方は粗く、目路も通らない。右側壁もほぼ同様で、腰石の構造などは左側壁と対照する。

閉塞施設　奥壁から2.5mの地点から4.1mの地点まで、閉塞石と見られる集石が検出された。範囲は全長1.6m、幅1.2mで、20～40cm大の石を密に積み上げている。検出時の高さは50cmを測り、実際にはさらに高かったものと推定される。閉塞基段部にはやや大きめの石を使用し、また玄室側の石の

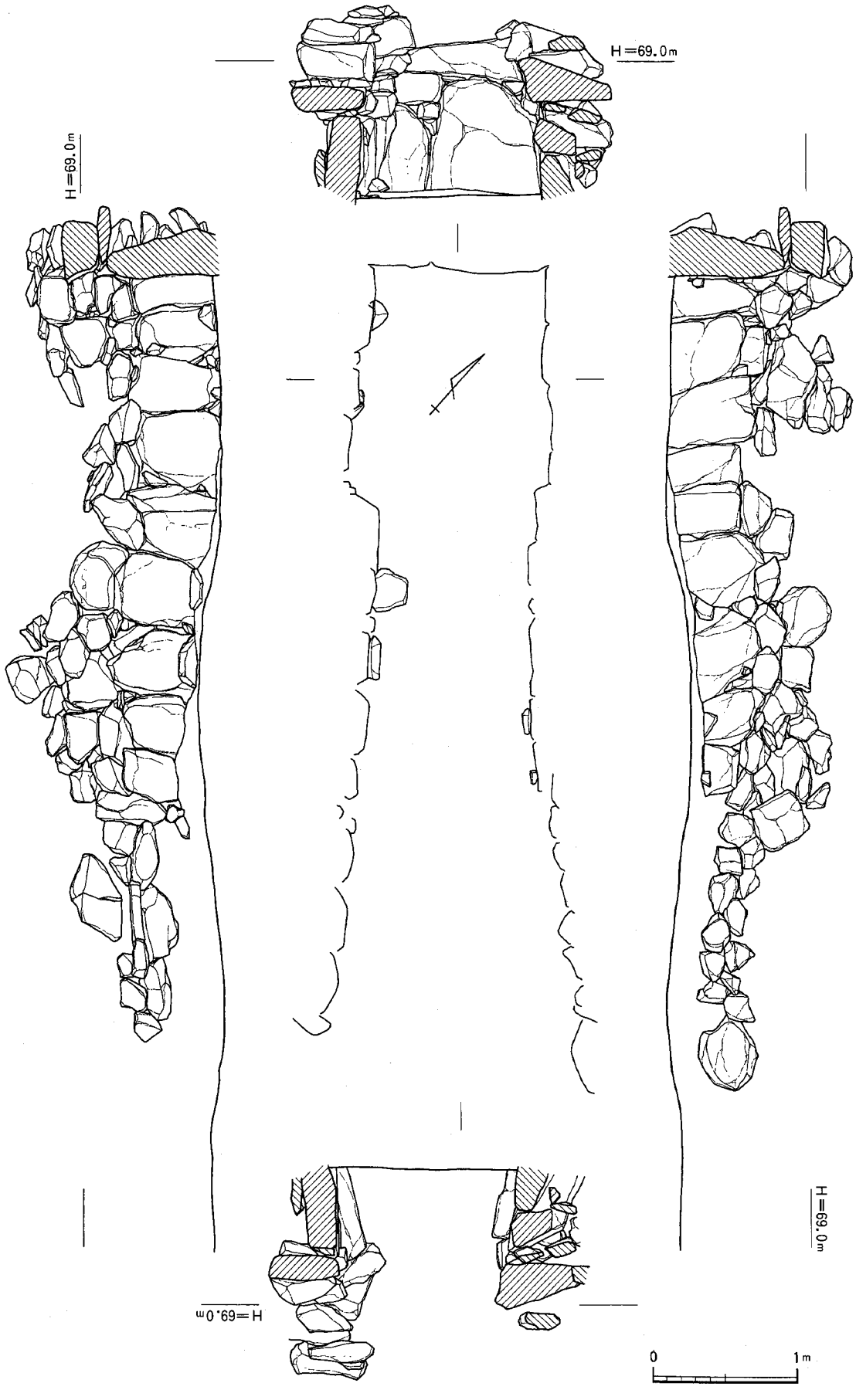


Fig. 13　SO－002 石室実測図（1／40）

Fig. 14　SO－002 石室外護列石伏観図（1／40）

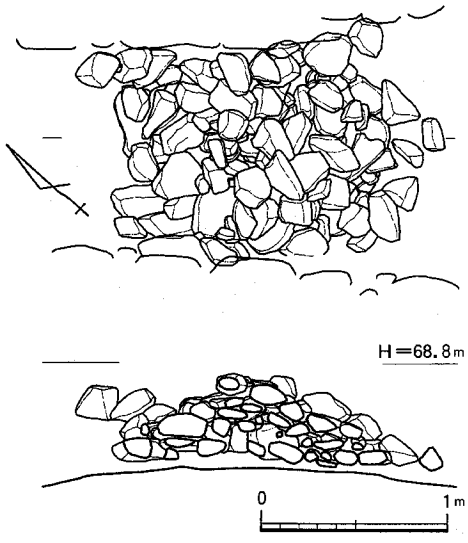


Fig. 15　SO－002 閉塞石実測図(1／40)

面を合わせるなど整然と積み上げている。

出土遺物　玄室内からは図示可能な遺物の出土は見られない。12～20は羨道下層からの出土遺物。12は杯蓋。13は高杯で、12とセットになるとみられる。受け部は内側に立ち上がり、脚部端部は下方に屈曲する。14～18は土師器の高杯で、14、17はいわゆる赤焼け須恵器。14は杯部に3本の沈線を入れ、杯部下部にカキメを施す。17は杯部下部から脚部のみ遺存する。脚部端部は外に広がる。16、18は外面丹塗りを施す。19、20は土師器鉢。21～25は中世の遺物。21～23は羨道上層から、24、25は墳丘1区表土から出土。26は墳丘4区墳丘・周溝から出土した須恵器大甕で、底部部分は細片のため接合しない。胴部最大径57.2cm。

2）掘立柱建物

SB－016　調査区東側で検出した1×2間の建物跡で、西

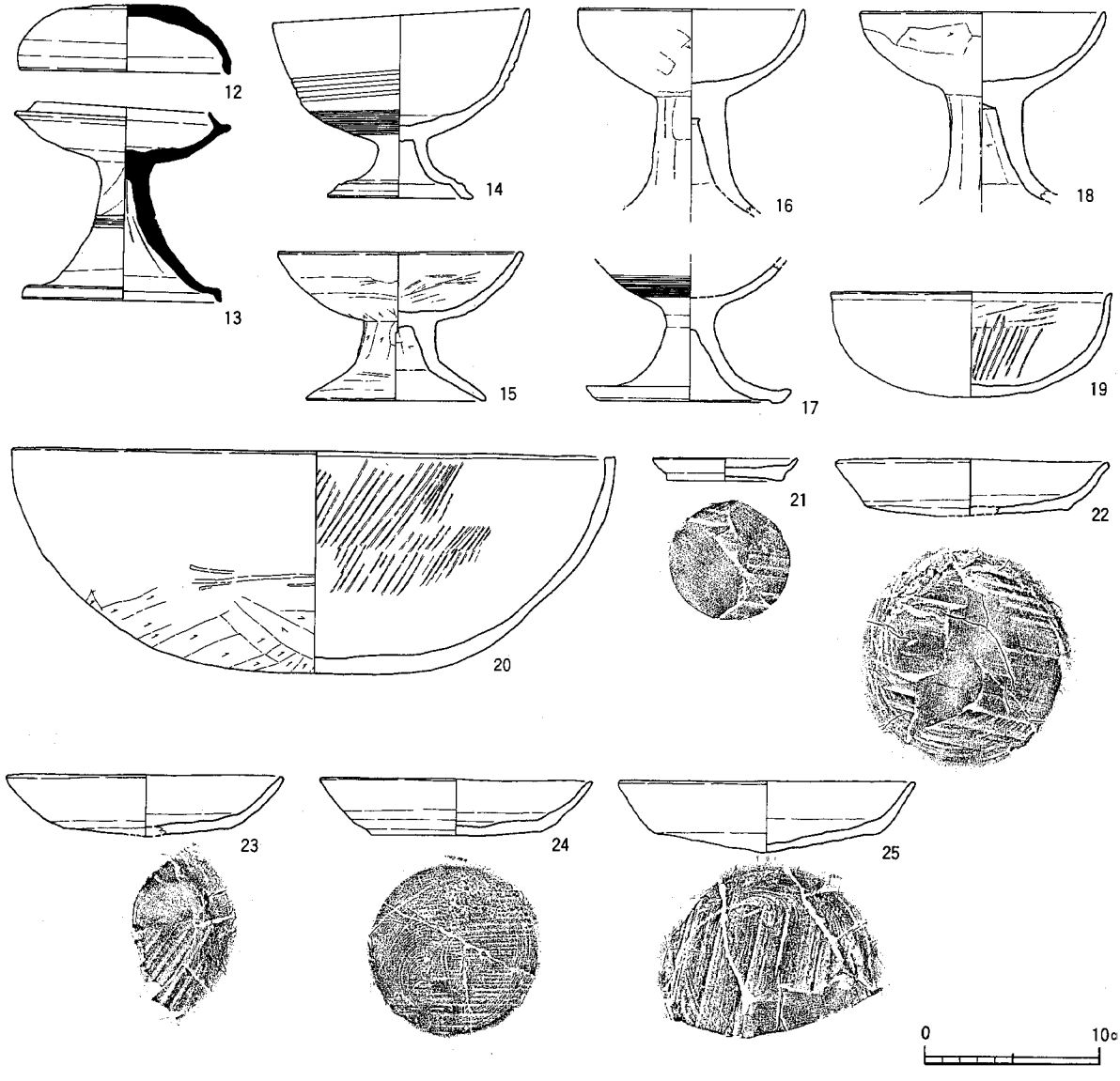


Fig. 16　SO－002 出土遺物実測図（1／4）

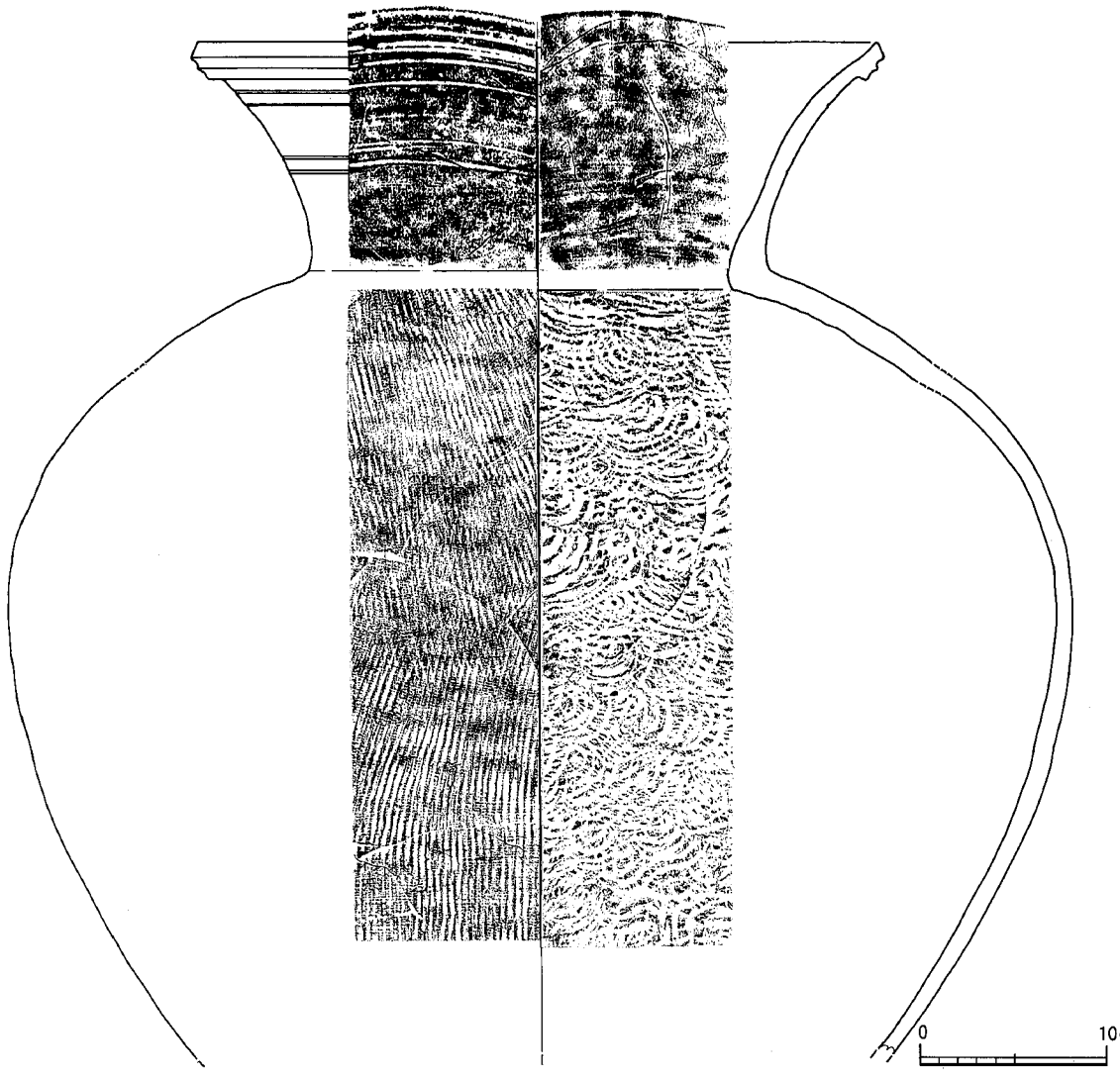


Fig. 17　SO－002 出土遺物実測図２（1／4）

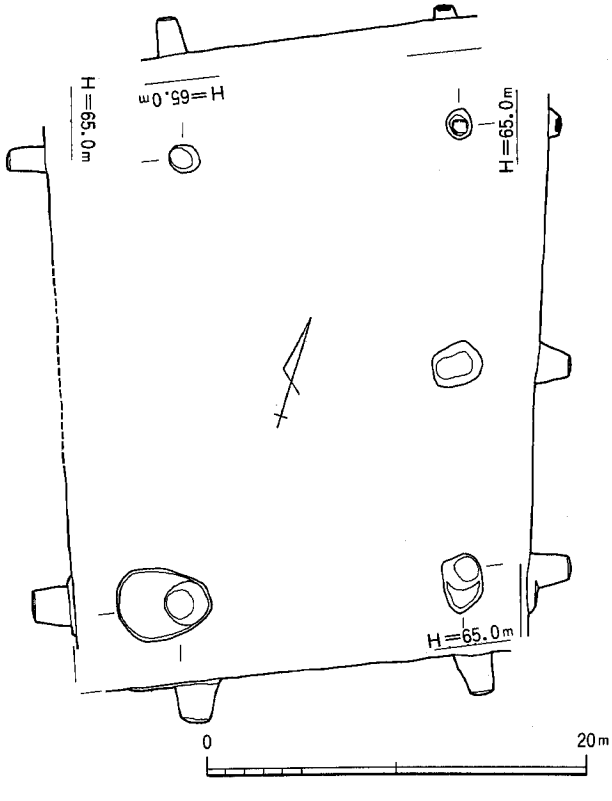


Fig. 18　SB－016 実測図（1／80）

側中央の柱穴を撹乱で欠く。主軸方向N－17°－E。桁行3.0m、梁行4.7m、柱穴直径は20～30cmとなり、床面積に比べ柱穴が細い。柱穴の残存する深さは40cm前後で、各柱穴床面のレベルはほぼ同じ高さになる。北東隅の柱穴底部には礎石と見られる板石が敷かれる。柱間の間隔が広く、柵列の可能性もある。柱穴から縄文～土師器までの遺物を検出したが、いずれも細片で詳細は不明。

３）横口付炭窯

SK－025　調査区西側尾根部分の北側斜面で検出した、横口を１基もつ横穴式炭窯である。遺構全長7.5m、全幅4.3m。うち窯主体部5.9m、窯主体部幅5.7m。現況では焚口部、窯本体、煙道部、横口部がほぼ完全に遺存するが、窯本体の天井部は煙道部に近い部分のみ遺存する。窯本体は地山をくりぬいて築造しており、断面形は蒲鉾形を呈する。天井部、壁面、床面には粘土を貼った痕跡はなく、地山土が強い被熱を受けて硬化した状況が見られ

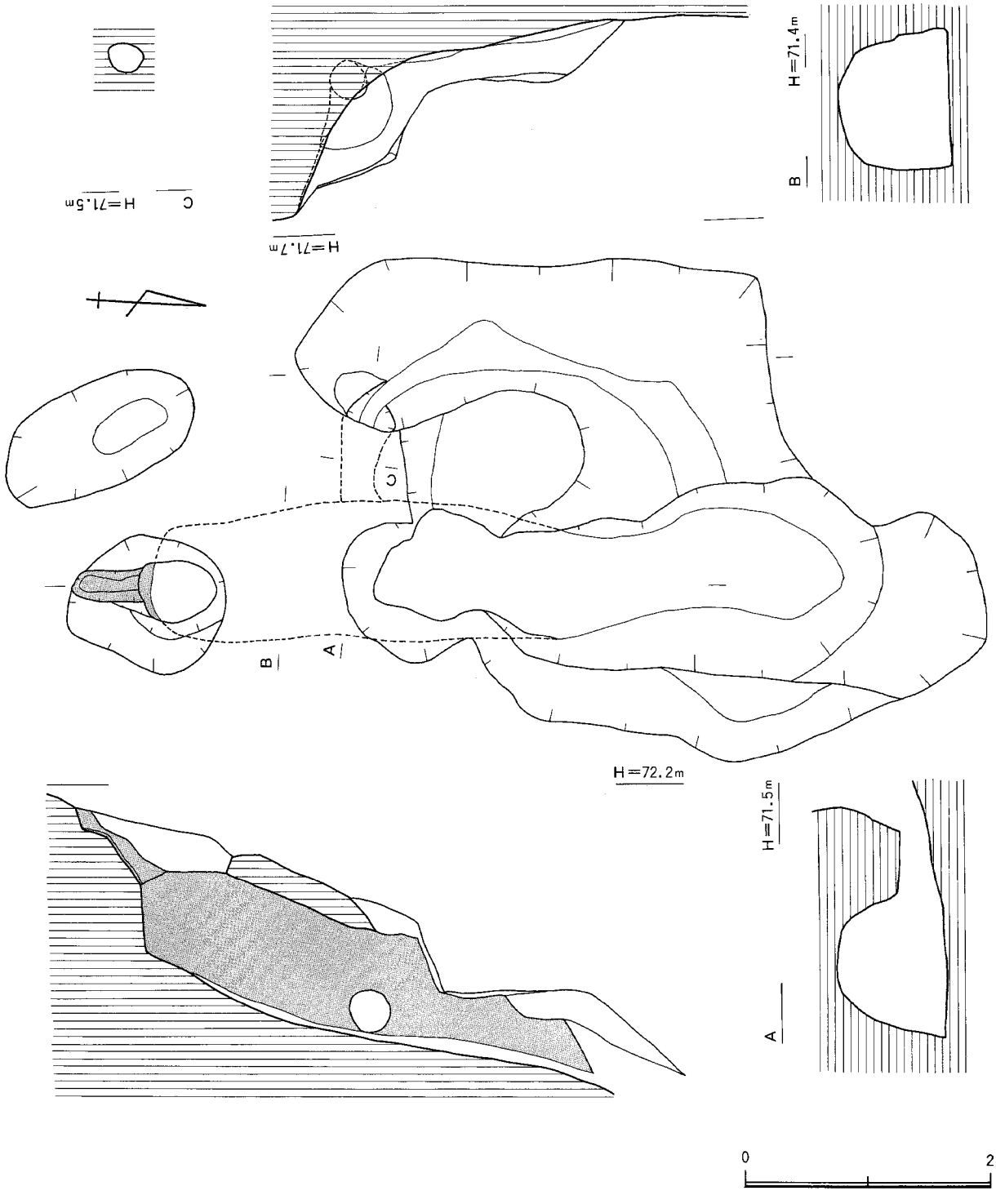


Fig. 19 SK－025 実測図（1／50）

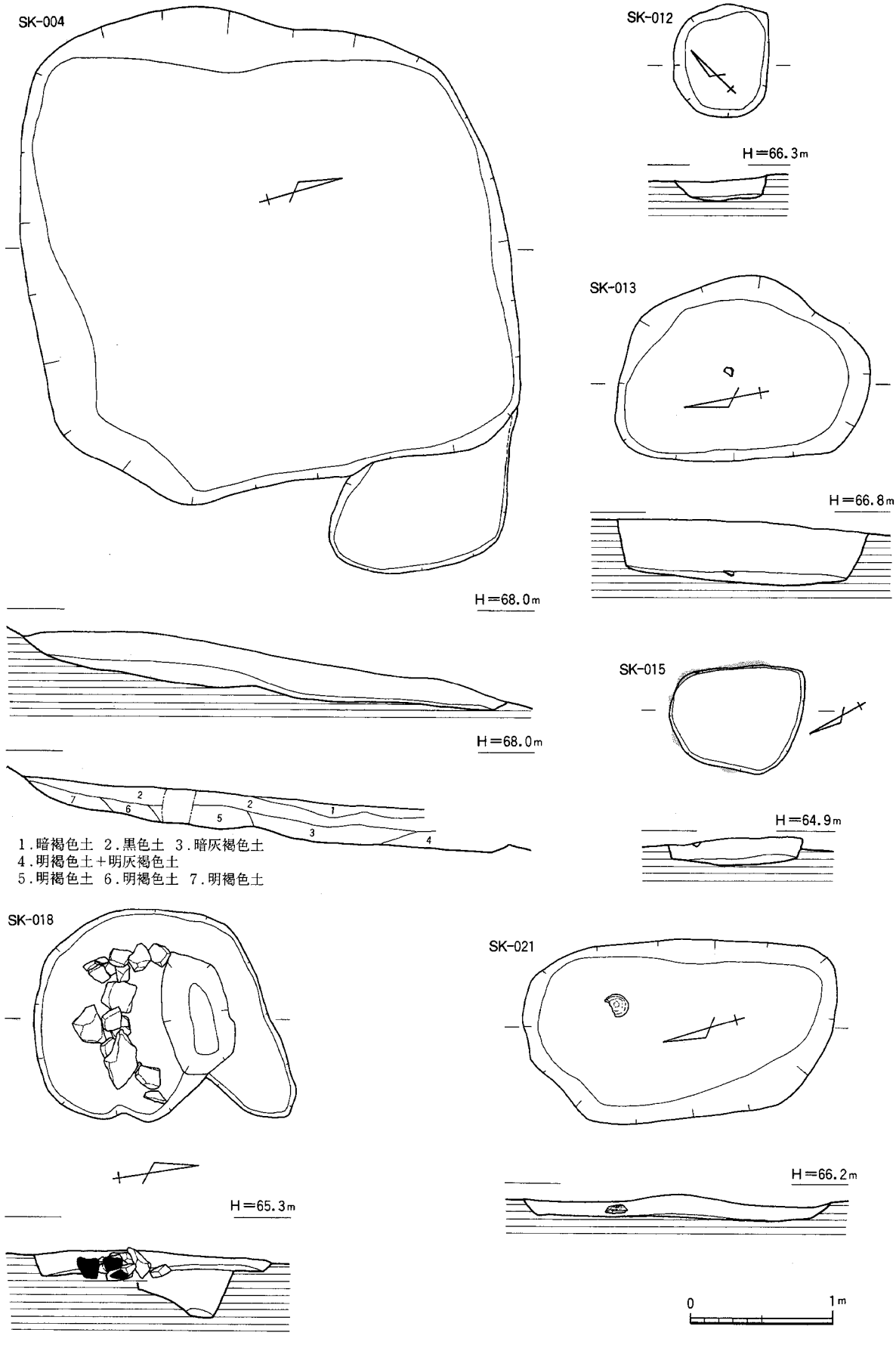


Fig. 20　6区遺構実測図1（1／40）

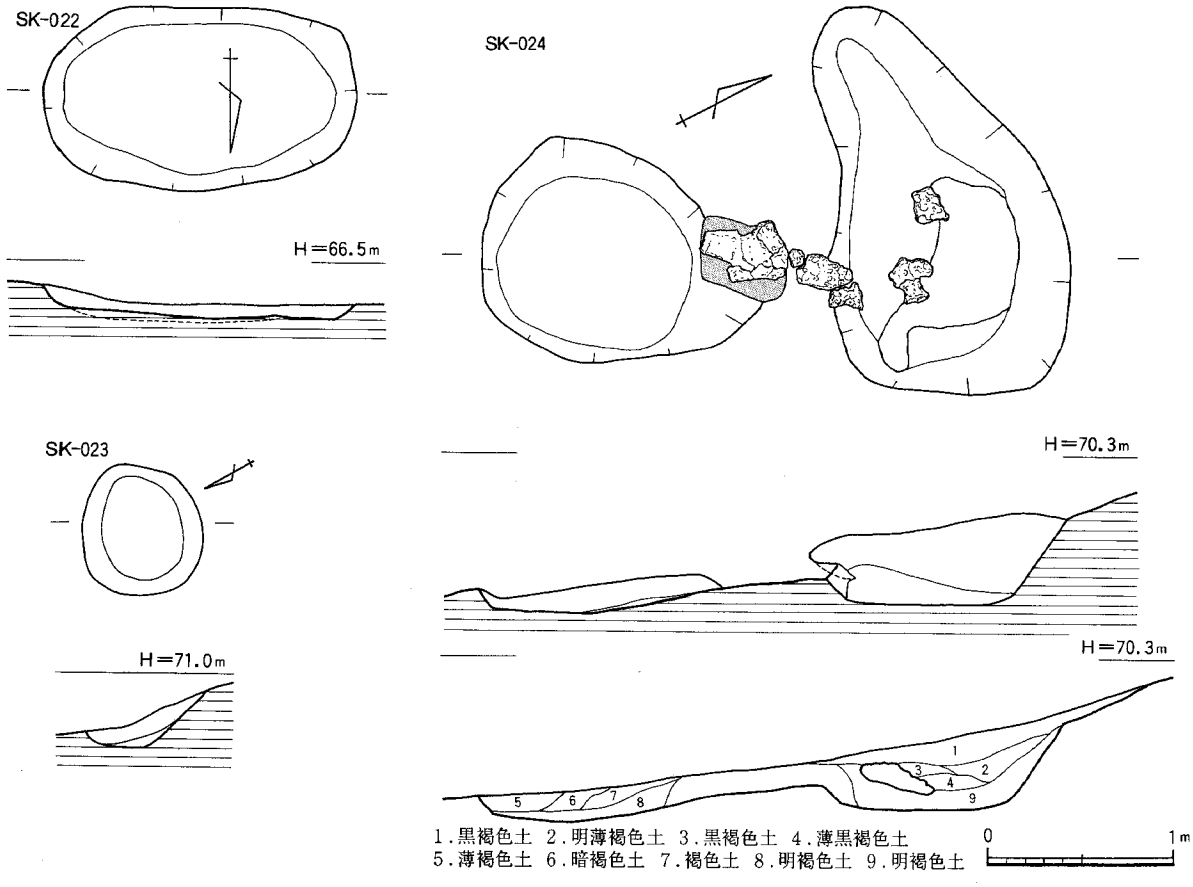


Fig. 21　6区遺構実測図2（1／40）

る。本体内に堆積した覆土は全く締まりなく、煙道からの流れ込みによる自然堆積である。また炭化物葬は本体内には床面直上に厚さ1cm程度遺存するのみである。煙道は窯本体奥壁上部に取り付けられ、強く被熱している。横口は本体の中央部から直交して掘削され、直径30～40cmを測り、内部は強く被熱する。横口出口から焚口部分にかけて溝が掘られるが、この溝の用途が排水用あるいは作業場として想定できるかは明らかではない。

この炭窯の下方に隣接して製鉄炉が検出されており、これとの関連が伺われる。

4）土壙・土壙墓・製鉄炉

SK－004　調査区東側の平坦面上で検出した隅丸方形の土壙。全長3.5mで、現況で深さ30cm前後である。床面は北に傾斜するが、凹凸はなく、柱穴も見られない。覆土中からは縄文土器小片が出土した。竪穴住居址とも考えられ、後述する縄文時代の遺物に伴うものである可能性もある。

SK－012　調査区東側平坦面で検出した土壙で、全長80cm、幅68cm。覆土中に炭化物を多く含み、焼土壙であったと考えられる。

SK－013　調査区中央に位置する土壙墓。平面形は楕円形で、全長1.8m、幅1.3m、深さ45cm。床面は平坦で壁はほぼ直に立ち上がる。

SK－015　調査区東側で検出した焼土壙で平面形は台形を呈する。全長94cm、幅78cm、深さ20cmを測る。床面は平坦で、周壁は直に立ち上がり、強く被熱する。

SK－018　調査区東端で検出した土壙で、遺構内に石組みの一部が出土した。遺構掘り方は2段掘り状になり、石組みは2段目の掘り方に切られるように遺存する。遺構の性格などは不明。

SK－021　調査区中央に位置する土壙墓。平面形は楕円形で、削平著しく、床面付近のみ遺存する。現況で全長2.2m、幅1.3m。床面は水平で、壁は緩く立ち上がる。遺構内から須恵器がほぼ完形で出土する。27、28は各々蓋、身でセットになる。

SK－022　調査区中央に位置する土壙墓。削平著しく、床面付近のみ遺存する。全長1.66m、幅98cm。床面はほぼ平坦で、壁は緩く立ち上がる。遺物は出土していない。

SK－023　調査区西側の、尾根北側斜面で検出した小型の焼土壙。円形で、直径70cm。断面は鉢形を呈し、上端にごくわずかに焼土が遺存する。

SK－024　調査区西側の、尾根北側斜面で検出した製鉄炉。遺構は中央部の炉床部分と、両側の排滓溝で一体となる。炉床部分は長さ80cm、幅40cmと推定され、北側排滓溝は長さ1.3m、南側排滓溝は長さ1.2mで、炉床部分が削平されずに遺存する。鉄滓は北側排滓溝から主に出土するが、一般的な製鉄炉に比べ鉄滓の出土量が全く少なく、総量でパンケース4箱程度である。鉄滓の量から見て、実際に操業が行なわれたか疑問である。

5）溝状遺構

調査区内で9本の溝状遺構を検出した。各遺構の性格は、中世の道路と見られるもの、後世の開墾に伴うもの、古墳周溝と考えられるものに大別できる。

SD－003　調査区を西から東に走る溝状遺構でSD－006に切られる。全長52m、最大幅1.8m、深さ80cm前後を測る。断面形は底部が平坦な箱状を呈し、壁は垂直に立ち上がる。覆土は礫混じりの砂質土で、覆土内から陶磁器細片が出土し、中世の道路状遺構とみられる。SD－011も一連のものと考えられる。

SD－005　調査区北側を東西に走る溝で、ごく浅い。暗褐色粘土を覆土とし、開墾に伴う溝と考えられる。SD－008、010も一連の溝とみられる。

SD－006　調査区東側を南北に横断する溝。尾根を横切っており、床面レベルは中央部で高くなる。道路もしくは道路に伴う側溝とみられる。断面形は半円形で、北側で急な落ち込みとなる。

SD－007　SD－006南側で分岐する溝状遺構。幅広く、断面形は箱状を呈する。SD－009に平行することから、一対のものとも考えられる。

SD－009　SD－006東側でSD－006に平行する溝、北側は遺構範囲が不明瞭になる。全長25m、幅1.0～1.8m。断面形は半円形で、覆土は暗褐色で柔らかい。床面レベルは中央ほど高くなり、両端は下がる。SD－006、007、009は方向、規模が似ており、一体だったとみられる。

SD－014　調査区東側で検出した馬蹄形溝である。全長8.5m、幅4mで、深さは最大30cmを測る。覆土中から須恵器破片が出土し、形状からみて円墳の周溝であった可能性がある。その仮定の下で、墳丘径8～9mを想定できる。墳丘想定部分には主体部痕跡を含め、遺構は存在しない。

6）縄文時代包含層

調査区東側平坦面で、縄文時代早期～前期の遺物を含んだ包含層を検出し、調査を行なった。包含層の土質は砂質土を多く含む粘質土で、出土した遺物の多くは細片である。また同様の遺物が表土からも出土している。以下、出土した遺物を土器、石器に分けて簡単に説明する。

土器　出土した土器は撚糸文土器とみられるもの、押型文土器、条痕文土器、山形文土器に大別でき、いずれも縄文早期～前期にわたる。27～33は撚糸文土器とみられるもので、主に縦方向に撚糸文を施文している。どの遺物も表面が風化しており、不鮮明である。34～58は押型文土器。いずれも楕

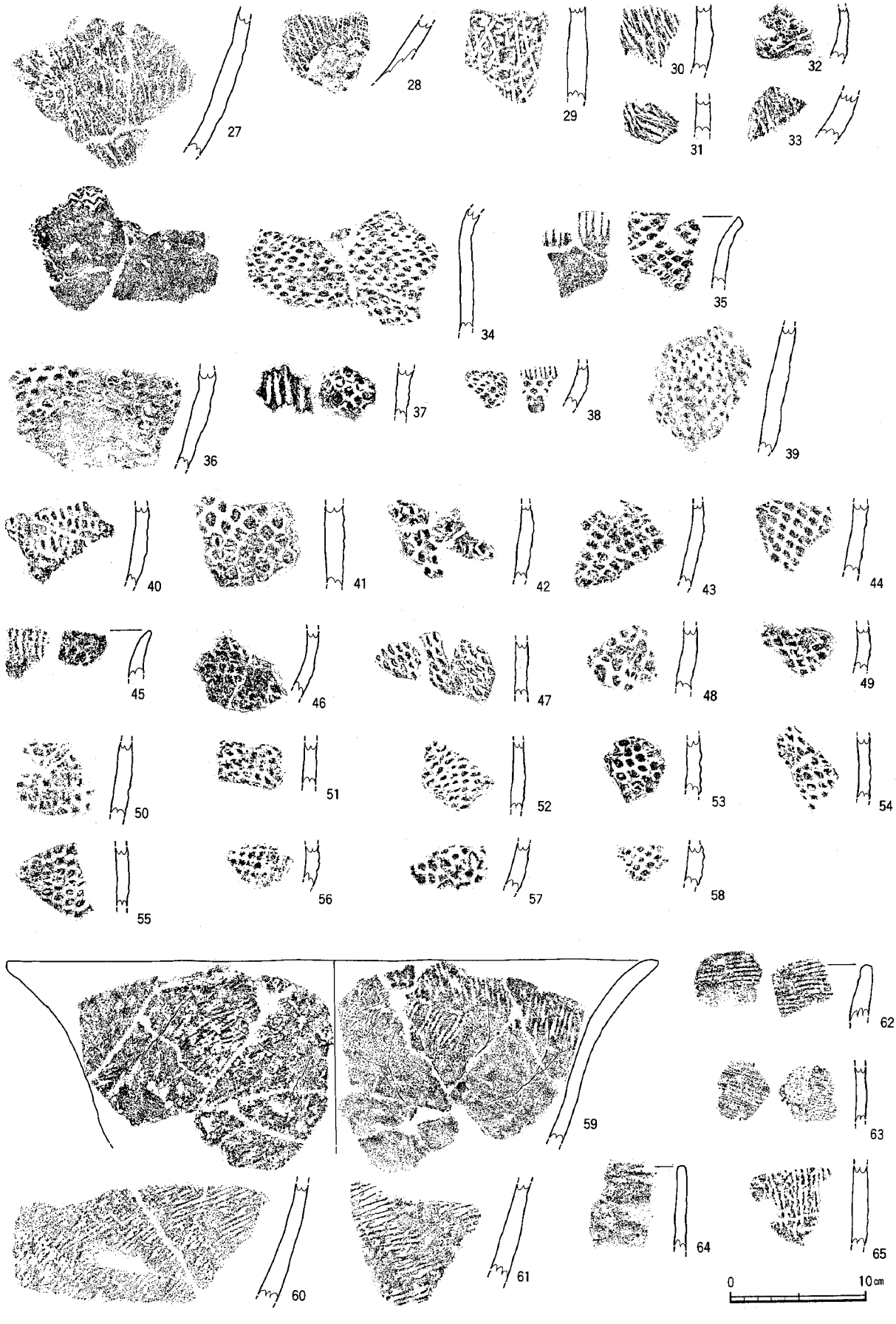


Fig. 22　縄文土器実測図１（1／4）

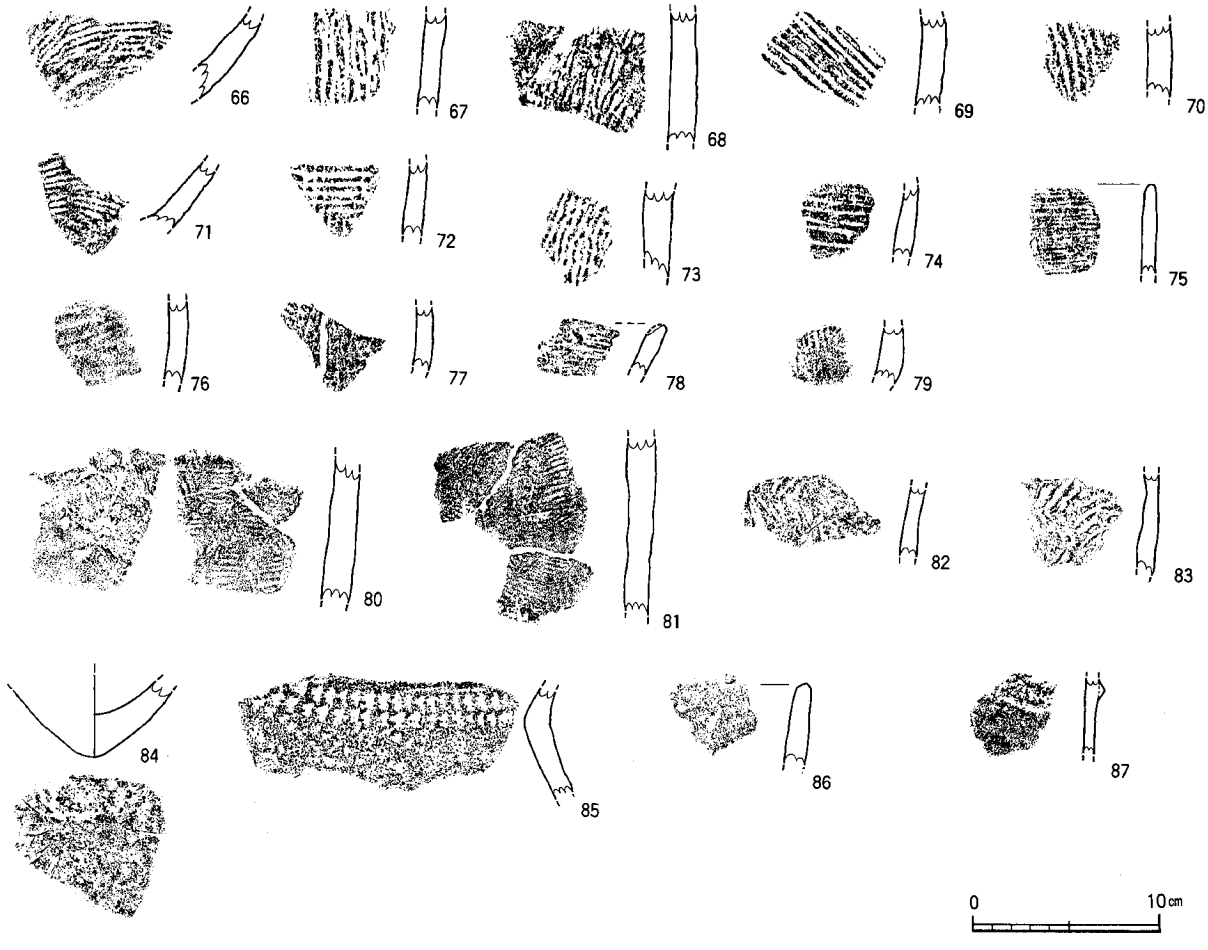


Fig. 23　縄文土器実測図２（1／4）

円形の押型文を施文し、多くが横走施文である。口縁部付近の破片には口縁端部に縦方向条痕文を施文するものも見られる。59～79は条痕文土器で、59は口縁部の比較的大きな破片で外側に大きく広がる。80～83は山形文土器。いずれも山形文を横走施文している。84～87はその他の土器で、84は底部部分で、外面は無文。85は屈曲部に列点文を2段施文する。87はミミズ腫れ状の突帯をもつが、細片で風化が著しく、詳細不明。図示した遺物の他に無文の土器も多く出土している。

石器　6区内で剥片も含めて306点出土した。出土地点は土器の出土範囲と重複し、同じ状況であったことを示す。内訳は石鏃22点、尖頭器５点、削器・掻器12点、石錐１点、楔形石器７点、石核12点、石斧３点、磨石２点、砥石２点で、残りが剥片・砕片である。 以下、石器を中心として図示する。

石鏃（Fig. 24、88～107）88～96は基部が内湾あるいは深く抉り込む。97～101は基部が平基に近い形状で、小型。100は長身で鋸歯縁をもつ。102～105は剥片鏃、106、107は石鏃未製品とみられる。

尖頭器（Fig. 24、108～112）108は平面形が三角形で両側片が直線状をなし、基部は浅く抉る。109～111は槍先形で断面が凸レンズ状を呈する。

削器・掻器（Fig. 25、26、113～121）113・114は石匙。いずれも横長で114は摘み部の幅が狭い。115～121はスクレイパー。116、117は剥片に一部加工を施す。120は一辺に明瞭な刃部を作りだす。

石錘（Fig. 26、122）石核転用とも考えられる。先端部は細かい剥離を行なって整形する。

楔形石器（Fig. 26、123～128）両面に加工を加えたもの、片面に主要剥裏面が残るもの、両面に

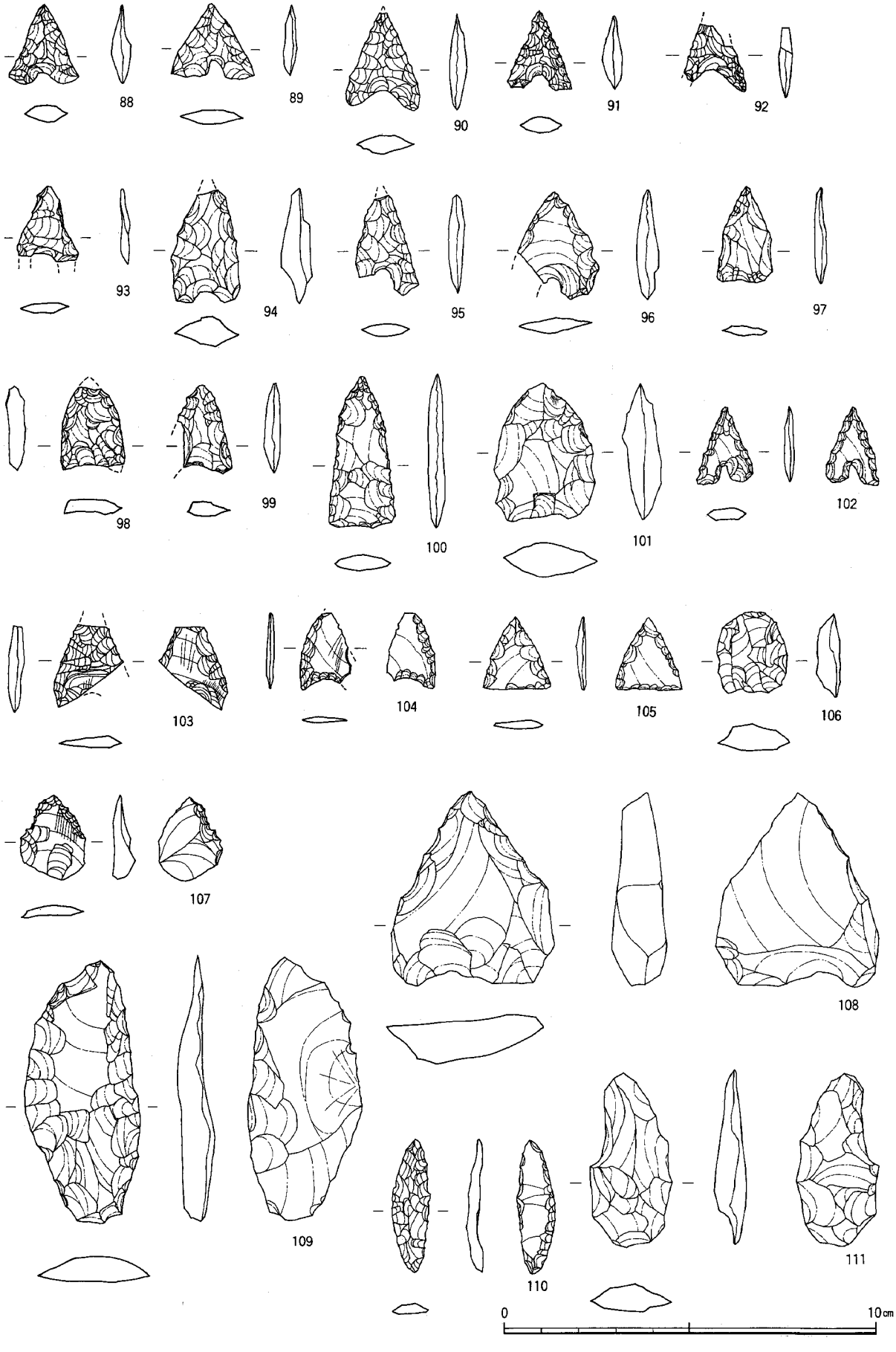


Fig. 24　石器実測図１（2／3）

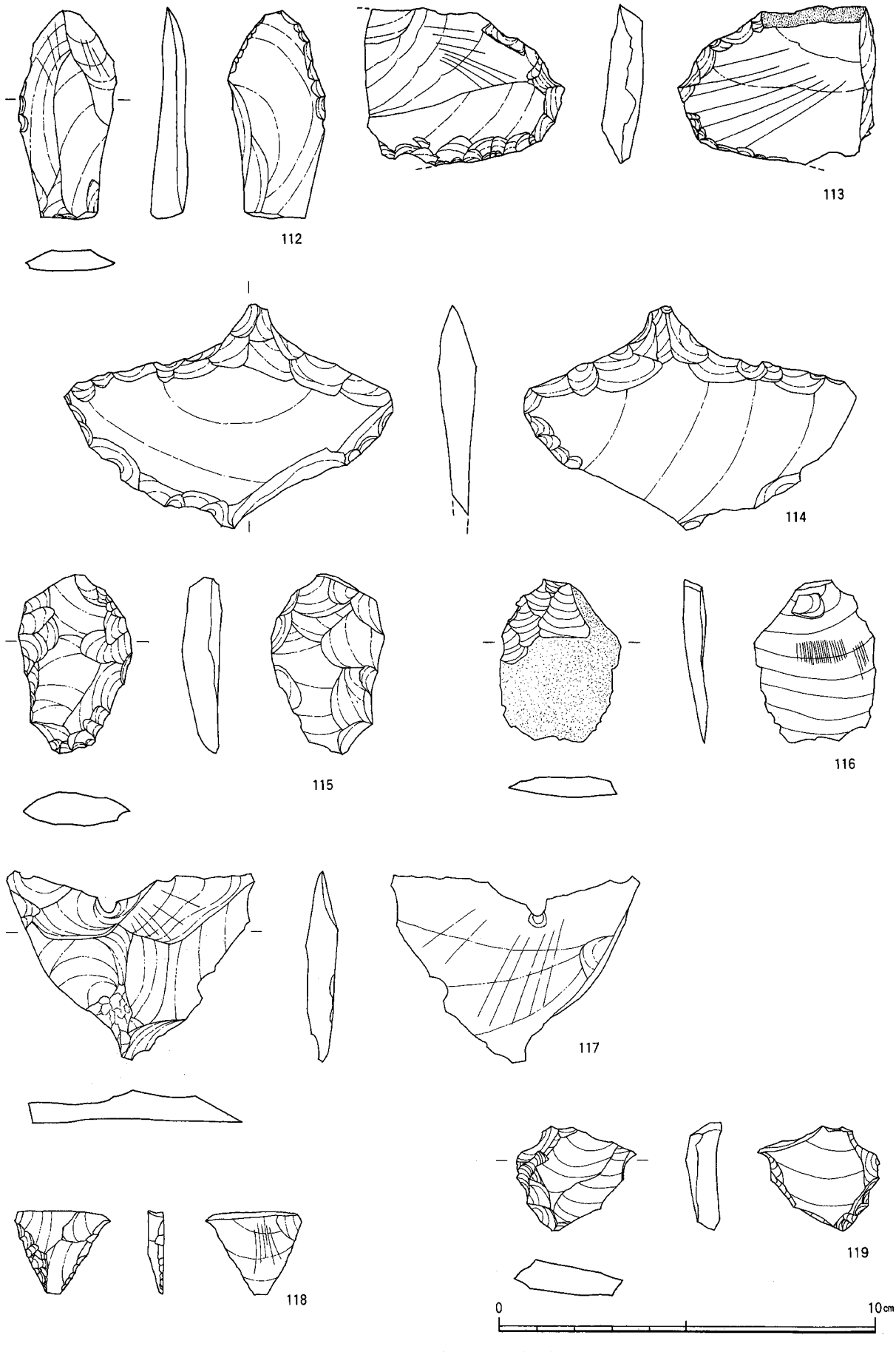


Fig. 25　石器実測図 2 (2／3)

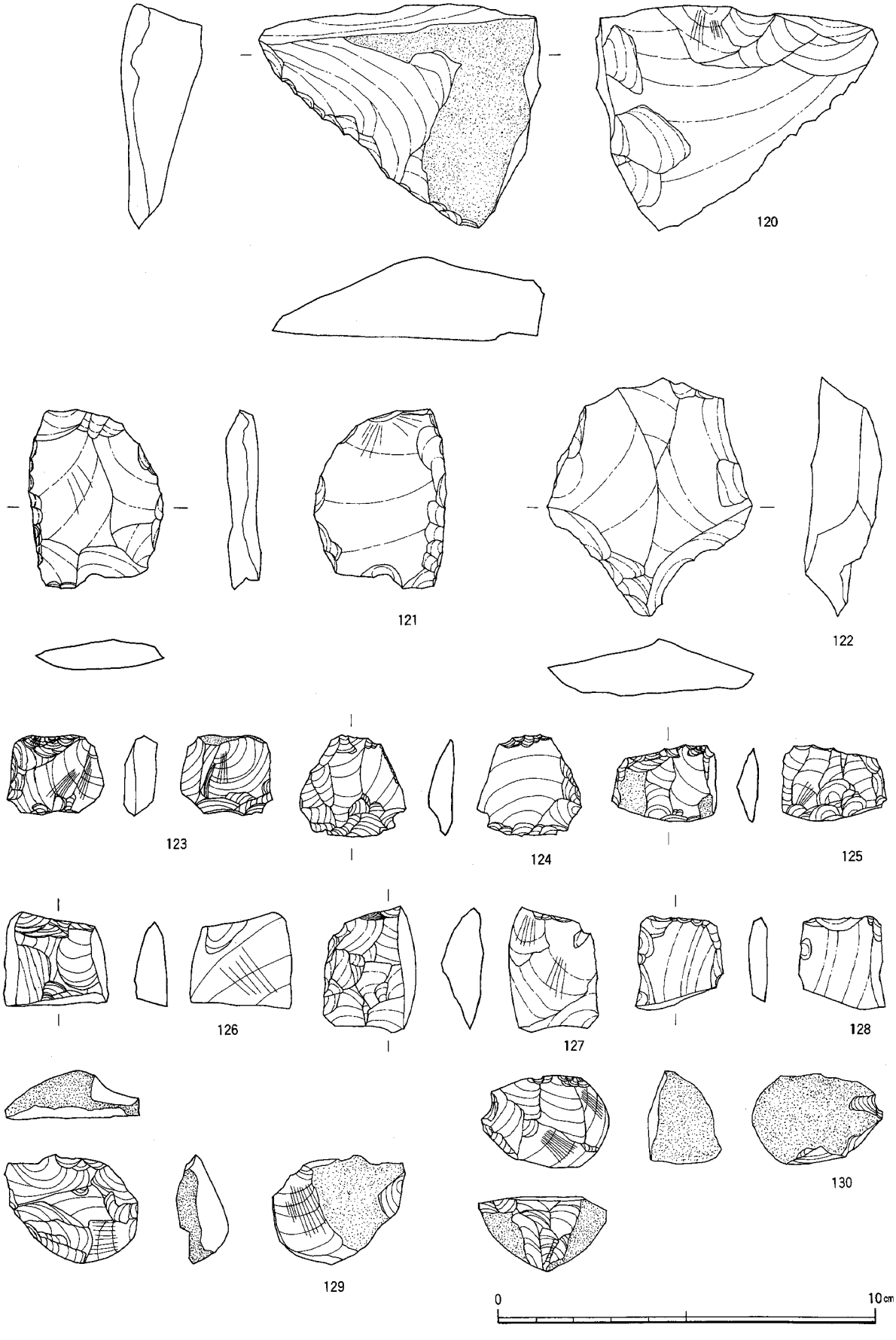


Fig. 26　石器実測図 3 (2／3)

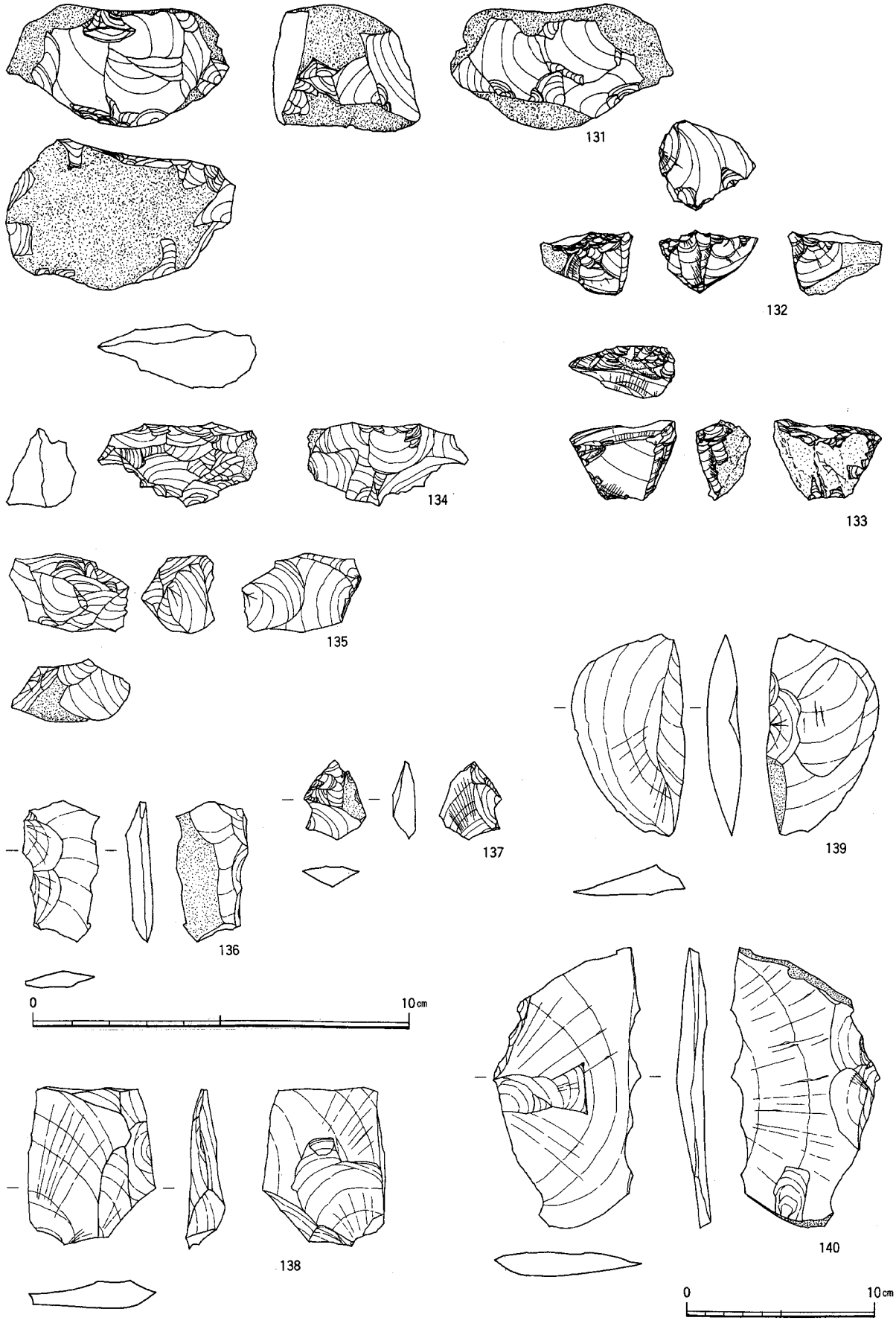


Fig. 27　石器実測図４（2／3、138～140は1／3）

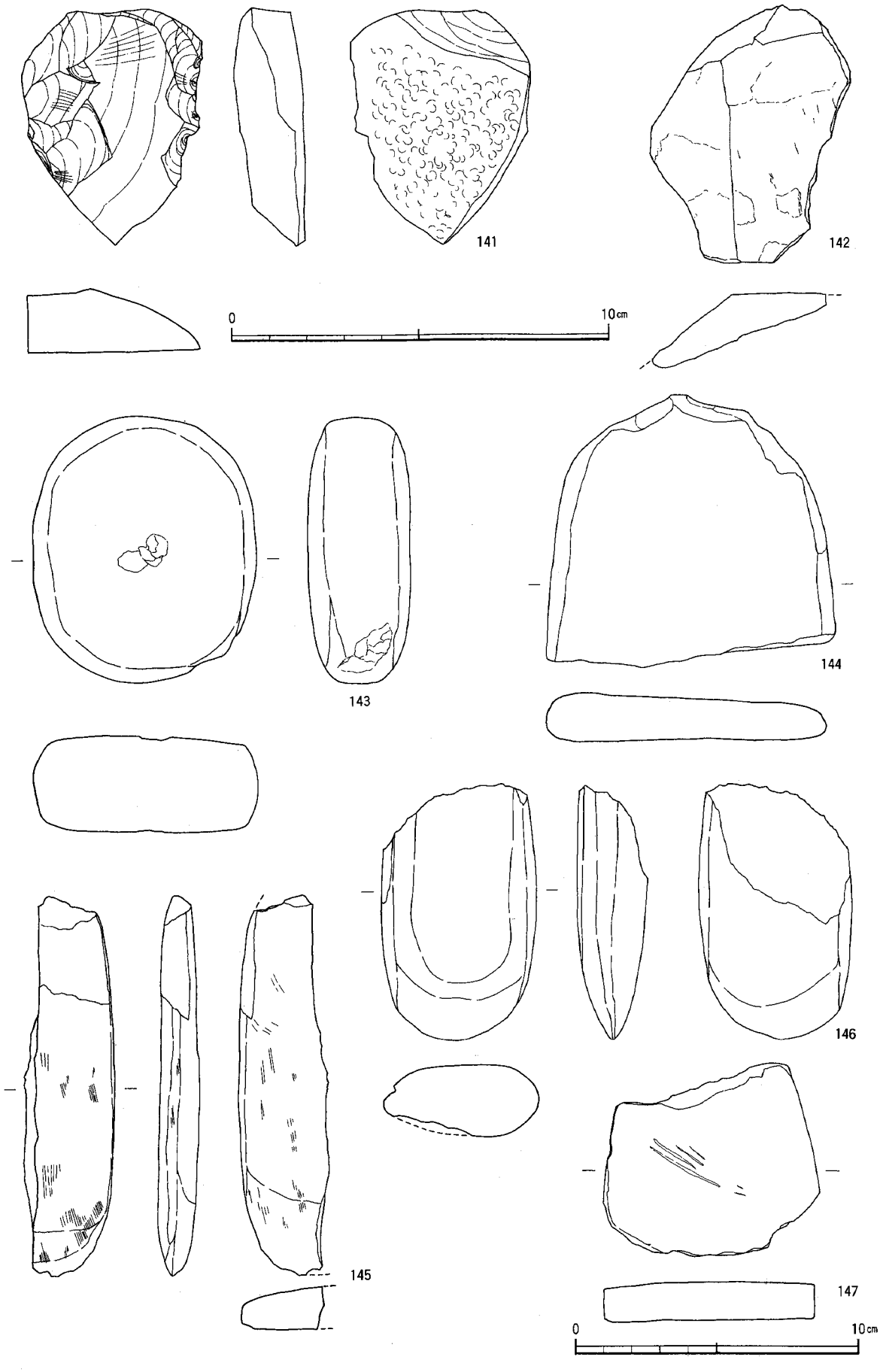


Fig. 28　石器実測図５（2／3、1／2）

Tab. 1 縄文土器一覧表

図	番	器種	出土位置	色調	胎土	外面調整	内面調整	備考
Fig.22	27	粗製深鉢	G-102 No.16	暗褐色	砂を若干含む	撚糸文	ケズリ	
Fig.22	28	粗製深鉢	G-94 No.8	暗褐色	砂粒多い	撚糸文	ナデ	
Fig.22	29	粗製深鉢	G-114 No.20	暗褐色	粗砂多い	撚糸文	ナデ	
Fig.22	30	粗製深鉢	G-114 No.47	暗褐色	粗砂多い	撚糸文	ナデ	
Fig.22	31	粗製深鉢	G-94 No.17	暗褐色	砂粒多い	撚糸文	ナデ	
Fig.22	32	粗製深鉢	G-108 No.24	明褐色	砂粒多い	撚糸文	ナデ	
Fig.22	33	粗製深鉢	G-93 No.12	褐色～暗褐色	粗砂を多く含む	撚糸文	ケズリ	
Fig.22	34	粗製深鉢	G-109 No.4	暗褐色	砂を若干含む	押型文	山形文	
Fig.22	35	粗製深鉢	G-94 No.23	褐色～暗褐色	粗砂多い	押型文	押型文・ナデ	口縁部破片
Fig.22	36	粗製深鉢	G-114 No.28	褐色～明褐色	粗砂多い	押型文	ナデ	
Fig.22	37	粗製深鉢	G-114 No.2	褐色～赤褐色	粗砂多い	押型文	条痕	
Fig.22	38	粗製深鉢	G-102 No.47	薄褐色～薄灰褐色	砂を若干含む	押型文	押型文・ナデ	
Fig.22	39	粗製深鉢	G-102 No.25	暗褐色～黒褐色	粗砂多い	押型文	ケズリ	
Fig.22	40	粗製深鉢	G-114 No.5	明褐色	粗砂若干含む	押型文	ナデ	
Fig.22	41	粗製深鉢	G-102 No.7	暗褐色	粗砂多い	押型文	ケズリ	
Fig.22	42	粗製深鉢	G-99 No.6	暗赤褐色	粗砂多い	押型文	ナデ	
Fig.22	43	粗製深鉢	G-98 No.8	暗褐色	粗砂多い	押型文	ナデ	
Fig.22	44	粗製深鉢	G-114 No.24	明褐色	砂を若干含む	押型文	ナデ	
Fig.22	45	粗製深鉢	G-114 No.23	明褐色～褐色	粗砂多い	押型文	条痕	口縁部破片
Fig.22	46	粗製深鉢	G-94 No.18	暗赤褐色	砂粒多い	押型文	ナデ	
Fig.22	47	粗製深鉢	G-94 No.4	暗灰褐色	粗砂を若干含む	押型文	ケズリ	
Fig.22	48	粗製深鉢	G-99 No.2	明褐色	砂粒多い	押型文	ナデ	
Fig.22	49	粗製深鉢	G-95 No.1	明褐色	砂粒多い	押型文	不明	
Fig.22	50	粗製深鉢	G-81 No.33	褐色～明褐色	粗砂少量含む	押型文	ナデ	
Fig.22	51	粗製深鉢	G-102 No.33	暗褐色～褐色	粗砂多い	押型文	ナデ	
Fig.22	52	粗製深鉢	G-99 No.12	明褐色	砂粒多い	押型文	ナデ	
Fig.22	53	粗製深鉢	G-102 No.1	褐色	砂粒を若干含む	押型文	ナデ	
Fig.22	54	粗製深鉢	G-108 No.42	褐色～暗褐色	粗砂を若干含む	押型文	ケズリ	
Fig.22	55	粗製深鉢	G-94 No.1	薄褐色～褐色	砂粒多い	押型文	ナデ	
Fig.22	56	粗製深鉢	G-60 No.2	褐色～明褐色	粗砂多い	押型文	ナデ	
Fig.22	57	粗製深鉢	G-101 No.8	明褐色	砂粒をわずかに含む	押型文	ナデ	
Fig.22	58	粗製深鉢	G-60 No.4	褐色～明褐色	粗砂若干含む	押型文	ナデ	
Fig.22	59	粗製深鉢	G-102 No.8	明褐色	粗砂多い	条痕文	綾杉文	口縁～胴部上位破片
Fig.22	60	粗製深鉢	G-94 No.11	暗褐色～褐色	粗砂多い	条痕文	ナデ	
Fig.22	61	粗製深鉢	G-94 No.9	薄褐色～褐色	粗砂多い	条痕文	ナデ	
Fig.22	62	粗製深鉢	G-102 No.27	暗褐色～黒褐色	粗砂多い	条痕文	条痕文	口縁部破片
Fig.22	63	粗製深鉢	G-98 No.9	明褐色	砂粒多い	条痕文	条痕文	
Fig.22	64	粗製深鉢	G-108 No.4	黒褐色～暗褐色	粗砂多い	ナデ	ナデ	口縁部破片
Fig.22	65	粗製深鉢	G-108 No.23	暗褐色	粗砂多い	条痕文	ナデ	
Fig.23	66	粗製深鉢	G-93 No.24	褐色～暗褐色	粗砂多い	条痕文	ケズリ	底部付近
Fig.23	67	粗製深鉢	G-108 No.36	暗褐色	砂粒を若干含む	条痕文	ケズリ	
Fig.23	68	粗製深鉢	G-94 No.10	薄褐色～褐色	粗砂多い	条痕文	ナデ	
Fig.23	69	粗製深鉢	G-91 No.4	褐色	粗砂多い	条痕文	ナデ	
Fig.23	70	粗製深鉢	G-99 No.21	褐色～暗褐色	砂粒多く含む	条痕文	ナデ	
Fig.23	71	粗製深鉢	G-94 No.8	明褐色	粗砂を若干含む	条痕文	ケズリ	底部付近
Fig.23	72	粗製深鉢	G-99 No.20	褐色～明褐色	砂粒多い	条痕文	ナデ	
Fig.23	73	粗製深鉢	G-108 No.11	明褐色	粗砂多い	条痕文	ナデ	
Fig.23	74	粗製深鉢	G-114 No.30	明褐色	粗砂多い	条痕文	ケズリ	
Fig.23	75	粗製深鉢	G-93 No.20	暗褐色	粗砂多い	条痕文	ケズリ	口縁部破片
Fig.23	76	粗製深鉢	G-81 No.55	褐色～暗褐色	粗砂を若干含む	条痕文	ケズリ	
Fig.23	77	粗製深鉢	G-108 No.18	明褐色	粗砂多い	条痕文	ナデ	
Fig.23	78	粗製深鉢	G-95 No.3	褐色	粗砂多い	条痕文	ナデ	
Fig.23	79	粗製深鉢	G-81 No.62	明褐色～明灰褐色	粗砂多い	条痕文	ナデ	
Fig.23	80	粗製深鉢	G-114 No.32	明褐色	粗砂多い	山形文	ケズリ	
Fig.23	81	粗製深鉢	G-114 No.33	褐色～暗褐色	粗砂多い	山形文	ケズリ	
Fig.23	82	粗製深鉢	G-15 No.13	褐色～暗褐色	粗砂多い	山形文	ナデ	
Fig.23	83	粗製深鉢	G-102 No.11	明褐色	砂を若干含む	山形押型文	ナデ	
Fig.23	84	粗製深鉢	G-81 No.62	褐色～暗褐色	粗砂多い	ケズリ	ナデ	口縁部破片
Fig.23	85	粗製深鉢	G-6	明褐色～褐色	粗砂を若干含む	刺突文	ナデ	
Fig.23	86	粗製深鉢	G-81 No.60	灰色～灰褐色	粗砂多い	ナデ	ナデ	口縁部破片
Fig.23	87	粗製深鉢	G-22 No.12	暗褐色	粗砂多い	ナデ	条痕	外面に突帯貼りつけ

Tab. 2 石器一覧表

図	番号	器種	出土位置	石材	法量(mm)	重量(g)	備考
Fig.24	88	石鏃	G-101 No.12	安山岩	22×19×5	1.03	
Fig.24	89	石鏃	SP-014	安山岩	20×23×3	1.02	
Fig.24	90	石鏃	SO-002 Cトレンチ	チャート	26×20×5	1.63	
Fig.24	91	石鏃	SO-002 Cトレンチ	安山岩	22×18×5	0.97	
Fig.24	92	石鏃	廃土中	黒曜石	18×16×3	0.65	
Fig.24	93	石鏃	G-102 No.28	安山岩	20×16×3	0.56	
Fig.24	94	石鏃	遺構検出面	安山岩	31×18×8	3.26	未製品の可能性あり
Fig.24	95	石鏃	遺構検出面	安山岩	27×16×4	1.23	先端片脚欠損
Fig.24	96	石鏃	SO-002 Cトレンチ	安山岩	29×22×6	2.62	片脚欠損
Fig.24	97	石鏃	G-17 No.2	安山岩	21×16×3	0.94	
Fig.24	98	石鏃	SO-002 Cトレンチ	安山岩	23×17×4	1.64	先端欠損
Fig.24	99	石鏃	G-94 No.7	安山岩	24×14×4	1.15	片脚欠損
Fig.24	100	石鏃	SO-002 羨道下層	黒曜石	91×18×4	2.85	
Fig.24	101	石鏃	G-14 No.7	安山岩	37 ×27×11	8.67	
Fig.24	102	石鏃	廃土中	安山岩	21×15×3	0.65	先端片脚欠損
Fig.24	103	石鏃	撹乱中	黒曜石	22×19×4	1.03	先端片脚欠損
Fig.24	104	石鏃	SO-002 Cトレンチ	安山岩	20×14×2	0.49	
Fig.24	105	石鏃	SO-002 4区	安山岩	20×18×3	0.66	
Fig.24	106	石鏃	G-25 No.5	黒曜石	22×9×6.5	2.79	未製品
Fig.24	107	石鏃	G-25 No.2	黒曜石	23×17×6	1.02	未製品
Fig.24	108	尖頭器	SO-002 3区周溝	安山岩	52×44×15	27.49	
Fig.24	109	尖頭器	G-113	安山岩	71×30×7	18.14	
Fig.24	110	尖頭器	SO-002 4区墳丘	黒曜石	35×11×3	1.05	
Fig.24	111	尖頭器	SB-016 P-6	安山岩	46×22×8	6.39	未製品の可能性あり
Fig.25	112	尖頭器	G-114 No.7	安山岩	57×27×5	1.45	未製品
Fig.25	113	石匙	東側南北試掘トレンチ	安山岩	42×54×11	26.22	半分欠損
Fig.25	114	石匙	東側南北試掘トレンチ	安山岩	61×89×11	40.11	
Fig.25	115	削器	G-101 No.1	安山岩	48×30×11	13.95	
Fig.25	116	削器	SO-002 Cトレンチ内	黒曜石	43×32×6	7.86	
Fig.25	117	削器	SO-002 3区表土	安山岩	50×67×8	19.91	
Fig.25	118	削器	SO-002 4区周構	安山岩	23×26×5	2.16	石鏃未製品の可能性あり
Fig.25	119	削器	G-19 No.4	黒曜石	28×32×10	8.82	
Fig.26	120	削器	SO-002 5区周構内	安山岩	75×60×22	76.15	
Fig.26	121	削器	SO-002 Cトレンチ内	安山岩	47×36×8	25.63	
Fig.26	122	石錐	G-11 No.14	安山岩	63×54×20	41.88	石核転用品か
Fig.26	123	楔形石器	SO-002 4区周溝	黒曜石	25×28×8	4.29	
Fig.26	124	楔形石器	SP-017	黒曜石	27×28×7	4.91	
Fig.26	125	楔形石器	G-81 No.57	黒曜石	20×28×5	3.89	半分欠損
Fig.26	126	楔形石器	SO-002 3区周溝	安山岩	21×25×9	7.51	
Fig.26	127	楔形石器	G-93 No.17	安山岩	33×24×11	9.52	
Fig.26	128	楔形石器	G-33 No.2	安山岩	25×22×5	3.71	半分欠損
Fig.26	129	石核	G-39 No.2	黒曜石	29×34×14	10.21	
Fig.26	130	石核	SO-002 羨道下層7層	黒曜石	24×34×20	16.60	
Fig.27	131	石核	SO-002 3区周溝	黒曜石	33×59×40	80.92	
Fig.27	132	石核	SO-002 4区墳丘内	黒曜石	26×25×18	7.25	細石刃核の可能性あり
Fig.27	133	石核	G-101 No.5	黒曜石	15×30×22	6.12	
Fig.27	134	石核	SO-002 羨道黒色土	黒曜石	23×43×18	10.21	
Fig.27	135	石核	調査区東側遺構面	黒曜石	21×31×17	10.01	
Fig.27	136	剥片	G-108 No.32	安山岩	37×20×6	3.80	尖頭器調整剥片
Fig.27	137	剥片	G-108 No.35	黒曜石	21×17×6	1.24	尖頭器調整剥片
Fig.27	138	剥片	G-6	安山岩	84×67×14	87.00	素材剥片
Fig.27	139	剥片	G-6	安山岩	108×59×2	89.35	素材剥片
Fig.27	140	剥片	G-6	安山岩	148×77×16	144.40	素材剥片
Fig.28	141	剥片	G-102 No.6	安山岩	62×48×19	53.93	板状剥片
Fig.28	142	磨石	SO-001 4区墳丘	砂岩	91×71×26	168.25	
Fig.28	143	磨石	G-60 No.10	玄武岩	94×79×33	443.26	
Fig.28	144	打製石斧	SO-002 4区墳丘表二	片岩	134×31×14	110.89	刃部欠損
Fig.28	145	磨製石斧	SO-002 4区	結晶片岩	72×77×13	77.61	半分欠損
Fig.28	146	磨製石斧	撹乱	玄武岩	91×54×25	168.25	半分欠損
Fig.28	147	砥石	調査区外表採	砂岩	68×77×14	117.10	基部欠損

主要剥裏面が残るものに大別できる。いずれも横長である。

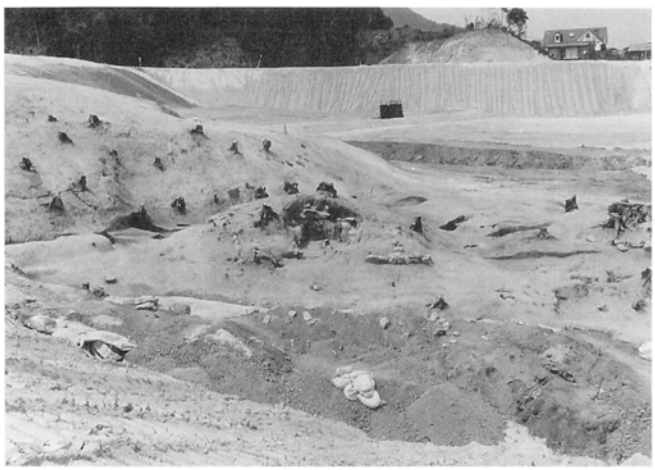
石核（Fig. 26～27、129～135）129～131は自然面をを多く残し、剥片剥離角度の小さい剥離が多い。133は細石核で、西海技法の可能性がある。132は細石刃核とおもわれる。

剥片類（Fig. 27、28、136～141）136、137は尖頭器調整剥片で2次調整痕がのこる。138～140は安山岩の素材剥片で同一地点で出土し、デポを形成していた可能性がある。141は板状素材剥片で剥離痕が残る。

礫石器類（Fig. 28、142～147）142、143は磨石。143は完形で中央部に敲打痕のこる。144～146は石斧。144は打製で風化著しい。147は砥石で砂岩製。

Ph. 1　調査区全景（北東から）

Ph. 2　SO－001、002（西から）



Ph. 3　SO－001 墳丘（南から）

Ph. 4　SO－002 墳丘（南から）

Ph. 5　SK－024（北西から）

Ph. 6　SK－023（北から）

7．浦江谷遺跡群７区

1）調査の概要

浦江谷遺跡群は南西から北東に細長く延びる４つの支丘陵上に立地し、調査区は北から３番目と４番目の丘陵間の段丘上に位置する。標高は74～79ｍを測る。旧状は杉林である。段丘陵線中心部に幅５ｍの林道が掘削されており、南北に分断されている。事前の現地踏査では南側部分に、３区でも確認された割石積みの方形の石組基壇が２基確認され調査対象とされていたが、杉林伐開・搬出後の調査開始時には確認できなかった。

調査は暗黄灰色のシルト質土を除去し、明黄灰色の混礫土上面で遺構検出を実施した。

検出した遺構は縄文時代以降は近世～現代のみで、開発事業開始の数年前までは炭焼きが行われていた。

Ph. 1　７区全景（南東から）

2）近世の調査

調査区内の多くの部分を近世～現代の溝・土壙等が撹乱しているが、ここでは炭焼窯２基を取り上げる。

窯は調査区北側を長さ22ｍ程に渡って深さ1.5ｍ程掘り下げて作業場兼用の平坦部をつくり、中央を7.5×3.5ｍ幅の矩形に削り出して２基の炭焼窯を並置している。窯内壁と外壁は割石で構築され、黄灰色砂質土が充塡される。内部は奥行１ｍ・径90

Ph. 2　炭窯（北から）

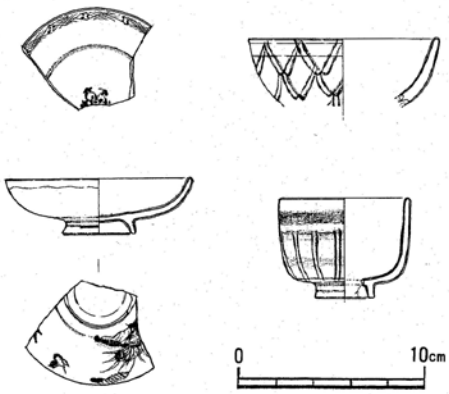


Fig. 1　近世の遺物（1／4）

Ph. 3　炭窯１（北から）

Ph. 4　炭窯２（北から）

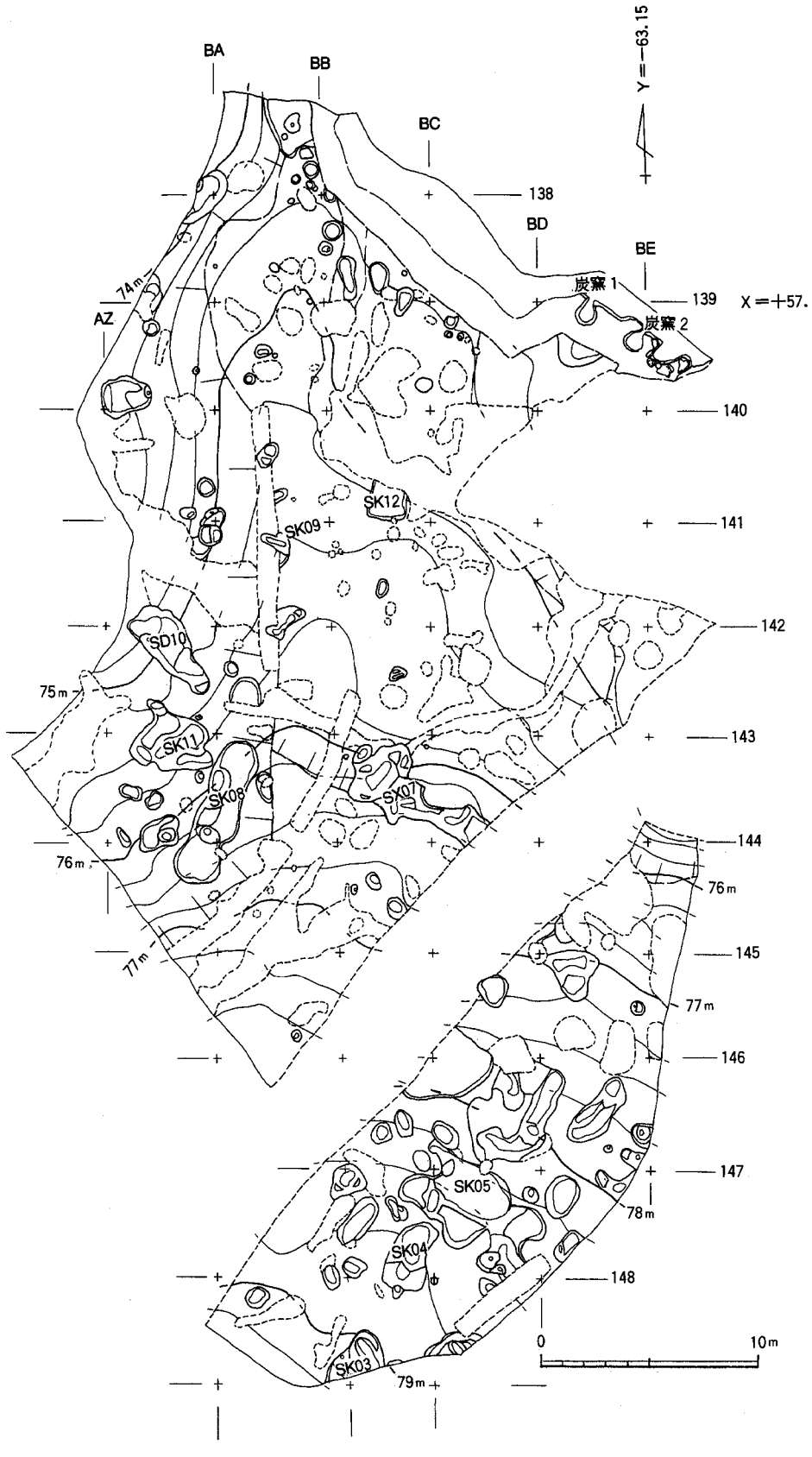


Fig. 2　7区遺構全体図（1／300）

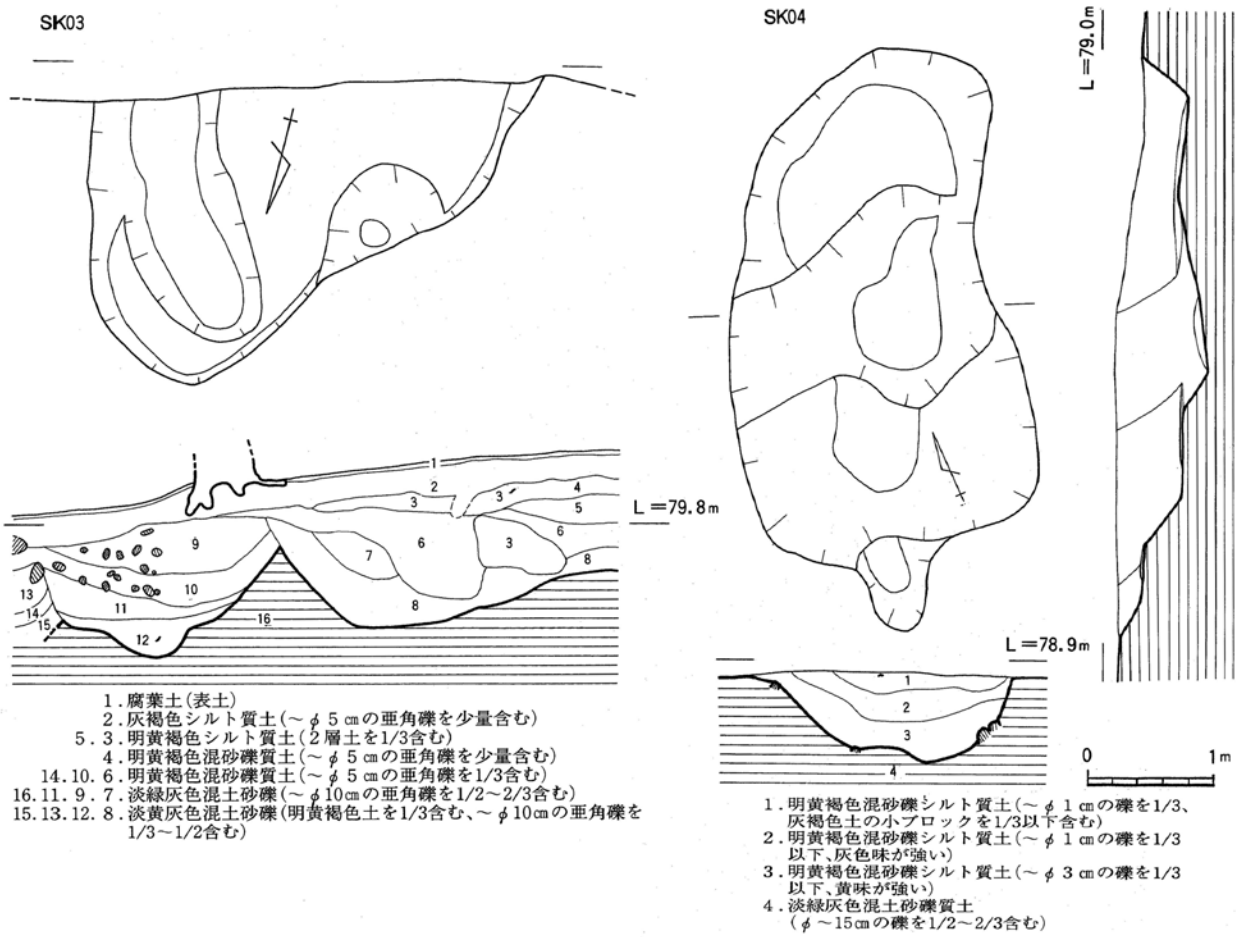


Fig. 3　SK03、04（1／60）

㎝の円形で高さ95㎝を測る。壁面は赤色粘土で石表面を塗り固めている。窯前面の作業場には灰が厚く堆積する。Fig. 1は裏込めから出土した肥前系の染付で、19世紀前半と思われる。

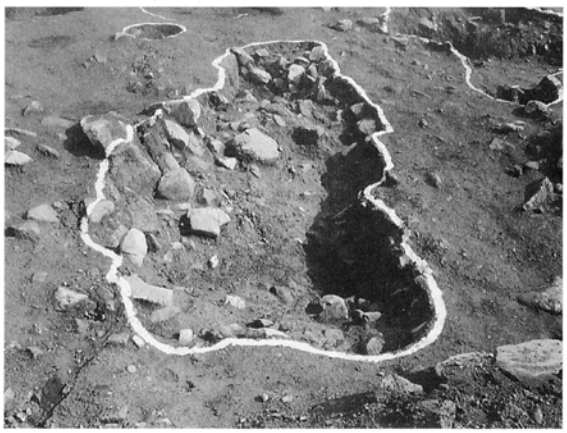
3）縄文時代の調査

調査区南側から西側にかけての斜面部分で8基の土壙・自然流路を検出した。覆土は明黄褐色混礫シルト質土で、小数の石器・剥片・土器片を検出した。

SK03（Fig. 3）　BB148に位置する。風倒木痕の切り合いと思われ、12層中より古銅輝石安山岩製のサイドスクレーパーを検出した（Fig. 6）。9は縦長の剥片の左側縁に交互剥離を加えて刃部を形成している。中央で欠損している。

SK04（Fig. 3）　BB147に位置し、長軸を等高線と直交方向にとる。4.65×2.4mの隅丸方形で、

Ph. 5　SK09（北から）



Ph. 6　SD10（北西から）

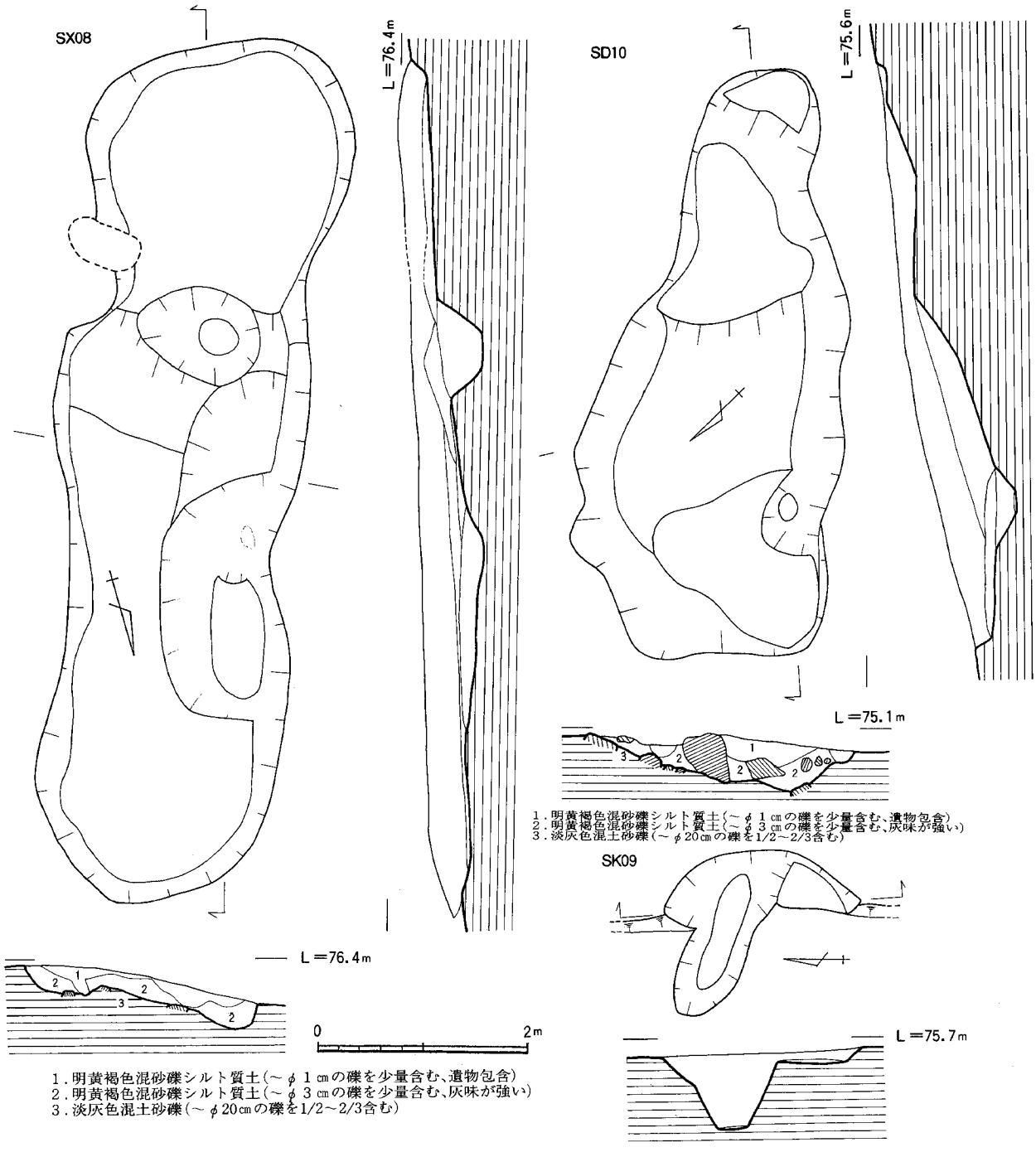


Fig. 4　SX08、SK09、SD10（1／60）

断面が二段の、深さ60cmを測る深い土壙である。1層中より黒耀石剥片と土器片を検出した。

SX08（Fig. 4）　BA143に位置する溝状の浅い遺構で、等高線と並行する。長軸8.3・幅2.5m・深さ40cmを測り、底面は地形に沿って傾斜している。古銅輝石安山岩の使用痕を有する横長剥片10を検出した。剥片の両側辺を使用し刃こぼれしている。表面の風化が著しく、後晩期とは思われない。

SK09（Fig. 4　Ph. 5）　BA141に位置する縦長で断面が稜をなす土壙で、1.8×1.8×0.7mを測る。二段目は幅1mで狭長になっており落とし穴の可能性もある。

SD10（Fig. 4　Ph. 6）　AZ142に位置する。調査区中央の東西方向の浅い谷筋にあり、SX07と対をなす自然流路である。現状で5.75×2.6×0.8mを測る。2層中より比較的まとまって遺物を検

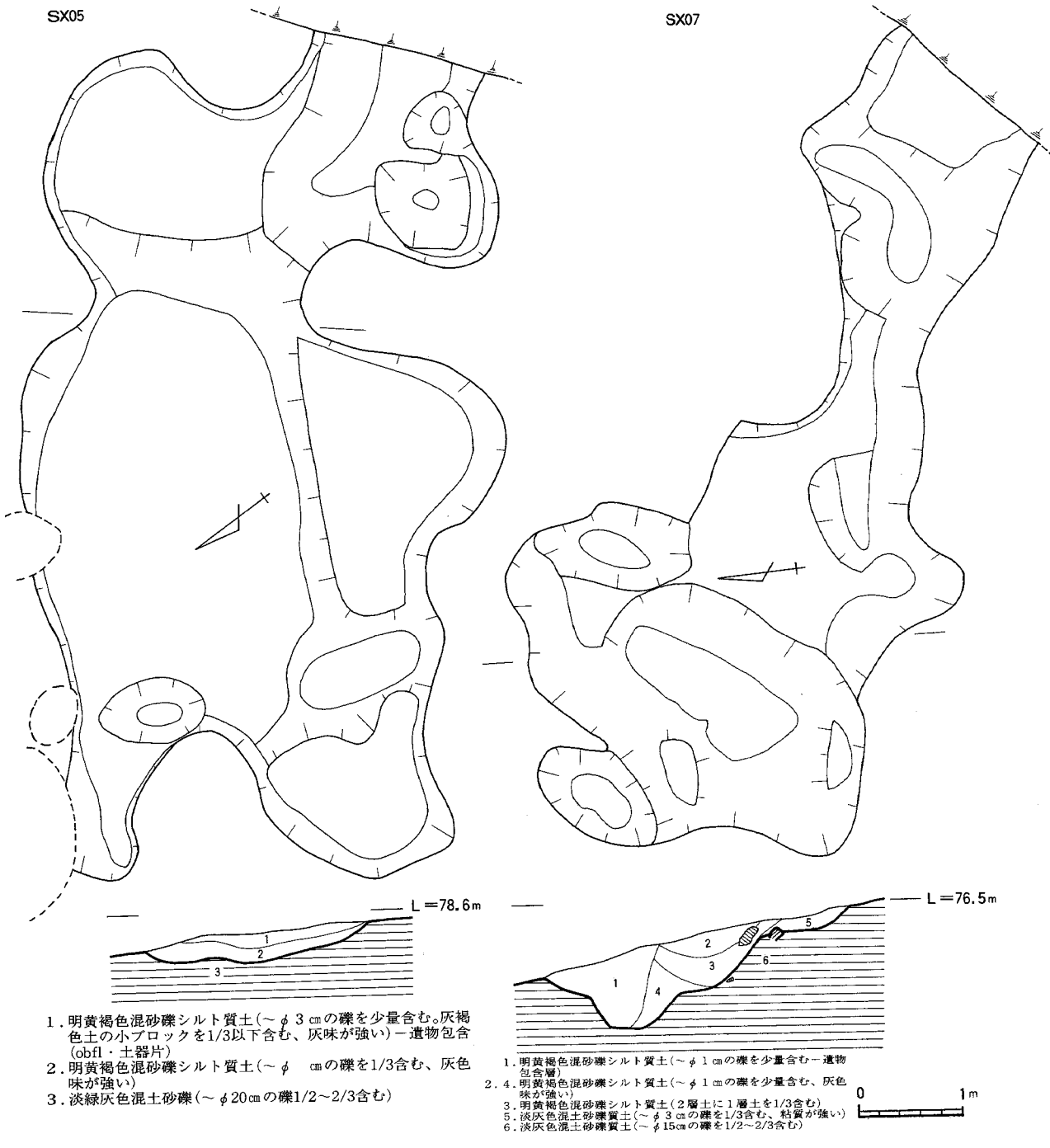


Fig. 5　SX05、07（1／60）

出した。4～6は出土した縄文粗製深鉢土器で、内外面をヨコ・ナナメ方向に貝殻条痕文を施す。胎土は金雲母の微粒子と3㎜大の石英粒を多く含み、器壁は薄い。色調は明黄褐～橙色を呈する。4・5は口縁部下の小片で、外面の上端に凹線をめぐらし、内部にヘラ描細線羽状文を施す。凹線下端は盛り上がり隆起線状を呈している。

SX05（Fig. 5）　BC147に位置する不整形土壙で8.0×4.7×0.3mを測る。11は黒耀石製のサイドスクレーパーで、左側縁にブランティングを施し、右側縁を刃部としている。

SD07（Fig. 5）　BB143に位置し、SD10と対をなす自然流路で、現状で8.2×4.3×1.0mを測る。12は出土した磨石で礫砂岩製。径5.7㎝を測る。正円を意識し、丁寧に使い込んでいる。

7・8・13・14は表土掘削中に検出。7は晩期の精製浅鉢、8は粗製深鉢の底部である。13は磨製の横斧で泥岩製。長14cm、厚3cmで409.2g。14は片麻岩製の扁平打製石斧で、長10.8cm、77.5g。

4）小結

当該地では縄文早前期～晩期の遺構と江戸後期の炭焼窯を検出した以外、生活遺構はなく、縄文時代以来作業場として活用された土地であったと思われる。

7区遺構一覧表

遺構No.	地点	種別	時期	規模（m）	主な出土遺物	遺構No.	地点	種別	時期	規模（m）	主な出土遺物
SI01	BD139	炭焼窯	19世紀前半	1.2×0.9×0.95	肥前系染付（碗・皿）・土師質火鉢・高取系瓶	SD07	BB～BC143	自然流路	縄文時代	8.2＋α×4.3×1.0	磨石
SI02	BD139	炭焼窯	19世紀前半	1.05×0.8×0.9	肥前系染付（碗・皿）・高取系瓶	SX08	BA143	溝状土壙	縄文早期?	8.3×2.5×0.4	サヌカイトufl
SK03	BB148	不整形土壙	縄文時代	1.95＋α×2.95×0.66	黒耀石fl・サヌカイトfl	SK09	BA141	落とし穴	縄文後期	1.8×1.8×0.7	黒耀石fl・サヌカイトfl
SK04	BB147	土壙	縄文後期	4.65×2.4×0.6	縄文土器・黒耀石fl	SD10	AZ142	自然流路	縄文後期前葉	5.75×2.6×0.8	粗製深鉢
SD05	BC147	自然流路	縄文後期	8.0×4.7×0.3	黒耀石fl・ufl	SX11	AZ142	不整形土壙	縄文時代	3.75×2.70×0.56	
SK06	BC146	土壙	近世	1.5×0.8×0.26	肥前系染付(碗・皿)	SK12	BB140	土壙		1.35＋α×1.75×0.24	

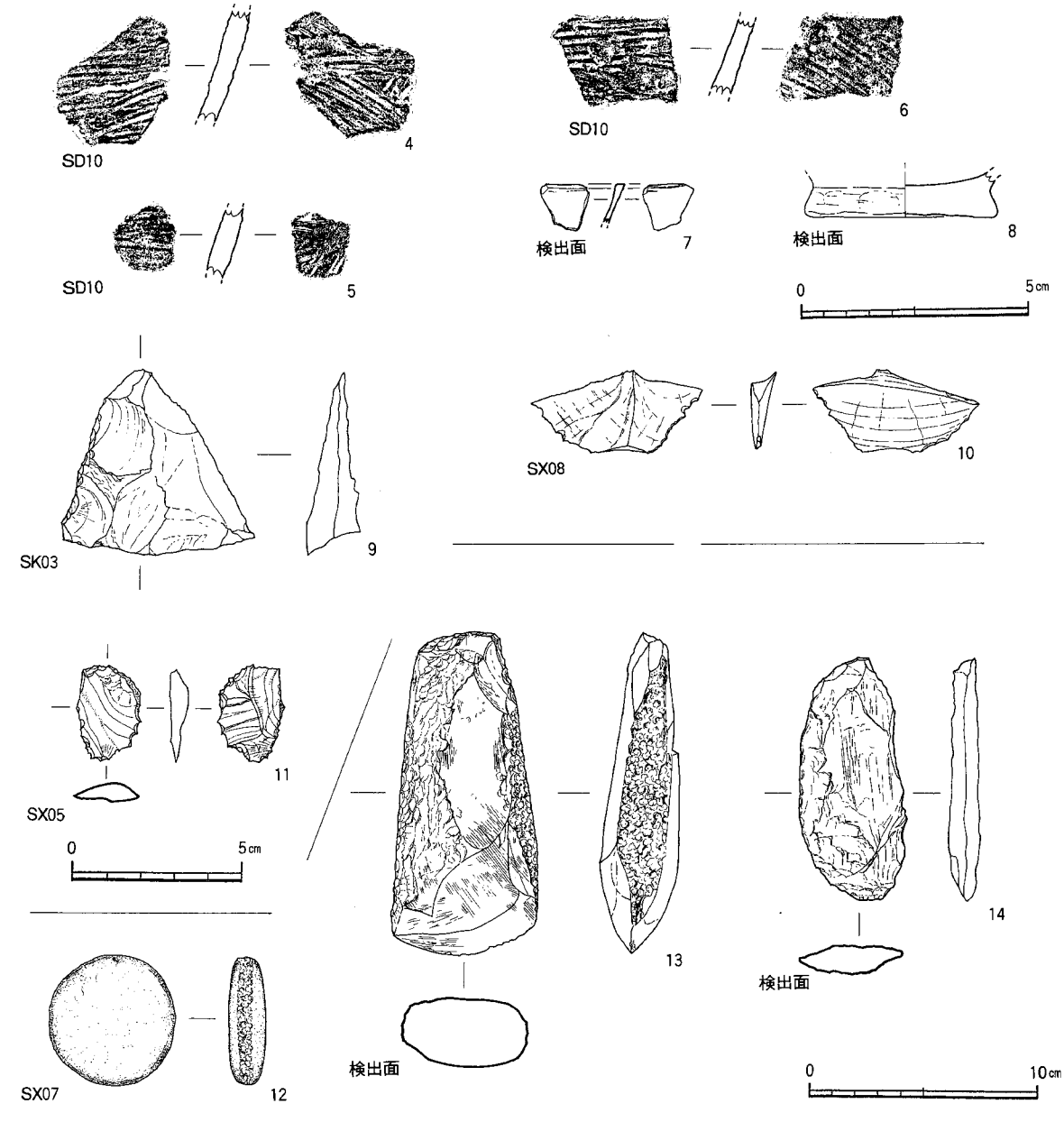


Fig. 6　縄文時代の遺物（2／3、1／3、1／2）

8．西山A古墳群1号墳第1次調査

1）調査の概要

西山A古墳群1号墳は西山から派生して東西に延びる丘陵の南側斜面にあたる。A群は1基確認されているのみである。調査は1号墳を中心に周囲の表土剥ぎを行ったが、これ以外の古墳は存在しなかった。古墳の西側で土壙を1基検出した。本墳は標高約80～84mの斜面にあり、開墾等により墳丘の頂部は削平されている。また、石室は露出しており、天井石、奥壁は抜き取られている。

2）墳丘

墳頂部は削平うけている。墳丘は斜面を掘削し、平坦面を造りだす。その面に石室を構築する。盛土は石室を構築しながら積み上げている。盛土はあまり締まりがない。墳丘の盛り土は約20cmを測る。墳丘の平面形は円形で、直径約10mを測る。

墳丘の南側には人頭大の花崗岩の転石を用いた外護列石が上下2段構築される。上段の外護列石は羨道の側壁から東西に約3m延びる。列石は1段から3段横積みされる。下段の外護列石は墳裾近くに配置され、東西に約3m延びる。外護列石は石室の開口部のみで背後まで巡らない。石室の前面を整える装飾的効果を意図したものと考えられる。下段の外護列石の標高は80.5mで、墳丘の見かけの高さは約3mとなる。墳丘の西側で須恵器の甕が据えられた状態で2個体分出土した。

3）横穴式石室

本墳の埋葬施設は主軸をN－35°－Wにとり、南側に開口する横穴式石室である。石室は丘陵斜面に対して直行して構築される。石室は天井石と奥壁は抜き取られている。石室の全長4mを測る。

玄室は現存の奥壁幅2.4m、長さ1.2mを測る。平面形は横長の長方形に近いものと推測できる。石室は斜面を掘削した平坦面を基底にして構築される。側壁は幅50～100cm、高さ80cmの花崗岩の転石を2個立てて配置し、腰石としている。腰石より上は20～30cmの転石を積み上げていく。

玄門部は幅90cm、幅50cmの転石を立てる。玄門には幅20cmの転石を2個使用して框石としている。玄門部幅90cmを測る。羨道部は幅70～120cm、高さ70cmの転石を立てて配置し、腰石としている。腰石より上は20～40cmの転石を積み上げていく。長さ180cmを測る。

閉塞石の上面は撹乱をうけている。礫の中から中国製輸入陶磁器が出土した。框石の前面に人頭大から拳大の礫を積み上げる。現状で約60cmの高さが遺存する。

墓道は南側を撹乱されている。埋土は黒色粘質土が堆積する。墓道から精練滓が約2.13kg出土した。

4）出土遺物（Fig. 5、6）

玄室内は撹乱をうけており、出土遺物はほとんどない。須恵器が数点と鉄刀と考えられる鉄片が1点出土したのみである。墳丘の西側で須恵器の甕、坏蓋、坏身、長頸壺が出土している。古墳の築造の時期は7世紀前半に位置づけられよう。

須恵器　Fig. 5－1～3は石室、それ以外は墳丘西側で出土した。1は甕口縁である。口縁外面には断面三角形の突帯が巡る。口径24cmを測る。2は高坏である。坏部は直線的に立ち上がる。脚部はラッパ形を呈する。器高7.3cm、口径10.3cmを測る。3は提瓶の口縁である。口径6.4cmを測る。4～10は坏蓋である。4、5の天井部は丸みを持つ。調整は回転ヘラ削りを施す。口径10.6cm、9.5cm

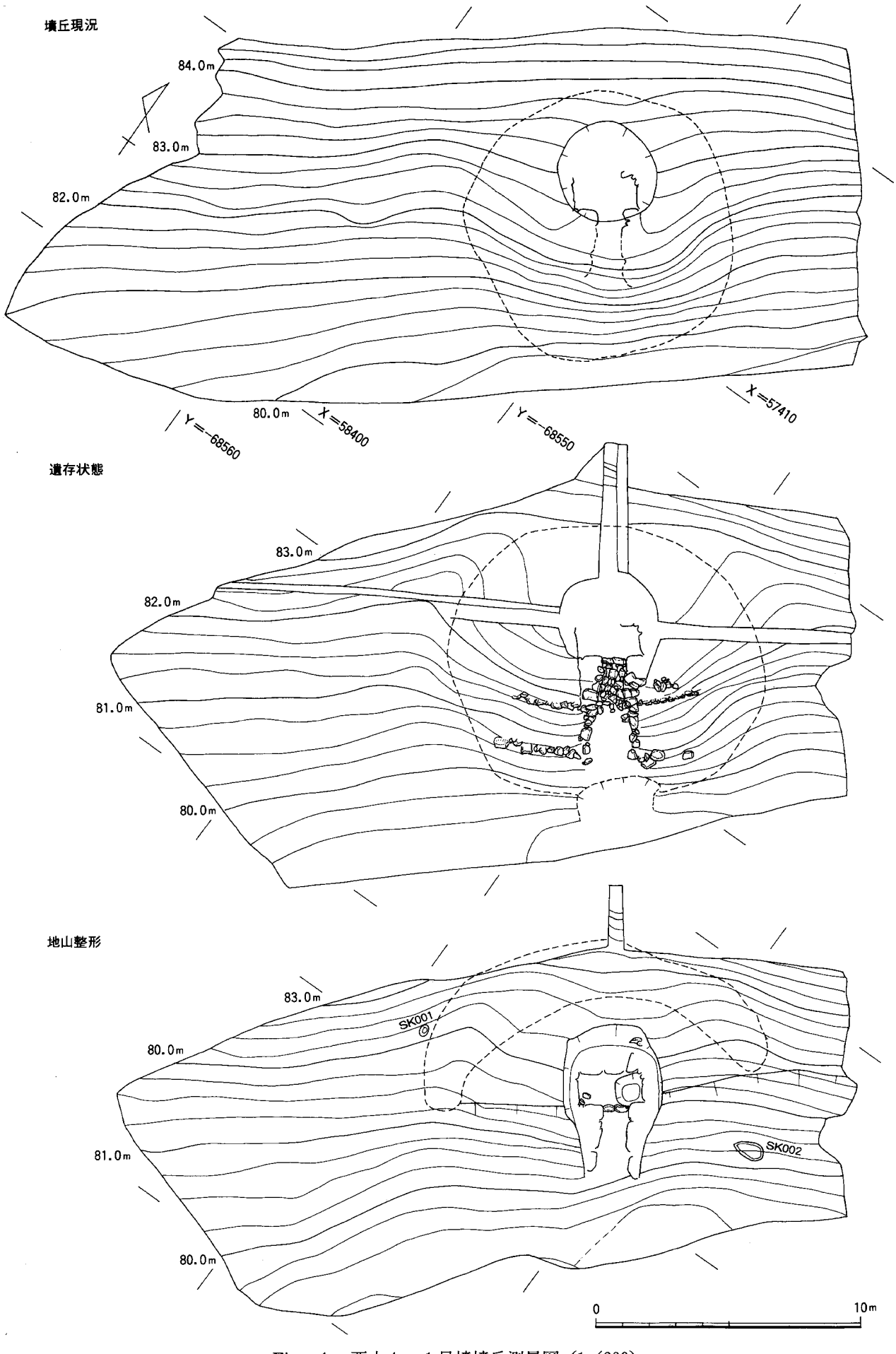


Fig. 1　西山A－1号墳墳丘測量図（1／200）

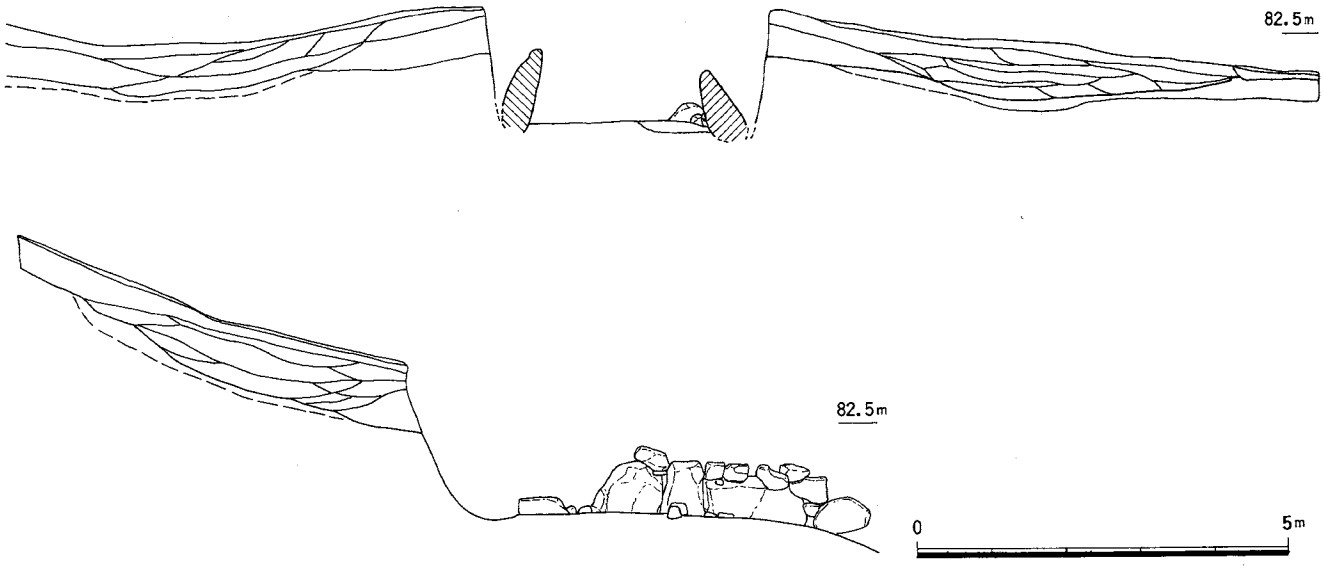


Fig. 2　墳丘土層実測図（1／100）

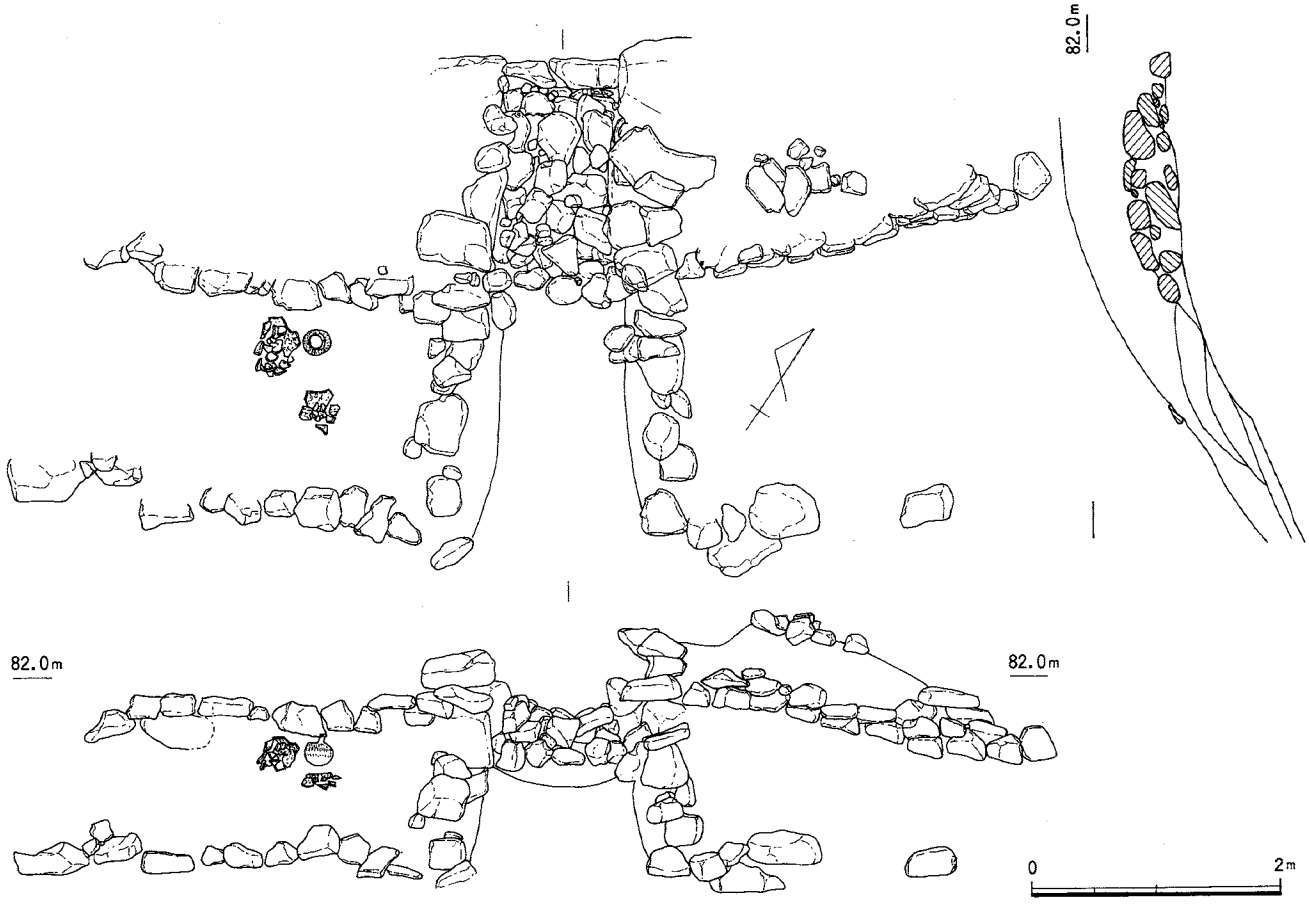


Fig. 3　外護列石及び閉塞石実測図（1／60）

を測る。6～9は口縁内面に短いカエリが付く。天井部は回転ヘラ削りを施す。6は天井部に宝珠形の撮みが付く。やや内湾気味に開く。口径9.8cm、9.8cm、11.2cm、11.1cmを測る。10の天井部は平坦で、口縁は垂下する。口径15.6cmを測る。11～14は坏身である。底部の切り離しは回転ヘラ切りである。体部は直立する。器高2.7cm、3.1cm、2.8cm、3.3cm、口径9.0cm、9.8cm、9.8cm、12.8cmを測る。15、16は高坏である。坏部は直線的に立ち上がる。脚部はラッパ形を呈する。17は提瓶の口縁である。内湾気味に立ち上がる。口径6.1cmを測る。18、19は壷胴部である。18は外面にカキメを施す。19は底部に回転ヘラ削りを施す。20は提瓶の把手である。21～25は甕である。口縁外面には突帯が巡る。24は丸底の底部である。25は完形品で、外面は平行叩き、内面は同心円文叩きを施す。器高24.8cm、口径15.9cmを測る。

Fig. 6－1は甕で、口縁外面に突帯が巡る。外面は平行叩き、内面は同心円文叩きを施す。口縁の内外面にヘラ記号が見られる。器高36.1cm、口径22.4cmを測る。

2～4は石室及び墳丘から出土した後世の遺物である。2は土師器坏である。底部の切り離しは回転糸切りである。器高2.3cm、口径12.2cmを測る。3は黒色土器A類の碗である。底部に断面三角形の低い高台が付く。4は玉縁の白磁碗である。見込みには圏線が巡る。5はSK002から出土した土師器鉢である。口縁はくの字形を呈する。底部は丸底である。外面はハケメ、内面はヘラ削りを施す。口径11.8cmを測る。

5）小結

当該区では円墳を1基検出した。古墳の遺存状態は悪く、墳丘径約10mを測る。石室は単室の横穴式石室で、天井部、奥壁が抜き取られていた。全長4mを測る。遺物は少なく、墳丘から須恵器甕等が据えられた状態で出土した。古墳の造営時期は7世紀前半に始まるものと考えられる。

今回の事業地で6基の古墳が調査されている。いずれも7世紀前後に築造され、各丘陵に1～2基と散漫に分布している。北側に立地する金武古墳群や羽根戸古墳群での密集する状況とは異なる様相を示している。遺物では墓道から2.13kgの精練滓が出土した。早良平野の古墳群では鉄滓の副葬が多く見られ、製鉄の工人集団との関連が指摘されているが、本例もそのような関連が推測される。

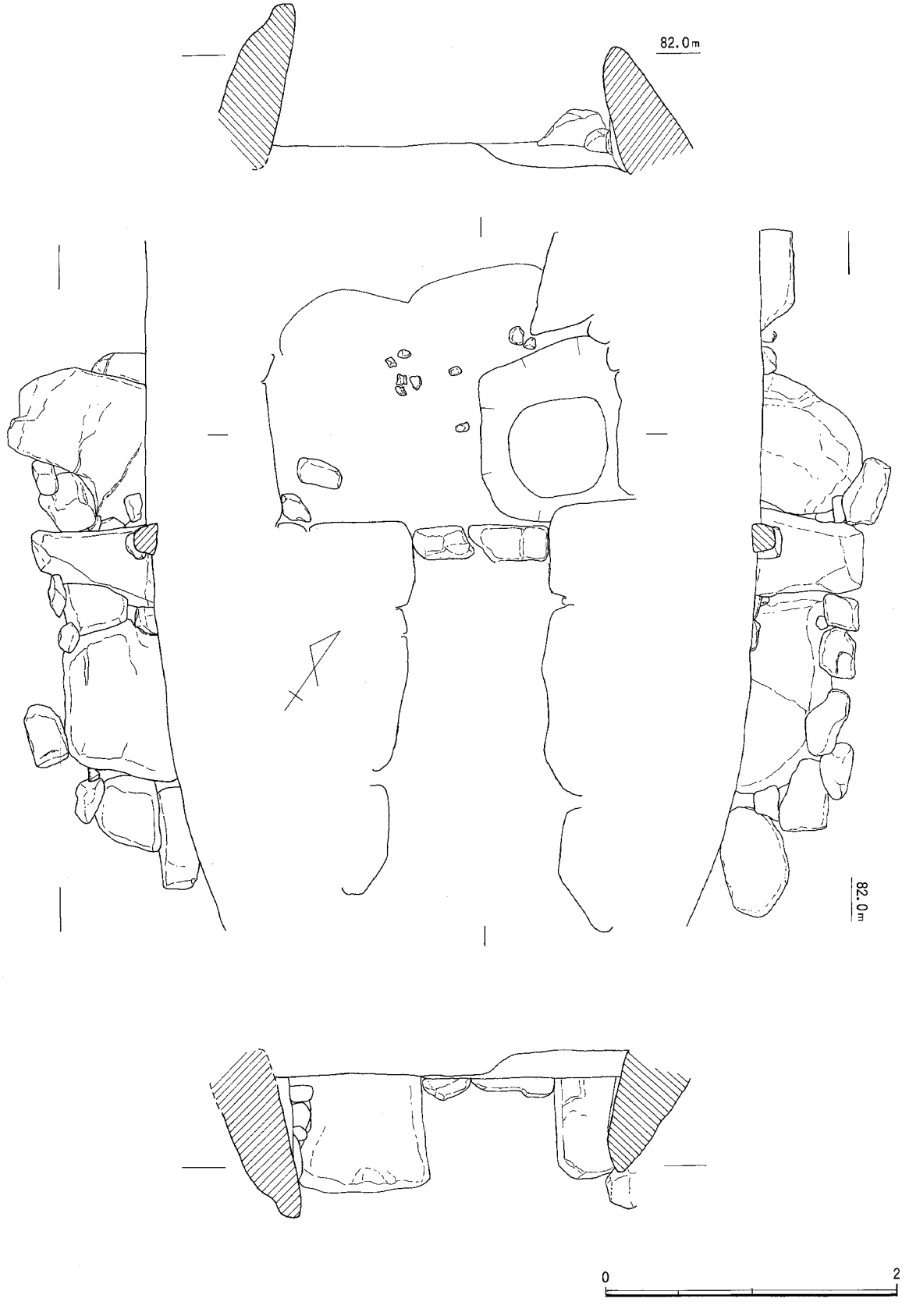


Fig. 4　石室実測図（1／40）

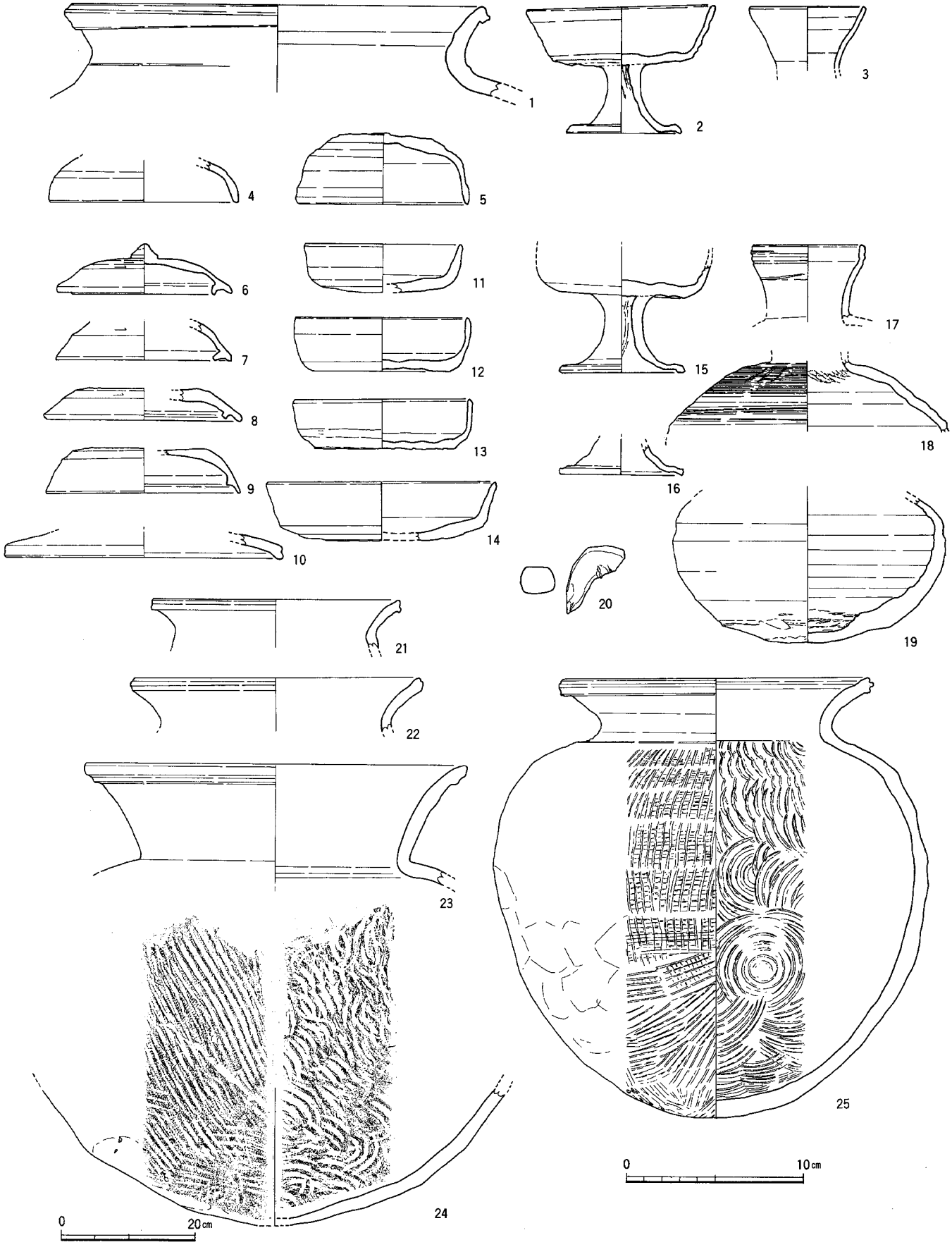


Fig. 5　出土遺物実測図１（1／3、1／4）

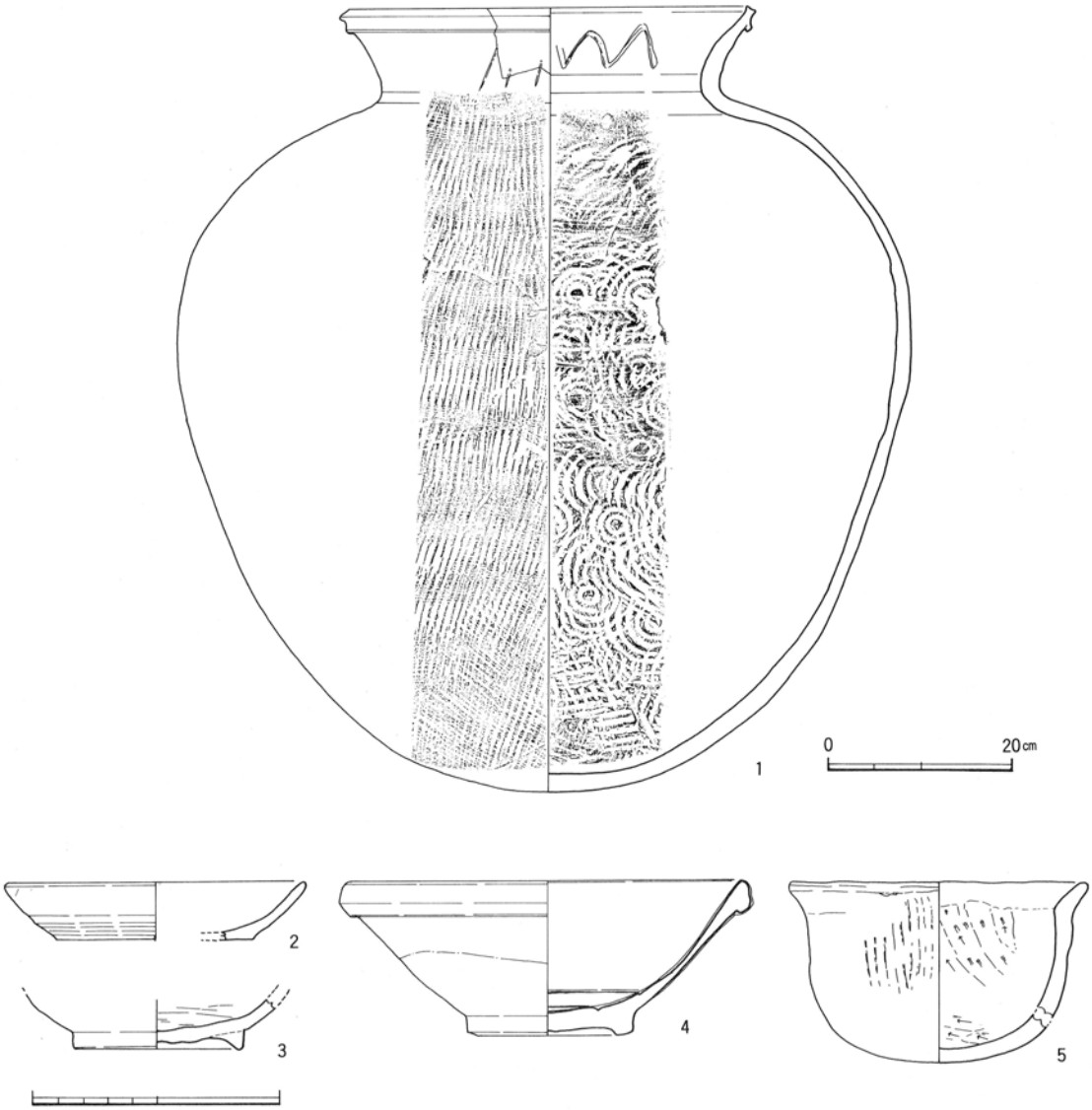
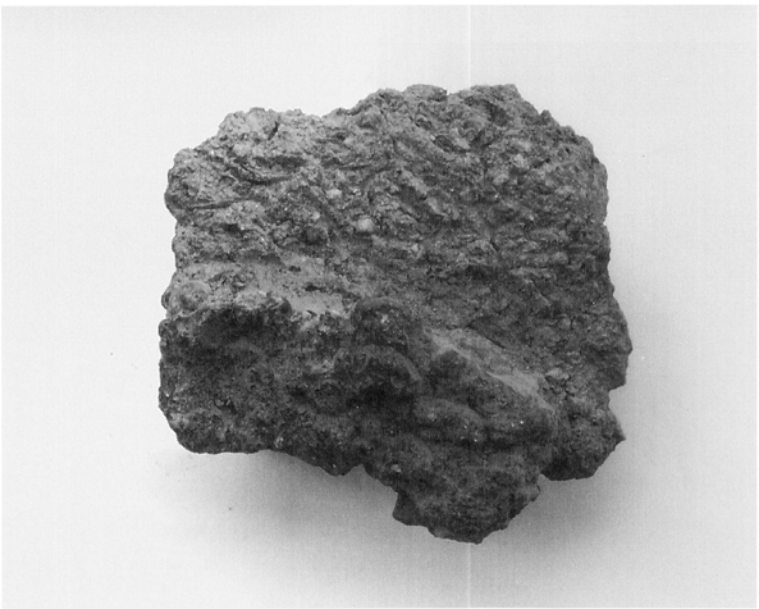


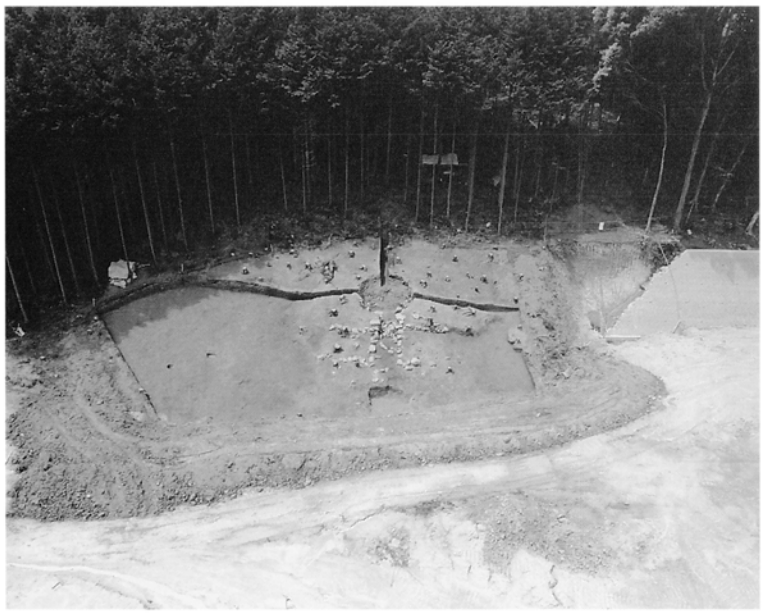
Fig. 6　出土遺物実測図２（1／3、1／4）



Ph. 1　墓道出土鉄滓

Ph. 2　西山A－1号墳石室調査前
（北から）

Ph. 3　墳丘調査前（西から）



Ph. 4　墳丘遺存状況（南から）

Ph. 5　墳丘土層（南から）

Ph. 6　外護列石遺存状況（南から）

Ph. 7　閉塞石遺存状況（北から）

Ph. 8　石室完掘（北から）

Ph. 9　墳丘西側遺物出土状況
（北から）

Ph. 10　墳丘除去後（南から）

9．浦江遺跡群第４次調査

1）調査の概要

調査区は西山の東裾側に広がる中位段丘上に立地する。浦江遺跡群内の南西端部に位置する。標高は52ｍ～56ｍで、旧状は水田である。水田開削時の削平が著しく総じて遺構の残存は良くない。ほとんど耕作土直下で検出される。

造成団地の中央道路部分に当たり、８面の田面が対象となり、９本の試掘トレンチを掘削した結果５本のトレンチで遺構が確認された。造成器材・器機を搬入する工事用道路も兼ねるため、第１に着工予定となり、１～３区の小区に分割。また現有の金武南公園を事業地に取り込んで、西側120ｍ程の地点に代替公園を建設する事となり、これを第４区とした。95年11月20日から着手し、１・４区を終了して最大範囲の３区に着手。遺構検出を３分の２終了した段階で浦江谷２区の調整池部分が最優先とされたため、調査を一旦中断し、開けて96年６月18日から再開し、11月14日に完了した。

各区の概要は以下の通りである。

１区　調査区の北端部に位置し、縄文時代と思われる落し穴１基、15世紀代の東西方向に流れる溝３条・13世紀代の土壙１基・13世紀前後を中心とした柱穴群を検出した。溝の南側には15世紀代の遺構は分布せず、北側に広がる集落の区画溝と思われる。柱穴群は６ｍ程の間隔で南西から北東に並ぶ傾向にあり、建物の重複か柵列と考えられる。

２区　金武南公園の第３次調査区に接する調査区で、縄文時代の落し穴３基・不整形土壙１基・古墳時代前期の落し穴１基・土壙１基・不整形土壙２基・奈良～平安前期の土壙１基・不整形土壙２基・区画溝２条・中世の４×２間の掘立柱建物２棟を検出した。調査区の東側には浅い谷が入り込んでおり、縄文時代から奈良時代までの不整形の溝状遺構が分布する。この谷は３区北側から第３次調査区の北を通り、１区と３次調査区間を谷頭とする小谷で、現在も農業用水路が流れており、現況の地形からも確認される。１区の溝はこの谷につながっている。落し穴は谷の落ち際に沿って並行に分布している。調査区西部でＮ－61°－Ｅ方向に、中央部を3.5×２ｍの矩形に囲って陸橋部をもつ溝SD15・16がある。内部から９世紀前後の須恵器と鉄滓が検出される。同期の柱穴が近くに多く分布し、鉄滓を多く伴う。根石として新羅系の軒丸瓦当が用いられている。掘立柱建物は同方位をとり、主屋と小屋と考えられる。SD15・16を切り、井戸SE17とともに13世紀前後の遺構である。

３区　浦江遺跡群の立地する段丘の南落ち際に位置する。調査区西側は1.3ｍ程の削平を受けており、近世以外の遺構は残存しない。検出した遺構は縄文時代の土壙４基・落し穴３基・弥生時代の落し穴１基・古墳時代の土壙２基・古墳１基・古代の土壙８基・掘立柱建物１棟・製鉄遺構３基・溝７条・木棺墓１基で、奈良時代が中心をなし、弥生・中世は希薄である。古墳は単室両袖の横穴式石室を有する馬蹄形墳で、丘陵稜線の山側に開口する。西山古墳群Ｃ群１号墳に当たる。石室は腰石のみで、これも引き倒され、水田下に完全に埋没していた。周溝底で径15ｍを測る。石室前面ではなく南側の周溝が切れており、墓道と思われる。室内からはⅢｂ～Ⅴ期の須恵器が確認され、最低２回の追葬を行っている。

４区　２区の西側50ｍ程に位置する。既存の金武南公園を開発域に取り込んだため、代替地に公園を移転・建設するために実施した調査である。工事は外周に擁壁を築いて盛り土を行う事となり、調査対象は擁壁基礎部分のみとなった。面積は385㎡である。南半部分は水田開削時の著しい削平のため遺構は残存しない。北半部は柱穴が濃密に検出され、北トレンチの中央部には谷が入り込んでおり、奈良～室町時代までの遺物が多数検出され、鉄滓も目立つ。

2）１区の調査

１区は調査区北端に位置し、３次調査区の北側に接している。検出した遺構は縄文時代と思われる落し穴１基・13世紀前半代の土壙１基・15世紀代の溝３条と柱穴多数である。

①SK01（Fig. 1　Ph. 2）　SK01はAC03グリッドに位置し、溝SD01に切られる。長径195・短径120cmの楕円形の土壙で、断面は船底形、深さ25cmを測る。覆土は褐色土に砂質土・粘質土のブロックを半量混入し、人為的に埋められている。

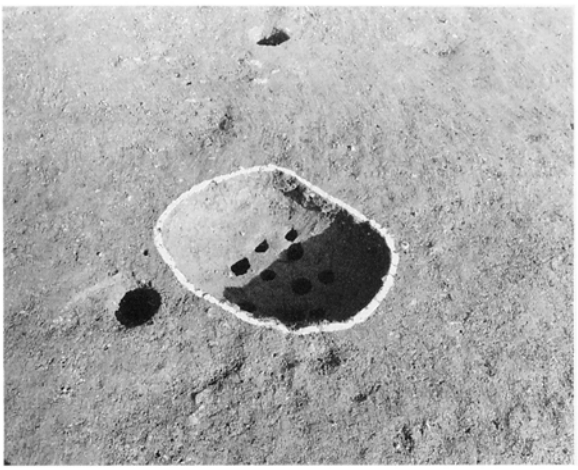
出土遺物（Fig. 2）　１は土師器坏で口径9.5・器高1.5cmを測る。外底は回転糸切り。13世紀前半と思われる。

Ph. 1　１区全景（北から）

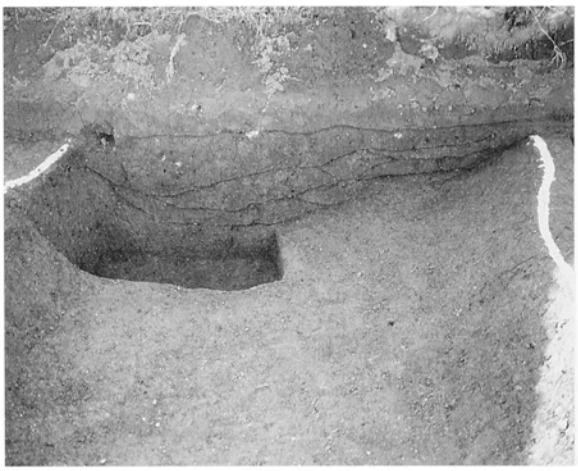
②溝SD01（Fig. 1）　溝は調査区北端部の東西方向に３条検出した。いずれも幅２ｍ弱の狭いもので、北端のSD03、切り合うSD01・02はともに15世紀代である。

SD01は幅180・深さ30cmを測り、SD02を切っている。下位に粘質土・上位に灰褐色の砂質土が堆積し、水成堆積によって埋没している。砂の堆積はなく、溝底に水が淀む程度であったと思われる。

出土遺物（Fig. 2）　２・３は土師器皿でそれぞれ口径８・8.5cmを測る。外底は回転糸切り。13世紀前半～中頃。４は土師器坏で口径12.0器高2.1



Ph. 2　SK02（西から）



Ph. 3　SD01 土層（東から）

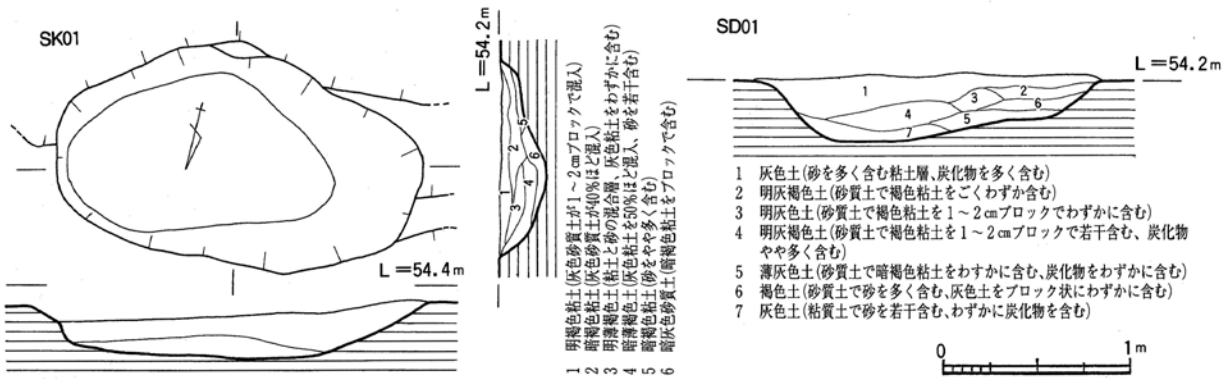


Fig. 1　SK01、SD01（1／40）

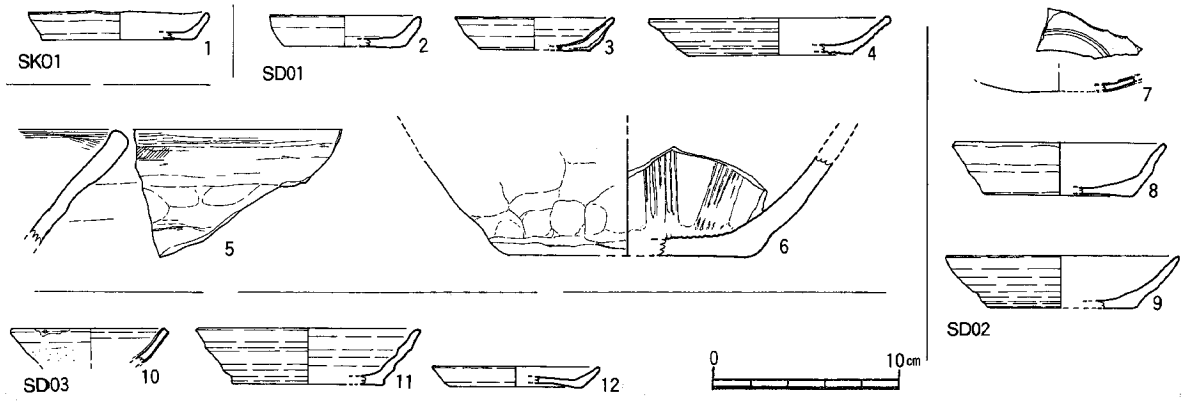


Fig. 2　遺構出土遺物（1／4）

cmを測る。5は土師質の土鍋小片で口縁外面に煤が付着する。6は土師質の擂鉢で底径13cm。内底に櫛歯工具でカキ目を施し、側面に同工具で擂目を7本刻む。15世紀代。

7～9はSD02出土。7は白磁皿で黄白色の釉を施す。8・9は土師器坏で、8は口径11.2器高2.7cm、9は口径12.5器高2.8cmを測る。15世紀代。

10～12はSD03出土。10は口ハゲの白磁小坏で口径8.4cm。11は土師器坏で口径12.0cm器高3cm。15世紀代。12は土師器皿で口径9.0cmを測る。

Fig. 3は柱穴出土の遺物である。柱穴はN－13°－E方向に4～6mの間隔をとって列状に並ぶ傾向にあり（Ph. 1）、柵列の可能性も考えられる。

出土遺物は13～17が土師器坏・18が土師質の土鍋で、19～27は土師器皿である。いずれも回転糸切りで、12世紀後半～14世紀初頭の時期を示しており、13世紀前後が中心で、溝出土遺物にも混入する。溝よりも古い時期を示している。

③　小結　　検出した遺構は南西から北東へ列をなす柱穴群で、柵列の可能性がある。

溝は北端部で東西方向へ延びている。時期はいずれも15世紀代を示している。溝の南側では同期の遺構は検出されておらず、同期の集落は北側の遺跡群中央に広がり、此等は集落の南界を画する区画溝と考えられる。

遺構No.	地　点	種　別	時　期	規　模（m）	主な出土遺物
SK01	AC03	土壙	13世紀前半～中頃	1.95×1.20×0.25	土師器皿
SK02	AE05	落し穴	縄文時代？	0.95×0.8×0.24	
SD01	AB～AD－03	溝	15世紀	10.6＋α×1.8×0.3	土師器（坏・皿）・土師質（鍋・擂鉢）・同安窯系青磁碗
SD02	AB～AC－03	溝	15世紀	7.0＋α×0.9×0.25	白磁皿・土師質鍋・土師器坏・鉄鍋
SD03	AB04	溝	15世紀	3.0＋α×2.2×0.3	白磁皿

Tab. 1　1区遺構一覧表

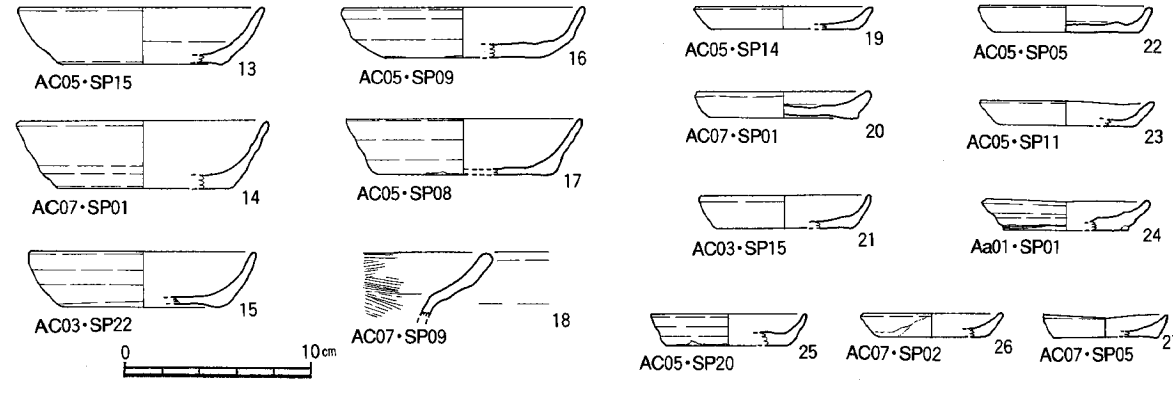


Fig. 3　その他の出土遺物（1／4）

3）2区の調査

2区は第3次調査区に接する東西方向の調査区で、北と東が谷に面してゆるく傾斜する。標高は55.8m。土層は（Fig. 4）1～4層が2面の水田耕作土と客土層。5層は水成堆積層で土砂流の堆積。6層は15世紀代以前の包含層である。

検出した遺構は縄文時代の落し穴3基・不整形土壙1基、古墳時代前期の落し穴1基・土壙1基・不整形土壙2基、奈良～平安前期の土壙1基・不整形土壙2基・区画溝2条、14～15世紀代の掘立柱建物2棟を検出した。

①SK01（Fig. 5 Ph. 5） AJ16に位置する縄文時代と思われる落し穴で長軸148・幅60・深45㎝を測る。床面に3穴の杭跡がある。覆内は明黄褐色の粘質土である。

②SK09（Fig. 5 Ph. 6） AM18に位置する同期の落し穴で長軸108・幅82・深さ48㎝と小振りで、中央に1本の径16㎝の太い杭跡を有する。

他にAL17にSK10があり、等高線に沿って直線上に分布している。

同期の遺物としてはFig. 6の石器がある。28は古銅輝石安山岩製のスクレーパーで谷部のSX11出

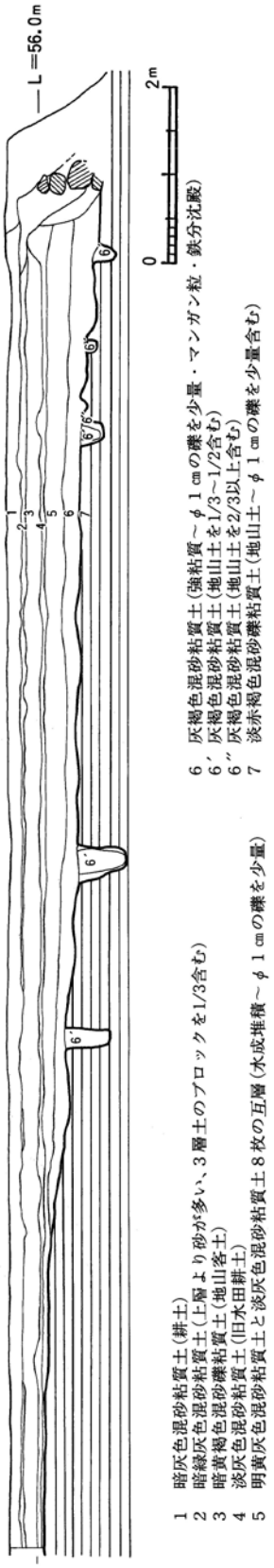


Fig. 4 西壁土層(1／80)

Ph. 4 2区全景（西から）

Ph. 5 SK01（西から）

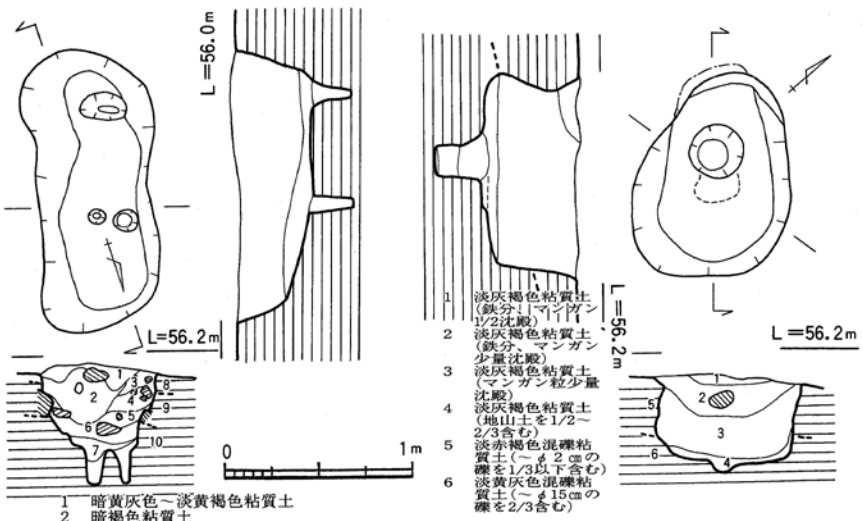
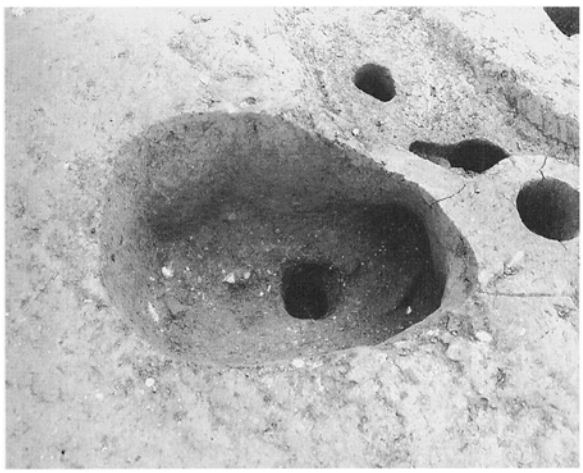


Fig. 5 SK01、09（1／40）

土。右側縁に主剥離面からの刃部調整を行う。29は姫島産黒耀石の石核で、角礫を各方向から剥離を行う。30は黒耀石の円礫を用いた石核で、風化の度合いによって2時期の剥離が観察される。31は黒耀石製の錐と思われ、先端部を欠く。

②SD15・16（付図4） AF～AH13に位置する。溝の中央部に3.5×2mの矩形の区画を設け、南東中央に幅1m程の陸橋部をつくり入口としている。溝内より9世紀前後の須恵器と鉄滓が検出される。

同期の資料としてはFig. 7がある。32・33・35～38は須恵器で8世紀中頃～9世紀初頭に当たる。40は新羅系の蓮弁軒丸瓦の瓦当部で裏面を上にして根石に用いられていた。

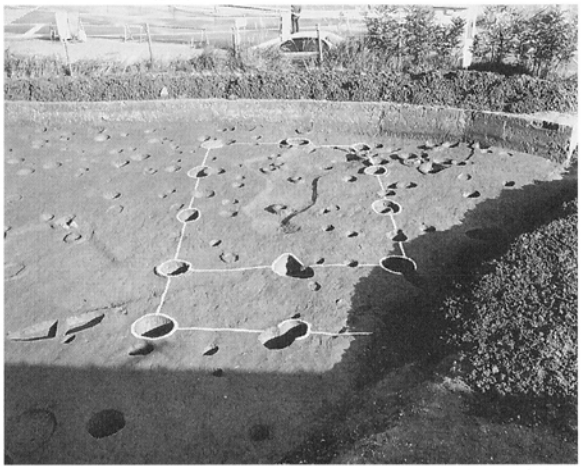


Ph. 6 SK09（北東から）

③SB18（Fig. 8 Ph. 8） 桁行7.4m・梁間3.8mの3×2間の建物で主軸をN－5°－Eにとる。Fig. 7の33は出土遺物であるが、SD15・16を切っており後出のものである。

④SB14（Fig. 8 Ph. 7） 桁行3.8m・梁間2.8mの4×2間の建物で桁行の柱間が狭い。主軸はN－7°－EとSB18に平行しており、主屋と小屋と考えられる。SB18の西側8mの位置に平行して井戸SE14があり、内部より龍泉窯系青磁小碗片34が出土。建物と同期と考え、14世紀代と思われる。

Ph. 7 SB14（西から）



Ph. 8 SB18（南から）

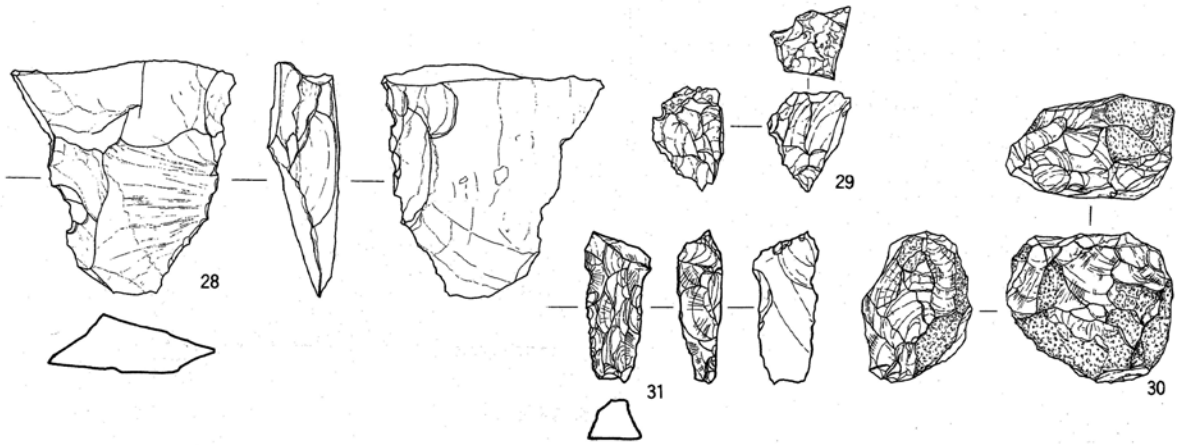


Fig. 6 出土石器（1／2）

Tab. 2　2区遺構一覧表

遺構No.	地点	種別	時期	規模（m）	主な出土遺物	遺構No.	地点	種別	時期	規模（m）	主な出土遺物
SK01	AJ-16	落し穴	縄文時代	1.48×0.6×0.45		SK10	AL-17	落し穴	縄文時代	1.87×0.82×0.33	
SK02	AK-15	不整形土壙	9C前後	1.54×0.99×0.25	土師器皿	SX11	AL-16	不整形土壙	縄文時代	7.0×5.5×0.6	スクレーパー
SK03	AM-16	土壙		0.80×0.40×0.18		SX12	AM-16	不整形土壙	古墳前期	7.6×2.3×0.6	土師器壺
SK04	AM-18	土壙	古墳前期	0.85×0.68×0.36	土師器甕	SX13	AN-18	不整形土壙	9C前後	5.8×2.4×0.58	須恵器坏・土師器甕
SK05	AM-17	土壙	9C前後	1.58×1.20×0.29	土師器（坏・甕）	SB14	AH-14	掘立柱建物	14C	3.8×2.8（4×2間）	須恵器坏蓋
SK06	AM-17	落し穴	古墳前期	1.30×0.63×0.32	土師器壺	SD15	AF-13	溝	9C前後	7.15×2.00×0.08	土師器甕
SX07	AM-18	不整形土壙	古墳前期	1.90×0.50×0.26	土師器壺	SD16	AG-12	溝	9C前後	6.10＋α×5.00×0.07	須恵器坏蓋・土師器カマド・鉄滓(1)
SX08	AM-18	不整形土壙	弥生～古墳	11.4×4.6×0.25	土器片	SE17	AE-13	井戸	14C	0.68＋α×2.00×1.14	龍泉窯系青磁碗・土師質土鍋・炉壁・須恵器（坏・甕）
SK09	AM-18	落し穴	縄文時代	1.08×0.82×0.48		SB18	AG-13	掘立柱建物	14C	7.4×3.8（3×2間）	同安窯系青磁碗・須恵器高台坏

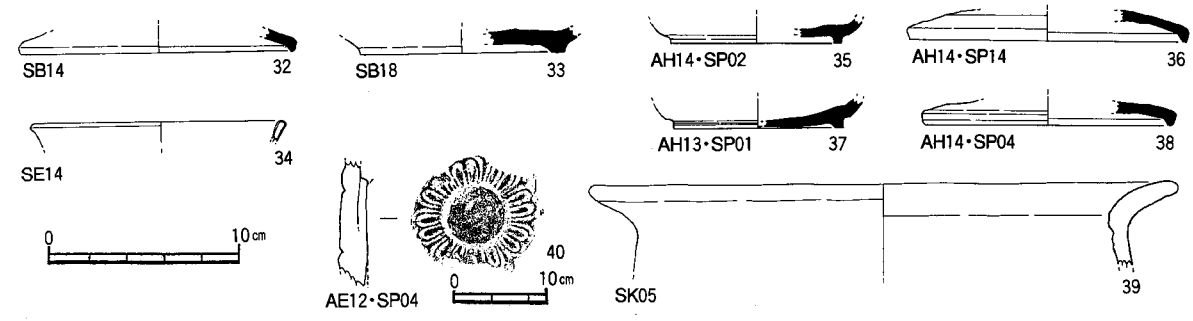


Fig. 7　出土遺物（1／4、1／8）

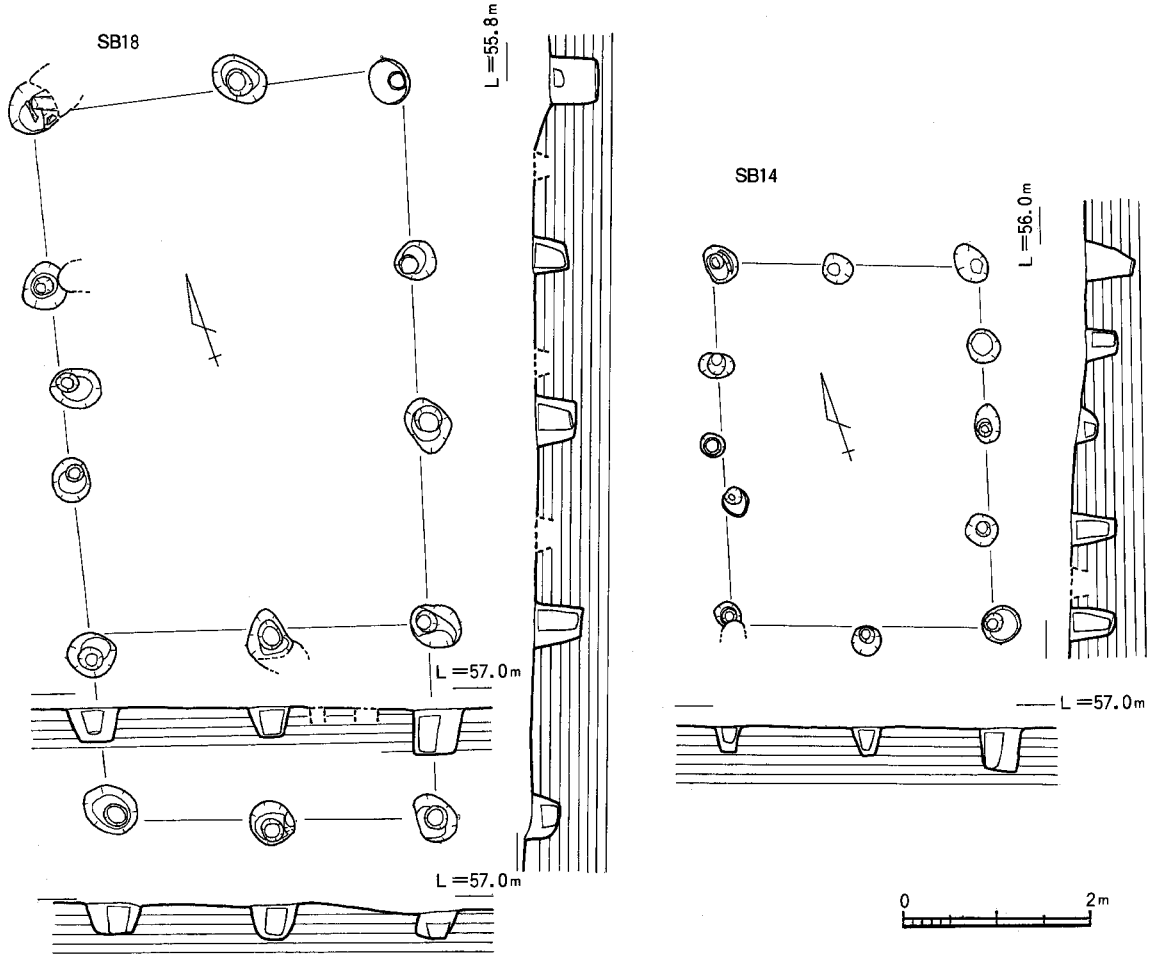


Fig. 8　SB14、18（1／80）

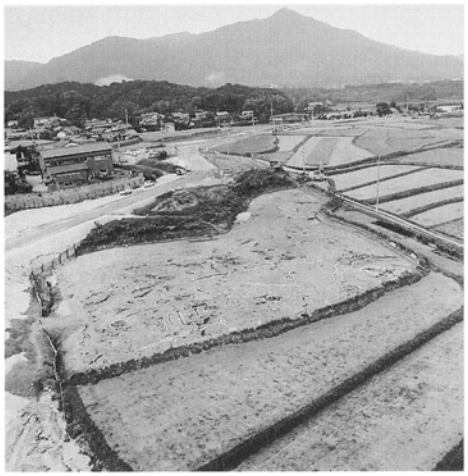
4） 3区の調査

遺跡群の立地する中位段丘の南落ち際に位置し、3面の水田が開かれており調査区西側は2区から1.3m程切り下げられている。検出した遺構は縄文時代の土壙4基・落し穴3基・弥生中期後半の落し穴1基、古墳時代の土壙2基・横穴式石室墳1基（西山古墳群C群1号墳）、古代の土壙8基・掘立柱建物1棟・製鉄遺構3基・溝7条・木棺墓1基で、明確な中世遺構は検出されない。弥生時代・古墳時代の生活遺構も希薄で、中心は奈良時代である。

①SK04（Fig. 9　Ph. 10）　BC20に位置する縄文時代と思われる落し穴である。長軸162・幅80深さ72cmを測る楕円形の土壙で、床面軸線上の2ケ所に径15cm程の2本ずつの4本の杭跡が残る。覆土は明黄灰色土である。他にも3～8mの間隔でN－33°－Wの直線上に同期の落し穴・土壙が7基分布しており、ほぼ等高線に沿って分布している。丘陵から段丘に移りかわる地形変換線に沿っていると思われる。

同期の遺物はFig. 15の93・94がある。93は黒色の頁岩の横長剥片を用いた偏平打製石斧で、長さ15.7幅6.0厚1.8cm重量172gを測る。四周に2次剥離を施し、刃部のみを研いでいる。94は黒耀石製の鏃で長さ2.2cm重量0.6gを測る。中央稜線部に1次剥離面が残る。

②西山古墳群C群1号墳（Fig. 10　Ph. 11～14）　今回の調査によって確認された古墳で、石室の高い側壁は内側に倒され、水田下に完全に埋没していた。BE20に位置し、丘陵稜線上に占地している。谷頭側の南東に開口する単室両袖の横穴式石室を主体とする円墳で、墳丘後方が調査区外であるため全容が明かでないが、前面が直線的な馬蹄形と思われる。



Ph. 9　3区全景（南から）

墳丘盛土は全く残存せず、削平され地山が露出している。周溝底から4～40cmを測る。径は周溝外縁で16.7m溝底で15.0mを測る。

周溝は幅0.7～2.5mで北側の谷部に向け低くなり、最高部から110cm程下がる。石室南の前面右隅部が110cm程開き、墓道となっている。左前面に須恵器大甕3個体分はじめ、壷・坏等多数の須恵器が底面から30cm程浮いた状態で6m程にわたって破砕された状態で検出されている。

石室掘方は長軸6.4m幅は玄室側で3.7羨道側で2.9mの隅丸の長台形を呈している。石室裏込めには20cm程の幅の

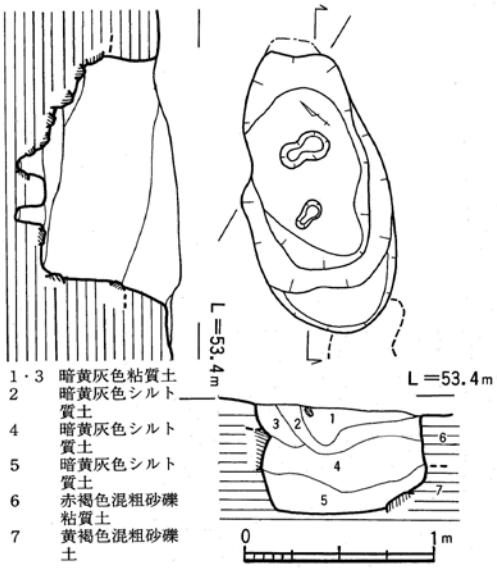


Fig. 9　SK04（1／40）

Ph. 10　SK04（北から）

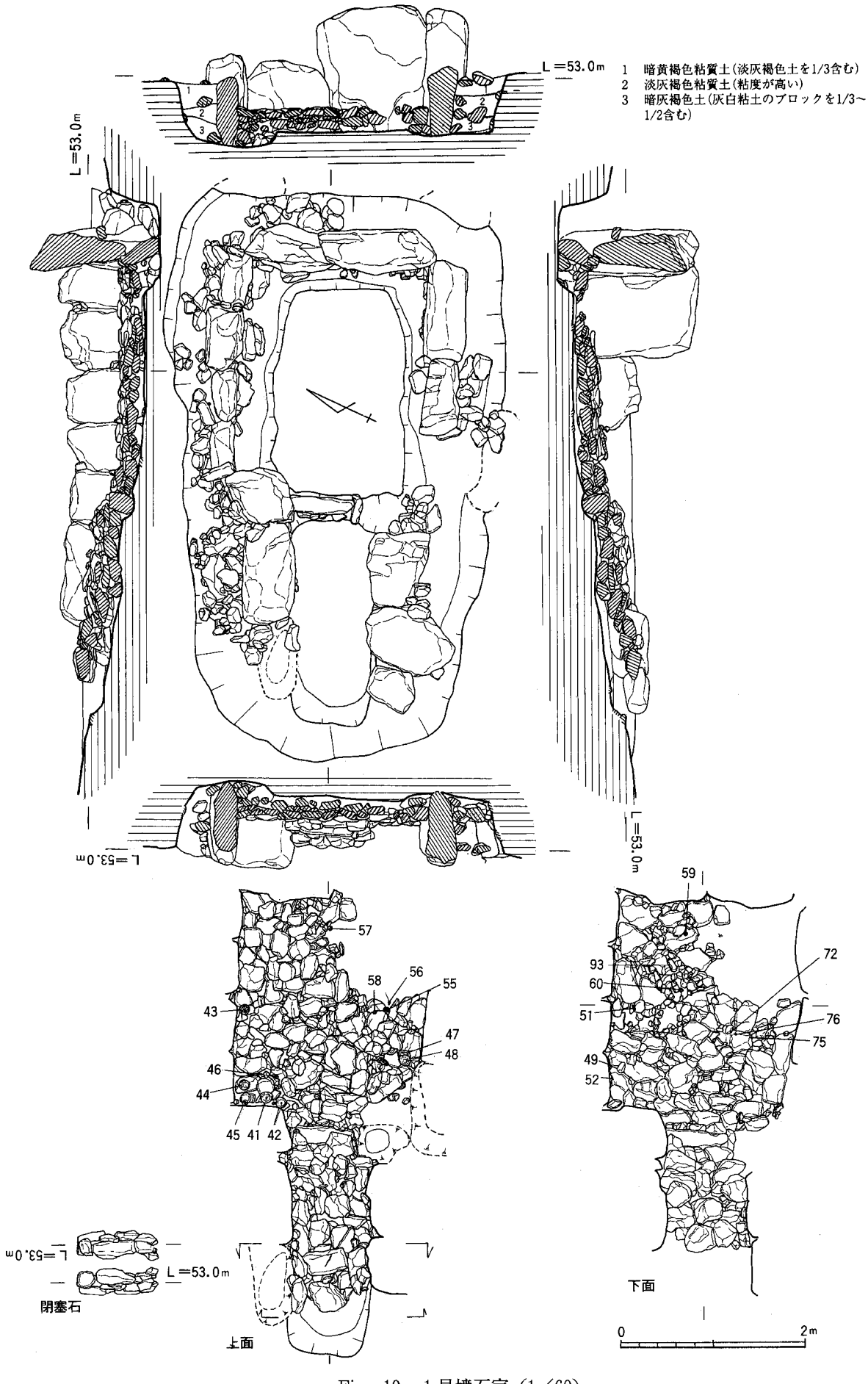


Fig. 10　1号墳石室（1／60）

粘質土で版築状に埋めている。床面は羨道部を40㎝玄室を60㎝程の段状に切り下げ、さらに四壁の腰石部分を15㎝程の溝状に掘削し、四壁を構築している。

石室は花崗岩の自然石を用い、全長4.2幅1.95ｍの単室両袖の石室を構築し、主軸をＮ－65°－Ｅにとる。水田開削時に削平され、80㎝程の腰石が残るのみで、これより高い奥壁・右側壁は内部に引き倒されていた。玄室は長さ2.25奥壁で1.95玄門側で1.85ｍを測る。奥壁は２石よりなる。高さ1.33ｍ。腰石は平坦面を縦位に用いている。床面は２面の、20㎝前後の偏平礫を用いて敷石がなされ下面が大振りである。玉類の大部分と鉄器は下面、須恵器は上面敷石上で主に検出される。羨道は長1.95幅0.85ｍを測る。腰石は３石でなされ、平坦面を横位に置く。敷石も玄室同様、２面行っている。閉塞は横長の石を下に並べ２段程残っている。梱石は横長の石に偏平礫を２石程小口にはさんでいた様である。

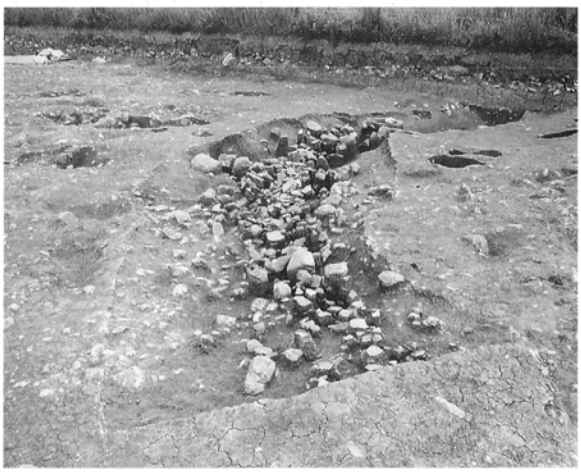
出土遺物（Fig. 11）　41～48は須恵器で左袖石の下と左右側壁の下で検出された。Ⅲｂ新～Ⅴ段階までのもので、47・48はⅢｂ新段階で重なって右側壁側で検出された。49～54は鉄製品で全て下面で検出。鏃49と弓金具54は左袖石前、刀子51は左側壁側で検出された。55～58は上面検出の装身具で、中央から右寄りに検出される。55・56は金環で1セット。57は滑石製勾玉・58は水晶切子玉である。59～76は下面検出の装身具で、中央奥から右側に分布する。59～61は径2.2㎝程の金環。62～66は水晶製の切子玉と管玉、67～76はガラス小玉で67は明黄色、68は水色他は濃紺色を呈する。

81～85は周溝出土須恵器の一部で石室内資料より一形式古い。またヘラ記号も一致しない。79で受け部径13.8㎝、85で胴径45㎝、84で口径50㎝を測る。Ⅲｂ古段階からⅤ期までが出土する。よってⅢ

Ph. 11　１号墳全景（上空から）

Ph. 12　石室上面（南から）

Ph. 13　石室下面（西から）



Ph. 14　周溝遺物出土状況（南から）

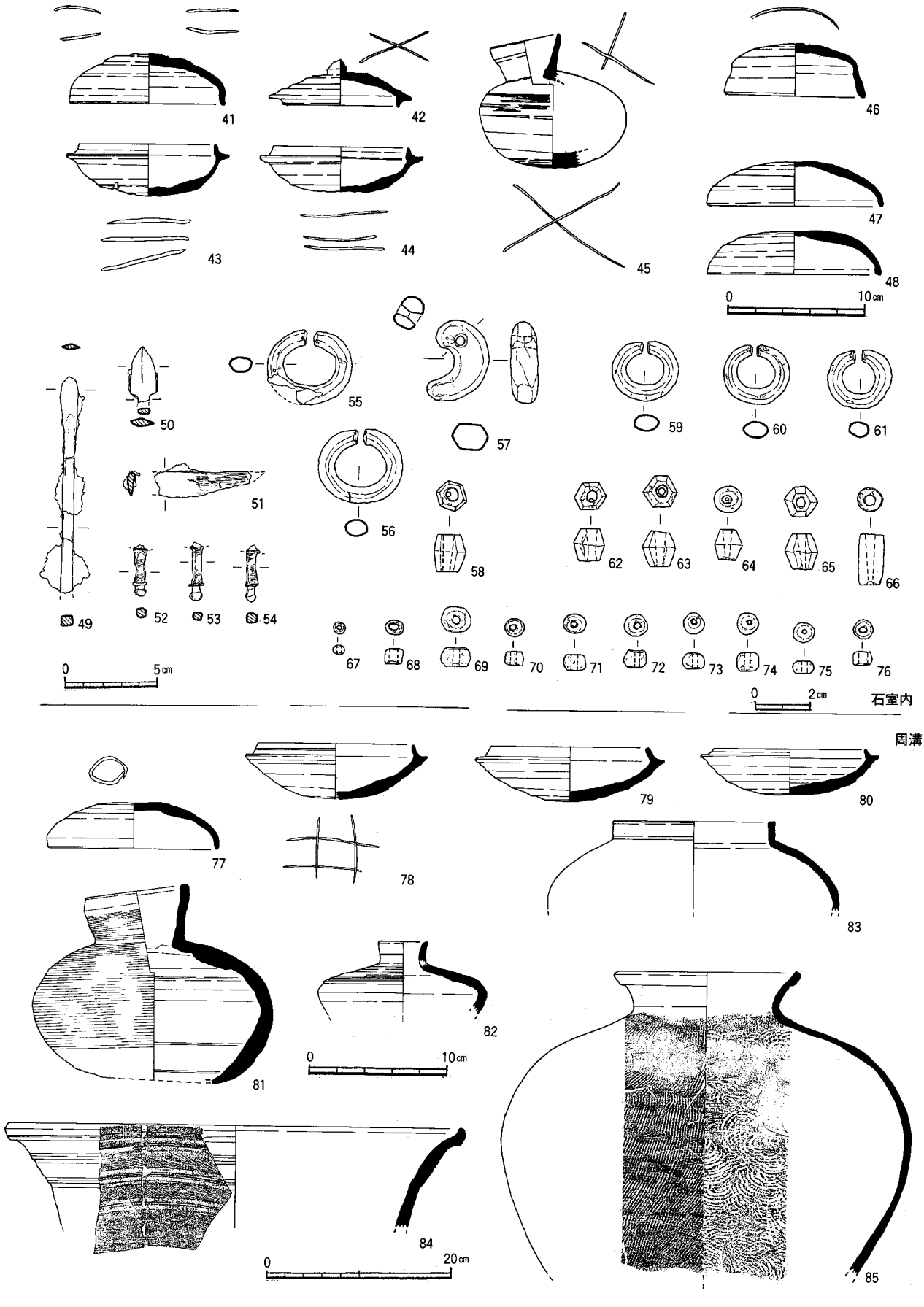


Fig. 11　1号墳出土遺物（1／2、1／4、1／6）

Ph. 15　SK10 検出状況（南から）

Ph. 16　SK11 土層断面（東から）

Ph. 17　SB36（上空から）

b期に築かれV期まで、最低3回は追葬が行われ、その都度墓前で祭りが執り行われ、使用した土器は破砕され周溝に捨てられたと思われる。

③SK10・SK11（Fig. 12　Ph. 15・16）　調査区北側の谷に面したBA17グリッド付近に近接して位置する。SK10は長軸142幅95cmの隅丸方形で、深さ35cmを測る。壁面の1～2cm程が環元焼成・外側3cm程が酸化焼成されている。床上に2～5cm程炭粒を半量含む灰が堆積し、上面に多量の礫を投げ込んで埋め戻している。覆土中から8世紀代の須恵器坏蓋・甕を検出しており、同期の製鉄炉の可能性が考えられる。SK11も86×74cm程の隅丸方形の土壙で壁面は同様の焼成を受けており床直上と上位に炭灰層が堆積する。同様の遺構と思われる。

④SK26（Fig. 12）　掘立柱建物SB36の前面、BE25に位置し、鉄滓、羽口を検出する8世紀前半の溝SD18の覆土上に設けられている。36×28cmの円形の中央部が2cm程くぼみ内側から還元・酸化と焼成が5cm程なされ、一部に鉄滓が残存する。鍛冶炉と考えられる。

⑤SB36（Fig. 13　Ph. 17）　調査区南東部のBE26付近の段丘落ち際に位置する。東半部が調査区外で全容が明かでないが、桁行10.22梁間2.32m以上の5×1間以上の大型の掘立柱建物である。主軸をN－8°－Eにとる。掘方は75～50cmとバラつきがあるが、柱痕跡は径15～20cmにまとまる。柱間は1.78～2.32mとこれもバラつきが目立つ。

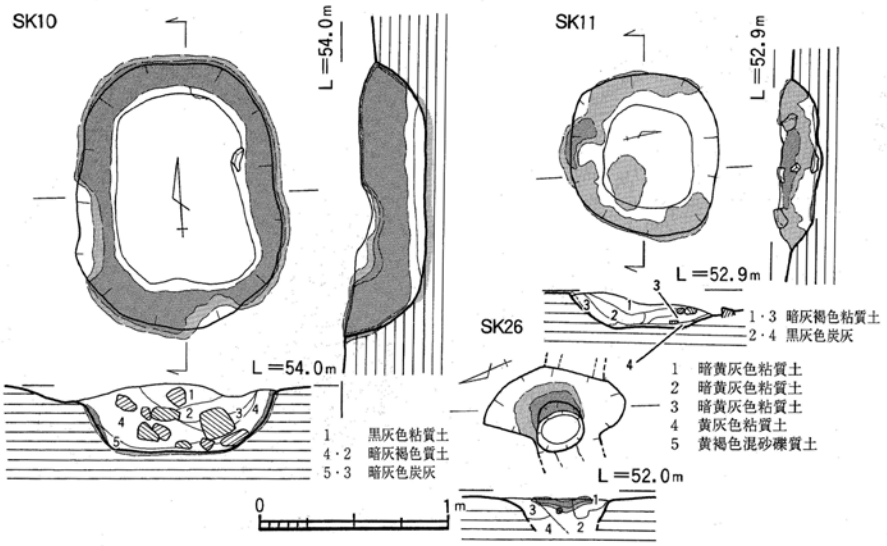


Fig. 12　SK10、11、26（1／40）

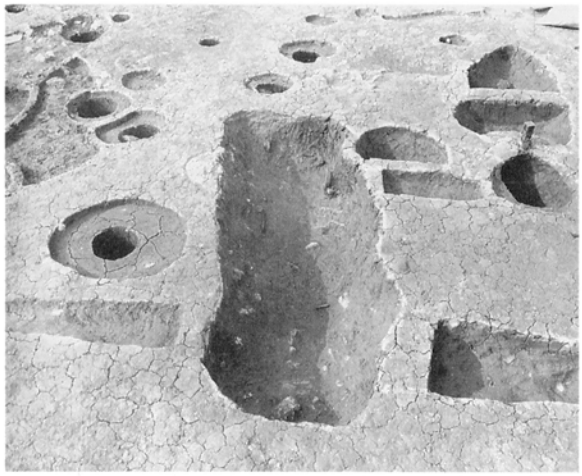
Fig. 15の86・87は柱

穴からの出土品でともに須恵器で8世紀後半から9世紀前後にあたる。

建物の南2.5m・西14.5m程の直交方向にBC23のSD36～BE27のSD25まで6本の溝が途切れながら巡っており建物を区画している可能性がある。同期の約半分の遺構が納まる。

⑥SR13（Fig. 14　Ph. 18）　BD25に位置する木棺墓で、長195・幅88深さ33cmを測る。北側が方形でやや広く、供献土器を伴うところから、北が頭位と思われ、軸線はN－40°－Eをとる。棺外と思われる北端に刀子を、棺内頭位左側の位置に土師器坏を供献していたが、現場作業の休日に荒らされ、不明となっている。1号墳・SK27からも数点抜かれており、心ない行為に憐れみを憶える。盗掘の際内部をかなり撹乱しており、釘の位置はスタンプ・写真等で復元した。88～92は出土遺物で、88は須恵器皿の底部で一部に墨書が見える。奈良時代の混入品である。89は刀子で鞘の木質が残る。90～92は釘で90は化粧釘と思われる。92は板目板から木口への打込みが観察できる。供献の土師器坏は10世紀代であったと記憶している。

平安時代の他の遺構は弥生同様希薄で、北に土壙が1基、区画溝内に、奈良時代の小溝に並行する小溝3条を検出したのみで、白磁碗も検出されない。



Ph. 18　SR13（南から）

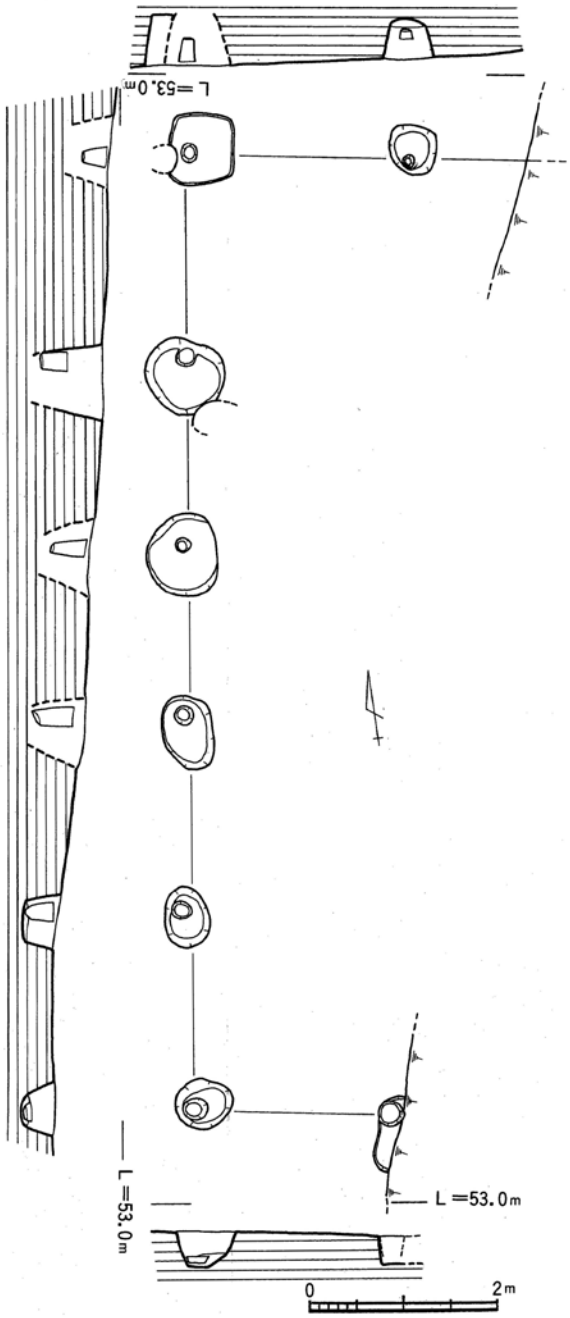


Fig. 13　SB36（1／80）

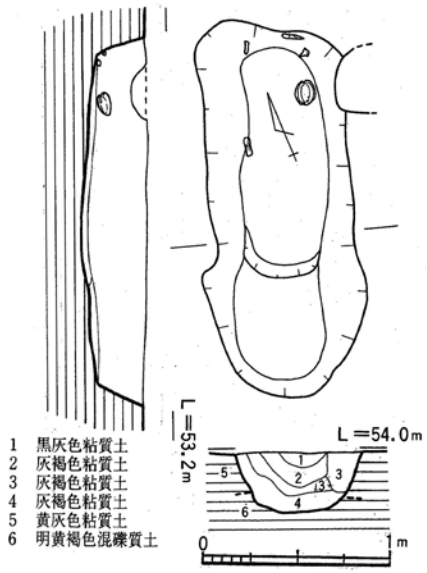


Fig. 14　SR13（1／40）

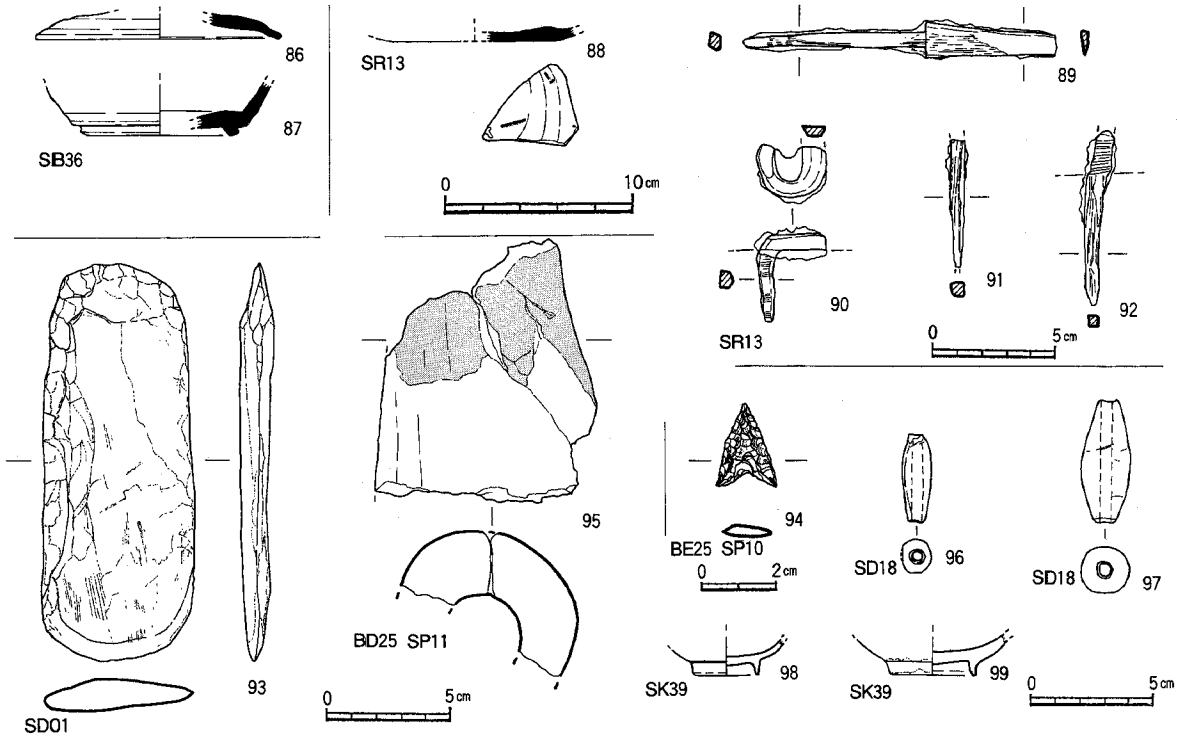


Fig. 15　SB3、SR13 他出土遺物（1／4、1／3）

⑦その他の遺物（Fig. 15）　95は柱穴内検出の吹子の羽口、上部が還元焼成される。96・97は管状土錘でSD18出土。それぞれ4.7・15ｇを測る。98・99はSK39出土の近世肥前系白磁である。

4）4区の調査

4区は2区の西側50ｍ程の丘陵裾に位置し、調査区内で高位置にあり、標高61ｍを測る。金武南公園の代替公園建設に伴う調査で、協議の結果盛土施工となり、擁壁の布掘り部分を調査対象とした。現況は2面の水田で、開削時に南の丘陵部を著しく削平しており、南半部に遺構は残存しないが、北半部は柱穴が密集する。北トレンチの中央部には谷が入り込んでおり、奈良～室町時代までの遺物が多く検出され、特に奈良時代と中世遺物が目立つ。鉄滓も多く含んでいる。2区同様、谷部の旧耕土上に客土を行って現在の水田をつくっており、旧耕土直下の暗褐色土と暗赤褐色土が包含層となっている。

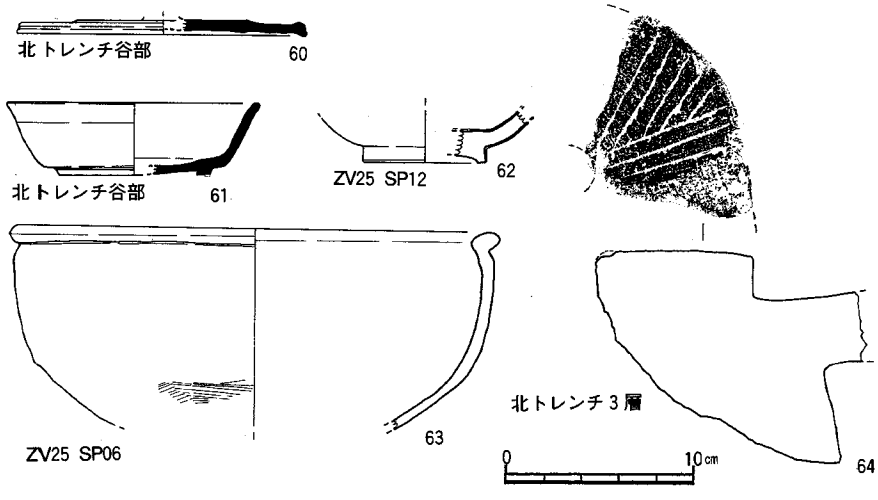


Fig. 16　出土遺物（1／4）

出土遺物（Fig. 16）

遺物はコンテナ1箱出土し、385㎡の調査面積の割りには多い。

60・61は須恵器で、60は坏蓋で径15.2㎝を測る。口唇部は凹線状をなし、内側のかえりはゆるい。8世紀末～9世紀初め。61

Ph. 19　北トレンチ（東から）

は高台坏で、口径13.2㎝を測る。体部は直線的にのび、高台は屈曲部の内側につく。８世紀後半。62は龍泉窯系の青磁碗で、高台脇まで施釉し、外底は露胎。見込みに印花文がある。13世紀。63は口径26㎝の土師質の鍋で胴部下にヨコハケメを施す。13世紀。64は礫砂岩製の茶臼の下臼で径18㎝程。小片のため主溝・副溝の数は不明。臼の上面と皿部は丁寧にケンマする。端部は打ち欠いている。裏面はタガネ痕を残したままである。

５）小結

調査の結果、各区から縄文時代の落し穴が検出され、猟場となっていた様で住居の検出はない。

弥生時代はさらに希薄で、３区で落し穴が２基確認されるのみであり、土器の検出もほとんどない。

古墳時代も同様で落し穴と土壙が数基認められるのみで、６世紀後葉に到って西山古墳群Ｃ群１号墳が築造される。墳丘径15ｍ程の馬蹄形墳と思われ、稜線上に立地し、Ｂ群の占地の延長線上にある。墳丘規模ではＢ群１号墳に次ぐ。石室は単室両袖で全長4.2ｍ、これも5.6ｍの１号墳に次ぐ。玄室の腰石の平坦面を縦長に裾え、羨道床面を高く作る等、構造的には腰石を横位に据える２号墳との中間に位置する。築造はＢ群１号→Ｃ群１号→Ｂ群２号→Ａ群１号と考えられる。Ａ群１号墳は正方形・横長の石室・長大な羨道・丘陵斜面の占地等、浦江谷Ａ群・Ｃ群に近く、稜線占地の浦江谷Ｂ群１号は本古墳に似る。時期差であると思われるが、広い稜線部を残して何故斜面に移行するのか今後の検討としたい。

遺跡の中心時期は奈良時代で、３区に製鉄遺構・区画溝に囲まれた大型建物・墨書須恵器を検出している。都地遺跡では同期の多量の炉壁・鉄滓と「大殿」の墨書須恵器があり、関連が深い。

中世は２区西半～１区・４区に広がっており、建物・溝等が検出され、この頃には低位の３区は水田に開墾され、集落は高位の１～４区に移っていると考えられる。

Tab.　3　　3区遺構一覧表

遺構No.	地点	種別	時期	規模（m）	主な出土遺物	遺構No.	地点	種別	時期	規模（m）	主な出土遺物
SO01	BF-20	古墳	古墳後期	16.8m	須恵器(坏・坏蓋・平瓶・壺・甕)・鉄鏃・刀子・弓金具・水晶管玉・切子玉・滑石勾玉・ガラス小玉・耳環・鉄滓(16)	SD19	BD-25	溝	８Ｃ	2.50＋α×0.30×0.10	須恵器(坏)土師器(坏・甕)鉄滓
SK02	BD-21	土壙	縄文時代	1.98×1.06×0.12	黒耀石(fl)	SD20	BD-26	溝	10Ｃ	2.48×0.28×0.08	弥生土器(甕)土師器(埦)
SK03	BB-20	落し穴	縄文時代	1.23×0.90×0.70		SD21	BD-25	溝	10Ｃ	1.73×0.25×0.11	土師器(坏)
SK04	BC-20	落し穴	縄文時代	1.62×0.8×0.72		SK22	BE-25	土壙	８Ｃ	2.73×0.74×0.23	土師器
SK05	BB-19	落し穴	縄文時代	1.71×1.57×0.74		SK23	BE-23	不整形土壙	古墳～奈良	2.13×0.85×0.15	土師器
SK06	AY-15	落し穴	弥生中期	2.35×0.85×0.98	弥生土器(壺)	SK24	BD-24	不整形土壙	８Ｃ	2.10×0.78×0.07	須恵器(坏)土師器(甕・坏)
SK07	BC-18	土壙	10～11Ｃ	0.80×0.55	土師器(埦・甕)鉄滓(12)	SD25	BE-27	溝	８Ｃ	3.13＋α×1.57×0.20	須恵器（坏・甕）土師器(坏・甕) 炉壁・鉄滓(1)
SD08	AZ-16	自然流路	８Ｃ	1.59＋α×2.57×0.11	須恵器(坏)・鉄滓(2)	SK26	BE-25	鍛冶炉	８Ｃ	0.36×0.28×0.05	須恵器(坏)土師器(坏・甕)鉄滓
SD09	BA-17	自然流路	８Ｃ	2.10×2.17×0.49	鉄滓(2)	SK27	BD-26	土壙	８Ｃ	1.87×1.95×0.54	須恵器(甕・坏・蓋・高坏・壺・平瓶)土師器(坏・蓋)砥石・焼塩壺・鉄滓(14)
SK10	BA-17	製鉄炉	８Ｃ	1.42×0.95×0.35	須恵器(坏蓋・甕)	SK28	BC-25	土壙	古墳時代前期	1.88×1.64×0.27	土師器(甕・坏)黒耀石(fl.核)
SK11	BB-18	製鉄炉	８Ｃ	0.86×0.74×0.17	焼石	SK29	BC-21	土壙	古墳時代後期	1.50×1.11×0.19	須恵器(甕)
SK12	BE-23	土壙	８Ｃ	1.45×1.45×0.33	須恵器(坏)土師器(高坏・甕)	SD30	BC-22	溝	８Ｃ	4.10×1.04×0.13	須恵器(坏)
SR13	BD-25	木棺墓	10Ｃ	1.95×0.88×0.33	土師器(坏)切子・釘・須恵器(甕・坏蓋)・鉄滓	SK31	BA-23	方形土壙	８Ｃ前半	1.21×1.05×0.22	須恵器(坏・蓋)土師器(甕・坏)
SK14	BD-22	土壙	縄文時代	1.29×1.22		SK32	BB-24	方形土壙	８Ｃ	0.90×0.89×0.17	須恵器・土師器(甕・坏)
SK15	BD-22	土壙	縄文時代	1.15×1.06×0.28		SK33	BC-21	土壙	縄文時代	1.32×1.39×0.52	
SD16	BD-25	溝	10Ｃ	4.18×0.35×0.14	土師器(埦・坏)・鉄滓(1)	SD36	BE-27	掘立柱建物	９Ｃ前後	10.2×2.3＋α(5×1間＋α)	須恵器(高台坏・坏蓋)・鉄滓
SK17	BE-23	土壙	縄文早前期	0.75＋α×1.43×0.38	黒耀石(fl)サヌカイト	SK39	AY-18	土壙	近世	1.15×0.82	白磁(碗)
SD18	BD-25	溝	８Ｃ前半	3.50＋α×0.42×0.14	須恵器(坏)土師器(高台坏・甕)土錘・羽口・鉄滓	SK40	BE-19	落し穴	弥生～古墳	2.78×1.23×0.95	

10. 黒塔A遺跡第一次調査

（1）概要

黒塔A遺跡群は浦江谷遺跡群の南に隣接する遺跡群で、西山から北東方向に延びる舌状の丘陵が開析されて形成された河岸段丘の先端部に位置する。1次調査区では丘陵の最も北東に位置する丘陵端部の調査を行なった。調査区内は現状ではほぼ平坦で、北東方向への傾斜がみられる。調査区の東側は急な崖面となり、10mの落差をもって室見川岸に面する。

調査地点が道路で区切られている事情により、調査はA、B両地区に分割して行なわれ、9月11日より11月5日まで実施した。調査面積は計1,190㎡である。

A区は段丘から北に下る斜面上に位置し、標高は40m前後をはかる。現況では水田となっていて現状で大きく削平されており検出できた遺構は少なく、包含層内で弥生時代の遺物を検出している。

B区でも削平を大きく受けているが、甕棺墓群を検出することができ、その基数は確実なもので48基をかぞえる。この他に土壙（土壙墓の可能性がある）とピット群を検出している。遺物は甕棺の他に弥生時代中期の土器を検出しているが、いずれも甕棺墓に関連するものと考えられる。

（2）A区

1）遺構

調査の結果、調査区南側の丘陵上部では造成によって地表面がかなり削られており、また水田開削時の段造成が加わって原地形は相当の改変を受けているが、削平の比較的少なかったと見られる部分で遺構を検出している。遺構面は明薄褐色粘質土で、礫を多く含む層である。検出された遺構は柱穴が中心だが遺構の密度は薄く、建物を構成する配置とはなっていない。また斜面部分に暗褐色の包含層が遺存しており、層中から遺物が出土している。

2）出土遺物

出土遺物は柱穴からの他に包含層からの出土遺物も含まれる。図示した遺物は全て包含層からの出土である。1は甕形土器の口縁部で、断面三角形を呈する。弥生時代中期初頭に属する。2は小型甕形土器の口縁部。弥生中期か。3は甕棺口縁部で弥生時代中期中頃と見られ、B区の甕棺墓群との関連が考えられる。4も弥生時代中期の壺形土器の口縁部で、甕棺に使用された可能性が高い。5～7は甕形土器の底部で、5、6は弥生時代中期初頭に属する。8は軽石で、重量46gを計る。

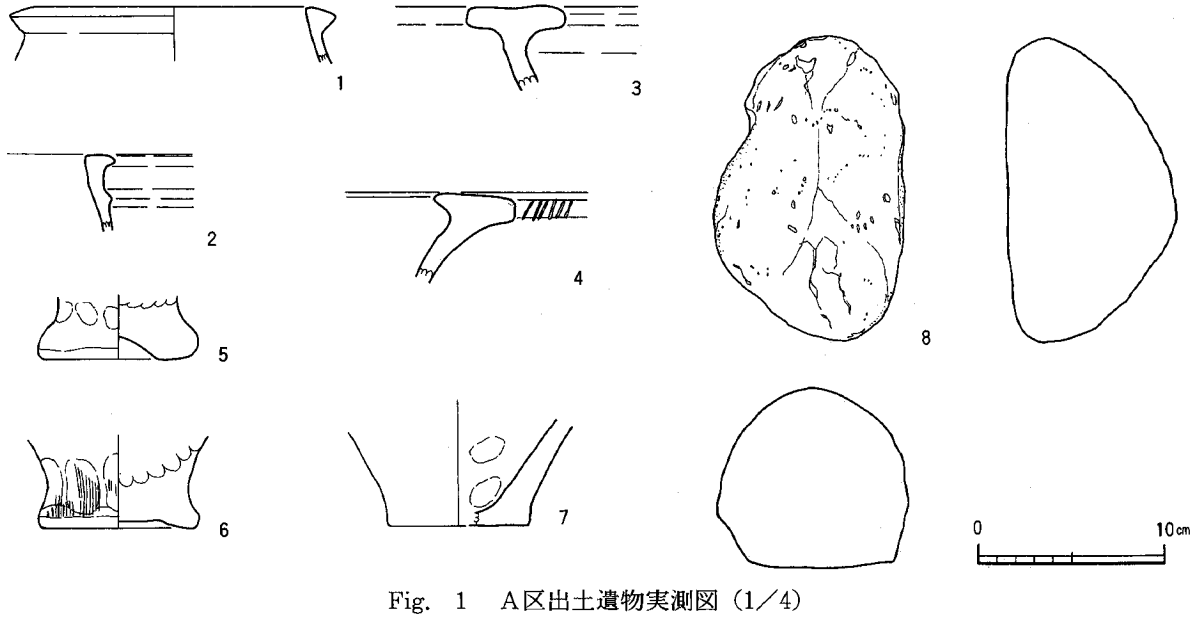


Fig. 1　A区出土遺物実測図（1／4）

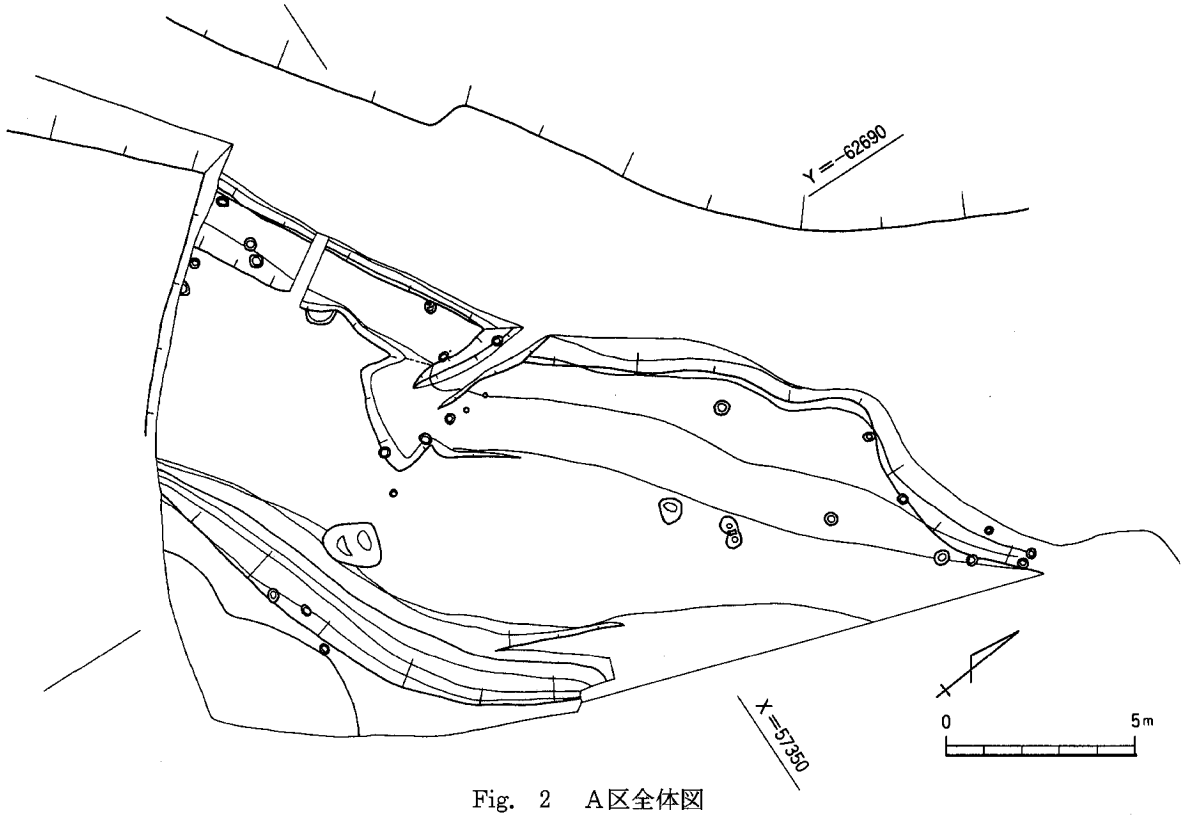


Fig. 2　A区全体図

（3）B区

1）遺構（甕棺墓）

B区では甕棺墓・土壙墓群、柱穴を検出する。検出面は明褐色粘質土で礫を多く含み、遺構は礫混じり土を掘削しているが、いずれも大きく削平を受けており、遺存状況はかなり悪い。柱穴は調査区南側を中心に検出され、甕棺墓築造以後のものと考えられるが、建物等は認められず時期も不明である。以下甕棺墓を中心に遺構、遺物について述べていく。

甕棺墓　調査区内からは確実なもので48基、墓構内に原形を留めない甕棺破片を大量に含む土壙を含めると50基の甕棺墓を検出した。内容は明らかになったもので大型棺21基、小型棺26基である。甕棺墓の分布域は調査区北側に集中し、南側には甕棺墓の広がりは見られず、甕棺墓墓域はほぼ検出された範囲でおさまるものとみられるが、墓域北側は崖の崩壊で失われた甕棺墓もあるとみられる。遺存状況は概して悪く、底部のみ遺存する甕棺墓も多く、また削平がひどく復元不能となった甕棺もある。特に小型棺の残りが悪く、削平によって完全に失われた甕棺もあるとみられる。

墓域構成には明瞭な甕棺列や群の規格性は伺えないが、大型棺の周囲に小型棺が集中する傾向が一部でみられる。甕棺主軸方向は地形に制約されて北東－南西方向と北西－南東方向に集中する。甕棺の埋置形態はほとんどが水平埋置で、一部で緩い傾斜埋置を行なっているが、これらの傾向は他の遺跡の甕棺墓で安定して見られる様相で、浦江谷１次２区の甕棺墓群の様相と対照的である。同様に特殊な埋葬形態の甕棺墓も本調査区では見られない。甕棺の埋葬形態としては比較的安定した墓群であるということが言える。墓壙の断面形態は削平が著しいこともあり、十分に判る資料が少ないが、傾斜埋葬の甕棺の相当の基数が横穴をもつ形態の墓壙であったと考えられる。

また、ST－36、37は墓構内に大量の甕棺破片を含む土壙で、本来甕棺墓の可能性が高いと思われる。

甕棺　出土した甕棺のうち、復元可能な甕棺は総計92個体である。内訳は大型棺40個体、小型棺45

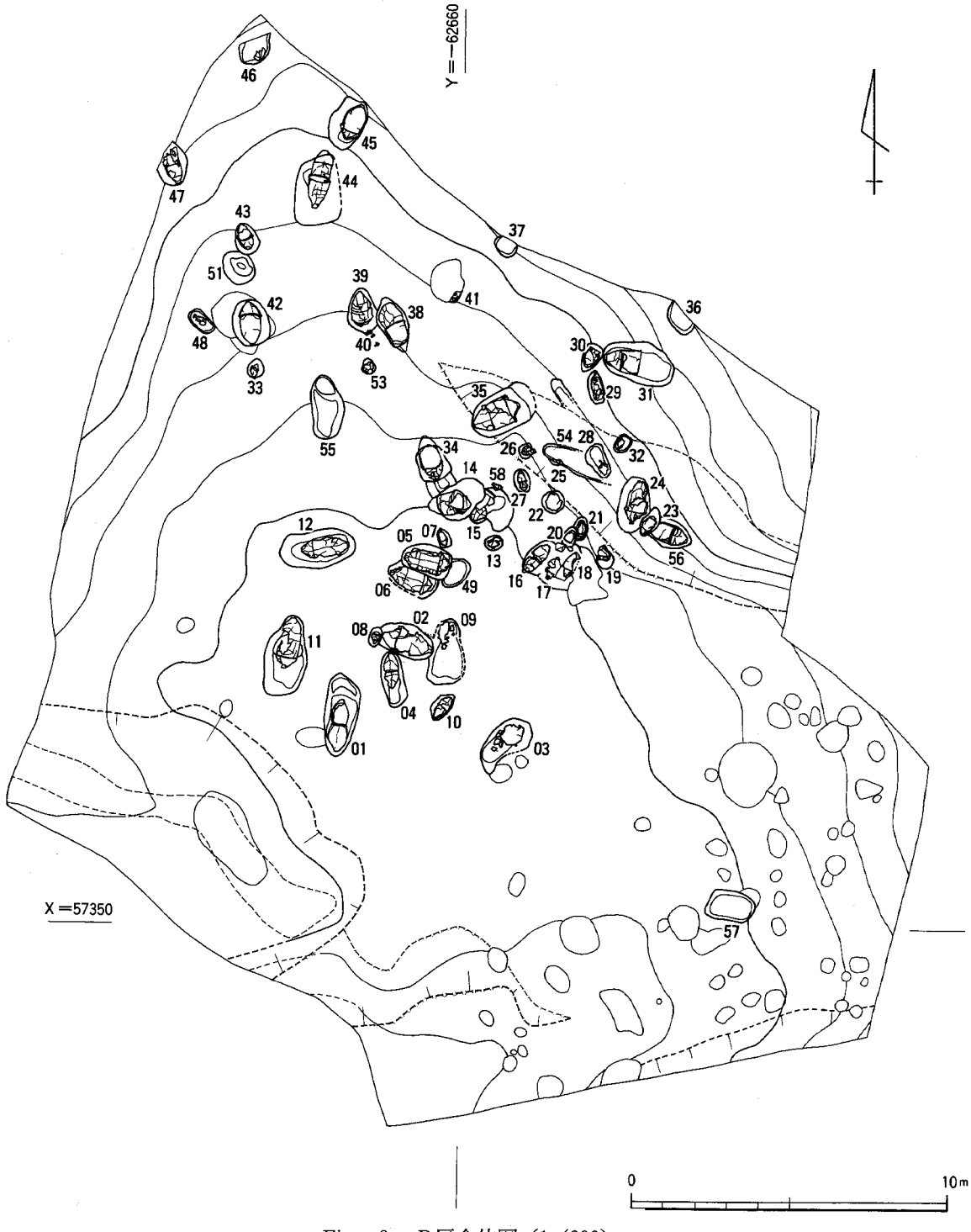


Fig. 3　B区全体図（1／200）

個体、不明3個体で、大型棺と小型棺がほぼ同数である。時期は大型棺が汲田式～立岩式、小児棺が須玖Ⅰ式～須玖Ⅱ式で、弥生時代中期前半～後半に造墓されたものとみられる。汲田式はST－38上下、39上下、42上下、44上下、45上下にあたる。形態的な特徴は汲田式のなかでも新しい様相を示す。これらの甕棺墓は北に隣接する浦江谷遺跡群1次調査2区の甕棺墓よりも古く、両者の甕棺群の変遷を考える上で興味深い。

上甕と下甕との組み合わせをみると、ST－58のみが上甕に壺形土器、下甕に大型棺を組み合わせている例以外は全て大型棺（蓋形棺を含む）同士、小型棺同士の組み合わせになっている。上下甕の口縁部は同じ大きさで揃えており、埋葬形態も接口式が多い。大型棺で長胴の専用棺を下甕に使用し

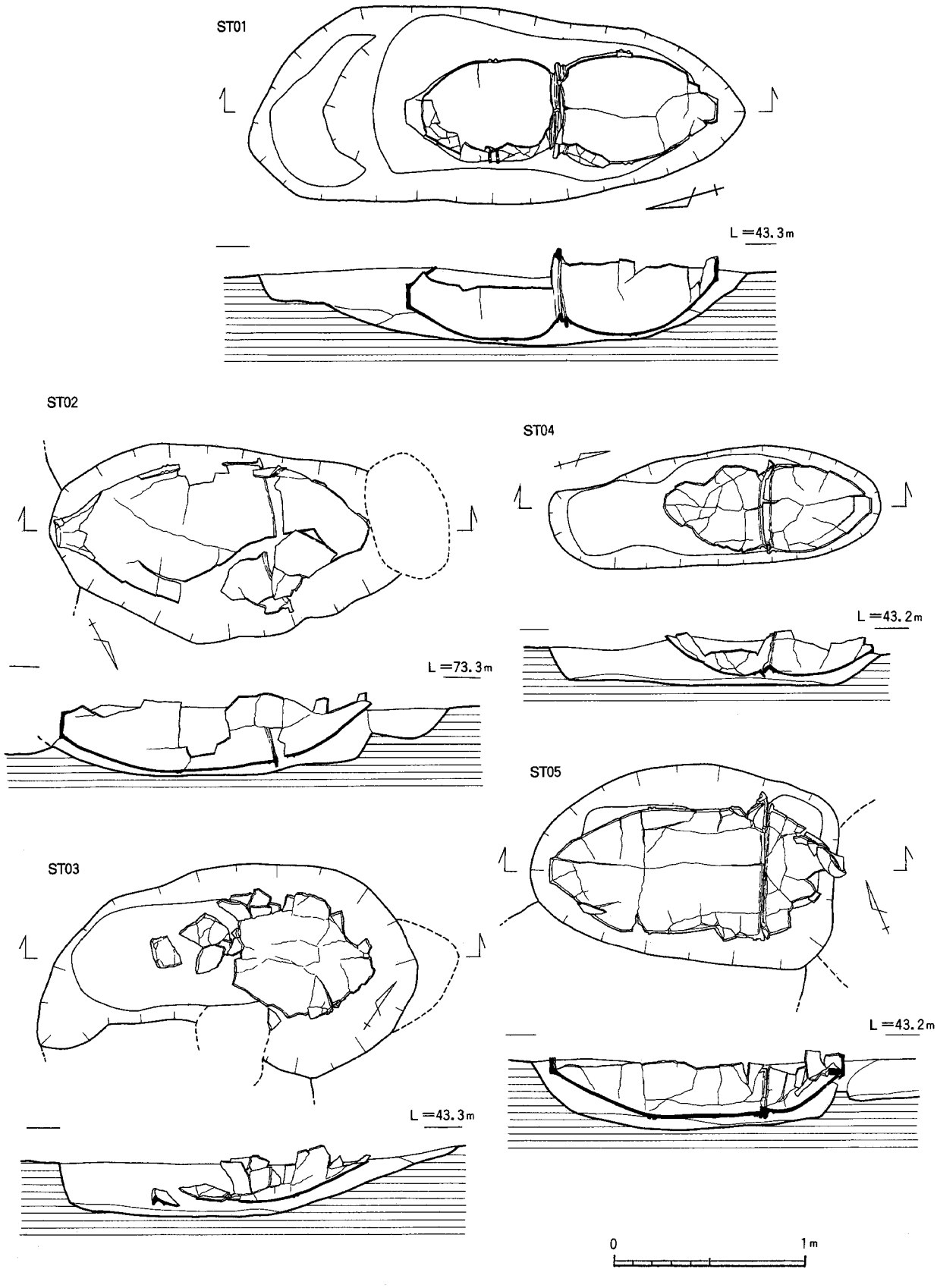


Fig. 4　甕棺墓出土状況実測図１（1／30）

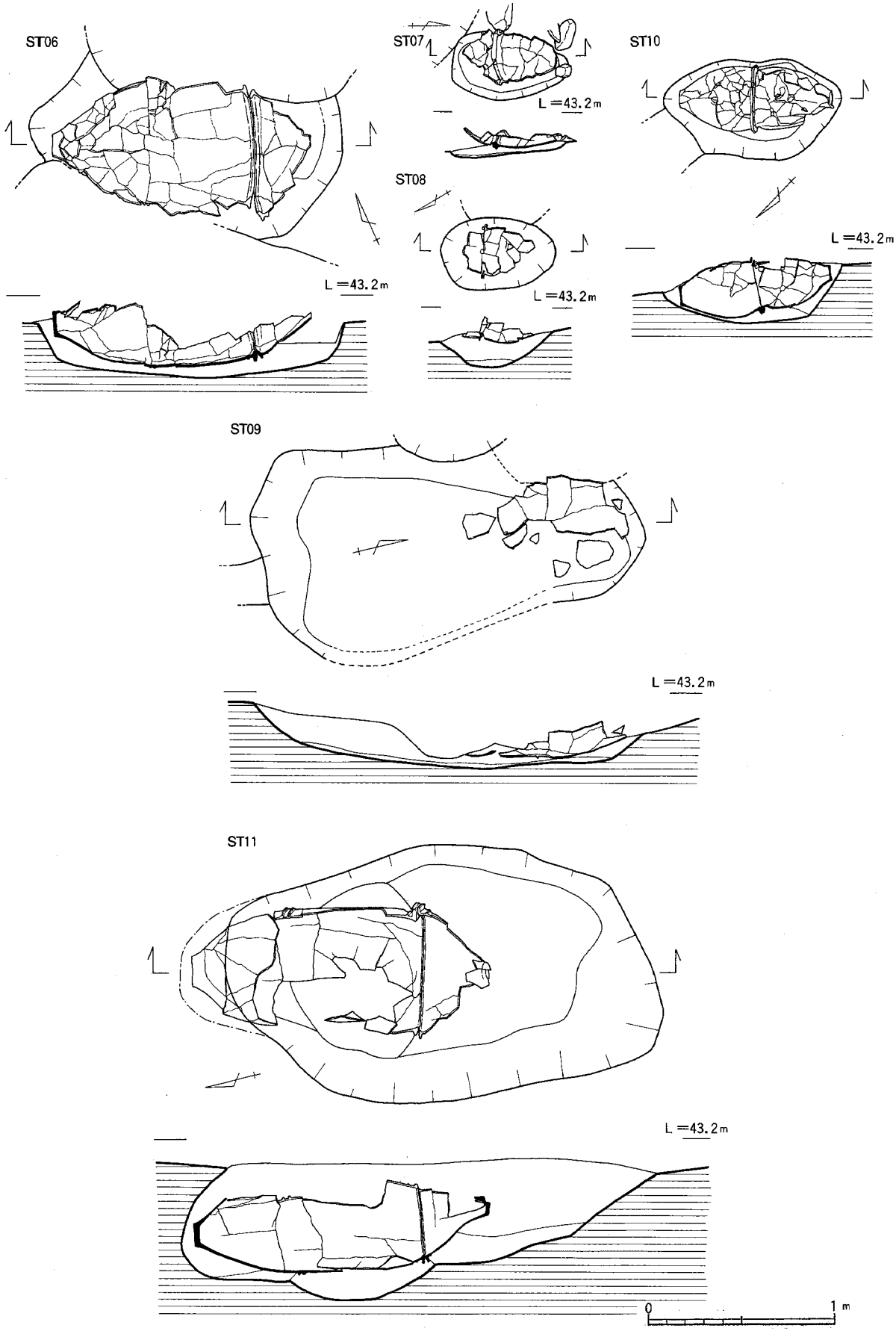


Fig. 5　甕棺墓出土状況実測図 2 (1／30)

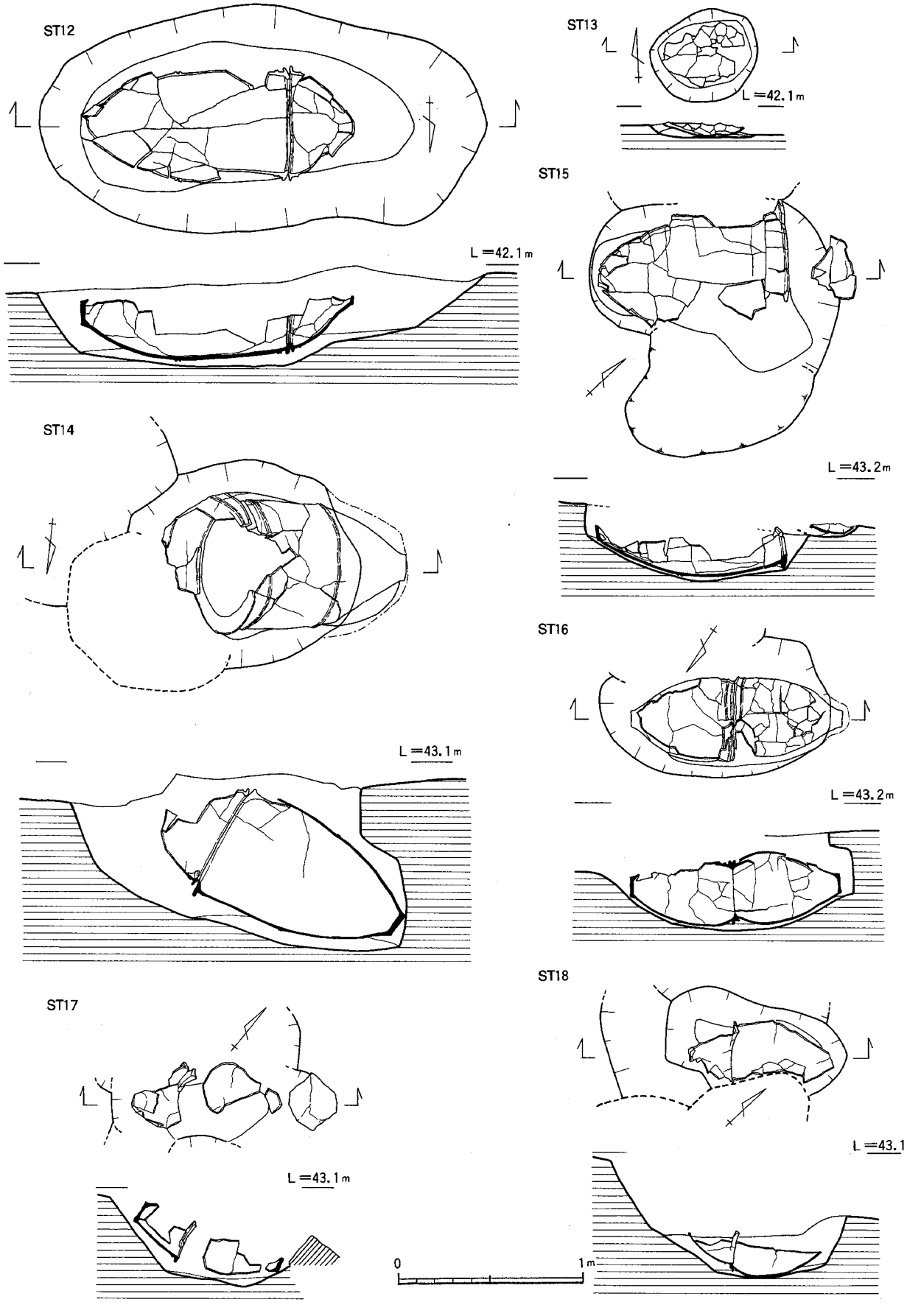


Fig. 6　甕棺墓出土状況実測図3 (1／30)

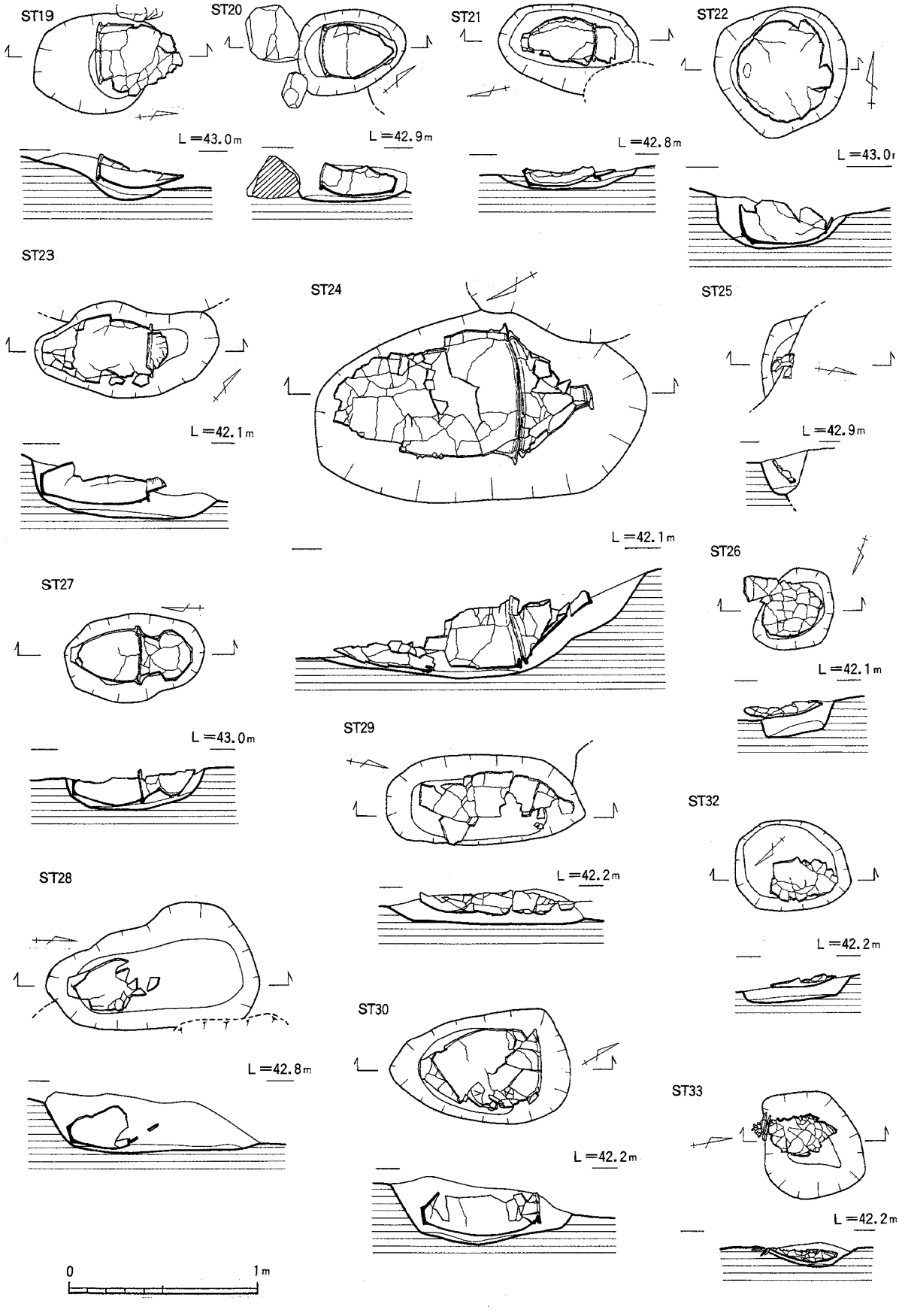


Fig. 7　甕棺墓出土状況実測図４（1／30）

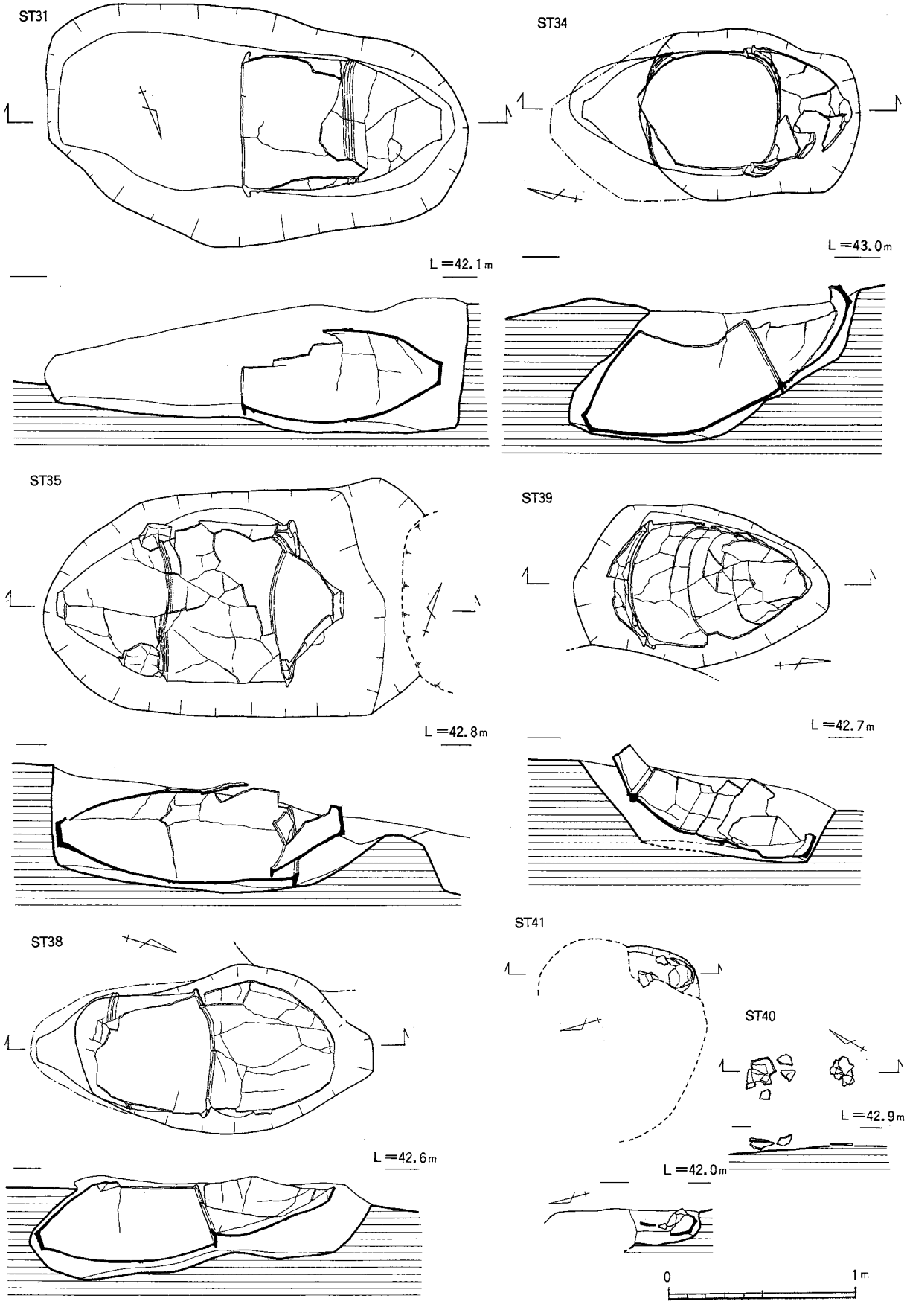


Fig. 8　甕棺墓出土状況実測図５（1／30）

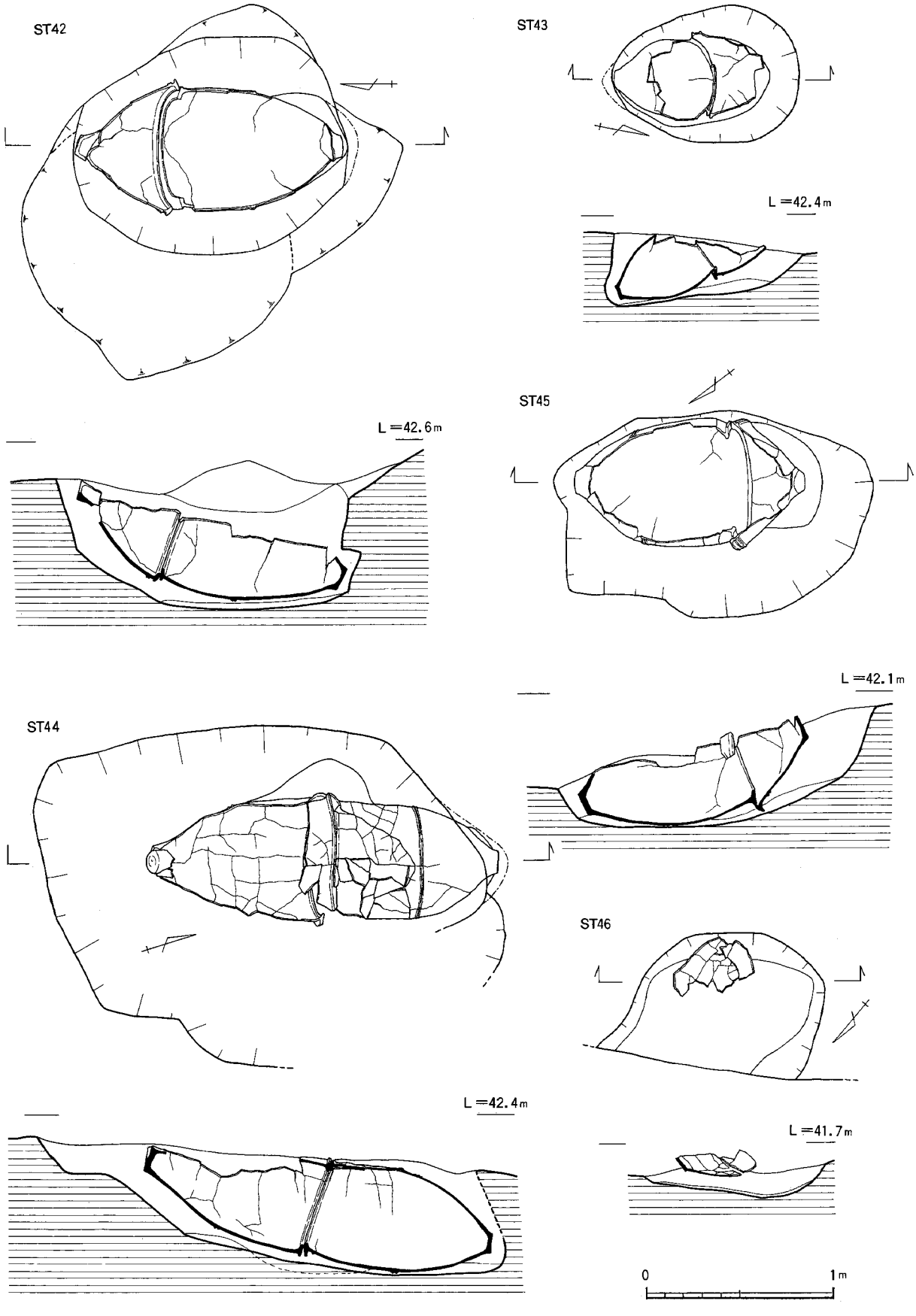


Fig. 9　甕棺墓出土状況実測図6（1／30）

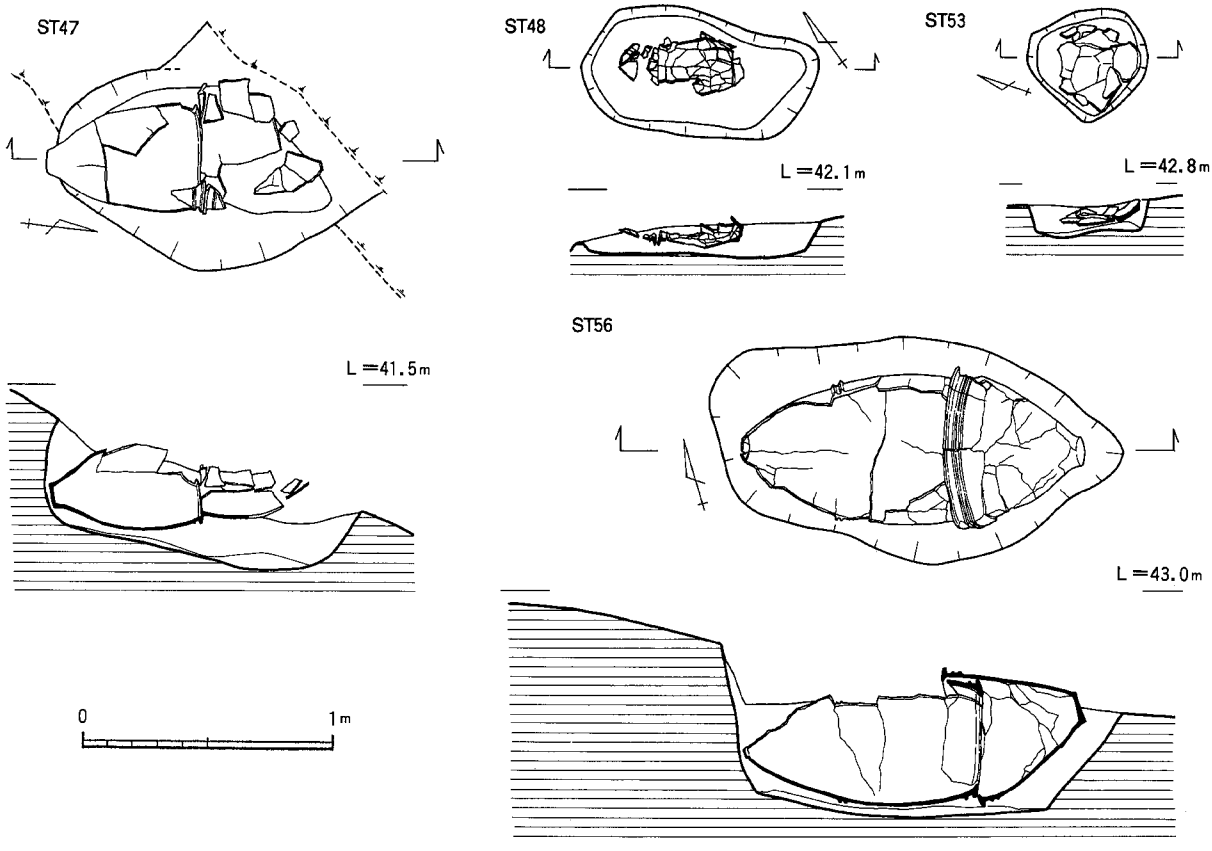


Fig. 10　甕棺墓出土状況実測図７（1／30）

Tab. 1　甕棺遺構一覧表

遺構番号	方　位	合口形態	墓壙形態	埋置形態	備　考	掲載 Fig.No.	遺構番号	方　位	合口形態	墓壙形態	埋置形態	備　考	掲載 Fig.No.
01	N－6°－E	接口式	竪穴	水平		Fig. 3	25	N－15°－E	単棺	竪穴	水平		Fig. 6
02	N－45°－E	接口式	竪穴	水平		Fig. 3	26	N－7°－W	単棺	竪穴	不明		Fig. 6
03	N－34°－E	接口式	竪穴	水平		Fig. 3	27	N－61°－E	接口式	竪穴	水平		Fig. 6
04	N－28°－E	接口式	竪穴	水平		Fig. 3	28	N－53°－E	単棺	竪穴	水平		Fig. 6
05	N－51°－E	接口式	竪穴	水平		Fig. 3	29	N－61°－W	接口式	竪穴	不明		Fig. 6
06	N－51°－E	接口式	竪穴	水平		Fig. 4	30	N－36°－E	単棺	竪穴	水平		Fig. 6
07	N－7°－W	接口式	竪穴	水平		Fig. 4	31	N－27°－W	単棺	竪穴	水平		Fig. 7
08	N－60°－E	接口式	竪穴	水平		Fig. 4	32	N－89°－E	単棺	竪穴	不明		Fig. 6
09	N－42°－E	接口式	竪穴	不明		Fig. 4	33	N－16°－W	接口式	竪穴	水平	管玉副葬	Fig. 6
10	N－10°－W	接口式	竪穴	水平		Fig. 4	34	N－44°－W	接口式	横穴	傾斜		Fig. 7
11	N－2°－W	接口式	横穴	水平		Fig. 4	35	N－79°－E	呑口式	竪穴	水平		Fig. 7
12	N－10°－W	接口式	竪穴	水平		Fig. 5	38	N－5°－E	接口式	横穴	傾斜		Fig. 7
13	N－8°－W	単棺	竪穴	不明		Fig. 5	39	N－10°－E	接口式	竪穴	傾斜		Fig. 7
14	N－63°－E	接口式	横穴	傾斜		Fig. 5	40	N－30°－W	不明	竪穴	不明	4個体分出土	Fig. 7
15	N－40°－E	接口式	竪穴	水平		Fig. 5	41	N－52°－W	単棺	竪穴	不明		Fig. 7
16	N－14°－E	接口式	横穴	水平		Fig. 5	42	N－39°－E	接口式	横穴	傾斜		Fig. 8
17	N－27°－W	接口式	竪穴	傾斜		Fig. 5	43	N－47°－W	接口式	横穴	傾斜		Fig. 8
18	N－38°－E	接口式	竪穴	水平		Fig. 5	44	N－2°－E	接口式	横穴	傾斜		Fig. 8
19	N－10°－E	単棺	竪穴	水平		Fig. 6	45	N－72°－W	接口式	竪穴	傾斜		Fig. 8
20	N－82°－W	単棺	竪穴	水平		Fig. 6	46	N－19°－E	不明	竪穴	不明		Fig. 8
21	N－52°－W	単棺	竪穴	水平		Fig. 6	47	N－54°－E	接口式	竪穴	水平		Fig. 9
22	N－11°－E	単棺	竪穴	水平		Fig. 6	48	N－37°－W	接口式	竪穴	水平		Fig. 9
23	N－7°－E	接口式	竪穴	水平		Fig. 6	53	N－29°－E	単棺	竪穴	不明		Fig. 9
24	N－21°－E	接口式	竪穴	水平		Fig. 6	56	N－69°－E	接口式	竪穴	水平		Fig. 9

Tab. 2 出土甕棺一覧表

道構番号	上下	形態	外口径	内口径	器高	底径	胴最大径	備考	掲載Fig.No.
01	上	大型棺	40.2－40.4	27.5－28.5	78.8	11.6	54.0		Fig.11
01	下	大型棺	44.8	34.5	12.5	8.4	57.2		Fig.11
02	上	大型棺	54.5－58	52.5－56	(56.7－61.5)	12	57.9	口縁部打ち欠き	Fig.11
02	下	大型棺	70－70.2	58	109.4－109.6	13.6	66.4		Fig.11
03	上	大型棺						復元不可能	
03	下	大型棺	64	50	100		67.2		Fig.11
04	上	甕形土器	40		50	11.4	42.4		Fig.13
04	下	甕形土器	41.9		53.5	11	43.2		Fig.13
05	上	鉢形棺	64.5－66.5		40.4－41.2	13			Fig.11
05	下	大型棺	67－71.3	55.6	109.4	13	65.8		Fig.11
06	上	大型棺	73						Fig.12
06	下	大型棺	71		100－101.2	13.3	69.6		Fig.12
07	上	甕形土器	30						Fig.13
07	下	甕形土器	30				28.1		Fig.13
08	上	甕形土器	32.4				28.8		Fig.13
08	下	甕形土器	28.6		(27.5)		26.7		Fig.13
09	上	大型棺	60						Fig.12
09	下	大型棺	76－80				76.4		Fig.12
10	上	甕形土器	33.5－34.5	27.2－28.2	40.5－40.9	9.3	32.6		Fig.13
10	下	甕形土器	34－34.5	28－28.3	41－42	9.4	33.9		Fig.13
11	上	大型棺	63.5－64.5		36.6	11			Fig.12
11	下	大型棺	67.2	52.5－53	123.1－123.3	14	67.8		Fig.12
12	上	大型棺	60.3	48.5	34.5－36.5	12－12.2			Fig.12
12	下	大型棺	67	54	110	13.2	61.2		Fig.12
13	単	甕形土器	42		46.6	10	44.3		Fig.14
14	上	鉢形棺	71.4	58	44.6－47.4	13.5			Fig.15
14	下	大型棺	72	57.7	102.3－104.5	13.7－14.5	33.2		Fig.15
15	下	大型棺	68		99－100	12－12.4		上甕はST－58とする	Fig.20
16	上	甕形土器	19.9			9－9.2	41.0		Fig.14
16	下	甕形土器	40.8		55.1	9.2	43.9		Fig.14
17	上	鉢形土器	39		29.2－29.7	11.6	34.6		Fig.14
17	下	壺形土器	18.2		48.4	9.8	40.5		Fig.14
18	上	鉢形土器	33.9		22.8－24	9.4			Fig.17
18	下	甕形土器	38			9.3			Fig.17
19	単	甕形土器	37.6		(42)		32.2		Fig.17
20	単	甕形土器	30		37	8	27.2		Fig.17
21	上	甕形土器	31				29.6		Fig.17
21	下	甕形土器	27.4		33	8.1	27.5		Fig.17
22	単	壺形土器	12		(46.8)	10.4	51.8	口縁部打ち欠き	Fig.17
23	上	甕形土器	30.8						Fig.18
23	下	甕形土器	40		54.7	9.6	38.9		Fig.18
24	上	蓋形棺	67		37.5－37.8	11			Fig.15
24	下	大型棺	81		(95)		74.8		Fig.15
25	単	甕形土器	30						Fig.17
26	単	大型棺			(36)	8.4			Fig.15
27	上	壺形土器	29.6		28.3－29.7	7.3	26.2		Fig.18
27	下	甕形土器	30.7		28.6－28.7	7.5－8	27.5		Fig.18
28	上	甕形土器	28.8			8	27.5		Fig.18
28	下	甕形土器	34.5		40.5－41	8.6	32.5		Fig.18
29	単	不明						復元不能	
30	単	甕形土器	38		58－59.1	9.8	42.5		Fig.18
31	単	大型棺	64.5－67		106－107	13	65.6		Fig.15
32	単	甕形土器	40		(32)	10			Fig.21
33	上	甕形土器	23.2						Fig.21
33	下	甕形土器	27						Fig.21
34	上	鉢形棺	66.4	54.5	53.4－53.6	12			Fig.16
34	下	大型棺	67	53.5－54.5	105－106	11.5	66.4		Fig.16
35	上	蓋形棺	66	56	30.6－31.8	12.5－12.7			Fig.16
35	下	大型棺	76－80	62.5－66	121.1－121.3	12.2	71.0		Fig.16
36	単	不明				13			Fig.16
37	単	甕形土器	38			9.1	36.8		Fig.21
38	上	大型棺	27.6－30				62.2		Fig.16
38	下	大型棺	56－64		85.7－86	10	64.3		Fig.16
39	上	蓋形棺	61.8		36.6				Fig.19
39	下	大型棺	62		86	10.6	60.9		Fig.19
40	A	甕形土器				9			Fig.21
40	B	甕形土器	28						Fig.21
40	C	甕形土器							Fig.21
40	D	大型棺							Fig.21
41	単	甕形土器				6.6			Fig.21
42	上	鉢形棺	68.0	57.6	50.0	12.4			Fig.19
42	下	大型棺	61.8－62.2		94.5	11	62.0		Fig.19
43	上	甕形土器	40.6		30.4		40.2		Fig.21
43	下	甕形土器	40.2		51.1		38.8		Fig.21
44	上	大型棺	62.5	50.1	92.7	12－12.2	58.3		Fig.19
44	下	大型棺	63.8	50.5－51.5	94.3－95.1	11.1－11.4	63.1		Fig.19
45	上	鉢形棺	67.3	59	19.2－19.7	12.4			Fig.20
45	下	大型棺	59.5－60	47.5－49	91.4－91.6	11	61.2		Fig.20
46	上	壺形土器	34.5		31.7	6.5	33.4		Fig.22
46	下	壺形土器	34.5		48.5	10.2	43.8		Fig.22
47	上	甕形土器	40		54.5－55.5	10	41.7		Fig.22
47	下	甕形土器	45.2		57.7－58	10	44.2		Fig.22
48	上	鉢形土器	30		22	11.8	26.5		Fig.22
48	下	甕形土器	31.8		33.6	7.1	27.8		Fig.22
53	単	不明				8.3			Fig.19
56	上	鉢形棺	63	53.5	46	12.5			Fig.20
56	下	大型棺	50.5－51.5	36.3－38.5	88.2		59.0		Fig.20
58	(ST-5上)	壺形土器	47				47.3	ST-15の上位に位置する	Fig.20

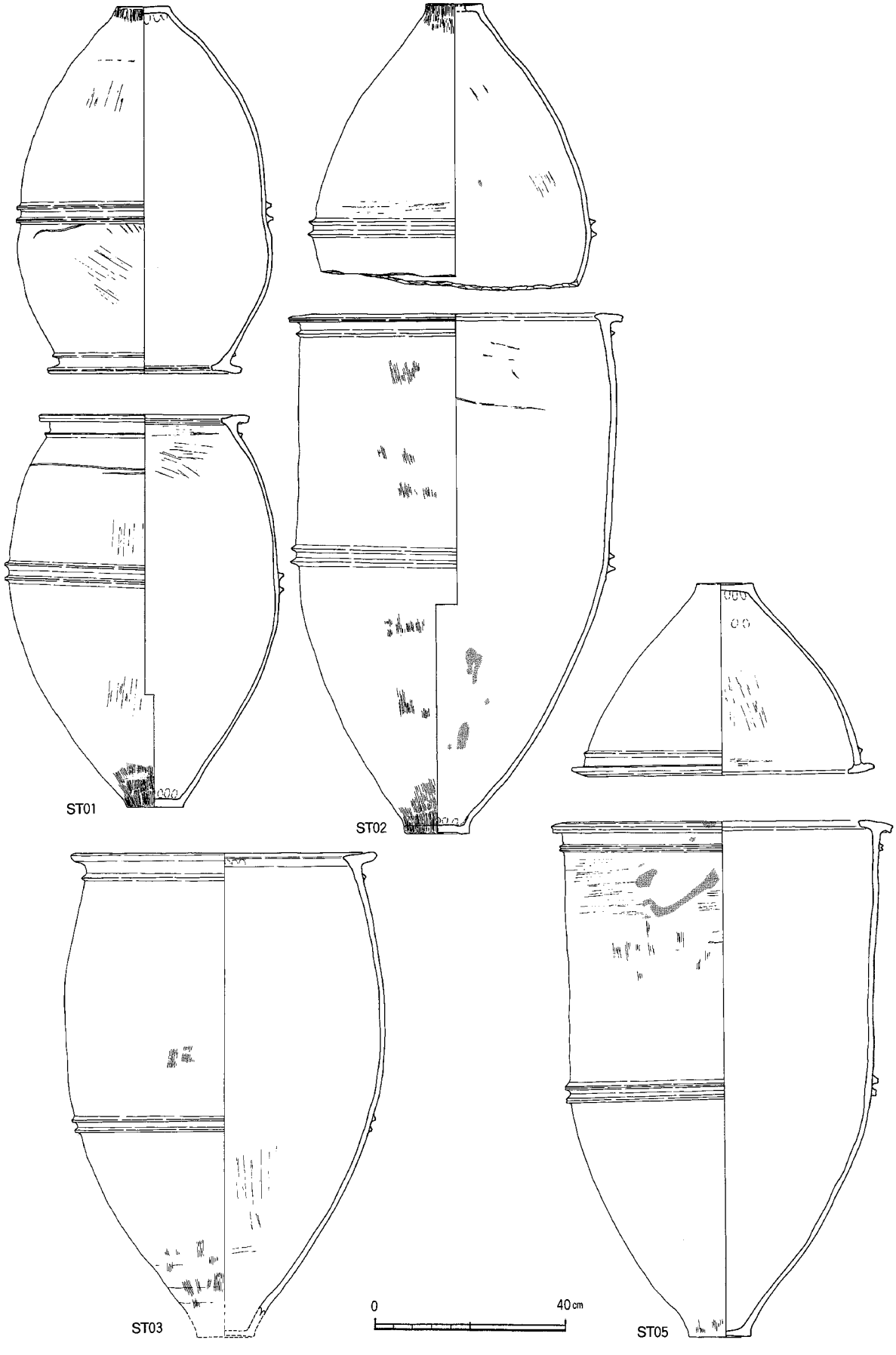


Fig. 11　出土甕棺実測図１（1／12）

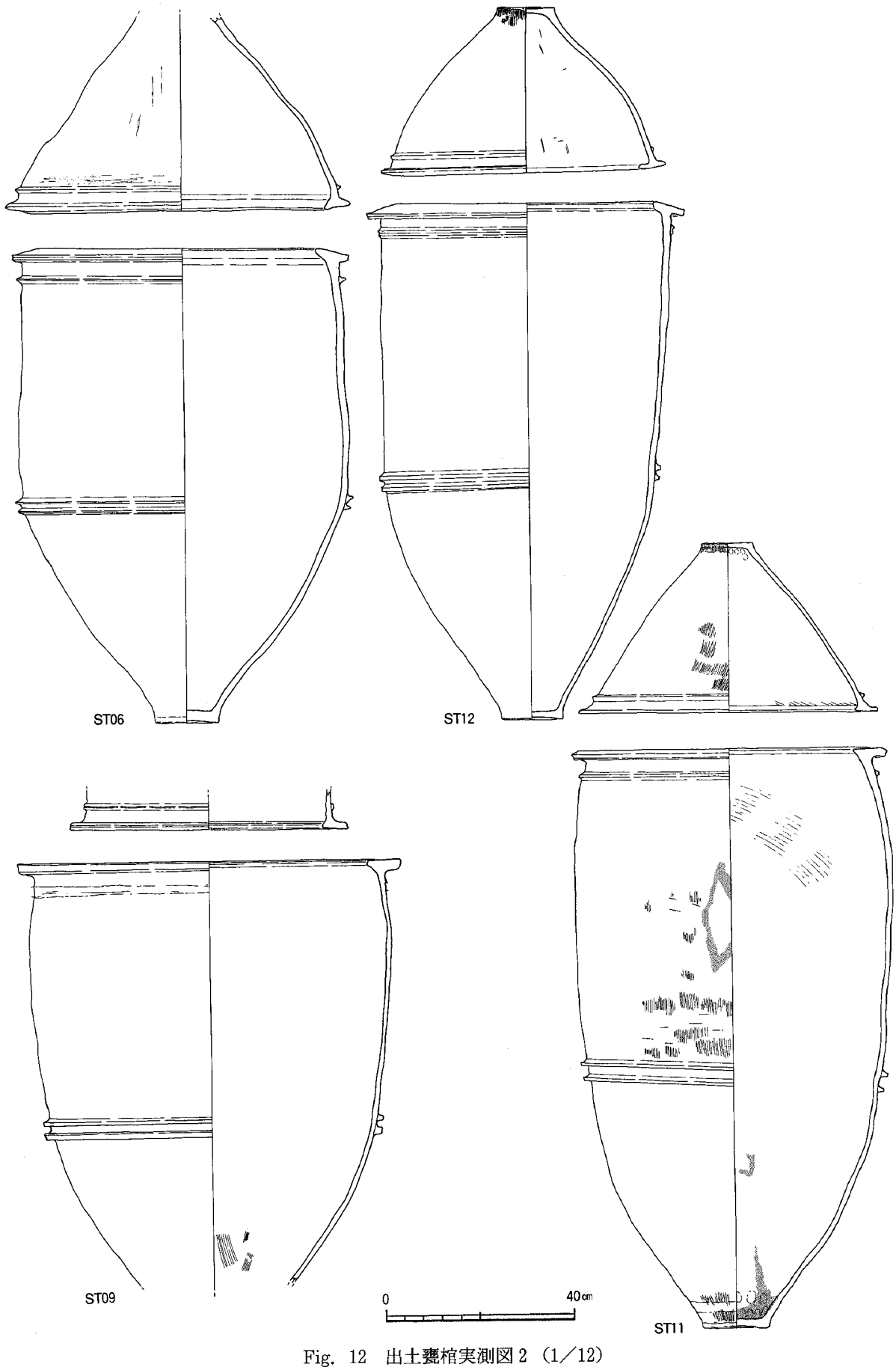


Fig. 12　出土甕棺実測図２（1／12）

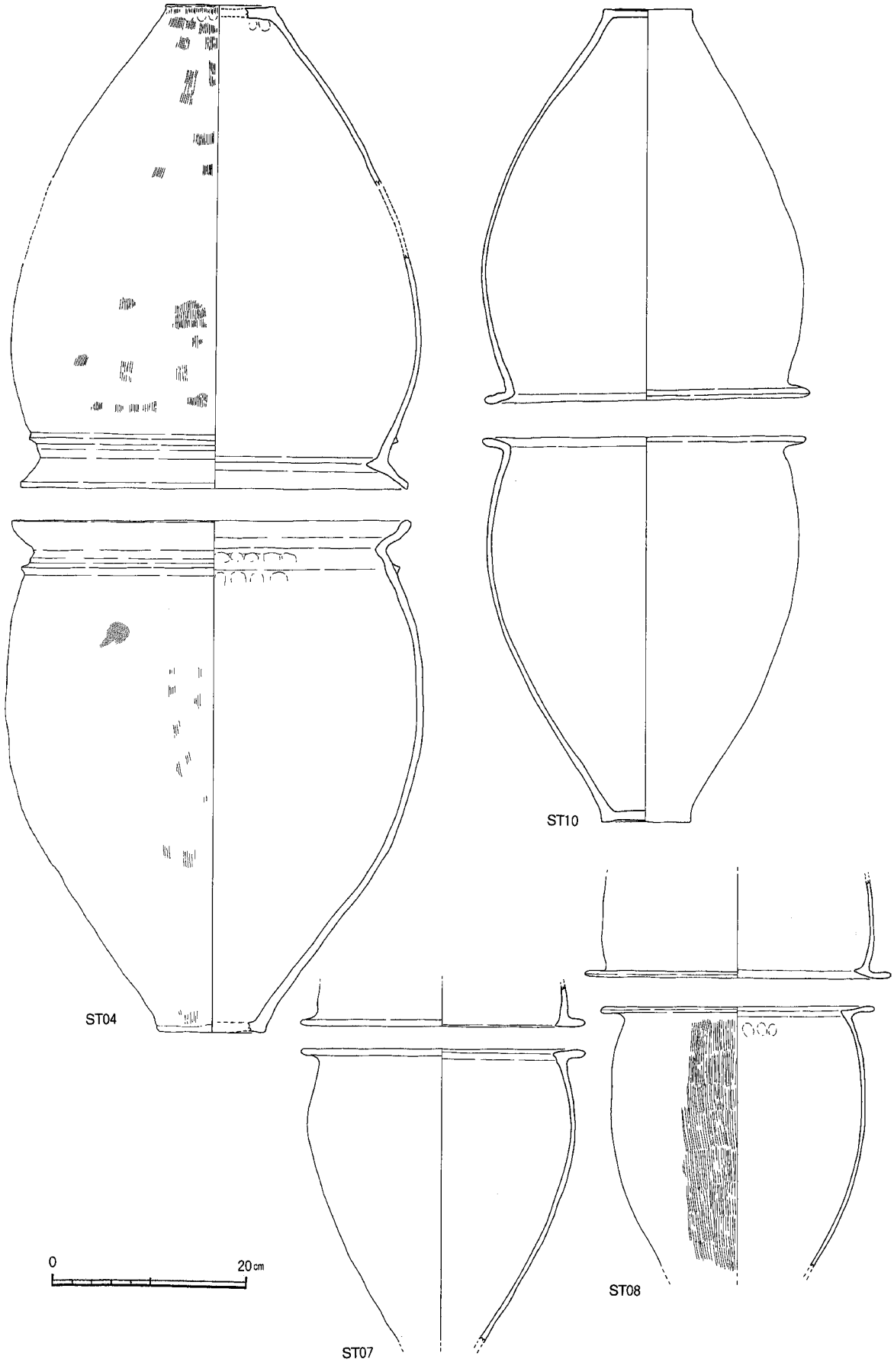


Fig. 13　出土甕棺実測図３（1／6）

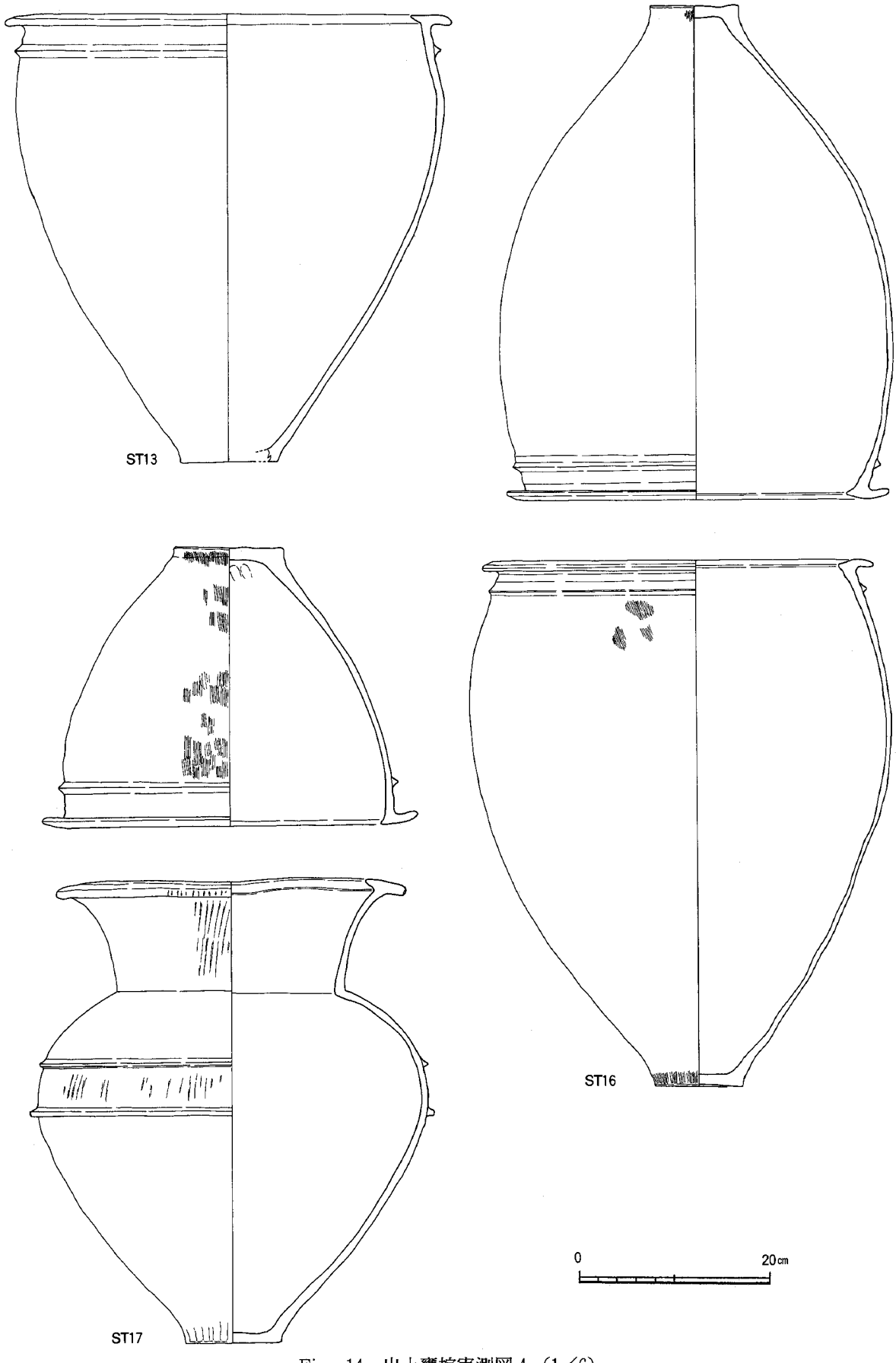


Fig. 14　出土甕棺実測図４（1／6）

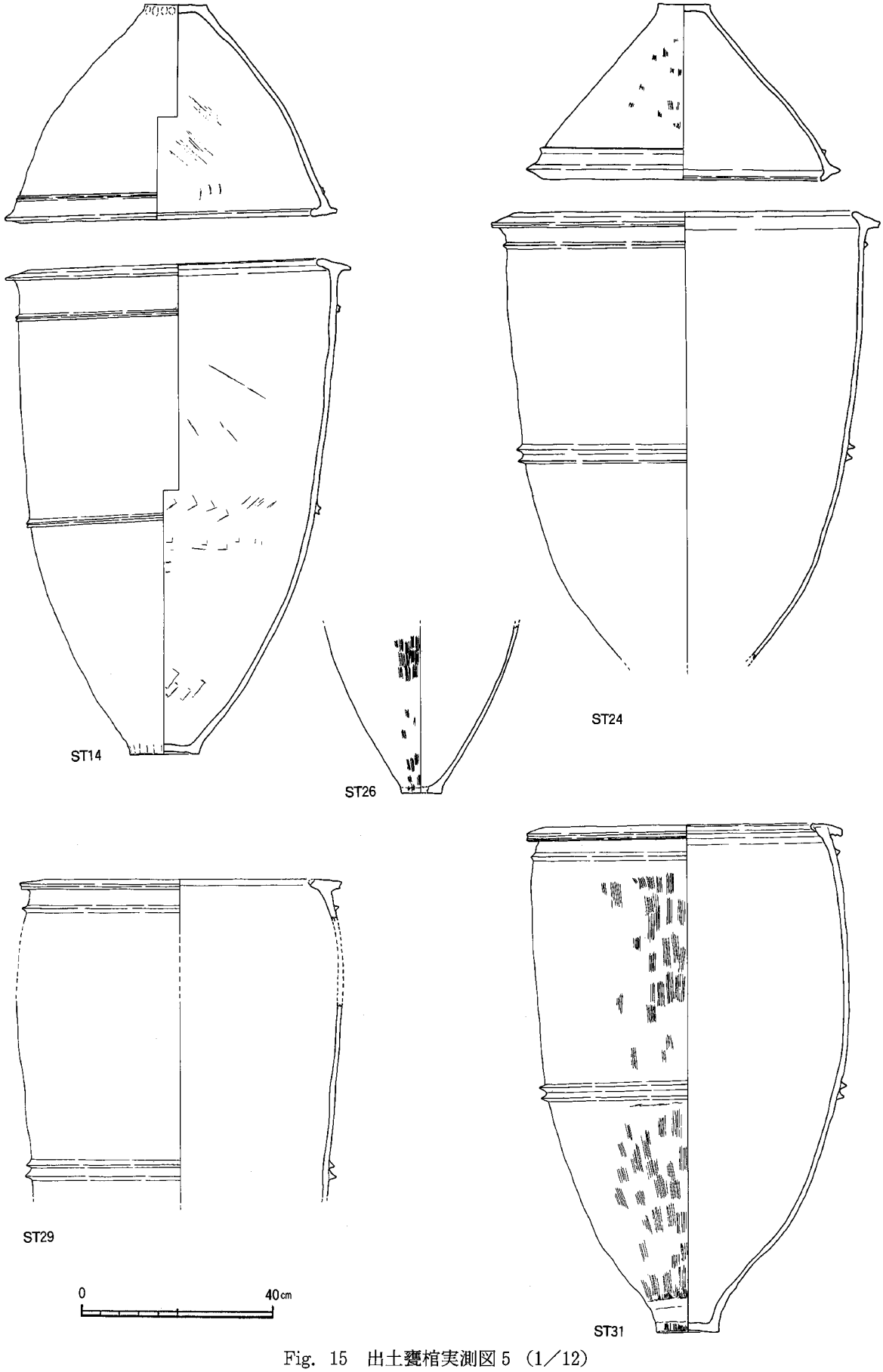


Fig. 15　出土甕棺実測図５（1／12）

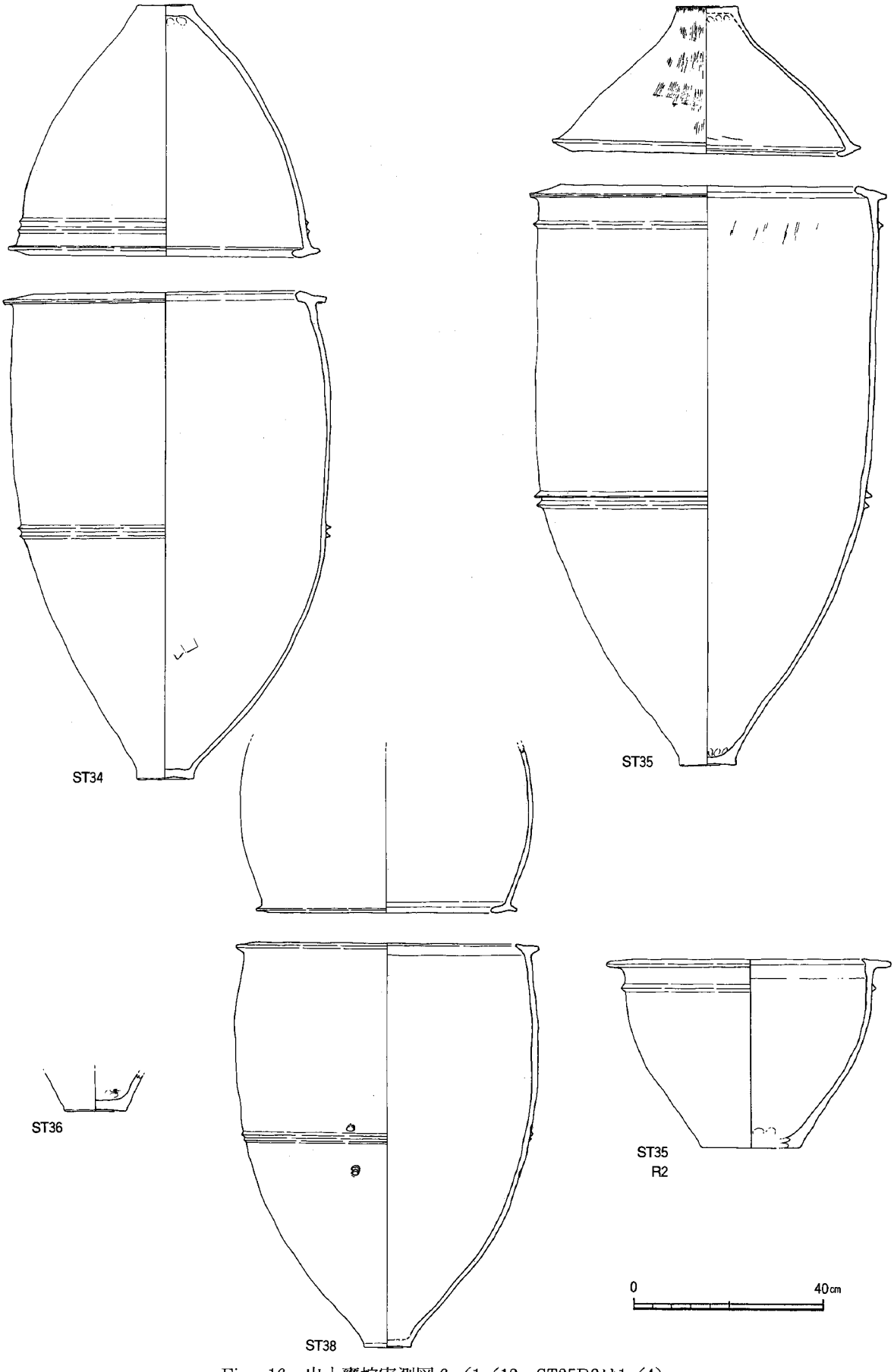


Fig. 16　出土甕棺実測図６（1／12・ST35R2は1／4）

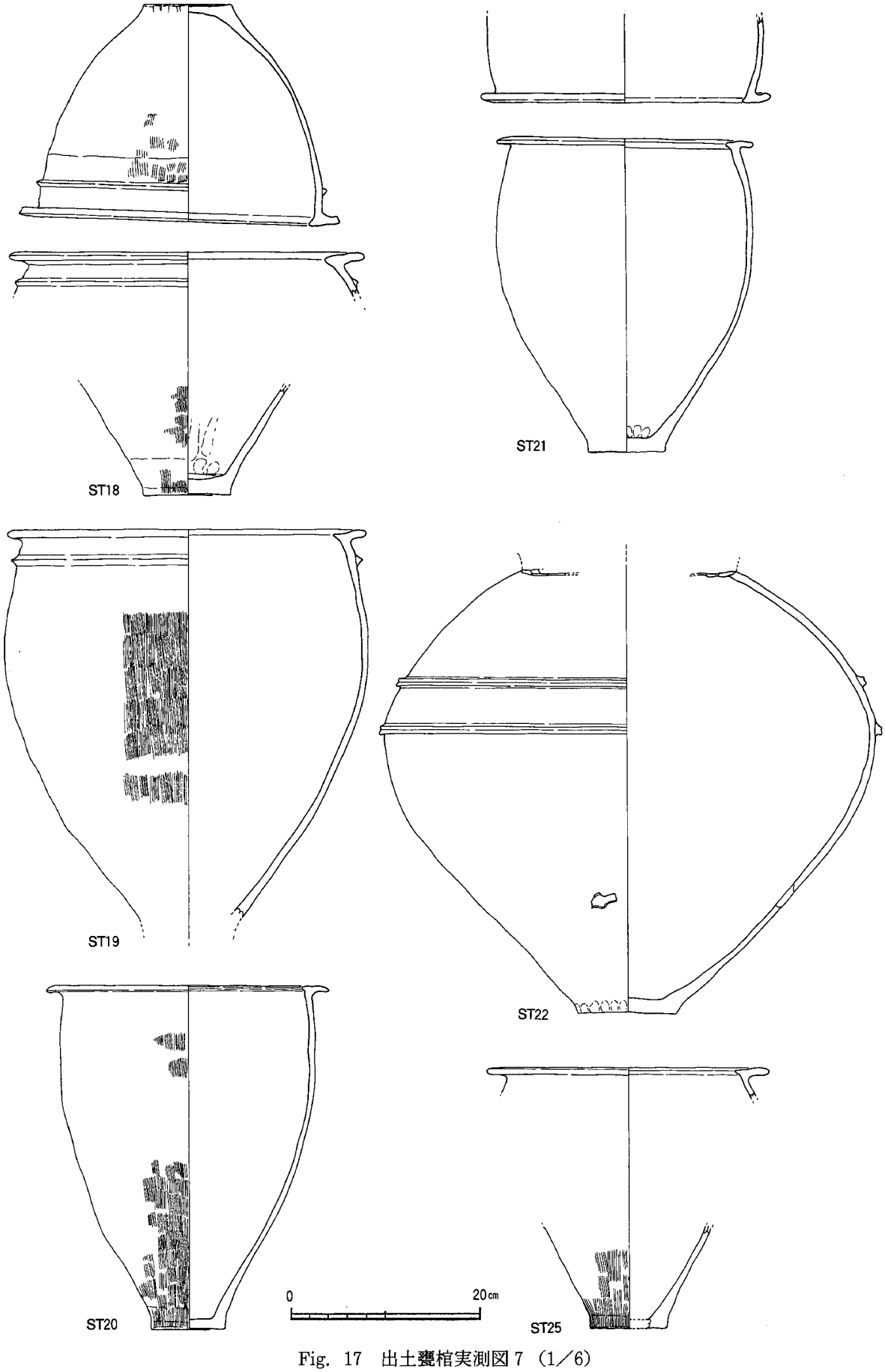


Fig. 17　出土甕棺実測図 7 (1／6)

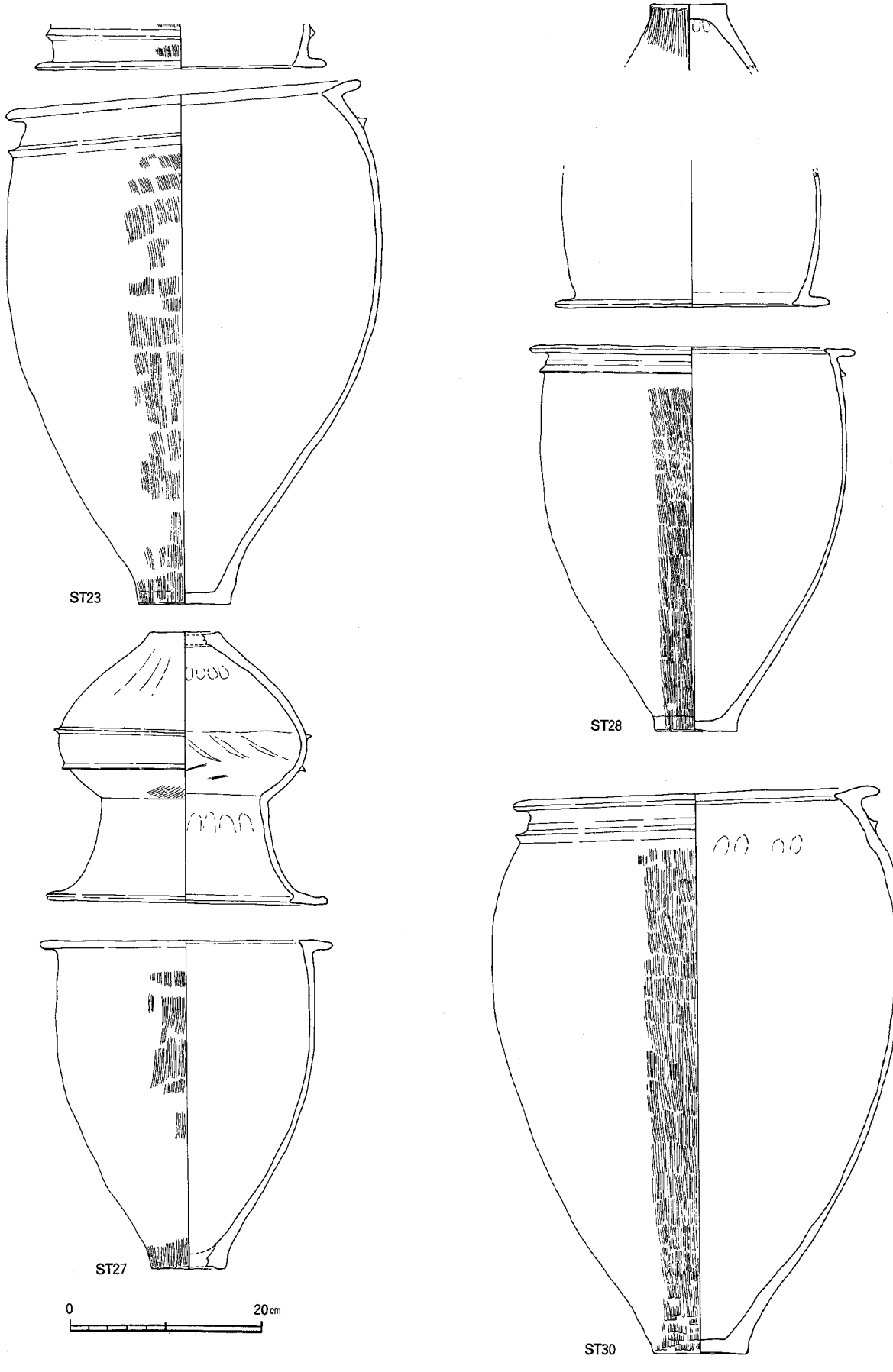


Fig. 18　出土甕棺実測図８（1／6）

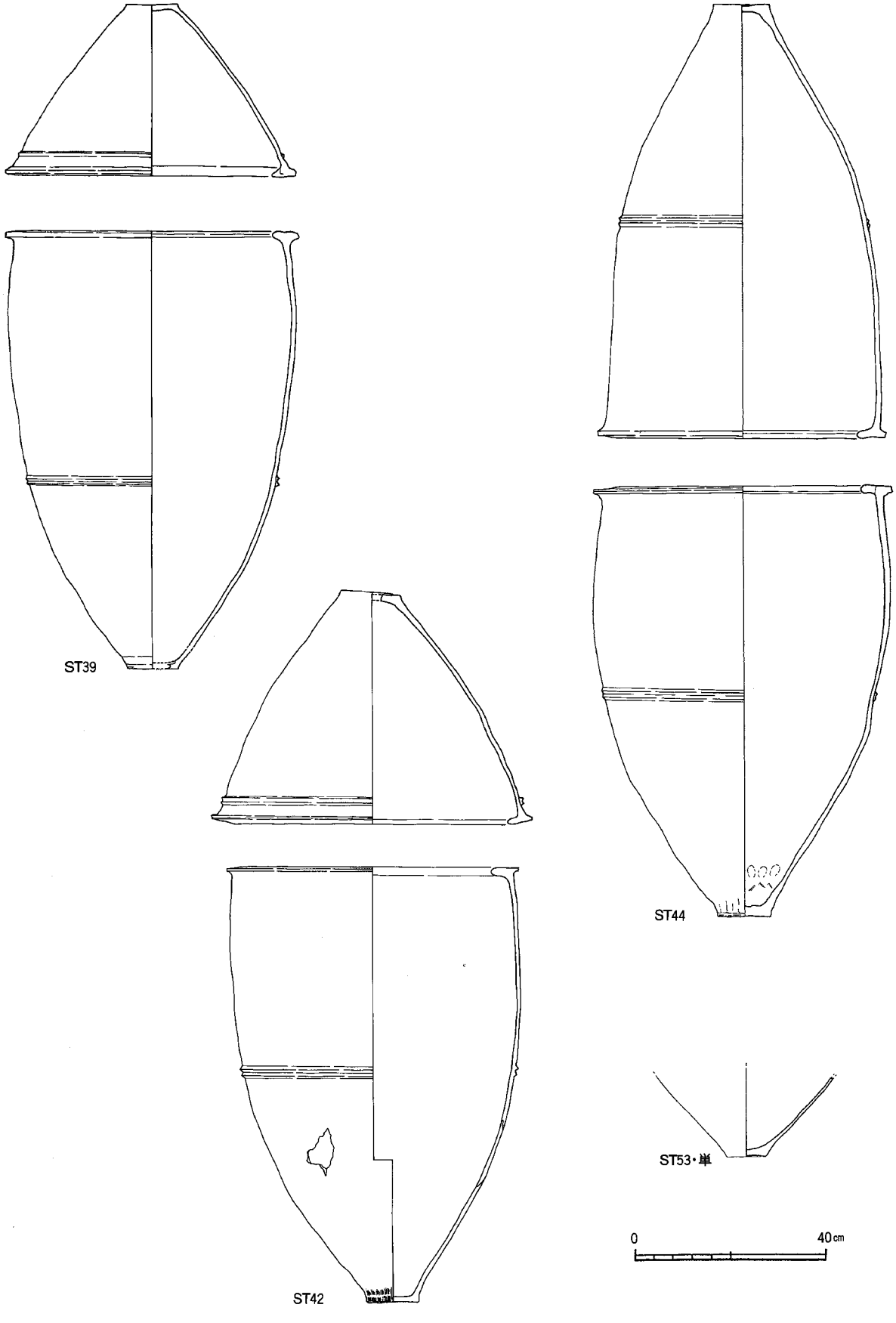


Fig. 19　出土甕棺実測図９（1／12）

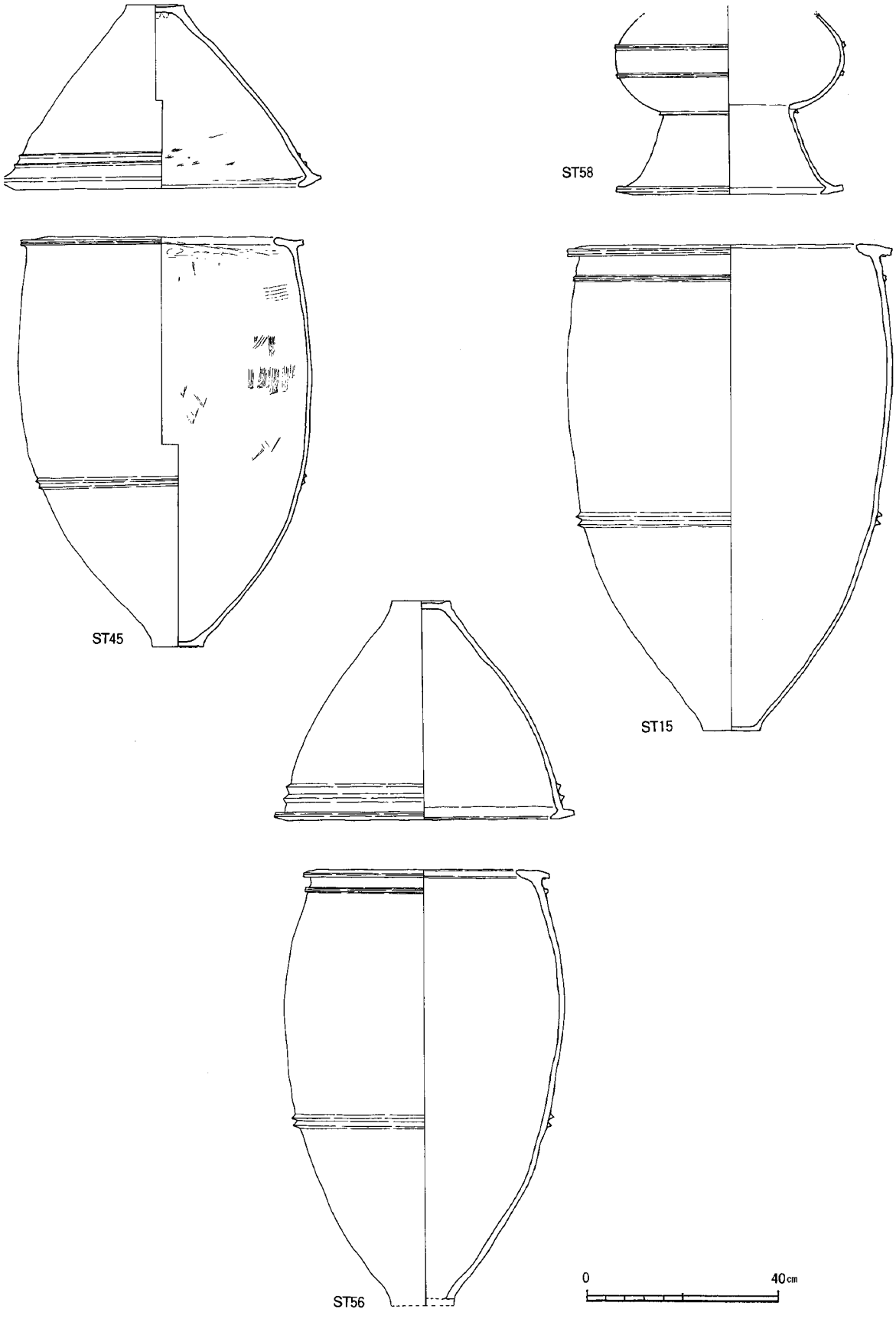


Fig. 20　出土甕棺実測図10（1／12）

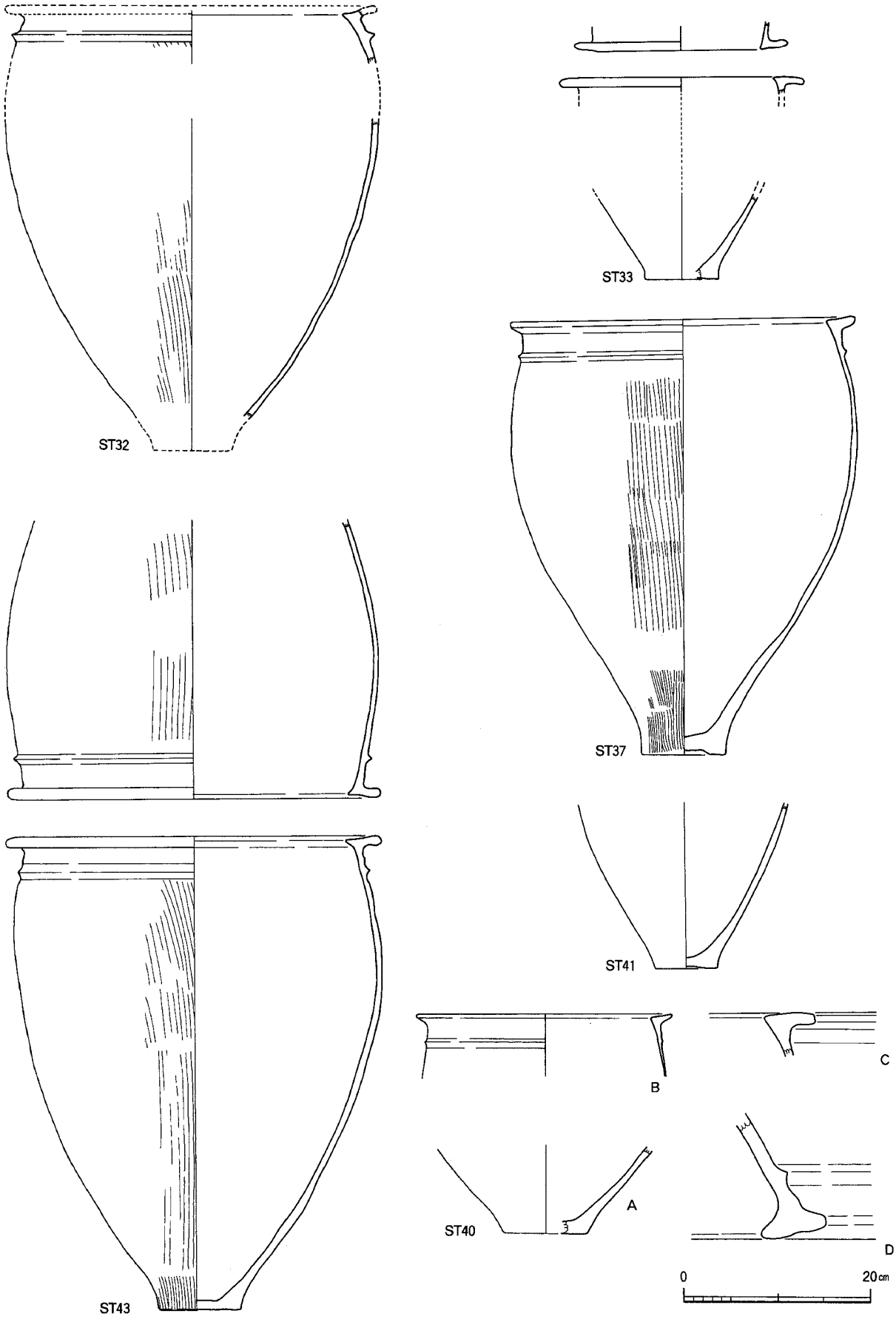


Fig. 21　出土甕棺実測図11（1／6）

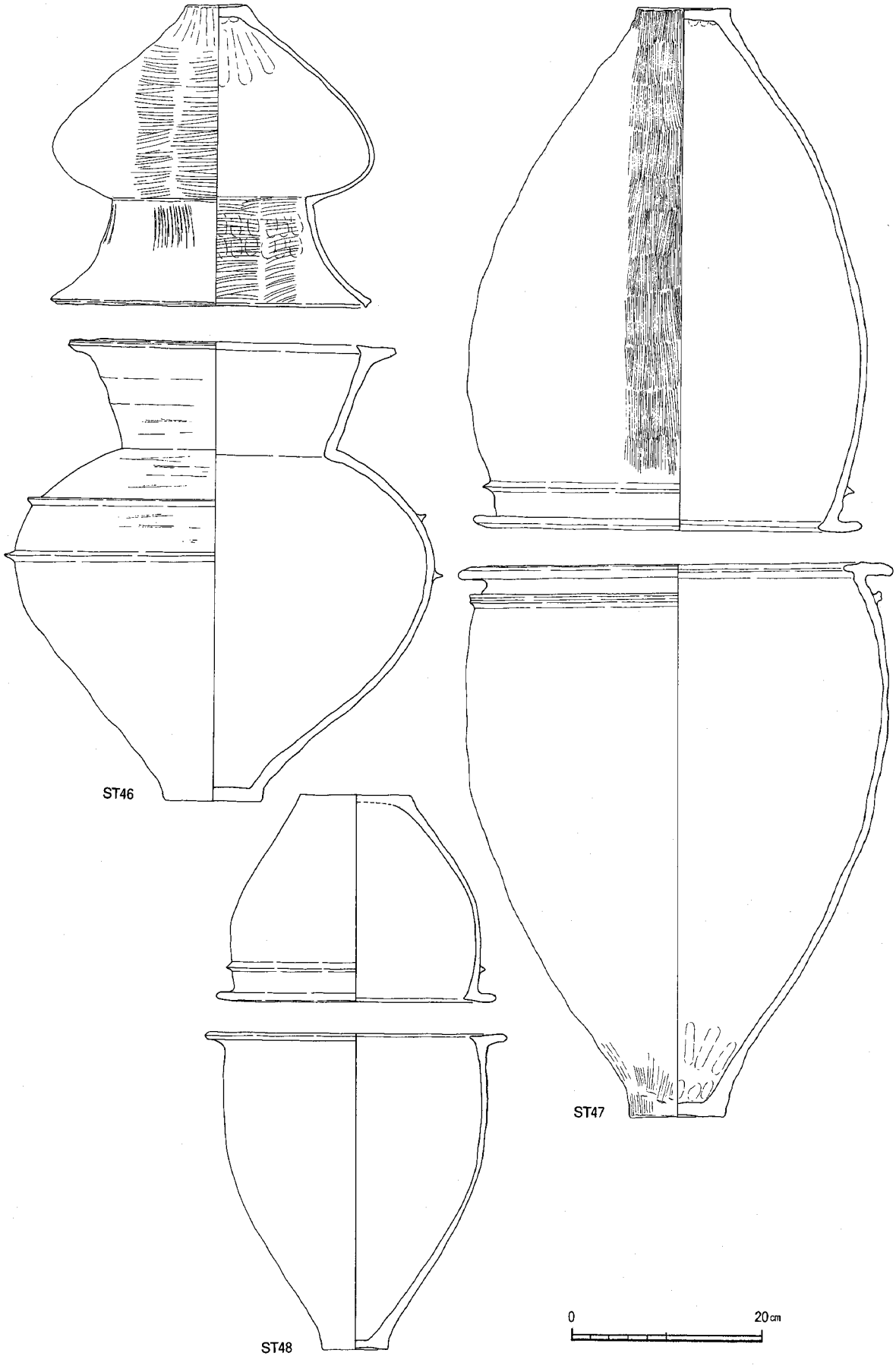


Fig. 22　出土甕棺実測図12（1／6）

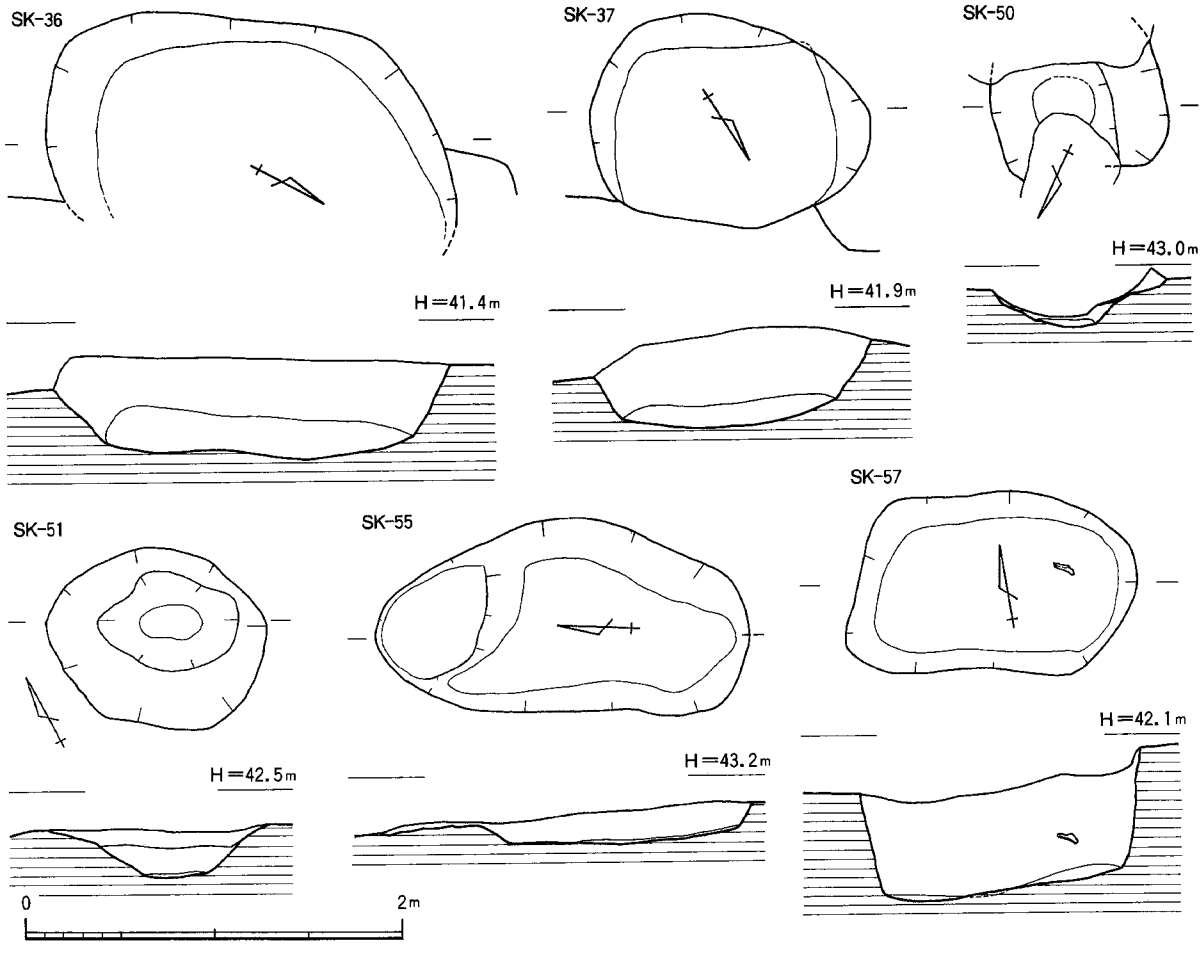


Fig. 23　土壙実測図（1／40）

ている場合、上甕には蓋形土器を用いており、専用棺同士の組み合わせはST－01、ST－02、ST－38、ST－44の４基のみである。また小型棺では、甕形土器32個体、壺形土器４個体で、甕形土器の使用割合が高い。また小児棺でも口縁部を打ち欠いた甕棺が少なく、完形土器を接口式で合わせている。

副葬品としては、調査区内ではST－33内に副葬した管玉が出土しているが、この甕棺以外には副葬遺物は出土していない。ST－35は破損部左右両側に小型の鉢形土器を使用して塞いでおり、これは副葬よりも修復を目的としたと見られる。北隣の浦江谷遺跡群甕棺墓と同様、副葬品に乏しい甕棺墓群であるといえる。

以下、個々の甕棺の法量など詳細なデータは一覧表で示す。

２）土壙・土壙墓

調査区内で６基の土壙、土壙墓を検出した。うち、SK－36、SK－37は覆土中に甕棺破片を含んでおり、本来は甕棺墓であったとみられる。SK－36は調査区東側端部に位置し、崖面の崩壊により甕棺は破砕されたとみられる。掘り方東側は削られ、遺存状況は半分程度である。SK－37も調査区東側端部に位置し、東側を削られる。墓壙の大きさからいずれも小児棺であったとみられる。

SK－50、51、55、57は土壙、土壙墓。SK－50はST－14、34に切られて底部のみ遺存し、平面形も不明。SK－51は平面形が楕円形で、断面はすり鉢形を呈する。長径1.15m、深さ25cm。SK－55は楕円形で、長径1.98m。２段掘り状で、床面は平坦となる。土壙墓の可能性が高い。SK－57は平面形は略長方形で、全長1.56m、幅95cm。断面は箱形を呈し、壁面は直に立ち上がる。覆土は暗褐色～黒褐色砂礫土。

Fig. 24　B区出土遺物実測図（1／4）

3）遺物

調査区内からは甕棺墓に直接伴う遺物の他に、覆土中に混入した遺物等が同時に出土している。9～24は甕形土器の口縁部破片。9はST24覆土中出土で、口縁部が太く外側に突出し、古手の様相を示す。10はST56覆土中、11はST42覆土中、12はST28覆土中から出土し、いずれも逆L字形の口縁形で、須玖Ⅰ式の範疇に入る。13はST22覆土中、14はST31覆土中から出土し、口縁は細長く外に突き出し、須玖Ⅱ式の様相を示す。15はST02覆土から出土し、口縁部はく字に外反する。16はST24覆土出土。大型で甕棺に使用されたと考えられる。17はST34覆土中から出土した鉢形土器の口縁部。18～28は小片のため、口径不明。18はST06覆土出土。19、22はST02出土。20はST05覆土中出土。21、

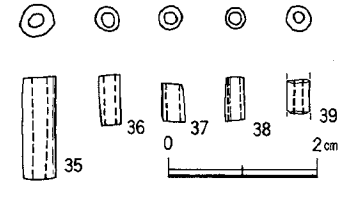


Fig. 25　ST－33出土管玉実測図（1／1）

23はST11覆土中出土。18～23はいずれもＬ字口縁。24はく字に外反する口縁をもつ。ST02覆土中から出土。25～27は大型棺口縁部とみられる。25はST18覆土中から出土。Ｔ字口縁をもつ。26はST05覆土中出土。太めのＴ字口縁で、口縁下に突帯の痕跡がみられる。27はST09覆土中出土。口縁はＬ字形で突帯がつき、立岩式的要素が強い。28は甕形土器か壺形土器の口縁部と見られる。口縁は強く外反する。ST02覆土中出土。29は大型棺胴部突帯付近破片。コ字形の突帯が２本貼りつく。ST47覆土中出土。

30、31は土師器碗。30はST43覆土中、31はST39覆土中から出土。32、33は須恵器の杯底部。いずれも高台がつく。32はST02覆土中、33はST14覆土中で、30～33は混入品とみられる。

34は砥石。柱状で、４面に研磨痕が残る。現存長6.5㎝、重さ25ｇ。頁岩製。

35～39はST33から出土した管玉である。表土はぎの時点で検出され、埋葬時の状況は復元困難である。５点検出され、35は全長1.4㎝、径４㎜、36は全長７㎜、径３㎜、37は全長５㎜、径３㎜、38は全長５㎜、径２㎜、39は両端を欠き、全長４㎜、径３㎜。淡緑色を呈し、碧玉製とみられる。

（４）小結

Ａ区は遺構の密度が薄く、墓域や集落の周辺部であったと推定される。出土した遺物については包含層中から出土した遺物のなかにＢ区とほぼ同時期の甕棺破片や土器破片が検出されたことから、調査区南側の尾根頂部付近に集落、あるいは墓域の中心が存在し、その地点からの遺物の流れ込みが生じたと推定される。

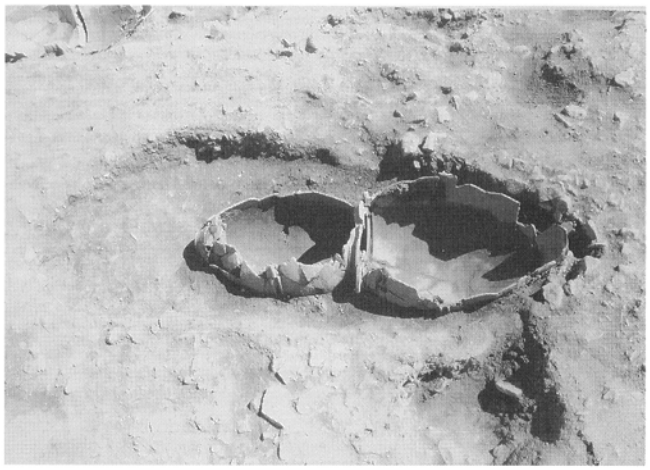
Ｂ区では甕棺墓を主とする墳墓群を検出できた。甕棺の型式からみて、浦江谷遺跡群２区で検出された甕棺墓群に先行する位置付けができる。埋葬形態としては大型棺、小型棺ともに安定した埋葬形態で、浦江谷遺跡群のように特殊な埋葬形態をとる甕棺墓がないことから、両者の墳墓群を形成する背景にあった社会的な様相の違いが伺える。

本調査区は黒塔Ａ遺跡群の最北端にあたり、甕棺墓群の小群を検出することができたが、Ａ区の包含層の状況から見て、台地状にさらに数ヵ所の集落、墳墓が点在することが予想される。また浦江、浦江谷、黒塔Ａ、長峰の室見川西側の各遺跡群で甕棺墓が検出されたことから、室見川西岸の河岸段丘上の先端部分を中心として、甕棺がベルト状に分布する傾向があることがうかがえる。

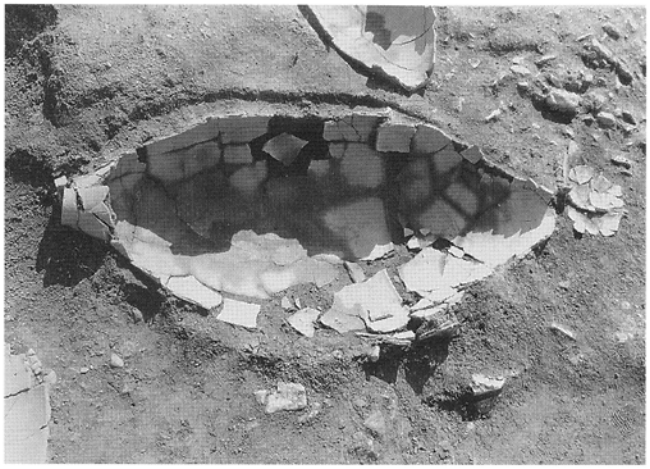
Ph. 1　A区全景（南から）

Ph. 2　B区全景（南から）

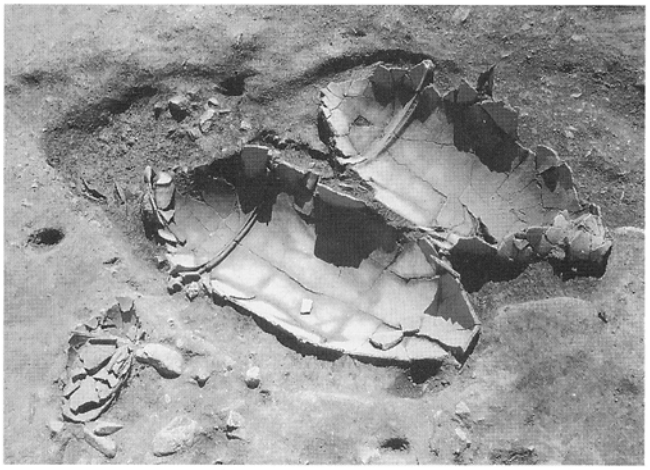
Ph. 3　B区甕棺墓群（南から）



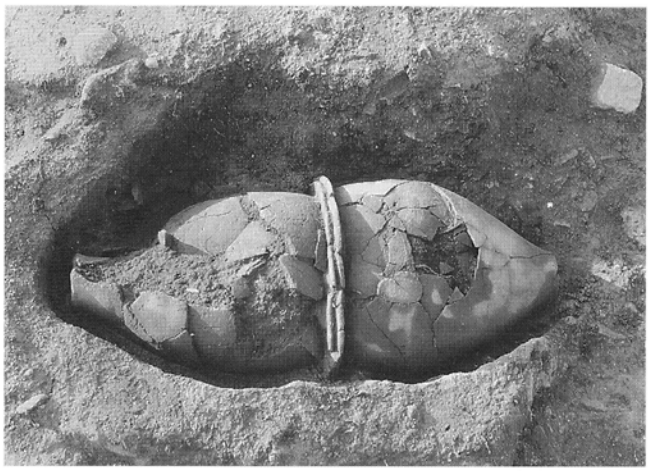
Ph. 4　ST－001（西から）



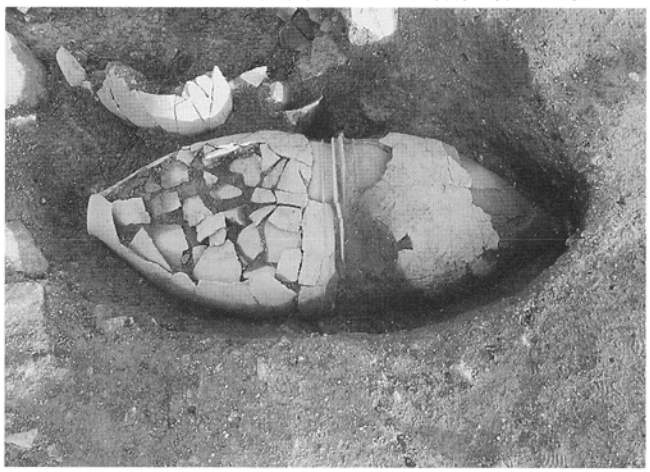
Ph. 5　ST－002（北から）



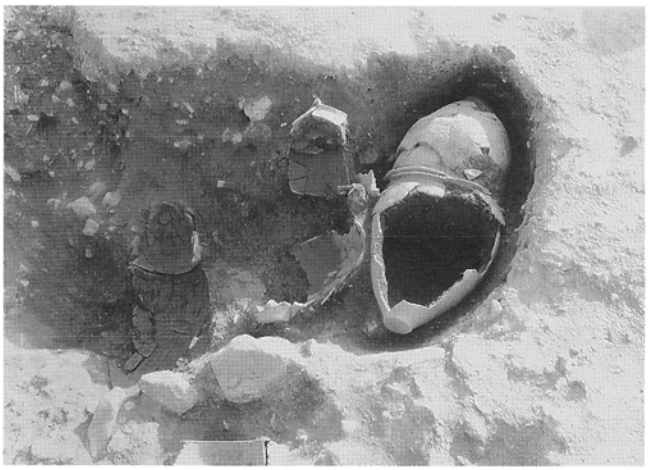
Ph. 6　ST－005（左）、ST－006（右）（北から）



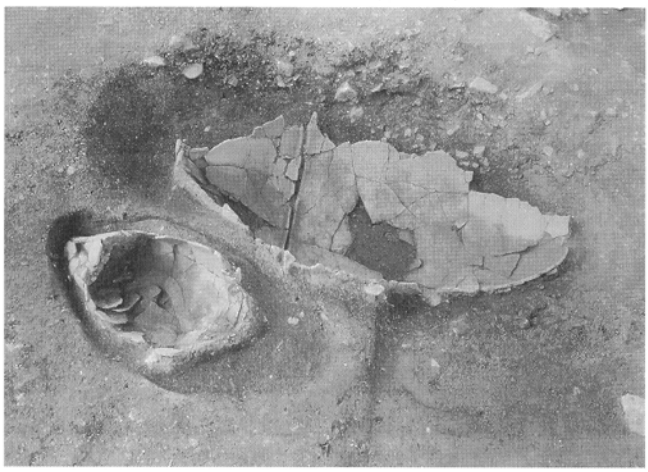
Ph. 7　ST－010（南から）



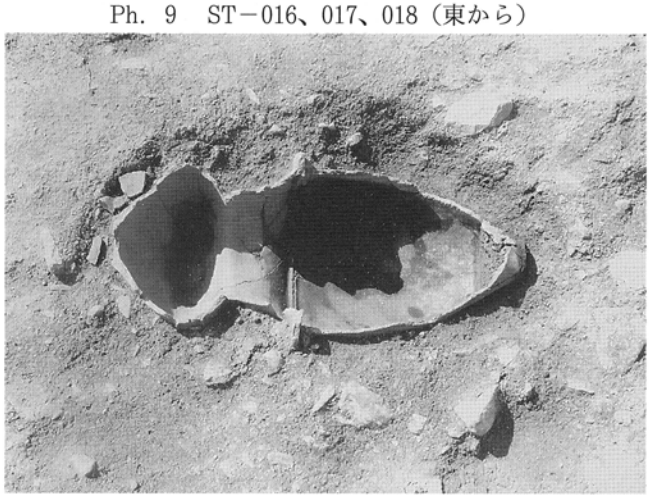
Ph. 8　ST－016（北から）



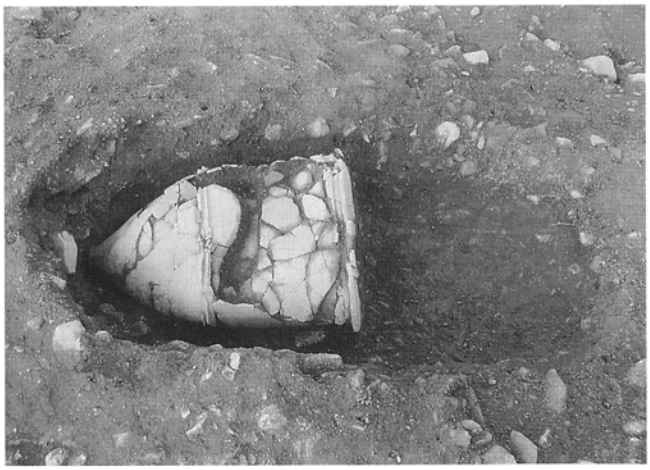
Ph. 9　ST－016、017、018（東から）



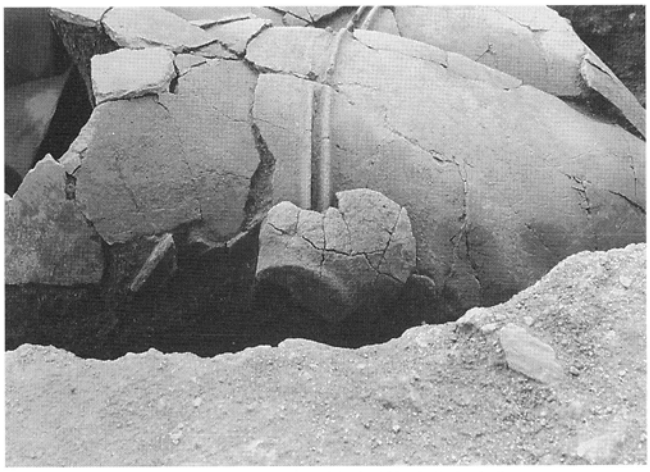
Ph. 10　ST－023（下）、024（上）（東から）



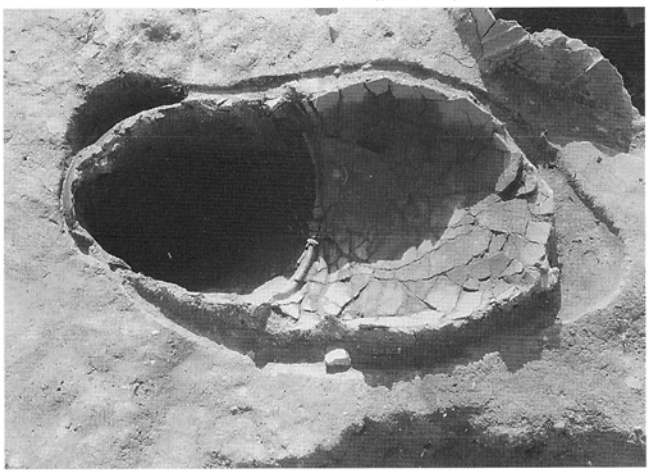
Ph. 11　ST－027（東から）



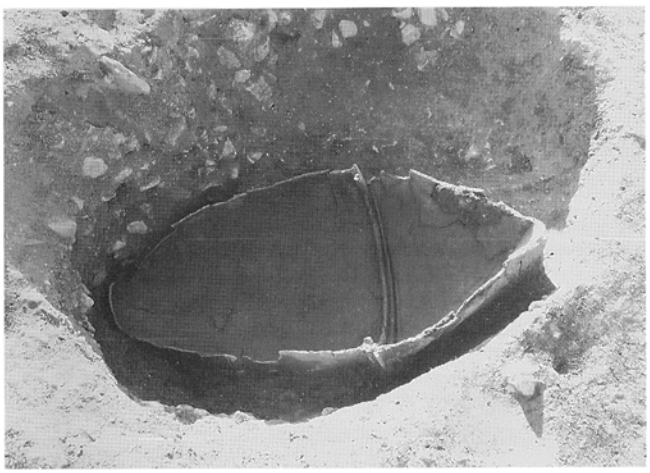
Ph. 12　ST－031（西から）



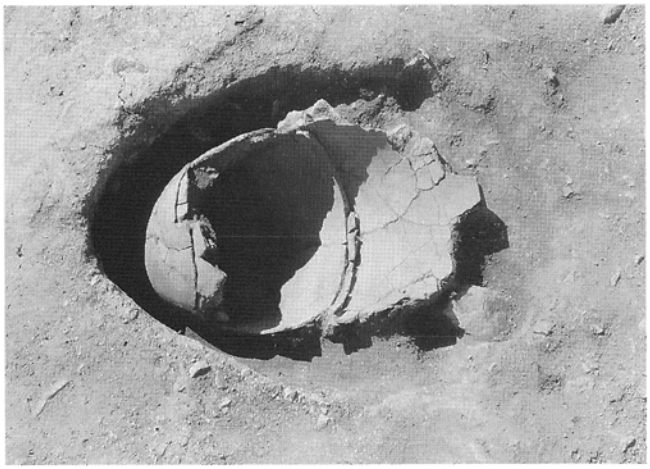
Ph. 13　ST－035 接合部（北から）



Ph. 14　ST－038（東から）



Ph. 15　ST－042（東から）

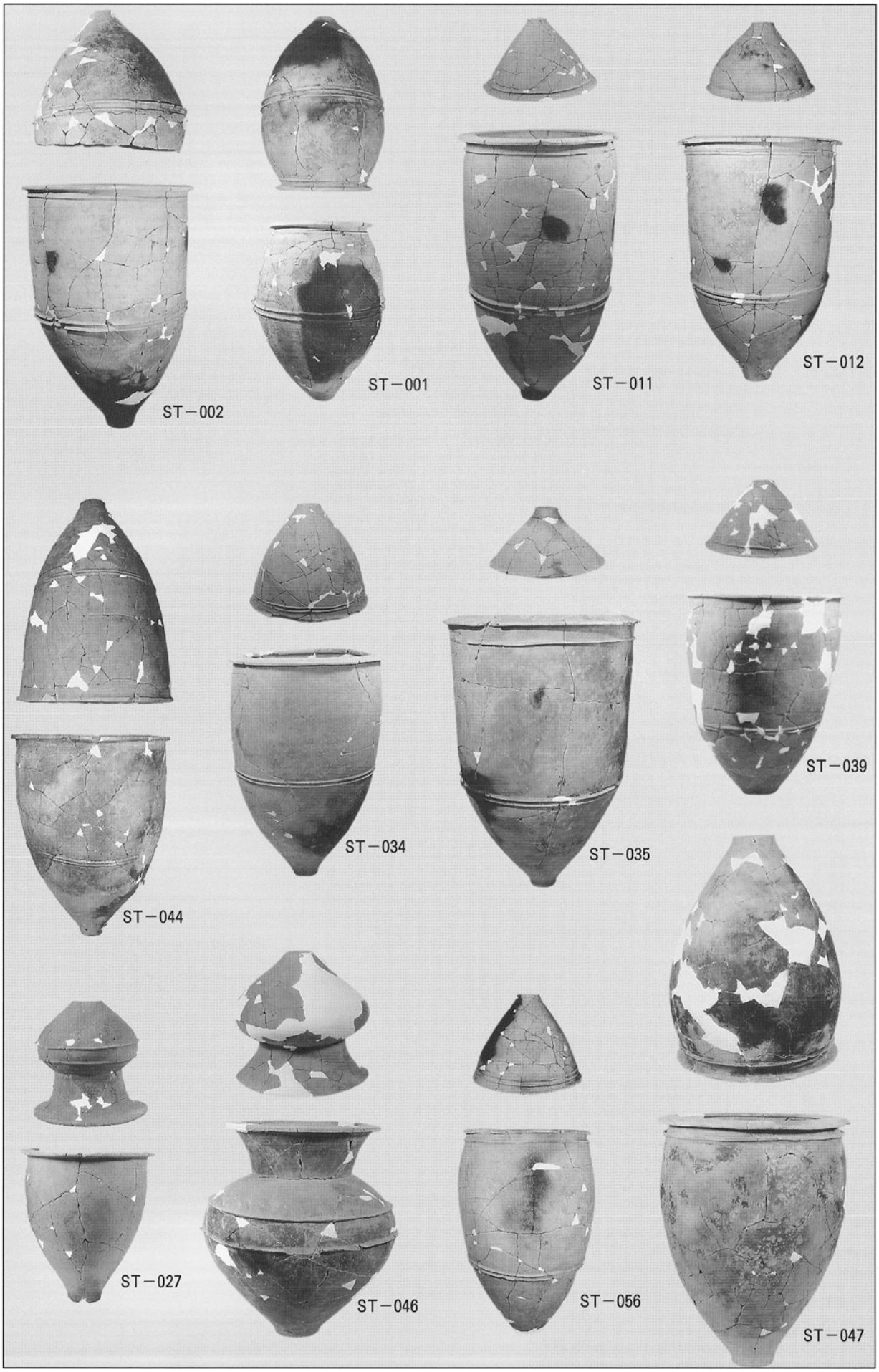


Ph. 16　ST－043（東から）

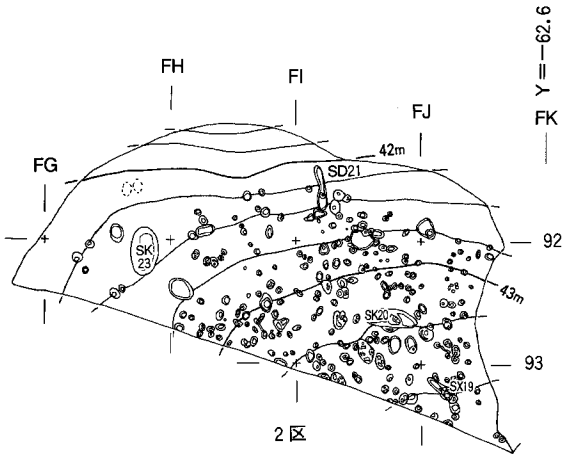
Ph. 17　ST－045（東から）

Ph. 18　ST－056（北から）

Ph. 19　ST－033 管玉出土状況（西から）


ST－002
ST－001
ST－011
ST－012
ST－044
ST－034
ST－035
ST－039
ST－027
ST－046
ST－056
ST－047

Ph. 20　出土甕棺



11. 黒塔A遺跡第2次調査

1）調査の概要

調査区は北東に延びる白塔と黒塔の舌状丘陵にはさまれた300×180m程の中位段丘の、室見川に望んだ先端部近くに位置する。標高は42～45mである。周辺は甕棺墓群に囲まれ、左岸の70m北には第1次調査・西200mには黒塔甕棺遺跡・北300mには浦江谷2区、右岸で500m東には東入部遺跡が位置している。

住宅団地造成に関連する農道整備を起因とするため、調査区は幅10m程のトレンチ状になっている。1次調査区とは小谷で画されている。本調査区内も北部に小谷が入り、この西を1区・東を2区とした。現況は水田で、2区の削平は深く、甕棺の大部分は半裁される。

検出された遺構は1区で弥生前期末の壷棺1基・弥生中期の土壙1基・古墳後期の落し穴状土壙1基・柱穴多数である。

2区では弥生前期末～中期末の甕棺24基・竪穴住居址1軒・井戸状土壙1基・土壙2基・弥生中期～奈良時代の掘立柱建物5棟・10世紀代の土壙墓1基・土壙1基他、柱穴多数で、北の段丘縁辺に墓地が、南の中央部に生活遺構が濃密に分布する。

中でも弥生時代の掘立柱建物は1×2間・桁行6.4m梁間3.2mの大型で、掘方は0.9～1.4mの方形の大きなもので、径30～35cmの柱を据えている。佐賀県吉野ケ里遺跡の楼館より1m短いだけで、比べても遜色はない。

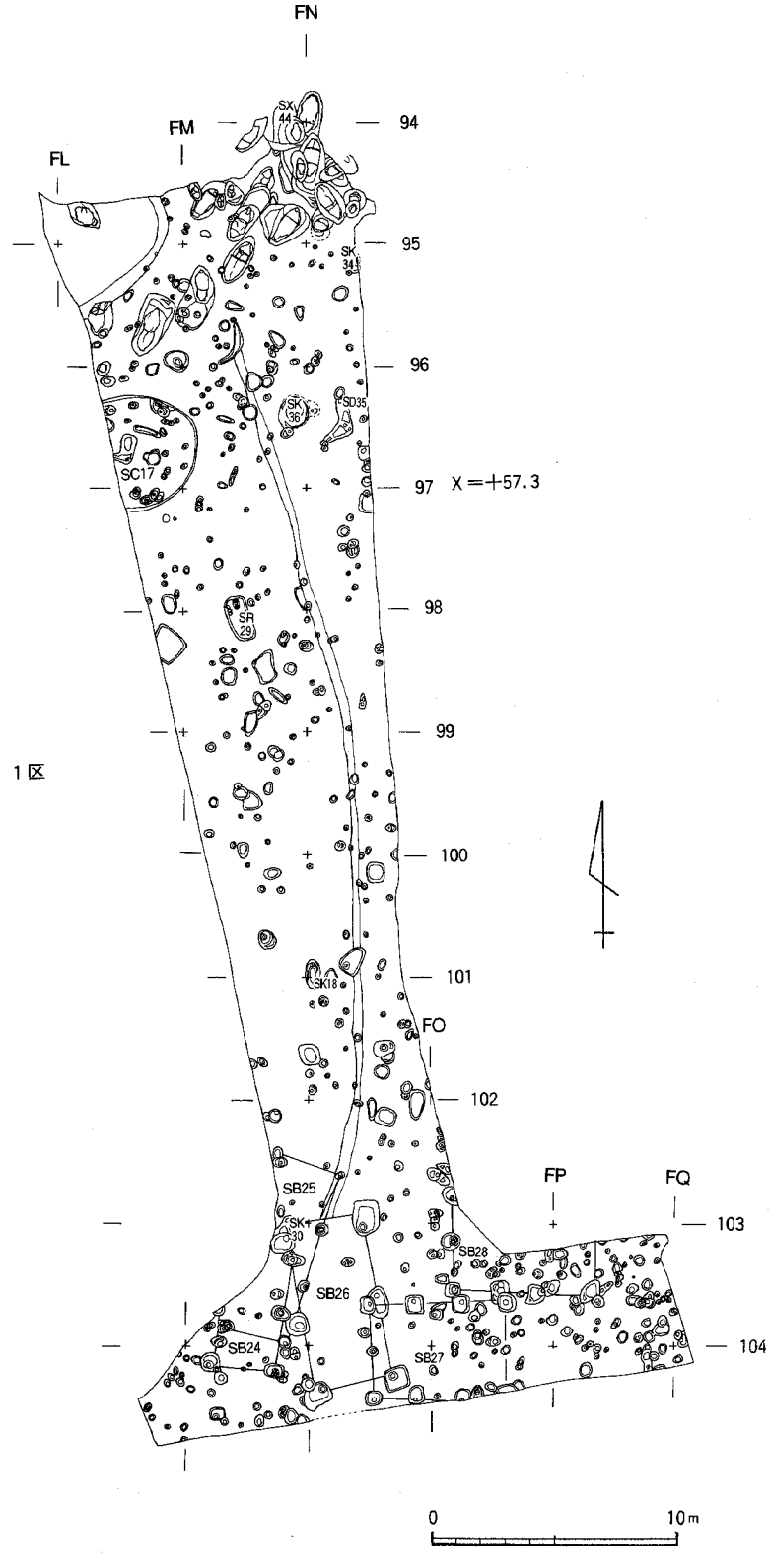


Fig. 1　遺構全体図（1／300）

2）１区の調査　１区は東西を小谷で区切られた22×10m程の小さな舌状の中位段丘先端部で、北東側にゆるく傾斜している。標高は41.5～43.5mを測る。試掘時では奈良時代～12・13世紀代の遺物が目立ったが、調査では確認されていない。

検出された遺構は前期末の壷棺１基・中期後半の土壙１基・古墳時代後期の落し穴状土壙１基・柱穴多数で、調査区東半部に集中する。

①ST22（Fig. 2　Ph. 2）　調査区北西部のFG91に位置する壷棺で単独で存在し、１区では１基のみの墓の検出である。

墓壙は90×70cmの楕円形で底面は棺尻側が10cm程下がる。棺は肩部以上が削平されており、合せ口か単棺かは不明である。15°程の傾斜の墓壙の下方の底面と壁面に接して斜位に埋置している。胴下位の接地部に外方からの穿孔がなされている。

Ph. 1　１区全景（南から）

Fig. 3の９は棺で、口頸部を欠く壷である。胴部最大径は上位にあり、径34cmを測る。底径は９cmで若干上げ底となる。外面はケズリ様のタテ・ナナメ板ナデ後、ナナメ・ヨコ方向の粗いケンマを施す。内面は指頭圧痕が目立ち、丁寧なケンマが施される。胎土は１mm前後の石英粒を多量に、角閃石を若干含む。色調は明褐～橙色の暗色気味で金海式に似る。前期末と思われる。

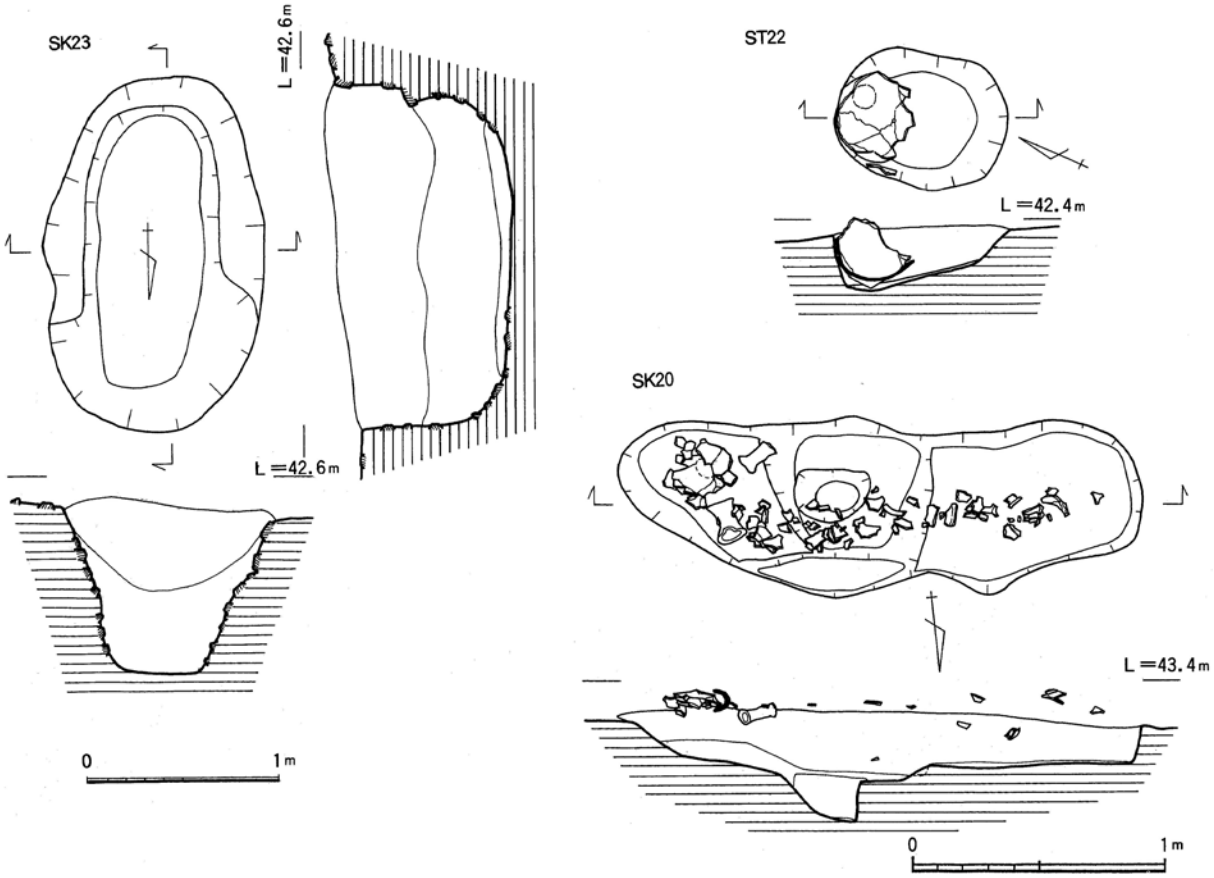
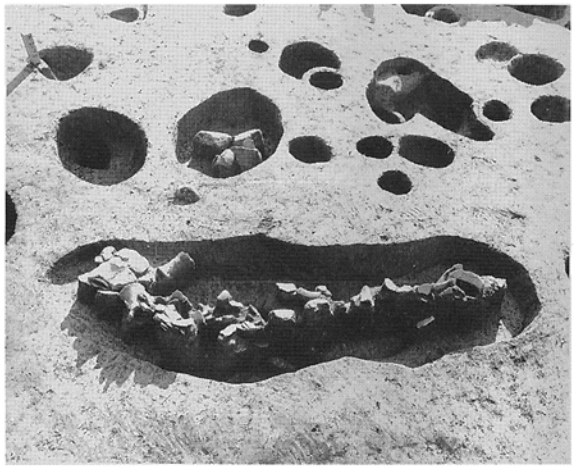


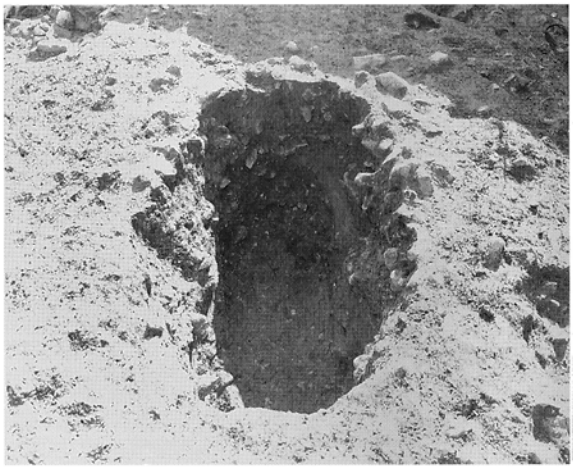
Fig. 2　SK20、ST22（1／30）SK23（1／40）

②SK20（Fig. 2　Ph. 3）　柱穴が集中する東半部の中央FI92に位置する。主軸をほぼ東西方向にとり長軸で207㎝幅85深15㎝を測り、中央部がさらに86×72㎝深12㎝、その中央に径36㎝の柱穴状の穴をもつ隅丸長方形のやや不整形な土壙である。暗褐色の斜面包含層中から掘り込まれていると思われ、床より20㎝程上位に丹塗の壷や支脚等が堆積する。墓域での祭祠土壙と考えると南側に甕棺墓群が形成されている可能性がある。

Ph. 2　ST22（西から）



Ph. 3　SK20（北から）



Ph. 4　SK23（北から）

Fig. 3の1～7は出土遺物で、1～3は甕である。1は口縁が逆L字に屈曲し、胴がやや張る。2は口縁が「く」字に強く屈曲し、胴が大きく張る。口径25.4㎝を測る。3は薄く広い底部で、径7.4㎝を測る。いずれも剥離が著しく調整は不明である。4は丹塗磨研の広口壷と思われる。底部は径7㎝と小さく、強く外反しながら胴部へと延びる。外底は若干上げ底となる。5～7は支脚で浦江谷1区SD25出土品に良く似る。5は口径9.3底径10器高13.5㎝を測る。器壁が厚く最大1.8㎝を測る。外面は板ナデ・指ナデを施し指頭圧痕が目立つ。口唇と底面は板による面取りがなされる。内面は中央にシボリ痕が残り上下両端部は指頭圧後粗いナデを施す。2㎜までの粗い石英粒を多く含む。小片に割れており、内壁は被熱のため大きく剥離する。6は口径7.0底径7.6器高12.8㎝でやや細目。器壁は厚く最厚部で2.2㎝を測る。胎土は石英粒を多量に含み、同じく2～3㎝の小片に割れ、内壁が剥落している。色調は橙色を呈する。7は裾が広がるタイプで底径10.7㎝を測る。胎土は7㎜前後の石英小礫まで含んで粗く、器壁は2.2㎝を測る。内外ともに指頭圧後ナデを施す。時期的には中期後半～後期初頭を示す。

③SK23（Fig. 2　Ph. 4）　ST22近くのFG92に位置する落し穴状の土壙で、主軸を南北方向にとり、長軸で1.87幅1.22深0.9mを測る大型の土壙である。地山の混土礫層を掘削しており、底面はほぼ水平であるが杭の痕跡は検出されなかった。上層の暗褐色土中から須恵器大甕の小片が検出されている。壙の形態から落し穴である可能性が高い。Fig. 3の8は出土品で、須恵器甕の底部付近の小片である。外面は斜格子叩後ゆるい回転ナデ・内面には平行弧の当具痕が残る。胎土は2㎜前後の石英粒を少量含み、灰色を呈する。古墳時代後期と思われる。

3）2区の調査　2区は北東に延びる黒塔と白塔との舌状丘陵にはさまれた300×180m程の中位段丘の室見川に望んだ先端部に位置する。標高は45～46mである。現況は水田である。農道と基盤整備に伴う調査で、農道部と切り下げ部分を対象としたため、調査区は稜線に直交した長さ50m幅10m程の「T」字のトレンチ状を呈している。

検出された遺構は前期末～中期末の甕棺墓24基・円形竪穴住居1軒・井戸状土壙1基・土壙2基・弥生～奈良時代の掘立柱建物5棟・10世紀代の土壙墓1基・土壙1基他、柱穴多数である。

甕棺墓は北側に位置し、幅7m程の北東方向のベルト内で検出され、段丘縁辺に沿っている。調査区外の東側の水田の耕作土スキ取り時にも同方向に延びる甕棺群を確認しており、黒塔A遺跡のある段丘縁辺全体に延びる可能性がある。

調査区南側には大型建物が集中し、弥生時代中期後半～後期前半の3棟・奈良時代の2棟の掘立柱建物を検出した。中でも1×2間のSB26は大型で桁行6.4m梁間3.2mを測り、柱穴掘方も1mを越える。遺構密度は今調査中最大で、南西の丘陵主体部に主要な遺構が広がる可能性が極めて高い。

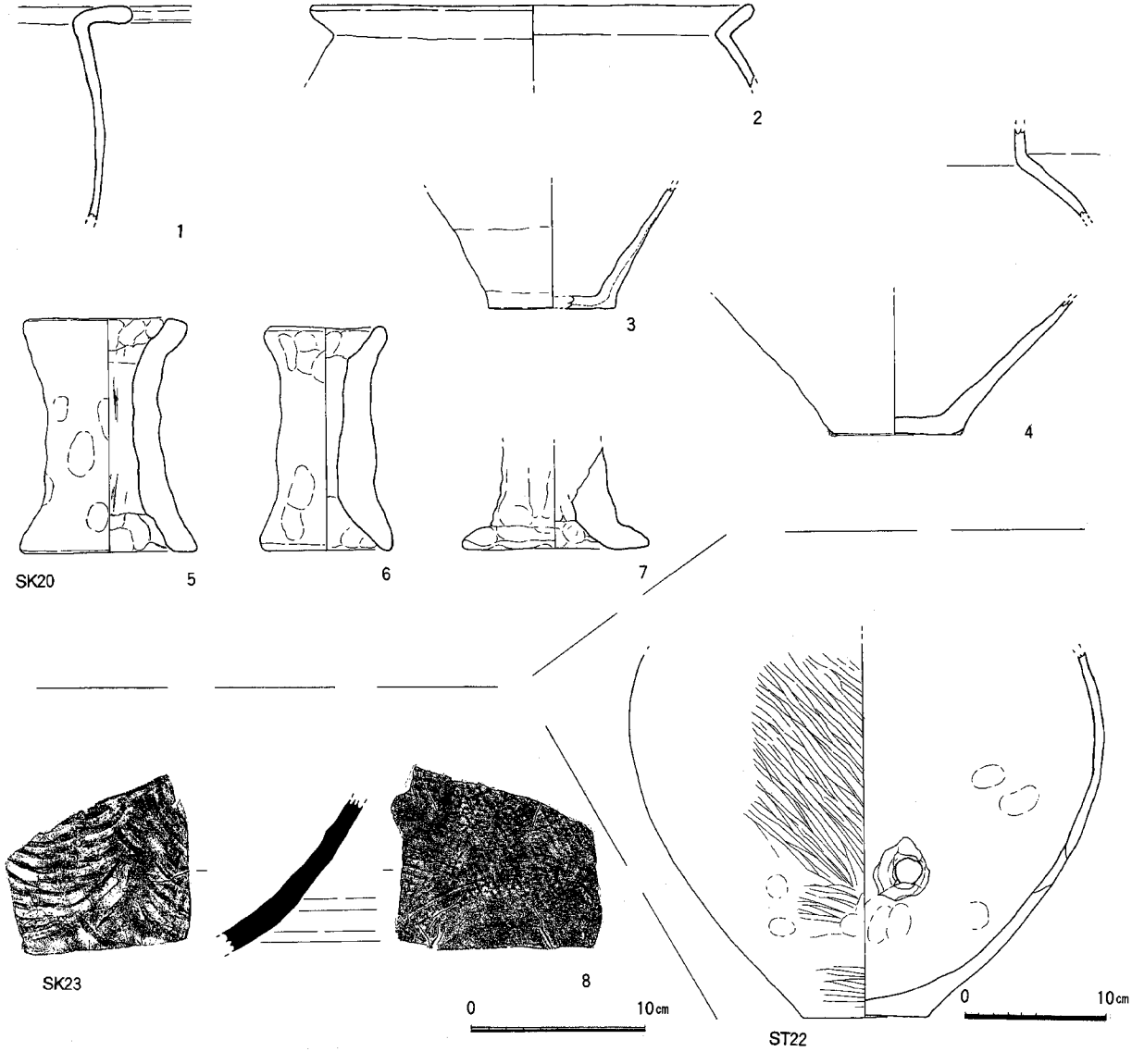


Fig. 3　2区出土遺物（1／4、1／5）

①甕棺墓　甕棺墓は前述の様に、調査区北側の丘陵縁辺に沿って幅７ｍ程のベルト内に分布している。調査区の幅が10ｍ程の狭小な範囲のため明確ではないが、列埋葬にはならず、東西二つのブロックに分かれそうである。時期別には前期末２基（ST38、39）・中期前葉２基（ST８、32）・中期中葉８基（ST３、５、６、13、14、16、42、43）・中期後葉８基（１、２、７、９、10、12、33、37）・中期末４基（４、15、40、41）の計24基である。

ST01（Fig. ５、６　Ph. ７）　FM95に位置する。墓壙は157×85㎝の楕円形で深さ35㎝程が残る。南側に一段高く100×125㎝程の台形状の土壙が連なる。二重墓壙の可能性も有るが、棺の倍の長さとなり、大き過ぎるきらいがある。

棺は大型甕と中型甕の合口の成人棺で、ほぼ水平に埋置し、頭位をＮ－180°－Ｗにとる。

上甕は口径41.5～43㎝器高51.6㎝底径10.3㎝を測る。口縁は「く」字に屈曲し、口縁下に突帯を１条施す。胴張りは上位にあり、底部にかけ小さくすぼまる。底部は薄くやや広い。

下甕は口径48.4胴径61.0器高85.5㎝を測る。口縁は逆Ｌ字で口唇は凹線気味になる。口頸部がしまり丸味を持つが、胴部突帯が中位より上にあり、胴下位が延びて倒卵形を成している。中期後葉。

ST02（Fig. ５、６　Ph. ８）　FL95の群の南の中央に位置する。墓壙は長軸266、頭位133足位90㎝の長台形で深さ35㎝が残る。頭位が広く、５㎝程高くなる。

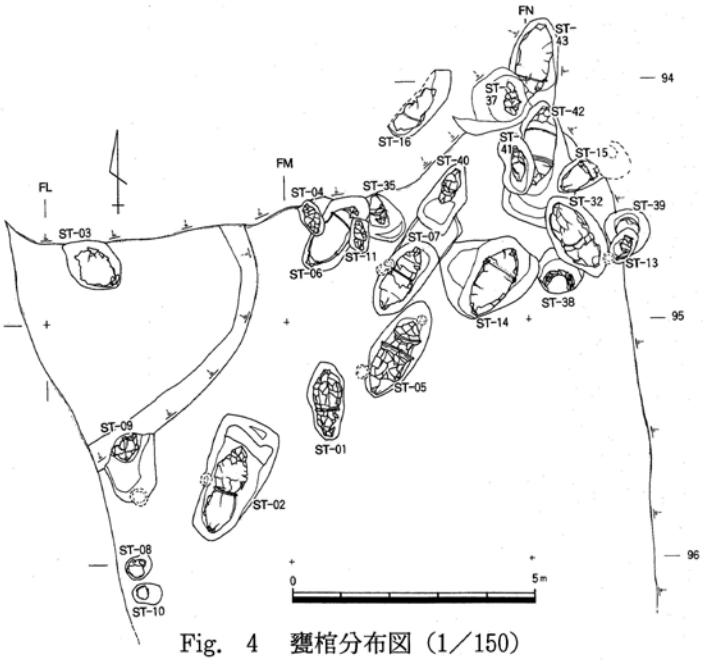


Fig. ４　甕棺分布図（1／150）

棺は削平のため半裁されているが、上から小型壷・大型甕・大型甕の三連の成人棺である。上・中は覆口、中下は接口の合口で全長190㎝。水平に埋置され頭位をＮ－22°－Ｅにとる。

上棺は胴径35㎝程の突帯を２条施す壷で胴上半を斜めに打ち欠いている。

中棺は口径52.0胴径61.5㎝の大型甕で残高82.5㎝。底部を欠き、径20㎝程の穴となっている。口縁は

Ph. ５　２区遠景（南から）

Ph. ６　甕棺群（東から）

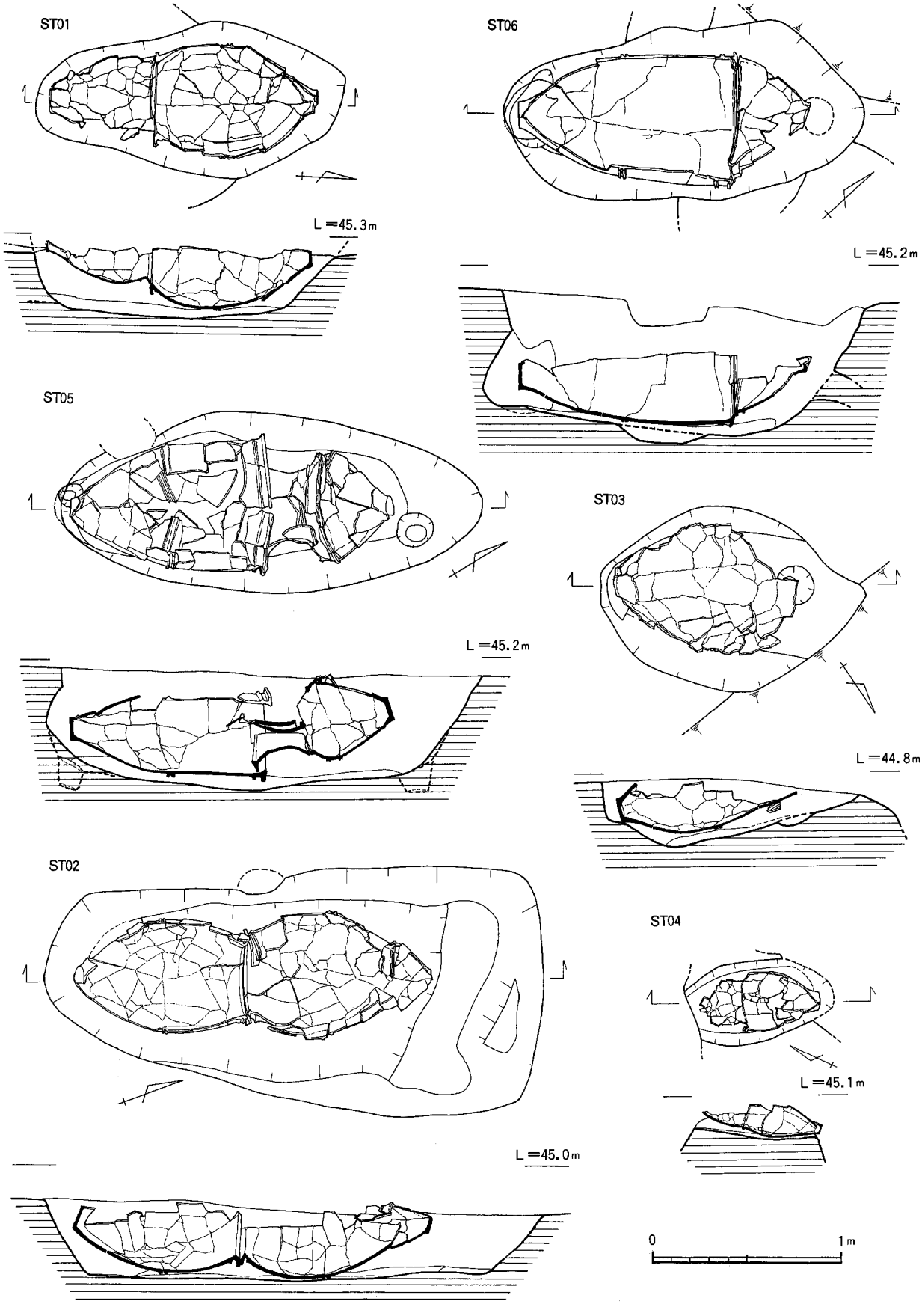


Fig. 5 ST01、02、03、04、05、06 (1/30)

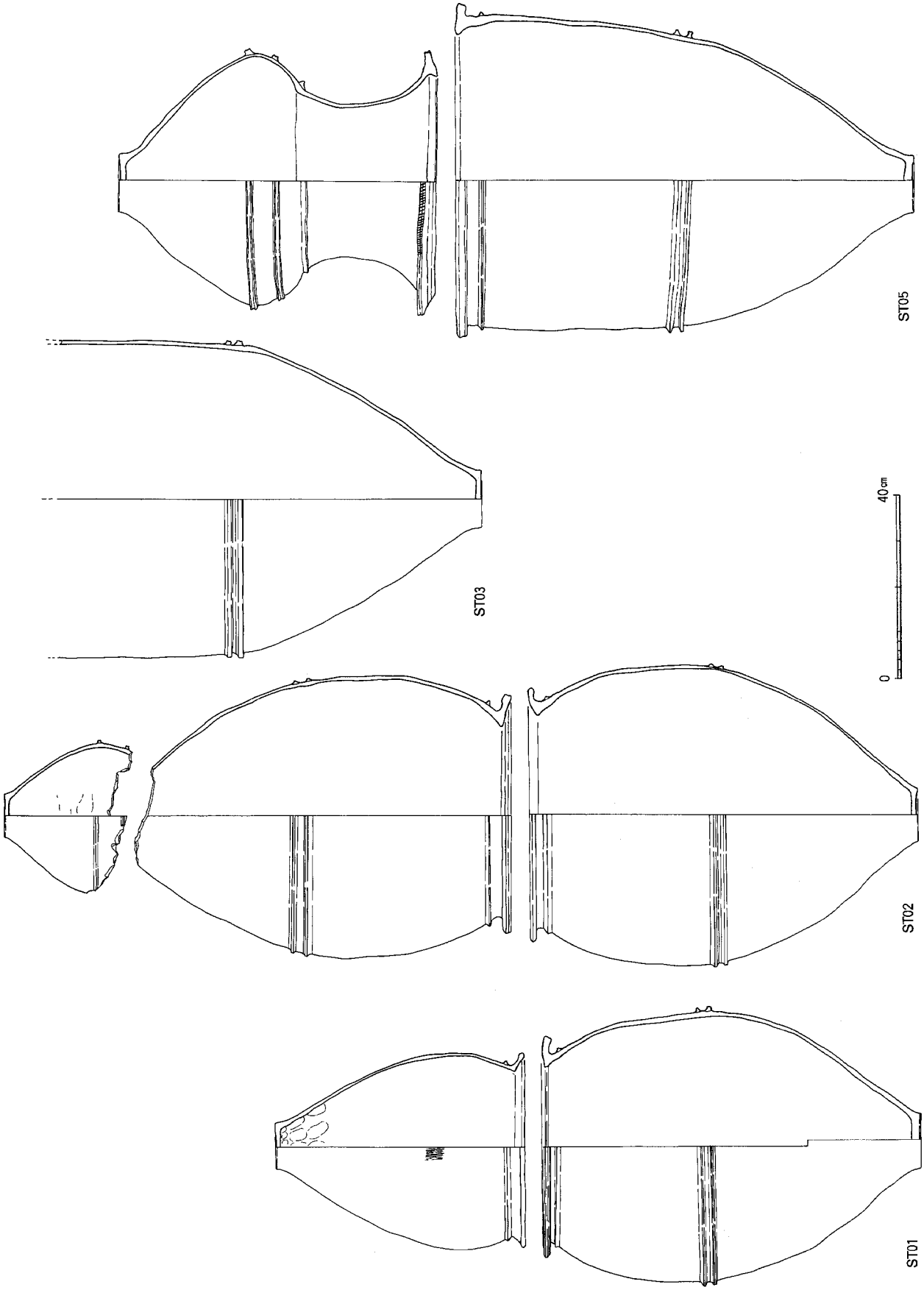


Fig. 6　ST01、02、03、05 甕実測図（1／12）

「く」字で口径がしまり、胴突帯下の長い倒卵形を呈している。下棺は口径54.6胴径65.3器高85㎝を測る。口縁は「く」字に屈曲し上面は水平になる。中棺より丸味を帯びる。中期後葉。

ST03（Fig. 5、6） 北西隅のFL94に位置する。単独の様に見えるが、東より70㎝程切り下げられており、周囲には数基分布していたと思われる。棺自体も上半部を削平されている。墓壙は残存で142幅98㎝の楕円形で底面は14°程の傾斜で20㎝程下がり、足位で15㎝程高い段となり、ここに底部がかかっている。上位中央に20㎝程の穴があくが、墓壙と同時か切合かは不明。

棺は他の同期のものからして合口と思われるが下棺しか残っていない。頭位をN－56°－Wにとり26°の斜位に埋置する。残存で径70器高93㎝を測る。胴はややすぼまり、中期中葉と思われる。

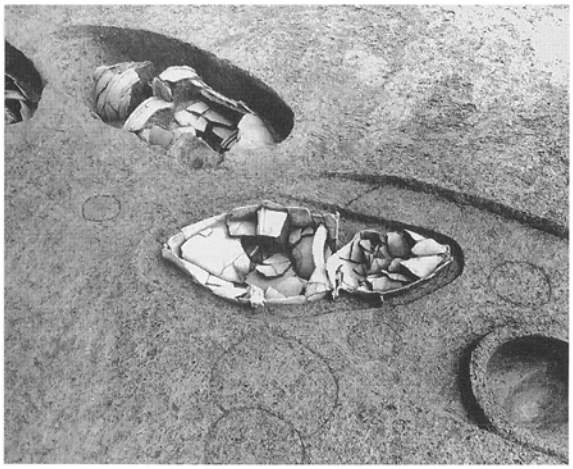
ST04（Fig. 5、9 Ph. 9） FM94に位置し、大型棺ST06を切る。北と上半部を削平される。墓壙は現存で70×46㎝を測る楕円形で深14㎝が残る。底面は7°程のゆるい傾斜で足位に下がる。

棺は小型甕の合口で28°の傾斜で傾位に埋置する。頭位をN－20°－Wにとる。

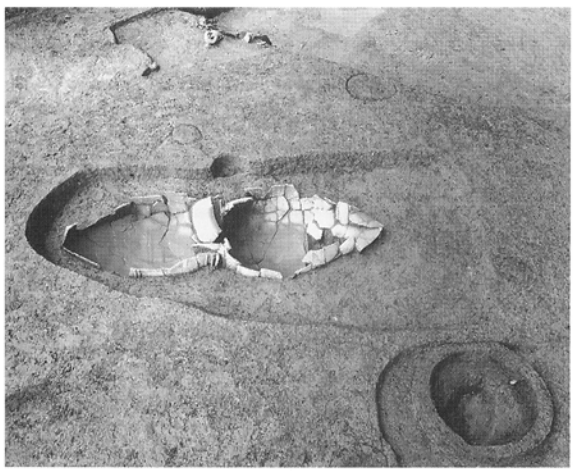
上甕は口径32㎝で口縁は内側に低く傾斜し、逆L字とく字状の中間的な様相を示している。胴はやや張り最大径は上位にある。

下甕は口径32.6内径26.8㎝器高40㎝を測る。口縁はよりく字に近く屈曲し、内面は稜をなす。胴上位の張りから底部へすぼまり、底部は径8.7㎝とやや広く薄い。胎土は5㎜以下の石英粒を多量に含み、器壁は剥落して調整は不明である。時期は中期後葉～末。

ST05（Fig. 5、6 Ph. 7） FM95の東グループの南端に位置する。墓壙は230×95㎝の楕円形で、足位側を10㎝程抉り込んでいる。底面はゆるい舟底形で足位がゆるく上がる。両端部に径15～20㎝の柱穴状の穴がある。



Ph. 7 ST01、05（西から）



Ph. 8 ST02（南東から）

棺は大型壷と大型甕の合口の成人棺で呑口式である。全長173㎝で頭位をN－31°－Eにとり、ほぼ水平に埋置する。

上棺は鋤先口縁の大型壷で口径58内径48㎝を測る。器高は69.5㎝で祭祠品に比べ深い器形となっている。口唇は凹線状に仕上げ刻目を施す。頸部に三角突帯1条・胴部に複合突帯2条を施す。

下棺は口径73.4内径62㎝器高99.6㎝を測る。胴部はゆるくすぼまる。口縁は逆L字形で若干外傾する。口縁下に三角突帯を1条・胴部に三角突帯、直下にコ字突帯を施す。時期は中期中葉。

ST06（Fig. 5、8 Ph. 9） FM94の北部に位置し、ほぼ完形で検出された。墓壙は193×92㎝の楕円形で深65㎝を測る。底面は足位から頭位にゆるく下がる舟底形で足位側を15㎝程抉る。頭位の壁面に径18㎝程の小穴が横にあくが、樹根の可能性がある。底面中央には径46深8㎝程の浅い穴がある。

棺は大型の鉢と甕の合口の成人棺で、全長154㎝を測り、頭位をN－41°－Eにとってほぼ水平に埋置する。

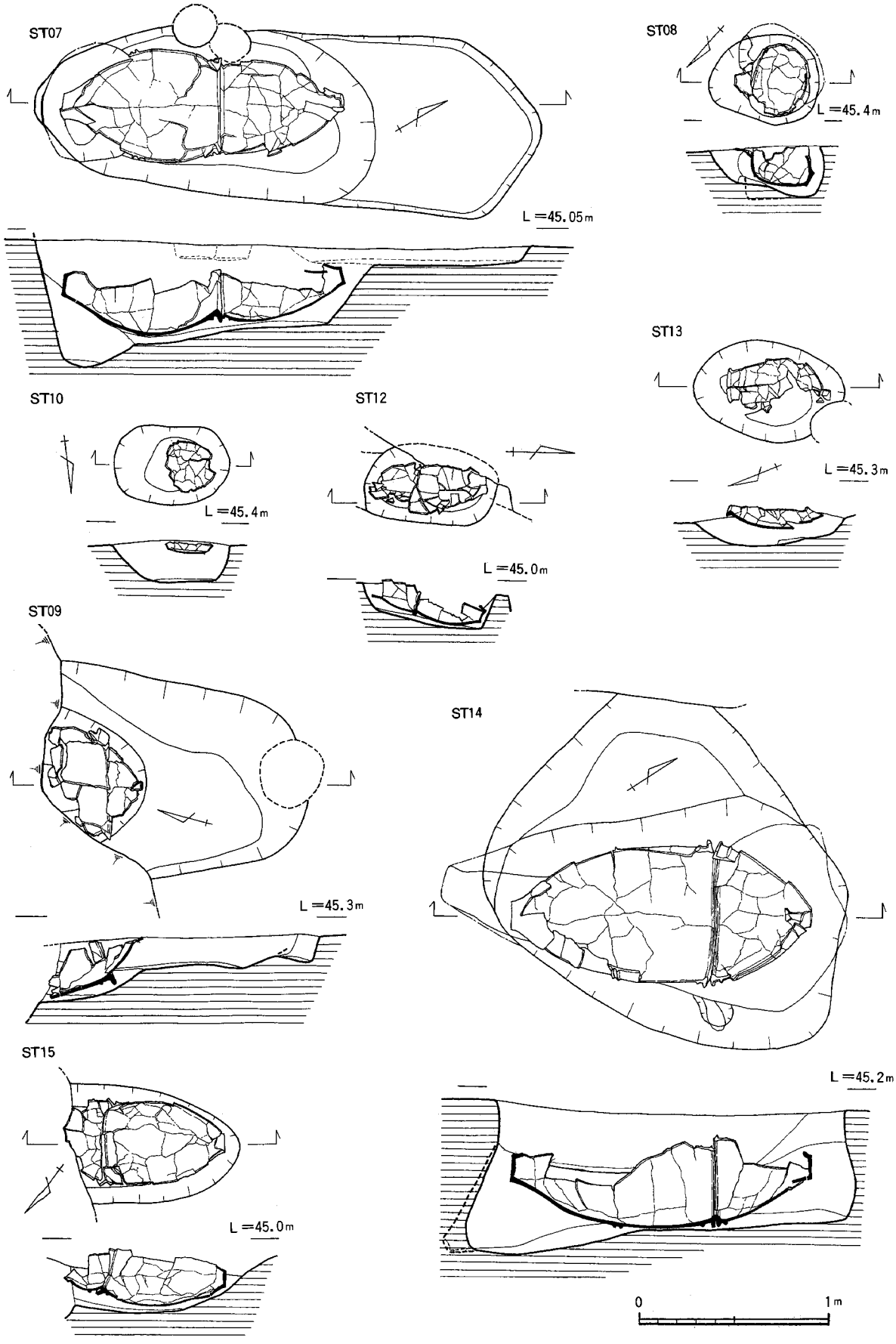


Fig. 7 ST07、08、09、10、12、13、14、15 (1／30)

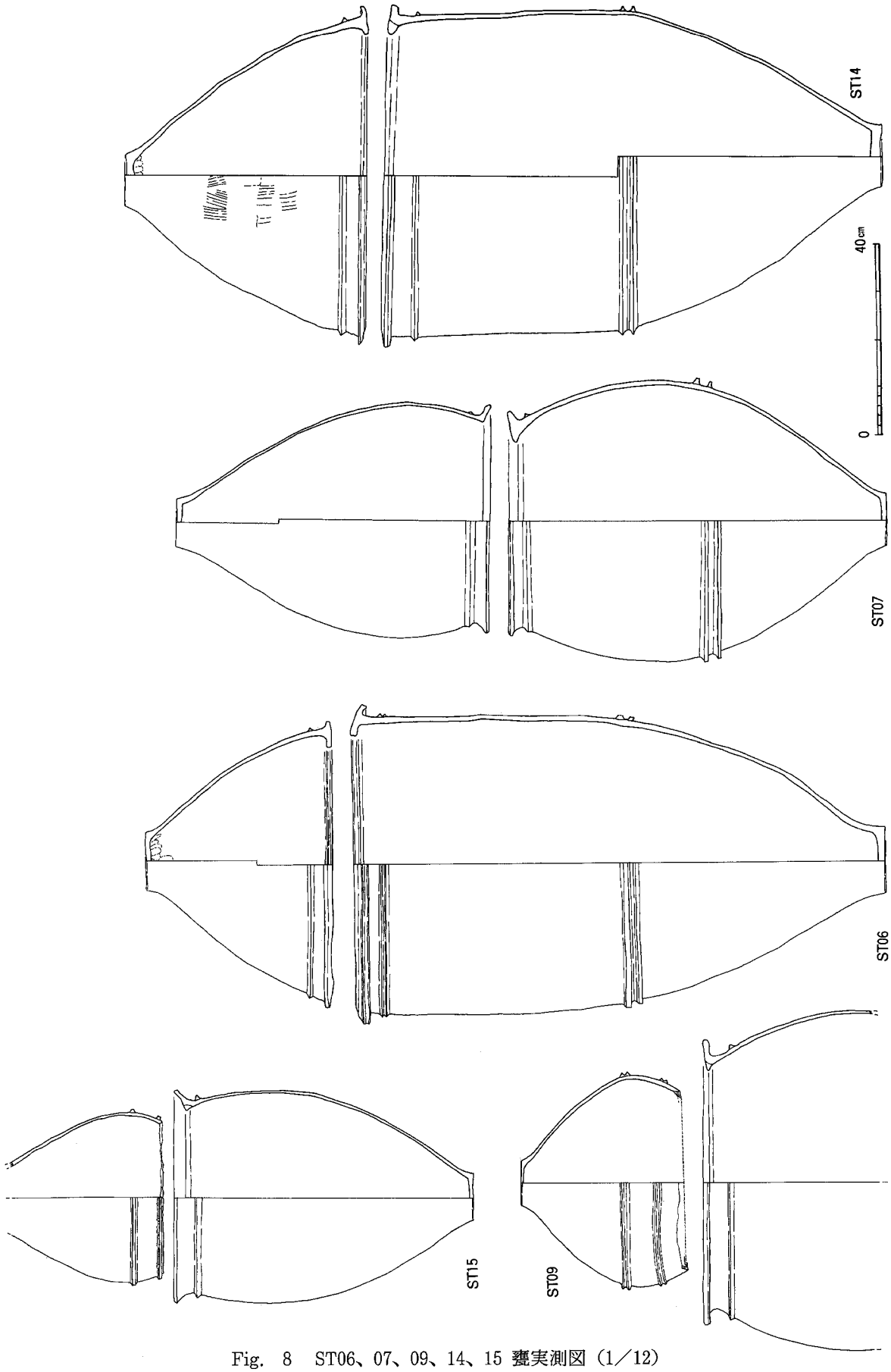
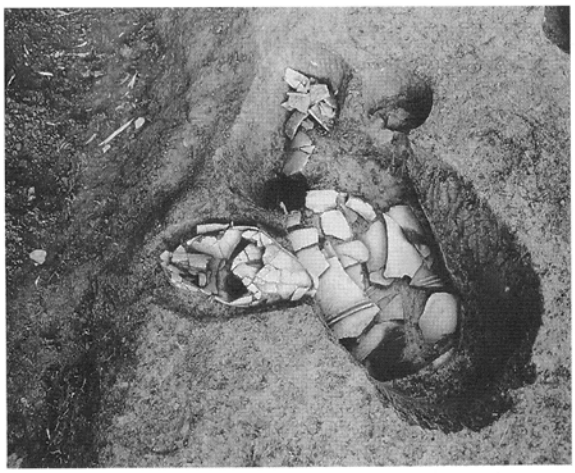


Fig. 8　ST06、07、09、14、15 甕実測図（1／12）

上棺は大型の鉢で口径61.5内径49.8器高39.5cmを測る。口縁はT字状で若干外側に傾斜する。口唇は内外ともに凹線状に仕上げる。口縁下に三角突帯を1条施す。

下棺は大型の甕で口径68内径54.5器高112.2cmを測り、胴が若干すぼまって縦長の器形が目立つ。口縁の調整は鉢と同様で外傾の度合いが強い。口縁下に複合の三角突帯を施す。中期中葉。

ST07（Fig. 7、8 Ph. 10） FM94に位置し、東グループのほぼ中央に位置する。長い二重墓壙を持ち長軸で268cm幅は足位から頭位に広がり58～96cmを測る。底面は中央が5°の傾斜で足位に10cm程下がり、端部に径60深20cm程の穴を穿つが下棺はこれにはまらない。頭位側は30cm程上がって長さ80cm程の段を成している。



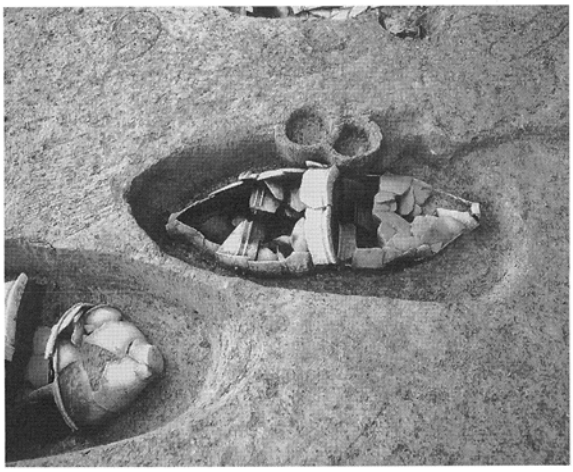
Ph. 9 ST04、06（西から）

棺は中型の甕による合口の成人棺で全長150cmを測る。頭位をN－28°－Eにとり、3°でゆるい斜位に埋置する。

上棺は口径48内径42器高66cmを測り、胴中位以下が強くすぼまる。口縁はく字口縁である。

下棺は口径47内径34胴径60cmで器高80.5cmを測る。口縁は逆L字状とく字状の中間を呈し、口頸部がしまり、胴中位が張って倒卵形を呈する。器壁が剝落し調整不明。中期後葉。

ST08（Fig. 7、9） 南西端部のFL96に位置する。墓壙は58×47cmの楕円形で、底面は深18・27cmの二重墓壙になっており、棺尻がこれに挿入されている。

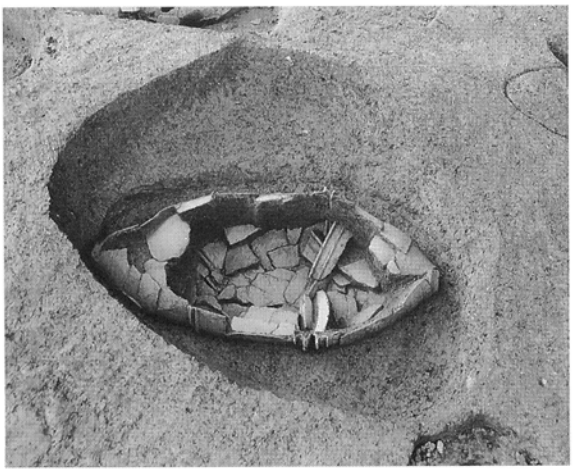


Ph. 10 ST07（東から）

棺は小型壷の合口の小児棺で覆口式である。頭位をN－50°－Eにとり、37°の斜位に埋置する。

上棺は口唇部を打ち欠いた広口壷と思われ、口縁部のみが残存する。頸部で径23cmを測る。器壁が剝がれ調整は不明である。

下棺は口頸部を斜めに打ち欠いた壷で内径21cm胴径35.6器高35.5cmを測り、胴部が深い。最大径は上位にあり、若干上に低い三角突帯を1条施す。打ち欠き面は粗く面取りがなされている。器壁が剝落し調整は不明。中期前葉。



Ph. 11 ST14（南から）

ST09（Fig. 7、8） 西側のFL95、田面の落ち際に位置し、下棺の大部分を削平されている。墓壙は長楕円形で二重墓壙となっている。現存長で138深15cmのゆるい傾斜の底面から一段高く90cm程平坦な墓壙が延びる。

棺は小型壷と大型甕の合口で呑口式である。頭位をN－168°－Eにとり、11°の斜位に埋置する。

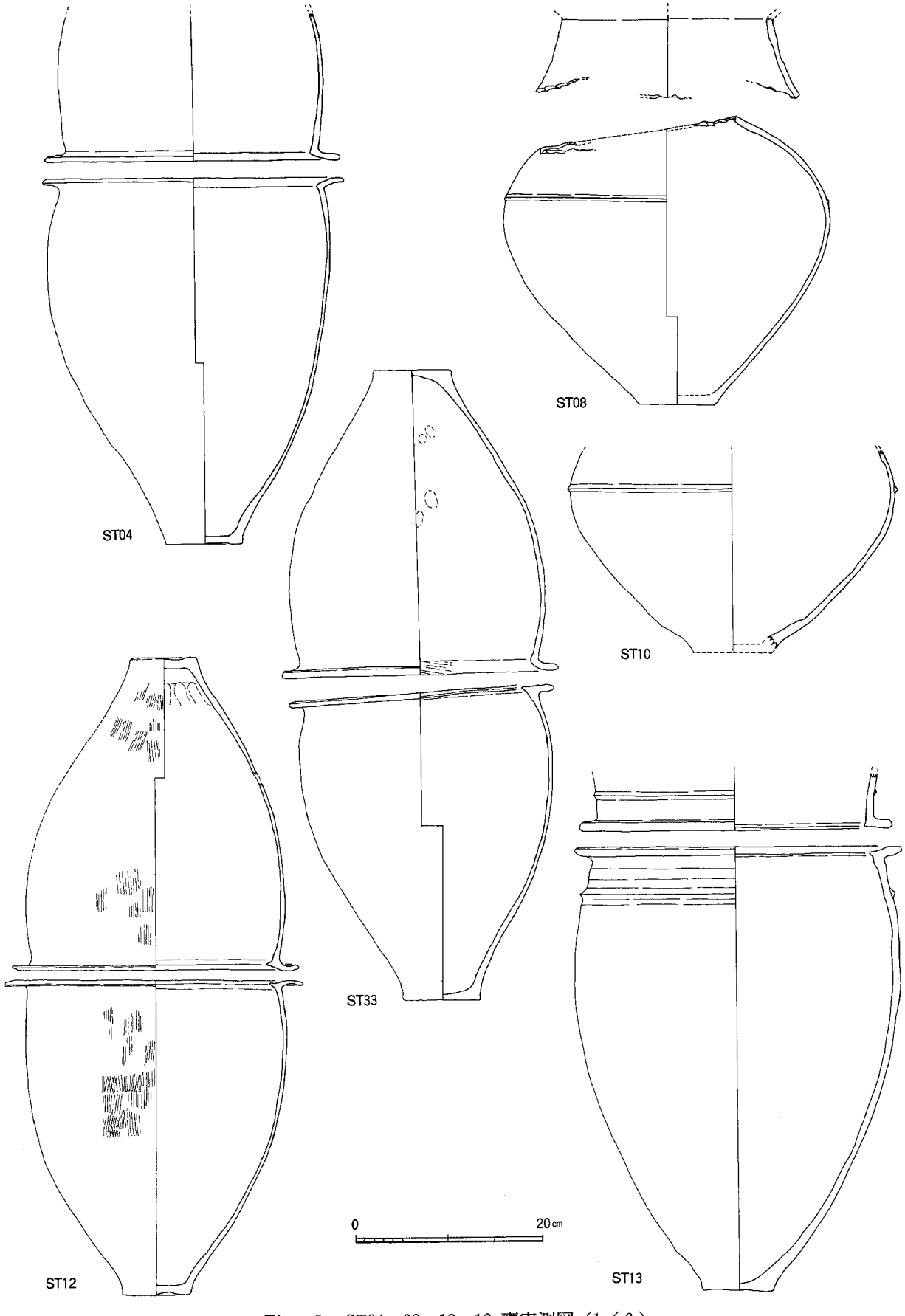


Fig. 9　ST04、08、10、12 甕実測図（1／6）

上棺は口頸部を打ち欠いた小型壷で、内径37.2㎝胴径46器高34㎝を測る。最大径は上位にあり、径9.6㎝の小さな底部にかけ急激にすぼまる。最大径の上下に三角の複合突帯を施す。

下棺は口径60.8内径47.6㎝の逆L字口縁を呈する大型甕で、しまった口頸部から胴部が大きく張る。口縁は若干内傾し、内側に若干張り出し、T字の名残りがある。器壁は調整不明。時期は中期後葉。

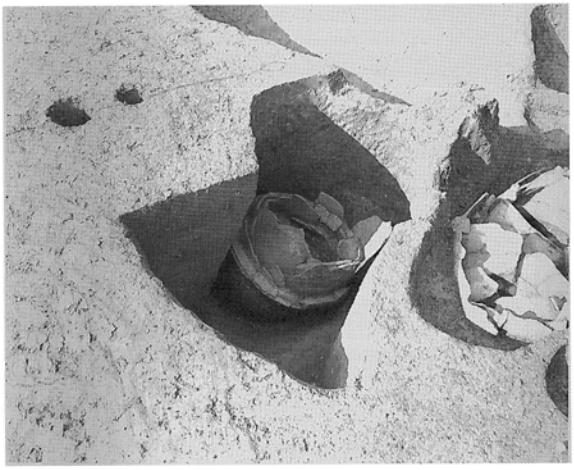
ST10（Fig. 7、9） FL96のST08に隣接する。著しく削平されており、底部と胴上位のほとんどを欠失する。墓壙は62×41㎝の楕円形で深21㎝と深く、棺は底面より14㎝程浮いている。

Ph. 12 ST32（東から）

棺は小型壷の下棺のみの残存のため、単棺か合口かは不明である。頭位をN－83°－Wにとり、胴下位を底面と水平にして斜位に埋置される。

棺は胴上位から底部際までの残存で、単棺か口縁打ち欠きかも不明。胴径で36器高21.4㎝を測る。最大径は上位にあり扁球形の浅い胴部である。最大径付近に小さな三角突帯を1条施す。中期後葉か。

ST12（Fig. 7、9） FM94の東グループ西側に位置し、ST06、33を切っている。墓壙は長軸70幅41㎝を測る楕円形で底面は15°の傾斜で足位に下がり深25㎝を測る。



Ph. 13 ST38（東から）

棺は小型甕の合口の小児棺で全長68㎝を測り、頭位をN－178°－Eにとる。墓壙の底面に接して26°の傾斜で斜位に埋置する。

上棺は口径31内径24㎝器高34㎝を測る。口縁は逆L字とT字状の中間に相当し、内面に張り出して稜を成している。口縁は若干内傾し口唇部は水平になる。胴部は上位でやや張り、薄い底部へとすぼまる。外底は若干上げ底となる。器壁があれるが、外面にタテハケが残る。

下棺は上棺と同作者の手になるものと思われ、酷似する。口径32㎝器高34㎝で寸法もほとんど同じである。口縁の成形も同一で、若干内傾し、内面が張り出して稜を成している。底部も薄く外底は若干上げ底となる。外面にはタテハケ調整が残っている。時期は中期後葉である。

Ph. 14 ST39（東から）

ST13（Fig. 7、9） FN94で東端部に位置し、ST39、32を切っている。墓壙は長軸80幅50㎝の楕円形で、底面は深い20㎝程の舟底形で頭位側が下がる。棺は底面から10㎝程浮き逆方向に傾斜する。

棺は小型の甕の合口の小児棺で上棺の大部分を欠失する。頭位をN－22°－Eにとり、13°の低い

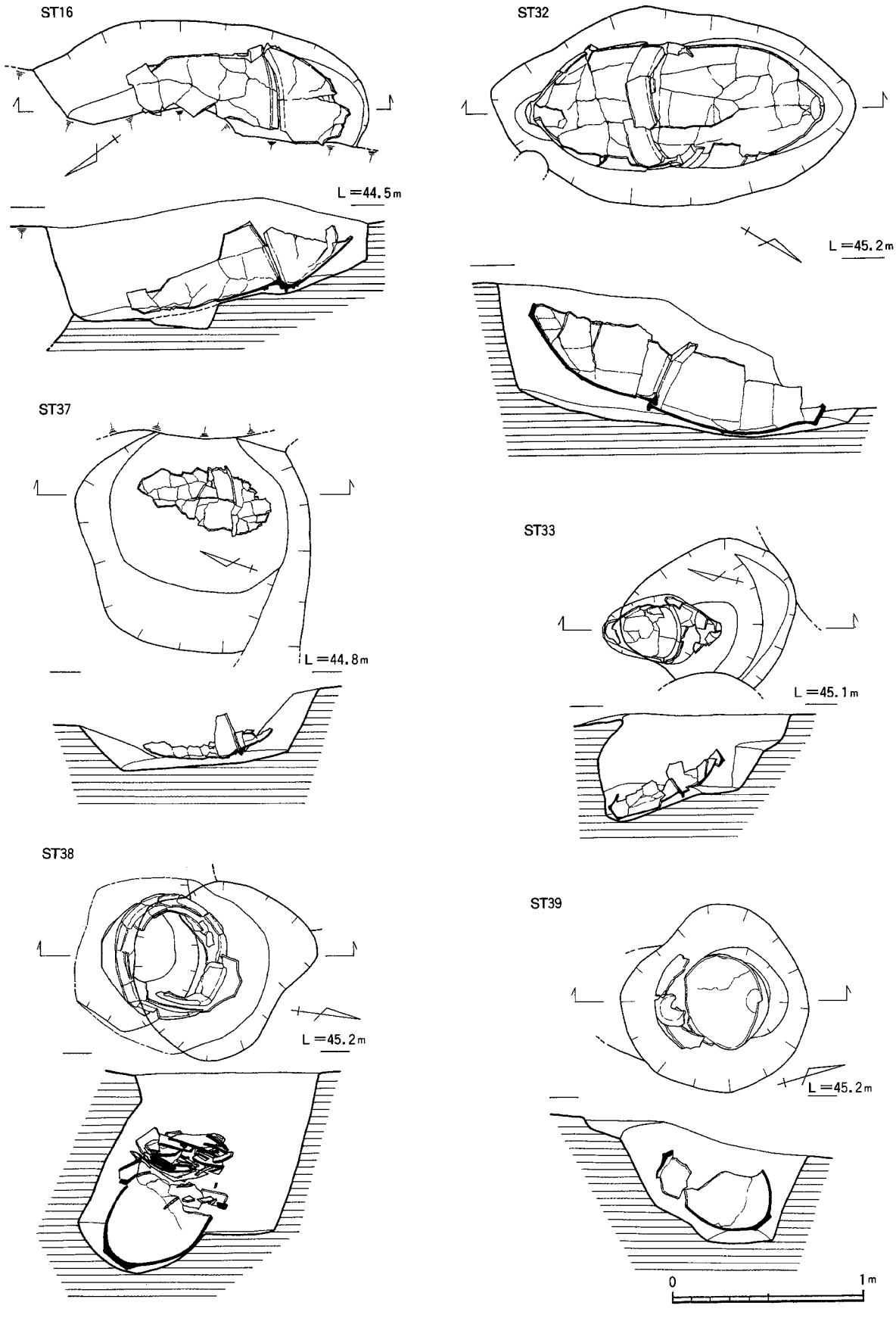


Fig. 10 ST16、32、33、37、38、39 (1/30)

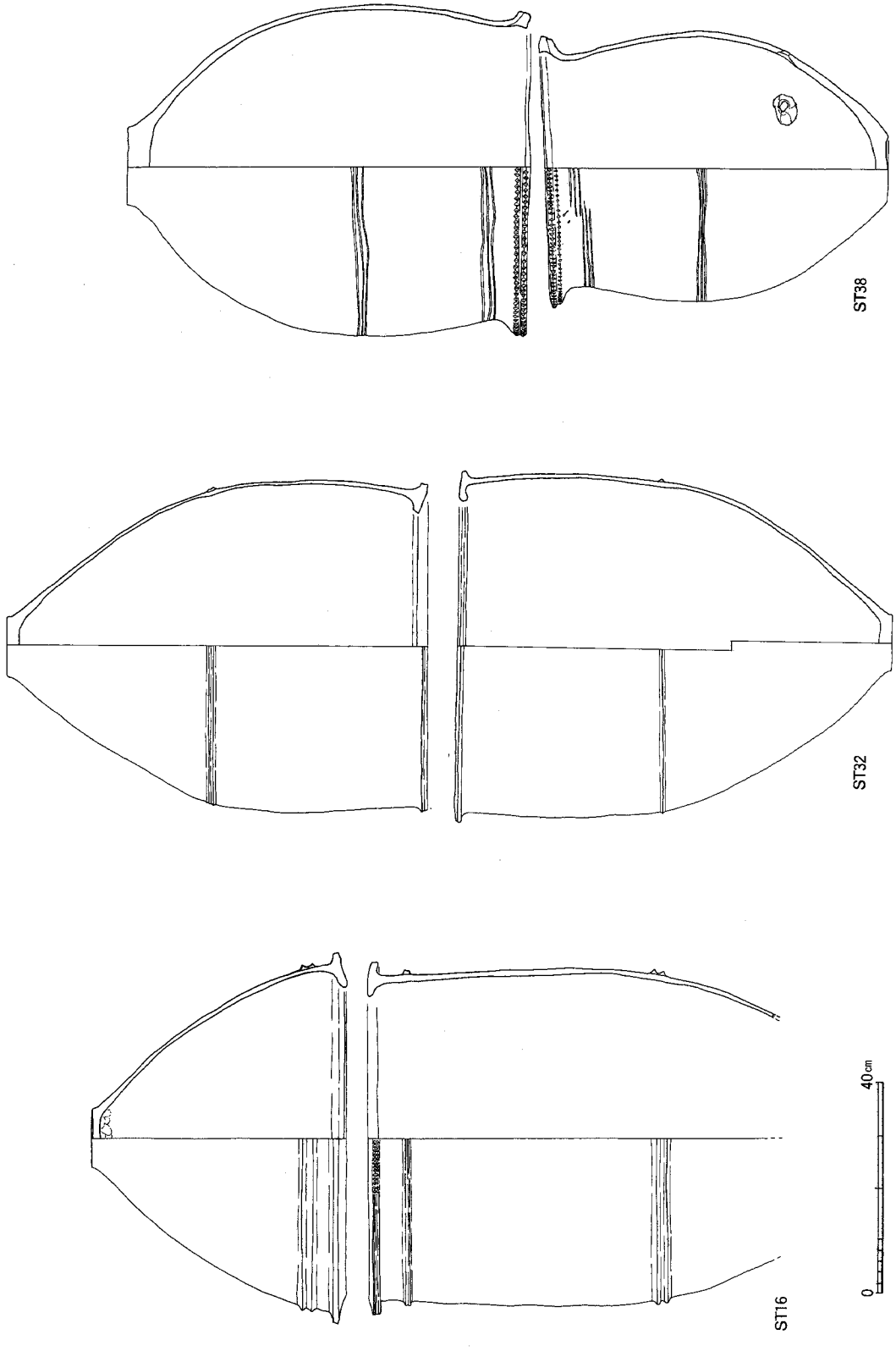


Fig. 11　ST16、32、38 甕実測図（1／12）

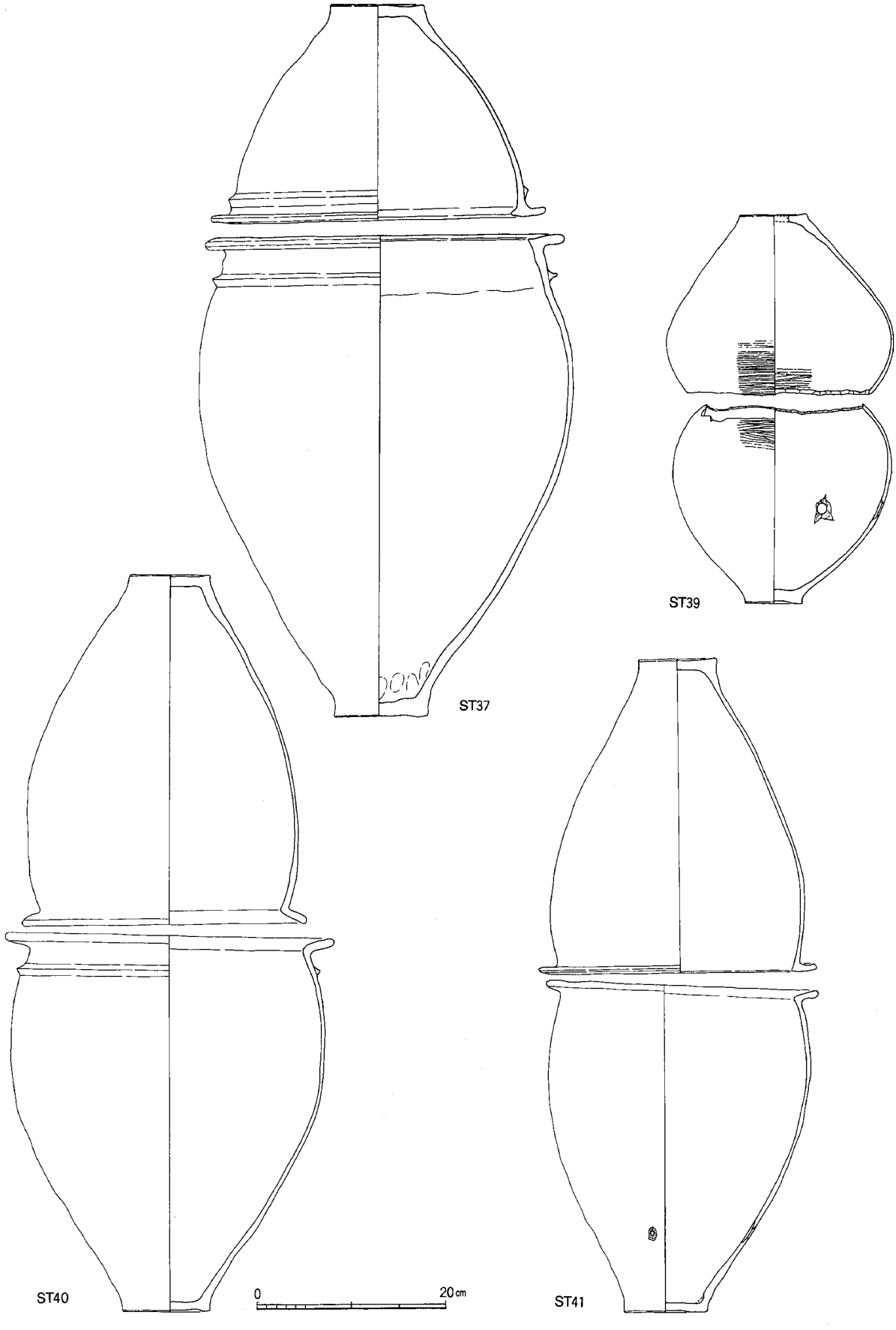
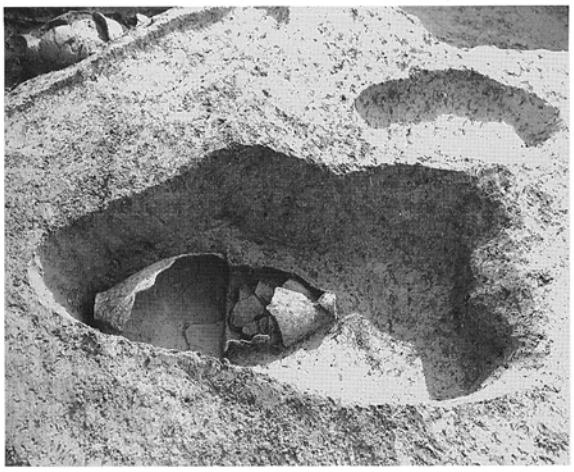


Fig. 12　ST37、39、40、41 甕実測図（1／6、1／12）

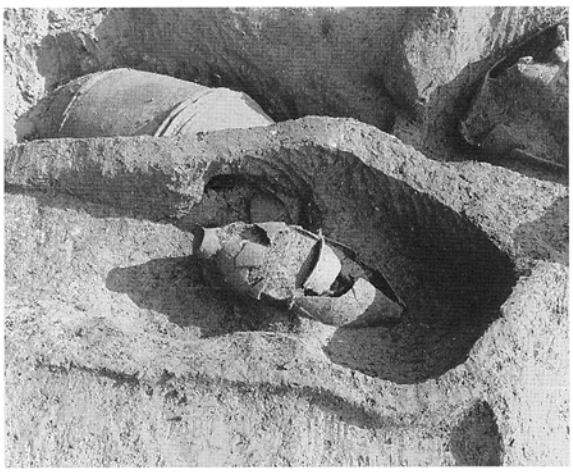
傾斜で埋置する。

上甕は口径33.8㎝内径27.8㎝で下甕より若干小さい。口縁はL字状でほぼ水平となる。ゆるく胴が張り、口縁下に低い三角突帯を1条施す。

下甕は上甕と同一の作者の手になるものと思われ、酷似する。口径36器高48㎝で、胴がゆるく張り最大径は中位に近い。口縁は上甕同様逆L字状で若干内傾する。調整は器壁が荒れ不明。色調は褐～暗赤褐色で金海式に似る。時期は中期中葉。



Ph. 15　ST40（北から）



Ph. 16　ST41、42（西から）

Ph. 17　ST42（北西から）

ST14（Fig.　7、8　Ph.　11）　FM94の東グループに位置し、ST07に切られる。墓壙は他のものと異なり横に段の付く二重墓壙で長軸214㎝で頭位135足位20㎝の長台形の墓壙の横に30㎝程上がって幅70㎝程の段を成している。断面は頭位から足位にゆるく傾斜し、下半に径90深20㎝程の横穴をあけ25㎝程壁面を抉り込んでいる。棺はこれにははまらずほぼ水平に置かれる。

棺は大型の鉢と大型の甕との合口の成人棺で頭位をN－32°－Eにとる。下棺挿入用の穴が穿たれているが、これは用いられず0°程でほぼ水平に埋置される。

上棺は大型の鉢で口径73内径59㎝器高51.2㎝を測る。口縁はT字を成して外側にゆるく外傾する。器体は深く、胴はゆるく張る。外面にはタテハケが残る。

下棺は大型の甕で、口径73内径60.2㎝器高105㎝を測る。胴は張らず若干すぼまり、胴中位に三角突帯2条を施し、胴下半が長い。口縁は鉢同様にT字を成し外方にやや傾斜する。中期中葉。

ST15（Fig.　7、9）　北東端のFN94に位置しST42を切る。上棺は水田開削時に大部分削平される。墓壙は長軸160、幅65㎝の楕円形で底面は深20㎝程で頭位へゆるく上がる。

棺は中型の口頸部を打ち欠いた壷と中型の甕の合口の小児棺で、呑口式。頭位をN－32°－Eにとり、12°のゆるい傾斜で斜位に埋置する。

上棺は胴上位を打ち欠いた壷で、径33.5残存高で32㎝を測る。胴張りは上位にあり、以下が深い器形を呈する。胴上位にコ字突帯を2条施す。

下棺は口径45.2内径36.8器高63.6を測る。口縁はく字に屈曲し内側が張り出す。胴がやや張り最大径は中位に近い。底部は薄く広めである。器壁は薄く、3㎜前後である。時期は中期後葉～末。

ST16（Fig. 10、11）　北西のFM94、段丘の崖面に位置し、2／3を流失している。墓壙は残存で長軸177幅56cmを測る楕円形で、底面は12°の傾斜で足位に30cm下がる。

棺は大型の鉢と甕の合口の成人棺で、頭位をN－145°－Wにとり、棺を底面に接して20°の傾斜で斜位に置く。

上棺は大型の鉢で口径70.8内径57器高48.2cmを測る。胴はゆるく張り、やや深めの器形を呈する。口縁は内面に強く張り出すT字形で外側に傾斜する。口縁下に複合の三角突帯を施す。

下棺は大型の甕で口径68内径54.8cmで上棺より若干小さい。胴部は長めで若干張り、最大径は下位で、2条の三角突帯を施す。口縁はT字状で内面の張り出しの退化が始まっており逆L字化へのきざしが見える。外側にゆるく下がり口唇は凹線状に仕上げ刻目を施す。上下ともに器壁の調整は不明で胎土に若干の角閃石を含む。時期は中期中葉。

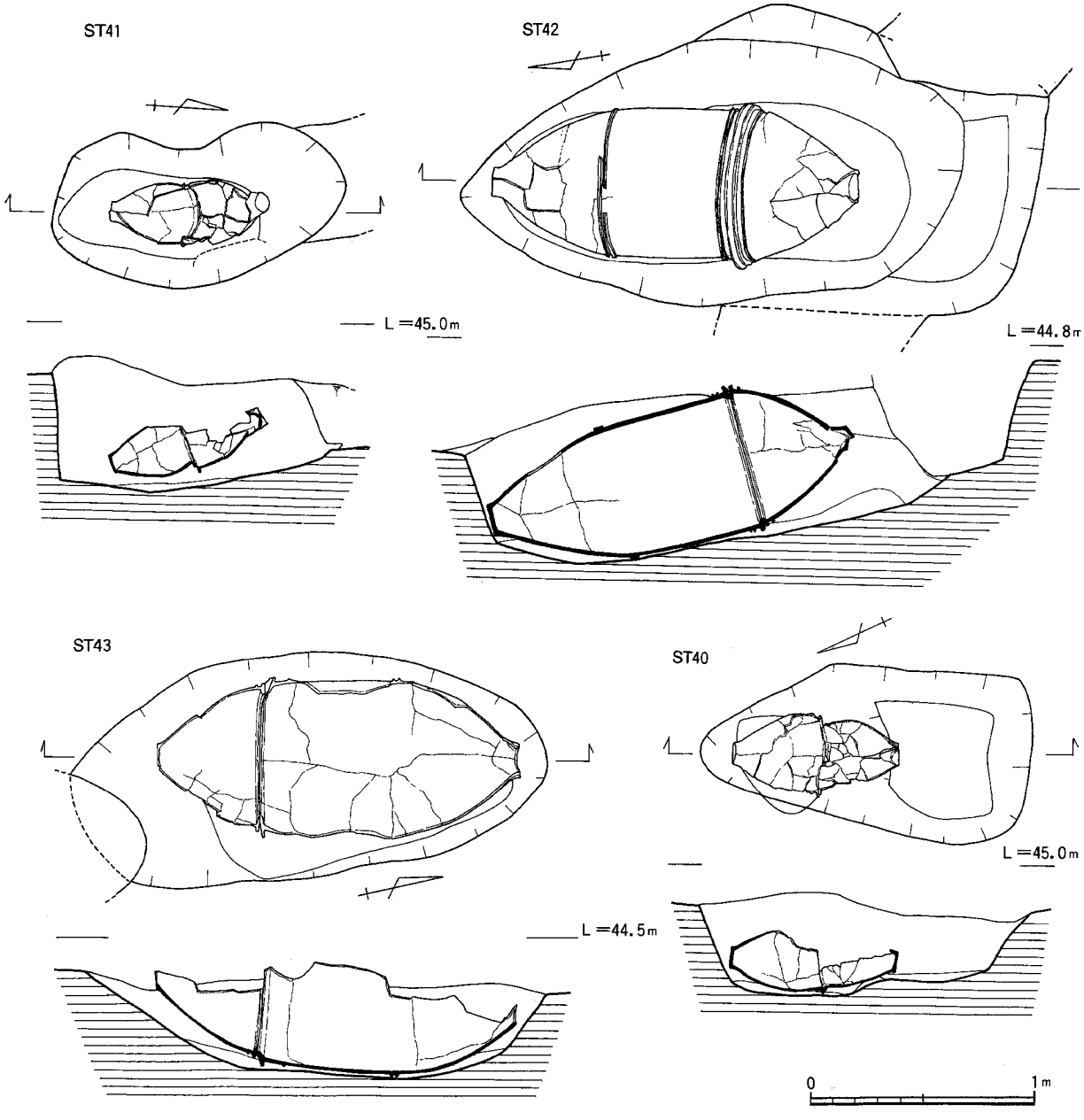


Fig. 13　ST40、41、42、43（1／30）

ST32（Fig. 10、11）　FN94の東部に位置しST13に切られST38、39を切る。墓壙は182×103cmの楕円形で深75cmを測る。底面は足位側にゆるく傾斜し、下半が下棺に合わせ５cm程くぼむ。

棺は大型甕の合口の成人棺で頭位をN－146°－Eにとり、23°の傾斜で斜位に埋置する。

上棺は口径66.3内径55.5器高82.5cmを測り、胴が上位で若干張る寸詰まりな器形を呈する。口縁は内外に小さく張り出すT字を成し、やや内傾する。口唇は沈線状に仕上げる。

下棺は口径62内径50.7器高80cmで上棺より若干小振りで、胴がほとんど張らない寸詰まりな器形を成す。口縁は内側が大きく張り出すT字状で若干外傾する。時期は中期前葉。

ST33（Fig. 10、９）FM94のST06に隣接しST11に切られる。墓壙は頭位が大きく広がる卵形で長軸89幅79cmを測り、断面は深20cm程の二段の底面に径50深20cm程の穴を掘り下棺を挿入する。

棺は小型甕の合口の小児棺で全長68cm頭位をN－166°－Eにとり、32°の傾斜で斜位に埋置する。

上棺は口径30.6器高33.4cmを測る小型甕で胴は中位上方で張る。口縁は如意形で稜をなさない。

下棺は口径29器高34.5cmで胴は上位でゆるく張り底部にかけ強くすぼまる。口縁はほぼ水平な逆L字状で内側が若干張り出す。器壁の調整は不明。時期は中期中葉。

ST37（Fig. 10、12）　FM94の北端近くに位置しST42、43を切る。墓壙は157×123cmの円形で棺に比べ大きな掘方である。底面は８°傾斜で足位にゆるく下がる。大半を撹乱され底近くの１／３が残存。

棺は小型鉢と小型甕の合口の小児棺で、頭位をN－160°－Eにとり、底面に接して14°のゆるい傾

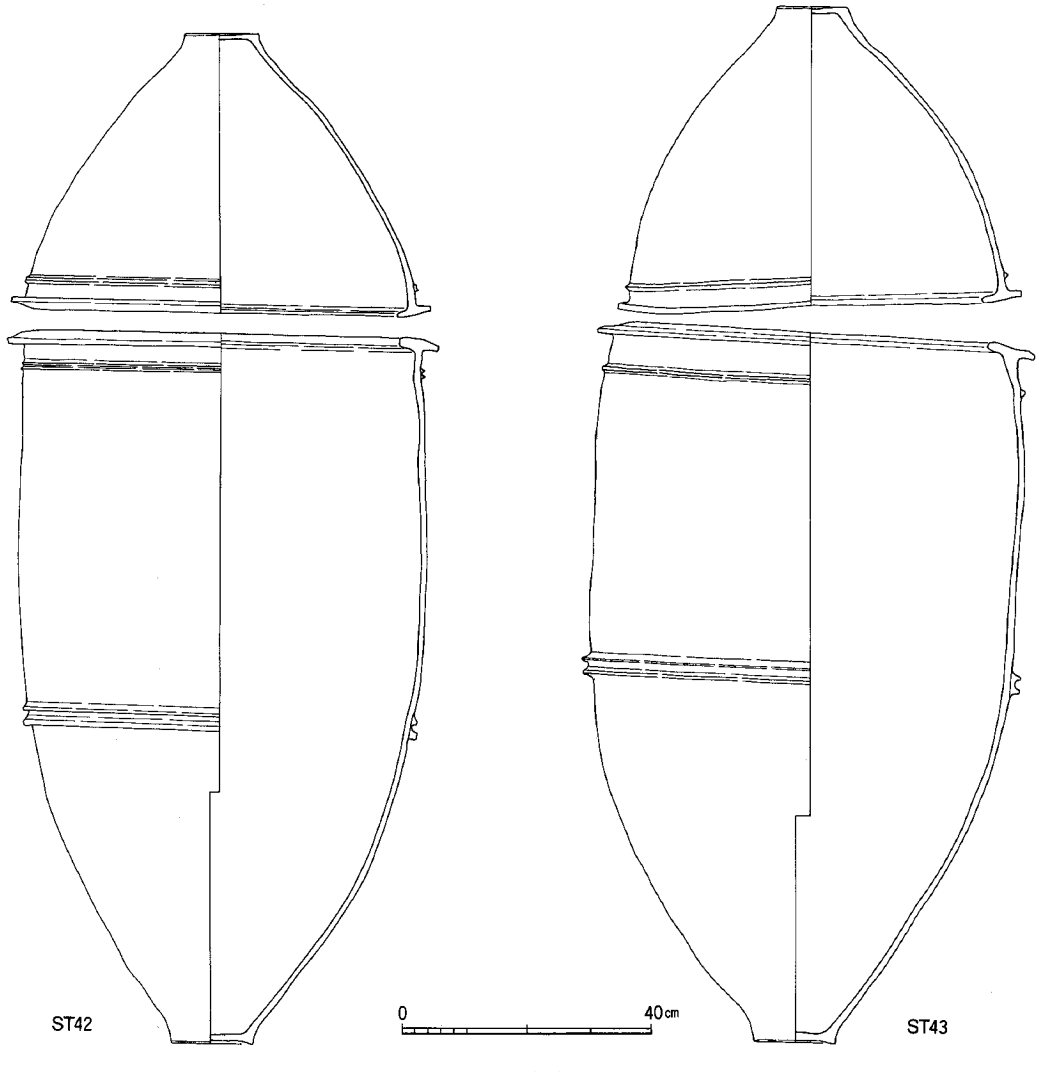


Fig. 14　ST42、43 甕実測図（1／12）

斜で埋置する。

上棺は口径36器高23.5cmを測る小型鉢で、口縁はT字に近い逆L字状でほぼ水平に近い。口縁下に低い三角突帯を一条施し、外面にはタテハケが残る。

下棺は口径39.6器高51.5cmを測る小型甕で口縁は逆L字状で若干内傾するが水平に近い。胴は中位上方でやや強く張り底部へ強くすぼまる。タテハケ調整が残る。時期は中期中葉。

ST38（Fig. 10、11　Ph. 13）　FN94に位置し、ST14、38に切られる。墓壙は96×94cmの円形で、深80cmの底面に径65深さ45cmの穴を斜め下に穿ち30cm程壁面を抉り下棺を挿入する。

棺は大型甕の合口で覆口式である。下棺の底と側面は墓壙に接し46°の強い角度で斜位に埋置する。頭位はN－8°－Wにとる。上棺は口縁以外が崩落して口縁付近に折り重なっており、下棺が流入土で埋没後上棺が一気に崩落した様である。

上棺は口径61.5内径57器高76.8cmの大型甕で、胴中位より若干上に最大径があり胴が張る。口縁は若干内傾し、口唇の粘土帯貼り付は幅が狭く高い。口唇は凹線状に仕上げ、上下に刻目を施す。底部は極めて厚い。3条のヘラ描沈線を頸部と胴部に施す。

下甕は口径53内径46.5器高66.8cmで上棺よりひと回り小さい。胴中位に最大径があり強く張り、外湾してそのままくびれず上げ底の底部に連なる。口縁は上面がほぼ水平で、口唇の粘土帯は断面三角状で口唇が先細る。口唇は凹線状に仕上げ上下に刻目を施す。時期は前期末。

ST39（Fig. 10、12　Ph. 14）　FN94の北東端に位置しST13に切られる。墓壙は100×97cmの円形で、深65cmの底面から頭位側が10cm程上がって小さな段を成す。

棺は中型の口縁打ち欠き壷の合口で覆口式である。全長65cm程で底面に沿って47°の傾斜できつい斜位に埋置する。頭位はN－164°－Wにとる。

上棺は胴径48.5内径38器高39cmの口頸打ち欠きの中型壷で、最大径は上位にあり、底部にかけ直線的にやや広めの底部にすぼまる。器壁はヨコ、ナナメにケンマを施す。

下棺は胴径46.8内径35器高41.5cmの口頸打ち欠きの壷で、最大径は中位よりやや上にあり、球形に胴が張り深い器形を呈する。中位下方に外面からの穿孔がある。上棺より古相で、中期初頭か。

ST40（Fig. 13、12　Ph. 15）　FM94の東グループの中央付近に位置しST07を切っている。墓壙は長軸150頭位が開いて70足位で30cm程の長台形で、深40cmの底面の頭位側半分が10cm程上がり段を成す。

棺は小型の甕の合口で全長78.3cm。墓壙の半分に収まる。頭位をN－153°－Wにとり4°で床面と段に接してほぼ水平に埋置する。

上棺は口径30内径24.5器高37.6cmで最大径は胴上位でやや張り、薄い底部へすぼまる。口縁はく字状で内側が稜を成す。

下棺は口径35.7内径29器高40.7cmを測り上甕よりひと回り大きい。胴上位で胴が張り、底部へすぼまる。底部は薄く外底は若干上げ底となる。口縁は内傾してく字状となり、ゆるい稜をなす。器壁は

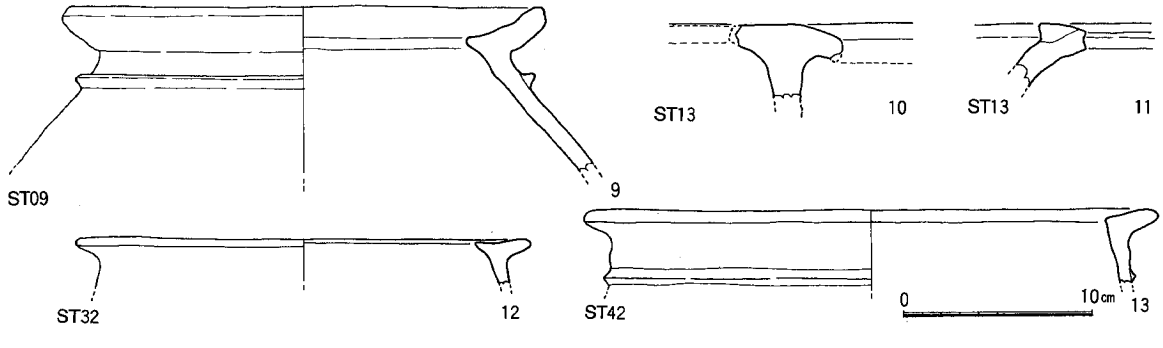


Fig. 15　甕棺埋土遺物（1／4）

剝落し調整不明。頸部下に突帯を一条施す。中期後葉～末。

ST41（Fig. 13、12　Ph. 16）　FM94の東グループ中央付近に位置しST42を切る。墓壙は長軸135幅63cmの楕円形で底面は頭位から足位へゆるく傾斜する。

棺は小型甕の合口で、土壙中央に20°のゆるい傾斜で斜位に埋置する。頭位はN－4°－Wにとる。

上棺は口径29.3内径23.8器高27.2cmで、胴が上位で張り薄い広めの底部へとすぼまる。口縁は逆L字状で若干外傾する。内側は鋭い稜を成す。

下棺は口径28.5内径23.7器高35.6cmと高さが増す。口縁は内傾しく字状を呈する。内側は鋭い稜を成す。底部は広めで薄く、若干上げ底となる。胴下位に穿孔がある。時期は中期後葉～末。

ST42（Fig. 13、14　Ph. 17）　FN94に位置しST15、32、41、37に切られST43を切る。墓壙は255cm。長台形で幅135cmを測る。深75cmで底面は頭位に傾斜して20cm程上がり、高さ15cmの段が付く。

棺は大型の鉢と甕の合口で全長158cmを測り頭位をN－170°－Wにとる。14°のゆるい斜位に埋置。

上棺はT字口縁の大型の鉢で口径68.7内径58器高45.6cmを測り深い器形となっている。口唇はやや外傾する。口縁下にコ字の複合突帯を施す。

下棺は大型甕で口径70器高113.8cmを測る。胴はほとんど張らず長い器形となる。口縁はT字形で若干外傾、下に二条の三角突帯、胴下位にコ字突帯を二条施す。中期中頃。

ST43（Fig. 13、14　Ph. 18）　FN93の最北端に位置し、ST37、42に切られる。墓壙は212cmの楕円形で、底面は足位へ5cm程下がり、頭位側の壁の傾斜が棺の面に合わせてゆるい。

棺はST42と同様で全長165cmを測り、頭位をN－166°－Wにとる。7°の傾斜で水平に近い。

Tab. 1　甕棺一覧表

No.	墓壙規模（長×幅×深cm）	型式				棺の種類・規模（長×幅cm）				主軸方位	埋置角度	時期	備考
		単棺	合口 覆口	合口 接口	合口 呑口	上棺		下棺					
1	162×82×43			○		甕	54.6×43	甕	83.5×61	N－180°－S	2°	中期後葉	
2	264×133×42			○		上棺 甕26＋α×32＋α	中棺 甕82.5＋α×61.5	下棺 壺85×54.5		N－22°－E	2°	中期後葉	
3	139×100×35							甕	92＋α×70＋α	N－56°－W	26°	中期～中頃	
4	75×43×77			○		甕	16＋α×32	甕	40×32.6	N－20°－W	28°	中期後葉～末	ST06を切る
5	222×95×67				○	壺	69.5×58	甕	100.4×75	N－31°－E	3°	中期中葉	
6	193×90×24			○		鉢	39.5×61.2	甕	112.2×68.0	N－41°－E	4°	中期中葉	ST33を切る
7	265×89×55			○		甕	66×48	甕	80.5×60	N－28°－E	3°	中期後葉	ST14を切る
8	58×47×27		○			壺	8.5＋α×28.5＋α	壺	35.6＋α×35.5	N－50°－E	37°	中期前葉	
9	138＋α×105×35				○	壺	34＋α×46（打欠）	甕	36＋α×60.8＋α	N－168°－E	11°	中期後葉	
10	62×41×20							壺	21.4＋α×36	N－83°－W	34°	中期後葉	
12	70×41			○		甕	34＋31	甕	34×32.3	N－178°－E	26°	中期後葉	ST06、33を切る
13	80×50×15			○		甕	6＋α×34	甕	48×36	N－22°－E	13°	中期中葉	ST32を切る
14	214×168×80			○		鉢	51.2×73	甕	105×73	N－32°－E	0°	中期中葉	
15	160×65×30			○		壺	32＋α×33.5（打欠）	甕	63.6×45.2	N－53°－E	12°	中期後葉～末	ST42を切る
16	177×56＋α×50			○		鉢	48.2×70.8	甕	77.7＋α×69	N－145°－W	20°	中期中頃	ST37を切る
22	70×52×22						5.8＋α×7＋α	壺	25.8＋α×33.7(打欠)	N－158°－E	62°	中期前半	
32	182×103×83			○		甕	80×63.6	甕	82.5×66.3	N－146°－E	23°	中期前葉	ST38、39を切る
33	89×79×55			○		甕	33.4×30.6	甕	34.5×29	N－166°－E	32°	中期後葉	
37	157×123×42			○		鉢	23.5×36	甕	51.5×39.6	N－160°－E	14°	中期後葉	ST42、43を切る
38	96×94×104		○			甕	76.8×61.5	甕	66.8×53	N－8°－W	46°	前期末	
39	100×97×67				○	壺	38＋α×48.4（打欠）	壺	40＋α×46.8(打欠)	N－164°－W	47°	前期末	
40	150×70×40			○		甕	37.6×30	甕	40.7×35.7	N－153°－W	4°	中期末	ST07を切る
41	135×63×60			○		甕	33.6×29.3	甕	35.6×28.5	N－4°－W	20°	中期後葉～末	ST32、42を切る
42	255×135×95			○		鉢	45.6×68.7	甕	112.4×70	N－170°－W	14°	中期中葉	ST43を切る
43	212×100×47			○		鉢	49.2×66.5	甕	115.4×71	N－166°－W	7°	中期中葉	黒塗り

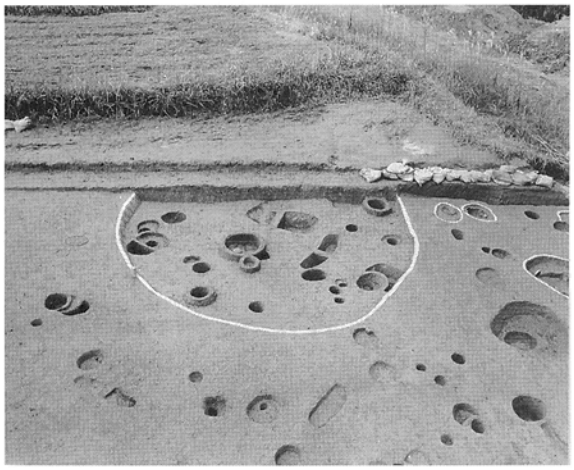
上棺はT字口縁の大型鉢で口径66.5内径53.2器高49.2cmでより深い器形。口縁は若干外傾し、口縁下に三角突帯を一条施す。外面に黒色顔料が残る。

下棺は口径71器高115.4cmで胴はほとんど張らず長い器形を呈する。口縁はT字状でゆるく外傾する。口縁下に三角突帯。胴部に三角突帯とコ字突帯を施す。中期中葉。

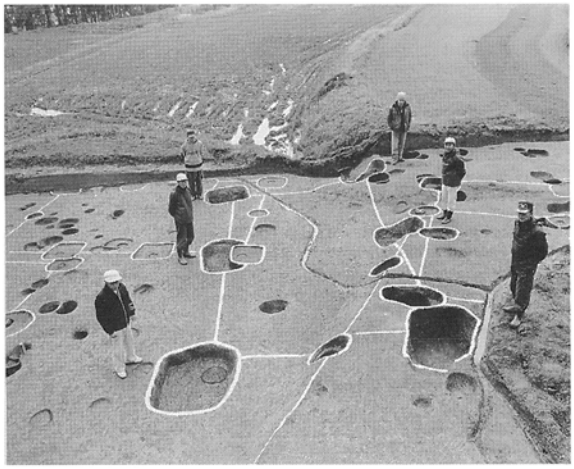
②SC17（Fig. 16　Ph. 18）　FL96に位置する円形竪穴住居で径4.65mを測る。中央に溝と連結した1.2m程の方形土壙を配し、径3mで推定6本、径4mで9本の柱が巡っており、建て替えが行われたと思われる。Fig. 18の17は出土した甕の底部で裾が張り極端な上底となる。前期末。

③SK18（Fig. 17）　FN100に位置する楕円形の二重土壙で122×54×27cmを測る。断面は船底形で床上に5cm程炭灰層が堆積する。壁面は焼けていない。

Fig. 18の14～16は出土遺物で、14は小型の鉢で径8器高6.9cmを測る。15は壷の底部で径7cm。16は土製の投弾で長4径2.3cm。重さ16.3gを測る。中期中葉か。



Ph. 18　SC17（東から）



Ph. 19　SB26（北から）

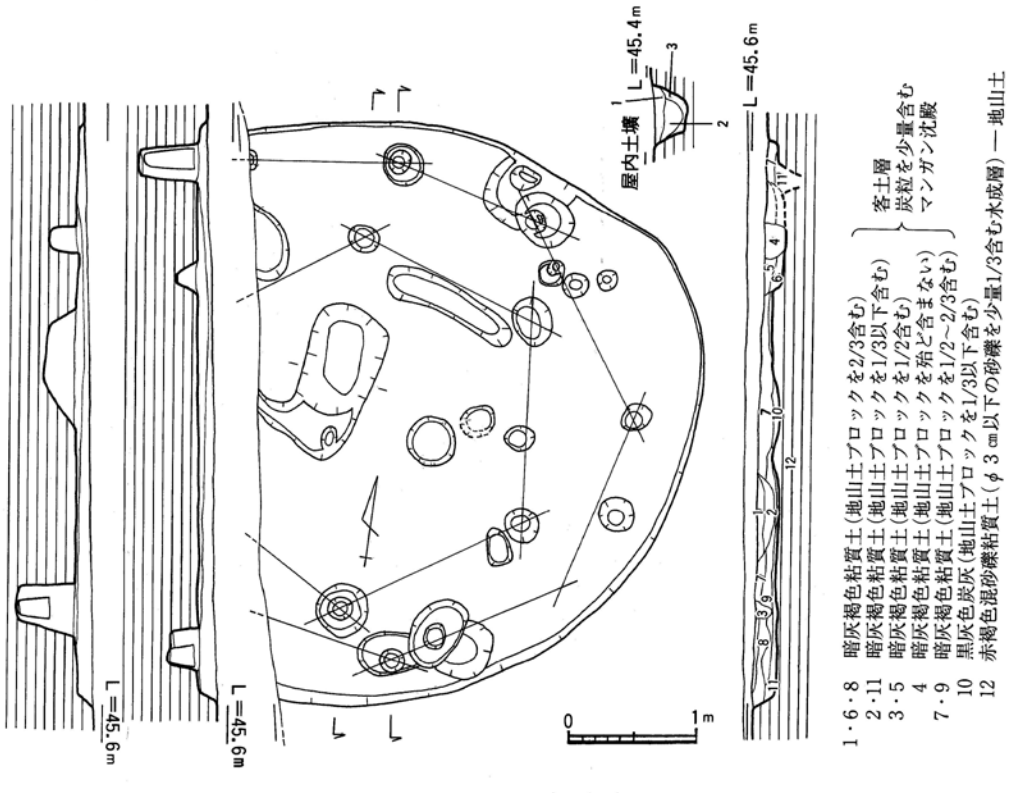
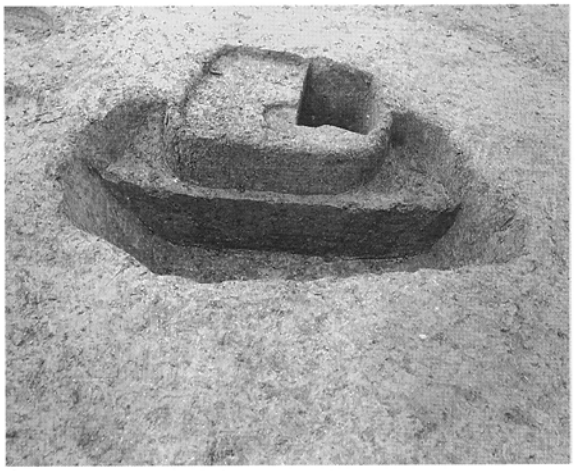


Fig. 16　SC17（1／60）

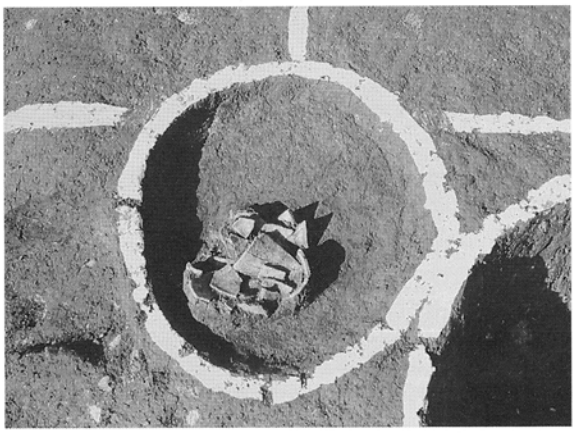
④SK30（Fig. 17）　FM103に位置し、大型建物SB26を切っている。南半部が掘方と重複していたため検出に失敗したが残存で長90幅60cmを測る。18は出土した甕の口縁小片で、逆L字状を呈する。中期中葉か。

⑤SK36（Fig. 17）　FM96に位置する円形の土壙で径120～150cm深137cmを測る。底面は平坦で、70cm程上位で全周にわたって5～10cm程抉れる。底面には粘質土が堆積し、水溜遺構と思われる。

⑥FO104　SP2（Fig. 17）　柱穴としたが、調査区壁にかかっており土壙の可能性がある。19は



Ph. 20　SB26－SP5　断面（東から）



Ph. 21　SB25－SP13（東から）

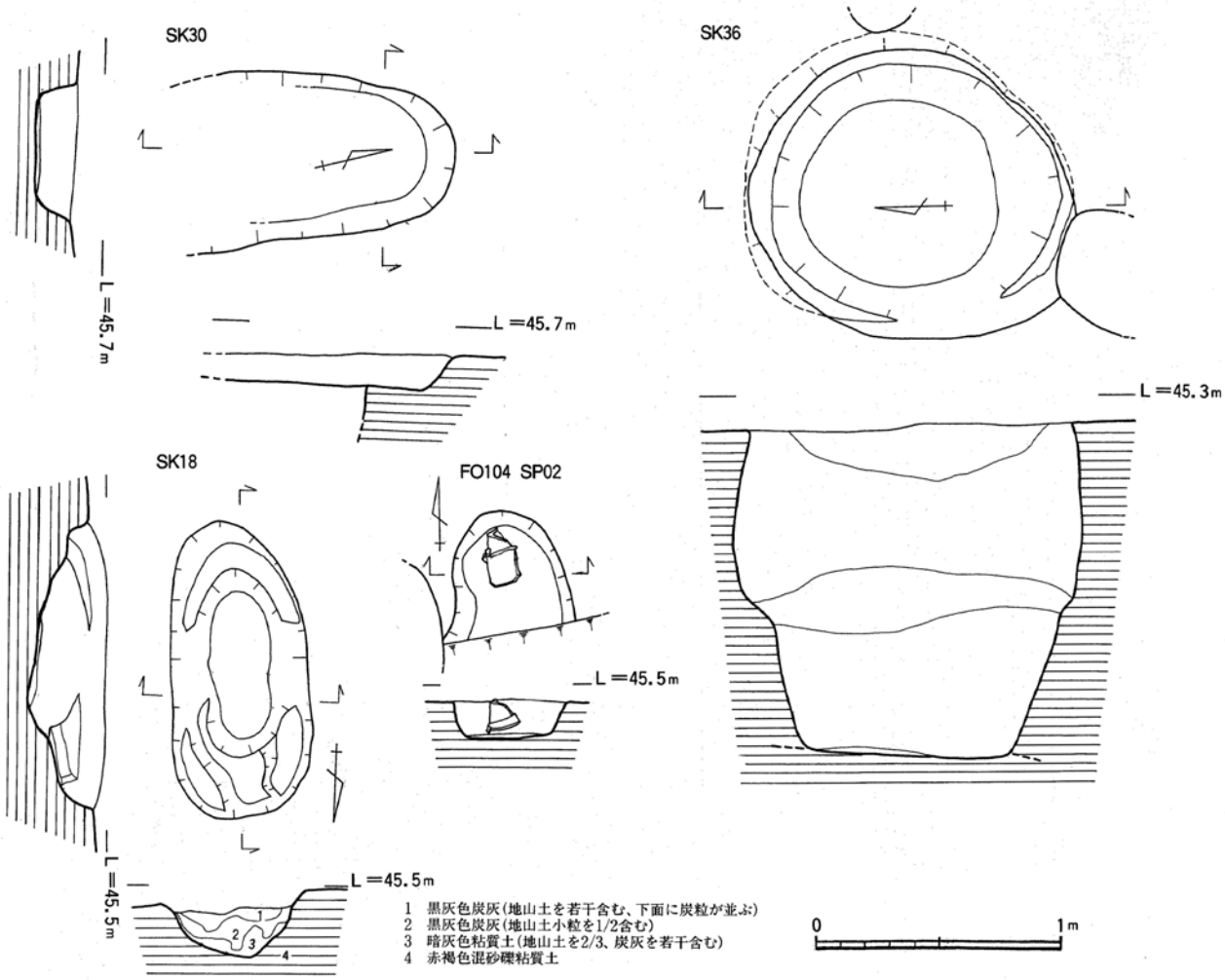


Fig. 17　SK18、30、36、SP02（1／30）

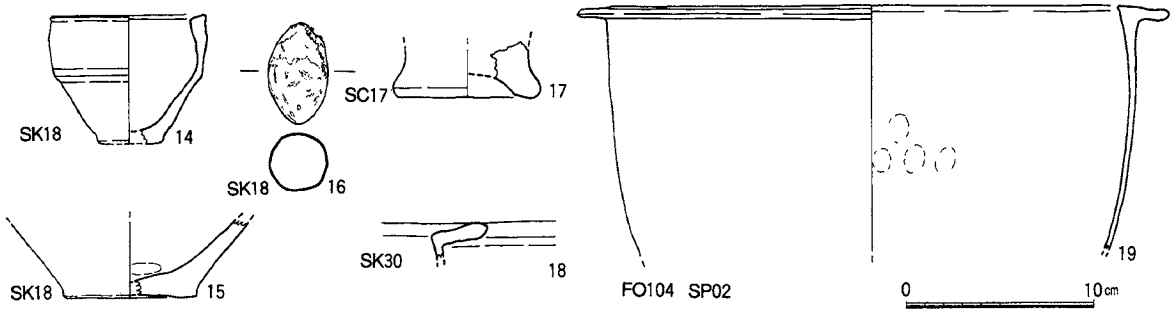


Fig. 18 SC17、SK18、SK30、FO104 SP02 出土遺物（1／4）

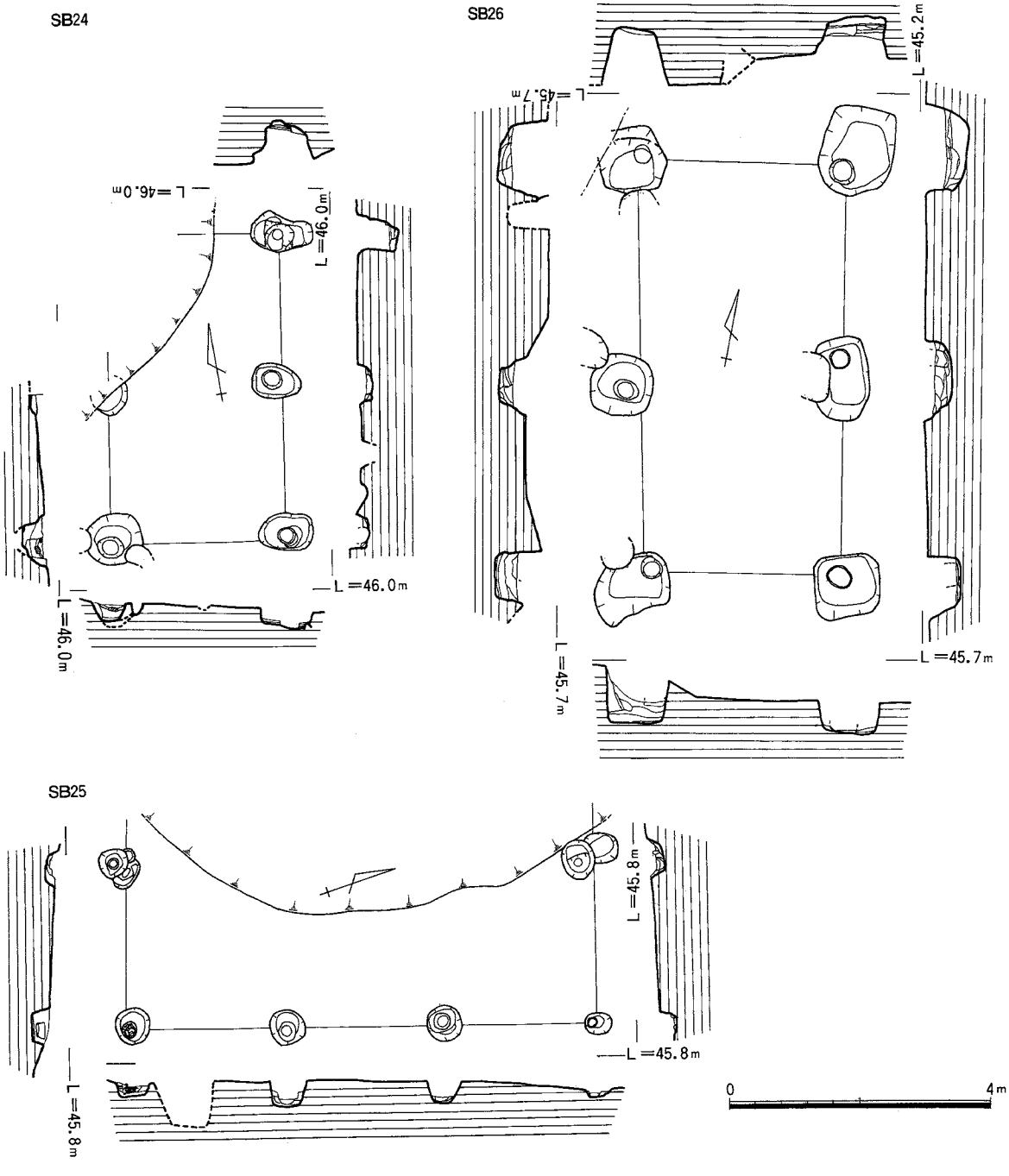


Fig. 19 SB24、25、26（1／100）

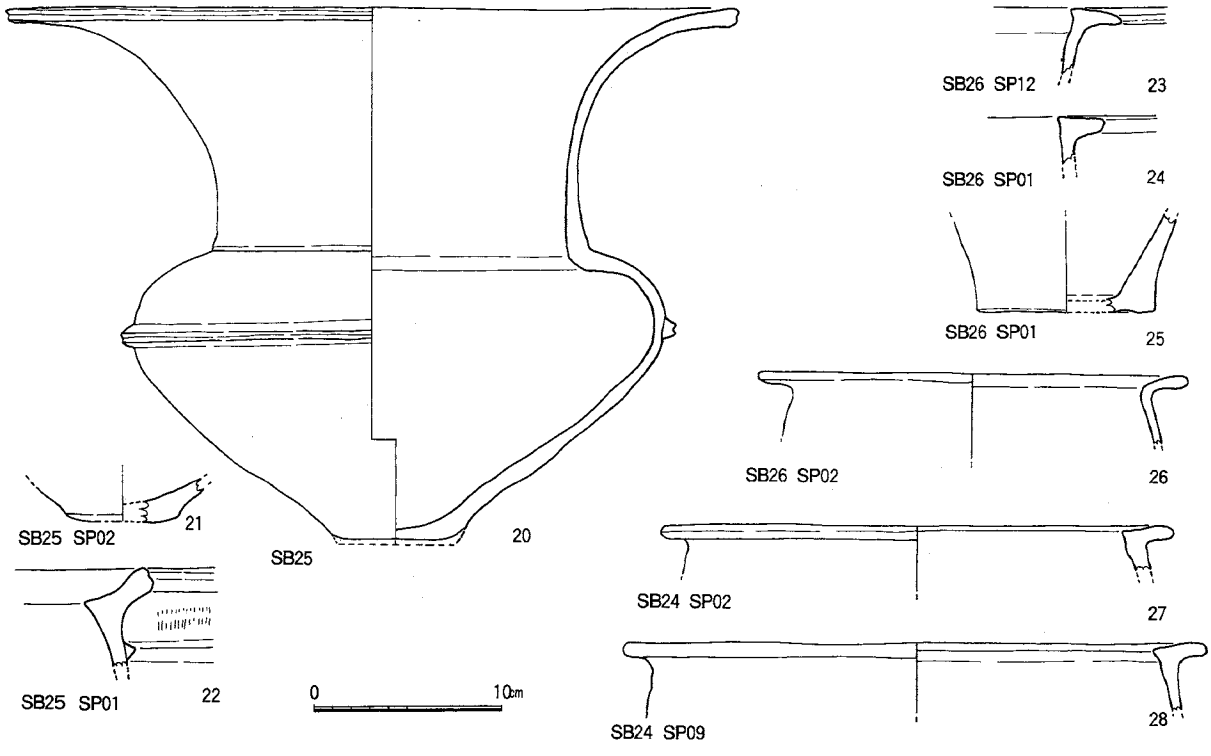


Fig. 20　SB24、25、26、 出土遺物（1／4）

検出された甕の上半部で径31.2cmを測る。逆L字状口縁で内側が若干張る。中期中葉。

⑦掘立柱建物（Fig. 19）　調査区南端部、丘陵の陵線近くで、奈良時代の建物と切り合って3棟検出した。桁を南北方向にとるが、方向は一致しない。

SB24　調査区南西のFM104付近に位置し、SB26を切る。桁行4.65梁間2.7mの2×1間の建物で、主軸をN－10°－Eにとる。掘方は70～1mの隅丸方形に近く、柱径は35cm前後である。Fig. 20の27、28は出土遺物で、ともに逆L字状の口縁をなし、若干内傾する。胴が張り、27で口径27.6、28で31.2cmを測る。中期中葉。

SB25　SB24と重複し、FM103付近に位置する。桁行7.07梁間2.42m以上の3間×1間以上の建物で主軸をN－18°－EにとりSB24より西に振る。20～22は出土遺物で、20は丹塗広口壷のほぼ完形品で、SP13内より破砕して破片を重ねた状態で検出された（Ph. 21）。口径38.3器高28.6cmで口縁の比

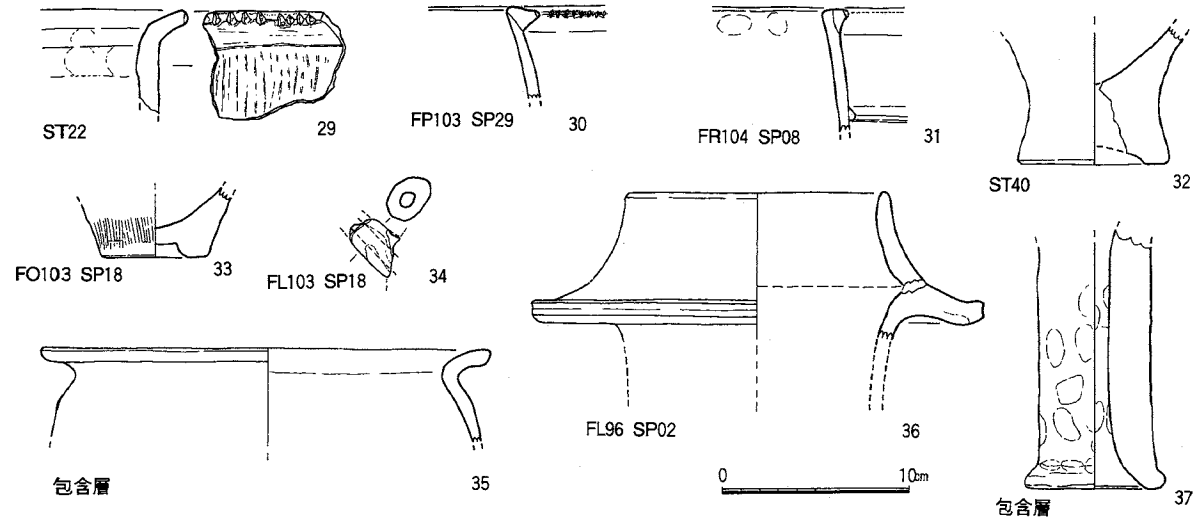


Fig. 21　その他の出土遺物（1／4）

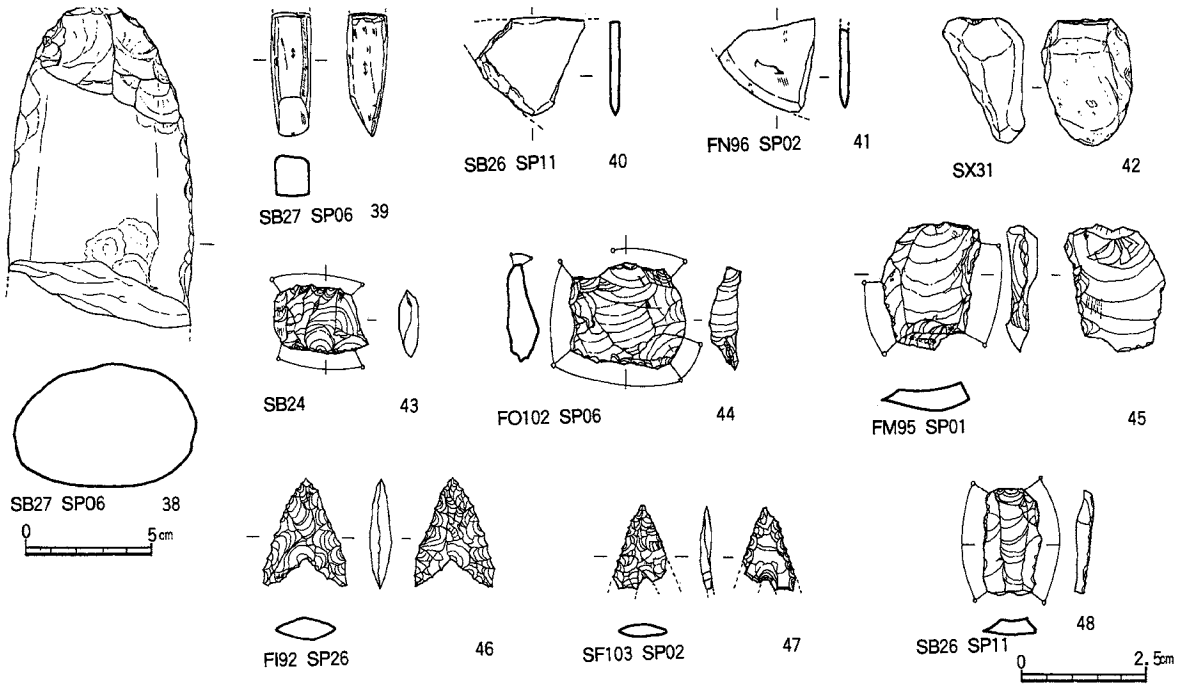


Fig. 22 出土石器（1／3、2／3）

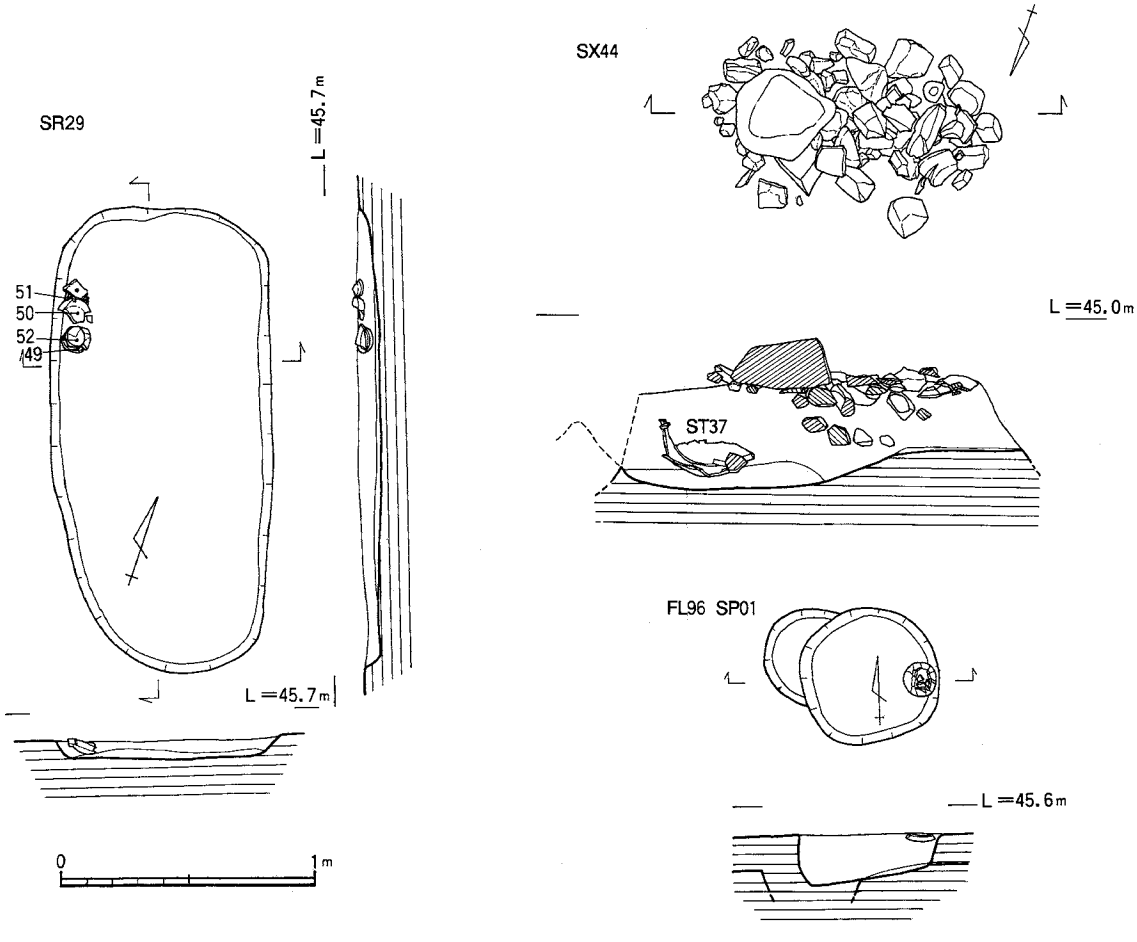
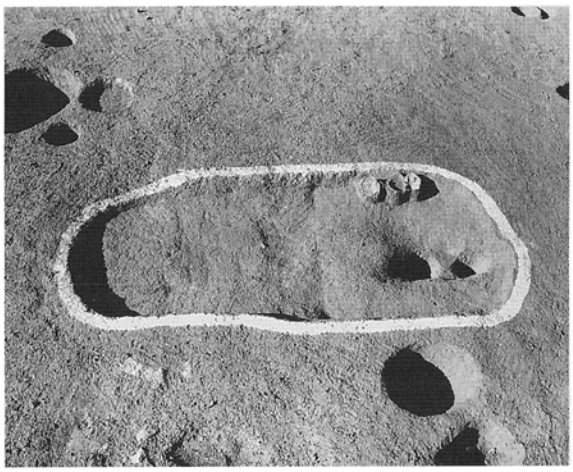


Fig. 23 SR29 他（1／30）

率が大きく、胴は扁球状を呈する。21はレンズ底状の壷の底部で6㎝。22はく字口縁の甕で強く内傾し上面がゆるく湾曲する。中期後葉から後期前葉を示す。

SB26（Ph. 29、20）　FN103付近に位置し、SB24、27に切られる。桁行6.11梁間2.95ｍの２×１間の大型建物で、主軸をＮ－11°－Ｗにとる。掘方は90～140㎝の隅丸方形で、柱は抜かれた様で、底面近くで漸く確認される。径は25～30㎝である。23、24は出土遺物で、23は鋤先口縁壷で、内面の張り出しは未発達。24は逆Ｌ字口縁の甕で上面は水平になる。中期中葉。

⑧その他の遺物（Fig. 21、22）　29は如意形口縁の甕で、口唇から下端に刻目を施す。30は三角口縁の甕で口唇に細かな刻目を施す。31も同様の亀ノ甲系の甕で、口縁下に三角突帯を施す。32は城ノ越式の甕底部。33は中期後葉～末の甕底部で著しい上げ底である。34は丹塗注口土器の注口部。35は後期初頭の甕。径26㎝。36は大型筒形器台で口径13.6㎝。37は長脚の支脚、吹子羽口の可能性もあ



Ph. 22　SR29（東から）

Ph. 23　ST37 上面集石 SX44（北から）

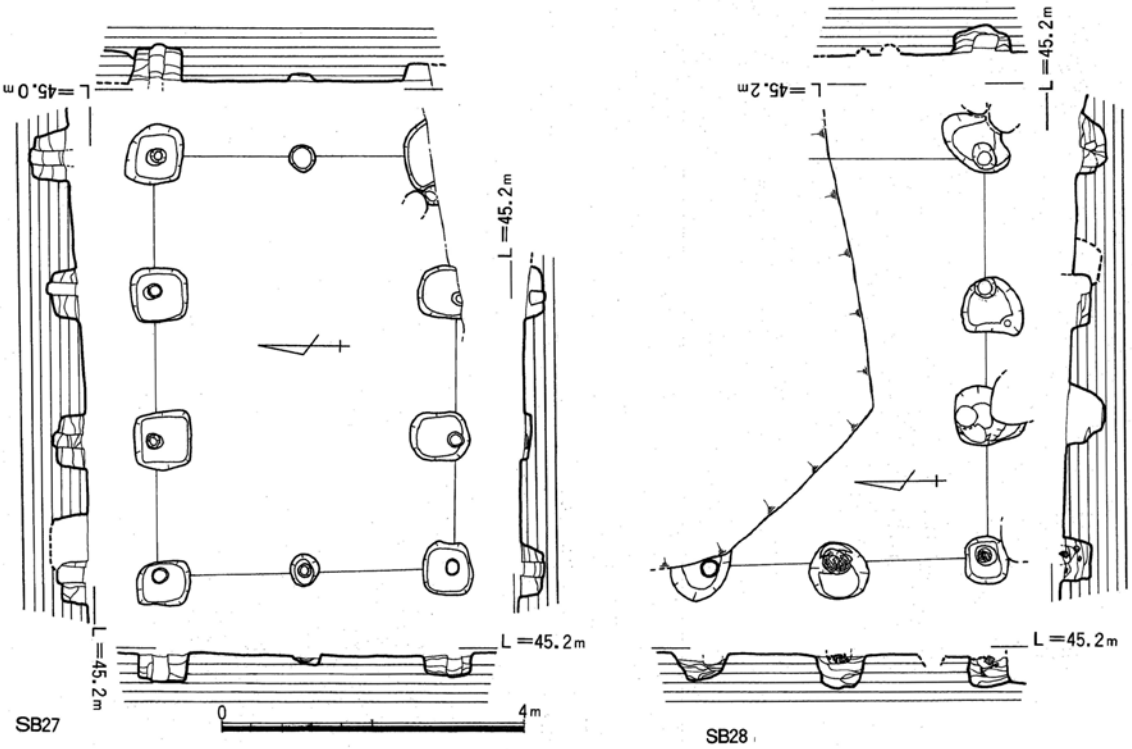


Fig. 24　SB27、28（1／100）

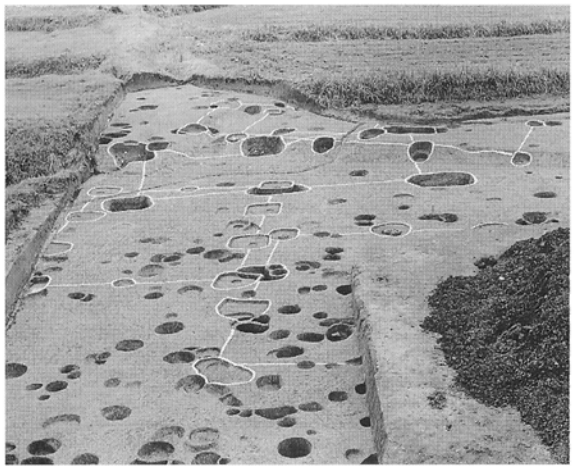
る。底径7.6器高13.6cmを測る。Fig. 22は出土石器。38は玄武岩製の石斧頭部。幅7.2厚4.9cmを測る。39は柱状片刃石斧で凝灰岩質安山岩ホルンフェルス製。長4.9幅1.4厚1.6cm重量22ｇ。40、41は頁岩質砂岩製の石包丁片。42は軽石製の浮子で長５cm重量10ｇ。43～48は黒耀石製。43はクサビ型石器。44も同様で右側に彫刻刀面をつくる。45はブレイドで両側に使用痕が残る。46、47は石鏃で、46は重量0.99ｇ。47は主剥離面が残り、0.32ｇを測る。48はマイクロブレイドで長2.1幅1.1cmを測る。

⑨SR29（Fig. 23　Ph. 22）　FM98に位置し、長187幅86cmの隅丸方形で主軸をＮ－19°－Ｗにとり、頭位右側に土師器を５点供献する。Fig. 25の49～52で、49は口径10.7器高2.6cmの坏で外底はヘラ切り。50は埦で口径12.2器高4.1を測り回転ナデを施す。外底に板圧痕が残る。51は高台坏で口径12器高3.3を測る。52は皿で口径10.1器高1.7cmを測り、外底に板圧痕が残る。10世紀か。

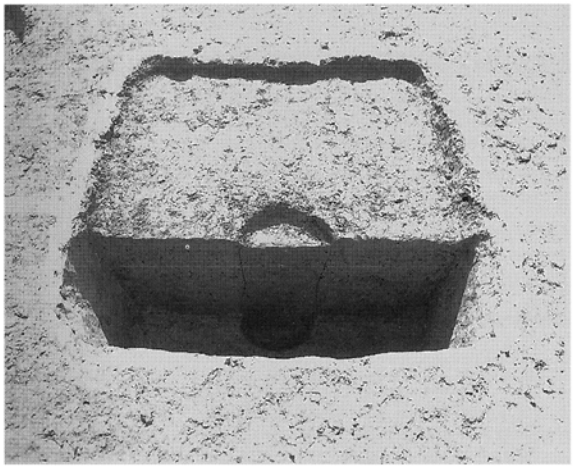
⑩SB27（Fig. 24　Ph. 25）　FM103付近に位置し、SB26、28を切る。桁行5.52梁間４ｍの３×２間の東西棟で主軸をＮ－88°－Ｗにとる。掘方は65～80cmの隅丸方形で、梁間の中柱は小さい。柱は径20cm前後を測る。Fig. 25の54は出土した須恵器坩蓋で口径14器高1.2cmを測る。８世紀後半か。

⑪SB28（Fig. 24）　FO103付近に位置しSB27に切られる。桁行5.2梁間3.7ｍの３×２間で、主軸をSB27と同じＮ－88°－Ｗにとる。掘り方は統一性がなく60～90cmで方形・円形と様々である。

⑫ST37上面集石SX44（Fig. 23　Ph. 23）　ST37の上位にあり、径15cm前後の礫を上下２面に集石し、上面の礫上に40cm程の方形に近い石を置く。当初甕棺の標石の可能性も考えたが、直下の甕棺ST37が撹乱されており、後世のものである事が判明した。埋葬主体は確認できなかった。



Ph. 24　建物集中部（東から）



Ph. 25　SB27－SP06 断面（北から）

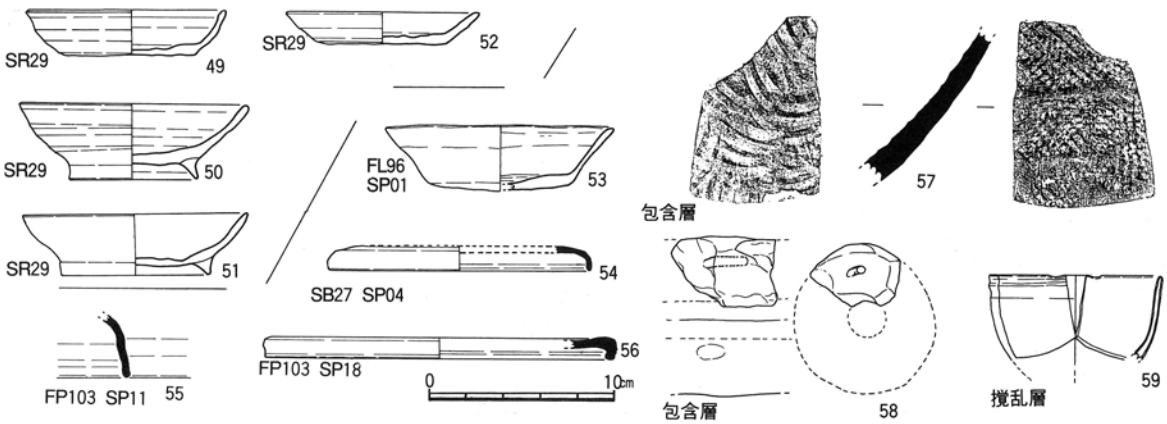


Fig. 25　歴史時代の遺物（1／4）

3）小結

今回の調査では北西の１区で弥生時代前期末の壺棺１基・祭祠土壙と思われる中期後葉～後期初頭の土壙１基、古墳時代後期の落し穴１基、調査区南東部で柱穴多数を検出した。

前期末の墓は１～２基で散慢に分布する傾向にあり、浦江谷２区・黒塔Ａ１次調査区・２次２区でも同様の傾向を示す。

祭祠土壙SK20は段丘先端の斜面に位置するため、調査区外の南西側に墓域が広がる可能性がある。

南北方向の２区では弥生時代前期末～中期末の甕棺墓24基・竪穴住居１軒・井戸状土壙１基・土壙２基・掘立柱建物３棟、奈良時代の掘立柱建物２棟、10世紀代の土壙墓１基・土壙１基、南半部で柱穴多数を検出した。

甕棺墓域は北側の段丘の縁辺に沿って幅７ｍ程のベルト状に、北東方向に主軸も大体これにそろえて分布している。調査区外の北東側の水田耕土スキ取り時に同方向に延びる甕棺墓群を確認しており、黒塔遺跡の立地する段丘の室見川を望む縁辺部全体にベルト状に展開する可能性が高い。時期別には前期末～中期初頭２基（ST38、39）・中期前葉２基（ST08、32）・中期中葉８基（ST03、05、06、13、14、16、42、43）・中期後葉８基（ST01、02、07、09、10、12、33、37）・中期後葉～末４基（ST04、15、40、41）で、中期中葉～後葉が最盛期である。Fig. 14は各時期の分布状況と頭位を図示したものである。頭位は棺の傾斜の高い方向とした。前期末は北東部に近接して分布し、38・39が頭位を対面して配置されている。これは各時期で時期を前後して近接する棺での一定の規範の様で前代の墓を強く意識して造墓されている。中期前葉では38に重なり対面方向に32を、離れた西側に新たに08が埋葬される。中期中葉では東グループで急増し、06と16、05・14と42・43とが対面し、06・16間と14・42間で南北に二分される。13は39に乗り、対面している。03は此等と離れ直交して外方に頭位をとる。後葉では西グループで増加し、01・02が対面位置に配され、10は直交方向に頭位をと

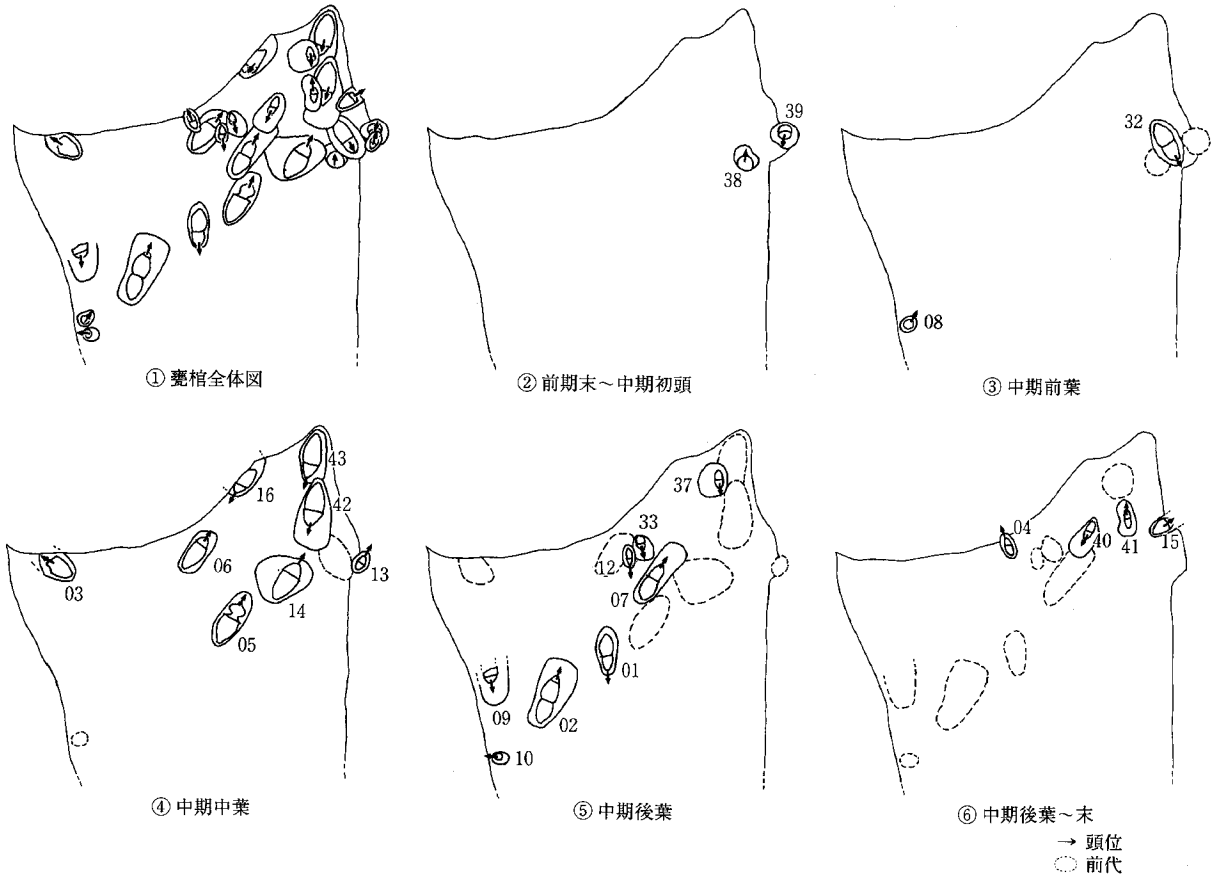


Fig. 26　甕棺時期別分布図

る。東グループでは07と37が対面し、12・33が平行する。後葉～末では東グループのみに分布する。一見東西一直線に分布するが、40は07と41は37に対面し、04は12・33の逆方向に位置しており、明かに前代の墓を意識した埋葬である。

竪穴住居は一度建て替えが行われ、屋内土壙にも炭が堆積し、明かな生活遺構である。覆土中から検出した土器は前期末であり、墓域形成以前に廃棄されたと思われる。

掘建柱建物は3棟検出され、中期中葉～後期前葉の時期を示している。分布は調査区南側に集中し、丘陵の稜線部分に当たる。中でもSB26は桁行6.4梁間3.2mの2×1間の大型で、掘方も90～140cmの大きな隅丸方形を呈している。柱径は30～35cm。掘方から中期前葉～後葉の土器が検出される。柱は抜かれており、前葉～中葉と考える。須恵器が一片有るが後世の混入と思われる。方位は3棟とも南北方向をとるがN－18°－E～11°－Wとまとまらず、26→24→25へと移行する様である。検出が丘陵先端近くであるため、主体部は南西側に広がると思われる。今回の調査で始めてまとまった生活遺構の検出であった。

奈良時代の建物は付近でSB26に重なって2棟検出された。弥生時代の建物とは直交方向の東西棟で、27•28ともに3×2間の規模である。それぞれ桁行5.5m5.2mと27が若干大きいが、方位はN－88°－Wで全く同一であり、切り合いから、28→27へと移行している。方形の掘方も27が整っている。今回の調査では浦江4次調査4区で同期の大型建物SB36を検出している。浦江・浦江谷の同期の遺構では製鉄関連の遺構・遺物を伴っており、本調査区でも包含層中より吹口羽口を検出しており(Fig. 25)、製鉄関連の遺構と考える方が自然である。

古代では10世紀代の土壙墓を1基中央付近で検出した。土師器の皿・坏・高台坏・埦と一器種一点ずつ副葬しており構成が興味深い。

中世は遺構の検出はないが、試掘時に龍泉窯系の青磁片が採取されており、柱穴のいくらかは同期に属すると思われる。

Tab. 2　遺構一覧表

遺構No.	地点	種別	時期	規模	主な出土遺物
SC17	FL－96	円形住居	弥生前期末	350＋α×462×22	弥生土器（甕）須恵器・黒耀石fl
SK18	FN－100	土壙	弥生中期後半	122×54×27	弥生土器（ミニチュア・壷・甕・鉢）投弾・黒耀石fl
SX19	FJ－93	溝状	弥生	128×50×19	弥生土器（壷・甕）黒耀石fl
SK20	FI－92	溝状土壙	弥生中期	207×85×15	弥生土器（壷・甕・支脚）黒耀石
SD21	FI－91	溝状	弥生	180×42×26	弥生土器（甕）黒耀石
SK23	FG－92	落し穴	古墳	187×122×91	弥生土器（甕・支脚）須恵器（甕）
SB24	FM 103～104	掘立柱建物	弥生中期中葉	464×270	弥生土器（壷・甕）黒耀石（くさび・fl）
SB25	FM～FN 102～103	掘立柱建物	弥生中期後葉～後期前葉	707×242＋α	弥生土器（壷・甕）
SB26	FM～FN 102～104	掘立柱建物	弥生中期中葉	611×295	弥生土器（壷・甕・器台）須恵器（蓋）石包丁・石刃・黒耀石
SB27	FN～FO 103～104	掘立柱建物	古代	552×400	弥生土器（甕・支脚）須恵器（坏）土師器・石斧
SB28	FO～FP 102～103	掘立柱建物	古代	520×370	弥生土器（甕・支脚・器台）石鏃・黒耀石
SR29	FM－98	土壙墓	平安後期	187×86	弥生土器（壷・甕）土師器（高台坏・皿）
SK30	FM－103	土壙	弥生中期中葉	84＋α×60×19	弥生土器（甕）サヌカイト
SX31	FN－94	不整形土壙	弥生中期	250＋α×195×26	弥生土器（壷・甕）浮子・黒耀石・サヌカイト
SK34	FN－94	甕棺墓壙？	弥生中期	82×43×42	弥生土器（甕）
SD35	FN－96	溝状	弥生	180×68×7	
SK36	FM－96	井戸状土壙	弥生中期	120×150×137	焼土塊
SX44	FN－93	石積	近世？		

福岡市埋蔵文化財調査報告書第614集

室見が丘

－金武・西入部地区開発に伴う埋蔵
文化財の調査－

1999年（平成11年）３月31日

発　行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神１丁目８－１

印　刷　明和印刷㈲
福岡市早良区原１－30－30

付　　図

付図. 1　調査区地形図（1／2,500）

付図. 2　浦江谷遺跡群1次2区遺構全体図（1／300）

付図. 3　浦江谷遺跡群1次2区甕棺分布図（1／150）

付図. 4　浦江遺跡群4次調査遺構全体図（1／300）